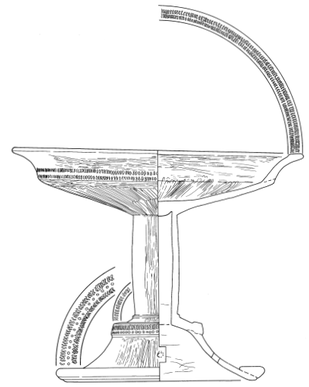
富山県文化振興財団
埋蔵文化財発掘調査報告第31集

下老子笹川遺跡発掘調査報告

—— 能越自動車道建設に伴う 埋蔵文化財発掘報告Ⅴ ——

第二分冊
弥生～古墳時代
本文・図面編



2006年

財団法人 富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所

下老子笹川遺跡発掘調査報告
第二分冊
弥生～古墳時代編

富山県文化振興財団
埋蔵文化財発掘調査報告第三一集
二〇〇六年
(財)富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所

A地区　建物群（東から）

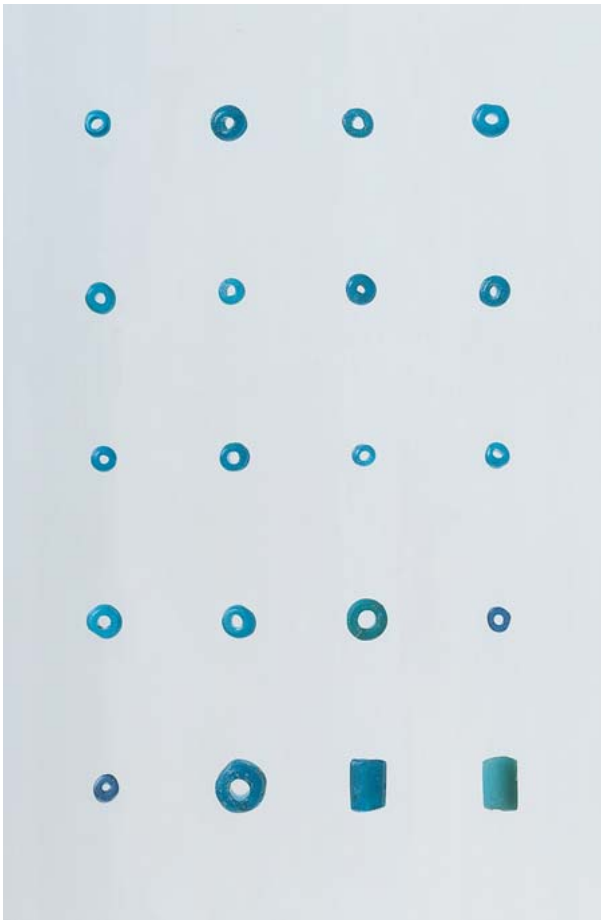
B５地区　周溝式竪穴建物ＳＩ10（新）　焼土・炭化材出土状況（南から）

A 地区　弥生土器

B 地区　弥生土器

Ｂ７地区　木製農具（弥生時代）

Ｂ７地区　自然流路ＳＤ2541　木製農具出土状況（西から）



A・B地区　ガラス製玉類（弥生時代）

B地区　炭化米（弥生時代）

B地区　石製玉作関連遺物（弥生時代）

下老子笹川遺跡発掘調査報告

―― 能越自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘報告Ⅴ ――

第二分冊
弥生～古墳時代
本文・図面編

２００６年

財団法人 富山県文化振興財団
埋 蔵 文 化 財 調 査 事 務 所

目　次

第Ⅴ章　弥生時代の遺構・遺物……1

1　遺構・遺物の分類 ……1

（1）建物の分類 ……1

（2）弥生土器の分類 ……4

A　土器の部分名称……4　　B　土器の成形・調整技法……5

C　土器の部分形態分類……6　　D　文様……8

E　器種分類……11

2　弥生時代の概要 ……18

3　A地区 ……20

（1）A7・8地区の遺構と遺物 ……20

A　周溝式竪穴建物……20　　B　掘立柱建物……50

C　周溝遺構……55　　D　柵……56

E　土坑……64　　F　溝・自然流路……72

（2）包含層出土遺物 ……79

A　土器……79　　B　石製品……82

4　B地区 ……89

（1）遺構と遺物 ……89

A　竪穴建物……89

a　周溝式竪穴建物……89　　b　竪穴建物 ……234

c　周溝式平地建物 ……250

B　掘立柱建物 ……257

a　周溝式掘立柱建物 ……257　　b　掘立柱建物 ……260

C　周溝遺構 ……262　　D　柵 ……285

E　道路 ……288　　F　土坑 ……300

G　溝・自然流路 ……343　　H　畠 ……387

（2）包含層出土遺物……391

A　土器 ……391　　B　石製品 ……398

C　石製玉作関連遺物 ……399

5　C・D地区 ……450

（1）C地区の遺構と遺物……450

A　竪穴建物 ……450　　B　掘立柱建物 ……453

C　土坑 ……455　　D　溝・自然流路 ……456

（2）C・D地区包含層出土遺物……461

A　土器 ……461　　B　石製品 ……461

C　石製玉作関連遺物 ……461

参考文献 ……461

第Ⅵ章　古墳時代の遺構・遺物 ……463

1　古墳時代の概要 ……463
2　Ａ・Ｂ・Ｃ地区 ……463
（1）Ｂ７～Ｃ１地区の遺構と遺物……463
（2）Ａ８～Ｂ６地区の遺構……489
Ａ 「プラント・オパール」分析結果……489　　Ｂ　水田・自然流路 ……490
（3）Ａ８～Ｂ６地区の遺構・包含層出土遺物……522
Ａ　土器 ……522　　Ｂ　土製品 ……523
Ｃ　木製品 ……523　　Ｄ　石製品 ……524

表目次

第１表　弥生時代　建物一覧……3

巻首図版目次

巻首図版１　Ａ地区建物群　Ｂ５地区周溝式竪穴建物ＳＩ10（新）焼土・炭化材出土状況
巻首図版２　Ａ地区弥生土器　Ｂ地区弥生土器
巻首図版３　Ｂ７地区木製農具　Ｂ７地区自然流路ＳＤ2541木製農具出土状況
巻首図版４　Ａ・Ｂ地区ガラス製玉類　Ｂ地区炭化米　Ｂ地区石製玉作関連遺物

第Ⅴ章　弥生時代の遺構・遺物

1　遺構・遺物の分類

（1）建物の分類

弥生時代後期～終末期の建物は，その形状から以下のように分類した（第1図）。

A類　竪穴建物（ＳＩ）

地面を水平に掘り下げて床面とする建物。

Ａ－１類　周溝式竪穴建物

竪穴の周囲に溝を巡らす建物で，竪穴と周溝の間にはこれらの掘削土で周堤を築く。登呂遺跡に代表される，いわゆる「周溝を持つ建物」。竪穴（屋内部）には，柱穴（4本主柱・多主柱）・灰穴炉・土坑（貯蔵穴など）・壁溝などがある。周溝には，溝や自然流路に通じる排水溝がつくものがある。

Ａ－２類　竪穴建物

いわゆる「竪穴建物」。竪穴（屋内部）には，柱穴・灰穴炉・土坑・壁溝などがある。

B類　周溝式平地建物（ＳＩ）

当時の地表面を床面とする建物で，屋内部に壁溝，外側に周溝を持ち，これらの掘削土で周堤を築く。平面形はＡ－１類と似ているが，屋内部に掘り込みや柱穴等の施設を持たない。

C類　掘立柱建物（ＳＢ）

地面に穴を掘って柱を立てた掘立柱式の建物。

Ｃ－１類　周溝式掘立柱建物

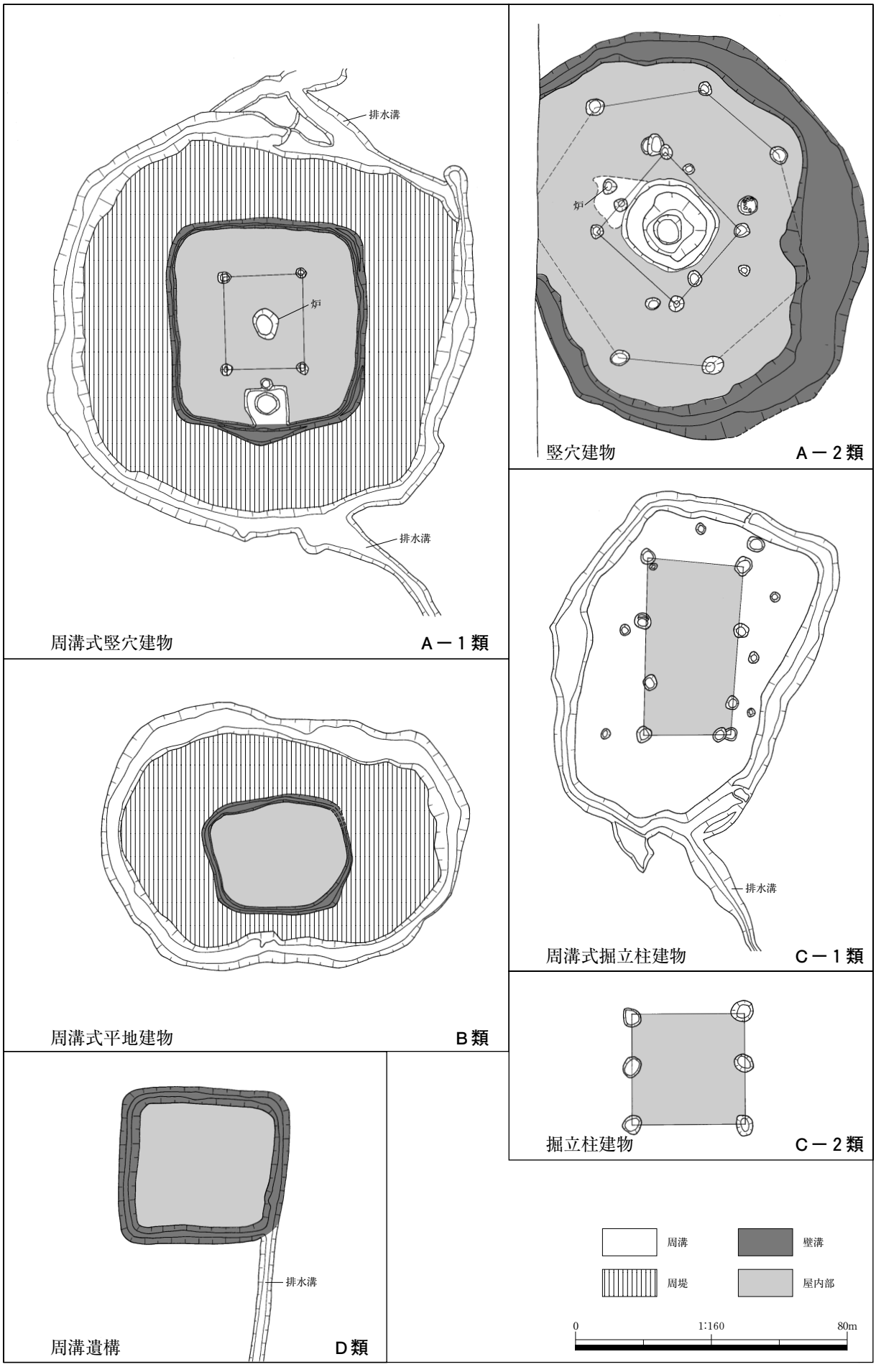
建物の周りに溝を巡らすもの。周溝の水は排水溝を通じて自然流路へ流れる。Ｃ－２類よりも大型の建物が想定される。

Ｃ－２類　掘立柱建物

通常の掘立柱建物。4または6本主柱穴で高床式倉庫か。

D類　周溝遺構（ＳＨ）

当時の地表面を床面とする建物で，壁溝を巡らすもの。屋内部に柱穴・炉・土坑等の施設を持たない。平地式建物の一つと考えられる。



第1図　建物の分類　(1/160)

分類	地区	新遺構番号（本書で使用）	旧遺構番号（概要報告等で使用）	備考（新遺構番号で記載）
A－1	A 7	ＳＩ1	ＳＩ01	＞ＳＩ3
		ＳＩ2	ＳＩ02	
		ＳＩ3	ＳＩ03	＜ＳＩ1
	A 8	ＳＩ4	ＳＩ201	
	B 3	ＳＩ5	ＳＩ06	
	B 5	ＳＩ6	ＳＩ02	
		ＳＩ7	ＳＩ01	
		ＳＩ8	ＳＩ03	
		ＳＩ9	ＳＩ04	＜ＳＩ10（旧）
		ＳＩ10（新）	ＳＩ05	＞ＳＩ10（旧），＞ＳＩ11
		ＳＩ10（旧）	ＳＩ12	＜ＳＩ10（新），＞ＳＩ11，＞ＳＩ9
		ＳＩ11	ＳＩ06	＜ＳＩ10
	B 6	ＳＩ12	ＳＩ01	
		ＳＩ13	ＳＩ04	＜ＳＩ22，＜ＳＩ14
		ＳＩ14	ＳＩ05	＞ＳＩ13
		ＳＩ15（新）	ＳＩ12（新）	＞ＳＩ18
		ＳＩ15（旧）	ＳＩ12（旧）	＞ＳＩ18
		ＳＩ16	ＳＩ13	
		ＳＩ17	ＳＩ16	
		ＳＩ18	ＳＩ22	＜ＳＩ15
	B 7	ＳＩ19（新）	ＳＩ08（新）	
		ＳＩ19（旧）	ＳＩ08（旧）	
A－2	B 2	ＳＩ20	ＳＩ01	
	B 6	ＳＩ21	ＳＩ02	
		ＳＩ22	ＳＩ03	＞ＳＩ13
B	B 6	ＳＩ23	ＳＩ18	
		ＳＩ24	ＳＩ24	
		ＳＩ25	ＳＩ26	
		ＳＩ26	ＳＩ29	
分類外	C 1	ＳＩ27	ＳＩ05	
		ＳＩ28	ＳＩ06	
C－1	B 5	ＳＢ1	ＳＩ11	
	B 7	ＳＢ2	ＳＢ07	
C－2	A 7	ＳＢ3	ＳＢ01	
		ＳＢ4	ＳＢ02	
	A 8	ＳＢ5	ＳＢ01	
		ＳＢ6	ＳＢ02	
	B 2	ＳＢ7	ＳＢ01	
	B 6	ＳＢ8	ＳＢ01	
		ＳＢ9	ＳＢ02	
	C 1	ＳＢ10	ＳＢ01	
		ＳＢ11	ＳＢ02	
		ＳＢ12	ＳＢ03	
		ＳＢ13	ＳＢ04	
D	A 8	ＳＨ1	ＳＩ210	
		ＳＨ2	ＳＩ214	
		ＳＨ3	ＳＩ215	
		ＳＨ4	ＳＩ216	
		ＳＨ5	ＳＩ224	
		ＳＨ6	ＳＩ274	
		ＳＨ7	ＳＩ276	
		ＳＨ8	ＳＩ283	
		ＳＨ9	ＳＩ284	
		ＳＨ10	ＳＩ286	
	B 5	ＳＨ11	ＳＩ07	
		ＳＨ12	ＳＩ08	
		ＳＨ13	ＳＩ09	
		ＳＨ14	ＳＩ10	
		ＳＨ15	ＳＩ13	
		ＳＨ16	ＳＤ39／ＳＫ36	
		ＳＨ17	ＳＤ85	
		ＳＨ18	ＳＤ87／ＳＤ101	
		ＳＨ19	ＳＤ96	
		ＳＨ20	ＳＸ123	
	B 6	ＳＨ21	ＳＩ06	
		ＳＨ22	ＳＩ07	
		ＳＨ23	ＳＩ10	
		ＳＨ24	ＳＩ11	
		ＳＨ25	ＳＩ14	
		ＳＨ26	ＳＩ15	
		ＳＨ27	ＳＩ17	
		ＳＨ28	ＳＩ19	
		ＳＨ29	ＳＩ20	
		ＳＨ30	ＳＩ21	
		ＳＨ31	ＳＩ23	
		ＳＨ32	ＳＩ25	
		ＳＨ33	ＳＩ27	
		ＳＨ34	ＳＩ28	
		ＳＨ35	ＳＤ209・212・270	
		ＳＨ36	ＳＤ271	
	B 7	ＳＨ37	ＳＩ09	
		ＳＨ38	ＳＩ10	
		ＳＨ39	ＳＩ13	
		ＳＨ40	ＳＩ14	
		ＳＨ41	ＳＩ15	
		ＳＨ42	ＳＩ16	

第１表　弥生時代　建物一覧

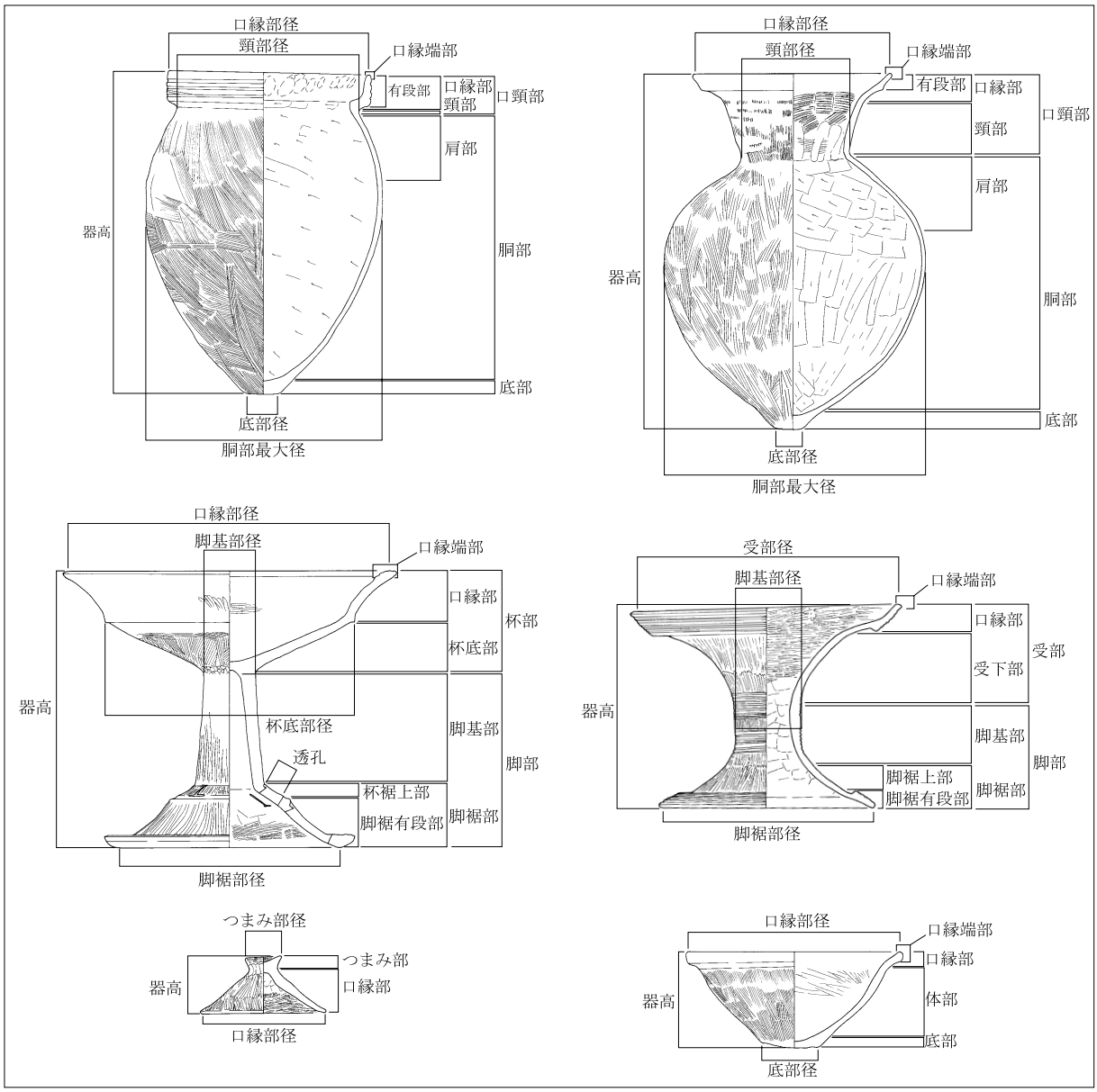
（2）弥生土器の分類

下老子笹川遺跡の弥生土器は膨大な数量がある。そのため，本書の中で重複する記述を避ける必要がある。ここでは本書の弥生土器に関する記述法と分類を説明する。

A　土器の部分名称（第2図）

壺・甕等，丸い器体の上に口があるものについては，口を「口縁部」，くびれ部分を「頸部」，器体を「胴部」，底を「底部」とする。皿状の器に脚または台がつくものについては，皿状の器部分を穴が無いものを「杯部」，穴が有るものを「受部」とし，脚または台を「脚部」とする。口が下向きの土器については，「つまみ部」と「口縁部」に分ける。

口縁部はさらに端の部分を「口縁端部」とし，最高部を結んだ直径を「口径」とする。頸部の最も細い部分を「頸部径」とする。胴部の最大径（「胴部最大径」）より上を「胴部上半」もしくは「肩部」とし，下を「胴部下半」とする。「底径」は底部の接地点を結んだものとする。杯部はさらに底を「杯底部」とし，口の部分を「口縁部」とする。脚部は器と接合する部分を「脚基部」とし，接地する部分を「脚裾部」とする。脚裾部が有段の場合は，段の屈折点より上を「脚裾上部」，下を「脚裾有段部」と表記する。また，脚基部，脚裾部の直径をそれぞれ「脚基部径」，「脚裾部径」と表記する。



第2図　弥生土器の部分名称

また，器の内側を「内面」，外側を「外面」とし，表面を「器面」とする。また，器の厚みを「器壁」とする。

B　土器の成形・調整技法（第３図）

土器の器面を観察すると様々な痕跡がみられる。これらは，土器製作の成形段階，器面調整段階に様々な技法を施すことによって残されたものである。土器の成形・調整手法については従来の「刷毛目」，「ヨコナデ」，「ヘラケズリ」等の呼称を見直すべきとする説があるが，統一したものに落ち着いてはいない。ここでは，混乱を避けるため従来の呼称から大きく変えていない。また，文中の表記にあたっては本来なら「－技法」とすべきところであるが略する。

a　ケズリ

ヘラ状の工具で土器の表面を削り取り，器壁を薄くする成形技法。西村歩氏では「掻壁技法」[注1]の中の「ケズリ」に分類される。

タテケズリ（１）　縦方向または斜め縦方向のケズリ。

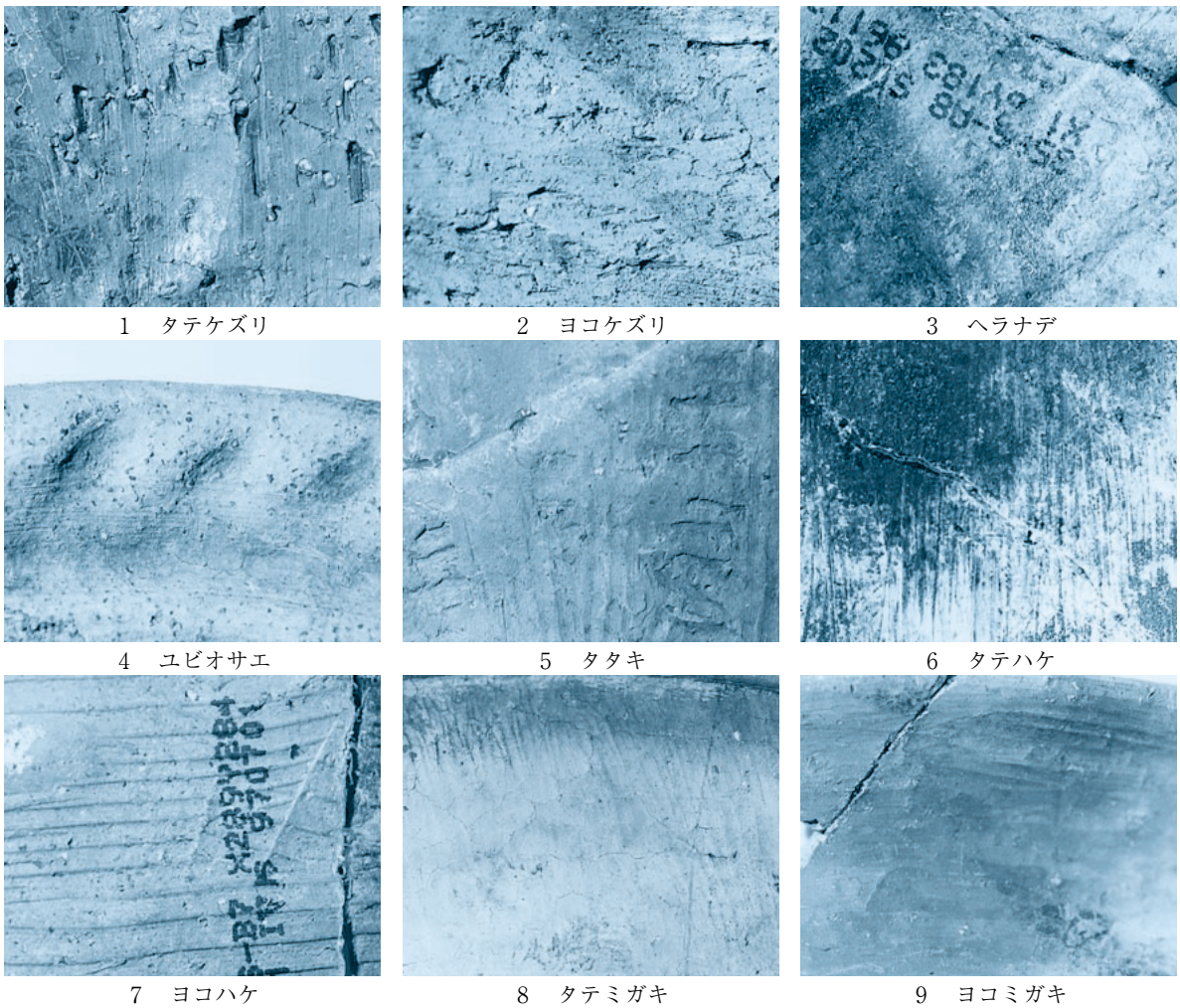
ヨコケズリ（２）　横方向または斜め横方向のケズリ。

b　ヘラナデ

ヘラナデ（３）　ヘラ状器具で器面を撫で押さえる成形技法。

c　ユビオサエ

ユビオサエ（４）　器面を指で押さえ薄くする成形技法。痕跡は土器内面に残り「指頭圧痕」と呼称する。



1　タテケズリ　2　ヨコケズリ　3　ヘラナデ
4　ユビオサエ　5　タタキ　6　タテハケ
7　ヨコハケ　8　タテミガキ　9　ヨコミガキ

第３図　成形・調整

注１　西村　歩　1996「土器の観察」『下田遺跡－都市計画道路常盤浜寺線建設に伴う発掘調査報告書－』『　大阪府文化財調査研究センター調査報告書』第18集　財団法人大阪府文化財調査研究センター

d　タタキ

タタキ（5）　平行線を刻んだ叩き板を用いて土器外面を叩いて粘土の叩き締めをする成形技法。当遺跡では数点が確認されるのみである。

e　ナデ

土器の表面を指や水を含ませた皮・布などで撫で器面を調整する技法。寺沢薫氏の呼称では「スリナデ手法ＩＣ」[注2]に含まれる。

ヨコナデ　回転台を利用した横方向のナデ。

ナデ　回転台を利用しない不定方向のナデ。

f　ハケメ

板状器具で器面を均す調整技法。平行条線の痕跡が残る。寺沢薫氏の「スリナデＩ手法Ａ」[注3]，西村歩氏の「平滑技法」[注4]に当たると考えられる。

タテハケ（6）　縦方向または斜め縦方向のハケメ。

ヨコハケ（7）　横方向または若干斜め横方向のハケメ。

g　ミガキ

器面をヘラ状の器具などでこすり器面を滑らかにする器面調整技法。

タテミガキ（8）　縦方向または斜め縦方向のミガキ。

ヨコミガキ（9）　横方向または若干斜め横方向のミガキ。

C　土器の部分形態分類

a　口頸部の分類（第4図）

長頸（1）　胴部と比較して，長く太い上部が少し開く円筒形の口頸部。本書では口頸部長が胴部の長さの1/2以上で，頸部径が胴部最大径の1/3以上のものとする。

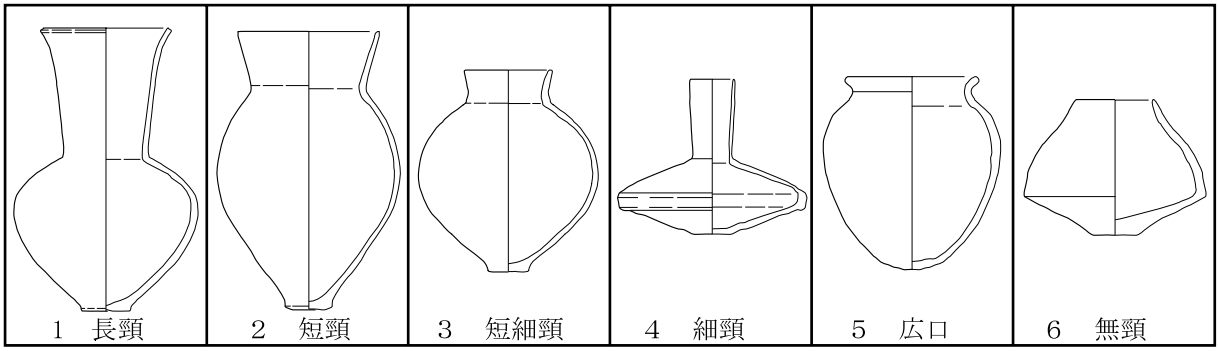
短頸（2）　胴部と比較して，短く太い上部が少し開く円筒形の口頸部。本書では口頸部長が胴部の長さの1/2未満，頸部径が胴部最大径の1/3以上のものとする。

短細頸（3）　胴部と比較して，細く短い上部が少し開く円筒形の口頸部。本書では口頸部長が胴部の長さの1/2未満で，なおかつ頸部径が胴部最大径の1/3未満のものとする。

細頸（4）　胴部と比較して，細く，長くて上部が少し開いた円筒形の口頸部。本書では口頸部長が胴部の長さの1/2以上で，口頸部径が胴部最大径の1/3未満のものとする。

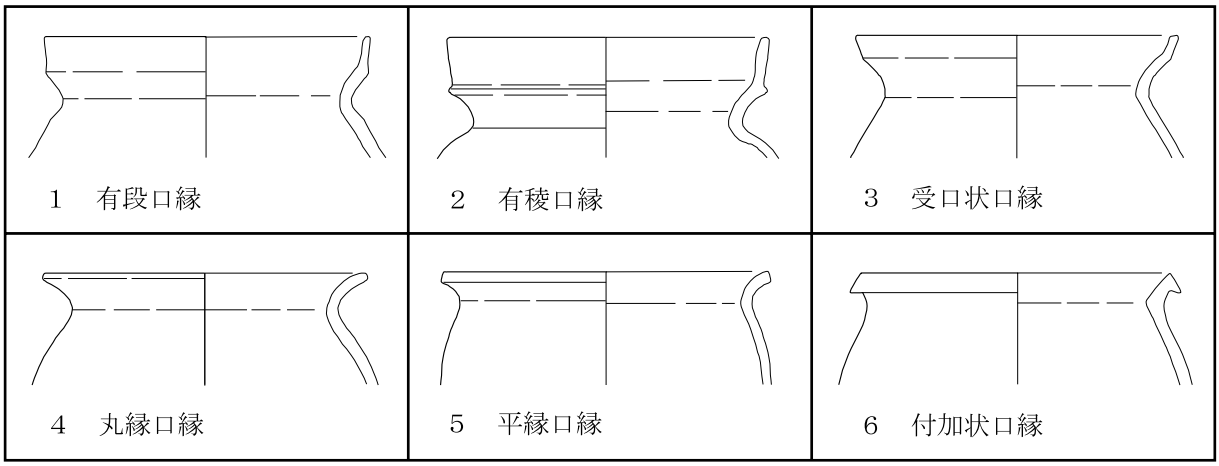
広口（くの字口縁）（5）　頸部からすぐに外傾または外反して口が大きく開く断面がくの字状の口頸部。

無頸（6）　頸部が無く，胴部の上縁をそのまま口縁とする口頸部。



第4図　口頸部の分類

注2　寺沢　薫　1986「古式土師器の調整手法」『矢部遺跡－国道24号線橿原バイパスに伴う遺跡調査報告（Ⅱ）－』『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第49冊　奈良県立橿原考古学研究所
注3　前掲注2と同じ
注4　前掲注1と同じ



第5図　口縁部の分類

ｂ　**口縁部の分類**（第5図）

有段口縁（1）　口縁部の途中で段が付き，有段部が長めな口縁部。

有稜口縁（2）　有段口縁で，有段部の下に稜がある口縁部。

受口状口縁（3）　口縁部の途中で段が付き，短い有段部の口縁部。

丸縁口縁（4）　口縁部が外傾または外反して口縁端部に至る，断面がくの字状で端部が丸い断面形状を呈する口縁部。

平縁口縁（5）　口縁部が外傾または外反して口縁端部に至る，断面がくの字状で端部に平らな面をもつ甕・鉢の口縁部。

付加状口縁（6）　口縁部が外傾または外反して口縁端部に至る，断面がくの字状で端部に粘土を貼り付け断面三角形状にし，幅広くした口縁部。粘土を貼り付けた下端は肥厚し段差がみられる。

ｃ　**杯部・受部の分類**（第6図）

有段杯（受）（1）　杯底部（受下部）と口縁部の境が稜をもって折れる形態の杯（受）部。

拡張有段杯（2）　有段杯の口縁端部が外側に拡張され伸びる杯部。

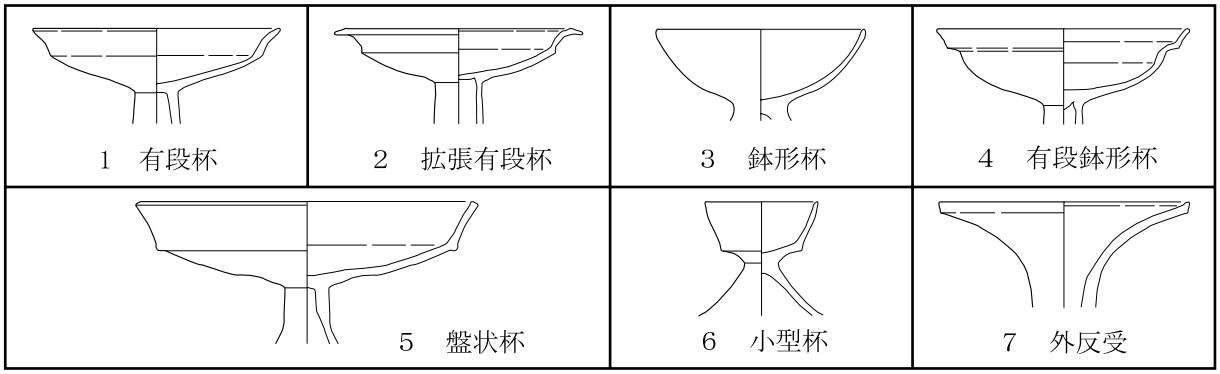
鉢形杯（3）　底部と口縁部の境が明瞭ではなく，丸みをもって立ち上がる形態の杯部。

有段鉢形杯（4）　杯底部と口縁部の境が明確ではなく丸みをもっており，口縁部の途中で段がある形態の杯部。

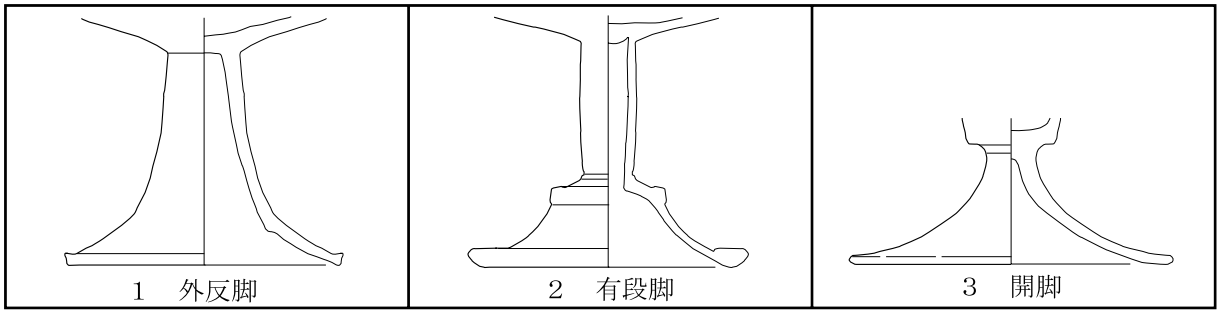
盤状杯（5）　底部が浅く広い形態の杯部。

小型杯（6）　文字どおり小型の杯部。本書では口縁部径が脚裾部径より小さいものと定義する。

外反受（7）　脚基部からスムーズに口縁端部に移行する受部。



第6図　杯部・受部の分類



第７図　脚部の分類

d　**脚部の分類**（第７図）

外反脚（１）　緩くラッパ状に外反する脚部。

有段脚（２）　脚部の途中で段がある脚部。

開脚（３）　脚裾部で大きく屈折し開く脚部。

D　**文様**（第８図）

文様の表記についても施文する器具に重点を置いたもの，施文行為に重きをおいたものなど様々であるが本書では櫛描文，刺突文，沈線文，彩文，スタンプ文，浮文，沈文，縄文に大別し，それぞれさらに細分する。

a　**櫛描文**（第８図１～４）

櫛歯状工具を器面に押し当て，回転台を用い土器を回転させて施文した，複数条の平行した線を引いた文様。

擬凹線文（１）　櫛歯状工具もしくは板の木口，貝殻の背等を器面に押し当て回転台を用いて土器を回転させることにより平行する沈線を施文する技法。一般的には中期後葉に盛行した凹線文の流れをくむものとして櫛描文とは別のものとされている[注5]が，本書では同じ施文方法と考え櫛描文に含めている。次の直線文とは施文箇所により区別する。施文箇所は甕・壺など口縁部，高杯・器台の杯部・受部および脚部。

直線文（２）　甕等の胴部に回転台を用い土器を回転させて直線的に施文した櫛描文。

波状文（３）　回転台を用い土器を回転させ，工具を上下させて波状に施文した櫛描文。

扇形文（４）　工具を器面に押し当て，回転させて扇状に施文した櫛描文。

b　**刺突文**（第８図５～10）

棒状の施文具を器面に押して施文したもの。

列点文（５）　櫛歯状工具の木口を使い器面に押し当てた文様。本来は櫛描文の一種「櫛歯文」とされる[注6]が本書では刺突文に含める。

斜行短線文（６）　板の木口を器面に押し当て施文した刺突文。

貝殻刺突文（７）　貝殻の腹縁部を器面に押し当て施文した刺突文。

竹管刺突文（８）　管状の施文具による丸い形の刺突文。

爪形刺突文（９）　半管状の施文具によるＣ字形の刺突文。

双葉形刺突文（10）　双葉の形をした刺突文。

c　**沈線文**（第８図11～15，第９図16・17）

棒状またはヘラ状の施文具の先端を用いて，器面に線状のくぼみをつけ施文した文様。

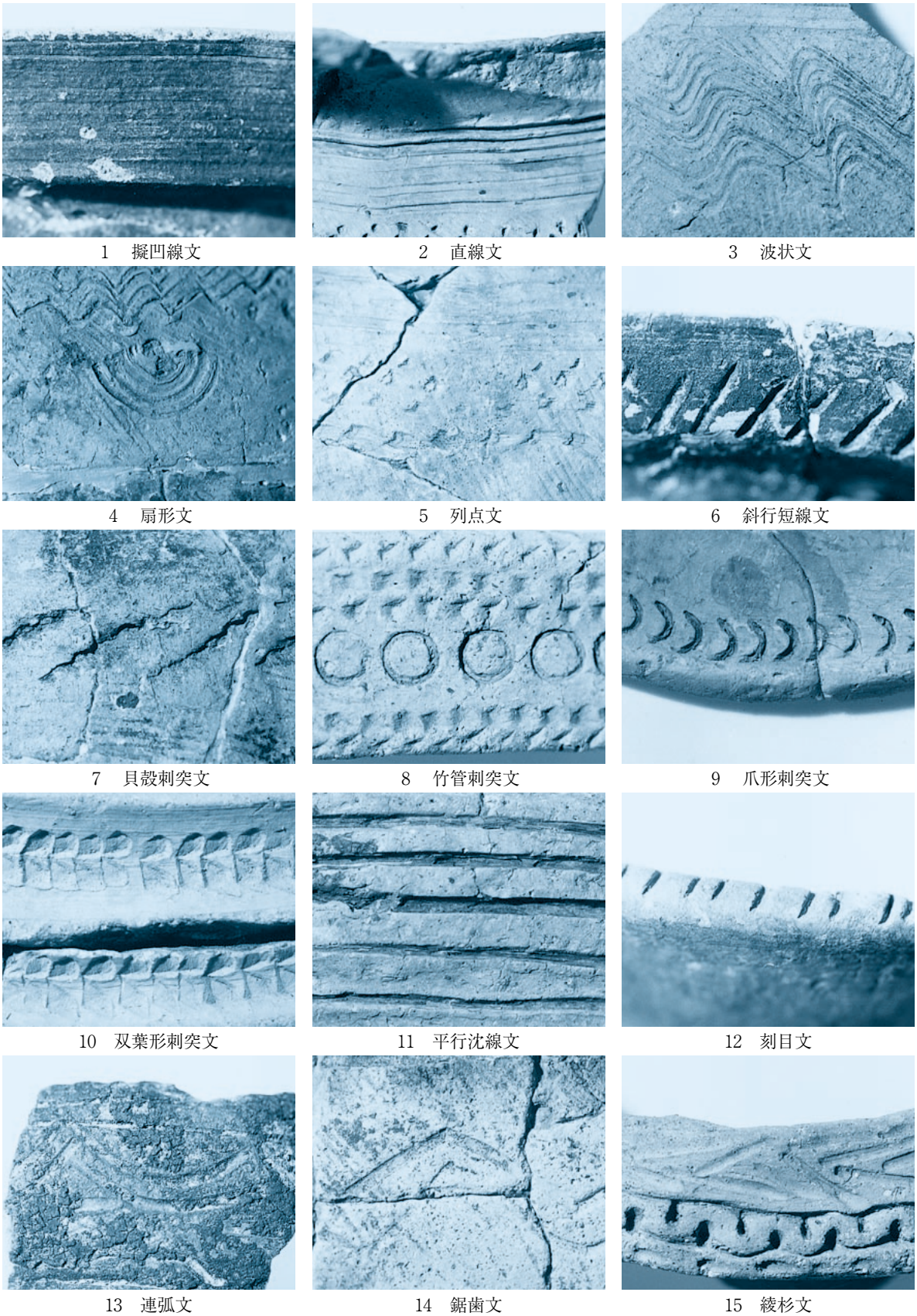
平行沈線文（11）　ほぼ平行する複数条の直線からなる沈線文。

注５　正岡睦夫　1986「凹線紋・擬凹線紋」『弥生文化の研究』３弥生土器Ⅰ　雄山閣出版株式会社
注６　工楽善通　2002「櫛歯文」『日本考古学事典』　株式会社三省堂

刻目文（12）　口縁端部や脚裾部の端部，突帯に連続してヘラ状器具を用いて連続して刻み（くぼみ）を入れた沈線文。

連弧文（13）　弧を連続して施文した沈線文。

鋸歯文（14）　鋸の歯の様に施文した沈線文。



1　擬凹線文　2　直線文　3　波状文
4　扇形文　5　列点文　6　斜行短線文
7　貝殻刺突文　8　竹管刺突文　9　爪形刺突文
10　双葉形刺突文　11　平行沈線文　12　刻目文
13　連弧文　14　鋸歯文　15　綾杉文

第８図　弥生土器の文様（１）

綾杉文（15）　Ｖを横にした様に施文した沈線文。

破線文（16）　短く区切った線（破線）を連続して施文した沈線文。

重菱文（17）　菱形の中に菱形を描いた沈線文。

ｅ　**スタンプ文**（第９図18・19）

文様を彫ったスタンプ状の器具を器面に押して施文した文様。

Ｓ字形スタンプ文（18）　Ｓ字形のスタンプ文。

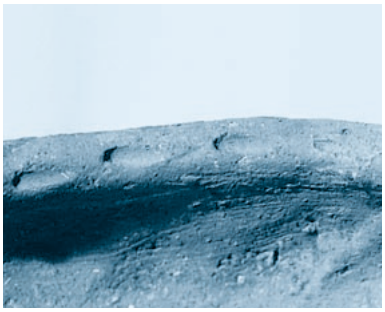
円形スタンプ文（19）　円形のスタンプ文。

ｆ　**浮文**（第９図20・21）

器面に粘土による隆起をつくって施文した文様。

棒状浮文（20）　棒状の粘土を貼り付けたもの。

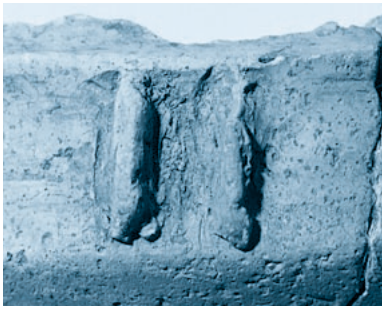
円形浮文（21）　円盤状の粘土を貼り付けたもの。


16　破線文

17　重菱文

18　Ｓ字形スタンプ文

19　円形スタンプ文

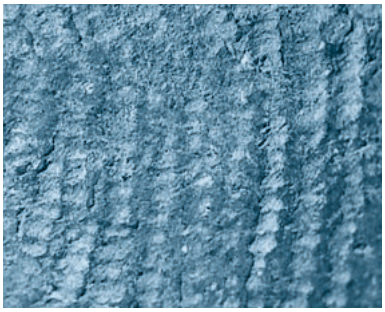

20　棒状浮文

21　円形浮文

22　円形透孔

23　Ｔ字形透孔

24　交互刺突文


25　ＲＬ縄文

26　ＬＲ縄文

27　赤彩文

第９図　弥生土器の文様（２）

ｇ　**沈文**（第９図22～24）

器面を彫り込んで施文した文様。

透孔（22・23）　様々な形の穴を開けて文様とする沈文。

交互刺突文（24）　平行とする沈線間を交互に彫り込み施文した沈文。

ｈ　**縄文**（第９図25・26）

器面に縄を当て転がして施文した文様。

ＲＬ縄文（25）　左撚り（Ｌ）一段の縄を２本使い，右撚りした二段の縄で施文した縄文。

ＬＲ縄文（26）　右撚り（Ｒ）一段の縄を２本使い，左撚りした二段の縄で施文した縄文。

ｉ　**彩文**（第９図27）

器面を彩色することにより施文した文様。

赤彩文（27）　赤色の顔料を用い施文した彩文。外面全体を彩色したもの，部分的なもの，文様を描いたものがある。

Ｅ　器種分類（第10～15図）

弥生土器は一般的に用途や形態により甕形土器・壺形土器・器台形土器・高杯形土器・鉢形土器・蓋形土器に分けられている。下老子笹川遺跡では，前掲の６種の他，小型甕形土器・台付甕・台付壺形土器・小型壺形土器・台付鉢形土器・皮袋形土器・ミニチュア土器の６器種を加え，12器種に１次的に大別する。本来なら「甕形土器」とすべきところであるが本書では「形」を略して「甕」などと表記する。

次に，それぞれの器種を特徴のある口縁部の形態や文様，成形・調整技法等により２次的に分類する。器種の表記については繰り返し記載のため長い名称ではなく略表記にした。また，直感的に理解できるように日本語の略表記としている。名称は正式には「－口縁甕」，「－口縁壺」などであるが「口縁」を略した表記としている。

さらに，脚部の形状，胴部の文様により分ける必要があるものについては３次的に器種（形式）分類する。表記は形状については，英単語の頭文字の大文字を，文様については英単語の小文字を１・２分類の日本語の末尾に付している。すなわち，有段脚は「step（段）」の「Ｓ」を，外反脚は「everted（外反）」の「Ｅ」を，刺突文を施すものに「puncture marks」の頭文字を取り「ｐ」を，櫛描文は「comb mark」の「ｃ」を，無文のものは「ｎ」をつけた[注7]。

ａ　**甕**（第10図）

頸部・口縁部とも広く，胴部が長い形態の土器。ススが付着するものが多いことから煮炊き用と考えられている。本書では口頸部が広口（くの字）で頸部径が胴部最大径の６割以上でなおかつ胴部外面にハケメ調整を施すのものと定義する。

擬凹線甕　口縁部に擬凹線文を施文し，胴部外面にハケメを施す甕。胴部内面にケズリを施すものとハケメを施すものがある。胴部文様によりさらに次の３器種に細分する。

ｎ（１）　肩部が無紋の擬凹線甕。

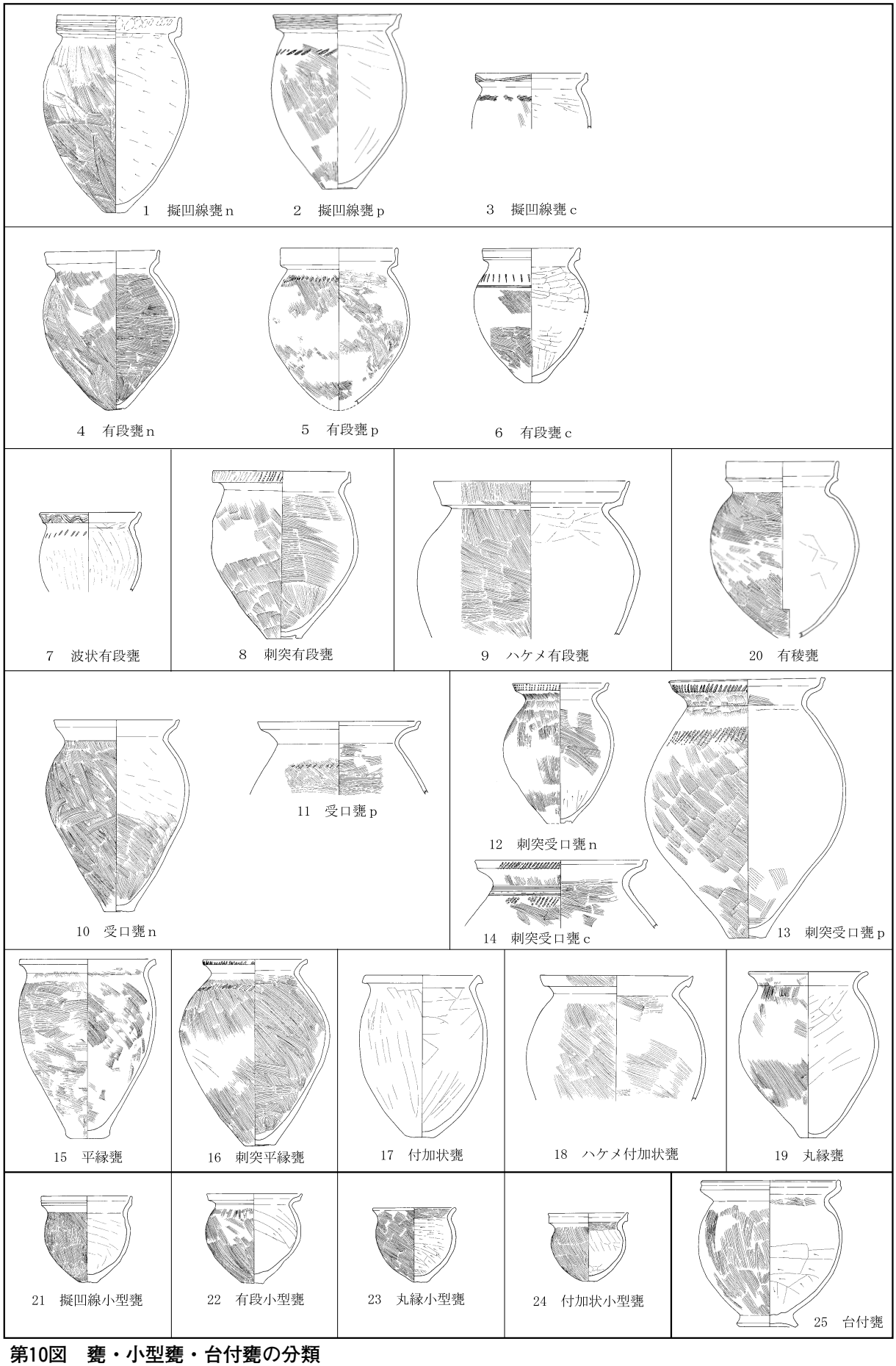
ｐ（２）　肩部に刺突文を施す擬凹線甕。

ｃ（３）　肩部に（櫛描）波状文を施す擬凹線甕。

有段甕　口縁部が有段口縁で有段部が無文，胴部外面にハケメを施す甕。胴部内面にケズリを施すものとハケメを施すものがある。胴部文様によりさらに次の３器種に細分する。

ｎ（４）　肩部が無文の有段甕。

注７　英単語については，山本忠尚　2001『和英対照日本考古学用語辞典』株式会社東京美術を参考にした。



第10図　甕・小型甕・台付甕の分類

p（５）　肩部に刺突文を施す有段甕。

c（６）　肩部に（櫛描）波状文を施す有段甕。

波状有段甕（７）　口縁部に波状文を施す甕。

刺突有段甕（８）　有段口縁で口縁部に刺突文を施す甕。

ハケメ有段甕（９）　有段口縁で，有段部に装飾的にハケメを施す甕。

受口甕　受口状口縁で有段部が無文の甕。胴部文様によりさらに次の３器種に細分する。

n（10）　肩部が無文の受口刺突甕。

p（11）　肩部に刺突（列点）文がある受口甕。

刺突受口甕　口縁部が受口状口縁で有段部に刺突文を施文する甕。胴部文様により次の３器種に細分する。

n（12）　肩部が無文の受口刺突甕。

p（13）　肩部に刺突（列点）文がある受口刺突甕。

c（14）　肩部に櫛描文を施文する受口甕。

平縁甕（15）　口縁部が平縁口縁の甕。

刺突平縁甕（16）　平縁甕の口縁端部に刺突文を施す甕。

付加状甕（17）　付加状口縁の甕。

ハケメ付加状甕（18）　付加状甕の口縁部にハケメを施したもの。

丸縁甕（19）　丸縁口縁の甕。

有稜甕（20）　有稜口縁の甕。

ｂ　**小型甕**（第10図）

器高14㎝以下の小型の甕。

擬凹線小型甕（21）　口縁部が有段口縁で擬凹線文を施す小型甕。

有段小型甕（22）　口縁部が有段口縁の小型甕。胴部外面はハケメ調整を施す。

丸縁小型甕（23）　口縁部が丸縁口縁の小型甕。胴部外面はハケメ調整を施す。

付加状小型甕（24）　口縁部が付加状口縁の小型甕。

ｃ　**台付甕**（第10図）

台付甕（25）　甕に台を付けた器種。

ｄ　**壺**（第11図）

頸部が甕よりすぼまり，胴が長い形態の土器。本書では次の①～③の３種の要素のいずれかを満たすものを壺と定義する。①口頸部が円筒形のもの。②頸部径が胴部最大径に対し７割未満のもの。③胴部外面にミガキを施すものと定義する。

長頸壺（１）　口頸部が長頸の壺。

短頸壺（２）　口頸部が短頸で胴部が細長い形状の壺。

擬凹線短頸壺（３）　口頸部が短頸で，口縁部に擬凹線文を施す壺。

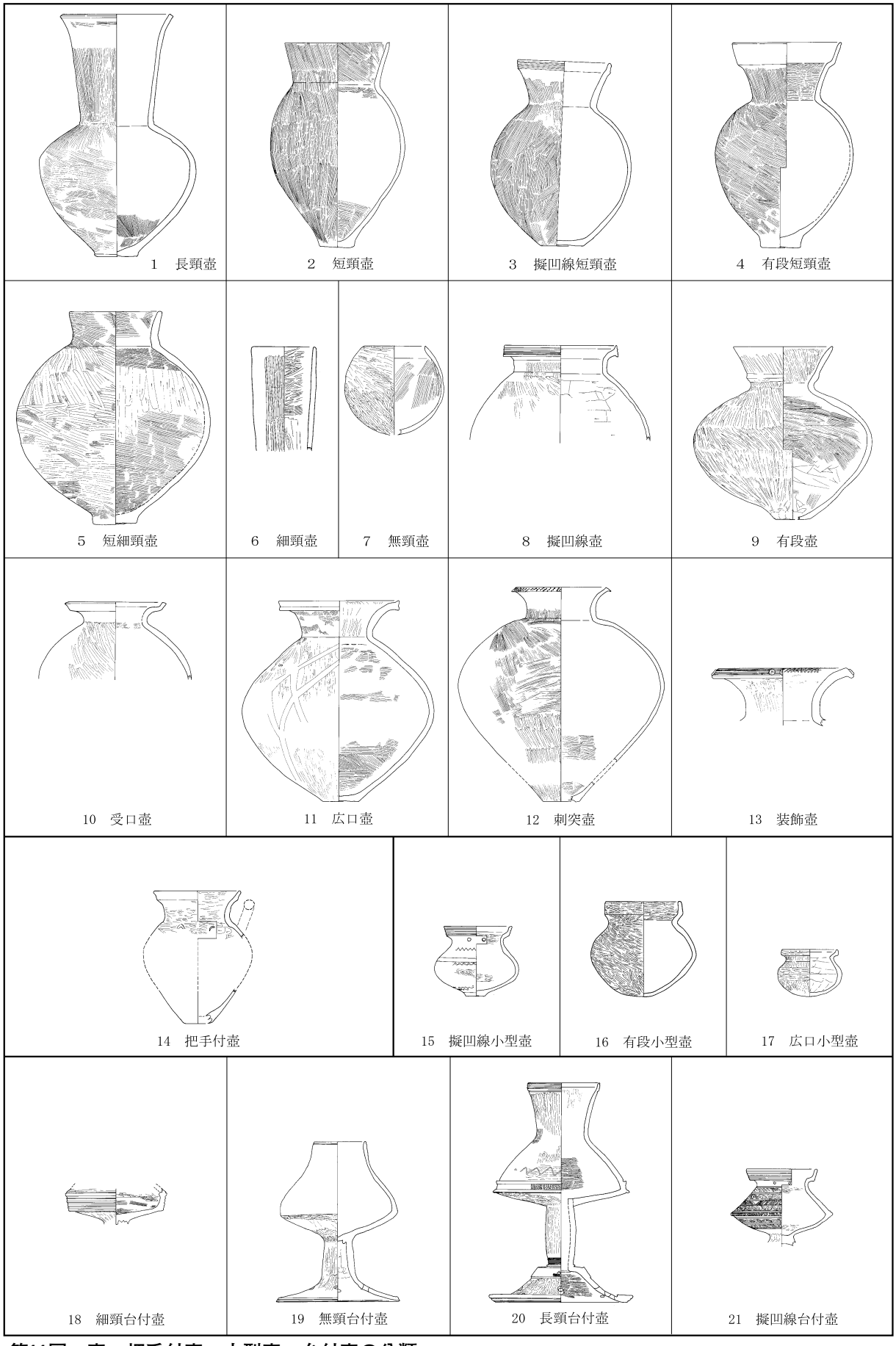
有段短頸壺（４）　口頸部が短頸で有段口縁，胴部が細長い形状の壺。

短細頸壺（５）　口頸部が短細頸で胴部が球形または扁平な形状の壺。

細頸壺（６）　口頸部が細頸で算盤玉状の胴部の壺。

無頸壺（７）　口頸部が無頸の壺。

擬凹線壺（８）　口縁部に擬凹線文を施す壺。



第11図　壺・把手付壺・小型壺・台付壺の分類

有段壺（９）　口縁部が有段口縁で，胴部が球形または扁平な形状の壺。

受口壺（10）　口縁部が受口口縁の壺。

広口壺（11）　口頸部が広口の壺。

刺突壺（12）　口頸部が広口で，口縁部に列点文を施す壺。

装飾壺（13）　口頸部が広口で，口縁部に２種類以上の文様を施す壺。

ｅ　**把手付壺**（第11図）

把手付壺（14）　把手が付く壺。

ｆ　**小型壺**（第11図）

器高14㎝以下の小型の壺（坩）。

擬凹線小型壺（15）　口縁部に擬凹線文を施す小型壺。

有段小型壺（16）　口縁部が有段口縁の小型壺。胴部外面はミガキを施す。

広口小型壺（17）　口縁部が広口の小型壺。胴部外面はミガキを施す。

ｇ　**台付壺**（第11図）

壺の底部に台がつく形態の土器。

細頸台付壺（18）　細頸壺に脚部が付くもの。

無頸台付壺（19）　無頸壺に脚部が付くもの。

長頸台付壺（20）　長頸壺に脚部が付くもの。

擬凹線台付壺（21）　口縁部に擬凹線を施文する台付壺。

ｈ　**器台**（第12図）

受部に脚部がつく形態の土器。他の器種を載せる用途。

擬凹線器台　口縁部に擬凹線を施した器台。脚部の形態によりさらに２分する。

Ｅ（１）　脚部が外反脚の擬凹線器台。

Ｃ（２）　脚部が有段脚で脚部に擬凹線を施す擬凹線器台。

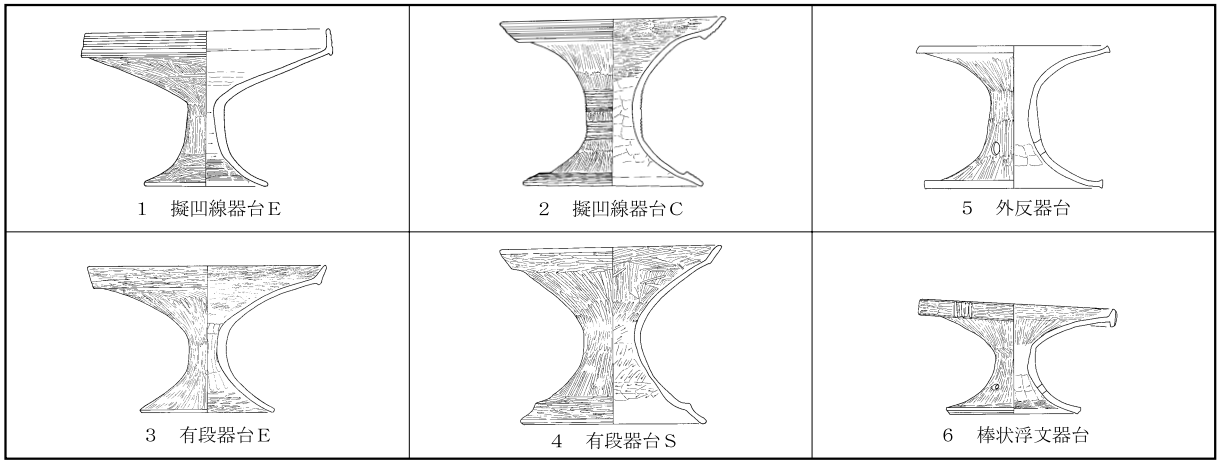
有段器台　受部が有段受の器台。脚部の形態によりさらに２分する。

Ｅ（３）　脚部が外反脚の有段器台。

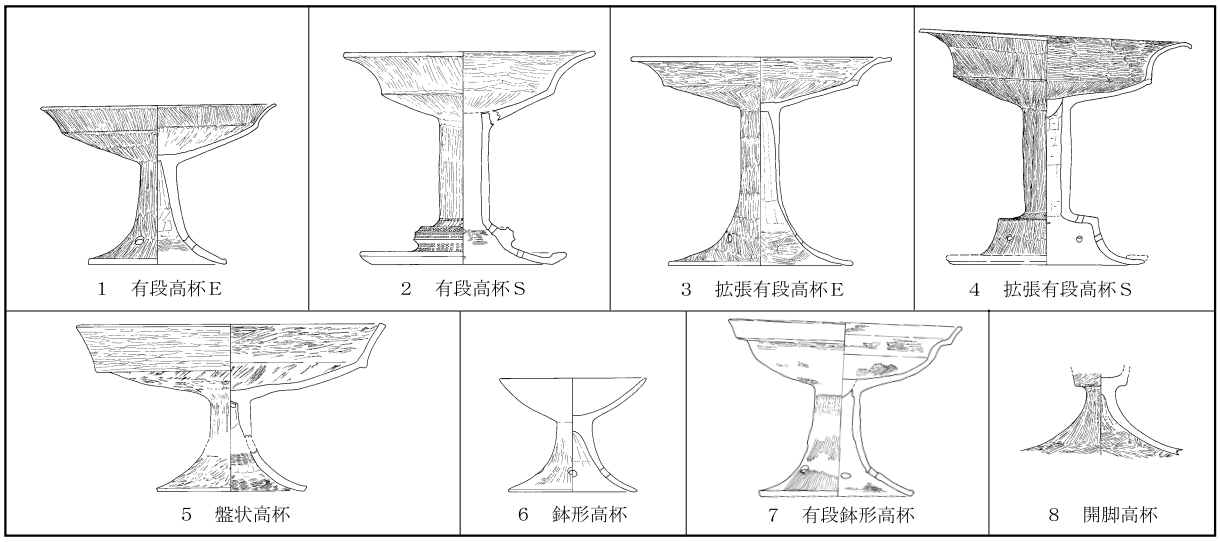
Ｓ（４）　脚部も有段脚の有段器台。

外反器台（５）　受部が外反受で脚部も外反脚の器台。

棒状浮文器台（６）　受部に棒状浮文を施す器台。



第12図　器台の分類



第13図　高杯の分類

ⅰ　**高杯**（第13図）

杯部に高い脚部を付けた形態の土器。

有段高杯　受部の底が平らで直線的に外傾または外反する口縁のもの。脚部の形態によりさらに２分する。

E（１）　脚部が外反し，そのまま裾部にいたる有段高杯。

S（２）　脚部も有段の有段高杯。

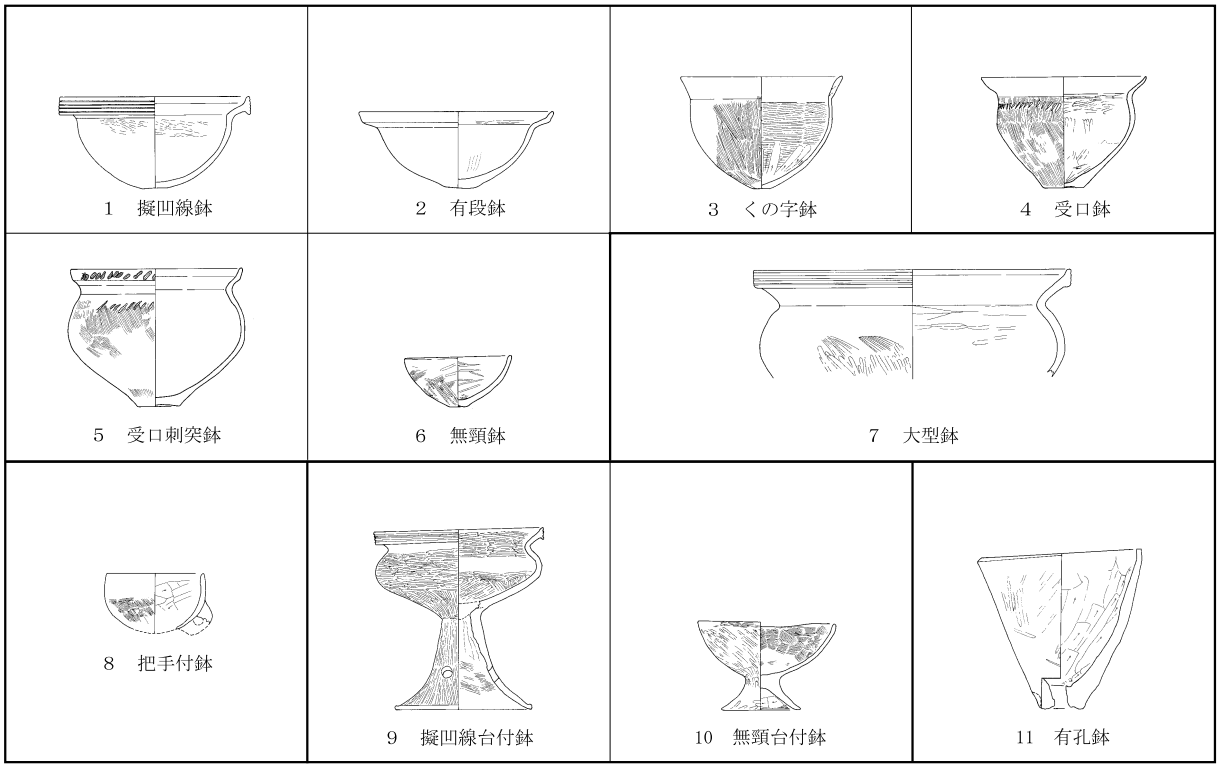
拡張有段高杯　杯部が拡張有段杯の高杯。

E（３）　脚部が外反脚の拡張有段高杯。

S（４）　脚部も有段脚の拡張有段高杯。

盤状高杯（５）　杯部が盤状杯の高杯。

鉢形高杯（６）　杯部が鉢形杯の高杯。



第14図　鉢・大型鉢・把手付鉢・台付鉢・有孔鉢の分類

第15図　蓋・皮袋形土器・ミニチュア土器の分類

有段鉢形高杯（７）　杯部が有段鉢形杯の高杯。

開脚高杯（８）　杯部が小型杯で脚部が開脚の高杯。

ｊ　**鉢**（第14図）

口縁部が大きく，浅い形態の土器。本書では口縁部径が頸部径，胴部最大径，胴部長のいずれより大きいものと定義する。

擬凹線鉢（１）　口縁部に擬凹線を施す鉢。

有段鉢（２）　口縁部が有段口縁で有段部が無文の鉢。

くの字鉢（３）　口縁部がくの字口縁の鉢。

受口鉢（４）　口縁部が受口状口縁の鉢。

受口刺突鉢（５）　口縁部が受口状で有段部に刺突文を施す鉢。

無頸鉢（６）　底部からそのまま立ち上がる頸部を作らない鉢。

大型鉢（７）　口径が25㎝を超える鉢。

ｋ　**把手付鉢**（第14図）

把手付鉢（８）　把手を付けた鉢。

ｌ　**台付鉢**（第14図）

鉢に脚部をつけた形態の土器。

擬凹線台付鉢（９）　擬凹線鉢に脚部が付くもの。

無頸台付鉢（10）　無頸鉢に小さな台がつくもの。

ｍ　**有孔鉢**（第14図）

有孔鉢（11）　漏斗状の形態で底部に穴が開く形態の土器。

ｎ　**蓋**（第15図）

皿を上下逆にしたような形態の土器。

有鈕蓋（１）　つまみが付く蓋。

返し付蓋（２）　かえりがある蓋。

ｏ　**皮袋形土器**（第15図）

皮袋形土器（３）　皮袋状の胴部に短い口縁部が付く器種。

ｐ　**ミニチュア土器**（第15図）

祭祀用の手捏ねによる成形のミニチュアの土器。

甕形ミニチュア土器（４）　甕形のミニチュア土器。

壺形ミニチュア土器（５）　壺形のミニチュア土器。

鉢形ミニチュア土器（６）　鉢形のミニチュア土器。

ｑ　**天王山系土器**

天王山系土器　縄文や沈文を施文した様式の異なる東北地方天王山式系統等の土器を一括する。詳細は第５分冊第Ｘ章考察に譲る。

2　弥生時代の概要

弥生時代の遺跡は，第16図のとおり下老子笹川遺跡の中央から南側（福岡町下老子・一歩二歩地内，高岡市笹川地内）のＡ７・８地区（以下Ａ地区とする），Ｂ１～７地区（以下Ｂ地区とする），Ｃ１地区（以下Ｃ地区とする）の延長約600ｍに広がっていた。遺構検出面はＡ地区がⅣｂ層上面とⅤ層上面の２面，Ｂ・Ｃ地区ではⅤ層上面で，Ａ地区が層位的に新しい。遺構検出面の各地区の標高はＡ７地区18.2ｍ，Ａ８地区18.1ｍ，Ｂ１地区18.1ｍ，Ｂ２地区18.0ｍ，Ｂ３地区17.8ｍ，Ｂ４地区17.8ｍ，Ｂ５地区17.7ｍ，Ｂ７地区17.6ｍ，Ｃ１地区17.6ｍとなり，南から北へと低くなり，西から東へと低くなっている。遺跡の時期は，おおよそ弥生時代中期から終末期で，Ａ地区は終末期，Ｂ・Ｃ地区は後期と地区毎に中心となる時期が異なり，南から北にいくにしたがい古くなる。遺跡の性格はＡ地区が集落，Ｂ地区が集落と畠，Ｃ地区が集落である。

弥生時代において特筆すべきは，Ａ地区の周堤の高まりが残る周溝式竪穴建物，Ｂ地区の周溝式竪穴建物および竪穴建物出土の多量の石製玉作関連遺物，Ｂ地区ＳＩ９出土の水盛り，Ａ・Ｂ地区出土の多量の弥生土器，集落のほぼ全域発掘による集落構造である。周溝式竪穴建物，弥生土器，木製品，石製玉作関連遺物については，第５分冊第Ｘ章でそれぞれ考察をしている。

次に各地区の概要を述べる。各地区の全体図（主要遺構の配置）はＡ地区を第17図，Ｂ地区を第66図，Ｃ地区を第348図に示している。

Ａ地区の弥生時代終末期の集落は，北東と南西に伸びる平行な溝（ＳＤ2102とＳＤ1701）と南側の柵によって区切られた80ｍ×80ｍ以上の空間につくられ，周溝式竪穴建物４・掘立柱建物４・周溝遺構10・柵２・土坑・溝等からなっている。Ａ地区の出土遺物は弥生土器・木製品・石製品などがある。弥生土器は主に周溝式竪穴建物の周溝から多量に出土し，生活用具と考えられるが，溝から集中出土したものもあり，祭祀行為に使われたと考えられるものもある。また包含層からは天王山系土器が出土している。木製品は刳物桶・掘立柱建物の柱根がある。石製品には砥石・石鏃のほか，少量ではあるが緑色凝灰岩剥片が出土している。以上のほか周溝式竪穴建物からガラス製玉類が出土した。

Ｂ地区はＢ３～７地区に弥生時代後期の集落，Ｂ１地区とＢ３地区西側部分に畠を検出した。集落はＢ地区北と東の自然流路と南の道路によって区切られた南北230ｍ・東西約160ｍの範囲に広がり，周溝式竪穴建物15・竪穴建物３・周溝式平地建物・掘立柱建物５・周溝遺構32・柵・道路・土坑・溝などからなっている。集落は中央を流れる川を境に東のＢ６・７地区と西のＢ５地区の２群に分かれる。この２群はさらにいくつかの住居・倉庫・小屋からなる建物群に分かれているようみえる。また，西のＢ５地区の周溝式竪穴建物の内３棟は焼失しており，１棟が土屋根であったと判明した。また，Ｂ５地区には楕円形の柵があり，内部に廃棄土坑があり，祭祀施設と考えている。出土遺物は弥生土器・木製品・石製品・ガラス製品・炭化米などがある。土器には在地系土器のほか，天王山系土器，中国地方の特殊器台，東海系など広範囲にわたり，地域交流の広さを物語っている。なかでも，天王山系土器と在地系土器が共伴する周溝式竪穴建物があり，土器の並行関係を示すとして注目されている。木製品には水盛り・桶・農具・柱根などがある。石製品には，多量の石製玉作関連遺物のほか，石鏃などがある。

Ｃ地区は後世の削平が著しく遺構の遺存状態が悪く，集落の形態は解らないが，柱穴の存在から何棟かの建物があったと考えられる。出土遺物は，弥生土器・木製品・石製品があり，弥生時代後期のもののほか土器や大型の石包丁など弥生時代中期に属するものもある。

第16図　弥生時代遺構位置図　(1/3000・1/8000)

3　A地区

（1）A７・８地区の遺構と遺物

A７・８地区では，河川の氾濫堆積物と考えられるⅢ層を掘削した段階で，周堤部分が盛り上がった状態で竪穴建物を４棟検出することができた。この建物を中心とする集落は北側と南側を自然流路や溝で区切られ，南東から北西に線状に延びる小規模なもので，４棟の掘立柱建物と溝が方形に巡る周溝遺構が群を構成している。時期は概ね弥生時代終末期である。

A　周溝式竪穴建物

１号周溝式竪穴建物（ＳＩ１，第18～20・28～31・38図，図版３・40～44・148・154・155）

A７地区に位置する，Ⅲ層を掘削した段階で周堤部分の盛り上がりが残存していた建物のうちの１棟。建物の上面には全体に薄く５～10㎝の厚さでⅣａ層が堆積しており，これを剥いだ段階で周堤の盛土の上面が現れた。形態は中央が窪んだ低いマウンド状を呈していた。建物の規模は周溝の外側で直径約16m，周溝はⅣｂ層上面から掘り込まれており，１度外側に掘り返されて規模が大きくなっている。新しい方の溝の幅は約1.3～2.2ｍを測る。埋土は黒色粘土質ロームなど黒色の強い土が堆積している。この周溝の排水は南方の東西に延びる谷地形に平行するＳＤ1701に流れるように南北に延びる溝が掘削されている。断面形は逆台形で幅は周溝より狭く，深さは30㎝と周溝より深い。周堤部分は当初上端で約1.8～2.2ｍの幅であったが，溝が再掘削された後は約2.4～３ｍと広くなっている。周堤部分を断ち割りした結果，やや明るいオリーブ褐色シルト層とその下に炭化物が混じる黒褐色シルト層が水平堆積しており，黒褐色シルト上面が当時の生活面と考えられる。従って単純に盛土の土はオリーブ褐色シルト層のみと推定された。屋内部は長軸約7.5m，短軸約７ｍの隅丸方形を呈し，主軸方向はＮ－30°－Ｅである。壁際には幅25～30㎝，床面から深さ約15㎝の壁溝が巡る。床面は整地した程度で，あまり堅く敷き均すといった感じではない。中央では直径35㎝と40㎝の炭化物が充填された灰穴炉と思われる穴を２基検出した（Ｋ１・２）。その周囲の床面では小規模な穴ばかり13基検出している。このうち掘形が比較的しっかりしているＰ１・２・５・８が主柱穴となると考えられる。埋土には暗灰黄色シルトやオリーブ褐色シルトなどの土が堆積していた。東側に隣接するＳＩ３との周溝の切り合い関係は，これより新しい。

遺物は主に屋内部・周溝・周堤盛土から出土し，弥生土器・石製品・石製玉作関連遺物・ガラス製玉類がある。

弥生土器には甕・壺・台付壺・器台・高杯・鉢・台付鉢・有孔鉢・蓋・皮袋形土器がある。

甕には擬凹線甕・有段甕・平縁甕・付加状甕がある。

擬凹線甕は*2*～*12*がある。*2*～*4*は口縁端部が尖縁で外反し，頸部内面に面を取り，口縁部内面に指頭圧痕を残す。*7*は口縁部外面に粘土を貼り付けて短い有段部を作り出し，そこに擬凹線文を施したもので，頸部内面にはハケメが残る。概ね器面調整は胴部外面は斜め又は縦方向のハケメ，内面の上半は横方向のケズリ，下半は縦方向のケズリが施されるものが多い。*10*は大型の甕と推定する個体で，やや軟質な胎土で，１部表面が２次的被熱によって赤色に変化している。

有段甕（*13*～*25*）は口縁部が直線的に上方に延びるものとやや外反するものがある。また，有段部の段が明確なものと内面の屈曲があまく，稜が不鮮明なものがある。器面調整は外面は斜め方向のハケメがほとんどで，内面はハケメ調整のものとケズリ調整を行うものがある。内面がケズリ調整のものには頸部内面にハケメ調整を残すものがある（*24*・*25*）。*24*には口縁部にハケ状の工具による

浅いヨコナデが施される。*16* は口縁部に波状文を施す波状有段甕で，肩部には荒い斜行短線文が残る。*22* は胴部下半に一部縦方向のケズリ調整が残るが，底部縁辺にまでハケメ調整が施される。また，他の個体の外面にはススの付着が認められるが，この個体の残存部分には認められない。*21* は器壁が薄く，砂粒の混入が僅かで堅緻な胎土の個体である。肩部には木口の角を押し当てる刺突文を施している。この他にも*17*・*18* の肩部に斜行短線文が認められる。

付加状甕（*26* ～*29*）と平縁甕（*30* ～*33*）は口縁部小破片が多く，全形を知り得る個体はない。主に胴部外面はハケメ調整，内面はケズリ調整である。*30* は口縁端部を面取りし，口縁部外面にハケ状工具による浅いヨコナデが施されている。*31* は口縁部内外面に斜方向のハケメ調整が施される。

34 ～*39* は甕，または壺の底部である。底部外面中央は浅く窪み，縁辺までハケメ又はケズリ調整が残る。*38* は甕の底部で，底径は２㎝と非常に小さく全面にハケメ調整痕が残る。

壺には長頸壺（*40*）・広口壺（*41* ～*48*）がある。

40 は有段長頸壺で，有段部内外面はヨコナデ，頸部内外面はハケメ調整である。胎土は砂粒があまり混じらない肌理の整ったものである。

42 ～*47* は有段広口壺。口縁部は外反するものと，直立するものがある。*42*・*43* は外反する口縁部に算盤玉状の胴部をもつもので，口縁部内外面と胴部外面に細かいミガキ，胴部内面をハケで調整している。有段部は口縁部下半に強いヨコナデを施して作り出すもので，そのため内側には稜は形成されないものである。*44* は口縁部は直立し，底部は荒れて丸底になっている。*45* は大型の有段壺で，口縁端部は面取りされる。外面はやや荒れているが，内外面ヘラミガキ調整である。*41* は口縁端部に粘土を貼り付け，端部を摘み上げた付加状口縁で，有段状に見える口縁帯には横方向のヘラミガキが施される。*48* は外反する口縁部外面中央にハケ原体による浅いヨコナデを１周巡らせており，口縁部内面頸部近くも短い間隔で，横方向のハケメ調整を行っている。胴部外面は上半ハケメ，下半ケズリ調整，内面はハケメ調整である。

台付壺（*49* ～*53*）は口縁部・胴部・脚台部の破片が出土しており，全形を知り得るものはない。*49* は細頸台付壺の口縁部と考えられるもので，外面は縦方向のヘラミガキ調整で赤彩が施され，内面の調整は横方向のハケメである。*50* ～*52* は胴部片で，*50* は胴部突帯に擬凹線文を施し，表面が赤彩されている。*51* は胴部突帯に２本の棒状浮文を貼り付けて装飾を加えている。いずれも内底面はハケメ調整。*53* は脚台部で，外面はハケメ後ヘラミガキ調整，胴部内底面にはヘラケズリ調整痕が残る。

54 ～*56* は器台。*54* は屋内部から出土したほぼ完形の有段器台で，調整は内外面ヘラミガキで，赤彩が施される。受部径に比較し脚裾部径は小さい。脚裾部は外反し，端部は面取りされる。*56* は外面に一部赤彩の痕跡が残る。

高杯は*57* ～*75* がある。有段高杯（*57* ～*62*・*65*）は伸張化した口縁部が大きく外反するものがほとんどである。*57* は外面は放射状のヘラミガキ調整，内面には口縁部は六角形状に分割した横方向の，杯底部には一定方向のヘラミガキ調整がなされている。口縁部は緩く外反し口縁端部は面取りされる。脚部は外面縦方向のヘラミガキ調整，内面にはハケメ，絞り痕が残る。透孔は３箇所に設けられる。脚裾端部は面取りされる。なお，この個体の破片はＳＩ１の屋内部・周溝，ＳＩ２の周堤，ＳＩ３の屋内部，ＳＤ1701から出土している。*58* は*57* に比べ有段部の径が小さくなり，脚部高も低い。口縁部は外面縦方向，内面横方向のヘラミガキ調整で，口縁端部は磨かれて丸縁に仕上がっている。脚部は透孔がなく，脚裾端部は内面までヘラミガキ調整される。*62* は脚基部が残存していないが，脚裾部の接合面の剥離の様子から棒状脚であったことが推定される。脚裾部の調整は端部内面まではヘラミ

ガキ調整されるが,それより上方の内面にはヨコナデ･ハケメ調整が残る。盤状高杯は*63*･*64* がある。*63* の杯部は内外面ヘラミガキ調整，口縁端部は面取りする。外展する脚裾部は外面ヘラミガキ調整で，内面はハケメ調整が残る。裾端部は面取りし，中央に浅い凹線が巡る。*66* ・*67* は有段鉢形高杯。*66* の口縁部が短く強く外反するのに比べて*67* は杯底部径が小さく，口縁部が伸張化しているタイプである。口縁端部は面を取り，口縁部直下には幅広の凹線が巡り，境界部が強調される。共に杯部の調整は横方向のヘラミガキである。*71* ～*75* は開脚高杯。口縁部径が７～9.8㎝で，杯部が小型の箱形を呈する。杯部の調整は外面縦方向のヘラミガキ，内面横方向のヘラミガキで*74* のみ異なる。*73* は口径が一番大きく,口縁部が他よりやや外反気味で,杯部内底面にも丁寧なヘラミガキが残る。*68* ～*70* は高杯の脚部。*69* ・*70* は脚裾端部外面に粘土帯を貼り付けるもので，*69* は帯上をハケ状の原体でヨコナデ調整し，外面には赤彩が施される。*70* は*69* に比べて粘土帯の貼り付けは薄く，上面は脚裾部外面とともにヘラミガキ調整される。透孔は２孔１対である。

鉢（*78* ～*83*）は無頸鉢・有段鉢・くの字鉢がある。無頸鉢はいずれも椀形の形状をなし，*79* は体部内外面にヘラケズリ調整し，口縁部にヨコナデを施す。有段鉢は口縁部片のみで，全形を知り得ない。すべて横方向のヘラミガキ調整である。*83* は口縁端部を指で摘み三角形状に作り出しているもので，外面には指頭圧痕が残る。やや砂粒の多い胎土である。調整は外面ハケメ調整，内面は口縁部周辺がハケメ後ナデ調整，体部がヘラミガキ調整，体部下半がハケメ調整である。

台付鉢（*76* ・*77*）は断面三角形の踏ん張った高台が付くもので，粘土紐を貼り付けて指でナデ付けて作り出したものである。*76* は細かいヘラミガキ調整が内外面に施されているものの,胴部に粘土紐の接合痕が残り，器表面の凸凹が著しい。

有孔鉢（*89*）は底径2.6㎝の浅く窪んだ小型の底部中央に直径５㎜の孔が外側から穿孔される。

蓋（*84* ～*88*）はすべて有鈕蓋である。口縁部径は10～11㎝台が多いが，*87* は８㎝と小さい。つまみ部径は２～３㎝台で,*86* のつまみ端部は面取りされる。内外面は丁寧なヘラミガキ調整である。*81* には口縁部内外面の一部，つまみ部外面にススの付着が認められる。*88* は他の個体の口縁部がハの字状に外反するのに対し，浅い逆椀形の器形で，つまみは径が大きくボタン状である。

皮袋形土器（*90*）は所謂オカリナ形の左右非対称の胴部に高さ2.5㎝，口径5.8㎝の口縁部が付くもの。胴部両先端は欠損する。外面ヘラミガキ調整，内面ハケメ調整である。周溝から出土。

石製品は軽石・砥石がある。*219* は軽石である。表面は面を持ち，整形することを意識して加工したものと思われる。また右側面は幅１㎜以下の線状痕がいくつかみられる。周溝から出土した。*218* は砂岩製砥石。初めは１点の大型の砥石であったが２つに割れている。割れた後もさらに使用が続けられた様子が，接合できた２点の厚さや幅が異なることから窺える。中砥と思われる。

石製玉作関連遺物は土壌洗浄した結果，ＳＩ１の屋内部と周溝からわずかに緑色凝灰岩の剥片が出土した。またＡ７・８地区の包含層から緑色凝灰岩の剥片や鉄石英の剥片が少量出土した。ＳＩ１の屋内部からは１ｇにも満たない剥片が４点，総重量で2.18ｇ出土した。ＳＩ１からは管玉の未成品や素材となる石核が出土しておらず，後に述べるＢ地区の建物と比較してはるかに少ないことから，ここでは玉作りが行われていたとは積極的には言い難い。

ガラス製玉類は小玉が３点出土した。*220* ・*221* は屋内部から出土した。ガラス内部の気泡が孔に対して平行に延びた状態で観察でき，ガラス管を引き延ばした後切断して作成されていることがいえる。切断面は研磨している。共に臼玉のような形状で，色調は瑠璃紺色（６ＰＢ3/8）[注8] である。*222* は周溝から出土した。切断後に側面が丸みを持つように整形されている。天地面は平坦になるよ

注８　本書に記載のガラス製玉類の色調については，永田泰弘　2002『日本の269色』小学館を参考にした。

う研磨されている。色調はターコイズブルー（５B6/8）である。

２号周溝式竪穴建物（ＳＩ２，第21・22・32～34図，図版３・44～47）

Ａ７地区に位置する，ＳＩ１と同じく周堤部分の盛り上がりが残存していた建物で，検出状況や埋土の堆積状況が酷似していることから，ＳＩ１と同時期の建物と考えている。規模は周溝の外側で直径13.3mと，ＳＩ１に比べるとやや小さくなる。周溝の幅は約１～1.5mで，北西隅が試掘トレンチに切られていることもあり，北側の掘形がやや曖昧である。埋土は黒褐色粘土質ロームなどが堆積する。排水溝は検出されなかった。周堤部分は上端で幅約2.2～2.5mで，オリーブ褐色砂質ロームが盛土として堆積していた。この盛土層中からは全面にわたり多量の土器が出土しており，堆積状況から周堤部を構築する時に埋設されたものと考えられ，単なる補強の目的で埋設したものか，祭祀的意味合いで埋置したものかは出土状況だけでは判断できなかった。屋内部は長軸約6.6m，短軸約5.9mの隅丸方形を呈し，主軸方向はＮ－52°－Ｗである。内部には黒褐色シルトの単層が平均約10㎝の厚さで堆積しており，壁際には平均幅30㎝の浅い溝が巡る。中央には灰穴炉であったと推定される楕円形の炭化物の広がりが僅かに検出された。その周囲には４本の柱穴を検出したが，掘形が一番しっかりしているものはＰ１で，埋土には黒褐色シルト質ロームが堆積する。

遺物は弥生土器が周溝・周堤部盛土層から多く出土しており，逆に屋内部からの出土は少ない。

弥生土器には甕・壺・器台・高杯・鉢・蓋がある。

甕には擬凹線甕・有段甕・有稜甕・平縁甕・付加状甕・丸縁甕がある。

擬凹線甕（*91*～*93*）は幅広の荒い３～４本の凹線が巡るもので，口縁部内面に指頭圧痕を残すものもあるが，頸部内面に面を取るものはない。胴部器面調整は外面がハケメ，内面が横方向のケズリ調整で，器壁は薄く仕上げられる。

有段甕（*94*・*95*・*97*～*100*・*103*）は有段口縁の形状や器面調整にバラエティが見られる。*94* は口縁部と肩部に波状文が巡るもので，口縁部の波状は緩やかである。*95* は大型の甕で，口縁部外面には縦方向のハケメが施され，口縁部直下外面約１㎝に帯状にススの付着が認められる。口縁端部は摘んで内側に曲げて丸く仕上げてあり，やや雑な感じを受ける。頸部は強く屈曲し，面を取る。胴部は外面ハケメ調整，内面浅い横方向のヘラケズリ調整である。*97* は有段部が低く，頸部のくびれがない。*98* の口縁部内面には指頭圧痕が残る。*104* は口縁部が幅の狭い有段状となり，口縁端部は摘んで面取りされる。*107* は高さ12.9㎝の小型甕である。口縁部は幅の狭い有段状で，摘み上げた端部はやや外反する。調整は胴部ハケメ調整で，肩部は頸部から約2.5㎝の幅で，縦方向のハケメ調整の後ヨコナデを施す。内面はヘラ状器具で斜めにナデ上げている。*103* は口縁部の有段部が短く外傾し，有段部直下までハケメ調整が施される。

96 は有稜甕で，口縁部外面にヘラ状器具による強いヨコナデが施され，これによって有段屈曲部が稜となる。*101* は付加状甕で，口縁部内外面にヘラ状器具による横方向のナデ調整が残る。*102*・*106* は内外面ハケメ調整の平縁甕である。

壺には短頸壺（*110*）と有段壺（*111*・*112*・*118*・*119*）・有段口縁の小型壺（*113*～*117*）がある。*110* は口縁部外面はハケメ後ナデ調整，内面はナデ調整，口縁端部は摘み上げて内面に面を取る。*111* は有段の屈曲があまく口縁端部は外傾する。外面は口縁部ヨコナデ。内面はヘラ状器具で横方向にナデる。*112* は厚い口縁部をもつ壺で，口縁部には内外面横方向のヘラミガキが施される。頸部には明瞭な境をもって帯状にススが付着しているが，接合した破片にススの付着が認められない部位もあり，口縁部を欠損した後の２次的使用の痕跡の可能性も考えられる。*119* は内面には段を有するが，

外面の稜が丸くなってしまったもので，口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。口縁部内外面，胴部外面ヘラミガキ調整で，内面には部分的にハケ状のものでナデた痕跡が残る。有段口縁の小型壺はいずれも口縁部が直線的に外反するが，*113* は他に比べ口縁部が短くて厚い。口縁部内面は頸部から口縁端部まで直線に延びるもの（*114* ・*115*）と頸部近くで浅く窪むもの（*116* ・*117*），明確な段を有するもの（*113*）に分かれる。調整はいずれも内外面ヘラミガキ調整で，ヘラミガキ調整前のハケメ調整が残る個体もある。*117* には口縁部外面にススの付着が認められる。*114* ・*115* ・*120* には外面と口縁部内面に赤彩が施される。*120* は完形の壺胴部で，頸部から上が欠損しており，割れ口に一部摩耗が認められることから，２次的使用が推測される。胴部下半には１箇所打ち欠かれて孔が開いており，孔の形状が不整形であることから意識的に穿孔したものかは定かではない。

器台（*121* ・*122*）は両者とも有段器台である。*121* の口縁端部は丸縁で，受部は浅い。*122* は皿状の受部に粘土帯を貼り付けて三角形状に摘み上げて作り上げたことが剥離痕からわかる。調整は有段部外面，受部内面は横方向のヘラミガキ調整，受部外面・脚部は縦方向のヘラミガキ調整である。

高杯（*123* ～*130*）は有段高杯と有段鉢形高杯（*128* ・*129*）がある。*123* は一部欠損するものの残存状態の良い高杯であるが，２次焼成のために器面が荒れており，調整の詳細は不明である。平坦な杯底部に大きく外反する口縁部が付き，口縁端部・脚部裾端部は丸縁に仕上げられる。*126* は杯部外面縦方向のヘラミガキ調整で，口縁端部は面取りする。*124* は口縁端部を折り返して僅かに肥厚させ，内面に浅い段を有するもの。*125* ・*127* は口縁部が短く外反し，口縁端部内側に細い突帯が巡る。口縁端部は先端が細くなり断面が三角形状となる。*125* の杯部外面にはヘラミガキ調整前の荒いハケメ痕が残っている。*128* は大きく伸張する口縁部に小型の椀形の杯底部がつく。残存状況は良好で，周堤盛土層上面から出土している。杯部は外面縦方向，内面は横方向のヘラミガキ調整で，口縁端部は面取りする。脚部外面は縦方向のヘラミガキで，脚裾端部は面取りして内側に折り曲げる。裾部内面にはハケメ調整痕が残る。*129* の脚裾端部は丸縁に仕上げられ，透孔は４箇所に穿孔されていたと推測される。*130* は脚基部と脚裾部でヘラミガキ調整の方向が変わる。内面には明瞭に絞り痕が残る。

鉢（*131* ～*135*）には有段鉢（*131* ～*133*）・くの字鉢（*134*）・無頸鉢（*135*）がある。*131* は大きく外反する口縁部が付くもので，器表面の荒れが著しい。*132* は有段部の作り方が段の下を強くヨコナデしただけのもので，内面の稜はまだ残るが，外面の有段は極めて曖昧である。調整は内外面ヘラミガキ調整されて，底部は若干凸凹しているが，直径4.3㎝の円形の平底となっている。*133* は口縁部が大きく外反せず，斜め直上に伸びる。器形は小型壺に近い。内外面は細かいヘラミガキ調整で，口縁部の段部直上には浅い凹線が巡る。*134* は口縁部ヨコナデ調整，体部内外面ハケメ調整である。体部外面にはススが全体に付着し，器表面は爆ぜて表面が円形に剥落している様子が観察できるが，底部周辺には認められない。

有孔鉢（*136* ・*137*）は共に無頸で，*136* は底部を欠損するが，逆円錐形の器形から推定される。

138 は蓋のつまみと判断したが，頂部内面までヘラミガキ調整が残ることから，台付鉢の底部の可能性もある。

３号周溝式竪穴建物（ＳＩ３，第23・24・27・35図，図版３・47～49・130）

Ａ７地区に位置し，ＳＩ１の東側に重複する建物で，周溝の切り合いからＳＩ１より古い。検出面はＳＩ１・２と同じⅣｂ層上面であるが，周堤部分にあたる場所には生活面であるⅣｂ層上面にⅣａ層の堆積が認められ，盛土の残存は認められなかった。規模は周溝の外側で直径が15.3m，屋内部は長軸7.3m，短軸6.6mの隅丸方形で，主軸はＮ－49°－Ｅである。周溝の幅は0.6～１m，深さは20

～30㎝で，底に向かって幅が狭まる。建物の排水はＳＩ１と同様に周溝からＳＤ1701に向かって溝が掘削され処理されるよう工夫されている。周堤にあたる部分の幅は約３～3.6ｍで，ＳＩ１の掘り直した後の周堤部分の幅に相当する。屋内部には暗灰黄色シルト質ロームが堆積し，壁際に壁溝が巡る。中央部には長軸２ｍ，短軸1.5ｍの楕円形状の炭化物の広がりが認められ，周囲には被熱した自然石も見つかっている。その中央部下層には直径約55㎝の窪みが検出され，これが炉であったと推定する。その周囲には４本の主柱穴と２基の土坑が配されていた。土坑は楕円形と長方形の土坑が連結したもので，切り合い関係はない。Ｋ２からは高杯が出土している。

これらＡ７地区の３棟の遺構の時期差については，ＳＩ１とＳＩ３とは切り合い関係で明らかである。また両者は，周溝・周堤部など外形の規模や排水溝の設置など形態的に良く似ており，ＳＩ３には盛土の残存は認められなかったものの，当時は周溝の掘削土によって周堤が築造されていたと推定すれば，ＳＩ１を築造するにあたり，ＳＩ３の盛土部分を削平，または埋め戻して再利用されたものと考えたい。ＳＩ２とＳＩ３の関係であるが，ＳＩ２はＳＩ３に比べ規模は小さいが，屋内部の平面形や４本主柱穴など類似点が多いことから同時期に築造された可能性がある。一方盛土の残存状況などの遺構の検出状況からはＳＩ２はＳＩ１との共通点が多い。

遺物は弥生土器と木製品が出土しているが，ＳＩ１とＳＩ３の両者から破片が出土している個体はＳＩ１で掲載しているので，ＳＩ３単独出土のものは比較的量は少ない。

弥生土器は甕・壺・器台・高杯・鉢・台付鉢・蓋が出土している。

甕には有段甕（*139* ・*140* ・*142* ）・受口甕・平縁甕・丸縁甕がある。*139* ・*140* は中型の有段甕である。共に外面にススが付着している。*141* は丸縁甕の一種と考えるもので，僅かに斜め上方に伸びる短い口縁部の中央に粘土紐を貼り巡らしている。口縁部内外面はヨコナデ調整，胴部内外面はヘラ状器具で浅いケズリ調整を行っている。*144* は受口甕の小破片で，口縁部はやや内湾気味に立ち上がり口縁端部は面取りする。*146* は平縁の小型甕で，頸部の屈曲が小さく，口縁端部は面取りして上方につまみ上げる。胴部外面は上部がヨコナデ，下半がケズリ調整で，表面には厚くススが付着する。*147* にも全面ススが付着するが，頸部下半の幅0.7㎝，長さ６㎝以上の帯状の範囲では器面が露出している。

壺には有段壺（*148* ）と小型壺（*149* ）がある。*148* は口縁部内外面にヘラミガキが施されるが，外面にススが付着している。*149* は赤彩の有段小型壺で，口縁端部は面取りし，外面・口縁部内面はヘラミガキ調整，胴部はナデ調整である。

器台（*150* ・*151* ）は２個体ある。*150* は有段器台。器高が低く，脚基部径がやや太い。受部径と脚裾部径に大きな差が認められない鼓形の器形である。周溝から出土しており，残存状況は良好である。*151* は棒状浮文器台有段部の下部が垂下し，口縁部断面がＴ字状となる。有段部外面には等間隔６箇所に棒状浮文を３本１組で貼り付けて加飾する。また受部には，ほぼ対角線上の２箇所に２孔１対の小孔が空けられており，補修孔と考えている。脚部には３箇所に透孔が穿孔される。脚裾端部は面を取り，その上面には１条の沈線が巡る。残存率は高く，脚基部を一部欠損するのみである。

高杯（*152* ～*154* ）は有段高杯が２個体ある。杯部のみの出土であるが，遺存状況は3/4以上と良好である。*152* は口縁端部に面を取り，口縁端部内側に薄い粘土帯を貼り，幅約1.3㎝の縁帯が巡る。内外面横方向のヘラミガキ調整である。脚部を欠損する杯部の基部はソケット状になっている。*153* の口縁端部は丸縁で，器面の調整は口縁端部内面と口縁部外面は横方向，口縁部内面と杯底部内外面は縦方向のヘラミガキ調整である。*154* は開脚高杯で，脚裾部が欠損する。杯部は内外面横方向のヘ

ラミガキで，透孔は２孔１対の小穴が器表面から裏面に向けて穿孔される。

鉢は有段鉢（*155*・*156*）・無頸鉢（*159*）がある。*155* は丁寧なヘラミガキ調整がされる小破片。*156* は軟質な土器で，口縁端部が丸縁で，有段の境があまくなっている。*159* は皿状の器高の低い無頸鉢で，底部は平底。口縁部は丸縁で，内外面ヘラミガキ調整である。

台付鉢（*157*・*158*）は共に建物の排水溝から出土しており，*157* はほぼ完形の遺存状況である。器高や器面調整はほぼ同じで，杯部の法量のみが違う。外面はヘラミガキ調整で，内面はハケメ後ヘラミガキ調整と考えられるが，*157* にはヘラミガキ調整の痕跡が残っていない。脚部はハの字脚で，接地面に面を取る。

蓋（*160*）はつまみ部で，内面にケズリ痕が残る。

木製品（*1*）は端部に多角形の突起を削り出したもので，裏面は平滑に削る。上下を逆にして，団扇形木製品の軸部の可能性がある。樹種はウコギ属。

４号周溝式竪穴建物（ＳＩ４，第25～27・36～38図，図版４・49～51・148）

Ａ８地区で検出した，Ａ７地区ＳＩ３の東約５ｍに隣接する建物で，南側は東西に走る谷地形に面する。この建物は中央を東西に試掘トレンチが縦断してしまったが，検出段階でこれも周堤部に盛土が残存する建物であることがわかった。規模は外形で直径約11.6ｍと周囲の建物の中では一番小振りである。周溝の幅は８～15ｍ，周堤部分は上端で幅２～2.8ｍを測る。この上面では直径約20～30㎝の小穴を23基検出し，これらは40～60㎝の間隔を空けて弧を描くように点在する。これらは屋根の垂木先が入った穴の可能性がある。盛土層の遺存状況は悪く，Ａ７地区ＳＩ１・２と同様の盛土暗灰黄色土の堆積が残るのは東側の土層のみで，周堤部において旧地表面であるⅣｂ層上面とⅣａ層の間に明らかな盛土層の堆積を認めるのは難しかった。屋内部は長軸5.2ｍ，短軸3.8ｍの隅丸長方形を呈し，壁際には壁溝が巡る。床面はややしまった感じで，その中央南寄りに炭化物が混じる楕円形の浅い土坑を検出し，これが炉で灰穴炉と考えられる。柱穴は中央長軸上に２基検出している。主軸はＮ－46°－ＥでＡ７地区ＳＩ２・３とほぼ同じ方向を向く。その向きが入り口方向とも考えられ，入り口側にはその近辺にいずれの建物も掘立柱建物が位置している。

出土遺物には弥生土器・石製品がある。

土器には甕・小型甕・壺・小型壺・器台・高杯・鉢がある。

甕（*161*～*185*）には擬凹線甕・有段甕・平縁甕・付加状甕・有稜甕がある。擬凹線甕は２点（*161*・*162*）とも口縁有段部が長く，口縁端部は先端が尖るタイプのものである。*161* は口縁部内面に約1.5㎝間隔で指頭圧痕を明瞭に残す。胴部内面はいずれもヨコケズリを施す。*163*～*174* は有段甕。全形がわかる *170* は，胴部最大径が胴部の７分目ほどにある丸みをおびた形状で，底部が若干上げ底である。口縁部は，有段部の屈折が明瞭なもの（*167*・*168*）と不明瞭なもの（*166*・*170*）とがあり，有段部の長さはいずれも２㎝前後である。胴部外面調整はすべてタテハケである。胴部内面調整は頸部までヨコケズリを施すものが*163*・*164*・*166*・*170*～*173*・*177*・*178* の９点で，ヨコハケを施すものが*167*・*169*・*174*・*175* の４点で，ケズリ調整の方が多い。*178* は外面にススが厚く付着する。平縁甕は*180* の１点のみで，胴部最大径が胴部の上位にあるやや肩の張った胴部に大きく外反する口縁が付く。底部内面に指頭圧痕がみられる。*179*・*181*～*185* は付加状甕。全形のわかるものは*182* のみで，やや細長い胴部で外傾する口縁部が付く。胴部内面の調整は，ハケを施すものが３点，ケズリを施すものが１点認められ，ハケメが多いようである。*176* は有稜甕である。

小型甕（*186*～*189*）は４点あり，いずれも口縁部径が器高よりも大きく，甕と比較すると圧縮さ

れた形状である。器種は，擬凹線小型甕・付加状小型甕・丸縁小型甕がある。*186* は擬凹線小型甕で，外面の縦方向1/3にはススが厚く付着し，残りの部分は赤変している。偏った形で火に掛けられたためと思われる。*187* は付加状小型甕で胴部に粗いタテハケの後，細かいタテハケを施し仕上げている。底部内面に指頭圧痕が認められる。*188* は丸縁小型甕で，先の２点のようなススはみられないが，焼成時の黒斑が胴部下部に１箇所ある。

壺（*190* ～*195*）の器種には有段壺・広口壺・細頸壺がある。*190* ～*192* は有段壺。口縁部は，*190* は短く有段部内面の屈折が明瞭なタイプで，*191* ・*192* は長く有段部内面の屈折がスムーズに移行するタイプである。*191* は突出した底部に最大径が中位にある扁平な胴部である。*192* も *191* と同様な形態であるが，やや縦長に復元できる。*193* は広口壺で口縁部外面にヘラ描きがある。*194* は胴部の形状が不明であるが，細頸壺と考えられる。*195* は上げ底の底部でやや扁平な胴部。

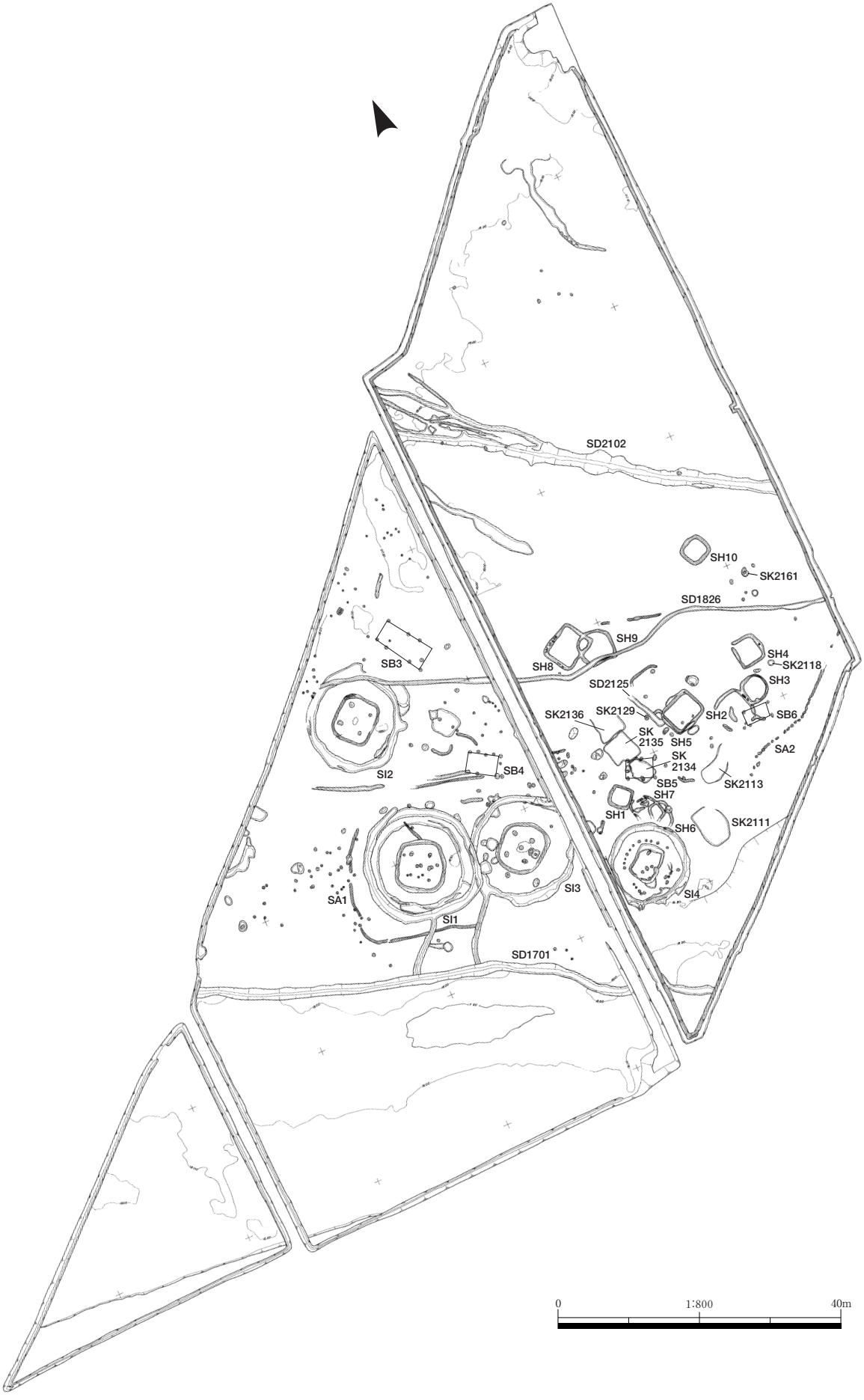
196 ～*198* は小型壺。*196* は有段小型壺で，扁平な胴部に有段部が内傾する口縁部が付く。

器台（*199* ～*201*）はすべて有段器台。*199* は有段器台で，小振りで口縁部が短く外傾し，脚基部が太い。*200* は大型で口縁部が長く外反し，脚基部が細い。*201* は口縁部が肥厚する外反器台かと思われる。

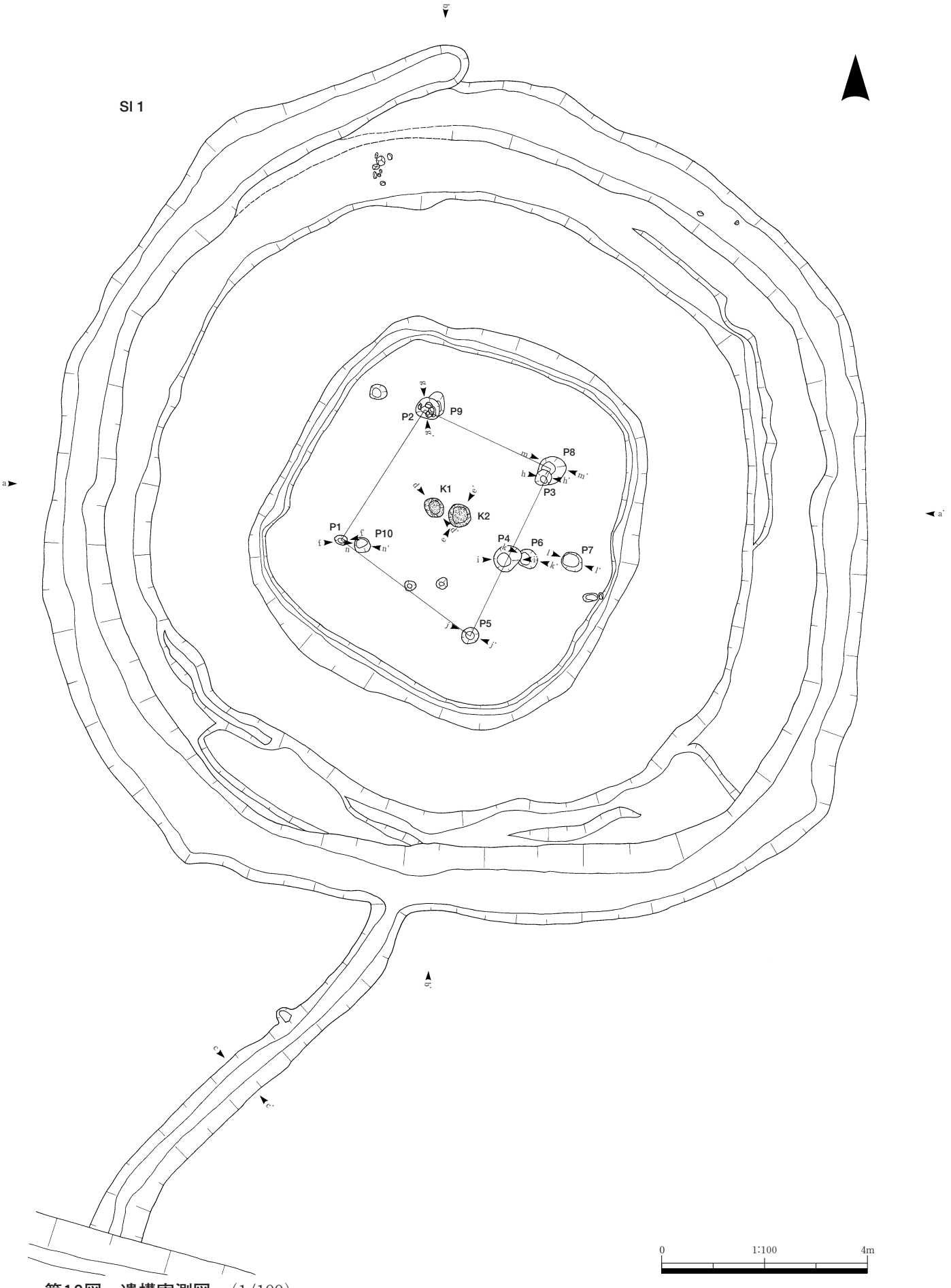
高杯（*202* ～*207*）には有段高杯・開脚高杯がある。*202* ・*203* は有段高杯。*202* は口縁部が長く外反する。*204* は杯部の形状から開脚高杯とした。*205* ～*207* は外反脚。

鉢（*208* ～*214*）には有段鉢・くの字鉢・無頸鉢がある。*208* ・*209* は有段鉢。*210* ～*212* はくの字鉢で，口縁部径に法量差がある。*210* の口縁端部は丸縁口縁で，*212* は付加状口縁，*211* は平縁口縁。*213* ・*214* は無頸鉢で，体部が内湾する。

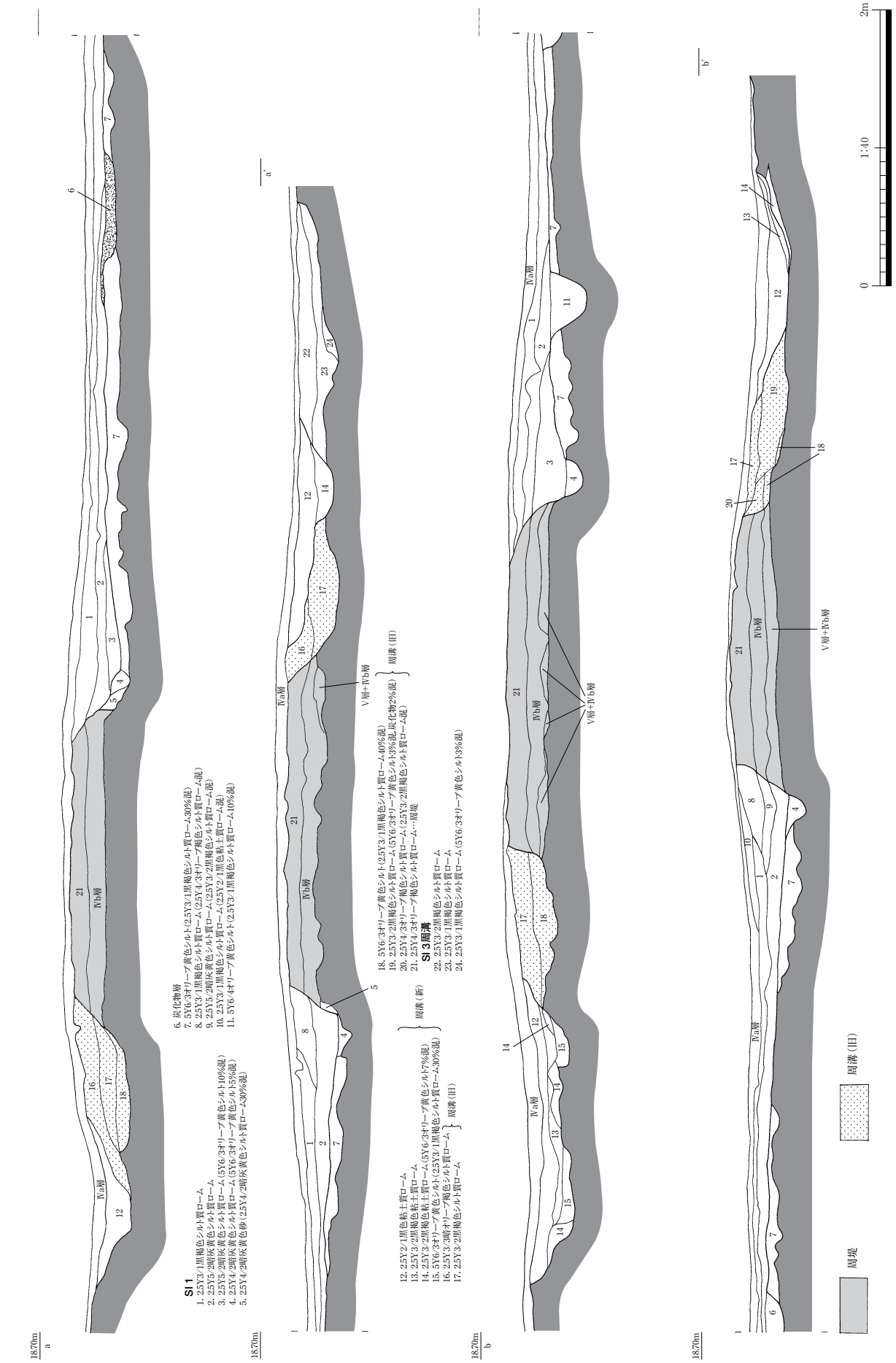
石製品は凝灰岩製砥石が出土した。*216* は砥面が平滑で，中～仕上げ砥と思われる。残存面全てに線状痕がみられる。また表面・裏面・上面には凹凸の大きな線状痕がみられる。*217* は全体に水磨を受けた河原石で光沢を持ち，ごく一部に微細な線状痕が観察される。Ｐ11から出土した。



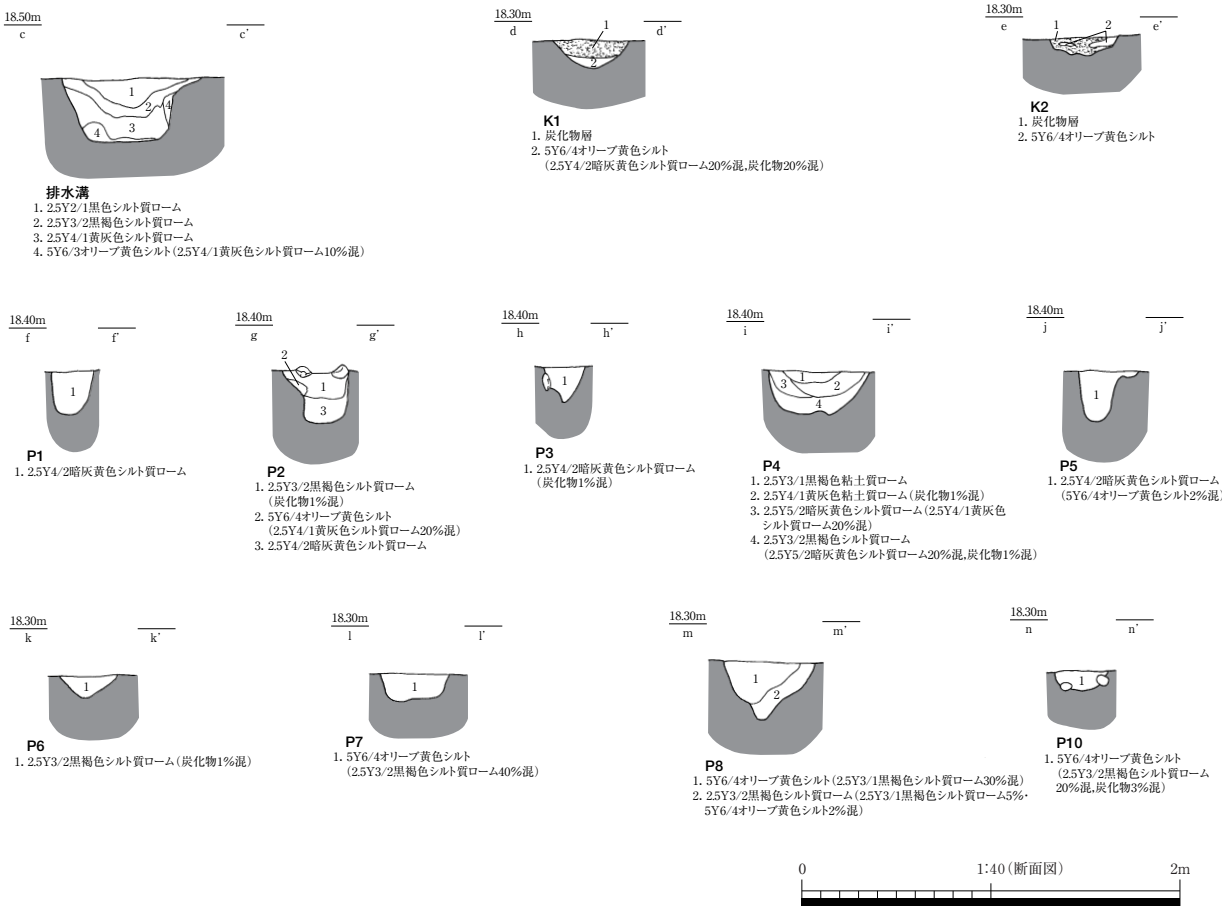
第17図　A地区遺構全体図　(1/800)

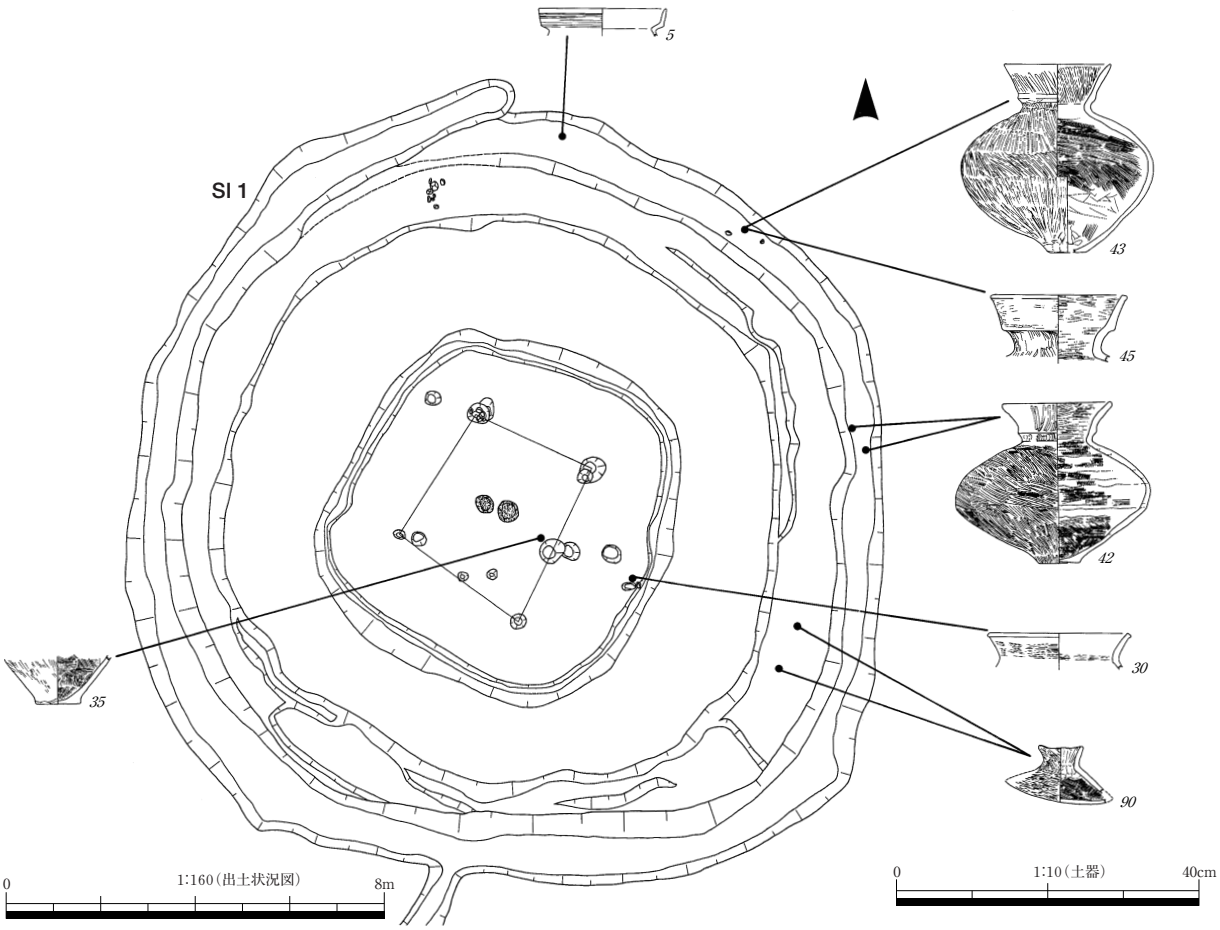


第18図　遺構実測図（1/100）
Ａ７地区　ＳＩ１

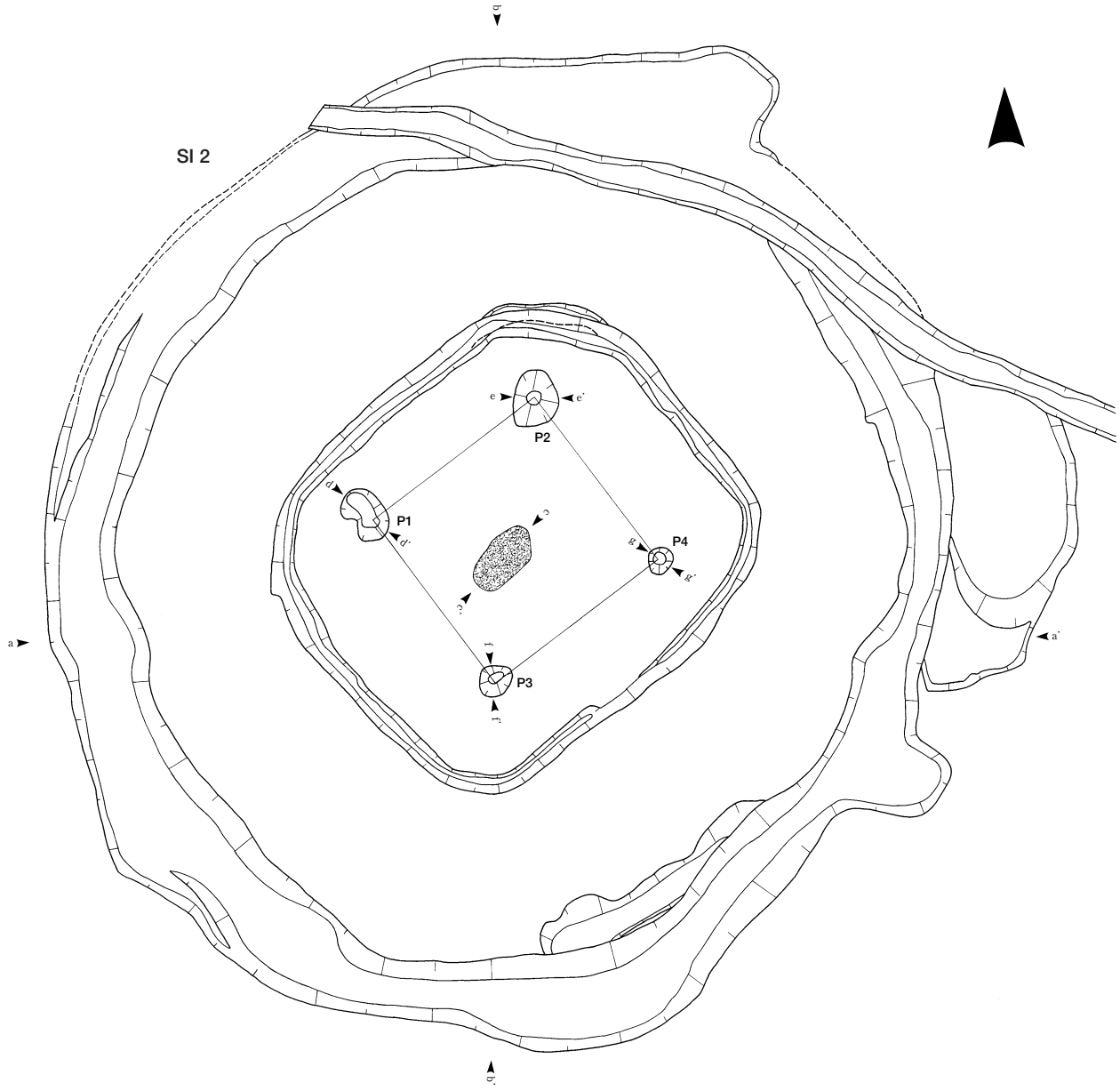


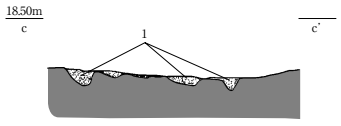
第19図　遺構実測図　(1/40)
A７地区　ＳＩ１



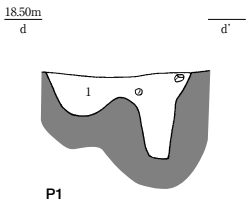


第20図　遺構実測図　(1/40・1/160，1/10)
A７地区　ＳＩ１

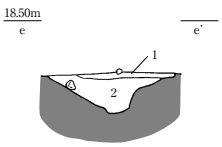




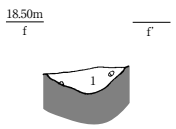
炉
1. 5Y6/4オリーブ黄色シルト質ローム（2.5Y3/2黒褐色シルト質ローム10%混,炭化物30%混）



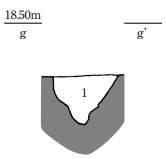
P1
1. 2.5Y3/1黒褐色シルト質ローム（2.5Y5/2暗灰黄色シルト質ローム5%混）



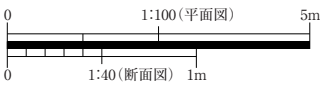
P2
1. 2.5Y3/1黒褐色シルト質ローム
2. 2.5Y3/2黒褐色シルト質ローム（2.5Y5/2暗灰黄色シルト質ローム15%混）



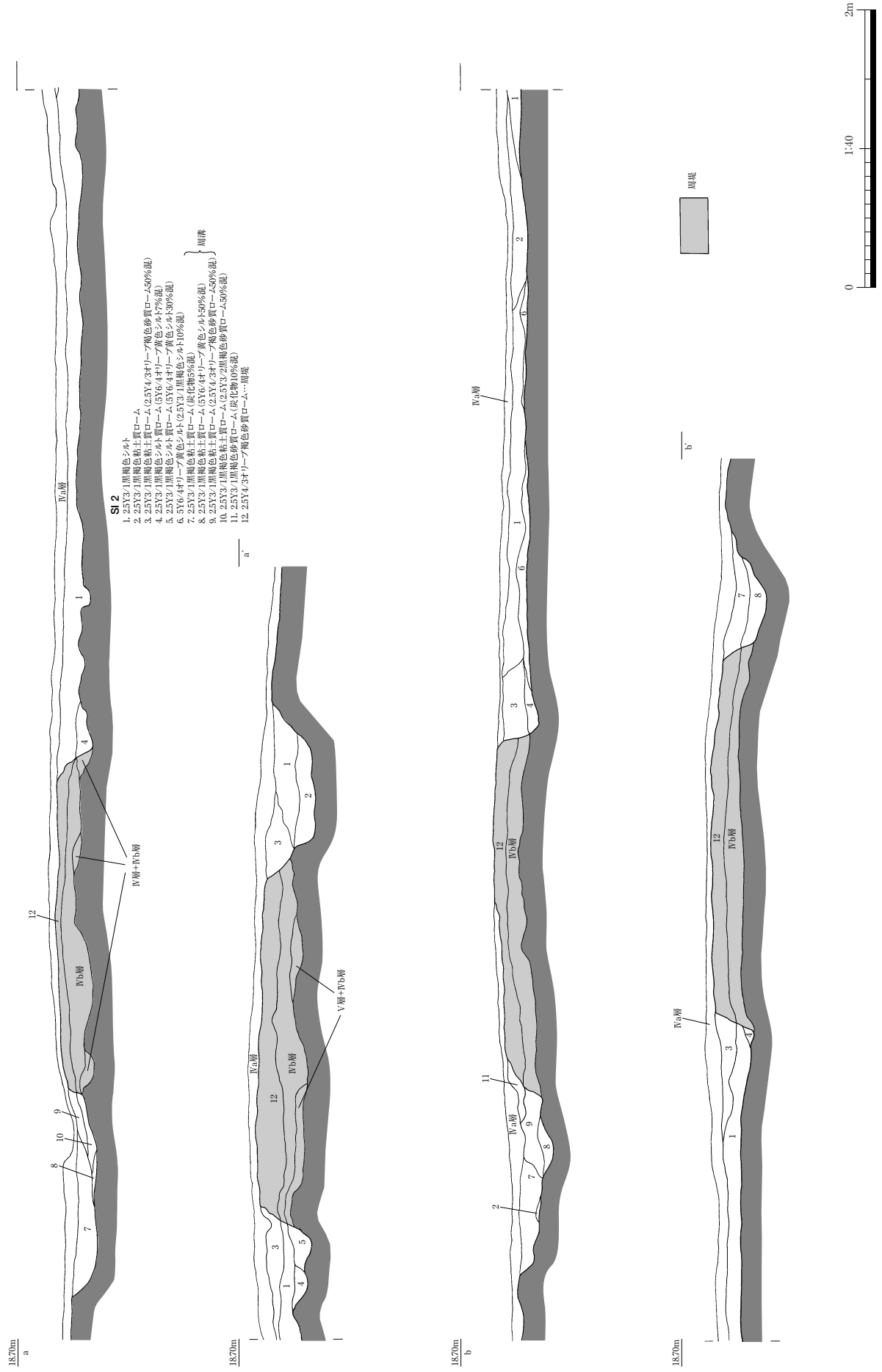
P3
1. 2.5Y3/2黒褐色シルト質ローム（2.5Y5/2暗灰黄色シルト質ローム15%混）



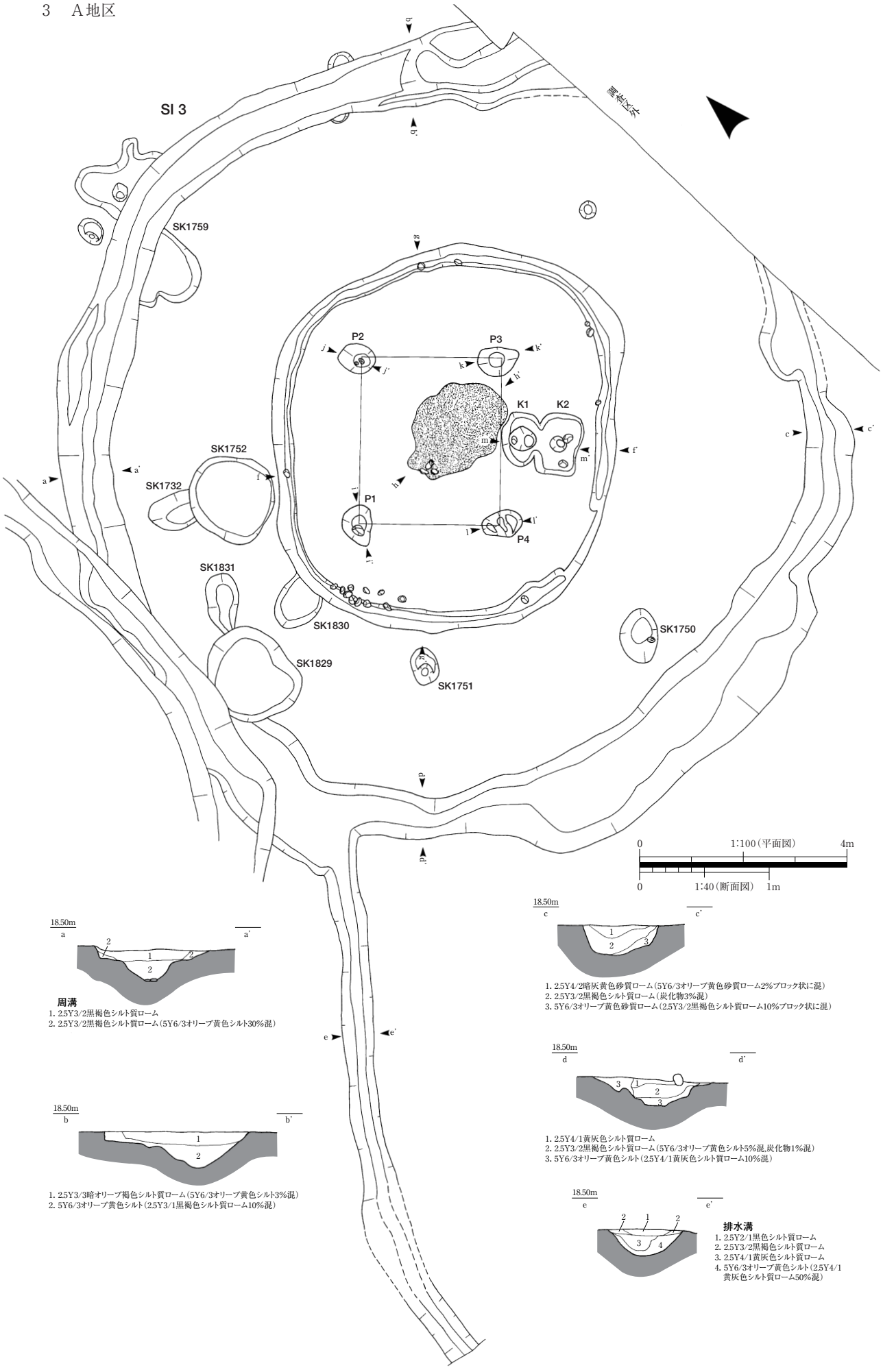
P4
1. 2.5Y3/2黒褐色シルト質ローム（5Y6/4オリーブ黄色シルト50%混）



第21図　遺構実測図　(1/40・1/100)
A７地区　ＳＩ２



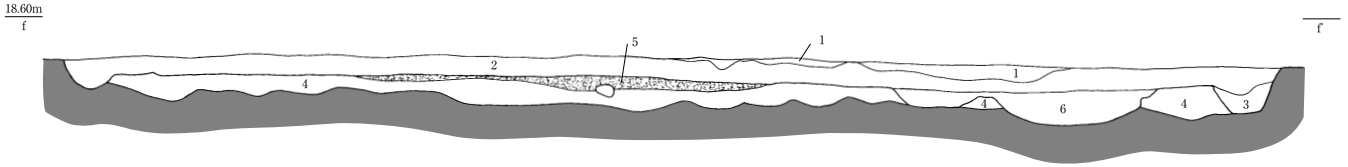
第22図　遺構実測図　(1/40)
Ａ７地区　ＳＩ２



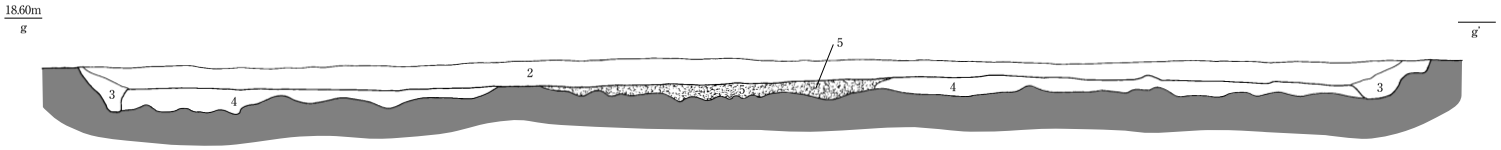
第23図　遺構実測図　（1/40・1/100）
A７地区　ＳＩ３

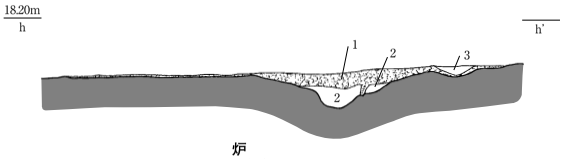
第24図　遺構・遺物実測図（1/40，1/4）

A７地区　ＳＩ３（*1*）

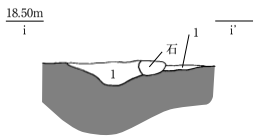


SI 3
1. 2.5Y4/2暗灰黄色シルト質ローム
2. 2.5Y4/2暗灰黄色シルト質ローム（5Y6/3オリーブ黄色シルト2%混,炭化物3%混）
3. 2.5Y4/1黄灰色シルト質ローム（炭化物3%混）
4. 5Y6/4オリーブ黄色砂質ローム（2.5Y3/1黒褐色シルトローム20%混）
5. 炭化物層
6. 2.5Y5/2暗灰黄色シルト質ローム（5Y6/4オリーブ黄色シルト7%混,炭化物2%混）…K1・K2

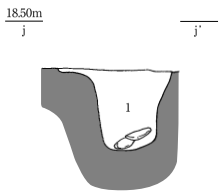




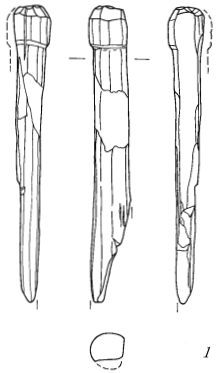
炉
1. 炭化物層
2. 5Y6/4オリーブ黄色砂質ローム（2.5Y3/1黒褐色シルトローム7%混,炭化物2%混）
3. 5Y6/4オリーブ黄色砂質ローム（炭化物50%混）

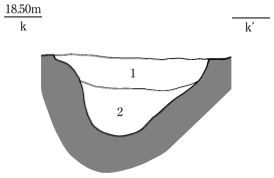


P1
1. 2.5Y4/2暗灰黄色シルト質ローム（炭化物1%混）

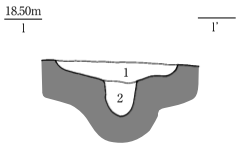


P2
1. 2.5Y4/2暗灰黄色シルト質ローム（炭化物1%混）

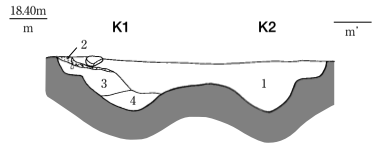




P3
1. 2.5Y4/2暗灰黄色シルト質ローム（5Y6/4オリーブ黄色シルト3%混）
2. 2.5Y3/2黒褐色シルト質ローム（5Y6/4オリーブ黄色シルト2%混）



P4
1. 2.5Y4/2暗灰黄色シルト質ローム（炭化物1%混）
2. 2.5Y4/2暗灰黄色シルト質ローム（5Y6/4オリーブ黄色砂10%混）

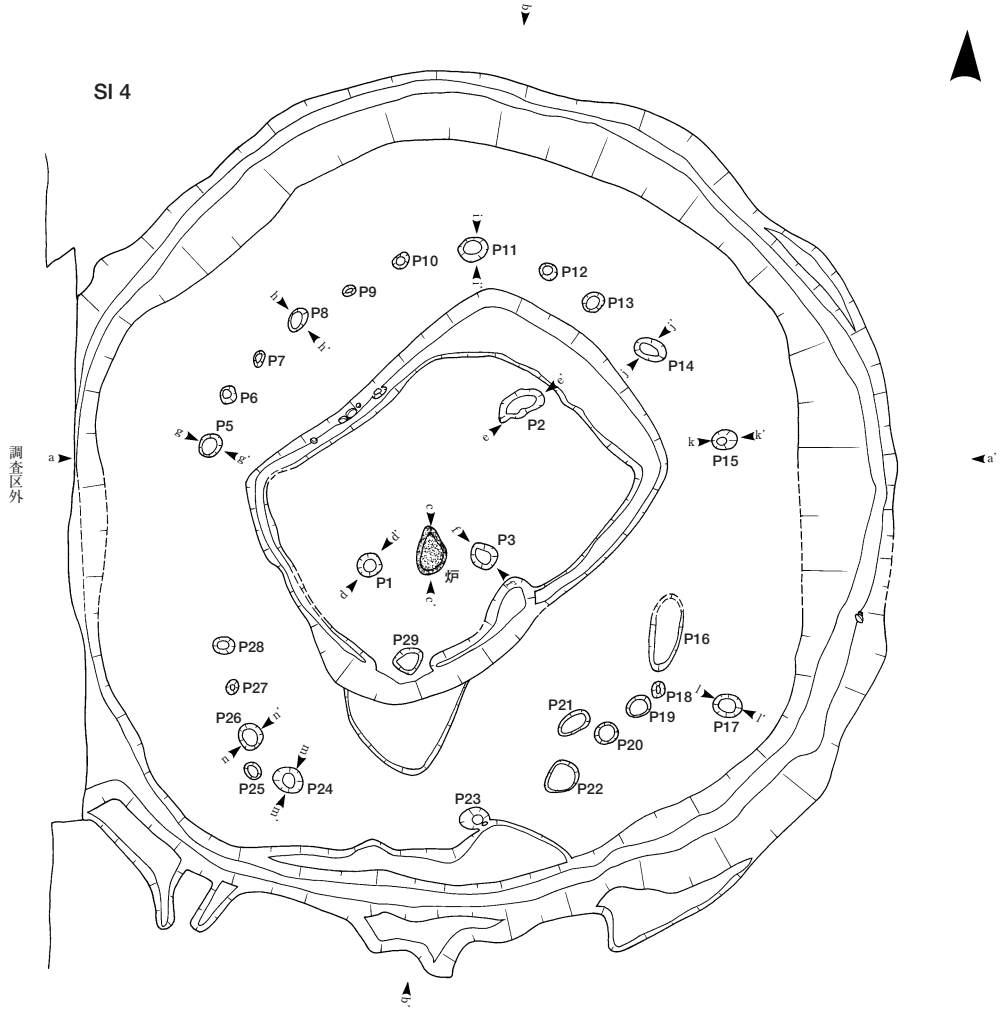


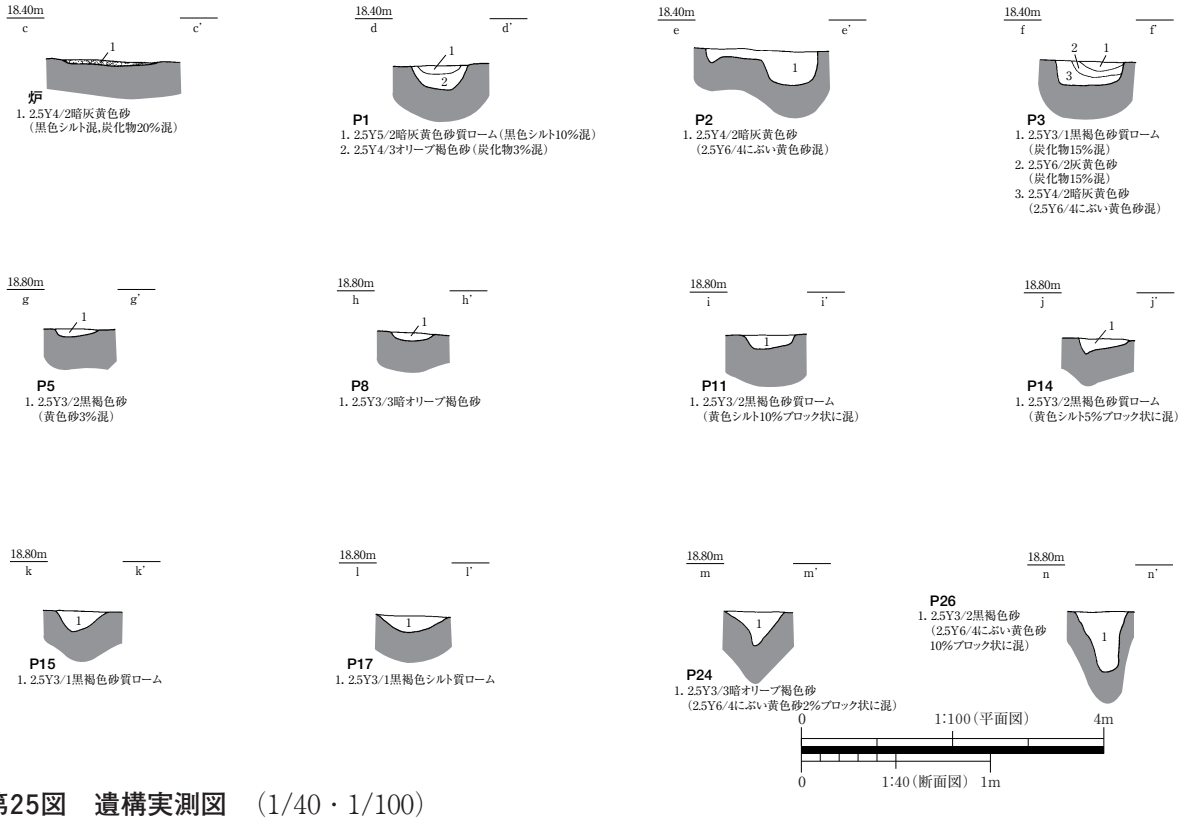
K1・K2
1. 2.5Y4/2暗灰黄色シルト質ローム（5Y6/4オリーブ黄色シルト7%混,炭化物2%混）
2. 炭化物層
3. 2.5Y4/2暗灰黄色シルト質ローム（5Y6/4オリーブ黄色シルト20%ブロック状に混）
4. 2.5Y4/2暗灰黄色シルト質ローム（10Y6/2オリーブ灰色シルト7%混）

1

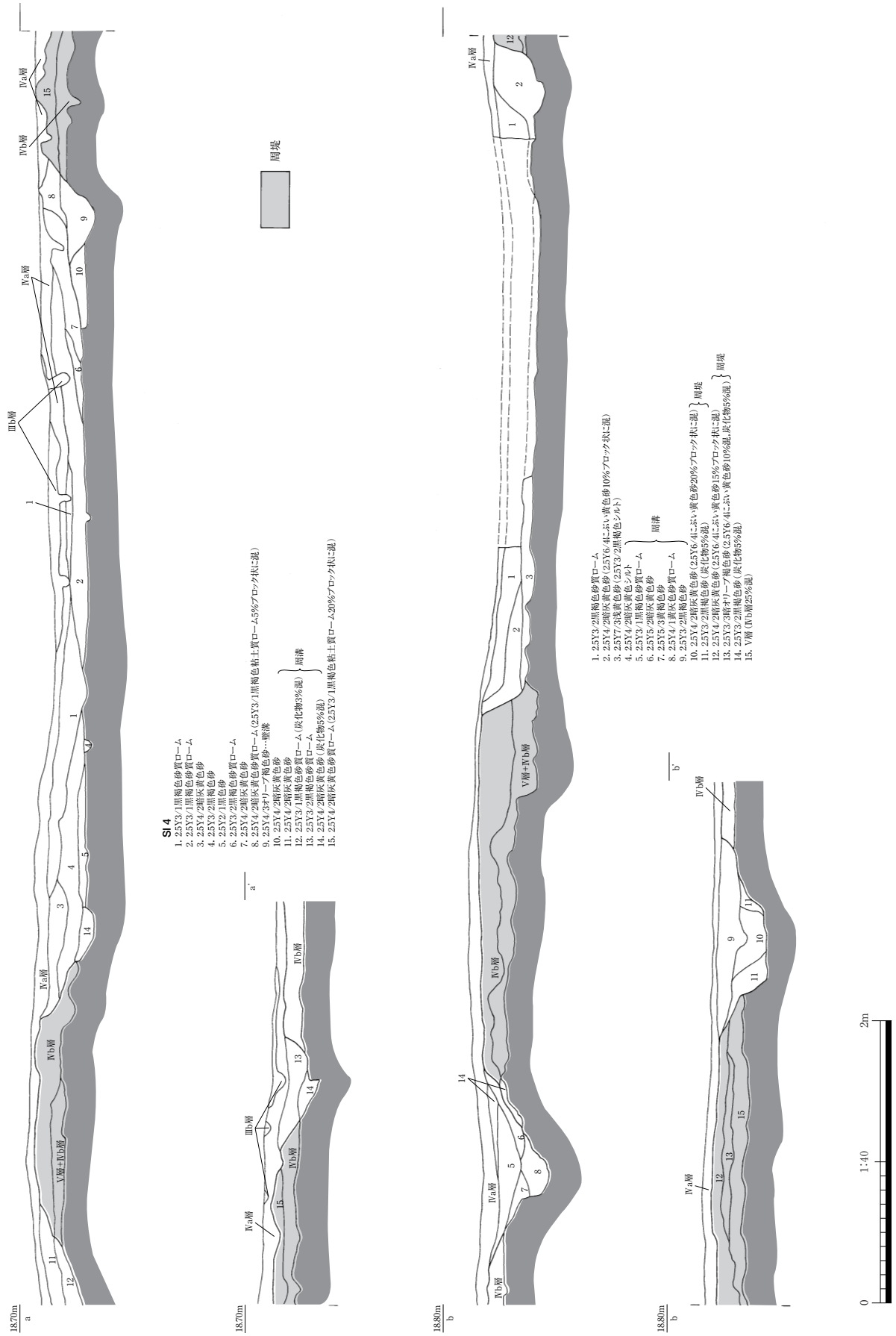
1:4（遺物実測図）
1:40（断面図）

0　20cm　2m

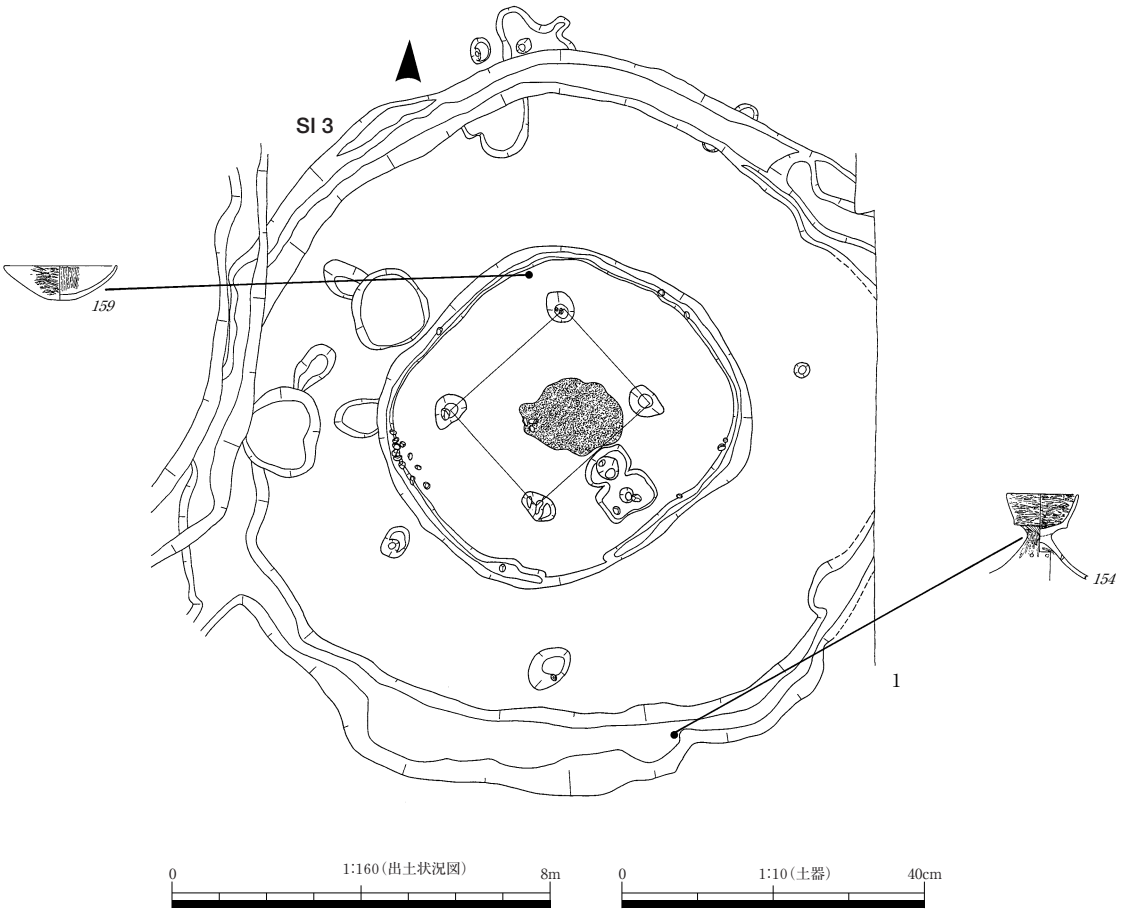


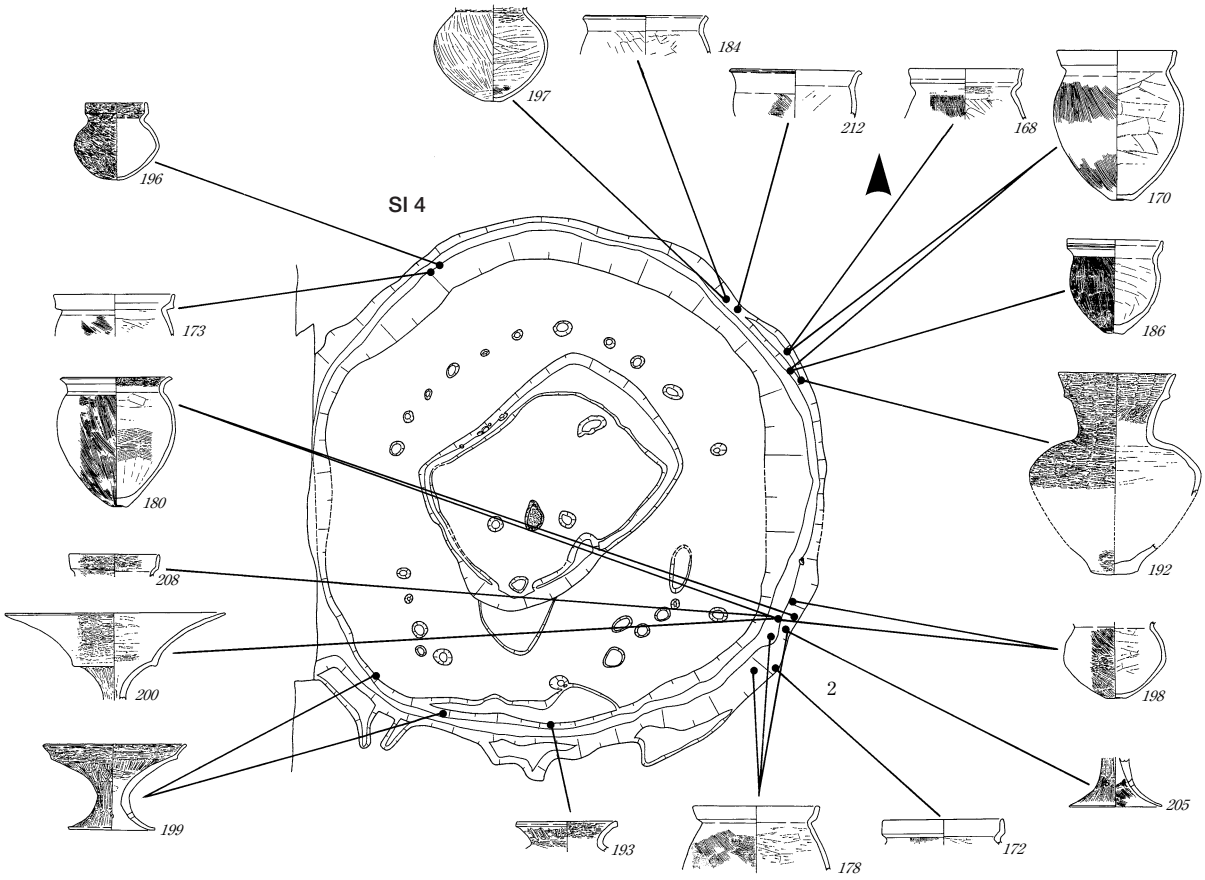


第25図　遺構実測図　(1/40・1/100)
A８地区　ＳＩ４

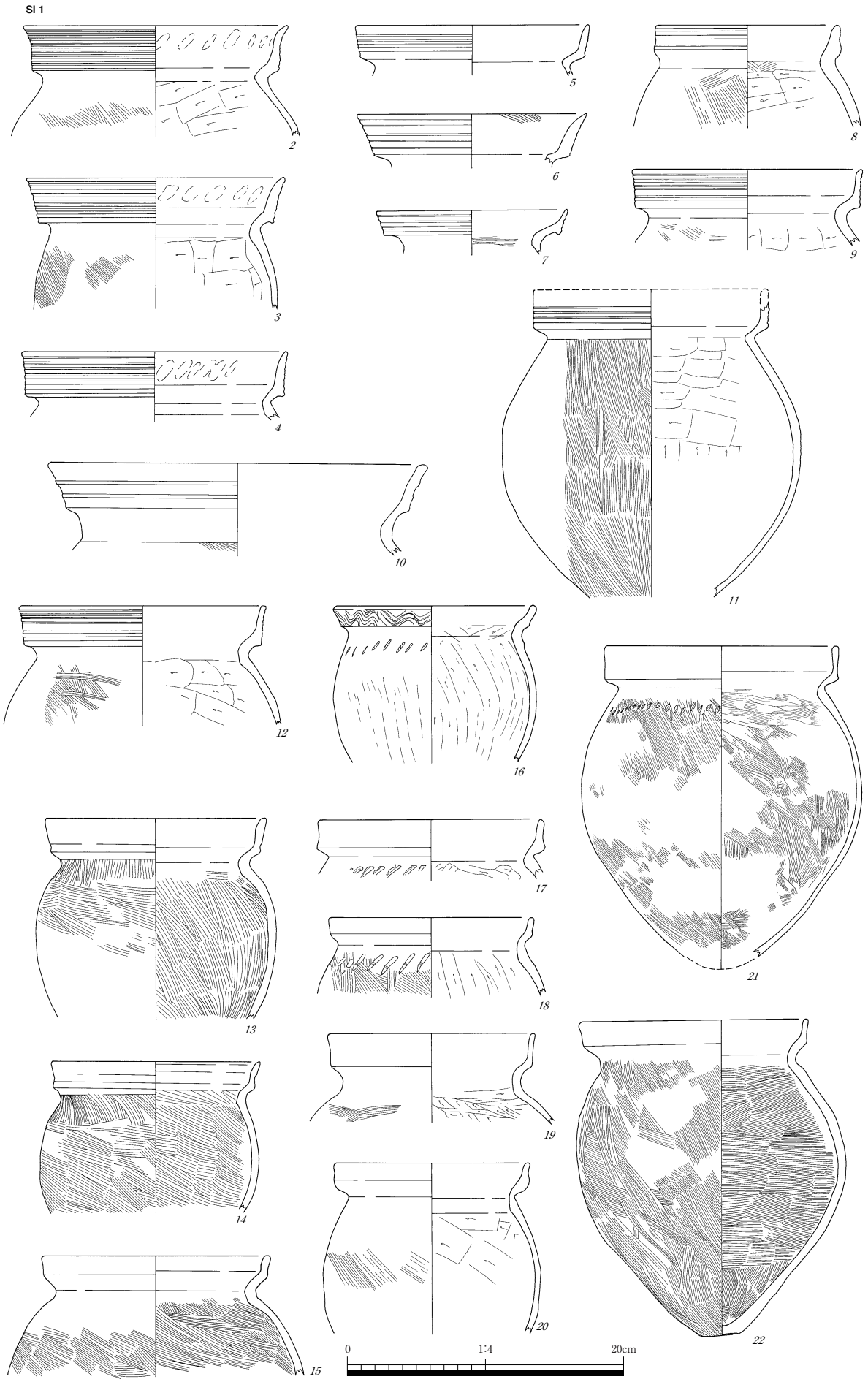


第26図　遺構実測図　(1/40)
A８地区　ＳＩ４

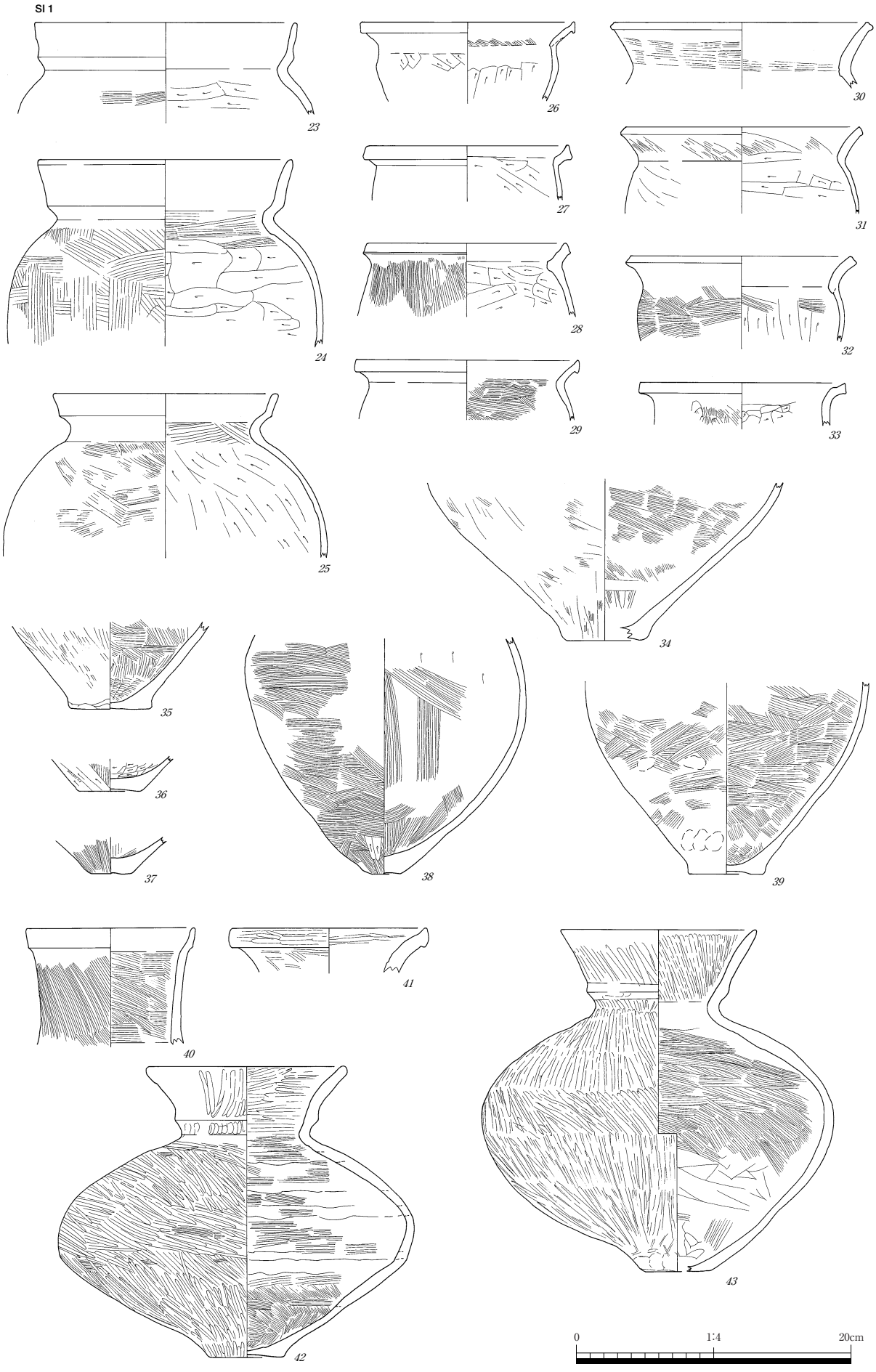




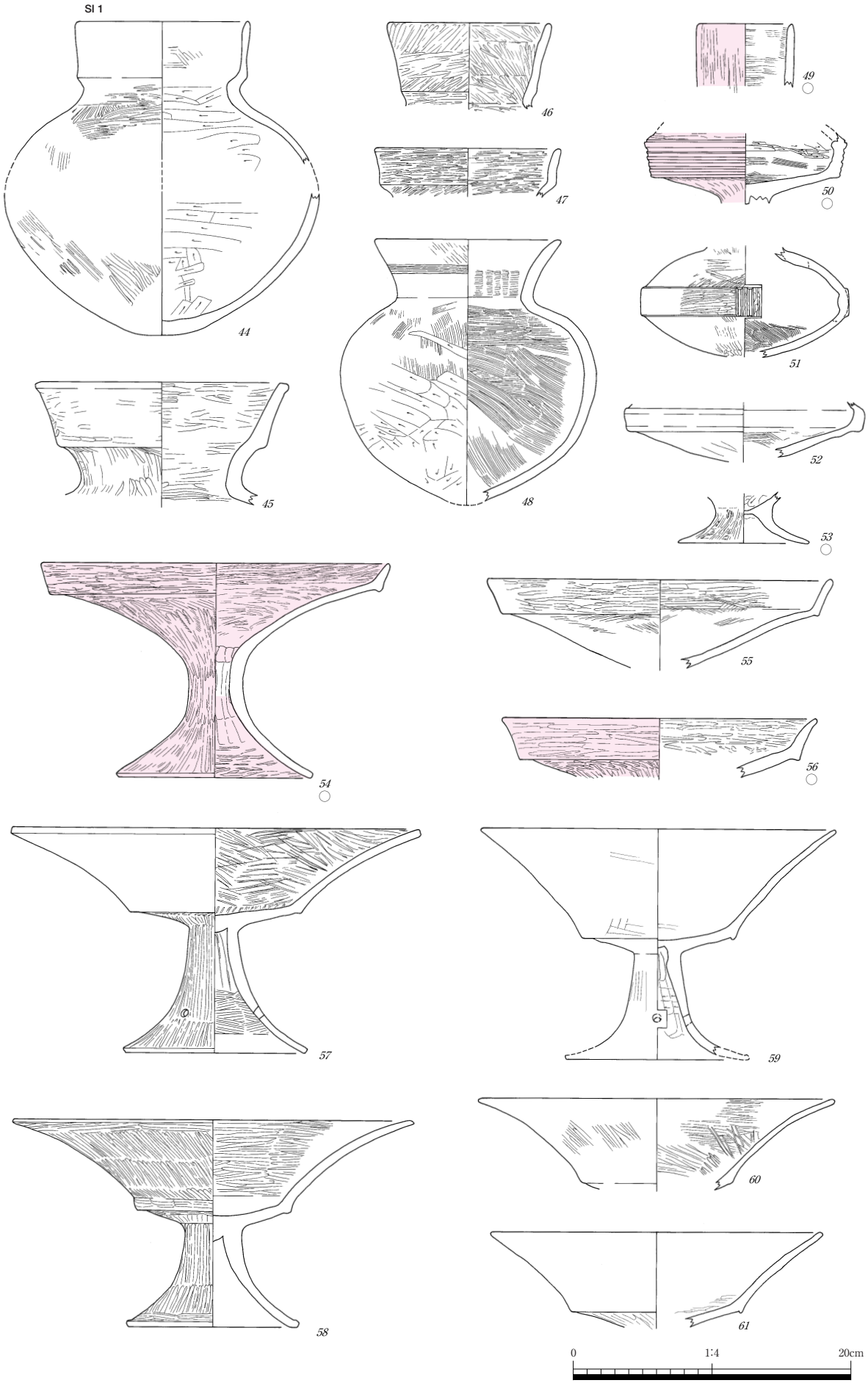
第27図　遺構実測図　(1/160・1/10)
1.A７地区　ＳＩ３　2.A８地区　ＳＩ４



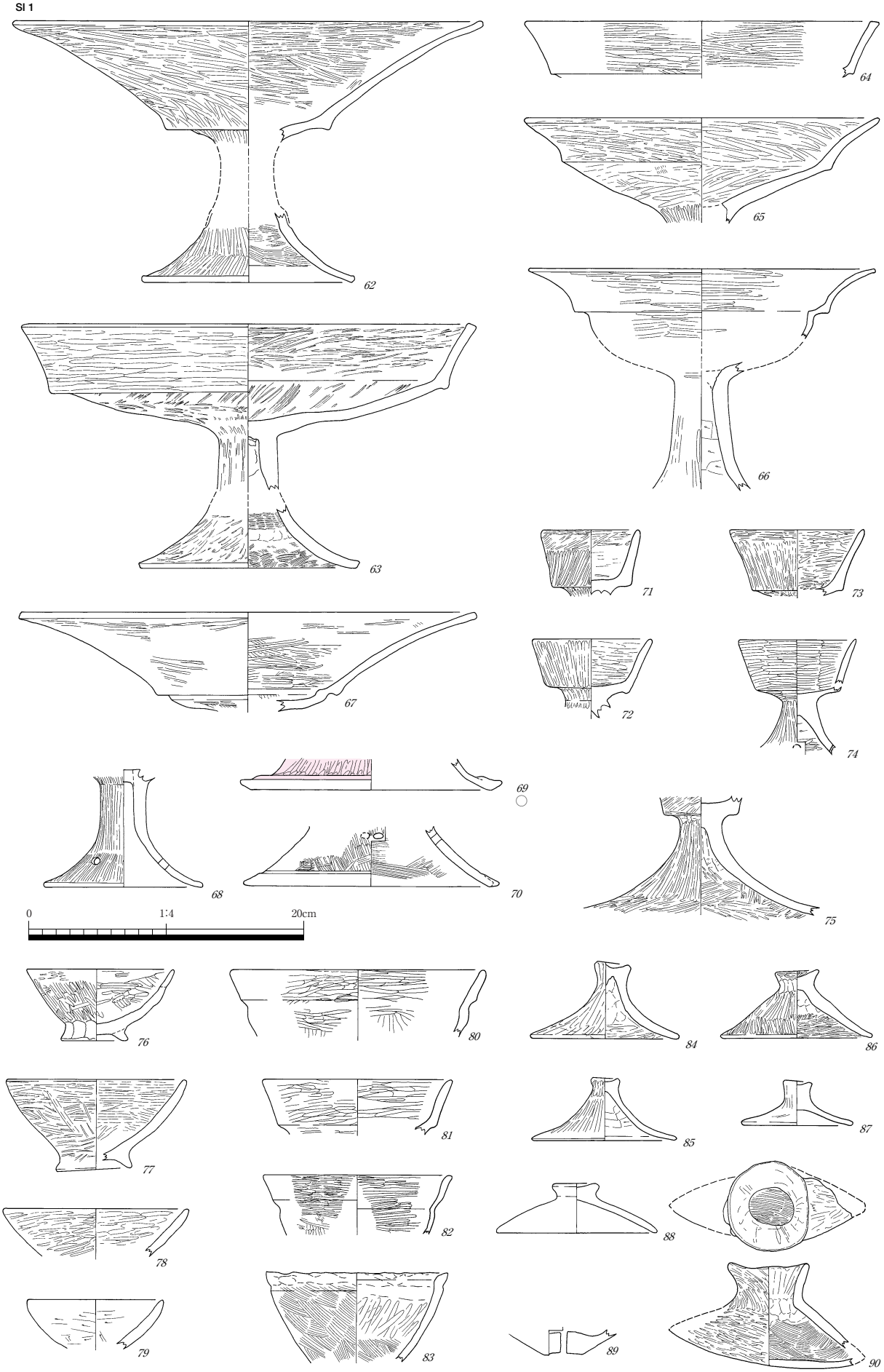
第28図　遺物実測図　(1/4)
Ａ７地区　ＳＩ１



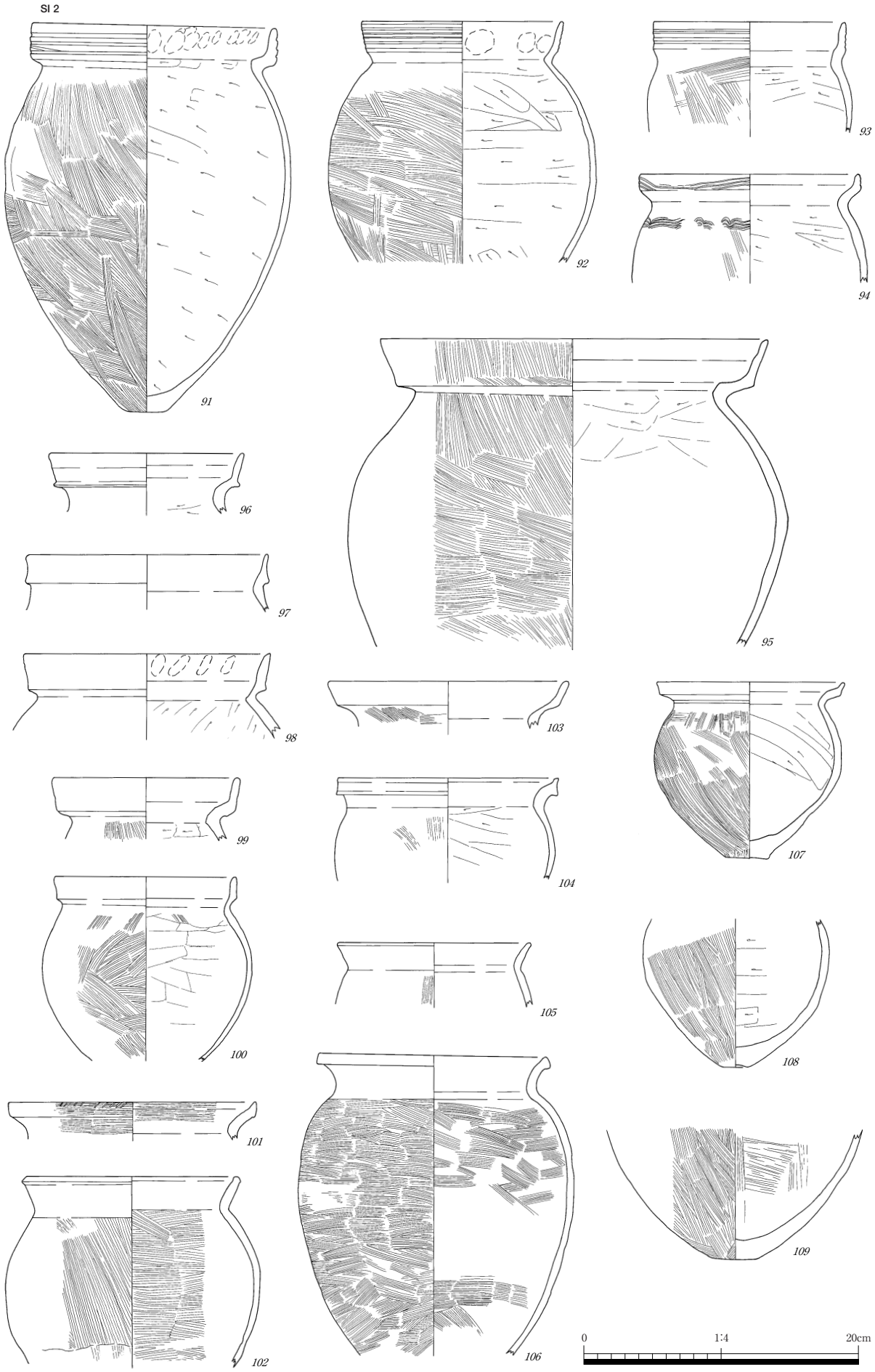
第29図　遺物実測図　(1/4)
A７地区　ＳＩ１



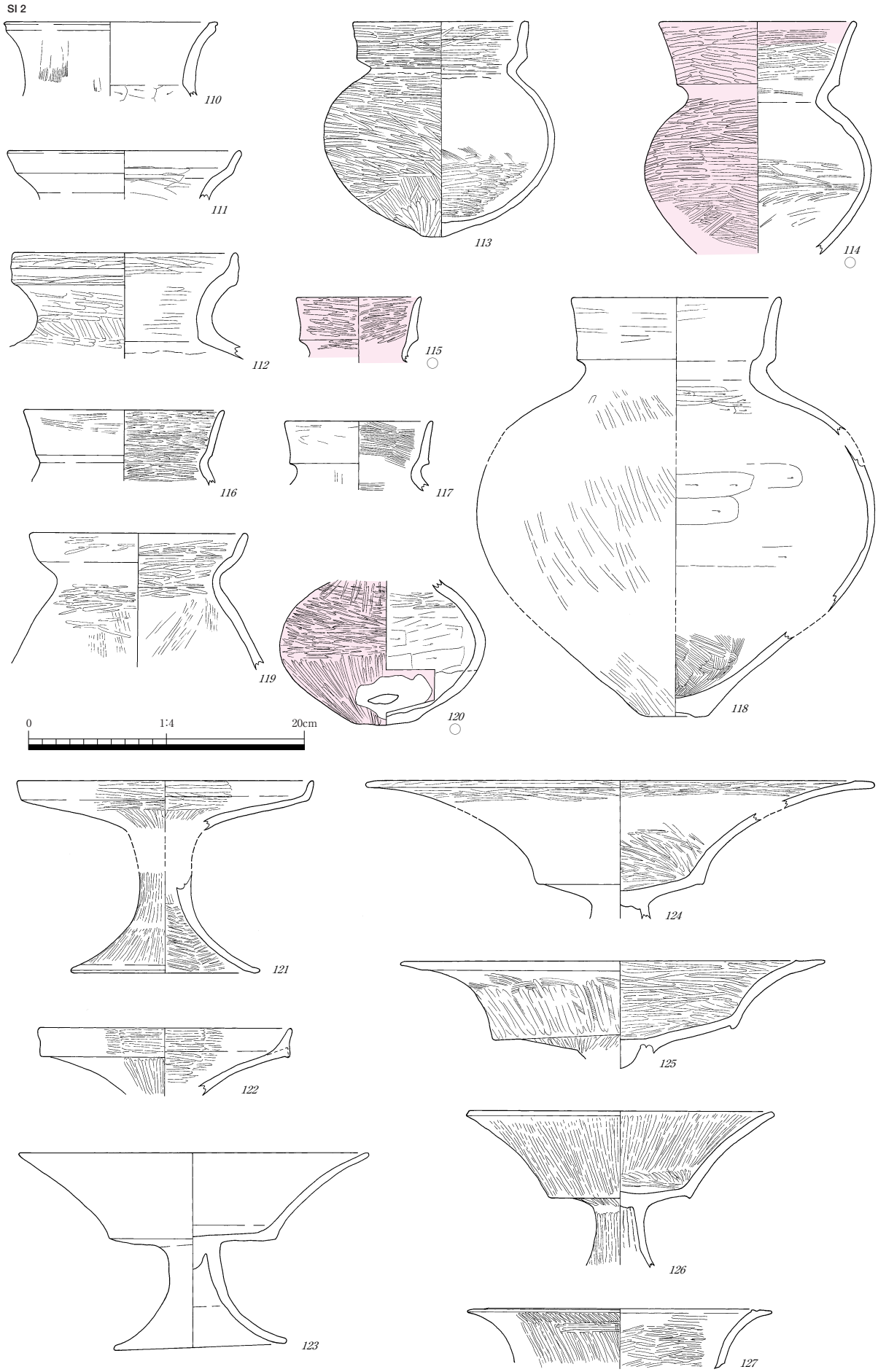
第30図　遺物実測図　(1/4)
Ａ７地区　ＳＩ１



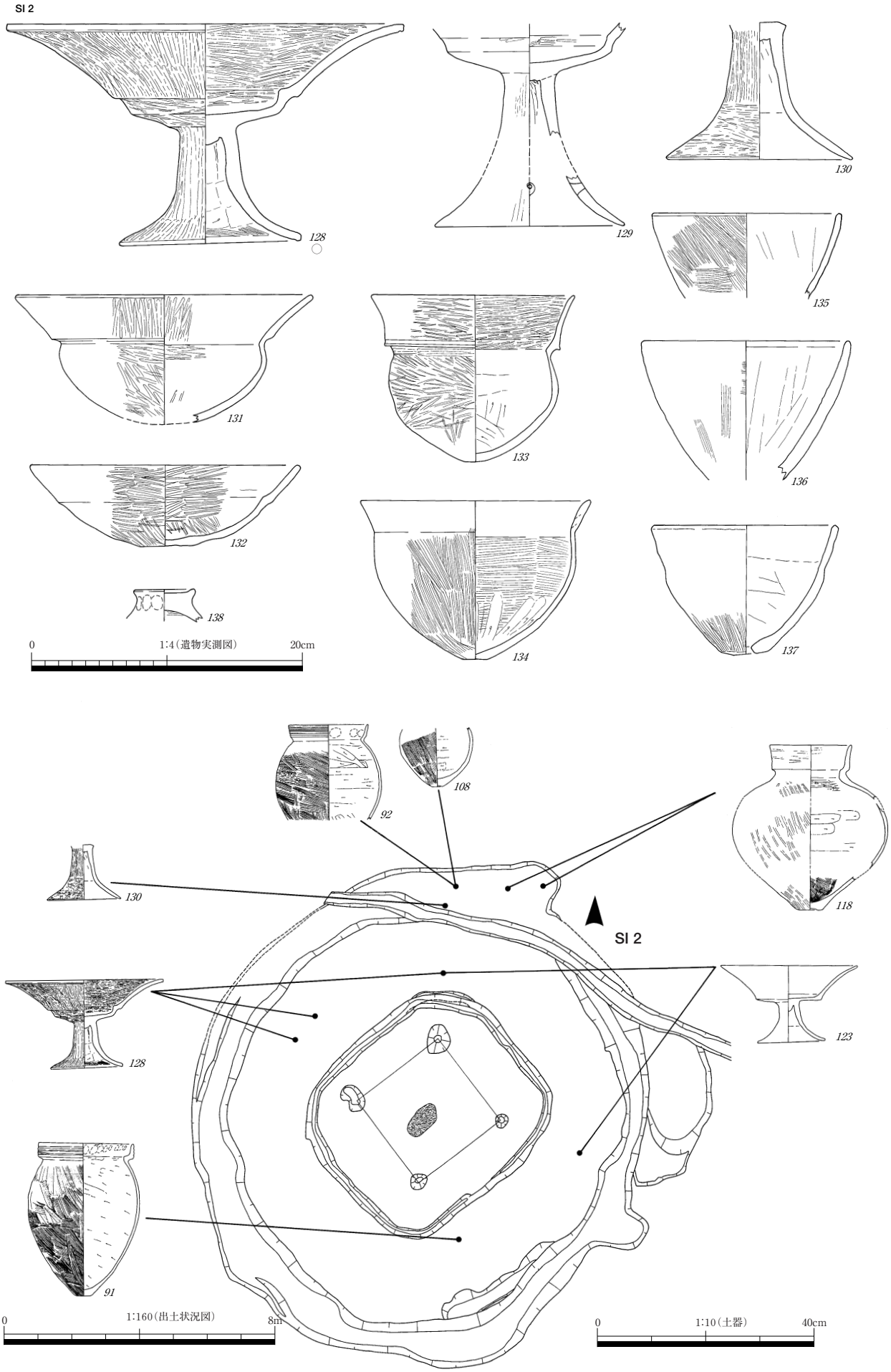
第31図　遺物実測図　(1/4)
A７地区　ＳＩ１



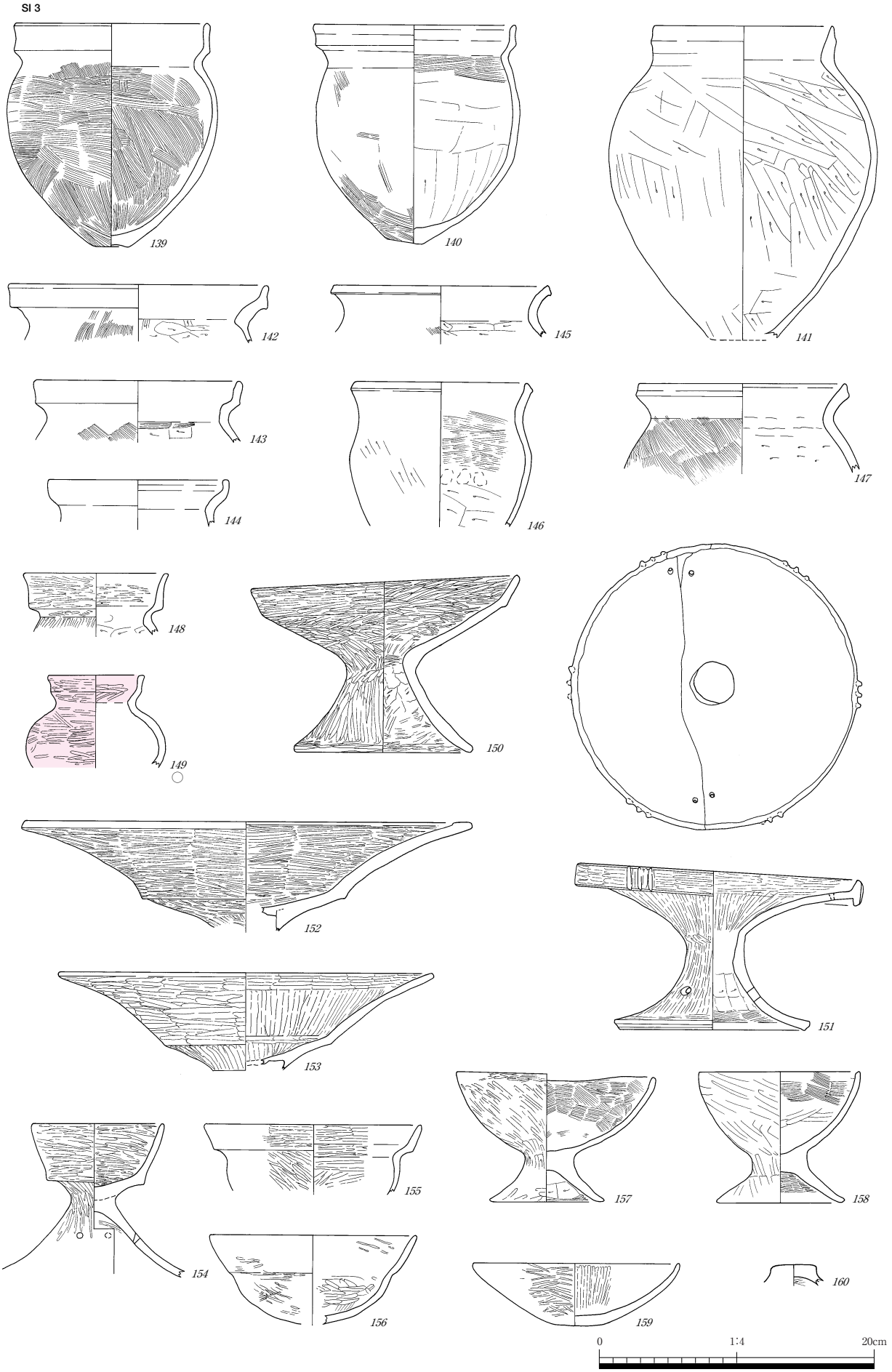
第32図　遺物実測図　(1/4)
Ａ７地区　ＳＩ２



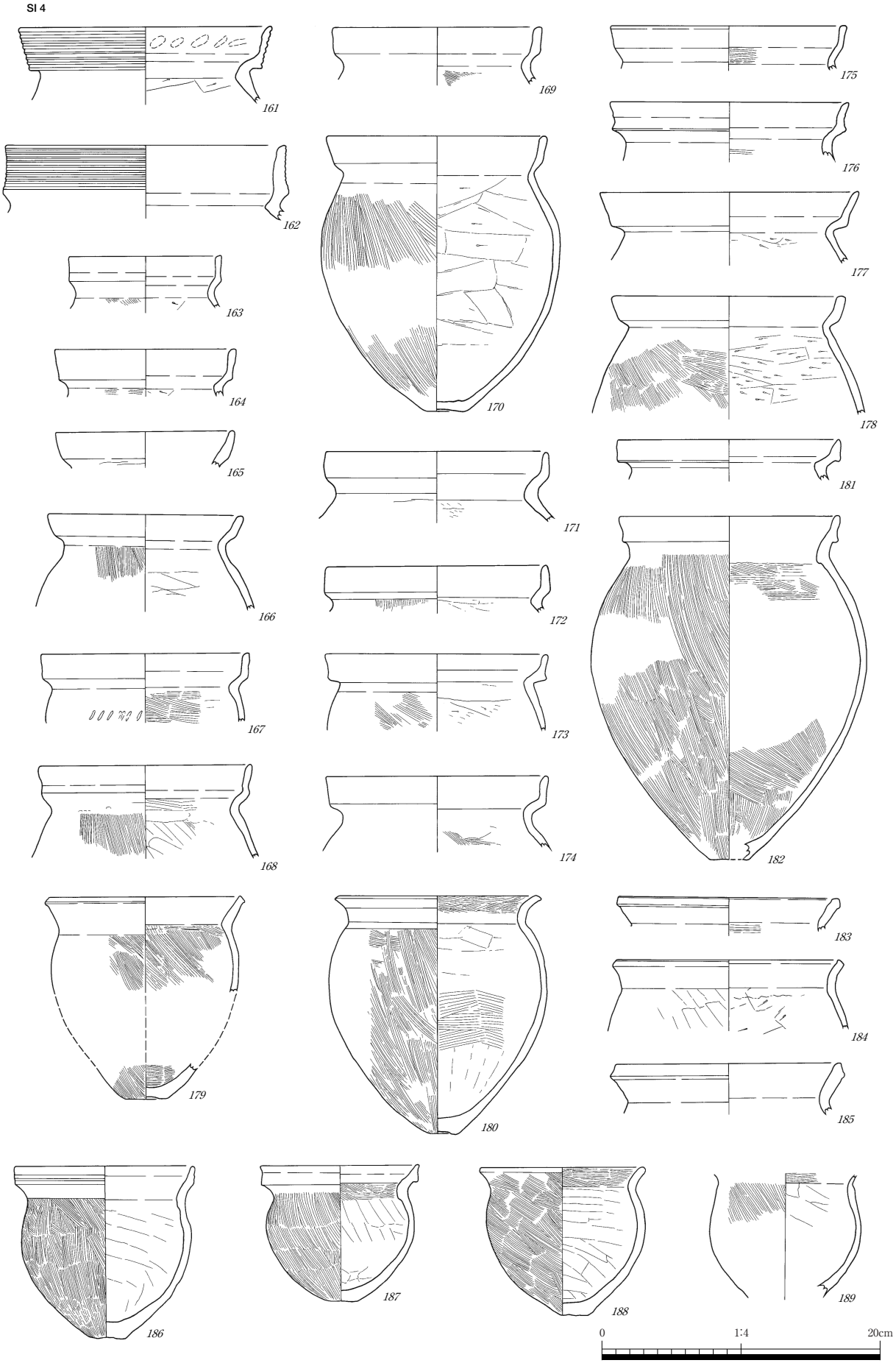
第33図　遺物実測図　(1/4)
A７地区　ＳＩ２



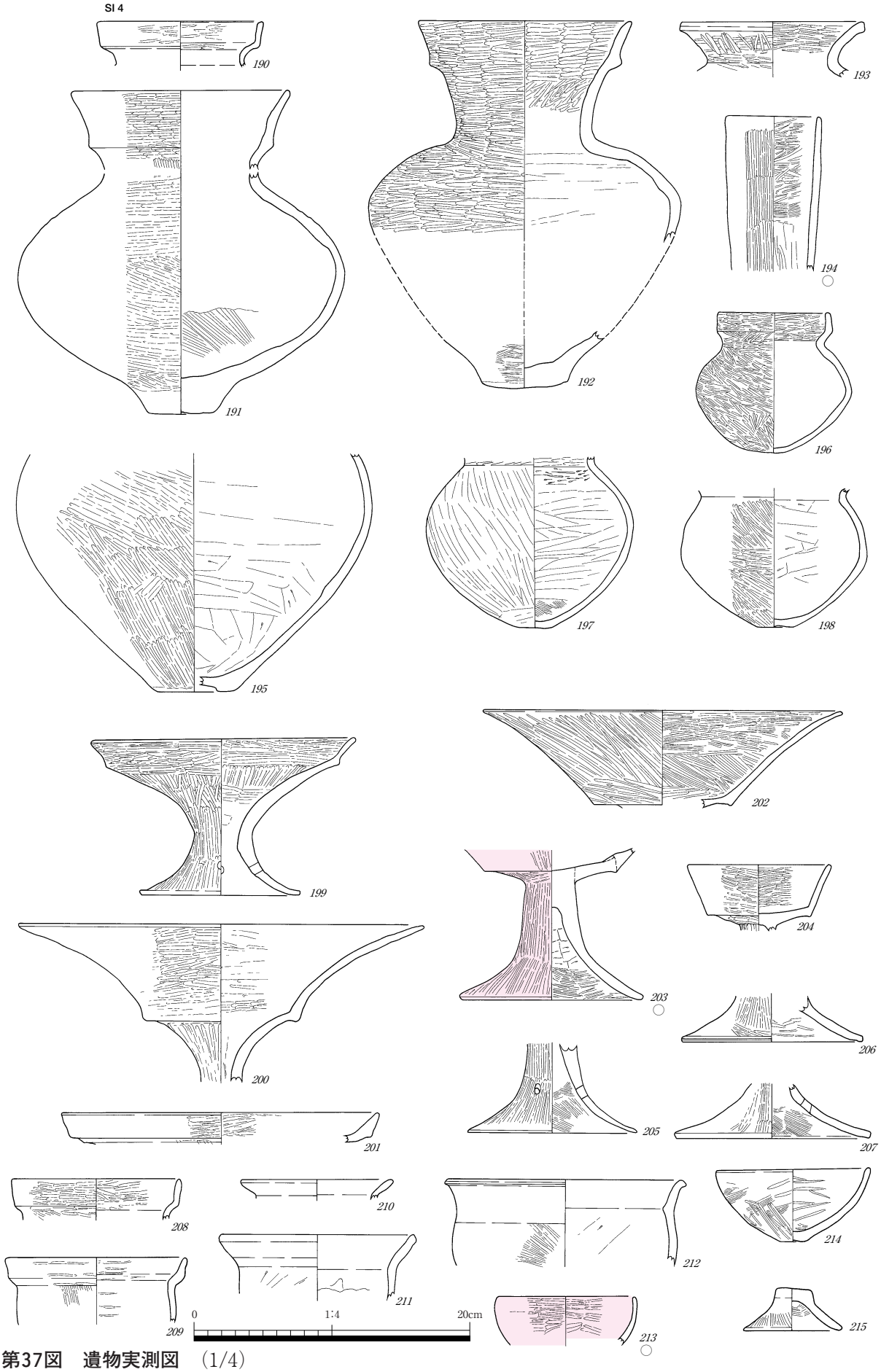
第34図　遺構・遺物実測図　(1/160，1/4・1/10)
A７地区　ＳＩ２



第35図　遺物実測図　(1/4)
A７地区　ＳＩ３



第36図　遺物実測図　(1/4)
Ａ８地区　ＳＩ４



第37図　遺物実測図　(1/4)
A８地区　ＳＩ４

第38図　遺物実測図　(*220～222*　1/1, *216～219*　1/3)
Ａ７・Ａ８地区　ＳＩ１(*218～222*)　ＳＩ４(*216・217*)

B　掘立柱建物

3号掘立柱建物（ＳＢ３，第39・41図，図版５・130）

ＳＢ３はＡ７地区ＳＩ２の約５m北東に位置する。桁行7.6m，梁行3.2mの４間×１間の掘立柱建物で，主軸はＮ－32°－Wである。柱穴は本来であれば10基存在するはずであるが，検出したのは７基であった。残存する柱穴の柱間は1.8～２mである。柱穴には黒褐色シルト質ロームが堆積し，深さは45～50cmと深いが，ＳＰ1818・1787はやや浅い。断ち割りで下層確認調査を行った結果，穴の底部には７基のうち５基に柱根の遺存が認められ，上部は腐食し基部のみが10～20cm残っていた。また，ＳＰ1788は断ち割り時に柱根が抜け落ちてしまったものであるが，断面には柱穴底部より柱根が沈んだ状態で検出された。この掘立柱建物は位置から考えて住居であるＳＩ２に付属する倉庫的な性格を有する建物と考えられる。遺物は柱根以外は埋土からの出土はない。

柱根はＳＰ1788（*224*），ＳＰ1814（*226*），ＳＰ1813（*225*），ＳＰ1815（*227*），ＳＰ1820（*228*）から出土した。木口は*224*が２方向，*225*・*226*は３方向，*227*は４方向から加工して，ほぼ平坦な面を作る。樹種は*224*・*227*・*228*がコナラ節，*226*はクヌギ節，*225*はクリ。

4号掘立柱建物（ＳＢ４，第39図，図版５）

ＳＩ３の北側約３mに位置する２間×１間の掘立柱建物で，桁行4.4m，梁行2.8m，主軸方向はＮ－58°－Wである。ＳＢ３よりも大きく西に振れる。検出した柱穴は４基で，ＳＢ３のように柱根の遺存は認められず，柱根痕跡も明確には認められなかった。この建物は位置から考えてＳＩ１または，ＳＩ３に伴うものと考えられるが，ＳＩ１とＳＩ３は切り合い関係があるものの，建物規模や排水施設の利用の仕方が似ていることから，あまり時期差の無い切り合い関係と考えられ，両者に利用された施設とも考えられる。遺物はＳＰ1763・1769から弥生土器片が出土している。

5号掘立柱建物（ＳＢ５，第40・41図，図版５）

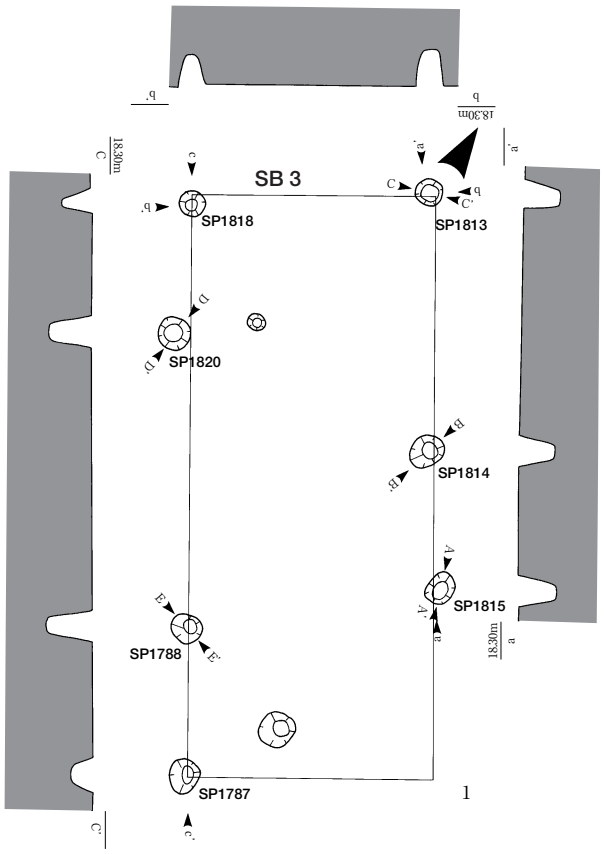
ＳＩ４の北側約５mに位置する２間×１間の掘立柱建物である。桁行3.9m，梁行2.6mで主軸方向はＮ－70°－Wである。柱穴掘形は深さ平均40cmと深くしっかりしているが，断面に柱根痕跡を残すものはなく，埋土は暗灰黄色シルトの単層である。浅い落ち込み状の遺構のＳＫ2134・2135と重複するが，柱穴はいずれもこの床面で検出している。なお，梁の中央線上にＳＰ2130があり棟持ち柱の可能性がある。ＳＩ４との位置関係からこれに関係する倉庫の役割をもつ建物と考えられる。

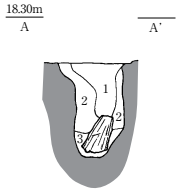
出土遺物は弥生土器のみである。*223*はＳＰ2130から出土した擬凹線甕。口縁は有段部が内湾気味で，端部は丸い。

6号掘立柱建物（ＳＢ６，第40・42図，図版５・131）

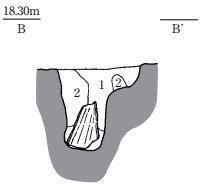
ＳＢ５の東側，ＳＨ２と重複して検出した１間×１間の掘立柱建物である。桁行3.6m，梁行1.9mと柱間が大きく異なる。主軸方向はＮ－89°－Wとほぼ北から直角に振れる。４基の柱穴にはすべて柱根が遺存しており，遺構検出時の段階で先端が確認されるものもあった。柱穴掘形には上面に暗灰黄色シルト，下層に黒褐色砂が堆積しており，柱根は柱穴底部から約20cmも沈んだ状態で検出されている。周囲には竪穴建物は検出されておらず，ＳＢ５との新旧関係は不明である。ＳＨ４・５に付属する建物とも考えられる。また，重複するＳＨ２・３との新旧関係は不明である。

柱根はＳＰ2121（*229*），ＳＰ2178（*230*），ＳＰ2181（*231*），ＳＰ2191（*232*）から出土した。木口は３ないしは４方向から斜めに切り落とされ，伐採時のまま再加工されていない。樹種は*229*・*231*がクヌギ節，*230*・*232*がコナラ節。

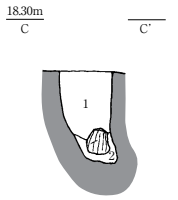




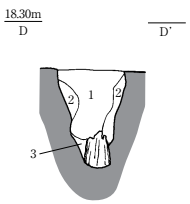
SP1815
1. 2.5Y3/1黒褐色粘土質ローム
2. 5Y6/4オリーブ黄色砂質ローム
（2.5Y3/1黒褐色粘土質ローム50%混）
3. 2.5Y3/1黒褐色砂質ローム
（5Y4/1灰色砂20%混,植物質5%混）



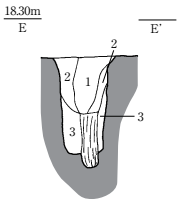
SP1814
1. 2.5Y3/1黒褐色シルト質ローム
2. 2.5Y3/1黒褐色シルト質ローム
（5Y6/4オリーブ黄色シルト10%ブロック状に混）
3. 2.5Y3/1黒褐色砂質ローム
（5Y4/1灰色砂10%混,植物質7%混）



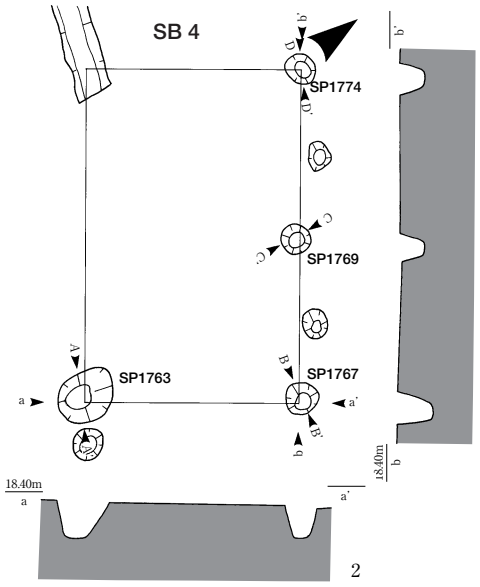
SP1813
1. 2.5Y3/1黒褐色粘土質ローム
2. 5Y5/2灰オリーブ色砂
（2.5Y3/1黒褐色砂質ローム3%混）

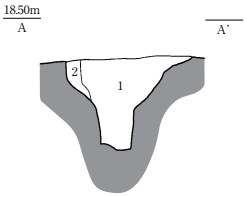


SP1820
1. 2.5Y3/1黒褐色粘土質ローム
2. 2.5Y3/1黒褐色粘土質ローム
（5Y6/4オリーブ黄色砂質ローム50%混）
3. 5Y4/1灰色シルト質ローム
（5Y4/1灰色砂15%混,植物質10%混）

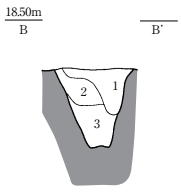


SP1788
1. 2.5Y3/2黒褐色シルト質ローム
2. 2.5Y3/2黒褐色シルト質ローム（5Y6/4オリーブ黄色シルト5%混）
3. 5Y3/1オリーブ黒色シルト質ローム（5Y4/1灰色砂15%混,植物質10%混）

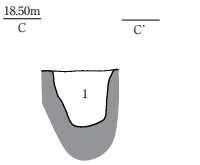




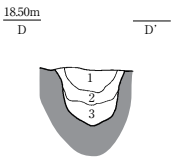
SP1763
1. 2.5Y3/2黒褐色粘土質ローム
（5Y6/4オリーブ黄色シルト3%ブロック状に混）
2. 2.5Y3/2黒褐色粘土質ローム
（5Y6/4オリーブ黄色シルト5%ブロック状に混）



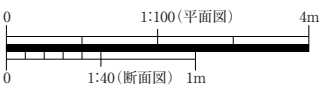
SP1767
1. 2.5Y3/2黒褐色シルト質ローム
2. 5Y6/4オリーブ黄色シルト
（2.5Y3/2黒褐色シルト質ローム3%ブロック状に混）
3. 2.5Y3/2黒褐色粘土質ローム
（5Y6/4オリーブ黄色シルト3%ブロック状に混）



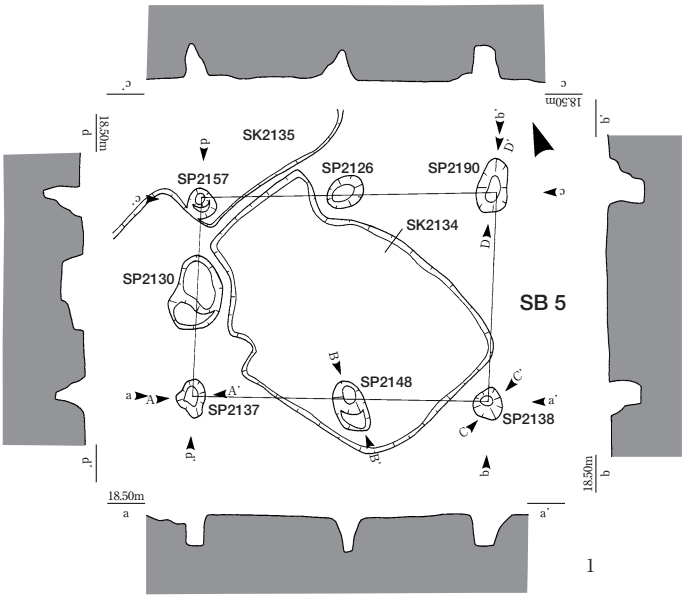
SP1769
1. 2.5Y3/1黒褐色シルト質ローム
（5Y6/4オリーブ黄色シルト50%混）



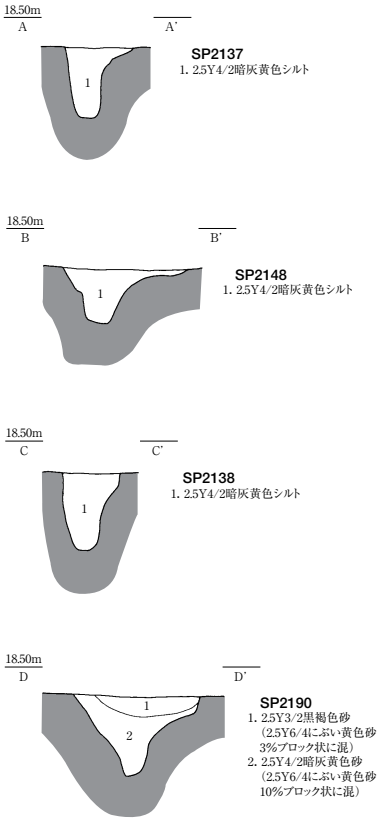
SP1774
1. 2.5Y3/2黒褐色シルト質ローム
（5Y6/4オリーブ黄色シルト5%ブロック状に混）
2. 5Y6/4オリーブ黄色シルト
（2.5Y3/2黒褐色シルト質ローム5%混）
3. 2.5Y3/2黒褐色シルト質ローム
（5Y6/4オリーブ黄色砂5%混）

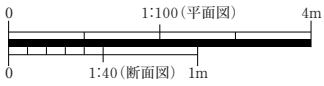


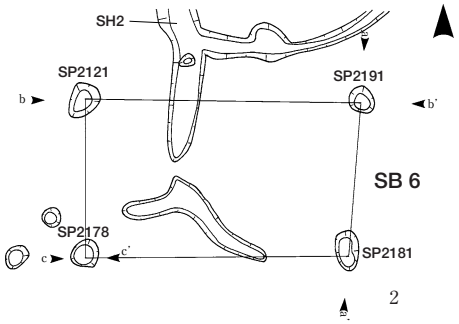
第39図　遺構実測図（1/40・1/100）
Ａ７地区　1.ＳＢ３　2.ＳＢ４



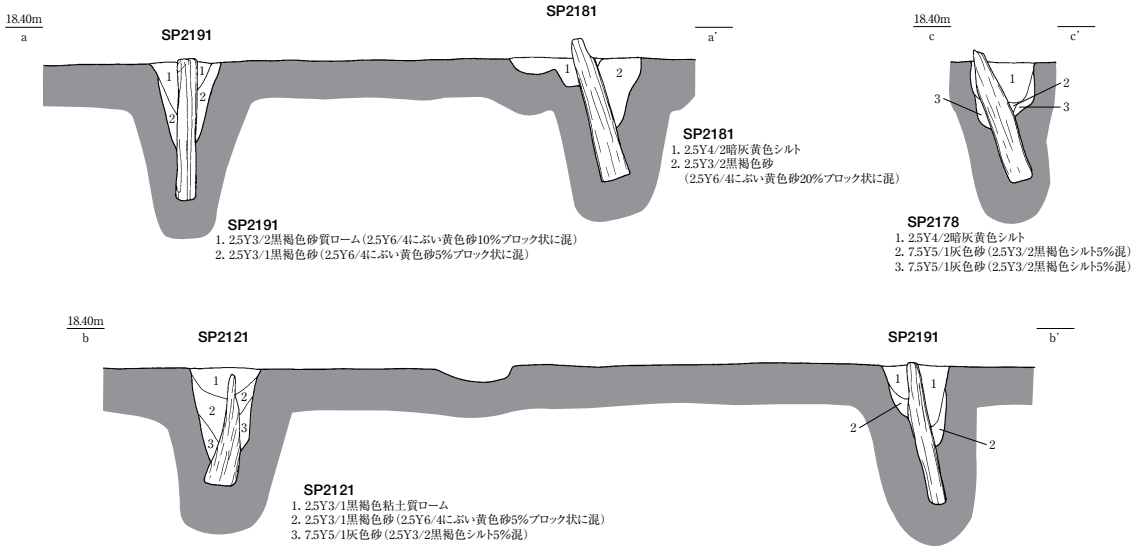
1



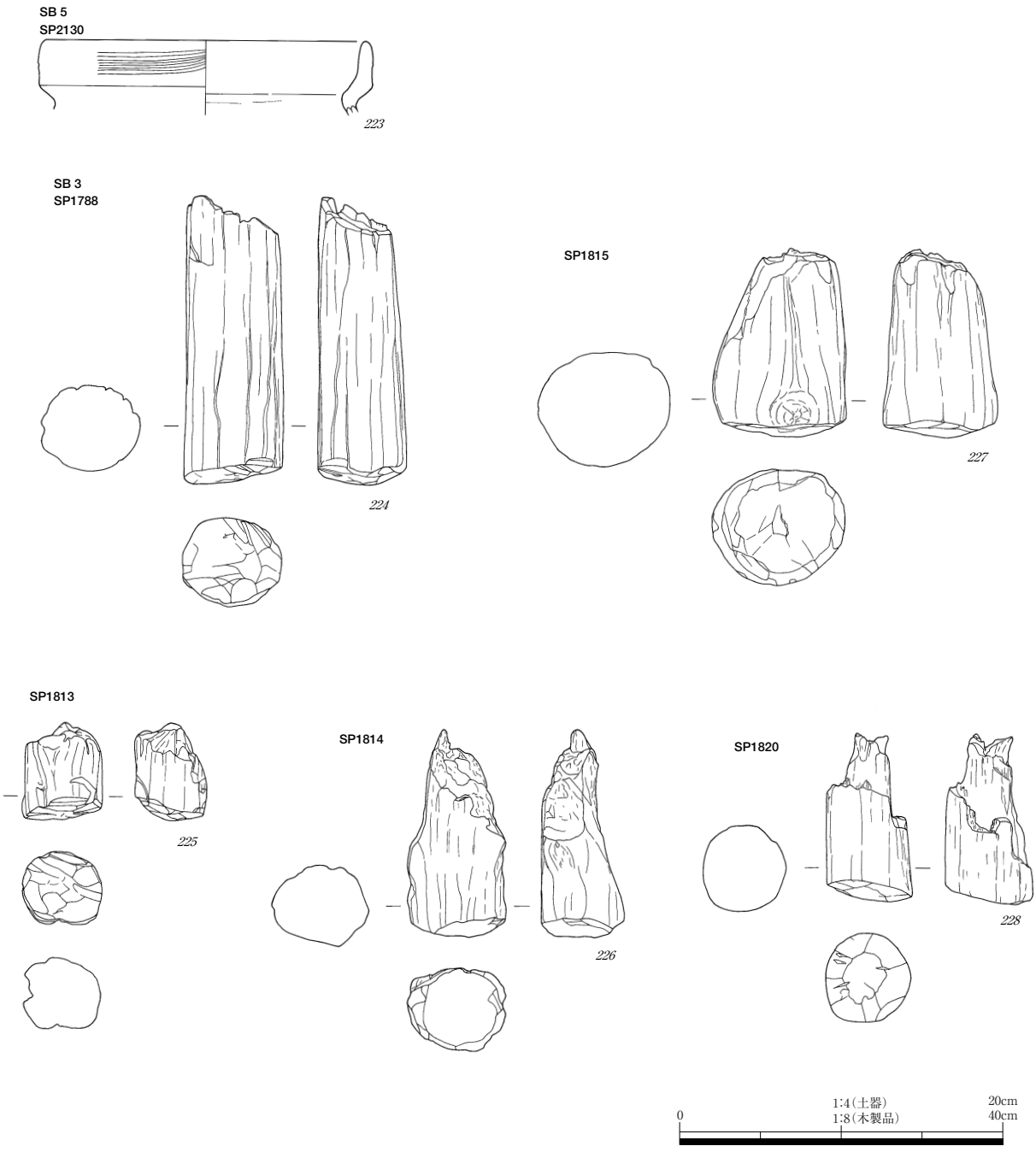




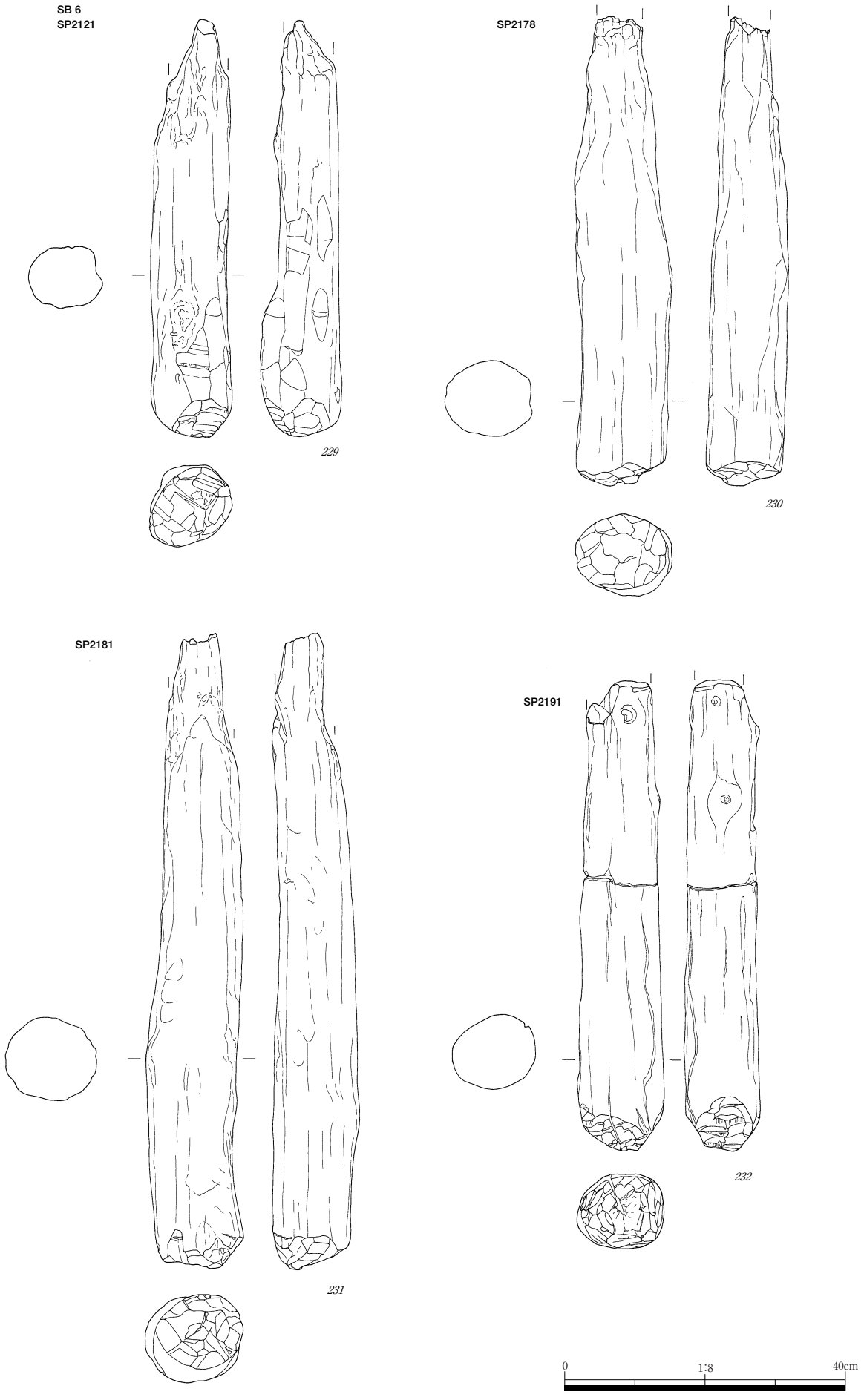
2



第40図　遺構実測図　(1/40・1/100)
A8地区　1.SB5　2.SB6



第41図　遺物実測図　(*223*　1/4, *224*～*228*　1/8)
Ａ７・Ａ８地区　ＳＢ3　ＳＰ1788(*224*)　ＳＰ1813(*225*)　ＳＰ1814(*226*)　ＳＰ1815(*227*)
ＳＰ1820(*228*)　ＳＢ5　ＳＰ2130(*223*)



第42図　遺物実測図　(1/8)
A８地区　ＳＢ６　ＳＰ2121(*229*)　ＳＰ2178(*230*)　ＳＰ2181(*231*)　ＳＰ2191(*232*)

C　周溝遺構

1号周溝遺構（ＳＨ1，第43図，図版７）

Ａ８地区ＳＩ４の北側で検出した，溝が長方形に巡る周溝遺構。長軸は3.35m，短軸は3.15m，溝の幅は25㎝，深さは10㎝である。内部を断ち割りした結果，深さ平均約10㎝において土層の荒れが認められた。内部を整地した痕跡とも考えられる。遺物の出土はない。

2・3号周溝遺構（ＳＨ2・ＳＨ3，第44図，図版７）

Ａ８地区ＳＨ４の南で検出した周溝遺構。ＳＨ２は長軸約5.5m，短軸5.4mのほぼ正方形を呈していたと思われるが，南側と西側は一部を検出したのみで大半を欠損する。ＳＨ３との切り合いは不明だが，断面観察からはＳＨ２が新しいと考えられる。ＳＨ３は直径約3.7mの円形を呈していたと思われる周溝遺構で，幅約10㎝，深さ５㎝の暗灰黄色シルトが堆積する溝が巡る。遺物の出土はない。

4号周溝遺構（ＳＨ４，第44図，図版７）

Ａ８地区中央東側で検出した，溝が方形に巡る周溝遺構で，北西隅が途切れる。一辺約3.15mの正方形を呈し，主軸はＮ－７°－Ｗとわずかに西に振れる。周溝の幅は約25㎝で，深さは約12㎝，埋土には黒褐色粘土質ロームが堆積し，他の周溝遺構とは土色が異なり，プランが明確である。周溝は内部を整地したあと掘削されたことが断ち割り断面より推定される。遺物の出土はない。

5号周溝遺構（ＳＨ５，第46・47図，図版７・50・51・154）

Ａ８地区中央で検出した長方形を呈する周溝遺構。周溝の規模は長軸5.1m，短軸4.4mで，主軸はＮ－23°－Ｗである。近い主軸方向を示すものとしてはＳＨ２・ＳＨ10がある。上面には５～６㎝の厚さで炭化物が混じる黒褐色シルトが均一に堆積する。この土の堆積は西側と北側と南側の一部において周溝より外側にまで広がっている。この周溝遺構は四隅が角張っている点がＳＨ８と似ており，上面に黒褐色シルトが堆積することはＳＨ６と共通点がある。

出土遺物には弥生土器・軽石がある。弥生土器には甕，壺，高杯，鉢がある。*233* は甕で，突出した底部に倒卵形の胴部が付く。*234*・*235* は有段壺。*235* は扁平な胴部に直立する有段口縁が付く。*236* は肥厚する口縁端部で，盤状高杯と考えられる。*237* は無頸鉢で，上底に内湾する体部が付く。*240* は軽石。表面は研磨されており平坦面がみられる。側面は一部に幅１㎜以下の細かい線状痕がみられる。砥石として利用されたものであろうか。

6号・7号周溝遺構（ＳＨ６・ＳＨ７，第43図，図版７）

Ａ８地区ＳＩ４の北側で重複して検出した周溝遺構。両者の切り合い関係は不明である。ＳＩ４はⅣｂ層上面で検出したのに対し，これらはⅤ層上面で検出している。北西で重複するＳＨ１にはＳＨ７は切り合いで負ける。規模はＳＨ６は長軸約４m，短軸約３mの長方形，ＳＨ７はやや大きく長軸約4.8m，短軸約3.5mである。主軸方向はＳＨ６がＮ－７°－Ｗ，ＳＨ７はより大きく振れてＮ－30°－Ｗである。周溝には５㎝前後の暗灰黄色シルトが堆積し，溝の内側には薄く黒褐色砂質ロームの堆積が認められた。整地した痕跡かとも考えられる。遺物の出土はない。

8号周溝遺構（ＳＨ８，第45・47図，図版７・50）

Ａ８地区ＳＤ1826の北側で検出した周溝遺構。ＳＨ９との切り合いは不明である。平面形は四隅が角張った長方形を呈し，長軸5.7m，短軸4.7mを測る。周溝は幅40～50㎝，深さは10㎝を測る。溝の底部は東側と南側は平坦であるが，北側と西側の一部に直径20～30㎝の小穴を確認している。これらは周溝に壁状のものを建てる際に使用された材の跡の可能性もある。主軸方向はＳＨ７とよく似ている。出土遺物は弥生土器のみである。*238* は有段甕で，有段部が直立し，口縁端部が尖る。*239* は甕

の底部で，底面は尖る。

9号周溝遺構（ＳＨ９，第45図，図版７）

Ａ８地区に位置する，長軸4.9m，短軸4.75mのやや不整形な隅丸方形の周溝遺構である。重複するＳＤ1826より古い。周溝幅は約30㎝，深さは８㎝と浅い。周溝内部にはＳＨ８と同様暗灰黄色砂が無秩序に堆積しており，整地した跡と考えられる。主軸の方向はやや不整形なためはっきりしないが，北方向を向くＳＨ３・４・６と同じ群と考えている。遺物の出土はない。

10号周溝遺構（ＳＨ10，第46図，図版７）

Ａ８地区に位置し，周溝遺構の中で一番北に位置する遺構。この北側には区画の役割をもするＳＤ2102しか検出できず，この南側でも小型の土坑を散発的に検出したにすぎない。平面形は一辺約3.7ｍのほぼ正方形を呈し，主軸はＮ－25°－Ｗである。周溝は幅50㎝とやや幅広く，深さは10㎝である。内部には３～４㎝の厚さで暗灰黄色砂質ロームが水平に堆積する。

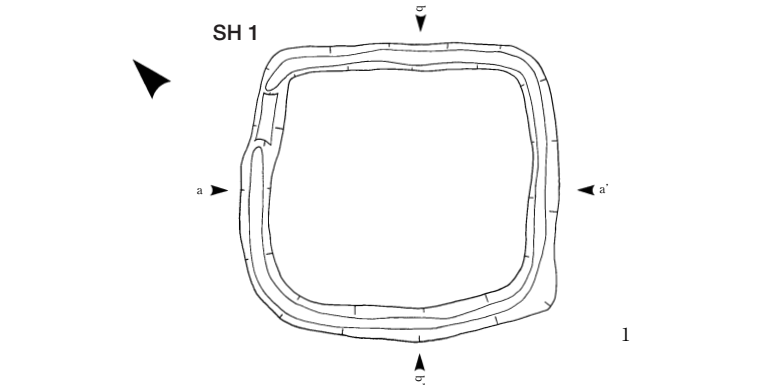
Ｄ　柵

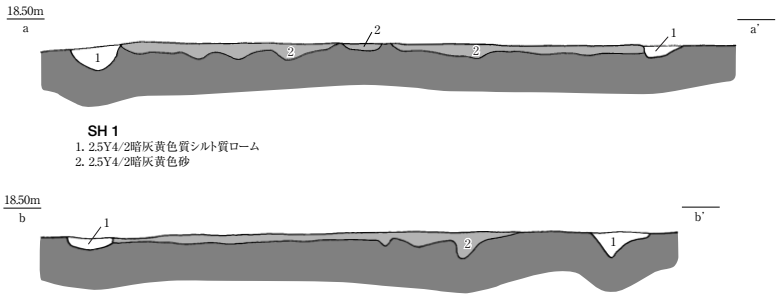
１号柵（ＳＡ１，第48図）

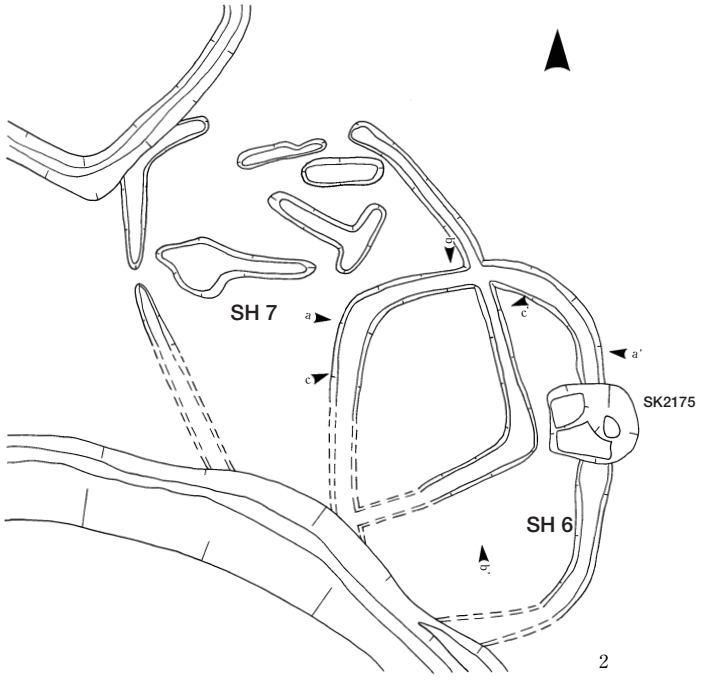
Ａ７地区ＳＩ１の周囲をコの字状に巡る溝である。ＳＩ１の周溝との間隔は約２ｍ，溝幅は約20㎝で深さは約５㎝と浅いものである。東側に向かって開放され，北側は一部試掘トレンチに切られているが，北西隅が開いている可能性がある。特に西側に対する境界を意識したものと考えられる。溝の底部は平坦で杭状のものを刺し並べたとは考えにくい。より簡易な垣根状の境界を示す施設ではなかったかと推定される。遺物は弥生土器が出土した。

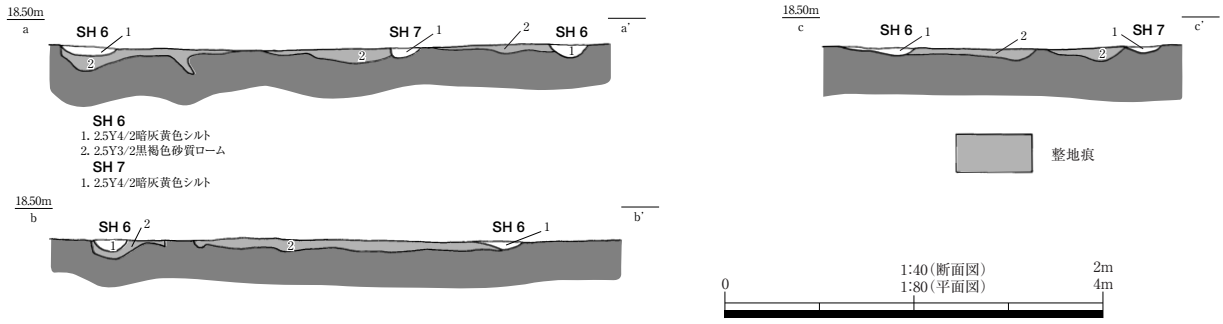
２号柵（ＳＡ２，第49図，図版８）

Ａ７・８地区の集落の南東部の境界を示す柵。東西に延びる谷地形との境に設けられものか。小穴が集まって溝状となっている。この柵は杭状のものが打ち込まれて柵を形成していた可能性がある。

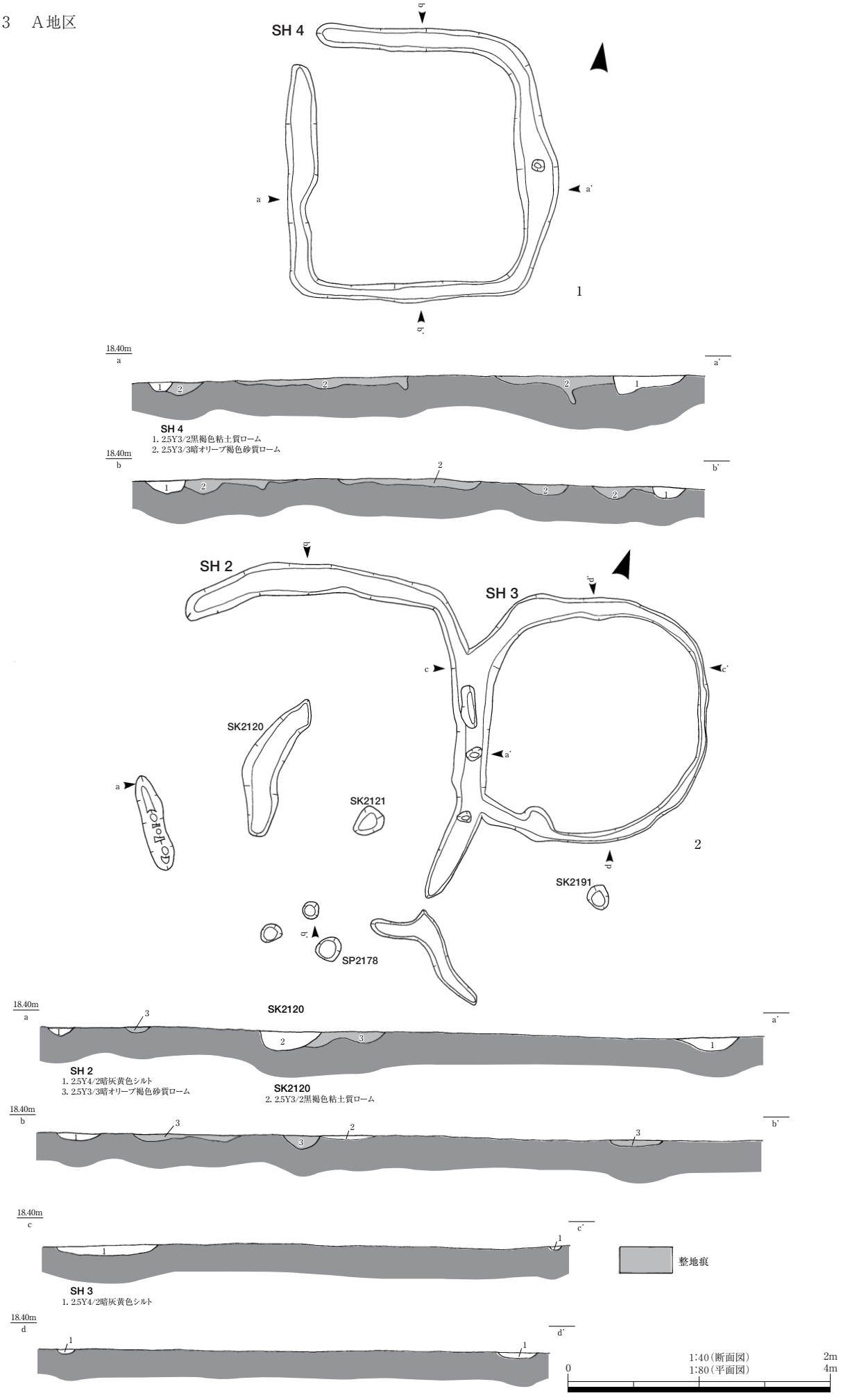




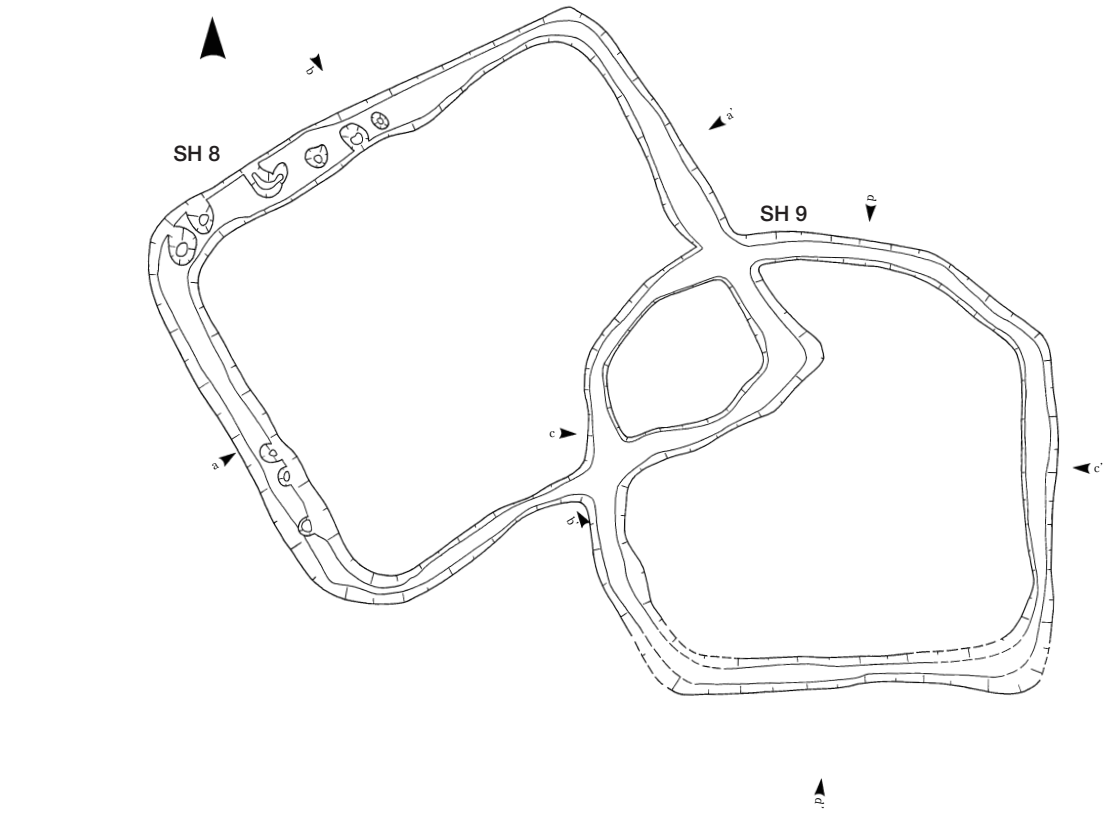


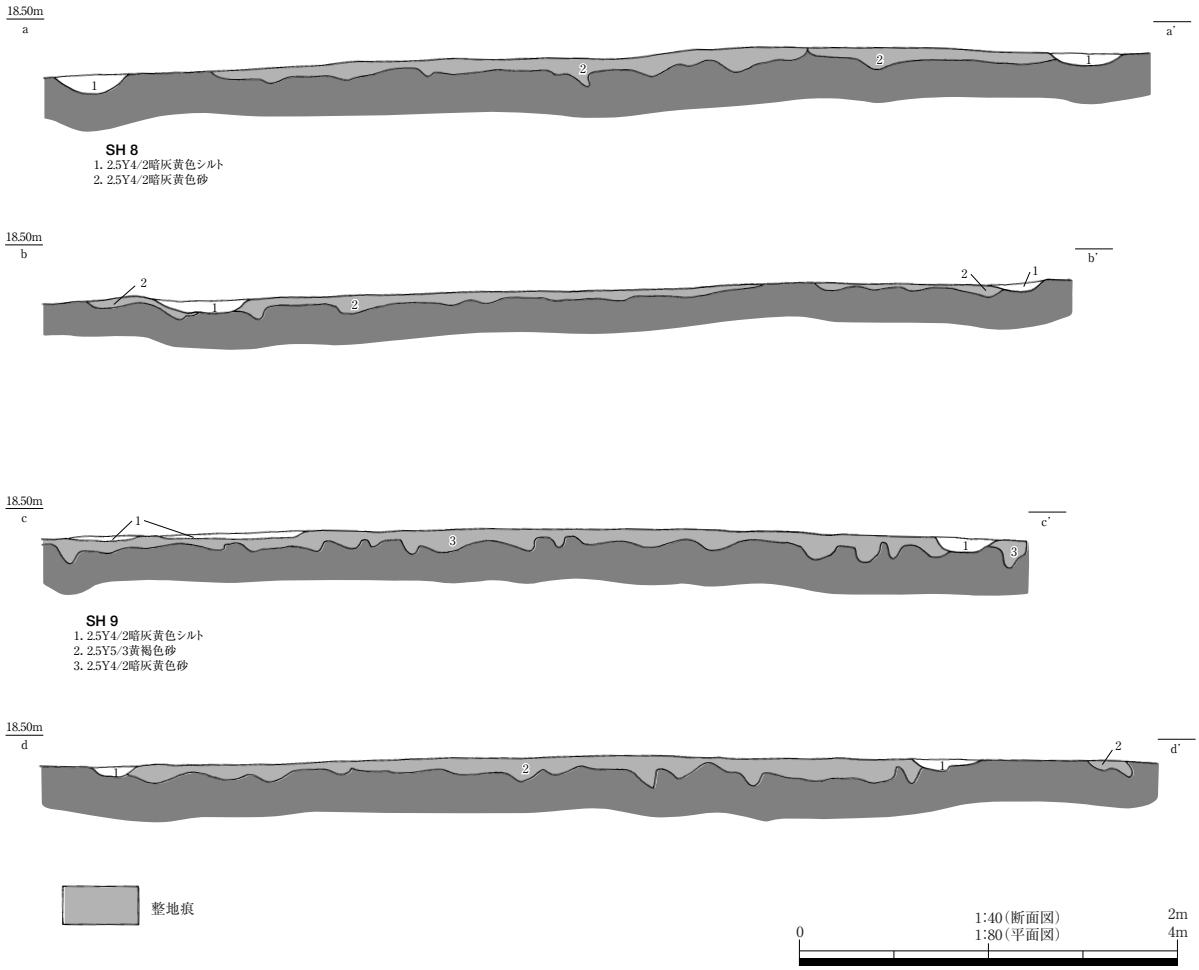


第43図　遺構実測図　(1/40・1/80)
Ａ８地区　１.ＳＨ１　２.ＳＨ６・ＳＨ７

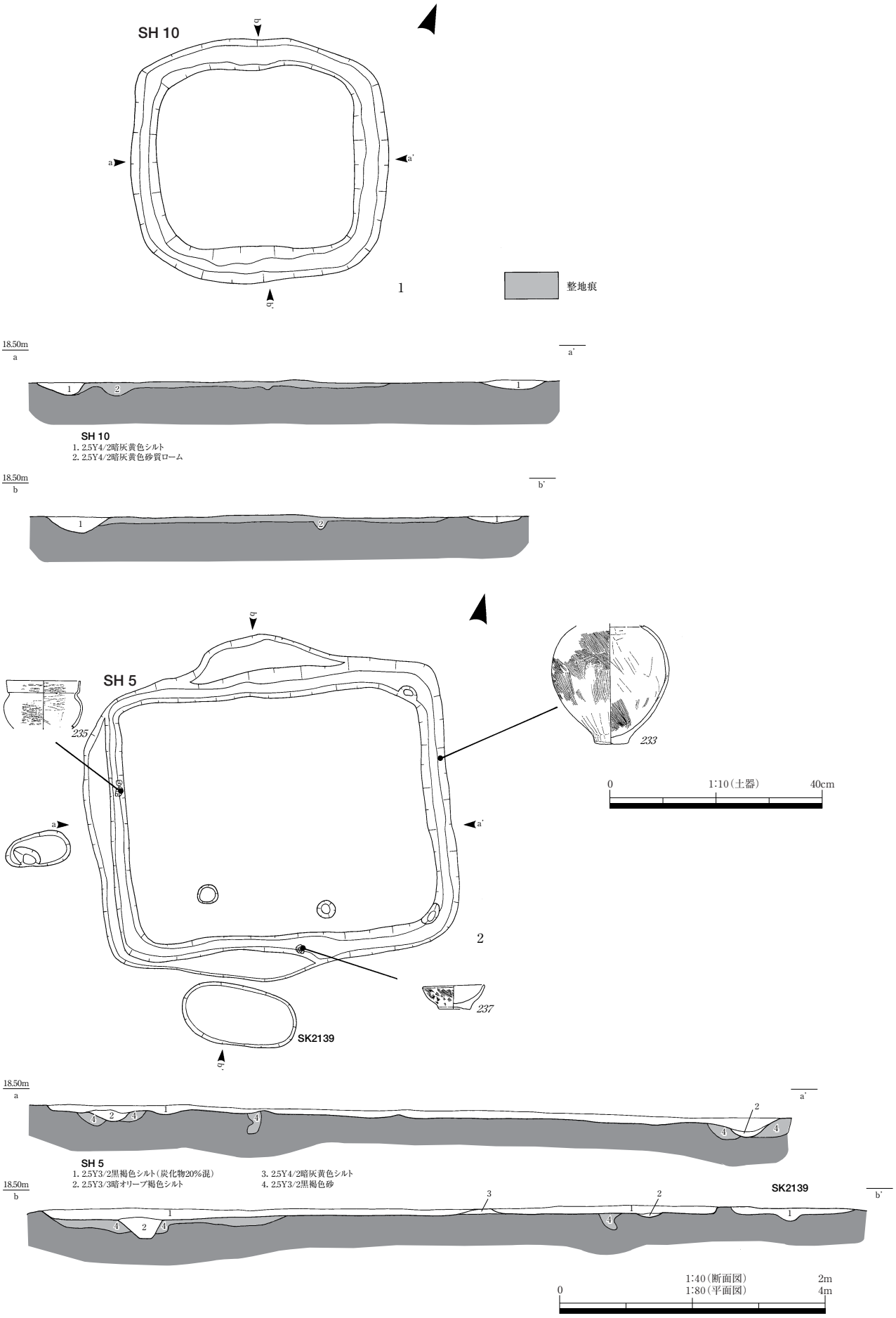


第44図　遺構実測図　(1/40・1/80)
A８地区　1.ＳＨ４　2.ＳＨ２・ＳＨ３・ＳＫ2120

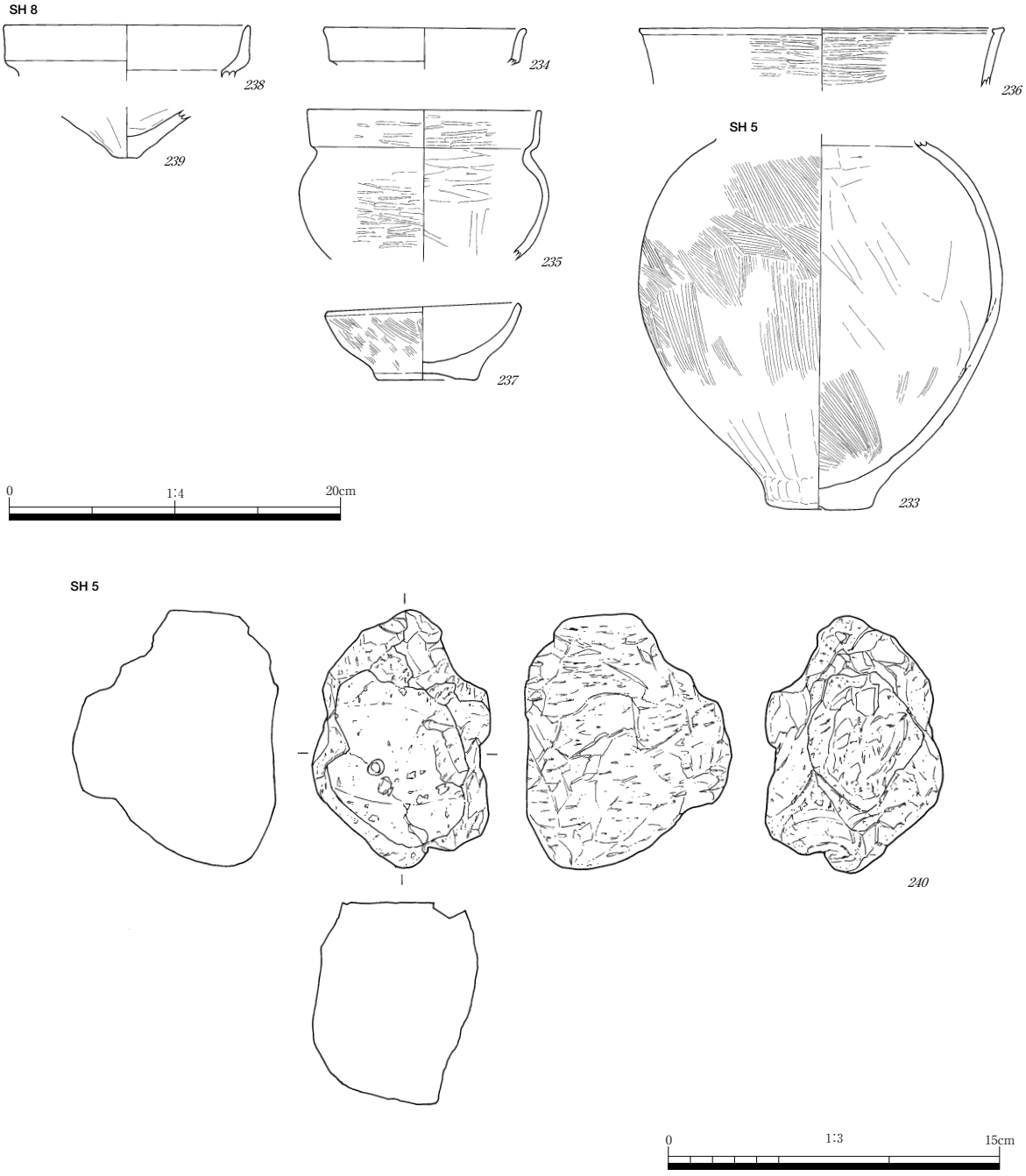




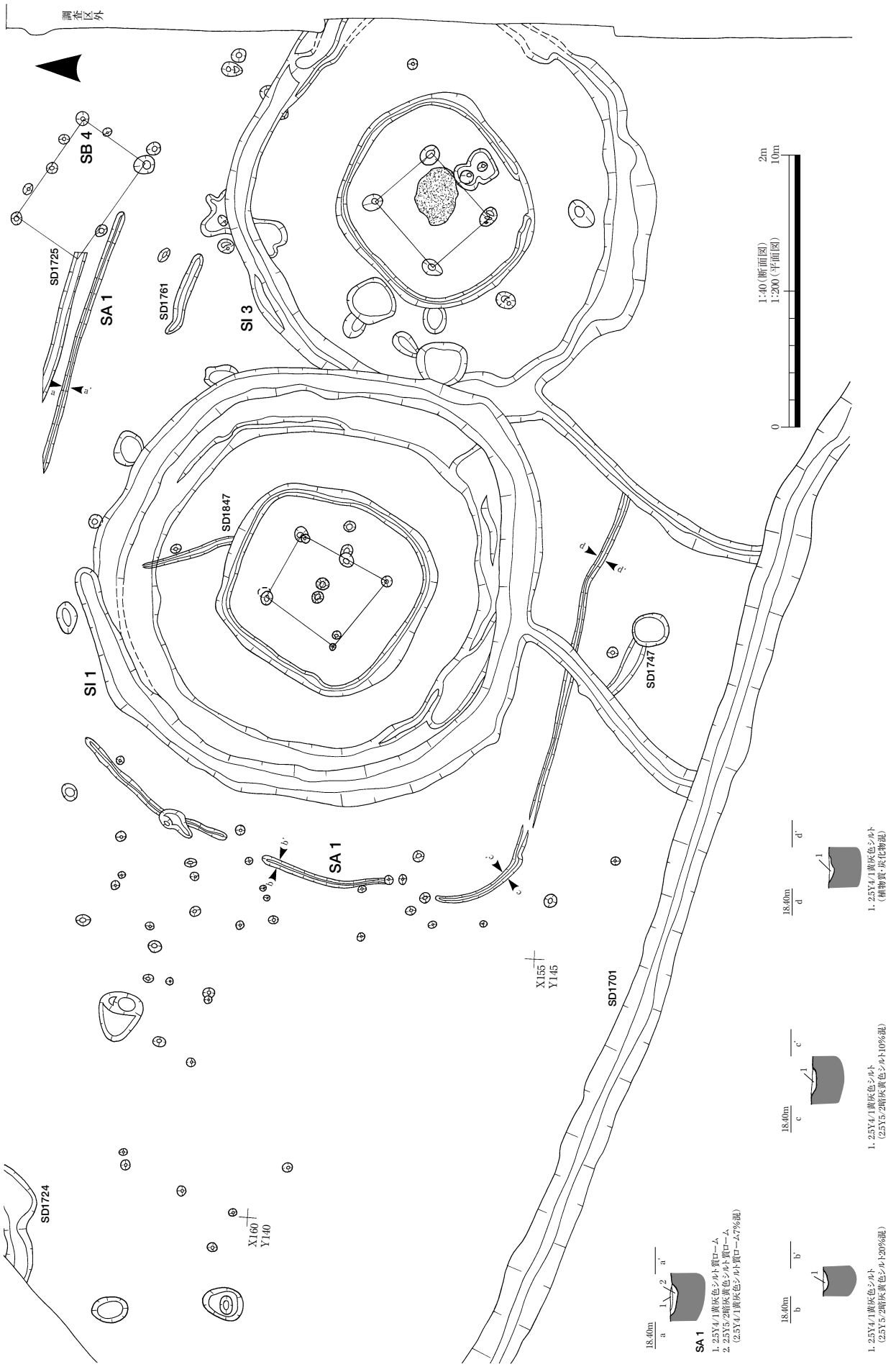
第45図　遺構実測図　(1/40・1/80)
Ａ８地区　ＳＨ８・ＳＨ９



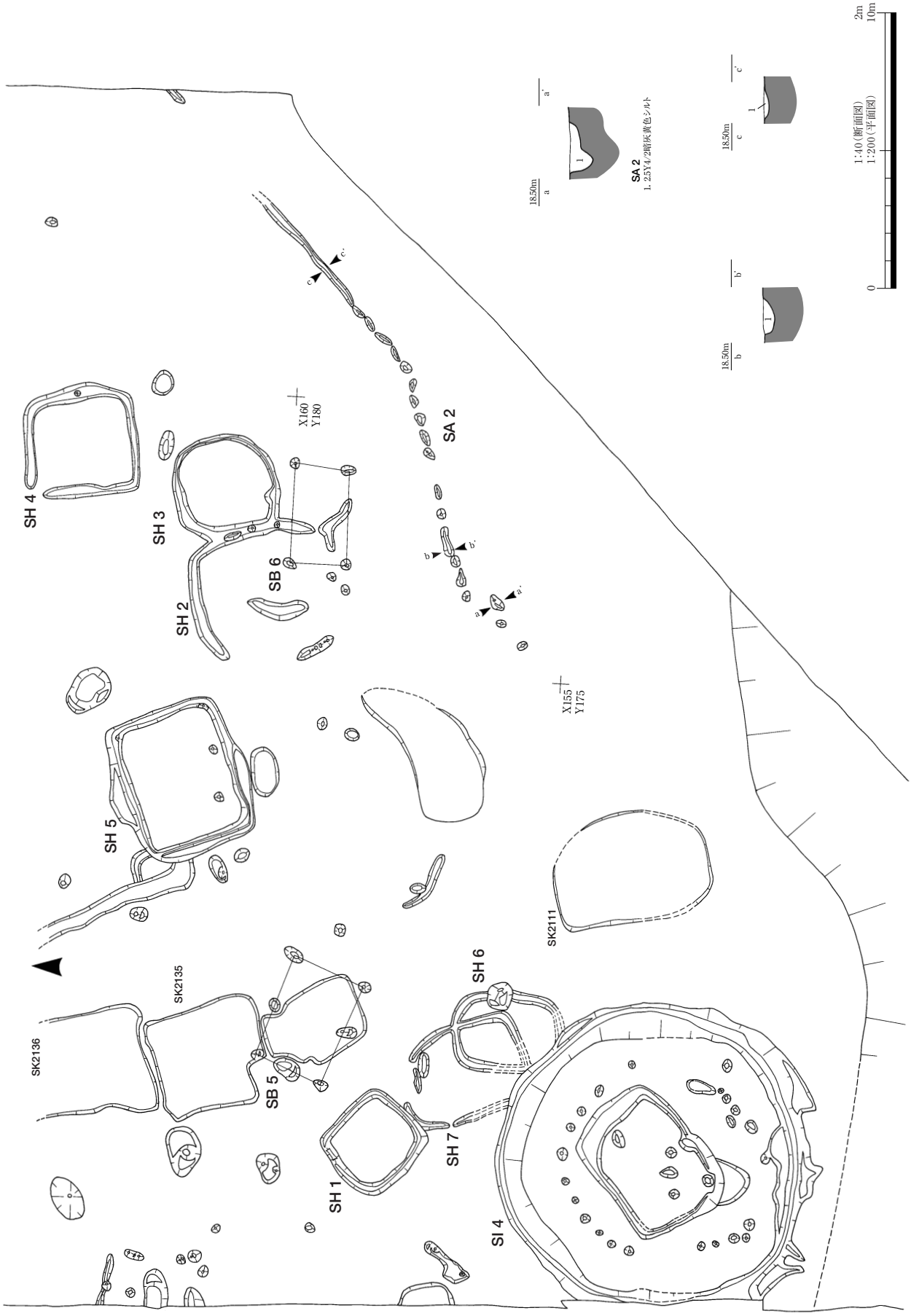
第46図　遺構実測図　(1/40・1/80，1/10)
A８地区　1.ＳH10　2.ＳH５



第47図　遺物実測図　（*240*　1/3，*233～239*　1/4）
Ａ８地区　ＳＨ５（*233～237・240*）　ＳＨ８（*238・239*）



第48図　遺構実測図　(1/40・1/200)
A７地区　ＳＡ１



第49図　遺構実測図　(1/40・1/200)
A８地区　ＳＡ２

E　土坑

1704号土坑（ＳＫ1704，第50・53図，図版52）

Ａ７地区ＳＩ１の西側，柵ＳＡ１の外側に位置する楕円形の土坑。東側が深さ38㎝と深く，埋土は黒褐色粘土質ロームの単層である。周囲には小穴が群集するが，大型の遺構は検出できなかった。遺物は弥生土器が出土している。*241* は付加状甕。口縁端部は断面三角形で，内外面はヨコナデされる。胴部の器壁は薄く仕上げられ，外面ハケメ，内面は縦方向のヘラケズリ調整を施す。*242* は有段鉢形高杯の口縁部。杯底部は欠損する。口縁端部は面を取り，器面調整は外面縦方向，内面横方向のヘラミガキ調整で，一部にススが付着する。*243* は高杯の脚部であるが，蓋に転用されている。杯部が欠損した脚基部は細かく打ち欠いてつまみ状に仕上げられ，内外面にススが付着し，一部割れた断面にもススの付着が認められた。裾端部内面は帯状にススの付着が認められない箇所があり，使用痕跡を示唆しているものと考えられる。

1724号土坑（ＳＫ1724，第50図）

Ａ７地区ＳＩ１の周溝北側に近接して検出した楕円形の土坑。埋土には黄灰色シルトが主体的に堆積しており，他の土坑と異なる。遺物は弥生土器が出土している。

1749号土坑（ＳＫ1749，第50・53図）

Ａ７地区ＳＩ１の南側，柵ＳＡ１の外側に位置する長円形の土坑。深さは10㎝前後で，東西に延びる浅い溝ＳＤ1747を切る。検出時，プランが不鮮明であったため検出面を下げたが，規模は当初もう少し大きかった可能性がある。周辺の包含層からは多量の弥生土器が出土している。*244* は丸縁甕の口縁部小破片で，口縁端部が内湾気味に立ち上がる。

1750号土坑（ＳＫ1750，第50・53図，図版52）

Ａ７地区ＳＩ３の南側周堤部で検出した楕円形の土坑。周堤部の盛土が消失していることからＳＩ３との新旧関係は定かではない。埋土には暗灰黄色シルト質ロームが堆積し，弥生土器の甕の口縁部から頸部までがそのままの形で出土している（*246*）。有段甕で，胴部は頸部から縦方向のハケメ，内面は口縁部から頸部までヨコナデし，胴部はヘラケズリ調整である。

1752号土坑（ＳＫ1752，第50・53図，図版52）

Ａ７地区ＳＩ３の周堤上で検出したやや歪な円形の土坑で，西側で切り合うＳＫ1732より新しい。周堤上に残るⅣｂ層上面で検出し，黒褐色ロームがレンズ状に堆積することから，ＳＩ３より新しくＳＩ１に伴うかと考えられる。遺物は弥生土器が出土している。*248* は有段甕の小片で，有段部がやや突帯状に強調される。*249* は外面赤彩のかえりが付く壺蓋である。

1776号土坑（ＳＫ1776，第50・53図，図版８・51・52）

Ａ７地区ＳＩ２の東側，Ａ８地区との境近くで検出した楕円形の土坑。深さは約15㎝で，黒褐色粘土質ロームが堆積する。底面近くには一面に廃棄された甕・壺・高杯などの弥生土器が検出された。ＳＩ２に関連する土坑か。*250* は付加状甕で，口縁端部を上方につまみ上げる。外面には厚くススが付着する。*251* は有段高杯であるが，残存状況は悪く図上復元となっている。口縁部は丸縁で，杯底部は平坦である。*252* は有段小型壺。有段部の稜は明確で，頸部内面に面を取る。口縁部は外面ヨコナデ，内面ヘラミガキ，胴部は外面ヘラミガキ，内面上半部ヘラミガキ，下半部ヘラケズリ調整する。

1784号土坑（ＳＫ1784，第51・53図，図版52）

Ａ７地区ＳＩ２の東５ｍで検出したやや歪な方形の浅い土坑。深さは５㎝前後と浅く，底面北寄りで検出した柱穴状の土坑ＳＫ1828やＳＫ1827とは埋土に大きな違いは認められない。また，ＳＫ1827

からは同一個体の弥生土器の破片が出土しており，ほぼ同時期と考えられる。プランからは２本主柱穴の竪穴建物の可能性も考えられるが，ＳＫ1828は直径約30㎝，深さ40㎝の掘形であるが，ＳＫ1835は深さが16㎝と浅い。また，床面が平坦ではなく，整地されたような痕跡も認められず建物とは断定しにくい。遺物には，弥生土器の擬凹線甕，有段甕，付加状甕がある。*253* は有段部の上端部に３本の擬凹線が巡る。*254* は胴部外面ハケメ調整の後，幅の狭いヘラ状器具で横方向にナデ調整する。

1823号土坑（ＳＫ1823，第50図）

Ａ７地区北西端で検出した遺構で，調査区外に延びており溝の可能性もあるが，ここではとりあえず，土坑として取り扱う。平面形は長方形状であるが，底面は平坦ではなく，深さも18㎝と浅い。南西側に隣接するＳＤ1824が周溝となる可能性をもち，それと関連のある遺構と考えられる。遺物は弥生土器片が出土した。

1827号土坑（ＳＫ1827，第51・53図，図版51～53）

Ａ７地区ＳＩ２の東側で検出した浅い方形の土坑ＳＫ1784と重複する小型の楕円形の土坑。切り合い関係は，断面観察によるとＳＫ1784を切っているように見えるが，埋土の性質はほとんど同じで同時期と考えられ，これに付属する可能性もある。黒褐色シルト質ロームの埋土には炭化物がＳＫ1784に比べやや多めに混入し，弥生土器の出土量も多い。弥生土器には甕・壺・小型壺がある。甕には有段甕・付加状甕・丸縁甕・小型甕がある。*256* は幅の狭い有段部に波状文が施され，肩部にはハケ状原体による斜行短線文が巡らされる。外面はハケメ後ナデ調整，内面ヘラケズリ調整である。*258* は口縁端部内側に強いヨコナデを施し，口縁端部が内湾しており，外面には頸部から口縁部に向けて幅約１㎝の範囲で，ヘラ状のもので掻き取った跡が残る。*261* はほぼ完形である。口縁端部は断面三角形で，頸部にはやや強めにハケ状原体によるヨコナデが施される。肩部より下半には全体にススが付着し，その表面には幾筋かの吹きこぼれの跡が残る。*259* は擬凹線壺。幅の狭い有段部に擬凹線を施し，頸部外面の一部には４箇所に貝殻刺突文が押捺される。壺の器形であるが外面にはススが付着し，吹きこぼれの跡も残る。*260* は外面ヘラミガキ調整の壺の胴部で，肩部には板の木口による刺突文が施されるが，これはヘラミガキ調整前に行っている。*262* は小型壺で，底部のみ欠損。外面のヘラミガキ調整は頸部から縦・横・縦と細かいピッチで丁寧に行われているが，器表面に長さ１㎝，幅５㎜の石が混入しており，器面に大きくヒビが入っている。

1829号土坑（ＳＫ1829，第50・53図）

Ａ７地区ＳＩ３周堤部上西側で検出した楕円形の土坑。断面の切り合い関係からＳＩ３の周溝より新しいが，ＳＩ１の周溝とはこれより古いかまたは同時期と考えている。埋土は黒褐色シルト質ロームの単層で，弥生土器が出土している。*264* は有段甕。有段部のシャープさは失われ，口縁端部はやや厚ぼったい。胴部外面はハケメ調整で，全体に厚くススが付着し，内面はヘラ状器具でナデる。

2113号土坑（ＳＫ2113，第17・54図）

Ａ８地区ＳＩ４の北西，ＳＨ５の南側に位置し，平面形は幅約2.4ｍ，長さ約６ｍの弧状を呈する。中央部付近は深く70㎝を測るが，北東側と西側は漸次的に立ち上がる。遺物は弥生土器のみである。*265* は有段高杯。口縁部が短く外傾し，口縁端部は付加状口縁になり端面に擬凹線文を施す。

2118号土坑（ＳＫ2118，第17・54図）

Ａ８地区ＳＨ４の南東で検出した幅約90㎝，深さ８㎝の楕円形の土坑。遺物は弥生土器のみである。*266* は付加状小型甕の口縁部。*267* は有段口縁の短頸壺と考えられる。

2120号土坑（ＳＫ2120，第44・54図）

Ａ８地区ＳＨ２の中で検出した，幅60㎝，長さ2.2ｍの弧状の溝。周溝遺構の一部の可能性がある。出土遺物は弥生土器のみである。*268* は有段甕の口縁部で，口縁端部が若干肥厚する。

2129号土坑（ＳＫ2129，第17・54図，図版53）

Ａ８地区に位置し，ＳＤ2125の西側で検出した直径約50㎝の円形の土坑。小型であるが，廃棄土坑と考えられる。出土遺物は弥生土器のみである。*276* ～*278* は高杯の外反脚である。*275* は台付壺の胴部下部と脚基部である。形態から扁平な胴部の長頸台付壺かと考えられる。

2131号土坑（ＳＫ2131，第52図）

Ａ８地区中央部西寄りで検出した楕円形状の土坑。段掘り形状で中央部が一段深くなる。埋土は黒褐色シルトが主体で，土坑中央部から弥生土器が一括して出土している。

2135号土坑（ＳＫ2135，第17・54図）

Ａ８地区ＳＢ５の北側で重複する長軸4.4ｍ，短軸3.7ｍの方形の大型土坑。深さは８㎝と浅い。遺構の前後関係はＳＢ３よりも古く，ＳＫ2134・2136と同時期と考えられる。出土遺物は弥生土器のみである。*269* は有段鉢で，口縁有段部は外傾する。

2152号土坑（ＳＫ2152，第52・54図，図版８・52・53）

Ａ８地区ＳＫ2131の北約３ｍで検出した楕円形の土坑。断面形は擂鉢状を呈し，埋土中からは弥生土器がまとまって出土した。出土遺物は弥生土器のみである。弥生土器には甕・壺がある。甕には擬凹線甕･有段甕･付加状甕がある。*270* は擬凹線甕で若干外反する有段部外面に７条の擬凹線文を施し，内面には1.5㎝間隔に指頭圧痕がみられる。口縁端部は尖り気味である。胴部はあまり肩の張らない球形を呈する。*271* は有段甕。口縁部は有段部が短く，端部が丸い。*272* ・*273* は付加状甕。２点とも口縁部が外反する。*274* は有段壺。口縁部は有段部が長くやや外反する。胴部は最大径が中位にあり，扁平な形態である。底部はなだらかに突出し，平底である。胴部下半に焼成時の黒斑がある。

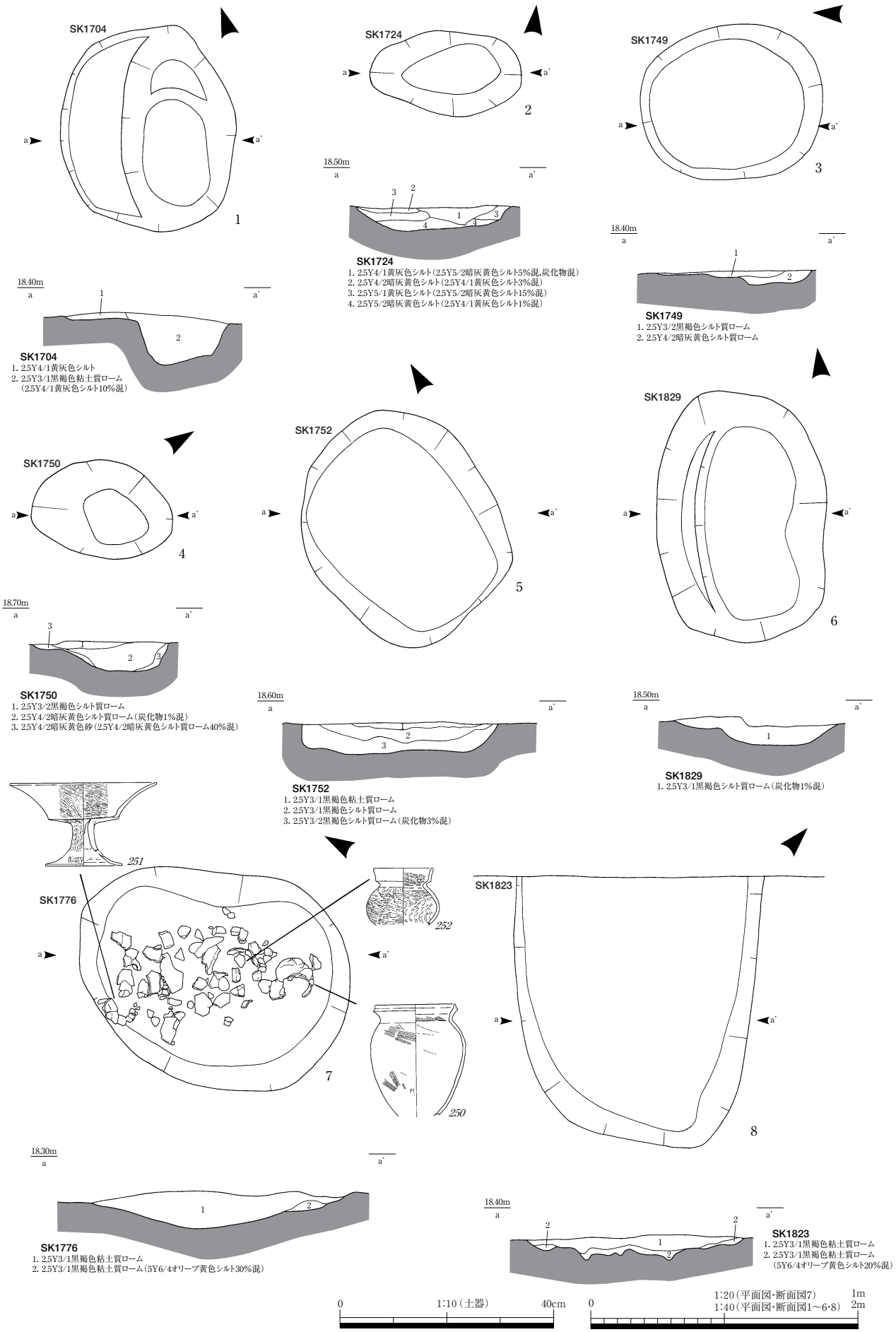
2156号土坑（ＳＫ2156，第52・54図，図版８・53）

Ａ８地区ＳＨ５の北東部で検出した楕円形の土坑。埋土は黒褐色粘土質ロームの単層で，埋土の中位から弥生土器の破片が全面に散らばった状態で出土した。周溝遺構ＳＨ５に近接することからこれと関係のある土坑と考えられる。出土遺物は弥生土器のみである。弥生土器には甕・壺・器台・高杯・蓋がある。甕には有段甕・付加状甕がある。*279* は有段甕。口縁部は有段部が短く，内傾する。*280* ～*282* は付加状甕。*282* は口縁端部が直立し，有段口縁のような外観となっている。

283 は有段壺。口縁部は有段部が長く外傾する。底部は若干突出し，上げ底である。胴部外面には籠目痕跡がみられる。器台には有段器台・外反器台がある。*284* ・*285* は有段器台の受部。口縁部は，*284* が断面三角形に肥厚するタイプで，*285* が断面長方形のタイプである。*286* は外反器台で，口縁端部が肥厚し幅広になる。全体的に器壁が厚い。*289* ・*291* ・*292* は有段高杯。*294* ・*295* は外反脚である。*301* は有鈕蓋のつまみ部で上面が窪む。

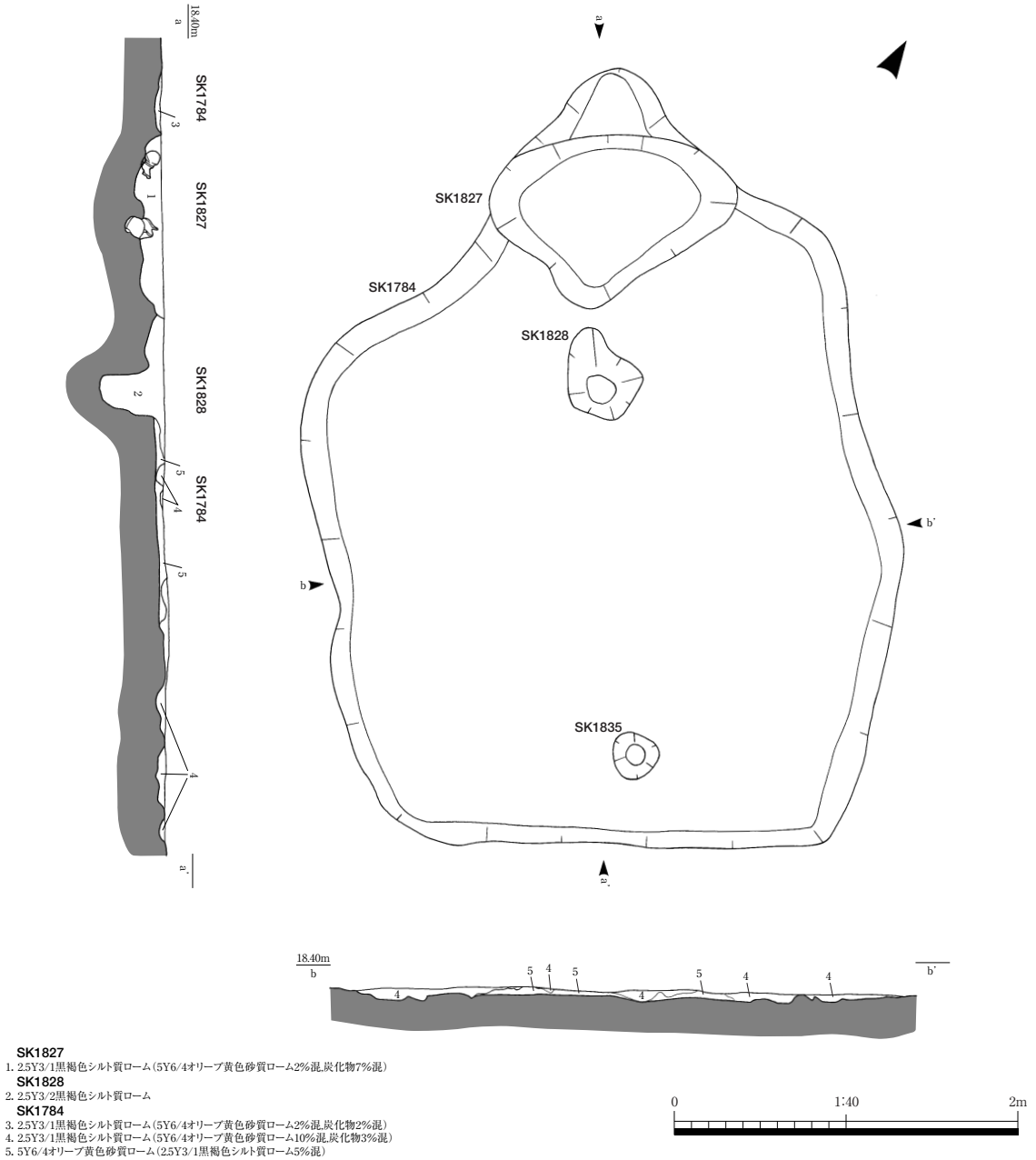
2161号土坑（ＳＫ2161，第17・54図）

Ａ８地区ＳＨ10の南東部に位置し，平面形は長軸１ｍ，短軸70㎝の隅丸方形である。深さは14㎝と浅い。周辺の土坑と関連があると思われる。遺物は弥生土器のみで１点図示した。*302* は有段甕の口縁部で，有段部がやや内傾し，端部が丸い。

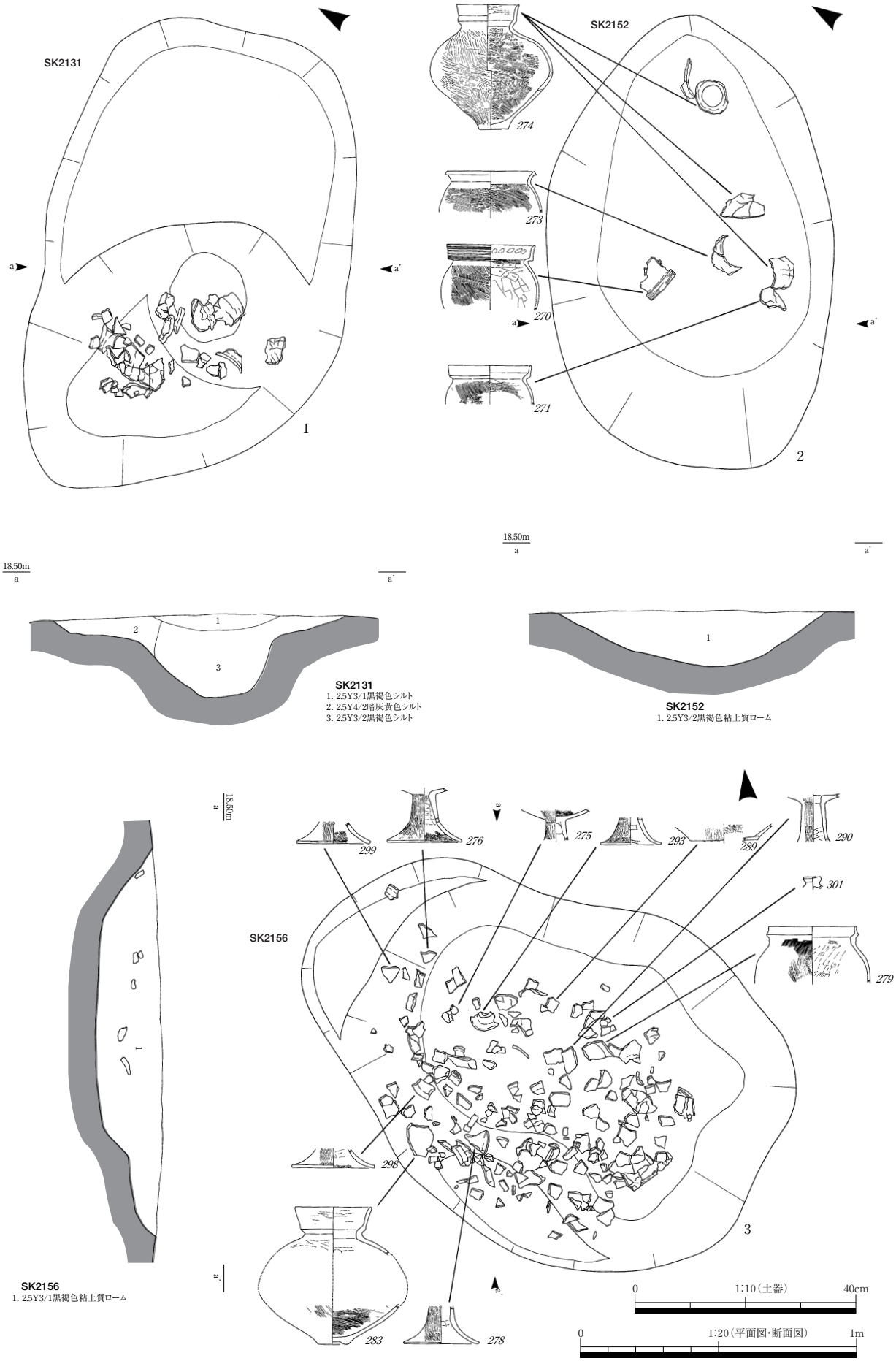


第50図　遺構実測図　(1/20・1/40，1/10)

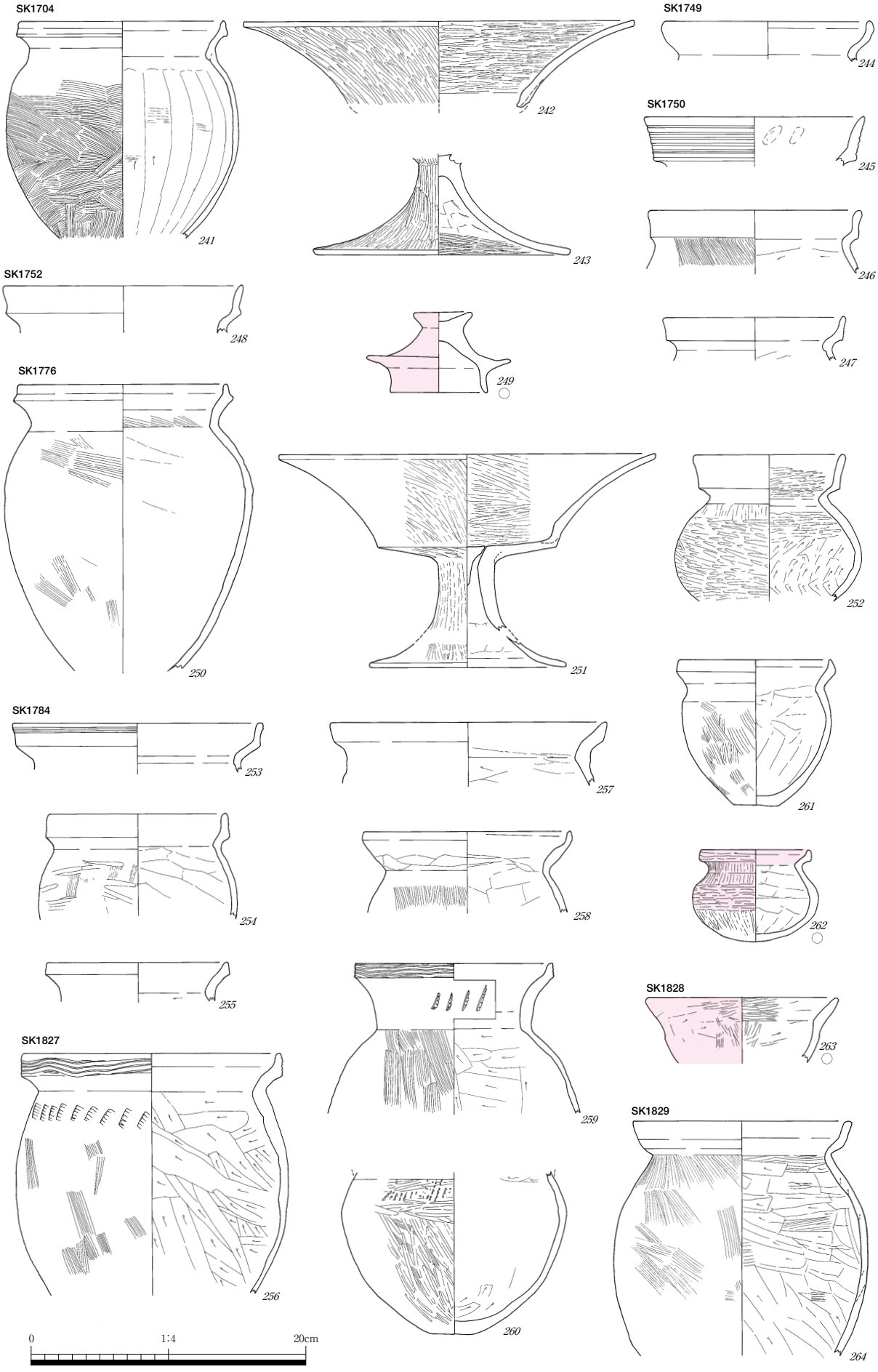
Ａ７地区　1. ＳＫ1704　2. ＳＫ1724　3. ＳＫ1749　4. ＳＫ1750　5. ＳＫ1752　6. ＳＫ1829
7. ＳＫ1776　8. ＳＫ1823



第51図　遺構実測図　(1/40)
Ａ７地区　ＳＫ1784・ＳＫ1827・ＳＫ1828・ＳＫ1835

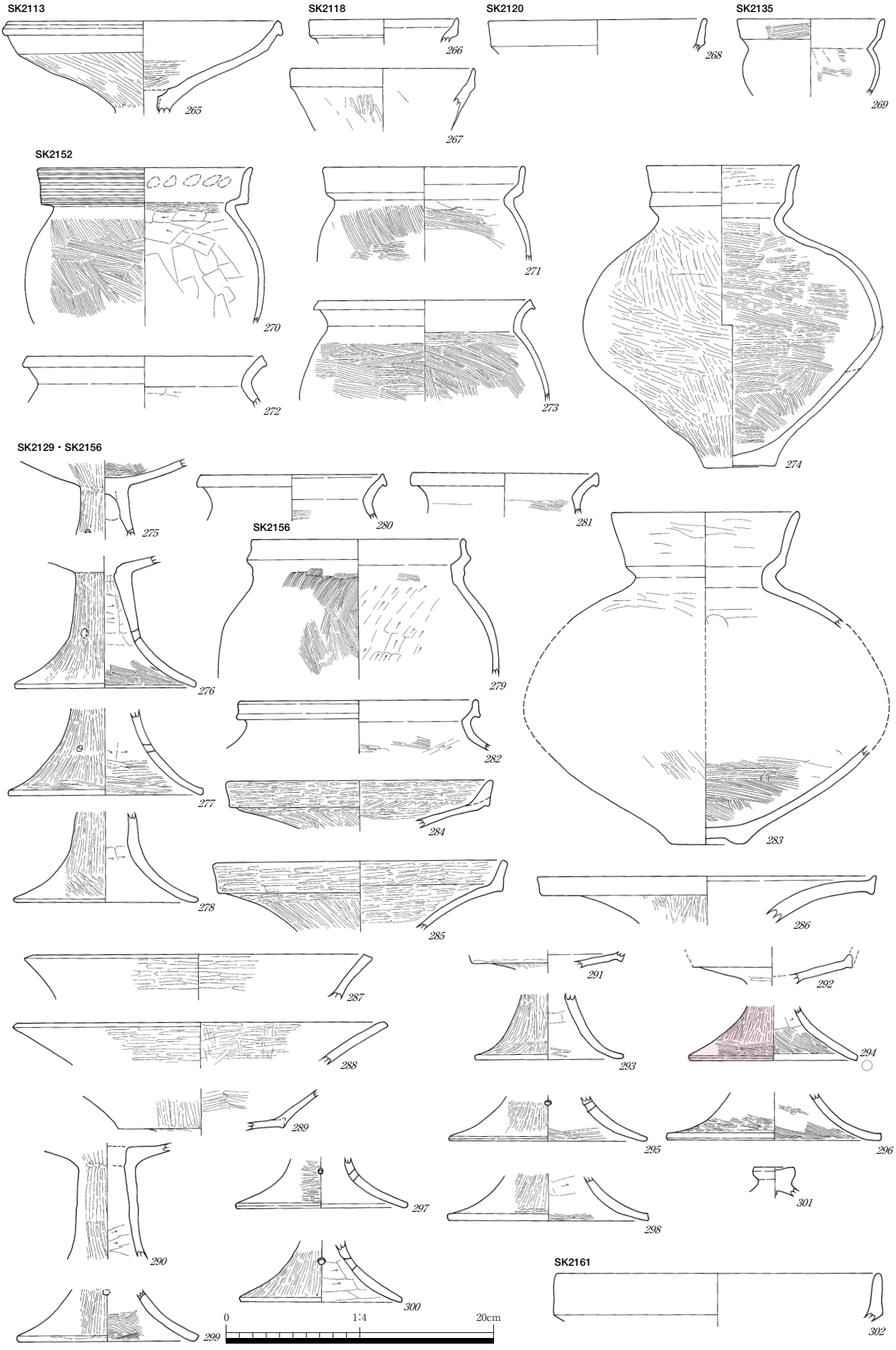


第52図　遺構実測図　(1/20, 1/10)
A 8 地区　1. S K2131　2. S K2152　3. S K2156



第53図　遺物実測図　(1/4)

A 7 地区　S K1704(*241～243*)　S K1749(*244*)　S K1750(*245～247*)　S K1752(*248・249*)
S K1776(*250～252*)　S K1784(*253～255*)　S K1827(*256～262*)　S K1828(*263*)　S K1829(*264*)



第54図　遺物実測図　(1/4)

A８地区　ＳＫ2113(*265*)　ＳＫ2118(*266*・*267*)　ＳＫ2120(*268*)　ＳＫ2135(*269*)
ＳＫ2152(*270*～*274*)　ＳＫ2129・ＳＫ2156(*275*～*278*)　ＳＫ2156(*279*～*301*)　ＳＫ2161(*302*)

F　溝・自然流路

1701号溝（ＳＤ1701，第55～59図，図版８・53～56・132）

Ａ７・８地区の南側は東西に延びる谷地形となっているが，これの北側の肩部上で谷地形に平行して掘削された溝である。断面はＶ字形を呈し，埋土は上流の東側では黒褐色砂質土など砂気の多い土が堆積するが，西側では腐食した植物質を多く含む黄灰色粘土質ローム，黒褐色粘土質ローム，暗灰黄色シルト質ロームがレンズ状に堆積しており，やや澱んだ状態であったと推測される。この西側の中層からは刳物桶の側板が内側が上に向いた状態で出土している。また，ＳＩ３の排水溝との合流点から東へ長さ約２ｍにわたって弥生土器が一括して出土した。器種は甕・壺・高杯・器台・鉢・蓋など種類に富み，何らかの祭祀行為を行った後廃棄された推定される。また，この他にもＡ８地区境近くの北側肩部で壺と鉢の計４個体がかたまって出土しており，破砕してはいるが，４個体ともほぼ完形に復元することができた。このようにＳＤ1701周辺，及び谷地形落ち際周辺は，集落の南端の位置にあたり，遺物包含層であるⅣａ層掘削時においても土器の出土量が非常に多かった。このことから，当時の集落における廃棄場になっていたとも推定される。

出土遺物には弥生土器・木製品がある。

弥生土器は，甕・壺・鉢・高杯・器台・蓋がある。

甕には擬凹線甕・有段甕・平縁甕・有稜甕があるが，量的には有段甕の比率が高い。擬凹線甕の*307*は口縁端部が僅かに外反し，口縁部内面には指頭圧痕，頸部内面にはハケメ痕が残る。*308*は頸部が欠損するが，頸部外面に軽い縦方向のハケメが施され，器壁は厚く，砂粒の多く混じる胎土の土器である。*309*は擬凹線が施されていた有段部が水平に欠損するもので，意図的に打ち欠かれたものと考えられる。体部外面には全面に横方向の荒いハケメ調整が施される。有段部の幅が狭い*310*は口縁端部が面取りされる。有段甕は口縁部が外反するものと直上に伸びるもの，内面の屈曲があまくなっているものがある。*315*はほとんどの中型甕の外面にススが付着しているのに反し，ススの付着が全く見られないほぼ完形に近い土器である。*318*は肩部に斜行短線文を施すもので，その下には浅い平行沈線が巡る。*313*は強いヨコナデにより有段部に稜をもつ有稜甕で，口縁端部は面取りされる。*319*は平縁甕で，外面には荒い横方向のハケメが施され，頸部内面にもハケメ痕が残る。*320*は高さ11.3㎝の小型平縁甕で，外面は全面ハケメ調整が施される。外面にはススの付着は認められない。

壺には短細頸壺と有段壺がある。*321*はハケメ後ヘラミガキ調整の球胴部に，直上に伸びる内外面ハケメ調整の口縁部が付くものである。口縁端部は面取りし，口縁部外面には調整による粘土の動きがそのまま残り，胴部に比してやや仕上がりに雑な印象がある。*322*は算盤玉状の胴部で，口縁部内外面，胴部外面にはヘラミガキ調整が施されるが，胴部下半には全面にススの付着が認められる。*323*も算盤玉状の胴部をもつ器高の低い有段壺で，外面全体にススの付着が認められるが，口縁部外面から胴部上半が横方向，下半が縦方向のヘラミガキ調整が施される。

333・*332*は有段器台。*333*は小片で，屈曲部が丸く口径も小さいことから，壺の口縁部の可能性がある。*332*には内外面に赤彩の痕跡が残る。*327*は短い脚部に大きく外反する杯部が付く有段高杯。口縁端部は面取りされ，内外面は丁寧なヘラミガキ調整が施される。脚裾端部は丸縁で，ヨコナデ調整，脚裾部内面にはハケメ調整が残る。*328*は高杯の脚部で，脚裾端部は内外面ヨコナデ調整，外面は縦方向のヘラミガキ調整で，裾部には指頭圧痕が数箇所残る。

鉢は有段口縁のものばかりである。*329*は内外面横方向のヘラミガキ調整。*330*・*331*は口縁部の有段があまい。*331*の表面には全体に厚くススが付着し，一部器面が爆ぜている。

蓋は有鈕蓋（*324* ・*325*）・返し付蓋（*326*）がある。すべてほぼ完形である。*324* は大型の蓋で，つまみは中央が窪んだ長円形を呈する。口縁部は膨らみをもって広がり，端部は面を取る。外面赤彩。内面には口縁部にわずかに赤彩が残る。*325* は頂部が平坦な蓋で，内外面は丁寧なヘラミガキ調整。*326* はかえりの付く壺蓋。つまみ部は中央が窪み，外面には赤彩の痕跡が残る。

木製品は刳物桶の側板（*303* ・*304*）が出土した。*303* は平面が楕円形になる刳物桶の短辺部分で，胴部外面中位に台形の突起を削り出すタイプのものである。外面はほぼ全面に火を受けて炭化している。器高は51.4㎝と大型で，断面はやや胴部中位から口縁部にかけて内傾し，口縁端部はわずかに厚い。底部は斜めに厚みを増して段を作る。これに接合できる破片があり，それによって底部が延長できるものの，内面に底板を止める装置は確認できなかった。*304* は*303* とは別個体の刳物桶底部断片である。内外面に火を受けており，炭化が激しい。樹種はいずれもスギ。

1824号溝（ＳＤ1824，第55・56・59図，図版56）

Ａ７地区北西側境で弧を描く溝を検出した。部分的検出であるため明確には言えないが，竪穴建物の周溝となる可能性もある。幅は約８ｍ，深さは15㎝と検出した竪穴建物に比べればやや小型ではある。埋土は黒褐色粘土質ロームが主に堆積する。

遺物は弥生土器の甕・台付壺・高杯・鉢が出土している。甕は擬凹線甕（*334* ～*336*）と付加状甕（*337*）・平縁甕（*338*）がある。*334* と*336* は擬凹線が口縁部に巡るが，口縁部内面に段を有せず，外面に粘土帯を貼り付けて有段状としている。いずれも小破片である。*338* の肩部には櫛状工具による稚拙な波状文が巡る。*339* は鉢の口縁部と思われる小破片で，調整は外面に一部ハケメ痕が残る内外面横方向のヘラミガキである。外面は赤彩されるが，ススが付着する。*340* は台付壺の胴部片で，赤彩される。突帯は欠損し，痕跡が残る。*341* は鉢形高杯の杯部である。底部の剥離痕から脚部が付加すると考えられる。内外面横方向のヘラミガキ調整である。

1825号溝（ＳＤ1825，第55・56図）

Ａ７地区に位置する，柵ＳＡ１の北辺に平行するように東西に延びる幅40㎝，深さ10㎝の溝。Ⅳｂ層上面で検出。ＳＩ２の南側に位置することからこの住居域の境を示す溝の可能性もある。遺物は弥生土器片が出土した。

1826号溝（ＳＤ1826，第55・56図）

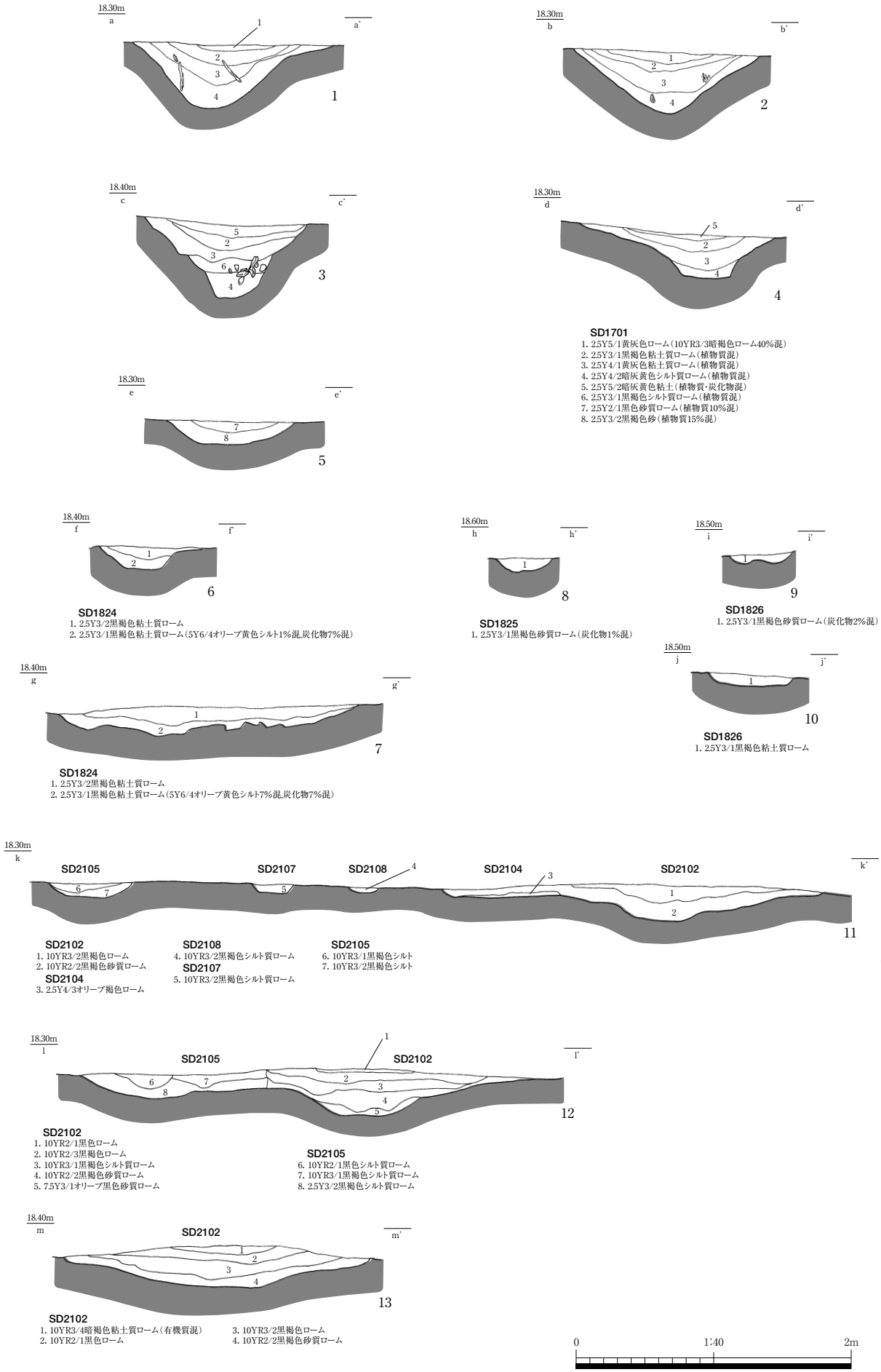
Ａ７・８地区にまたがる東西に延びる溝。Ⅳｂ層上面で検出し，ＳＩ２の周堤盛土・周溝遺構ＳＨ９を切ることから，建物廃絶後の遺構である。埋土は黒褐色粘土質ロームの単層である。遺物は弥生土器片が出土している。

2102号自然流路（ＳＤ2102，第55～57・59図，図版56）

Ａ８地区に位置し，集落の北側を区画する東西に延びる溝。東端はＢ１地区南端から延びている。溝というよりは流れの分岐が見られることから，自然流路が区画溝の役割を果たしていたと言う方が正しい。場所によっては流れは本流のＳＤ2102の他に５条の分流が認められる。埋土上面には有機質を含む黒色土が堆積していた。周囲一帯は遺構密度が稀薄で，集落の縁辺の様相を示す。

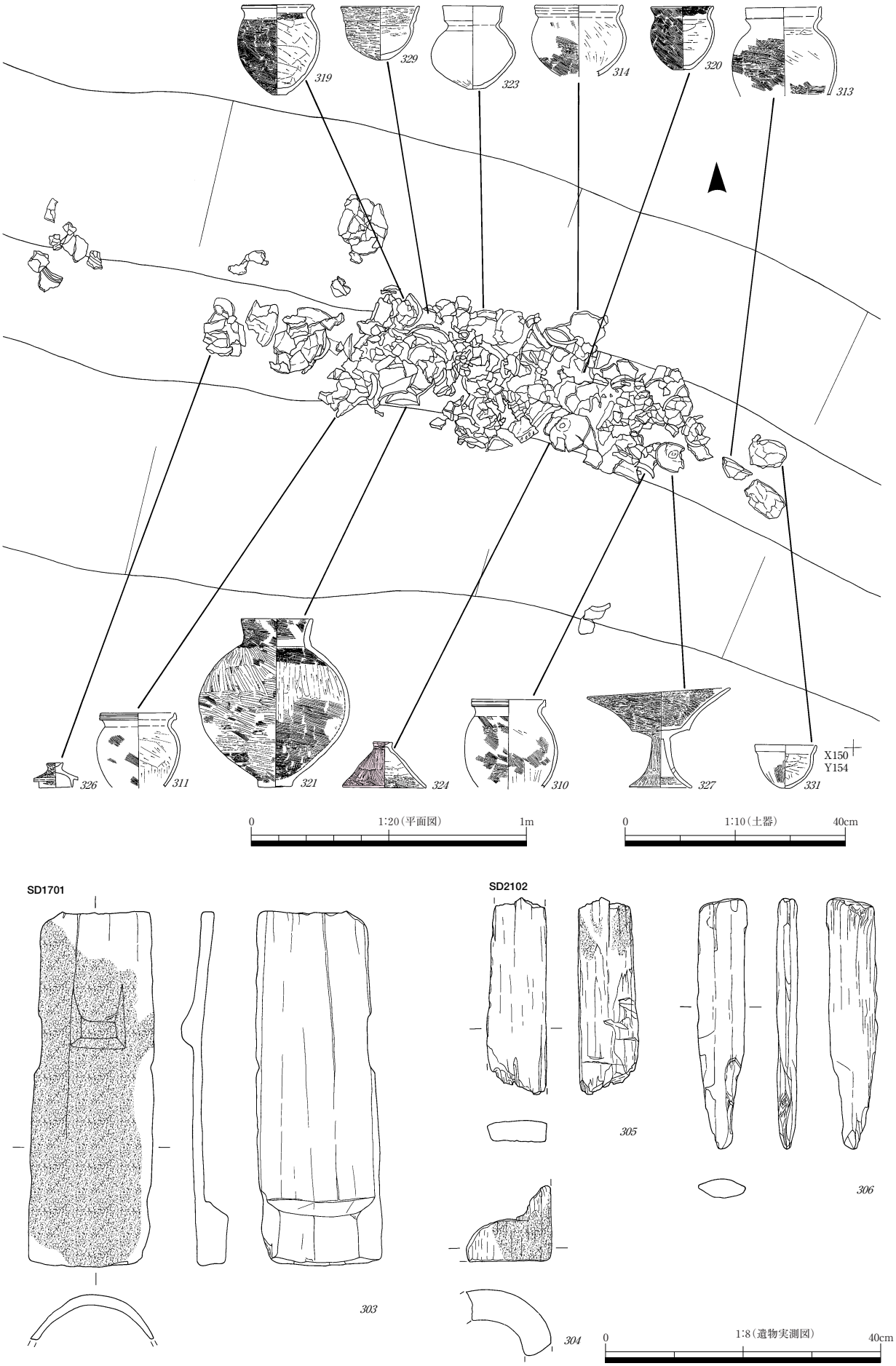
出土遺物には弥生土器・木製品がある。*342* は丸縁甕。胴部外面は左上りのハケ調整。中位はススが厚く付着。内面ヘラナデ。*343* は天王山系土器で，壺の口頸部である。口縁部は外傾し伸びるが，途中で再び屈折し内傾する。口縁部の屈折点下には平行沈線文が，屈折後の内傾面には下から破線文，交互刺突文，綾杉文，口縁端部には破線文が施される。木製品は板材（*305* ・*306*）が出土している。

第55図　遺構実測図　(1/400)
A７・A８地区　ＳＤ1701・ＳＤ1824～ＳＤ1826・ＳＤ2102・ＳＤ2104・ＳＤ2105・ＳＤ2107・ＳＤ2108

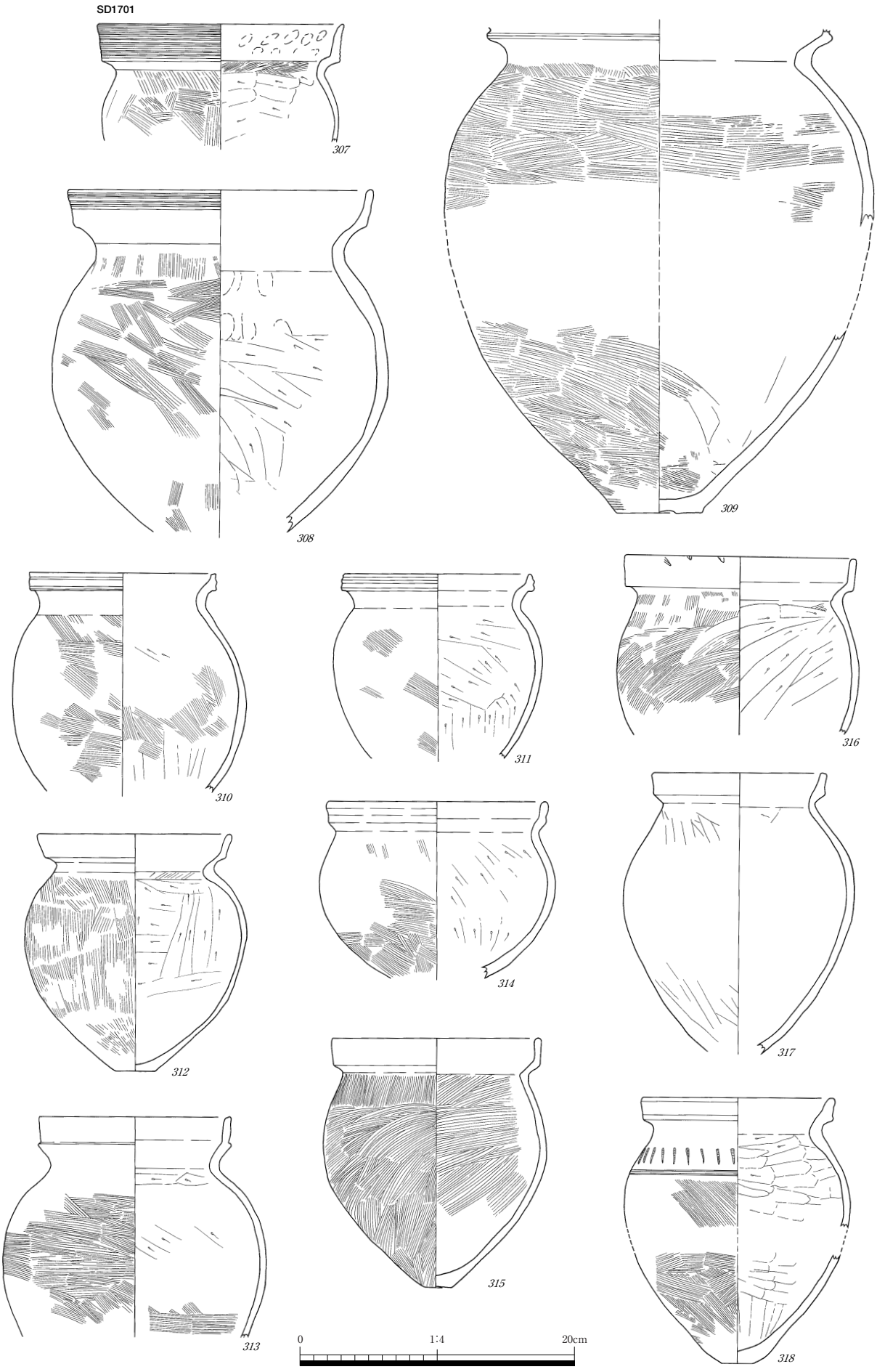


第56図　遺構実測図　(1/40)

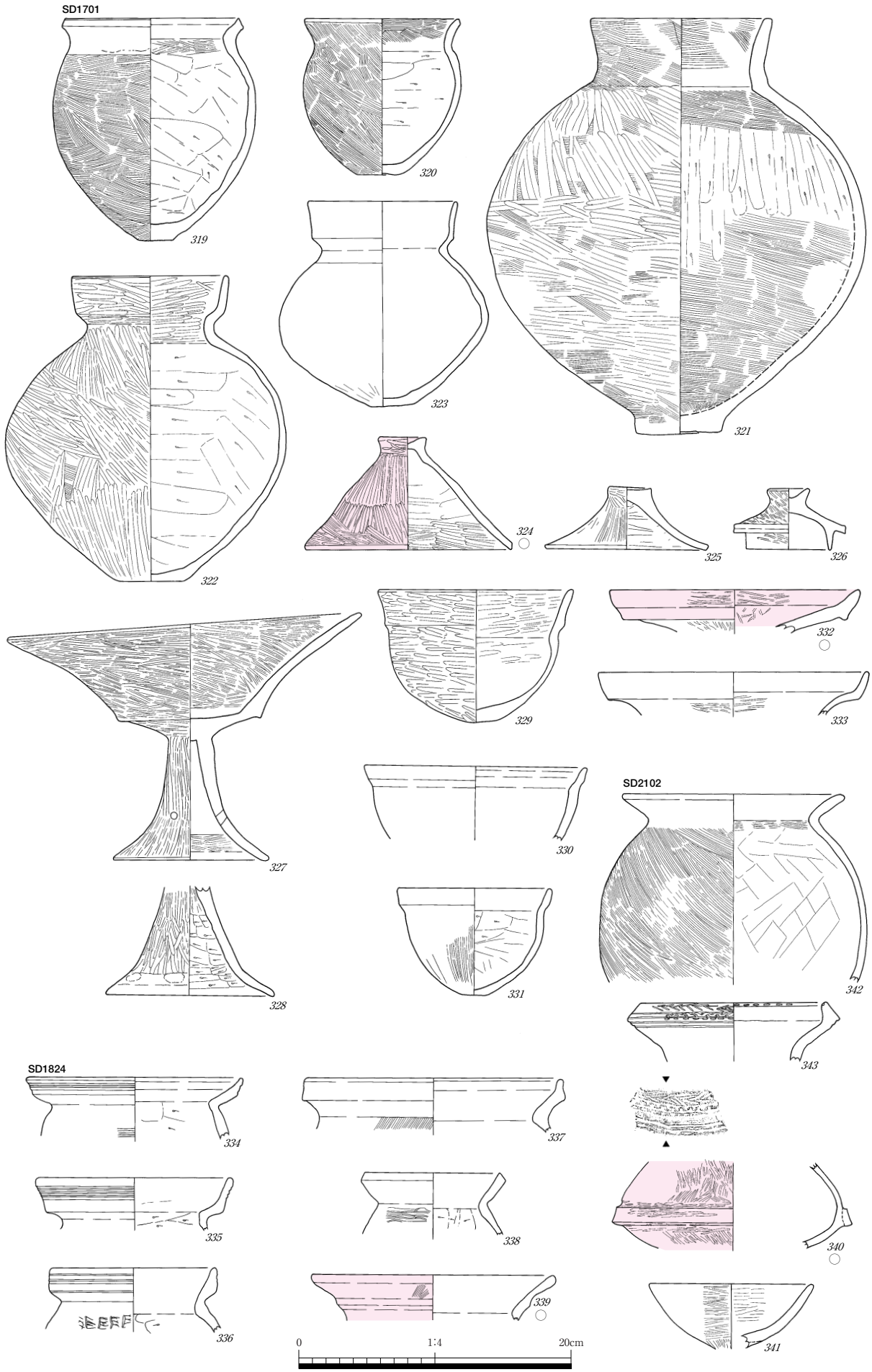
Ａ７・Ａ８地区　１～5. ＳＤ1701　６・7. ＳＤ1824　8. ＳＤ1825　９・10. ＳＤ1826
11. ＳＤ2102・ＳＤ2104・ＳＤ2105・ＳＤ2107・ＳＤ2108
12. ＳＤ2102・ＳＤ2105　13. ＳＤ2102



第57図　遺構・遺物実測図　(1/20,　1/10・1/8)
A７・A８地区　ＳＤ1701(*303*・*304*)　ＳＤ2102(*305*・*306*)



第58図　遺物実測図　(1/4)
Ａ７地区　ＳＤ1701



第59図　遺物実測図　(1/4)

A７・A８地区　SD1701(*319～333*)　SD1824(*334～341*)　SD2102(*342・343*)

（２）包含層出土遺物

A　土器（第60～65図，図版56～63）

包含層（Ⅳ層）出土の弥生土器には甕・小型甕・壺・小型壺・台付壺・器台・高杯・鉢・台付鉢・有孔鉢・蓋・ミニチュア土器がある。またこの他に天王山系土器が共伴する。出土量は前述したように調査区南側の谷部周辺からの出土が多い。

甕（第60～62図，*344*～*378*・*380*・*381*・*384*～*399*）

甕は擬凹線甕・有段甕・有稜甕・平縁甕・付加状甕・丸縁甕がある。３者の比率は有段甕が量的に一番多く，これに平縁甕が続く。受口甕は図示したものの中にはない。

擬凹線甕（*344*～*360*）　*344*～*348*は所謂月影式の特徴を有するものである。特に*344*・*345*は口縁端部が尖縁となり，内面には指頭圧痕が残る。頸部内面に面を取り，そこにはハケメ調整が施される。*346*・*347*は指頭圧痕が残るが，頸部内面にハケメ痕が残らない。*348*は頸部内面にハケメ調整痕が残るが，面を取らない。胴部の調整はいずれも外面ハケメ調整，内面ヘラケズリ調整で薄く仕上げる。*349*～*352*は口縁端部が丸縁となり，有段があまくなっているものである。*350*・*351*の頸部には板の木口による斜行短線文が施される。*355*～*359*は直立する幅の狭い有段部に２～３本の擬凹線が施され，口縁上端部に面を取るものである。*356*と*360*は胎土に海綿骨針の混入が顕著で，質感や色調が良く似ている。*353*～*360*は擬凹線文を施すが，口縁部内面が有段となっていない。

有段甕（*361*～*374*・*381*）は有段無文の口縁部の形態は様々である。口縁部は直立するものと外反するものに分かれ，口縁端部は尖縁のもの，丸縁のもの，上面で面を取るものに分けられる。器面調整は胴部外面はハケメ調整で，ほとんどが縦または斜め方向であるが，横方向のものもある。内面はハケメ調整とヘラケズリ調整がある。肩部には斜方向に刺突文を施す個体がある（*377*･*378*）。*377*は板状の木口，*378*はヘラ状のものを原体に施文している。*362*・*363*は口縁端部を摘み上げて有段状とするタイプで，*363*は内外面のハケメ原体が異なり，外面のハケメが荒い。*364*は口縁端部が尖縁で，直立する口縁部内面には指頭圧痕が残る。*368*はＳＩ２周辺の包含層から出土した大型の甕または鉢である。口縁部外面は横方向のハケメ調整後ヨコナデ調整で，頸部内面にはヘラケズリ調整が残る。胴部は内外面ハケメ調整で，外面は肩部が縦方向，胴部中位が横方向，下位が斜め方向と変化する。小径の底部外面にはハケメ調整が残る。一部焼成時の高温による器面の荒れが認められるが，焼成は良好で，内外面にはススなどの炭化物の付着は認められない。*369*は口縁部から胴部にかけて全体に厚くススが付着するもので，底部内面にも炭化物の残留が認められる。底部は小径で中央部がくぼむ。*371*の有段部は２段の強いヨコナデによって，中央が線上に盛り上がる。

有稜甕（*375*・*380*）の口縁端部は*380*が外傾，*375*が直上に伸びる。*380*は外面縦方向のハケメ，内面横方向のケズリ調整で肩部には貝殻刺突文が施される。

平縁甕･付加状甕･丸縁甕（*384*～*399*）　*387*は付加状甕で，端部は上方に摘み上げる。*390*は平縁甕で，厚い口縁部をもち，胴部外面はヘラ状器具で荒くナデて仕上げられる。*388*は口縁部外面にヨコナデ調整をするが，粘土の接合痕が明瞭にわかる。*393*は口縁部が内湾気味に立ち上がり，端部が内側に丸くおさまる。*395*は外反する口縁部で，頸部内面には指頭圧痕が残る。*398*は口縁部内面と外面がハケメ調整であるが，工具のあて方が雑でやや粗野なつくりの土器である。*399*は斜め上方に伸張化した口縁部に頸部のくびれが少ない胴部がつく。口径が胴部最大径よりやや大きい鉢形の器形を呈する。

小型甕（第61・62図，*379* ・*382* ・*383* ）

有段甕と平縁甕がある。*382* は器高が低く，胴部最大径より口径が大きい。内外面ハケメ調整である。*383* は口縁部を欠損するが丁寧なつくりで，胴部外面下半と内面，及び底部外面がヘラケズリ調整である。

壺（第62・63図，*400* ～*405* ・*412* ～*424* ）

壺には短頸壺・広口壺・細頸壺がある。細頸壺（*423* ・*424* ）は口縁部のみの出土である。

短頸壺には有段短頸壺（*400* ）と擬凹線短頸壺（*401* ）がある。*400* は有段小型壺の*407* ・*408* と有段鉢の*448* と谷地形肩部で一括出土したもので，破砕してはいたが，ほぼ完形に復元できた個体である。頸部・胴部内外面が丁寧なハケメ調整で，中央がわずかに窪む厚めの底部が付く。*401* は幅の狭い有段部に擬凹線文を施すもので，胴部の調整は外面ハケメ，内面ヘラケズリ調整で，底部は平底。

広口壺では有段壺（*402* ～*405* ・*412* ～*414* ）の割合が高い。全形を知り得る個体は無い。*402* はヘラミガキ調整の有段部外面に一部波状文が残る。また，*403* もヨコナデ調整の有段部下半に浅い擬凹線文がめぐる。*415* は斜め上方に伸びる短い口縁部が端部でやや内屈するものである。外面には口縁から胴部にかけてススが付着する。口縁部内外面ヨコナデ調整で，胴部はヘラ状器具で浅くナデている。底部は接合できないが深く中央が窪む形態である。*416* ・*417* ・*422* は口縁部が斜め上方に直線的に伸びるもので，口縁部外面はハケメ調整である。*422* の内面には円形の竹管刺突文が押印される。*418* は長めの頸部に直立する短い口縁部が付く。口縁端部を上方に摘み上げてヨコナデを施す。後に外面には横方向のヘラミガキ調整を施し，頸部にはそれに比して縦方向のヘラミガキが施されている。*419* ・*420* は長めの頸部に緩やかに外反する短い口縁部が付く。同一個体の可能性がある。外面はヘラミガキ調整で，胴部内面はヘラケズリ調整である。胴部外面と口縁部内外面に赤彩の痕跡が残る。*423* ・*424* も外面赤彩される。*423* は口縁端部を上方に摘み上げ，横方向のヘラミガキが施される。*424* は口縁端部内側に面を取る。

小型壺（第63図，*406* ～*411* ）

図示したものはすべて有段小型壺である。*406* ～*408* は算盤玉形の胴部を有し，口縁部内外面・胴部外面に丁寧なヘラミガキ調整が施される。*406* は口縁部内外面と胴部外面が赤彩されている。*408* は内外面丁寧はヘラミガキ調整で，底部外面もヘラミガキ調整される。口縁部・胴部外面にタール状のススが全面に薄く付着しており，胴部下半は爆ぜたような器面の剥離が顕著である。*409* は口径が胴部最大径より大きく，口縁部内外面，胴部外面はヘラミガキ調整されるが，胴部内面はヘラケズリ調整である。*410* ・*411* は内外面赤彩される。

421 は台付壺，または台付鉢の底部である。脚台部内面，底部内面にハケメが残る。

器台（第63図，*425* ～*429* ）

器台は擬凹線器台と有段器台がある。*426* は直立する口縁部に擬凹線が施される受部をもち，これに外展する脚部がつく。外面は赤彩される。有段器台は短い口縁部が直立する浅い受部のものである。*428* は外反する口縁部をもつもので，高杯の可能性もある。*425* は脚基部径が大きく，外反器台の脚部と考えられる。

高杯（第63・64図，*430*～*441*）

高杯は有段高杯（*430*～*433*・*435*）と有段鉢形高杯（*434*）・開脚高杯（*436*）がある。*430*は小型の有段高杯で，口縁部は端部が外側に屈曲し，脚部は棒状である。*431*は口縁端部を摘んでヨコナデしており，上端部に浅い沈線が巡る。杯部は内外面横方向のヘラミガキ調整で，杯部内外面と脚部外面は赤彩される。外展する脚部には２孔１対の透孔が３箇所穿たれる。*432*は口縁部内側に粘土帯を貼り付けて帯状に肥厚させ，端部は面を取る。口縁部と杯底部の境には擬凹線が巡る。口縁部内外面，杯部内面は横方向のヘラミガキ調整である。内外面赤彩される。*435*はハの字状に開脚する脚部をもち，口縁部を欠損する有段高杯である。脚裾部には３箇所に透孔が穿たれ，脚裾端部は面を取り，ヘラ状器具でナデられる。*433*は杯底部を欠損した盤状高杯の口縁部で，外面全体にススが付着しており，転用されたものである。*434*は有段鉢形高杯で，丸く膨らみをもった杯底部と外反する口縁部の境には，広めの強いヨコナデを施して段を強調する。内外面には赤彩が施される。器形としては鉢となる可能性もある。*436*は脚裾部を欠損する開脚高杯。他の出土した開脚高杯の多くが赤彩されるのに対し，これには赤彩は見られない。*437*～*441*は高杯の脚部で，*440*のように有段棒状脚はＡ地区での出土は珍しい。有段部の肩には浅い刻みが等間隔に施され，２孔１対の透孔は４箇所に穿たれる。脚裾端部は面を取る。*441*も棒状脚で脚裾部が開脚するもので，４箇所に１孔の透孔が穿たれる。脚裾部内面はハケメ調整である。*439*は低脚の短い棒状の脚部で，上端に接合痕が残る。椀形の杯部が付いていたと推測される。脚裾部内面にはススの付着が認められ，蓋に転用されていた可能性がある。*438*の脚基部は円筒状を呈し，脚裾部で開脚する。

鉢（第64図，*442*・*443*・*446*～*460*）

鉢は有段鉢（*442*・*443*・*446*～*453*）と，無頸鉢（*454*～*460*）がある。有段鉢が一番多く，口縁部が長く外反するものと，口縁部が短く屈曲があまいものに分けられる。調整はほとんどが外面ヘラミガキ調整であるが，*446*・*452*のようにハケメ調整のものもある。*452*には外面にススが付着する。また，*442*は口縁部ヨコナデ調整，体部が内外面板状工具によるナデ調整で，器高の低い皿形の器形である。強いヨコナデ調整によって有段状に見せているという表現が相応しい。*447*は有段部があまく，口縁端部を強めにヨコナデする。無頸鉢は体部が直線的に立ち上がるものと内湾気味のものに分けられる。外面調整はハケメ調整とヘラミガキ調整のものがある。*454*は内外面ヘラミガキ調整で，底径が大きい杯形の器形である。底部外面はナデ調整されており，体部外面にはススが付着する。*456*・*459*の口縁部外面はヘラ状器具でヨコナデし，体部はナデ調整される。*456*の体部内面はヘラケズリ調整される。*457*・*458*は内外面ヘラミガキ調整されるもので，*457*は内外面赤彩され，*458*の内外面にはススの付着が認められる。*460*は斜め上方に直線的に伸びる体部をもつもので，内外面荒いハケメ調整である。厚い底部の外面中央には，直径５㎜の貫通しない孔が穿たれる。

台付鉢（第64図，*444*・*445*）

*444*は椀形の胴部に高台状の脚部がつくもの。口縁部内面と体部はヘラミガキ調整で，一部外面に赤彩痕が残る。*445*は短く踏ん張った形の脚台部である。

有孔鉢（第65図，*462*～*465*）

全形が判るものは*462*のみである。砲弾型の器形で，内外面ハケメ調整，外面下半部はヘラケズリ調整，尖底部に直径７㎜の孔が外側から穿たれる。*464*はここに掲載しているが，甕の底部に穿孔されたものである。底径2.8㎝の底部中央に直径５㎜の孔が穿たれる。*465*は内外面荒いハケメ調整の平底の有孔鉢である。底部はハケメ調整後ナデ調整で，中央に長軸1.1㎝の長円形の孔が穿たれる。

蓋（第65図，*466* ～*471*）

すべて有鈕蓋である。つまみは中央部が浅く窪むもの（*466* ～*468*），大きく窪み輪状になるもの（*469* ・*470*），ボタン状のもの（*471*）がある。内外面の調整はヘラミガキ調整が主で，*466* のみが内外面ハケメ調整である。*466* はつまみ端部は摘んで仕上げられ，つまみ基部に指押さえ痕が残る。また，口縁端部と内面には一部ススの付着が認められる。

ミニチュア土器（*461*）は手捏ねの鉢形土器で，口縁部がやや内湾気味に立ち上がり，内面はケズリ調整される。

天王山系土器（第65図，*472* ～*479*）

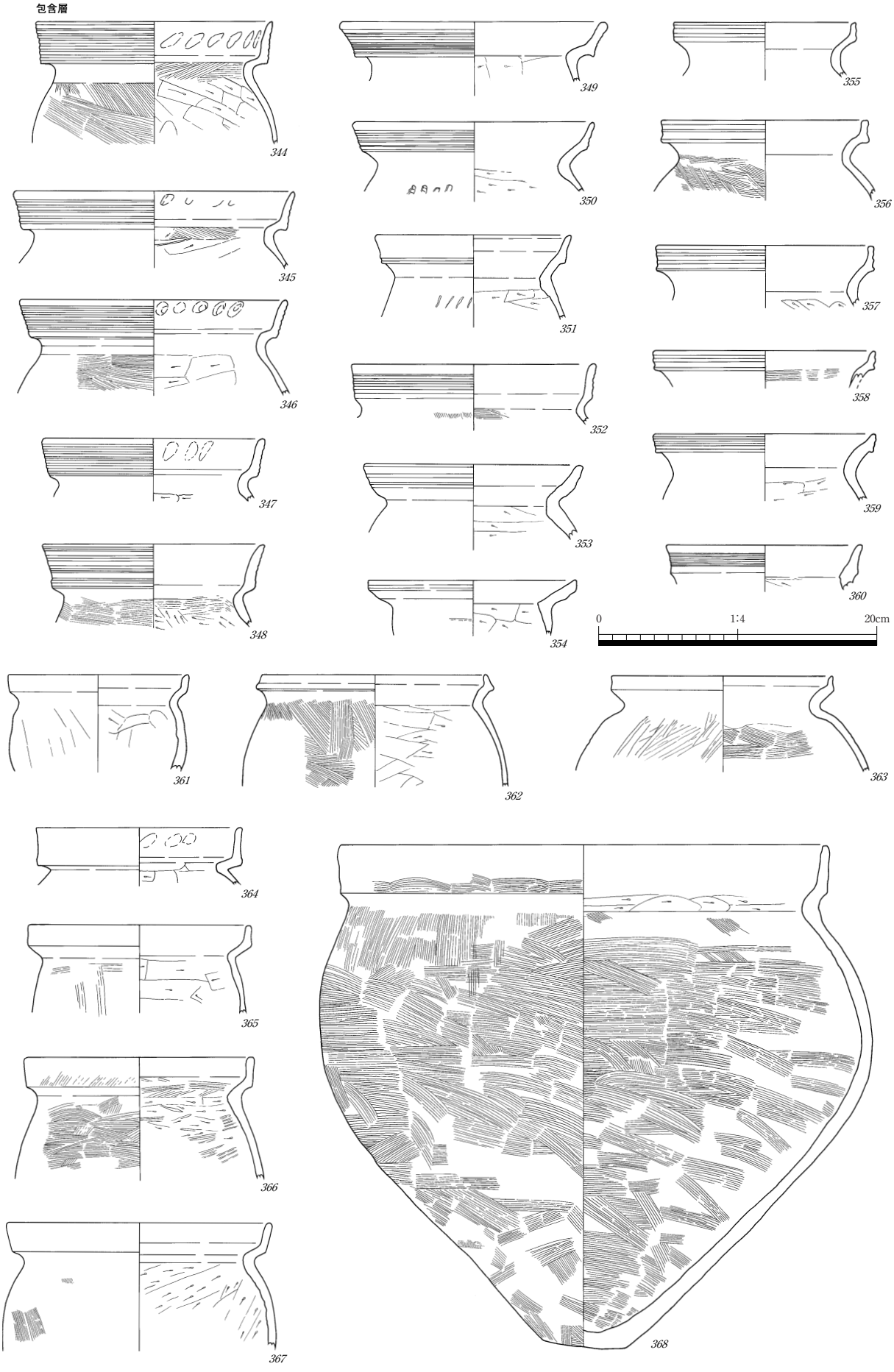
天王山系土器はＡ７・８地区の調査区中央部の包含層から甕（*472* ～*474* ・*476* ～*478*）・壺（*475* ・*479*）が出土している。*472* ・*479* はまだ破片が大きいが他は小片で，全形を知り得るものはない。*472* は口縁部が外反し，胴部があまり張らない器形である。口縁端部には内外面から刻みが施され，小型の突起が付く。平行沈線に区画された口縁部外面には縦位の縄文が充填され，中央には連弧文が見られる。胴部上半の文様帯には，横位の帯状縄文を押圧した後平行する沈線で菱形文を描いている。菱形文の中央は擦り消される。この文様帯の表面は，ナデつけられたようにやや光沢を帯びる。４本の平行沈線文で区切られたこの下端は，下向きの連弧文を巡らす。頸部には補修孔と思われる孔が１箇所穿孔される。*474* は刺突文と工字文風の沈線文が施文された小片である。*477* は甕の口縁部片。口縁端部を面取りし，内面には細かい刻みを施し，外面は剥離しているが，交互刺突文が施されていた痕跡が残る。沈線に区画されたＲＬの縄文地に連弧文が施文される。*479* は細かいＲＬの縄文が縦位に押捺される壺で，口縁端部は内外面から刺突文が施され２個１対の小突起が付される。胴部には補修孔が２個縦位に穿孔される。

Ｂ　石製品（第65図，図版148）

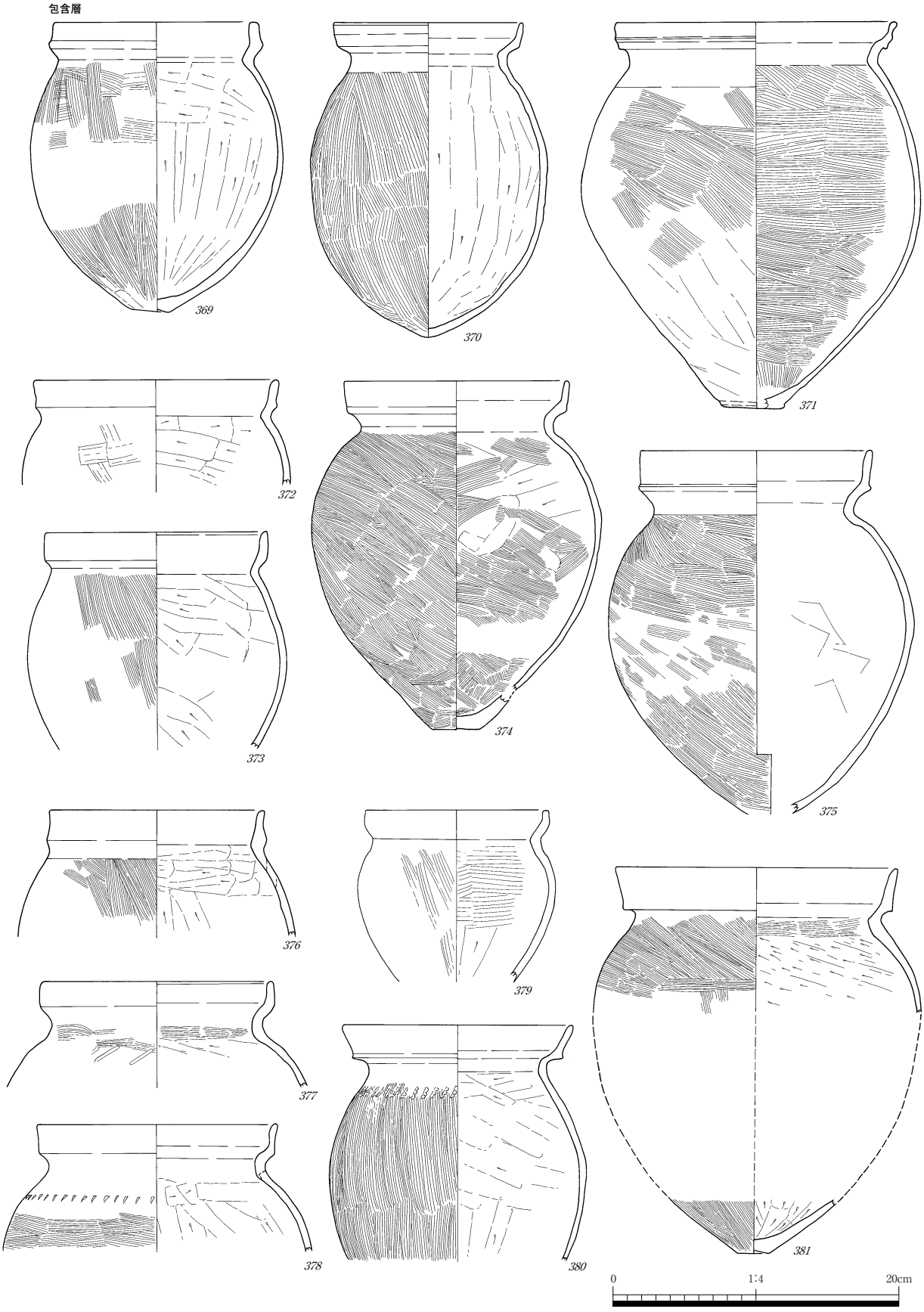
石製品は石鏃・凹石・砥石が出土した。Ｂ地区と比較すると出土量は少ない。

480 は流紋岩製の有茎石鏃。色調はＢ地区で出土した鉄石英製の管玉未成品等に近いが，より強い光沢をもつ。茎部は欠損している。ＮＥＪ－07の埋蔵文化財包蔵地確認調査で出土しており，報告書[注9]に掲載されたものと同じである。本調査時のＡ７地区に相当するトレンチで出土した。*481* は流紋岩製の凹石。扁平な礫の表裏に，敲打で生じた直径１～３㎜程度の痘痕状の窪みの集合によって凹部が形成されている。表面は凹部が特に顕著で円形に窪み，裏面は表面よりも浅い窪みになっている。使用例としては錐などの固定具が考えられる。*482* は泥岩製砥石。砥面は平滑で，中～仕上げ砥と思われる。実測図は２点の破片の接合状態を示しているが，分割後の破片を砥石としてさらに使用している。*483* は泥岩製砥石。地面側は欠損する。表裏両側面の４面に線状痕がみられる。砥面は平滑で，中～仕上げ砥と思われる。

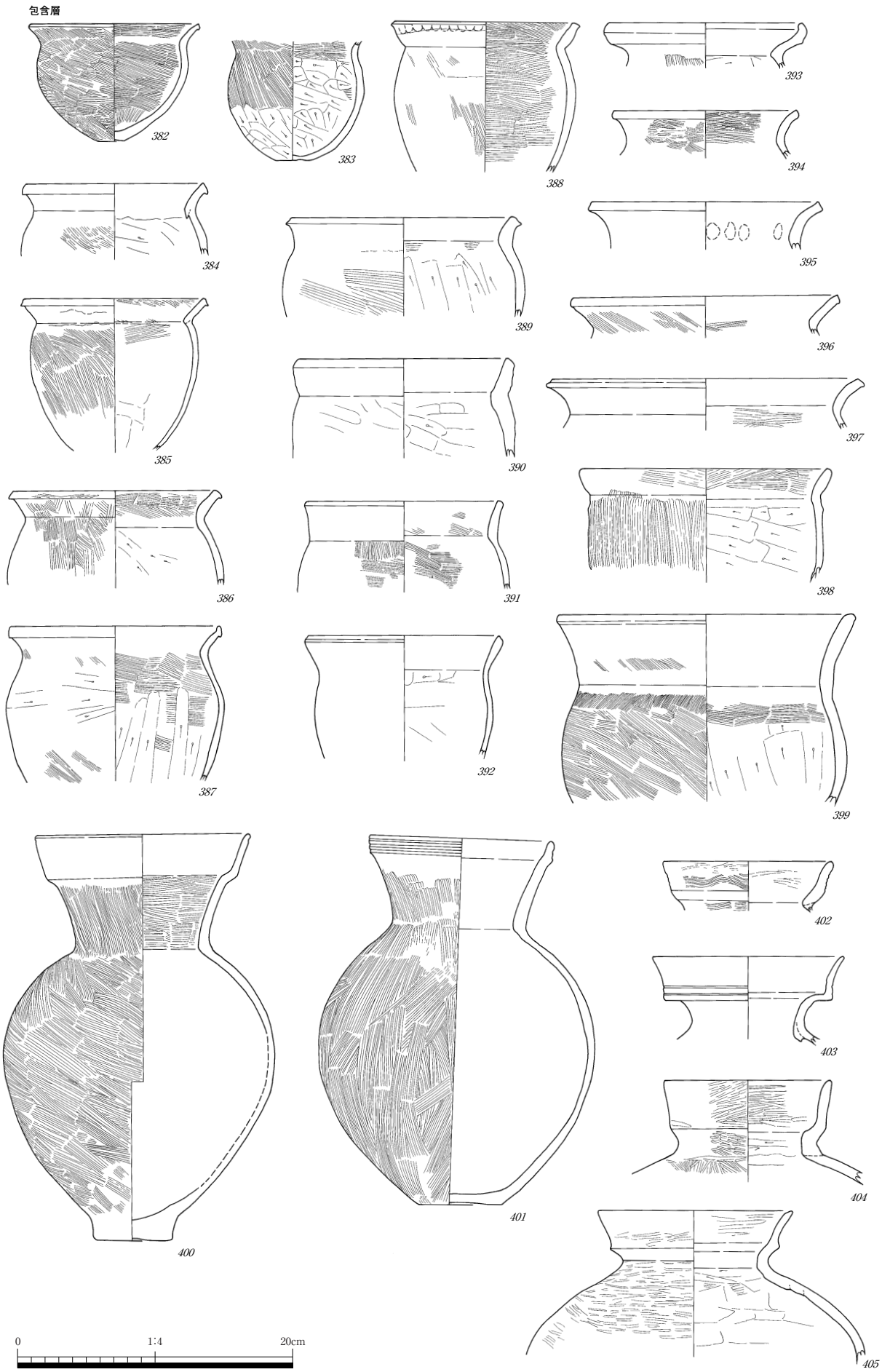
注９　財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　1993『能越自動車道関係埋蔵文化財包蔵地調査報告－小矢部市～福岡町間－』



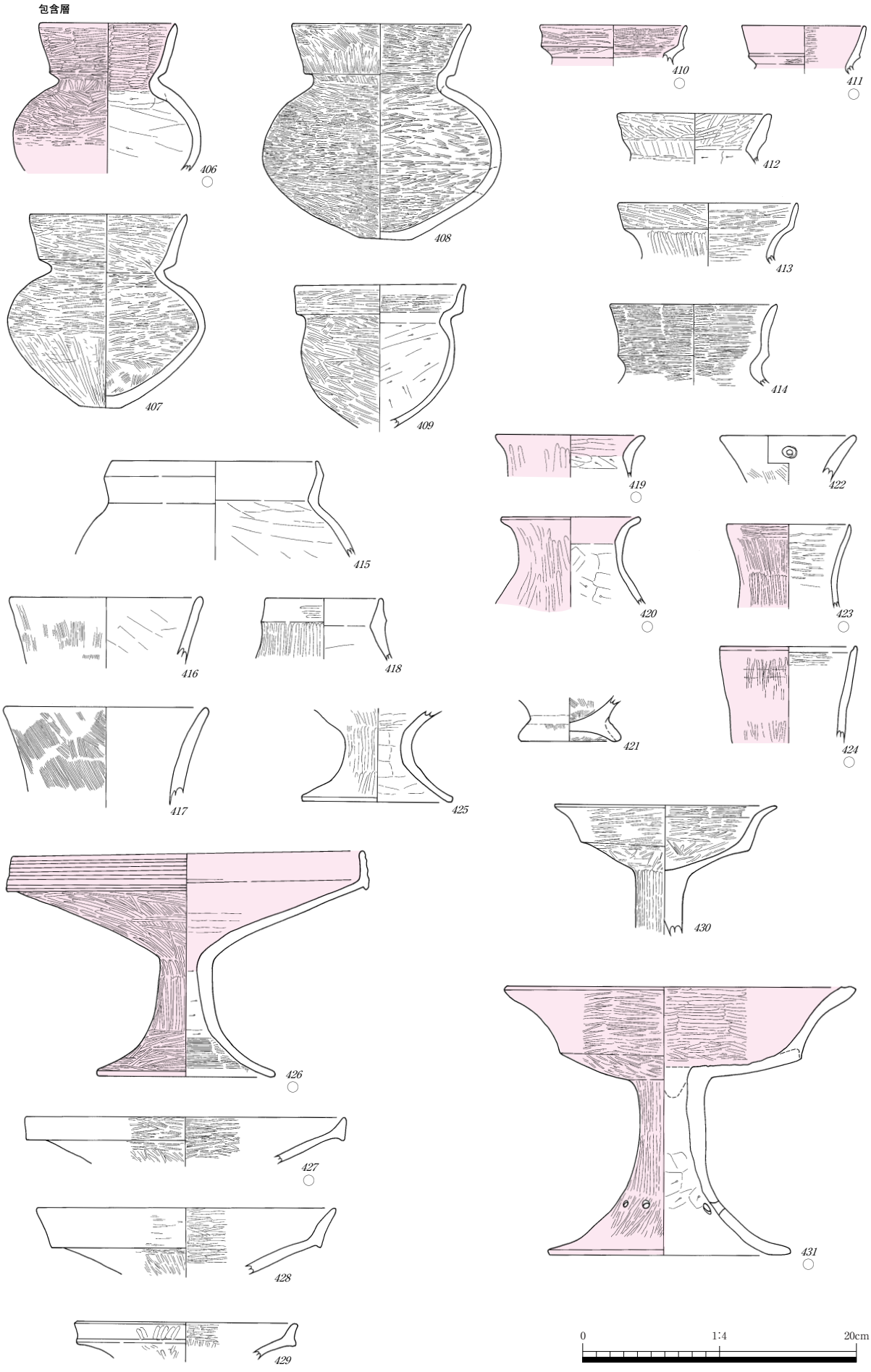
第60図　遺物実測図　(1/4)
A地区　包含層



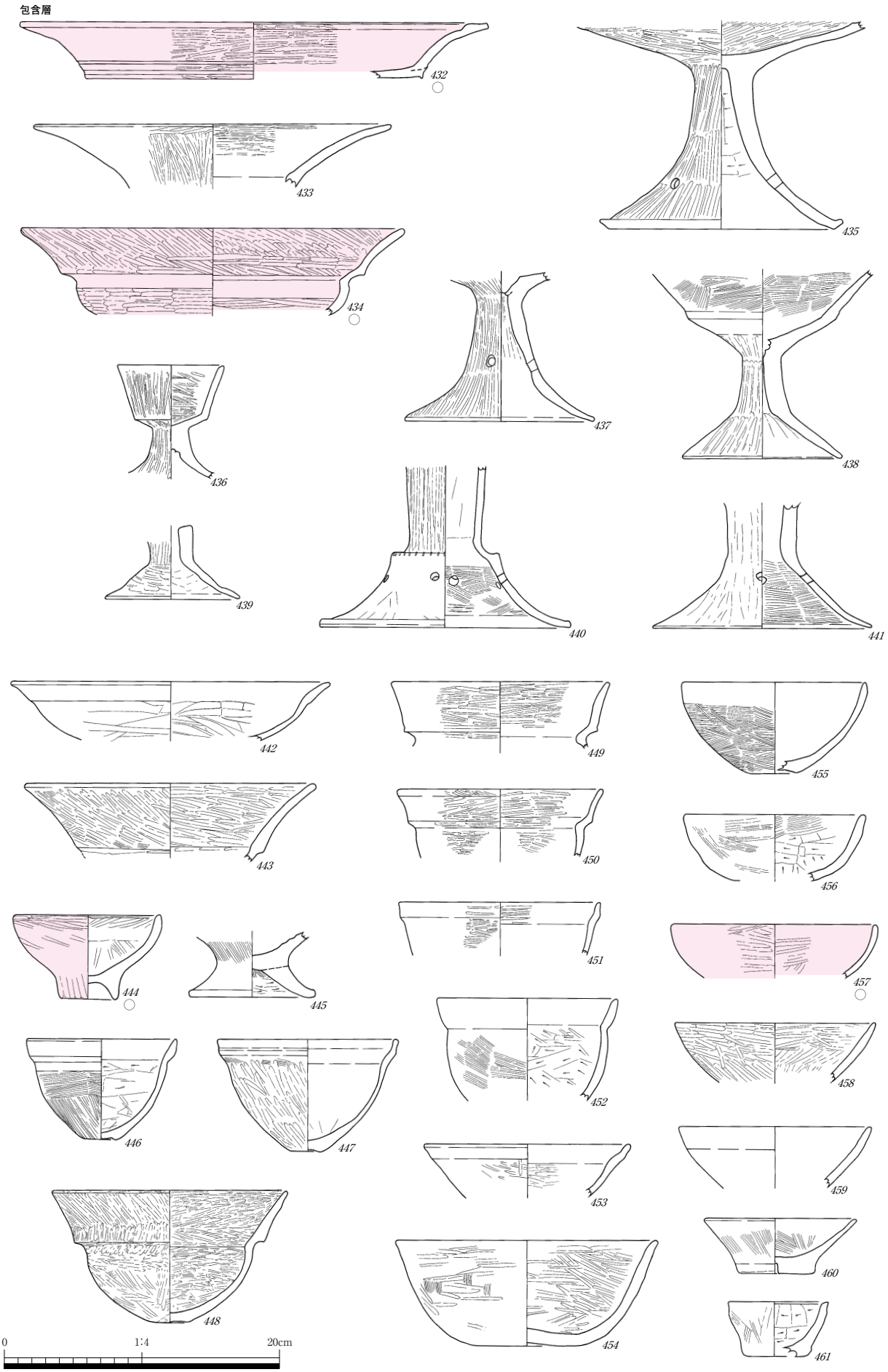
第61図　遺物実測図　(1/4)
A地区　包含層



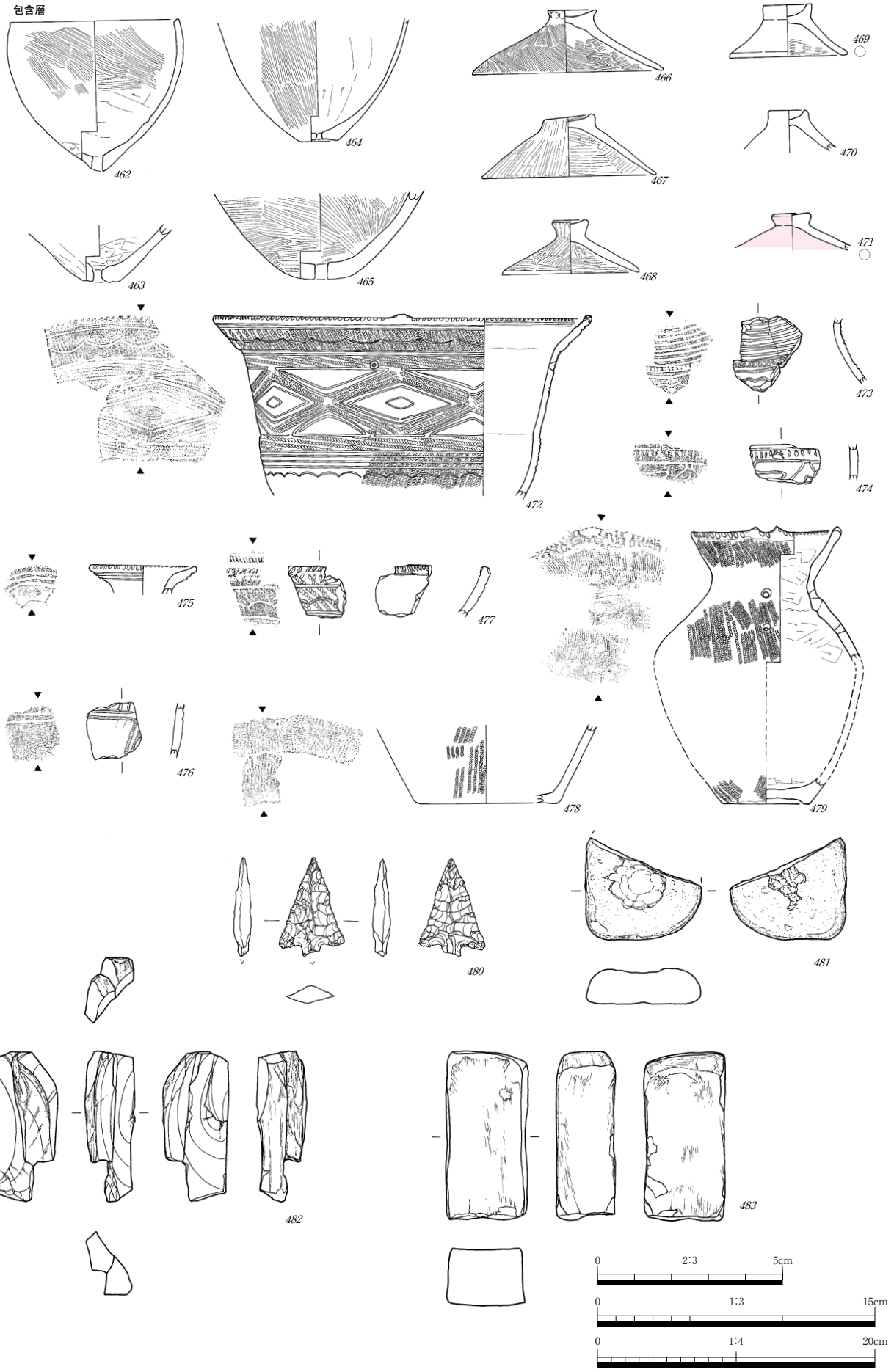
第62図　遺物実測図　(1/4)
A地区　包含層



第63図　遺物実測図　(1/4)
A地区　包含層



第64図　遺物実測図　(1/4)
A地区　包含層



第65図　遺物実測図　(*480*　2/3，*481*～*483*　1/3，*462*～*479*　1/4)
A地区　包含層

4　B地区

（1）遺構と遺物

B地区では，B１～７までの全地区で弥生時代の遺構を検出した（第66図）。検出した遺構は竪穴建物22棟（周溝式竪穴建物15棟，竪穴建物３棟，周溝式平地建物４棟），掘立柱建物５棟（うち周溝式掘立柱建物２棟），周溝遺構32棟，畠，柵，道路，土坑，溝，自然流路などである。集落は畠などの生産地（B１・３地区南側），自然流路や溝群などの空閑地（B２地区・B４地区西側・B７地区北側），建物・道路・土坑などの生活地（B３地区北側・B５・６地区・B７地区南側）の大きく３つの区域に分かれ，建物を多く検出したB５・６地区がその中心となる。遺構の時期は，出土した弥生土器から弥生時代後期（猫橋～法仏式期）に相当する。

A　竪穴建物

a　周溝式竪穴建物

５号周溝式竪穴建物（ＳＩ５，第67～69・111・140・141図，図版12・64・150・155～157）

B３地区の北端に位置する。周溝の一部がB４地区にかかり，南西側を古代～中世の自然流路ＳＤ2201に削られている。調査時は，複雑な埋土であったため５棟に分けていたが，隣接するB５地区の様相から整理段階で１棟とした。周溝は，西側の一部が２重になっている他は１重で巡る。東側でB５地区ＳＩ６の排水溝に合流する。周堤の盛り上がりは確認できなかった。柱穴は７基あるが並ばない。いずれも浅い。土坑は屋内部にＫ４・９の２基，屋外にK10の１基がある。なお，建物は１棟と考えたが，屋内部のプランが不整形，柱穴の位置，周溝の一部が２重になっていることから建て替えがあった可能性も考えられる。

遺物は，屋内部から弥生土器・石製玉作関連遺物・ガラス製玉類，Ｐ２・５・７から弥生土器・緑色凝灰岩剥片，Ｋ９から弥生土器・緑色凝灰岩剥片，周溝から弥生土器・石製品・緑色凝灰岩剥片が出土した。またＰ７からは，底面に弥生土器甕が横倒しの状態で出土した。遺構の時期は弥生時代後期で，排水溝を共有するB５地区ＳＩ６と同時期であろう。

弥生土器は甕・壺・高杯・鉢が出土した。*484*～*488*は甕。*484*は擬凹線甕。*485*は付加状甕で胴部外面ハケ，内面ケズリ。*486*・*487*は刺突受口甕。*486*は胴部から底部にかけて一部スス付着。頸部にハケの後，板状工具によるナデ，その下に連続刺突文を施す。*487*は，口縁部に３点１単位の櫛状工具による上方からの列点文を施す。*488*は底部で外面スス付着。底面は上げ底状。*489*は擬凹線短頸壺で，外面スス付着。口縁外面を赤彩する。外面の調整はハケの後にナデ。*490*・*491*は高杯。*490*は，有段高杯で裾部外面に黒斑が残る。脚部に１孔を確認した。裾部内外面にススが付着し，破損後に蓋として２次利用されたことが窺える。*491*は鉢形の杯部で，口縁部に４条の沈線を施す。内外面に赤彩痕が残る。*492*は擬凹線鉢。内外面ミガキの後，赤彩。底部に黒斑が残る。*493*はミニチュアの鉢か。内面にミガキを施す。*484*・*488*～*491*・*493*は柱穴，*485*・*486*は周溝，*487*・*492*は排水溝から出土した。

石製品は花崗岩製の敲石（*974*）が出土した。敲打面は天地面の２面ある。周溝から出土した。

石製玉作関連遺物は屋内部から緑色凝灰岩剥片，緑色凝灰岩製管玉未成品，勾玉未成品が出土した。また遺構検出時に周溝部分や隣接するＳＫ2983も含めて，800点以上もの緑色凝灰岩剥片が出土した。*976*～*984*は緑色凝灰岩製管玉の形割工程品。*978*は縦方向の分割により形割の素材剥片を割り取った様子が窺える。*985*～*989*は緑色凝灰岩製管玉の研磨工程品。*990*～*996*は緑色凝灰岩製管玉の穿

孔工程品。孔に沿って縦方向に割れたものが多い。*997*・*998*は勾玉完成品。ともに石材は同じであるが不明。扁平で薄い勾玉である。

ガラス製玉類は屋内部から管玉（*999*）が出土した。色調はターコイズブルーである。

6号周溝式竪穴建物（SI6，第67・70・71・74・112～114・131・142・143・238図，図版12・13・65～68・133・155～158・162・164）

B5地区の南西端とB4地区南東端に位置する。B4・5地区の間は水路があったため，一部調査が出来なかった。なお，当建物はB4地区調査時では建物と想定できず，土坑群として検出したが，整理時にB5地区と図面を合わせて見たところSI6の一部と判明した。周溝は途切れ途切れで全周せず，南側でB3地区SI5へとつながる排水溝へ流れている。周堤の盛り上がりは確認できなかった。屋内部の施設はB5地区のみで確認し，壁溝が全周し柱穴2基が並び，南側に土坑がある。形状は方形であろう。屋内の埋土はほぼ2層。柱穴はP1・2の2基を検出したが，その位置から本来は4本柱であったものと考えられる。P1は柱根が残り，掘形は柱根よりやや大きい程度であった。P2には柱根は残っていなかったが，断面で柱痕跡を確認した。屋内土坑はK1～3を検出した。K1は方形の2段掘りを呈し，内部とその周辺に弥生土器壺・甕・高杯がほぼ完形で見つかっており，貯蔵穴と考える。K2・3は浅い小穴で，埋土に炭化物が多く入っていた。これらは炉の灰などの排土を埋めるための穴と考えられる。

遺物は，屋内部・周溝・土坑から非常に多くの弥生土器が出土した。特に屋内部では，K1の周囲にほぼ完形で潰れた状態で甕・壺・高杯が並んでいた。このことから屋内部に棚状のものがあり，そこに物が置かれたまま廃絶したものと考えられる。またB4地区の周溝からは，横位で完形の甕，その隣に擬凹線台付壺が立位で出土した。この他に石製玉作関連遺物・ガラス製玉類・鉄製品が出土した。

弥生土器は甕・壺・高杯が出土した。*494*～*503*は甕。*494*・*495*・*497*・*500*～*502*は外面スス付着。*494*～*497*は受口甕。*494*の底部は上げ底状。*496*・*497*は小型甕。*496*は受口状口縁が崩れ，くの字状口縁に近い形状のもの。*498*・*499*は平縁甕。*498*の底面には圧痕が残る。*499*の調整は，内外面ともに板状工具によるナデ。*500*は付加状甕。調整は，外面が板状工具によるナデ，内面が胴部上半をケズリ，下半をカキトリ。*501*～*503*は丸縁甕。*503*は摩滅が激しく，調整は不明瞭。*504*～*511*は壺。*504*・*505*は短頸壺でいずれもハケ調整で，口縁端部を面取りする。*505*は胴部下半外面にススが付着し，甕としての用途も窺える。*506*は擬凹線小型壺。口縁内面と外面に赤彩。頸部には，2個1対の紐孔があり，出土していないが蓋の存在が窺える。胴部には，上半に1条の鋸歯文，中位に2条の平行沈線と2条の鋸歯文，下半に2条の鋸歯文が薄く施されているが，ススが付着しているため確認しづらい。外面は赤彩し，ススが付着していることから祭祀的な用途が考えられる。*508*は広口壺。*507*・*509*は，口縁端部に櫛状工具による列点文を施す刺突壺。*507*には円形浮文がつく。*509*は胴部下半にススが付着し，甕としての用途も窺える。*510*は無頸台付壺で，脚部を欠損。胴部下半には，二次焼成によるススが付着している。*511*は擬凹線台付壺で，頸部に2個1対の紐孔が2箇所ある。脚部は欠損しているが，口縁と同様に擬凹線が付くであろう。胴部には，平行沈線文・貝殻文・2重の同心円文・刺突文からなる文様がその構成はそれぞれ異なるが，7段に渡って施されている。外面は赤彩され，ススが付着しており，祭祀的用途が窺える。類例には，突帯部の形状はやや異なるが，石川県押野タチナカ遺跡(注10)，石川県佐々木アサバタケ遺跡(注11)，鳥取県青谷上寺地遺跡(注12)などがある(注13)。山陰系であろうか(注14)。*512*～*520*は高杯で杯部が外反するもの。*512*

注10　横山貴広　1989『押野タチナカ遺跡・押野大塚遺跡』石川県野々市町教育委員会
注11　栃木英道　1988『佐々木アサバタケ遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター
注12　北浦弘人他　2001『青谷上寺地遺跡　3』財団法人鳥取県教育文化財団，湯村功他　2002『青谷上寺地遺跡　4』財団法人鳥取県教育文化財団
注13　楠　正勝　2003「装飾器台の成立と展開」『庄内式土器研究ⅩⅩⅥ』，久田正弘　2003「弥生時代における影響関係について」『石川県埋蔵文化財情報　第9号』財団法人石川県埋蔵文化財センター　に類例が記載されている。
注14　高橋浩二　2002「北近畿系統の土器と山陰系統の土器」『富山大学人文学部紀要　第37号』富山大学人文学部のなかで，山陰系の搬入品もしくは忠実な模倣品と考えられるとしている。

～*514*・*516*・*522*が外反脚，*515*・*518*・*519*が有段脚。*513*・*519*・*521*には赤彩痕が見られる。*514*は口縁部と裾部の２箇所に黒斑が見られ，土器製作時に横に寝かせて（黒斑のある方が下になる）覆い焼きによって焼成を行ったものと考えられる[注15]。*517*は口縁内面に擬凹線が施され，全面赤彩で漆による補修痕が残る。*519*は口縁端部にヘラ状工具による刻みが施されている。*521*・*522*は小型。*521*は脚部上半に８条の平行沈線が施されている。*523*・*524*は鉢。*523*は受口状口縁の崩れたくの字状口縁で，肩部に連続刺突文を施す。胴部下半にスス付着。*524*は受口鉢で，口縁と肩部に連続刺突文を施す。外面に厚くスス付着。*494*・*496*・*501*・*504*・*505*・*512*・*516*・*520*・*522*～*524*は屋内部，*502*・*507*・*514*・*515*は屋内部貯蔵穴，*495*・*497*～*500*・*503*・*506*・*508*～*511*・*513*・*517*～*520*は周溝から出土している。*515*はＳＩ７周溝から出土した破片とも接合した。

木製品は柱根（*922*）がＰ１から出土している。残存状態が悪く，側面の加工は不明だが，木口は石製工具で２方向から加工している。樹種はヤマグワ。

石製玉作関連遺物は屋内部からは緑色凝灰岩石核・剥片，緑色凝灰岩製管玉未成品，鉄石英剥片・鉄石英製管玉完成品，石英剥片・ひすい石核・剥片，勾玉完成品・未成品が出土した。*1000*～*1014*は緑色凝灰岩石核，緑色凝灰岩製管玉未成品。*1000*は荒割工程品。表裏面の厚さをそろえて板状にした後，左右側面を叩き折りで分割している。*1001*～*1007*は形割工程品。*1001*は軟質で淡緑色の石材。太型管玉の未成品の可能性がある。*1008*～*1014*は研磨工程品。*1015*は穿孔工程品。*1016*は鉄石英製の管玉。穿孔部分から縦方向に欠損している。光にかざすと若干多角柱状の稜の名残が観察できるが，ほぼ円柱状に仕上げの研磨が施され，完成品に近い。*1017*～*1019*はひすいの石核で一部に礫面を残す。*1020*はひすい製勾玉の研磨工程品。*1021*は勾玉の研磨工程品。天面は研磨されていない。色調は淡緑色で，石材は不明である。*1026*は勾玉の完成品。色調は茶色で，石材は不明である。両側穿孔である。屋内部は半分ほどしか検出していないが，剥片や未成品が多く出土し，勾玉・管玉の生産を行っていた工房と考えられる。

周溝からは緑色凝灰岩石核・剥片，緑色凝灰岩製管玉未成品，石英剥片・ひすい石核・剥片，勾玉完成品が出土した。*1032*は荒割工程品で，素材剥片を分割した後の残核である。*1035*は緑色凝灰岩製管玉未成品で，四角柱状に研磨した後穿孔したもの。*1036*は不明石材の石核。裏面に研磨痕が観察できる。*1037*・*1038*は勾玉完成品。*1037*の色調は茶色で，石材は不明である。穿孔方向は孔内壁が均一な円筒状になっており不明である。*1038*の色調は*1037*よりも黒色が強いが，同じ石材を用いたものと思われる。両側穿孔である。頭端・尾端が*1037*は角張って，*1038*は丸く仕上げられている。

ガラス製玉類は屋内部から小玉（*1027*～*1030*）が出土した。色調はターコイズブルー。４点とも色・規格共にほぼ同一で，一連のものであったことが考えられる。

金属製品は屋内部の埋土の土壌洗浄により鉄製錐（*1031*）が出土した。長さ９㎜，最大幅1.5㎜を測る。石川県白山市の弥生時代後期の遺跡である乾遺跡[注16]から，緑色凝灰岩と共に同様のものが多量に出土しており，下老子笹川遺跡で出土した鉄製品も玉作りに関係することが考えられる。

７号周溝式竪穴建物（ＳＩ７，第72～74・114・115・131・137・140・144・145・270図，図版15・17・64・68～70・133・154～158・160・162・167）

Ｂ５地区の南側に位置する。周溝は，北東のＳＤ3528から建物を１周し，南西の排水溝を伝ってＳＤ2541に注いでいる。周堤の盛り上がりは確認できなかった。屋内部は壁溝が全周し，４本柱穴で中央に炉をもつ他に土坑がある。形状はほぼ方形で，土坑のある南側が少し外に出る。屋内部の埋土は炉のある中央部分が浅く（単層），壁溝に向かって深く（２～４層）なっている。柱穴には４本とも柱

注15　岡安雅彦　1999「野焼きから覆い焼きへ　その技術と東日本への波及」『弥生の技術革新』安城市歴史博物館　に黒斑について詳しく記されている。
注16　1991『社団法人石川県埋蔵文化財保存協会年報２　平成２年度』社団法人　石川県埋蔵文化財保存協会，2003年２月に財団法人石川県埋蔵文化財センターにおいて開催された環日本海交流史研究集会で実見させていただいた。

根が残っており，柱穴の掘形は，柱根とほぼ同じ大きさであった。炉Ｋ１は，埋土に炭化物を含む深さ約20㎝の灰穴炉である。屋内土坑Ｋ２は，壁溝の南西部に接続し，方形と円形の２段掘りになっている。内部からは，弥生土器甕（逆位で潰れた状態）・高杯・棒状木製品（立位）などが出土しており，貯蔵穴と考える。Ｐ５は小穴でＫ２に隣接し，Ｋ２内に立位で見つかった棒状木製品と組み合わせて貯蔵穴Ｋ２の蓋として機能していたと考える。

遺物はＫ２以外では，屋内部から弥生土器・木製品・石製玉作関連遺物，壁溝から弥生土器・石製玉作関連遺物，周溝から弥生土器・木製品・石製玉作関連遺物・ガラス製玉類などが出土した。なお当建物は，溝ＳＤ2541と道路ＳＦ3526に挟まれた場所に他の建物と切り合うことや隣接することなく単独で位置することや大型の貯蔵穴の存在などから他の建物とは異なる特殊な性格が窺える。

弥生土器には壺・甕・高杯・器台がある。屋内部から壺・甕・高杯，壁溝から高杯，周溝から壺・甕・高杯・器台（横位で単独）が出土した。

525 ～*533* は甕。*525* ～*527* は擬凹線甕。*527* はくの字状口縁の変形か。*528* は刺突受口甕で，頸部に７条の櫛描直線文を施す。*529* は受口甕。*530* は平縁甕。*531* ・*532* は付加状。*531* は受口状口縁の崩れた形で，口縁部に連続刺突文を施す。*533* は胴部下半～底部のみ。*525* ～*530* ・*532* ・*533* は外面スス付着。*534* ～*540* は壺。*534* ・*535* は短頸壺。*536* ・*537* は装飾壺。*536* は口縁端部外面に擬凹線と３個１対の円形浮文を２箇所，２個１対の円形浮文を３箇所施す。口縁端部内面に櫛状工具による列点文と竹管文を施す。*537* は口縁端部を面取りし，櫛状工具による規格性のない列点文を施す。肩部には５条１単位の櫛描波状文と直線文を施す。*538* は広口壺で，頸部に４～５条の擬凹線を施すが，摩滅しており不明瞭。*539* ・*540* は胴～底部のみ。*539* は底面上げ底状。*540* は外面にタタキ状の痕跡があり，この上にミガキを施している。*541* ・*542* は器台。*541* は筒状に近い脚部。４箇所に透孔がある。*542* は外反器台で，受部と脚部がほぼ同型のもの。口縁端部及び裾端部を面取りし，付加状とする。脚部の３箇所に透孔がある。*543* ～*548* は高杯。*543* は杯部のみで，口縁端部にハの字状スタンプ文を向きを変えて２列施し，赤彩する。*544* ・*545* は拡張有段高杯で，杯屈曲部に沈線を１条引く。*544* は口縁内面にススが付着しており，破損後逆位にして蓋としての２次利用が窺える。*545* は裾部に上下２段の透孔がある。*546* は杯部に黒斑がある。*547* は裾部に３箇所の透孔があり，有段部と端部に連続刺突文を施す。*548* は裾端部にススが付着し，蓋としての２次利用が窺える。*525* ・*529* ・*533* ・*535* ・*539* ・*541* ・*547* は屋内部土坑，*526* ・*534* ・*536* ・*538* ・*548* は屋内部，*527* ・*528* ・*530*～*532* ・*537* ・*540* ・*542*～*546* は周溝から出土した。*547* はＳＩ６周溝から出土した破片も接合した。

木製品には柱根・用途不明部材がある。柱根はＰ１（*918*）・Ｐ２（*919*）・Ｐ３（*920*）・Ｐ４（*921*）から出土した。いずれも側面を工具で加工し，整形する。*918* ～*920* の断面はこの加工によって多角形となり，稜線がよく残る。木口は*921* は不明瞭だが，*918* は４方向，*919* は３方向から石製工具で加工し，平坦面を作り出す。*920* は木口を鉄製工具で加工し，平滑に仕上げている。樹種は*918* ～*920* がヤマグワ，*921* はコナラ節。*955* は周溝から出土した用途不明部材。おそらく方形となる板材の角部分で，側辺に２箇所，上辺に１箇所，木釘が残存する。*957* は屋内部から出土した針状の用途不明材。樹種はヒノキ。

石製品は軽石（*972*）が出土した。若干面を持つように見えるが，全体に摩耗しており，使用痕などは不明である。

石製玉作関連遺物は屋内部からは緑色凝灰岩石核，緑色凝灰岩製管玉完成品・未成品，石英石核，

勾玉完成品，蛋白石剥片が出土した。*1039* は緑色凝灰岩の荒割工程品。敲打により分割を行い，さらに２分割しようと中央を敲打しているが，分割できていない。*1040* ～*1052* は緑色凝灰岩製管玉の形割工程品。*1040* は裏面が包含層から出土した*1041* の左側面と接合し，*1041* の右側面は同じく包含層から出土した*1042* の左側面と接合する。立方体に整形した石核に少なくとも３回，１方向から打撃を加え分割を行っている。*1040* の研磨痕は*1041* にも続きがあり，形割工程に入る前の石核整形時のものである。*1044* は裏面に仕上げのような平滑な研磨が施されている。研磨痕はほとんど観察できない。*1053* ～*1056* は緑色凝灰岩製管玉の研磨工程品。*1053* は左右側面に研磨を施している。その他は四角～多角柱になるよう研磨されている。*1057* ・*1059* ～*1061* は緑色凝灰岩製管玉の穿孔工程品。*1057* は太型のものである。*1059* は天面からの穿孔が貫通している。地面側の欠損面には穿孔によりつけられた窪みが観察でき，両側穿孔の破片を利用したものである。*1058* ・*1062* ～*1066* は仕上げの研磨から完成までの工程。*1062* ～*1066* の表面は光沢を持つように研磨され，孔内壁は穿孔方向が分からないほど円筒状に整形されている。また*1062* ～*1064* の規格はほぼ同じである。*1058* は仕上げの研磨の直前に荒い研磨で多角柱状から円柱状に整形したもの。長軸と平行になるように研磨を施すものが多いが，これは直交するよう研磨を施している。*1062* は仕上げ研磨の際に穿孔の行き違い部分が削り取られ，大きく穴になっている。*1067* ・*1068* は勾玉の完成品。*1067* は頭部を欠損するが，残存部の状況から完成品と思われる。*1068* の色調は淡緑色で光にかざすと若干光を通す。石材は不明で，片側穿孔である。*1069* は石英の石核。裏面は礫面が残っており，石英は円礫を素材として加工を行っていることがいえる。*1070* は蛋白石の剥片。ガラス質で若干光を通す。

周溝からは緑色凝灰岩石核，緑色凝灰岩製管玉未成品，勾玉完成品が出土した。*1072* は緑色凝灰岩の荒割工程品。天面は分割の際の敲打により打点が潰れている。*1073* は緑色凝灰岩製管玉の穿孔工程品。*1074* は勾玉の完成品。色調は茶色で，石材は不明である。両側穿孔である。

ガラス製玉類は管玉と小玉が出土した。*1071* は管玉で屋内部から出土した。穿孔部分から縦方向に欠損している。ほかのガラス製品に比べ白濁しているため透明度は低い。色調はナイルブルーである。*1075* は小玉で周溝から出土した。色調はターコイズブルーである。

８号周溝式竪穴建物（ＳＩ８，第75～77・116・131・146図，図版16・17・69～71・133・155～158・161・162）

Ｂ５地区の西端とＢ４地区東端に位置する。Ｂ４・５地区の間は，水路があったため一部調査が出来なかった。なお，当建物はＢ４地区調査時では，建物と想定できず，土坑群として検出したが，整理時にＢ５地区と図面を合わせて見たところＳＩ８の一部と判明し，合成した。周溝はＢ５地区で全周し，北側で一部２重になっており，掘り直しと考えられる。この２重周溝部分では，外側の方が新しい。周堤の盛り上がりは大きくは確認できなかったが，その基部を南北の断面で確認した。屋内部はＢ５地区側では，壁溝が全周し，柱穴・炉がある。形状は方形であろう。屋内の埋土はほぼ２層で，壁溝付近で３層と中心から壁溝に向かって深くなっている。

また埋土には炭化物が多く入り，床面には炭化材が中心に向かって放射状に残っており，「焼失住居」と考えられる。炭化物は埋土全体に見られたが特に壁溝付近に多い。壁溝付近では更に炭化材も多く残っていたことから，建物の燃焼時に中央部分が火元で火力が強く屋根材の上部は焼け落ち，下部のみが炭化材として焼け残ったと考えられる。石野博信氏の焼失住居分類(注17)では外炭Ｂ型となる。

柱穴はＰ１の１基のみの検出だが，その位置から本来は４本柱であったものと考えられる。Ｐ１は柱根が残り，掘形は柱根よりやや大きい程度であった。炉Ｋ１は隅丸方形と見られ，深さ約10㎝で２

注17　石野博信　1985『日本原始・古代住居の研究』吉川弘文館

層からなり，上の層に炭化物が多量に含まれていた。

遺物は屋内部・周溝の特に北側から非常に多くの弥生土器を検出した。屋内部では，壁溝上面に高杯や甕が炭化材の間に多く出土した。この他に敲石・石製玉作関連遺物が出土した。

弥生土器は壺・甕・高杯・器台が出土した。*549*～*562*は甕。*549*・*550*は擬凹線甕で，いずれも５条の擬凹線を施す。*550*は小型で，肩部に連続刺突文を施し，口縁部にはススが厚く付着する。*551*・*552*は有段甕。*551*は肩部に連続刺突文を施し，外面はほぼ全面にスス付着。*552*は外面を板状工具ナデ，内面をケズリ。*553*・*554*は刺突受口甕だが変形し，くの字状口縁に近い形となっている。*553*はヘラ状工具，*554*はハケ状工具による連続刺突文を施す。*555*～*559*は付加状甕で，いずれも外面にスス付着。*560*・*561*は有段無文口縁と付加状と折衷のようなもの。*562*は小型で丸縁。胴部下半～底部に黒斑が見られる。*563*～*566*は壺。*563*はやや小型の広口壺。外面と口縁内面をミガキ，胴部内面をケズリの後ナデ。*564*は小型壺。口縁・底部を欠損する。胴部内面に輪積み痕・指頭圧痕が残る。外面スス付着。*565*・*566*は底部。*565*は底面上げ底状で，内外面スス付着。*566*は小型と考えられ，底部内面に窪みがある。*567*・*568*は器台。*567*は擬凹線器台。擬凹線は口縁部が８条，裾部が９条。裾部には４方透孔がある。*568*は筒状の器台受部と考えるもの。*569*～*572*は高杯。*569*は杯と脚の接合部を欠いているが，高杯の棒状脚部。脚部上半に３条，中位に４条の平行沈線を施す。*570*は口縁端部内面と杯部中位に半截竹管文を２列，脚有段部上面に半截竹管文を１列，側面に半截竹管文を１列と竹管文を１列，裾端部に半截竹管文を２列とその間に竹管文を１列施す。焼失住居から出土のため，ほぼ全面にススが付着している。*571*・*572*は裾部のみでそれぞれ透孔を１箇所確認した。*571*は有段部に刻目を施す。*572*は有段部に擬凹線，端部に刻目を施し赤彩する。*549*～*559*・*561*・*563*～*569*・*571*・*572*は周溝，*560*・*562*・*570*は屋内部から出土した。

木製品は柱根（*923*）がＰ１から出土している。残存状態が悪く，側面と木口の加工は崩れて確認できない。樹種はヤマグワ。

石製玉作関連遺物は屋内部からは緑色凝灰岩石核，緑色凝灰岩製管玉未成品が出土した。量はＳＩ10（新）と比較すると少なく，小規模な玉作りが行われていたと考えられる。*1076*は隣接するＢ４地区の包含層から出土した*1077*と接合した。一辺を研磨により整形している。*1076*の表面の天面側から分割前に打撃を加えている。ここから分割はせず，表面の右側からの打撃で分割される。分割された*1076*・*1077*は荒割工程品で，次の段階の形割未成品を製作するための素材となる。*1078*は研磨工程，*1079*・*1080*は穿孔工程のもの。

周溝からは緑色凝灰岩石核，緑色凝灰岩製管玉未成品，ひすい石核，勾玉完成品が出土した。*1083*は緑色凝灰岩の荒割工程品。*1084*・*1085*は緑色凝灰岩製管玉の形割工程品で，分割後調整を加えたもの。長辺に打撃を加え石核から分割し，その後柱状品の天地面から押圧剥離を加え，やや多角柱状に整えている。*1086*は緑色凝灰岩製管玉の穿孔工程品。*1087*は勾玉の完成品。色調は茶色で，石材は不明である。穿孔方向は孔内壁が均一な円筒状になっており不明である。穿孔の周囲は表裏面共に円形に一段窪んでいる。回転により発生したもので，穿孔の作業時に生じたものと考えられる。頭端・尾端は丸く仕上げられている。*1088*はひすいの石核で一部に礫面を残す。

９号周溝式竪穴建物（ＳＩ９，第78～82・117・132・137・138・140・146・147・262図，図版18～20・71～73・75・134・138・139・150・155・156・158・162・167）

Ｂ５地区の北西端に位置する。北側が調査区外となっている。周溝は全周し，ＳＩ10（旧）の周溝を切る。周堤の盛り上がりは確認できなかった。屋内部は壁溝が全周し，柱穴・炉・土坑がある。形

状は円形であろう。屋内の埋土はほぼ２層で，壁溝付近で３層と中心から壁溝に向かって深くなっており，噴砂により切られている。更に炉に切られる埋土が屋内部全域に広がっていることと，周堤部に円形に廻る土坑７基（ＳＫ3613～3619）があることから，同じ場所で建て替えたことが窺える。

埋土には炭化物が多く入り，床面には垂木材と考えられる炭化材が中心に向かって放射状に残っており，「焼失住居」と考えられる。炭化材には垂木材の他板材や水準器がある。水準器（*958*）は壁溝に埋められていた。この他に炭化材に混じって小石が出土しており，屋根上に置かれていたものと考える。石野博信氏の焼失住居分類では外炭Ｂ型となる。

柱穴は８基あり，その位置から本来は円形に廻るものと考えられる。ただし建て替えにより本数が多く，きれいに並んでいない。主柱穴はＰ１～６と調査区外の北側に２本を想定すれば，円形に並ぶ８本柱となるであろう。柱根はＰ１～３・５・６・８に残っていた。Ｐ１～３は柱根に一回り大きな掘形を持つ。Ｐ４は柱根はなかったが礎板が残っていた。Ｐ６は柱根の一部とその下に礎板が残っていた。Ｐ５・７は小穴。Ｐ８は柱根が２本重なっており，柱根の切り合いから建て替えが考えられる。Ｐ７・８は，その位置から円形に並ぶ主柱穴を内部で支える柱の役割であったものと考えられる。炉Ｋ１は不整円形で，深さは約14㎝で２層からなり，上の層に炭化物が多量に含まれていた。土坑はＫ２～４の３基ある。Ｋ２は噴砂に切られ変形しているが，埋土から切り合いが見られる。また，上部に板状の炭化材が数枚並んで残っており，土坑の上に板で蓋をしていたものと考えられる。Ｋ４はドーナツ状の掘形を持ち，Ｐ１に切られる。

遺物は屋内部・周溝から弥生土器・木製品・砥石・石製玉作関連遺物・炭化米などが出土した。屋内部では壁溝に甕が炭化材の間に横位で潰れた状態で出土した。

弥生土器は壺・甕・高杯・器台が出土した。*573*～*579* は甕。*573*・*574* は擬凹線甕。*573* は４条，*574* は３条の擬凹線を施す。*575*・*576* は有段甕。*575* は受口状口縁の変形か。外面スス付着。*576* は胴部外面左上りハケ。底面ハケ調整。*577* は刺突受口甕で外面スス付着。*578* は受口甕と考えるが，付加状口縁に近く変形している。*579* は付加状甕で外面スス付着。*580*～*586* は壺。*580* は長頸壺。*584* は擬凹線短頸壺。４条の擬凹線からなる。*582* は頸部上半に２個１対の竹管刺突文を施す。*583* は頸部上半にヘラ状工具による刺突文を施す。*580* は胴部に黒斑があり，その上にＸ状の籠目痕が残る被籠土器[注18]。口縁端部を欠損する。*581* は短頸壺。口縁部内面に２個１対の竹管文がある。*585* はくの字状口縁広口壺。口縁端部を面取りし付加状にする。*586* は底部で，黒斑がある。底面は上げ底状。外面は底面までハケ調整。*587*・*588* は器台。*587* は擬凹線器台。擬凹線は口縁部が13条，裾部が７条。裾部にスス付着。*588* は擬凹線器台。口縁に２条の擬凹線を施す。摩滅が激しく調整は不明瞭。*589*～*591* は高杯。*590* は拡張有段高杯。*591* は外反脚，*589* は有段脚。*592*～*594* は鉢。*592* は擬凹線口縁に貝殻刺突で鋸歯文状の刻みを施す。外面スス付着。*594* は丸縁で外面スス付着。*593* は無頸鉢。調整は内面は螺旋状にハケ，外面は摩滅が激しく不明。

573・*577*・*580*・*582*・*585*・*588* は屋内部，*578*・*586* は柱穴，*574*～*576*・*581*・*583*・*587*・*589*～*594* は周溝から出土。*588* はＳＩ10（新）周溝出土破片，*591* はＳＩ10（旧）周溝出土破片と接合した。

木製品には柱根・容器・工具がある。

柱根はＰ１（*924*）・Ｐ２（*925*）・Ｐ３（*926*）・Ｐ６・Ｐ８（*927*・*928*）から出土した。*924*～*927* は木口の加工痕は不明瞭だが，平坦面を作り出す。*924*・*925*・*927* の側面には工具は不明だが加工痕が残る。*928* の木口は周囲から中心を残して削りこんでおり，伐採痕かと考えられる。樹種は*924*

注18　後藤信祐　1989「被籠土器考」『栃木県考古学会誌』第11集　栃木県考古学会

がヒメシャラ，*925* はカエデ科，*926* はマカンバ，*927*・*928* がクヌギ節。なお図示していないが，Ｐ５から出土した柱根は放射性炭素年代測定を行い，^{14}Ｃ年代では1930±40と測定されている。

950 は刳物桶。器高は27.2㎝で，横断面が平らに近いため，楕円形になる桶の長辺部分か。内面下部には角に丸みのある四角形の穴と，やや斜め下から打ち込んだ木釘が残り，これは底板を止めるためのものと考えられる。樹種はスギ。

958 は「水準器（水盛り）」(注19) と仮称しているもので，全面が炭化して破損が激しい。現存長は142.5㎝で，長い角材を断面逆台形に削りこみ，平らな底部内面からやや外湾して長辺内面が立ち上がる。長辺上面から外面はほぼ垂直となる。短辺内面はまわりの部分が炭化しつつもかろうじて形を保っているのに対し，崩れて裏面まで抜け落ちている状況だが，これはただ破損したのか，それともともと方形の孔が開けられていたのかについては不明である。長辺上面には鑿状の工具で，内側から外側へ浅い刻みを施す。この刻みは両長辺上面の左右同じ位置に，またほぼ等間隔に彫りこまれているが，何を意味するものかは不明である。Ｂ７地区ＳＩ19周溝からも，これと同様と考えられるものが出土しているが，こちらの刻みの位置は左右で違っている。木口は破損が激しい。裏面は出土時は遺存状態の悪さから，裏返すことなど考えられもしない状況であったため，保存処理終了後に観察したが，ほぼ平らで，長辺に沿ってわずかな突帯が続くようであるが，これも明らかではない。*958* は壁溝にぴったりと収まって出土したため，壁板を落とし込むための住居構造部材ではないかというご指摘もいただいたが (注20)，断面の形状や刻みの意味を考えると特定しがたい。住居構造部材への転用の可能性も含めて，現状としては水準器として工具に含めておく。樹種はケヤキ。

石製品は花崗岩製の磨石（*973*）が出土した。使用面は地面側のみで，擦られて平たくなっている。また周堤部で検出したＳＫ3613からは砥石（*2164*）が出土した。凝灰岩製の大部分が欠損していると思われるが，表・左右側面に砥面がみられる。砥面は平坦で，細かい線状痕がみられる。地面は先端の平たいもので削った痕跡が上下方向にみられる。整形痕と思われる。

石製玉作関連遺物は屋内部からは緑色凝灰岩剥片，緑色凝灰岩製管玉完成品・未成品，鉄石英剥片，石英石核・剥片，ひすい石核が出土した。*1089*～*1094* は緑色凝灰岩製管玉の未成品。*1095*・*1096* はひすい石核。*1097*・*1098* は石英石核。*1097* の分割面には水晶状の結晶が観察できる。*1097*・*1098* は共に一部に礫面を残す。出土量は少なく，小規模の玉作りを行っていたか，周辺の建物からの流れ込みと思われる。

周溝からは緑色凝灰岩石核・剥片，緑色凝灰岩製管玉未成品，鉄石英剥片，石英剥片が出土した。*1099* は白い斑点がみられる硬質の緑色凝灰岩の荒割工程品で，打点やリングが明瞭に残る。一方向からの打撃で素材剥片を分割した後の残核である。主要な打点は表・裏・左側面の３箇所にみられ，裏面→左側面→表面の順に剥離を行っている。*1100*～*1102* は緑色凝灰岩製管玉未成品。*1101* は形割工程品，*1100* は研磨工程品，*1102* は穿孔工程品。

10号周溝式竪穴建物（ＳＩ10，第78・83～88・118・119・133・134・136・137・139・148～165図，図版18・21・23・72～75・135・136・139・149・155～159・162・164～167）

Ｂ５地区の北端に位置する。２棟の切り合いがみられ，ここでは新旧に分けて記述する。

ＳＩ10（新）は床面積51.4㎡を測る。周溝はほぼ全周し，南側で一部２重になっているが新旧関係はなく，張り出し部状に同時に存在していたものと考える。周堤の盛り上がりは確認できなかった。屋内部は壁溝が全周し，柱穴・炉・土坑がある。形状はほぼ円形。屋内の埋土はほぼ２～３層で壁溝に向かって深くなっている。

注19　宮本長二郎氏の御指摘による。
注20　山田昌久氏の御指摘による。

埋土には焼土・炭化物が多く入り，床面には炭化材が中心に向かって放射状に残っており，「焼失住居」と考えられる。炭化材の上には焼土または焼土を含む層が厚く堆積し，木材（屋根材）の上に土が載る土葺き屋根であったことが判明した。更に焼土には小石が混じっており，これらも土と一緒に葺かれていたと考えられる。また中心部分には焼土・炭化材がなく，この部分の屋根が通気口になっており，土が葺かれていなかったものと考えられる。つまり主柱穴の外側（裾部下屋）は土葺き，中央部の上屋は草葺きなどで，宮本長二郎氏の住居分類(注21)にある二段伏屋式に相当しよう。石野博信氏の焼失住居分類では全炭全焼Ｂ型になる。ちなみにこの建物は下老子笹川遺跡で最も残りの良い「焼失住居」である。

柱穴はＰ１～10の10基を検出した。その位置からＰ１～６の６本が主柱穴で六角形に並び，中央のＰ７～10の４本がほぼ方形に並び，主柱を支える役割（棟持柱）をしていたものと考えられる。柱穴の大きさは前者が後者より大きく，残っている柱根も太い傾向にある。柱根はＰ１～10で残っていた。またＰ４・５では柱根の下に礎板が敷かれていた。

炉Ｋ１は上が隅丸方形，下が円形の２段掘りで３層からなり，埋土に焼土がブロック状に入っていた。深さは２段掘りの底面で約38㎝を測る。土坑はＫ２の１基。大型で浅い。Ｋ３～５はいずれも浅い小穴，埋土は単層である。

ＳＩ10（旧）は床面積98.4㎡を測り，Ｂ５地区で最大の建物である。周溝は東側に開口部がある他は全周するものと考える。また，南側で幅が広がる部分があり，張り出しと考えられる。ちなみにこの上のＳＩ10（新）にもほぼ同位置に張り出し部が見られる。形状はほぼ円形。周堤の盛り上がりは確認できなかった。屋内部は一部焼失住居の壁溝に切られるものの壁溝が全周し，その他に柱穴がある。形状は円形。屋内の埋土は焼失住居がちょうどその上に重なっていたため，その整地を受けているためか一部明らかではないが，ほぼ２層で壁溝に向かって深くなっている。なお，埋土には炭化物が混じっていたが，これは焼失住居の影響を受けたものである。

柱穴は11基ありＰ７を除いてほぼ円形に並ぶ。このことから10本主柱穴若しくは，もう１本未検出とすれば11本主柱穴となろう。柱根は焼失住居構築時に抜き取られたのか，１本も残っていなかった。柱穴は焼失住居構築時に削平して整地したのか，浅い土坑状となっている。埋土は単層又は２層。Ｐ１・７・10は２段掘りでやや深い。Ｐ７は円形に巡る主柱穴から外れるため，土坑かもしれない。

遺物は屋内部・周溝から出土し，特に壁溝から弥生土器が多く出土した。また，焼失住居の範囲に集中して石製玉作関連遺物が多く出土した。またこの建物から遺跡内で最も多くの石製玉作関連遺物が出土し，玉生産施設の中心であったと考えられる。この他に石製品・ガラス製玉類・炭化米が出土している。遺構の新旧はあるものの，掘形は浅く遺物は混在し，明確に分けることはできなかった。

弥生土器は甕・壺・高杯・器台・鉢が出土した。また土製品も出土した。

595～*611* は甕。*595*～*597* は擬凹線甕で，*595* は６条，*596* は７条，*597* は２条の擬凹線をそれぞれ施す。*595*・*596* は肩部にハケ状工具による連続刺突文を施す。*598*～*600* は有段甕で，*598*・*599* は受口状口縁の変形。*600* は肩部にヘラ状工具による連続刺突文を施し，外面と胴部下半～底部内面にスス付着。*601*～*604* は受口甕で，*601*・*602*・*604* は口縁端部に連続刺突文を施す。*604* は胴部上半にハケ状工具による連続刺突文を施す。*605*～*607* は付加状甕。外面スス付着。*608*・*609* は丸縁甕。*610*・*611* は上げ底状の底部。

612～*616* は壺。*612*～*614* は短頸壺。*613* は頸部に縦方向のヘラ痕が残る。*614* は頸部上半に２個１対の竹管文がある。全体に摩滅が激しく調整は不明瞭。*615* は広口壺の口縁。口縁部に沈線１条

注21　宮本長二郎　1998「平地住居と竪穴住居の類例と変遷」『先史日本の住居とその周辺』同成社

を施す。内外面赤彩。*616* は広口壺で口縁端部を面取りする。調整は摩滅が激しく不明。

617 ～*623* は器台。*618* ～*621* は擬凹線器台。*618* は口縁部に６条，裾部に５条の擬凹線，脚部に上７条と下６条の平行沈線文を施す。外面及び受部内面を赤彩する。*619* は口縁部に13条，裾部に17条の擬凹線施すが，脚部を欠損し接合しない。*620* は口縁部に２条，裾部に４条の擬凹線を施す。*617* は擬凹線器台口縁部。*622* は有段器台口縁部で内外面ミガキ。*623* は小型の脚部で肥厚している。

624 ～*636* は高杯。*625* ～*627* は拡張有段高杯。*626* は杯屈曲部に連続刺突文を施す。*624* ・*628* ～*630* は有段高杯。*624* は小型で口縁部と杯底部内外面に赤彩がある。*628* は屈曲部に連続刺突文を施し，内外面を赤彩する。*631* は鉢形高杯。ハの字状脚。４箇所に透孔。*632* ～*635* は脚基部。*632* は上から平行沈線文５条・連続刺突文・平行沈線文４条・連続刺突文・平行沈線文４条を施し透孔がある。*633* は上から平行沈線文４条・連続刺突文・平行沈線文５条・連続刺突文・平行沈線文４条を施し，３箇所の透孔を持つ。*636* は裾部で赤彩痕が残る。

638 ～*644* は鉢。*638* ～*640* は擬凹線鉢。*638* は内外面スス付着。*639* は６条の擬凹線を施すが，*640* は不鮮明。*641* ～*644* は椀形を呈する。*642* は上げ底状。

637 は有鈕蓋。*645* は土製品で土錘か。上下から穿孔しているが貫通しない。黒斑が残る。

木製品には柱根・礎板・雑具・用途不明部材がある。柱根はＳＩ10（新）のＰ１（*929*）・Ｐ２（*930*）・Ｐ３（*931*）・Ｐ４（*932*）・Ｐ５（*933*）・Ｐ６（*935*）・Ｐ７（*934*）・Ｐ９（*936*）・Ｐ10（*937*）から出土した。木口はすべての柱根において２～４方向から加工して平坦面を作り出す。特に*930* は石製・鉄製工具いずれもの痕跡が認められるが，*932* ・*934* は石製工具，*935* は鉄製工具による加工痕がある。側面は*929* ～*934* は柱根断面が方形となるように整形しており，特に*929* ・*930* ・*932* ・*935* には鉄製工具による加工痕が認められる。*936* は明瞭ではないが，上端にも加工痕が認められ，切断痕ではないかと考えられる。樹種は*929* ・*934* ・*935* がコナラ節，*930* ・*933* がクヌギ節，*931* がカエデ科，*932* がヤマグワ，*936*・*937* がヤマウルシ。礎板はＰ４（*943*）・Ｐ５（*944* ～*946*）から出土している。いずれも遺存状態は悪いが，*945* と*946* は断面三角形で，両端は粗く削り落とされている。樹種は*943* ・*944* がクリ，*946* はコナラ節。*943* は放射性炭素年代測定を行っており，^{14}Ｃ年代では1900±40と測定されている。*952* は周溝から出土した雑具の椅子脚部。上端は欠損しているが，欠損箇所の中央にある小孔の下部は残存している。やや上端寄りに四角の孔を開け，下端に向けて幅を広げる。樹種はスギ。*951* は周溝から出土した用途不明の棒材で，断面円形の棒材の上端を断面四角形の凸型に削り出す。下端は欠損している。樹種はウリハダカエデ。

石製品は砥石が出土した。*971* は凝灰岩製。砥面の表面は荒く，線状痕は荒い断面Ｖ字状のものである。これに対し裏面は平滑で，線状痕は浅いＵ字状のものである。表裏で異なる対象のものを研いでいたことが考えられる。*970* は砂岩製。表・裏・両側面を研磨により平坦に加工している。天地面は欠損している。

石製玉作関連遺物はＳＩ10（新）の屋内部からは緑色凝灰岩石核･剥片，緑色凝灰岩製管玉完成品･未成品，緑色凝灰岩製加工品，鉄石英石核・剥片，鉄石英製管玉未成品，石英石核・剥片，石英加工品，ごくわずかであるがひすい剥片が出土した。特に緑・赤・白の３色の石材や未成品が多く出土し，剥片の数も他の建物に比べ多い。ひすいやその他勾玉に使用される石材の出土はわずかで，管玉を中心に玉作りを行ったと思われる。生産量は当遺跡最大と思われ，遺物量が多いため以下に石材別に記述する。

緑色凝灰岩　*1103* ～*1112* は荒割工程品。*1103* の表面と*1104* の右側面は接合する。*1103* の表面と

1104 の右側面のそれぞれ地面側には潰れた打点がある。対する天面側にも，接合して初めて気付く程度の６×２㎜程の小さなわずかに潰れた打点がみられ，両極打撃により分割が行われている。両者の接合面は多少のゆがみはあるものの，地面・天面に対してほぼ垂直に分割できている。*1105* は天面に２箇所の打点がみられる。左側面にみえるのは整形時の擦跡である。これら３点は濃緑色・硬質で，同じ遺構内で出土した細型管玉未成品と石材が似ているため，細型管玉の素材となる荒割工程品と考えられる。*1106* ・*1107* は形割の素材となるもの。板状に分割した後，*1106* は表面に平たくなるよう整形を行っている。*1108* は３面に研磨で整形を行い，扁平な四角柱状になっている。*1110* は表面にひび割れが生じ，非常にもろい石材である。*1108* ～*1110* は淡緑色・軟質の石材で，いずれも分割を行うかそのまま研磨を行うかして太型の管玉へ加工されていったものと思われる。*1112* は四角錐状の石核。管玉の石材としては利用できない白濁した部分が，帯状に全体に広がっている。打割後残核となったものと思われる。*1113* ～*1140* は形割工程品。*1114* は板状に整形後，柱状に分割したもの。形割工程品に含めたが，このままかさらに分割して四角柱状品となったと思われる。*1134* と*1135* の裏面は接合する。横方向に平坦になるように分割されている。なお接合状況図裏面にみられる擦跡は，荒割工程時に整形を行った際にできたものである。*1141* ～*1145* ・*1147* ～*1167* は研磨工程品。四角柱状や多角柱状に研磨される。*1146* ・*1168* ～*1196* は穿孔工程品。未成品の出土量はこの工程のものが最も多い。*1178* は地面の端寄りに窪みがみられる。*1180* は穿孔が貫通している。穿孔方向は孔内壁が均一な円筒状になっており不明である。*1181* は天面からの穿孔で貫通しているが，地面には端寄りに２箇所，穿孔し始めた窪みがみられる。*1182* ・*1183* は片側穿孔である。長さが短く，欠損したものを利用したと思われる。*1185* は地面側が欠損しているが，欠損面に地面からの穿孔がわずかに観察でき，両側穿孔である。*1196* は穿孔が行われているが，天面からとこれに直交する方向からの２方向ある。管玉の未成品のようにみえるが，完成品の形状が想定できない。石材が軟質のため，天面からの穿孔の内壁には穿孔具が回転した際に生じた横縞状の擦痕が明瞭に観察できる。*1197* は仕上げ研磨中のもので，外面に丸味を持つ部分と，緩い稜を持つ部分がみられる。*1198* ・*1199* は管玉完成品。*1198* は硬質で黒色に近い石材を用いている。形状の特殊なものとしては*1300* がある。緑色凝灰岩の剥片の石質の荒い部分に両側から穿孔し，ごくわずかな部位に研磨を施している。なお，屋内部の土坑Ｋ１からは*1117* ・*1150* ・*1181* が出土した。

管玉の大きさがほぼ決まる研磨工程多角柱状品，穿孔を経て完成品までのものを計測すると，全長は5.64～16.02㎜に収まる。最大径は多角柱状品で細型では2.44～5.26㎜，太型では8.09・8.50㎜，完成品は細型のみが出土し2.13～2.77㎜と，若干小さくなる。計測可能なものは細型では34点，太型では２点となり，細型が多く出土し，細型の管玉の生産を中心に行っていたことがいえる。

鉄石英　*1200* ～*1209* は荒割工程品。*1200* ～*1203* は分割後の残核と思われる。ただし次の形割工程をみてみると，形割工程品を充分にとれる大きさであり，次の工程の素材となった可能性もある。*1204* の裏面は敲打で潰れた様子が観察できる。*1205* ～*1207* は板状に分割されている。形割工程の素材となるものと思われる。*1208* は板状に分割する素材となるもの。*1210* ～*1261* は形割工程品。鉄石英製の管玉ではこの工程品の未成品が最も多い。*1210* はほかのものに比べて若干太いが，細型管玉の形割工程品と思われる。*1262* ～*1282* は研磨工程品。*1262* ～*1271* は四角柱状に整形する研磨を施したもの，*1272* ～*1282* は多角柱状なるようにさらに研磨を進めたもの。*1274* の地面は研磨されていない。*1283* ～*1292* は穿孔工程品のもの。*1285* は片側の穿孔が貫通するが，欠損面にもう一方からの穿孔の痕跡がみられ，両側穿孔である。

緑色凝灰岩と同様に研磨工程多角柱状品から穿孔までのものを計測すると，全長が10.78～17.47㎜，最大径は3.55～5.52㎜に収まる。緑色凝灰岩製管玉と比較すると，鉄石英製管玉は大きさにまとまりを持ったものが多い。

石英　*1293*・*1294* は円礫を分割したもの。*1295* は赤みがかった剥片で円礫を分割したもの。*1296* は剥片。*1297* ～*1299* は多角柱状に研磨したもの。*1297* は右側面を除き全て四角柱状に研磨している。これら３点は緑色凝灰岩製や鉄石英製の管玉未成品に類似する。石英製管玉の穿孔工程品や完成品は当遺跡では出土していないが，管玉の未成品の可能性がある。

ＳＩ10（新）の周溝からは緑色凝灰岩剥片，緑色凝灰岩製管玉未成品，鉄石英剥片，鉄石英製管玉未成品，石英石核・剥片が出土した。

緑色凝灰岩　*1302* ～*1304* は形割工程品。*1305* ～*1310* は研磨工程品。*1302* と *1306* は同じ石材である。軟質で表面にはひび割れが生じている。*1306* の裏面には右端から横方向に穿孔と同様な痕跡がみられる。研磨されているのでよく分からないが，分割の際にできたものと思われる。*1307* は三角柱状品で，天地面と側面１面に研磨を施す。研磨が全面に施されていないのと，完成品や同様の遺物はほかに出土していないので明言できないが，三角柱状の角玉を製作していた可能性がある。*1311* ～*1319* は穿孔工程品。*1313* は一方から中程まで穿孔が行われているが，端に寄っており柱壁を欠損している。*1314* は中心付近に窪みをつけたもの。わずかな窪みで，細い針の先で刺したかのような痕跡である。*1315* は太めの多角柱状品の天面に浅い窪みをつけている。窪みはすり鉢状で，下端が直径0.05㎜以下，上端が直径２㎜強となっている。錐状の工具で回転により穿孔前の窪みとして付けられたものと考えられる。大きなすり鉢状の窪みになっており，細形管玉で通常使われる穿孔具とは異なるもので施されたものと考えられる。*1316* ・*1317* は長さの半分程を欠損しているが，両側穿孔の痕跡がみられる。

鉄石英　*1321* ・*1322* は形割工程品。*1322* は若干捻れが生じているものの，整った四角柱が打割のみで作られている。*1323* は研磨工程品。裏面以外は研磨され，ほぼ四角柱に整っている。*1324* は穿孔工程品。多角柱状に研磨され，両側穿孔が途中まで行われている。天面には穿孔の横に穿孔前に付けられた窪みがある。

石英　*1325* は円礫を分割したもの。

ＳＩ10（旧）の屋内部からは緑色凝灰岩石核・剥片，緑色凝灰岩製管玉完成品・未成品，鉄石英石核・剥片，鉄石英製管玉未成品，石英石核・剥片，ひすい剥片・勾玉完成品，その他石材加工品が出土した。

緑色凝灰岩　*1331* ～*1339* は荒割工程品。*1331* と *1332*，*1333* と *1334* と *1335* は接合可能である。これらはリングが明瞭に残り，硬質のものである。*1331* の裏面左側と *1332* の裏面は接合する。*1332* は天面に敲打痕が多く残る。*1331* は *1332* から分割後，天面（*1332* では地面側に相当）からの打割が３箇所で行われる。*1333* と *1335* は１箇所の打点から分割される。*1333* ～*1335* の接合状況は1336に示した。*1338*・*1339* は次の形割工程の素材となるもの。四角い板状に整形されている。*1340* ～*1343* は形割工程品。*1344* ～*1350* は研磨工程品。*1349*・*1350* は多角柱状に研磨されている。*1351* ～*1364*・*1367* ～*1370* は穿孔工程品。*1352* は天地面・表面のみ，*1362* は残存する５面が研磨されており，どちらもほぼ四角柱状のまま穿孔が行われている。*1367* ～*1370* は太型のものである。先に述べた細型のものと比較すると，石材は軟質・淡緑色で，擦痕が荒く残る。特に *1369* と *1370* は際だって太い。穿孔は細型のものと比較するとより大きな孔である。なお観察可能なものはほとんど両側穿孔である。

1365・*1366* は完成品。長さは若干異なるが，直径はほぼ同じ。石の色調も似ている。両者とも片側穿孔である。

管玉の大きさがほぼ決まる研磨工程多角柱状品，穿孔を経て完成品までのものを計測すると，全長は5.87～18.59㎜に収まる。最大径は多角柱状品で細型では3.27～7.41㎜，太型では8.49～18.02㎜，完成品は細型のみが出土し2.57・2.67㎜と，若干小さくなる。計測可能なものは細型では14点，太型では３点と細型が多く出土し，細型の管玉の生産を中心に行っていたことがいえる。ＳＩ10（旧）の屋内部から出土した緑色凝灰岩は硬質のものが多いが，太型の管玉については軟質の石材が用いられている。特殊なものとして*1388*・*1389* がある。*1388* は板状で，光沢をもつ研磨を施し，片隅に穿孔している。*1389* は勾玉。石材は軟質・淡緑色で，擦痕が全体に荒く残る。孔は２箇所にあり，一方は片側から，もう一方は両側から穿孔されている。

鉄石英　*1371*・*1372* は荒割工程品。鉄石英の管玉は通常赤色の部分が使用されるが，これらは半分ほどが黄色部分となっており，玉にされない残核である。この２点は接合しないが同一の母岩から得られたものと思われる。*1373*～*1376* は形割工程品。*1376* は風化が著しく，剥離痕が観察できない。*1377* は研磨工程品。*1378*～*1380* は穿孔工程である。*1378* は多角柱状品の天面中央に穿孔前の窪みを付けたものである。窪みを付けた際に縦方向に欠損している。

石英　*1381*～*1386* は石英の石核。円礫を分割したもので，接合はできないが*1381* と*1382*，*1383* と*1384*，*1385* と*1386* はそれぞれ同一の母岩から得られたものと思われる。

その他　*1387* は表裏両側面を研磨。*1390* は濃緑色で光を通す石材の勾玉完成品。片側穿孔である。

ＳＩ10（旧）の周溝から緑色凝灰岩石核，緑色凝灰岩製管玉未成品，鉄石英製管玉未成品，石英加工品，勾玉完成品が出土した。

緑色凝灰岩　*1392*・*1393* は荒割工程品。*1393* は１面のみに平坦面を作ろうと研磨を行っている。*1394* は形割工程品。３面に研磨痕がみられ，形割の素材となるものを研磨整形している。接合面は１箇所の打点がみられる。表面右側の破片は分割後，地面側をさらに分割し，長さの調節を行っている。なお，表面左側の破片は周溝からの出土で，表面右側の破片は屋内部Ｐ４からの出土である。*1395*～*1397* は形割工程品。*1398* は穿孔工程品。破片であるため穿孔状況が観察できる。穿孔の先端形状は平坦で先端径は約１㎜である。石材が軟質で淡緑色であることや穿孔の径・未成品の規模から，太型の管玉未成品と思われる。*1399* は仕上げの研磨が行われており，管玉完成品の破片である。

鉄石英　*1400* は形割工程品と思われるが，石材の色が均一ではない。*1401* は形割工程品。*1402* は穿孔工程品。多角柱状に研磨され，天面から穿孔が行われている。同じ面に穿孔前の窪みもみられる。

石英　*1403* は打割により角柱状にしたもの。石英の同様の加工品はＢ５地区ＳＩ10（新）で３点，Ｂ５地区ＳＩ11周溝で１点出土している。完成品や穿孔工程品は出土していないが，白色の管玉状の加工品も若干量製作していたことが考えられる。

その他　*1404* は黒色系の石材の勾玉。片側穿孔で，穿孔時の裏面は孔を中心に円形に緩く窪む。

ガラス製玉類はＢ５地区ＳＩ10（新）からは小玉が出土した。*1301* は屋内部から出土した。当遺跡内では大きなもので，直径6.3㎜，高さ4.3㎜，孔径2.9㎜を測る。色調はターコイズブルーである。*1326*～*1330* は周溝から出土した。色・規格共にほぼ同一で，一連のものの一部と思われる。色調はターコイズブルーである。

ＳＩ10（旧）の屋内部からは小玉（*1391*）が出土した。色調はターコイズブルーである。

11号周溝式竪穴建物（ＳＩ11，第78・89～91・120・135・139・166～175図，図版18・23・75～77・137・149・155～157・159・162・166・167）

Ｂ５地区の北東に位置する。ＳＩ10（新）・（旧）に切られる。北側の一部が調査区外となっている。周溝は全周し，ＳＩ10（新）・（旧），ＳＫ3579に切られる。形状は不整円形。周堤の盛り上がりは確認できなかった。屋内部は壁溝がほぼ全周し，柱穴・炉・土坑がある。形状は隅丸方形。屋内の埋土はほぼ単層で，壁溝付近が２層と中心から壁溝に向かって深くなっている。切り合いがあったためか埋土は浅く，削平を受けたものと考えられる。

柱穴は４基あり方形に並ぶ。４本柱で４本とも柱根が残っていた。掘形は柱根よりやや大きい程度。土坑はＫ１・２の２基。Ｋ１は南東側の壁溝と接続し，２段掘りで深い。Ｋ２はＫ１と隣接し，同じ埋土をもつことからＫ１に付随する施設と考える。Ｋ１・２は弥生土器片や緑色凝灰岩製管玉完成品・未成品が出土することから，貯蔵穴または玉作関連施設と考える。炉はＫ３・４の２基が並んでおり，埋土が同じことから同時に使われていたものと思われる。深さは約10㎝。またＫ３の底面には弥生土器甕の半身が内面を上に向けた状態で横たわっていた。これは炉の底面を補強するためか，灰などを掻き出しやすくするためのものかもしれない。

遺物は屋内部・周溝から弥生土器・木製品・石製品・石製玉作関連遺物などが出土した。周溝からの遺物が多いが，削平されているためか他の建物と比較すると全体的に少ない。

弥生土器は甕・壺・高杯・鉢が出土した。*646*～*653*は甕。*646*は内外面，それ以外は外面スス付着。*646*は擬凹線甕。*647*・*648*は有段甕。受口状口縁の変形か。*649*は刺突受口甕。*650*は受口甕。*651*・*652*は平縁甕。*652*はヘラ状工具で肩部に連続刺突文を施す。受口状口縁の崩れた形か。*653*は丸縁甕。*654*～*657*は壺。*654*・*655*は短頸壺。*656*は広口壺で，口縁端部を付加状とする。*657*は分厚い底部。*658*は無頸台付壺で脚部を欠損する。胴・裾有段部に連続刺突文を施す。裾部には透孔がある。全体的に黒斑が見える。*659*～*661*・*663*は有段高杯。*660*は口縁部に沈線を１条施す。*661*は肥厚なつくりで内外面スス付着。*662*は拡張有段高杯。口縁端部上面を面取りし伸張する。*664*・*665*は杯部が椀形のもの。*664*はハケ調整で黒斑が残る。*665*はミガキ調整で外面にスス付着。*666*は脚部のみで４箇所の透孔がある。*667*は鉢で口縁と底部に黒斑が点在する。

646・*664*は屋内部壁溝，*647*・*648*・*653*・*655*～*658*・*662*・*663*・*666*・*667*は屋内部，*649*・*651*・*652*・*659*・*661*・*665*は屋内部土坑，*650*・*654*・*660*は周溝から出土した。*662*はＳＩ10（旧）周溝から出土した破片と接合した。

木製品はＰ１（*938*）・Ｐ２（*939*）・Ｐ３（*940*）・Ｐ４（*941*）から柱根が出土した。*938*は側面に鉄製工具による顕著な加工痕が認められ，木口は２方向から加工して平坦面を作り出す。*939*・*940*も側面に加工痕が認められるが明瞭ではない。*941*は側面の加工は不明である。*939*～*941*の木口は４方向から鉄製工具で加工して平坦面を作り出す。樹種は*938*がクヌギ節，*939*がニレ属，*940*はヤマグワ，*941*はコナラ節。*939*は放射性炭素年代測定を行い，^{14}Ｃ年代では1910±40と測定されている。

石製品は凝灰岩製の砥石（*969*）が出土した。表面には断面Ｖ字状の荒い線状痕，左右側面・裏面には細かい線状痕がみられる。

石製玉作関連遺物は屋内部からは緑色凝灰岩石核・剥片，緑色凝灰岩製管玉完成品・未成品，鉄石英剥片，石英石核・剥片，勾玉完成品破片，その他の石材加工品が出土した。

緑色凝灰岩　*1405*～*1425*は荒割工程品。*1422*～*1424*の３点は接合でき，接合状況は*1425*に示した。硬質で淡緑～濃緑色に徐々に色調が変化する石材である。両極打撃で*1425*を割り取り，次に*1425*表

面の右に鋭角に飛び出ている部分を整形するため*1423*を剥離した。そして*1422*の地面右側と*1424*の地面左側から両極打撃を行い，両者を同様の厚さに分割した。これが次の形割工程の素材となる。*1405*はＢ５地区ＳＩ10（旧）で出土した接合資料の*1103*＋*1104*と同様な分割痕がある。表面天面側の打点と表面地面側の尖り部分で両極打撃を行っている。ここから形割工程の素材となる剥片を分割している。*1406*は形割工程の素材となるものと思われる。*1426*～*1466*は形割工程品。*1448*～*1456*・*1460*～*1466*は軟質で淡緑色の石材である。先に述べた*1408*～*1421*も軟質で淡緑色の石材で，太型管玉の形割工程の素材と思われる。*1453*・*1455*・*1456*は摩耗して丸くなっている。*1467*～*1476*は研磨工程品。*1467*は６面が研磨され，扁平な四角柱状に整形されている。*1474*は四角柱状に整えられている。この工程で多角柱状に研磨されているのは*1476*のみである。*1467*～*1472*は軟質で淡緑色の石材である。*1468*はＫ２から出土した。*1477*～*1499*は穿孔工程品。*1477*・*1478*は両側穿孔であるが，一方からの穿孔のみが貫通している。もう一方からの穿孔はある程度までなされていたが，両側からの穿孔がかみ合わないうえに欠損したため，このような形状になったものと思われる。なお*1478*には貫通した穿孔以外に，表面に天面から地面までの穿孔痕跡とその右側に重なるように天面からの短めの穿孔痕跡がみられる。次の仕上げの研磨で表面に残る穿孔痕跡を消そうとしたのだろうか。*1480*は中央がややふくらむ四角柱状に研磨された後，一方から若干の穿孔が行われている。*1482*は多角柱の天地面に錐体の回転により，窪みを付けている。*1496*は一方から，*1497*は両面からすり鉢状の窪みを付けている。穴の底は細く，先端が尖った錐状の工具で回転により穿孔前の窪みとして付けられたものと考えられる。*1498*は石材が軟質のためか，穿孔具の回転痕が観察できる。*1496*～*1499*は軟質で淡緑色の石材である。*1500*～*1507*は完成品。そのうち*1505*～*1507*の３点は完形で，孔内壁が均一な円筒状になっており穿孔方向は不明である。*1501*・*1505*はＫ１から出土した。完成品は全て硬質で濃緑色の石材で，これまでの工程でみられた軟質で淡緑色の石材はなかった。形状の特殊なものとしては*1517*がある。軟質で淡緑色の石材を用い，太型の管玉未成品の研磨工程のようにみえるが，表面から裏面にかけて２箇所の穿孔が貫通する。石材・孔径は太型の管玉とほぼ共通している。Ｂ５地区ＳＩ10（旧）から出土した*1389*は緑色凝灰岩製の勾玉で，２箇所の穿孔がある。*1517*はこれと同様なものの未成品の可能性がある。

管玉の大きさがほぼ決まる研磨工程多角柱状品，穿孔を経て完成品までのものを計測すると，全長は小さいもの（*1481*）で4.05㎜，大きいもの（*1496*）で20.05㎜のものがあるが，そのほかは6.49～17.02㎜に収まる。最大径は多角柱状品の細型では3.49～6.13㎜，太型では11.63・14.60㎜，完成品は細型のみが出土し2.56～3.15㎜と，若干小さくなる。計測可能なものは細型では18点，太型では２点と細型が多く出土した。しかし形割工程品・研磨工程四角柱状品は細型のものと太型のものとほぼ同量出土しており，２種類の大きさの管玉が作られたと考えられる。細型はリングが明瞭な硬質で濃緑色の緑色凝灰岩が多く使われ，太型は割れ口が緩く摩耗気味の軟質の緑色凝灰岩が多く使われる傾向にある。また穿孔具も異なっていたようで，細型は先端が細くなる棒状で孔径1.16～1.76㎜，太型はより太くなり孔径2.37～3.52㎜を測る。

石英　*1508*～*1510*は円礫を打ち割ったもの。*1508*と*1509*は元々同じ礫であったと思われる。

その他　*1511*～*1518*は加工品。*1515*は平たい円礫の表面全体に荒い研磨を施したもの。１面は平らに，その他は丸みを生かした研磨を行っている。*1518*は勾玉の破片である。穿孔部分が観察できるが表面に荒い研磨が残っており，仕上げ研磨途中のものと思われる。その他のものは打ち割った後，荒い研磨を行ったもの。勾玉以外は完成品を想定し難く，石材と共に不明である。

周溝からは緑色凝灰岩剥片，緑色凝灰岩製管玉完成品・未成品，鉄石英剥片，石英剥片，石英加工品が出土した。出土量は屋内部に比べると非常に少ない。

緑色凝灰岩　*1519*・*1520*は形割工程品。*1521*は研磨工程品。扁平な形状で6面全体に研磨を施す。*1522*・*1523*は穿孔工程品。*1522*は四角柱状に研磨され，穿孔がなされている。穿孔具の先は平たいようである。*1523*の穿孔跡と比較すると，*1522*の穿孔具は太いものが用いられている。*1524*は管玉完成品である。ほかの完成品と比較するとかなり短い。欠損したものを研磨して仕上げたものか。なお天地面は研磨されている。

石英　*1525*は加工品。B5地区SI10（新）では管玉未成品と思われる多角柱状に研磨したものが出土しており，これと同様なものと考えている。

12号周溝式竪穴建物（SI12，第92・93・121・139・176図，図版25・76・77・152・155・157・160・166・167）

B6地区の中程東側に位置する。平面形は隅丸五角形状に壁溝が巡る竪穴建物。その外側には周溝が巡る。壁溝の南側に沿って内面に浅い溝が巡る。屋内部は中央に最大径1.58m，深さ20cm，埋土は黒褐色シルトを基調とする楕円形土坑K8がある。その周囲から炭化物の広がりが確認され，K8も含めて灰穴炉と思われる。主柱穴はP1～5の5基が検出され，五角形状に並ぶ。柱根は出土していない。そのほか，P6・7は炭化物と黒色の灰が一杯に詰まった楕円形の土坑である。P6は最大径50cm，深さ5cmを測る。P7は最大径46cm，深さ10cmを測る。硬化した床面には緑色凝灰岩剥片が入り込んでおり，玉作工房だったことがいえる。建物の周りは円形に巡る周溝をもつ。幅は最大1.96m，最小46cm，深さは最大29cm，最小8cmを測る。周溝の西側にSD3786に切られる箇所がある。SD3786はSI12の周溝が埋まった後に掘削されたもので，SI12が機能していた時は溝は存在せず，出入り口として使用していた空間の可能性がある。

遺物は屋内部から弥生土器・木製品・石製品・石製玉作関連遺物，周溝から弥生土器，石製玉作関連遺物が出土した。特に周溝からは弥生土器の破片が多く出土した。

弥生土器は，甕・壺・台付壺・器台・高杯・鉢が出土した。

甕は擬凹線甕（*668*～*672*）・刺突受口甕（*673*・*674*）・受口甕（*675*・*679*）・丸縁甕（*677*・*678*）がある。*670*は胴部外面ハケメ，内面ヘラケズリ調整で，頸部はハケメ後板状工具によるヨコナデを施す。肩部には斜行短線文が施される。*671*は有段部中央に浅い擬凹線文が2条巡るもので，外面ハケメ調整，内面ヘラケズリ調整で，肩部には比較的浅い刺突文が施される。*672*は有段部上端に1条の深い沈線文が，その下には板状工具の強いナデによる擬凹線文が巡る。胴部外面はハケメ調整で，頸部の屈曲部から施される。刺突受口甕の*673*・*674*には口縁帯に板状工具による刺突文が施される。*673*・*675*は口縁端部は丸くなっているが，*674*はしっかり面取りされている。*676*・*679*は口縁端部断面三角形で，端部に擬凹線が巡る。*676*は器壁は薄いが堅緻な胎土である。*679*の口縁端部内側には板状工具による強いヨコナデが施されている。丸縁甕には上端を摘み上げるものもある。

壺（*680*～*684*）は広口がほとんどであるが，全形を知り得る個体はない。*680*は擬凹線壺。やや外傾する短い口縁部で，口縁端部内側に面取りされる。内外面赤彩されるが，口縁部外面は擬凹線文が施された部分のみが赤彩されている。*681*は大型の壺。口縁部は内湾気味に立ち上がり，櫛状の工具で擬凹線文を施した後，板状工具で再度ナデている。口縁端部は内側に面を取る受口状で，ヨコナデ調整されるが，口縁部内側の緩い屈曲部から下半は細かいヘラミガキ調整がなされる。胴部も内外面ハケメ調整後ヘラミガキ調整である。*682*は短く直線的に外傾する口縁部で，口縁端部は面取りさ

れ，外面はナデ調整後縦方向のヘラミガキ調整される。*683* は肩の張らない小型の壺で，外面ヘラミガキ調整である。*684* は小型壺の胴部で外面赤彩される。器壁が薄く，表面はヘラミガキ調整の後ナデて仕上げている。

台付壺（*687* ～*689*）は口縁部と胴部がある。*687* は口縁部で，やや外傾しながら上方に伸び，端部でわずかに内湾する。口縁端部は内側で面を取る。胴部外面・口縁部内外面は赤彩され，口縁部外面は細かな縦方向の，口縁端部外面と口縁部内面・胴部外面は横方向のヘラミガキ調整がなされる。*688* は胴部中央に幅1.5㎝の低い有段部が巡り，その上には棒状浮文を３本１組で縦方向に平行に貼り付ける。*689* は断面から胴部の上部と下部の接合状態がわかるもので，接合部には上向きと横向きの２本の突帯が巡り，同じく３本の棒状浮文を貼り付けて加飾する。

器台（*690* ～*692*）は擬凹線器台と有段器台がある。*690* は比較的厚手の擬凹線器台の脚部で，脚裾有段部は擬凹線文を施した後横方向のヘラミガキ調整される。内面は強くヨコナデされ，脚基部にかけては輪状にヘラケズリされる。*691* の脚裾有段部には３条の沈線文が巡り，有段の屈曲部には細かい刻目文が印される。脚裾部には透孔が穿孔され，外面は赤彩される。*692* の肥厚した口縁端部は，擬凹線文を巡らせた後ヘラミガキ調整する。内外面は縦方向のヘラミガキ調整が施される。脚部には３方向に透孔が穿たれる。

高杯（*693* ～*696*）はすべて口縁部が外反する有段高杯である。*693* は口縁部が短く，外面のヘラミガキ調整が杯底部の途中で，縦方向から横方向に変化する。脚部は脚基部が棒状で脚裾部が開脚する形態である。脚裾部には透孔が３箇所穿孔される。*694* には口縁部外面にヘラミガキ調整前のハケメ痕が明確に残る。口縁端部はヨコナデ調整で，丸縁に仕上げられる。*695* は小型の有段高杯で，口縁部がやや外傾するが，直立気味である。杯底部・脚基部外面はハケメ調整，口縁部内外面ヨコナデ調整である。脚部はハの字状に外展する形態で，３箇所に透孔が穿孔される。

鉢（*685* ・*686* ・*697* ～*699*）は擬凹線鉢（*698*）・有段鉢（*699*）がある。*698* は軟質な土器で，頸部から胴部へは直線的に伸び，胴部中位で屈曲する。*699* は器壁が薄く，内外面横方向のヘラミガキ調整である。*686* は内外面赤彩される鉢の底部で，内外面ヘラミガキ調整である。*685* は鉢の底部で，外面はハケメ後ナデ調整，内面は細かいヘラミガキ調整である。底部外面周縁部に粘土を貼り付けて上げ底風にしている。

石製品は砥石（*966*）が出土した。全ての面を砥面として使用している。砥面は平坦で長軸方向に線状痕がみられるが，裏面には長軸・斜め方向にやや深めの線状痕がみられる。

石製玉作関連遺物は屋内部からは緑色凝灰岩剥片，緑色凝灰岩製管玉完成品・未成品，鉄石英剥片，蛇紋岩剥片，不明石材石核が出土した。*1526* ～*1531* は緑色凝灰岩製管玉完成品・未成品。*1526* は形割工程品。*1527* は研磨工程の四角柱状品。右側面以外の５面に研磨を施す。*1528* ・*1529* は研磨工程の多角柱状品である。*1528* の地面は欠損している。*1529* は地面側の大部分が欠損している。*1530* は穿孔工程品。穿孔の際に縦方向に欠損している。*1531* は完成品。*1532* は軟質で淡色の緑色凝灰岩製の加工品。裏面と天地面が欠損している。残存している表面は円形に整形され研磨されているが，研磨の状態は欠損面も含めて全体が摩耗しているためよくわからない。*1533* は不明石材の石核。板状に打割しているが，礫面が若干残る。Ｂ６地区ＳＩ12は硬化した床面から緑色凝灰岩剥片が出土し玉作りが行われた建物であるが，出土した石製玉作関連遺物は少ない。

周溝からは緑色凝灰岩剥片，緑色凝灰岩製管玉未成品，鉄石英剥片，石英剥片が出土した。*1534* は緑色凝灰岩製管玉の形割工程品。表面から右側面にかかる稜上に若干の擦跡がみられるが，整形を

意図するものではなく，磨耗と思われる。裏面は平坦面を作り出すために調整剥離を加えている。

13号周溝式竪穴建物（ＳＩ13，第94・95・98・122・123・136・176～178・187図，図版26・29・77～79・137・155・160・163・166・167）

Ｂ６地区の中程西端に位置し，ＳＩ14・22に切られる。壁溝・周溝の一部は調査区外となる。平面形は円形に壁溝が巡る竪穴建物。貼床は不明であるが，壁溝周辺の床面に地山を盛って整地を行ったと思われる痕跡がみられる。屋内部は中央に炭化物と黒色の灰が詰まった灰穴炉を持つ。焼土はみられなかった。Ｐ８～10は炭化物や灰が詰まった小土坑である。主柱穴はＰ１～６の６基で，柱根は出土していない。Ｐ５は断面がオーバーハングしており，柱根抜き取りの際に生じたものかもしれない。なお壁溝の中からＰ11が検出されている。断面四角の柱根が残るが，主柱穴とはならない。壁溝に伴うものかもしれないが詳細は不明である。そのほかＫ７は建物南側で検出した土坑。貯蔵穴のようなものであろうか。建物の周りは円形に巡る周溝をもつ。

遺物は屋内部から弥生土器・軽石・石製玉作関連遺物，Ｋ７から弥生土器・石製玉作関連遺物・炭化米，Ｐ11から柱根，周溝から弥生土器・石製玉作関連遺物・炭化米が出土した。床面から壁溝にかけては弥生土器片がまとまって出土した。

弥生土器は甕・壺・器台・高杯・鉢・蓋が出土した。

甕には擬凹線甕（*700*～*704*・*707*・*708*），有段甕（*705*・*706*・*709*・*710*），受口甕（*711*～*716*），平縁甕（*717*～*719*）がある。擬凹線甕には口縁部が有段のものと口縁端部が断面三角形になるものがある。工具の当たり方で，口縁部が直上に伸びるものや屈曲部が稜線となるものがある。胴部の調整は外面ハケメ調整，内面ヘラケズリ調整がほとんどであるが，*707* は胴部があまり張らない器形で内面はハケメ調整である。肩部には*704*～*706*・*709* には刺突文が施される。*704* は大型の甕で，胴部外面ハケメ調整，内面ケズリ調整，底部は平底で，厚さは2.2㎝を測る。胴部中位を中心にススの付着が認められるが，胴部下半から底部にかけては観察されない。肩部には櫛状工具による刺突文が施される。*709* の外面全体にススが付着し，底部内面にも炭化物の付着が広く認められる。受口甕は口縁上端部の面取りがあまいものや受部の屈曲があまいものがある。内面調整はハケメ調整ものが多く，*715* は頸部内面までもハケメ調整され，頸部外面には櫛描き直線文が巡る。*713* は受部の屈曲が深い口縁部をもつが，この肩部にもうねった櫛描き直線文が巡らされている。*716* は口縁帯に加えて肩部にも細かく連続して刺突文が施文されるものである。短い口縁部に胴部が張る器形で，外面調整もハケメ後板状具によるナデ調整であり，壺の可能性がある。平縁甕は口縁部が外反するものと直線的に外傾するものがある。

壺には短頸（*720*・*721*・*723*）と広口がある。短頸壺には口縁部が直線的にやや外傾し，外面に縦方向のヘラミガキ調整するものと口縁端部ヨコナデ，外面ハケメ調整のものがある。*721* は内面はハケメ後ヘラミガキ調整される。広口には有段壺（*725*），擬凹線壺（*726*）などがある。*725* は口縁端部ヨコナデ，口縁部縦方向のヘラミガキ調整であるが，外面にはススが付着する。*726* は短く外反する有段部に２条の擬凹線文が巡るもので，口縁部外面はヨコナデ，内面は端部のみヨコナデで途中からヘラミガキ調整される。肩部には櫛描き直線文が観察できる。*722* は直線的に外傾する口縁部で，口縁端部は面取りされ，その周辺のみ赤彩される。*724* は短く外傾する口縁部で，断面観察から粘土を貼り付けて口縁部を作り出したことがわかる。*727* は小型壺で，内外面ヘラミガキ調整であるが，外面にススが付着する。

器台（*728*）は受部の開きが直線的ではなく，基部に向けて膨らみをもつ擬凹線器台である。有段

部には擬凹線文が施されるが，その上からヘラミガキ調整をしている。

高杯は有段高杯（*730*・*733*・*735*），拡張有段高杯（*729*・*731*・*732*・*734*），鉢形高杯（*736*）がある。有段高杯は，短い口縁部が外反または，外傾する器形である。杯底部は深いものと浅いものがあり，その形態も直線的なものと皿形を呈するものがある。口縁部のヘラミガキ方向には横方向と縦方向のものがある。*729* は口縁端部は丸縁で，口縁部は横方向のヘラミガキ調整がなされる。脚部は縦方向のヘラミガキ調整で，脚基部内面は縦方向のヘラケズリ調整を施し，器壁が薄く仕上げられる。脚裾部には３箇所に透孔が穿たれた様子で，脚裾端部は丸縁に仕上げられる。脚部外面と杯部は赤彩される。*731* には杯部中央に突帯が巡り，口縁端部内側にも低い２本の突帯が巡る。口縁端部内面と口縁部外面には赤彩痕が残る。*732* は口縁端部に１条の擬凹線文が巡る。*736* は小型鉢形高杯の杯部と考えられるが，蓋の可能性もある。器壁は薄く，口縁端部は面取りされる。胴部内外面はヘラミガキ調整で，内外面は赤彩される。*738*～*740* は高杯の脚裾部である。*738* は面取りされた脚裾端部に刺突文が施される。*739* は脚裾端部を折り返して縁帯を作り出す形態で，上面中央には突帯が巡る。内面は端部には強いヨコナデが施され，裾部には横方向のヘラケズリ痕が残る。*740* は折り曲げられた脚裾部に擬凹線文が施される。脚裾部には２箇所に対になる補修孔があり，接点には接合に使用された漆の痕跡が認められる。この他にも３個の孔があり，それらが直線で並ぶことから合計５箇所に補修孔があったと推定される。

鉢は擬凹線鉢（*741*）と小型の無頸鉢（*742*）がある。*741* は低い有段部にハケ状工具による擬凹線文が施されるもので，扁平な算盤玉形の体部をもつ器形の鉢である。体部内外面は横方向のヘラミガキ調整が施される。外面にはススが付着するが，赤彩痕が残る。*742* は内外面縦方向のヘラミガキ調整で，口縁端部は内側で面取りされる。外面は全体に薄く赤彩されるが，一部にU字状に濃く赤彩痕が残っており，文様を表現したものと考えられる。*743* は鉢の把手か。外面にはススが付着する。内面はヘラケズリ調整である。*744* は鉢形のミニチュア土器の脚部か。

蓋は口縁部とつまみの部分が出土している。*737* はハの字状に外展する器形で，口縁端部は面取りされる。*745* は蓋のつまみで，中央が大きく窪む。

木製品はＰ11から柱根（*942*）が出土している。側面から木口にかけて炭化しており，加工についての詳細は不明である。樹種はコナラ節。

石製玉作関連遺物は屋内部からは緑色凝灰岩剥片，緑色凝灰岩製管玉完成品・未成品，鉄石英剥片，石英剥片，ひすい剥片，勾玉完成品・未成品，めのう石核・剥片，Ｋ７から緑色凝灰岩製管玉未成品が出土した。量は多くはないが，玉作りに関わる建物と思われる。*1535*～*1539* は緑色凝灰岩製管玉完成品・未成品。*1535*・*1536* は形割工程品。*1536* は天面を平坦に研磨している。*1538*・*1539* は完成品。*1538* は穿孔方向がわからないぐらいに孔内が筒状にきれいに整えられている。石質が異なる部分が欠損している。*1540*・*1541* は勾玉完成品・未成品。共に黒褐色で，石材は同じである。*1540* は完成品。穿孔は表面からの穿孔を補助するように裏面から少しだけ穿孔を行っている。*1541* は未成品で半円状に研磨されたもの。*1542*～*1544* はめのう石核。３点とも白い外表皮を持ち，灰色掛かった乳白色である。接合はできないが母岩は同じと思われる。屋内部の土坑Ｋ７から緑色凝灰岩の研磨工程品（*1537*）が出土した。扁平な形状で，表裏面は擦跡がほとんど残らないぐらい平滑に研磨されている。天地面の研磨は荒く，地面右側は丸味を持つように研磨されている。勾玉の未成品の可能性がある。

周溝から緑色凝灰岩石核・剥片，緑色凝灰岩製管玉未成品，鉄石英剥片，石英剥片，不明石材加工

品，勾玉完成品が出土した。*1545*～*1547*は緑色凝灰岩の荒割工程品。*1545*は淡緑色で，硬質の石材である。地面には擦跡がみられる。*1546*は*1547*と接合し，接合状況を*1548*に掲載した。*1548*は表面に所々擦跡がみられる。これは分割の際に生じたバルブの凸凹を平滑に整えたものである。そのほか裏面での天地側の角に丸みをつけるように研磨が施されている。荒割の石核を分割前に整形した様子が窺える。*1549*は不明石材の加工品。表裏面とも凸凹を残したまま平たく研磨され，所々痘痕状に研磨されない部分がある。研磨は仕上げ研磨が施され，磨き跡がわかりにくいほど平滑になっている。また表面右上の角は丸みをつけるように荒い研磨が施され，勾玉の未成品の可能性がある。*1550*は不明石材の勾玉完成品。完成品といっても表面の窪みで研磨が施されていない部分があり，状態はあまり良くない。片側穿孔である。

ガラス製玉類は周溝から小玉（*1551*）が出土した。色調はターコイズブルーである。

14号周溝式竪穴建物（ＳＩ14，第94～98・124・125・137～139・179図，図版27・29・79～81・138・139・152・166）

Ｂ６地区の中程西側に位置する。平面形は隅丸方形に壁溝が巡る竪穴建物。壁溝・床面は噴砂によって荒れており，貼床は不明である。屋内部は中央に炭化物と黒色の灰が詰まった灰穴炉をもつ。これは時期を変えて同じ場所に２基作られている。炉断面図中第５層が初めに作られ，次に図中第１・３層のものに作り替えられている。第２層も炭化物層であるが，噴砂により荒れており平面形が不明瞭であった。床面は２面あり，２基の炉がそれぞれ対応するが，遺物からは時期差はほとんどみられない。主柱穴はＰ１～４の４基で，柱根は出土していない。Ｋ５は建物南側で検出した土坑。内部に炭化物はみられなかった。貯蔵穴のようなものであろうか。なお第１床面を検出後Ｋ５から灰穴炉を隔てたところで，ＳＫ3980を検出した。第１床面に対応する貯蔵穴となる可能性をもつが，建物ができる以前の遺構かもしれない。周堤にわずかに盛土が残る。建物の周りは円形に巡る周溝をもつ。西側に周溝が途切れる箇所があり，出入り口の可能性がある。周溝はＳＩ13の周溝を切る。

遺物は屋内部から弥生土器・砥石・石製玉作関連遺物，周溝から弥生土器・木製品・緑色凝灰岩剥片，周堤盛土から緑色凝灰岩剥片が出土した。特に周溝から弥生土器の破片が多く出土した。また壁溝からは完形の鉢とその横に自然礫がまとまった状態で出土した。

弥生土器は，甕・壺・器台・高杯・鉢・台付鉢・蓋・ミニチュア土器が出土した。

甕には擬凹線甕（*746*～*759*・*765*・*777*）・有段甕（*760*～*764*）・受口甕（*766*・*771*～*773*）・刺突受口甕（*767*～*770*・*774*・*775*）平縁甕（*776*・*779*）・丸縁甕（*778*）がある。擬凹線甕は有段部に擬凹線文を施すものと，口縁端部が断面三角形状で，その端部に擬凹線文を施すものがある。前者は口縁端部が丸縁のものと端部内側に面を取る受口状のものがある。後者は上端部を摘み上げるものとそうでないものに細分できる。前者は外面ハケメ調整，内面ヘラケズリ調整，肩部に刺突文を施す個体がある。後者も調整は外面ハケメ調整，内面ヘラケズリ調整である。*748*の内面には口縁部の貼り付け痕が消されずに残る。*754*は口縁部が垂直に屈曲するもので，上方に長く摘み上げられた端部外面に擬凹線文を施したもので，外面全体にススが付着する。有段甕は有段部が短く，口縁端部を摘み上げる形状のものが多く，上方に伸びるものと外反するものがある。胴部内面の調整はハケメ調整とヘラケズリ調整の両者が見られる。受口甕は口縁端部の面取りが明確なものと丸縁となっているものがある。端部の形状が直立するものと外反するものがある。口縁帯にはハケ状工具による刺突文や，櫛状工具による列点文が施される個体がある。口縁部片ばかりで全形を知り得る個体はない。*769*は口縁端部が直立するもので，口縁帯には狭い間隔で，刺突文が施される。胴部内外面はハケメ

後ヘラミガキ調整が行われており，壺である可能性がある。*774* は口縁部の屈曲があまく，口縁端部が丸縁のもので，口縁帯には刺突文，肩部には櫛描き直線文と列点文が施文される。*778* は小型の胴の張らない器形である。

壺は短頸壺（*780* ～ *782*）と擬凹線壺（*783*）がある。*780* は直線的で外傾する口縁部にやや丸みをもつ胴部がつく壺である。調整は口縁部が内外面ハケメ調整，胴部が外面ハケメ調整，内部がヘラケズリ調整で，口縁端部の仕上げは内外面からナデ上げたに止まる。胴部下半には一面にススが付着する。*783* は肩の張る器形で，外面は赤彩される。*784* は長頸壺の肩部片で，表面にヘラ状工具による逆Ｖ字状の記号が刻まれる。*785* は大型の装飾壺の頸部で，他に破片が多数あるが全形を復元することはできなかった。破片から口縁部内外面ハケメ調整，胴部外面ヘラミガキ調整，内面ナデ調整である。肩部には粘土帯を２本貼り付けて作り出した突帯が巡り，その上面には双葉状の連続刺突文が２重に巡る。その上部の遺存する頸部には細線の沈線文によって帯状や三角形状に区切られた区画の中に竹管文や双葉状刺突文が充填される。包含層出土の*2614* と同一個体とみられ，その特異な形状から中国地方の祭祀用特殊壺との関係が想起される。

器台は擬凹線器台が２個体あるが，いずれも脚裾有段部のみである。*786* の有段部は外傾し，内端面に面取りする。*787* の有段部は直立し，外面は赤彩される。

高杯はすべて有段高杯である。*790* は口縁端部で面を取り，そこに擬凹線文が施される。口縁部と杯底部の境には断面三角形の貼り付け突帯が巡る。突帯の外側と口縁端部の内外面には赤彩が帯状に施される。調整は外面は口縁部と杯部が縦方向のヘラミガキ調整である。*791* には口縁端部と杯部中央の突帯に擬凹線文が施され，口縁端部内側には低い段を有する。*788* は小型の有段高杯で，杯底部が小さく，口縁部が外反する。*789* ・ *792* ～ *794* は高杯・器台の脚部である。*789* は脚基部のみであるが，透孔が５箇所に最大３列に穿たれる。孔の間隔は規則的ではなく不揃いである。加えて内面には表面が閉じている孔が３孔観察され，穿孔を失敗し粘土で埋めたものと推定される。*793* は脚裾部有段の高杯で，脚裾端部には１条の沈線が巡る。*794* は器台の脚部で，裾部があまり広がらない器形である。脚裾端部は折り返して肥厚され，その上面には擬凹線文が施される。外面は赤彩される。

鉢は有段鉢（*796* ・ *797*）・無頸鉢（*798*）がある。*796* は口縁部を摘んだだけのあまい有段部をもつ鉢で，完形に復元できた個体である。外面全体にススが付着する。*797* は口縁部ヨコナデ調整，体部外面ハケメ調整の鉢と推定されるものである。*798* は口縁端部に面を取り，内外面ヘラミガキ調整で，口縁部と体部でミガキ方向を変える。

795 は台付鉢の体部下半である。内外面細かい縦方向のヘラミガキ調整がなされる。

800 は外反する口縁部をもつ蓋。口縁端部を面取りし，外面ヘラミガキ調整，内面ハケメ後一部ヘラミガキ調整で，外面は赤彩される。

799 は鉢形のミニチュア土器である。

木製品は用途不明の部材が出土している。*963* ・ *964* は周溝から出土した同じ形状をもつ板状の部材で，上下端とも方形の孔を開けられた部分で折れて欠損している。樹種は*963* がタラノキ，*964* がヤマグワ。*654* は周溝から出土した脚台状の部材で，台と脚の２つの部材からなる。台の平面形は長円形になるかと考えられるが，欠損している。この台は下面を平らに，上面はやや丸みをもたせて加工しており，中央に四角のホゾ孔を開ける。脚は両端にホゾを削り出す板材で，上端のホゾは欠損し，上端から下端にむけて緩やかに幅を増す。この２つの部材の結合は，台のホゾ孔に脚のホゾを差し込んで，台の下面から木釘で固定する。脚が台に対して斜めに傾くのは，台のホゾ孔が斜めに開けられ

ていることによる。これにあわせて，脚のホゾも台の下面からはみ出すことなく，台の下面と平らになるように斜めに切り落とされている。樹種はスギ。

石製品は凝灰岩製の砥石（*967*）が出土した。砥面は５面みられ，平坦で長軸方向に線状痕がみられる。砥面は平滑で，中～仕上げ砥と思われる。床面２面のうち下層床面から出土した。

石製玉作関連遺物は屋内部からひすい石核，花崗岩剥片，勾玉未成品が出土した。*1552* はひすい石核。表面は加工前の礫の表面に相当するが，一部に研磨が施されている。左側面は表面から裏面にかけて施溝し，分割した様子が窺える。その他の面は打割による分割である。この石核は施溝した側に若干緑色がみられるが，大部分が白濁した部分を持つ。この部分を確実に切り取るために施溝分割が行われたと考えられる。*1553* は花崗岩の勾玉未成品。表裏面は研磨により板状に整形されている。

15号周溝式竪穴建物（ＳＩ15，第99～101・126・127・136・137・179・180図，図版27・81・83・138・155～157・160・163・164・166～168）

Ｂ６地区の中程東側に位置する。噴砂によって荒れているが，建て替えの前後合わせて２棟分を検出した。初めに円形に壁溝が巡る竪穴建物が作られた。屋内部は土坑がいくつか検出された。Ｐ13～15はこの壁溝に伴う柱穴と思われる。Ｐ14・15は底に板が敷いてあり，礎板に利用したことが考えられる。またＰ12は切り合いから古い建物に属す遺構と思われる。次にゆがんだ隅丸長方形に壁溝が巡る竪穴建物が作られた。断面から，Ｐ16・17はこの建物に属す柱穴と推測されるが，そのほかはどちらに属すものか不明である。そのほかにはＰ５・６がある。Ｐ５は最大径27㎝，深さ４㎝，Ｐ６は最大径31㎝，深さ４㎝で，いずれも平面は楕円形であった。それぞれ炭化物がブロック状に混じる黒色の灰が詰まっていた。建物の周りは周溝をもつ。周溝の平面形は不整形で，建て替えに伴って掘り返された可能性がある。周溝はＳＩ18を切る。隣接するＳＩ16とは切り合い不明。

遺物は屋内部から弥生土器・木製品・軽石・石製玉作関連遺物・炭化米，周溝から弥生土器・石製玉作関連遺物・炭化米が出土し，特に石製玉作関連遺物が多く出土した。ＳＩ15は玉作工房と思われるが，新旧のどちらの建物が該当するのかは不明である。

弥生土器は，甕・壺・器台・高杯・鉢・台付鉢が出土した。

甕には擬凹線甕（*801* ～*808* ・*811*）・刺突受口甕（*809*）・刺突平縁甕（*810*）・丸縁甕（*812*）がある。擬凹線甕は面取りした口縁端部に擬凹線文を施すものと有段口縁に擬凹線文を施すものがある。後者には口縁上端部を面取りし，受口状となるものがある（*807* ・*808*）。胴部外面ハケメ調整，内面ケズリ調整で，*804* のみ内面ハケメ調整である。有段口縁のものには肩部に刺突文が施されるものがある。*809* は口縁端部が欠損する受口甕である。肩部には櫛描き直線文と波状文が施文される。*810* は口縁端部を上方に摘み上げただけの刺突平縁甕で，これも肩部に櫛描き直線文が巡る。*812* は肩があまり張らずに底部に向かってすぼまる器形で緩やかに外反する口縁部が付く。肩部の１箇所には８本の短線の刺突文が刻まれる。

壺は短頸壺（*813*）・有段短頸壺（*815* ・*818*）・広口壺（*814* ・*816* ・*817*）がある。813は内外面ハケメ調整で，口縁端部はヨコナデ調整される。*814* は割れ口の周辺に内外面に粘土を張り，その上から細かく横方向のヘラミガキ調整を行っている。整形が終わった段階で部分的に粘土を貼り付け，再調整を行っていることから補修作業の一形態と考えられる。*815* の口縁部は上端で面取りする受口状である。*818* は口縁部が緩やかに外傾し，口縁端部でさらに外傾する有段壺である。胴部は丸く膨らむ球胴であるが，底部は小さい。下半部にはススが付着する。*816* は短い直立する口縁部の小型の壺か。*817* は短い口縁部が直線的に外傾する壺で，外面はヘラミガキ調整である。

器台は外反器台（*820*）と有段器台（*821*）がある。*820* は口縁端部を摘み上げて外面に強いヨコナデを施すことによって断面形が三角形状となっているものである。口縁端部外面には赤彩痕が残る。*821* は有段部上部には浅い沈線が１条巡る。内面にヘラケズリ調整が残る。*822* は器台又は高杯の脚部で，脚裾端部を折り返して肥厚した縁帯を作るもので，赤彩痕が残る縁帯は剥離している。内面には裾端部周囲にのみ炭化物が付着しており，蓋に転用されていたことが窺われる。

高杯（*819* ・*822* ～*829*）は有段高杯と拡張有段高杯で，全形がわかるものは１点のみである。口縁端部は丸縁のものが多く，*826* のみ面取りされる。口縁部外面の調整は縦方向と横方向のヘラミガキ調整がある。*819* は口縁端部内面と脚裾端部に擬凹線文が巡らされ，脚部が棒状有段脚で，脚裾部には逆Ｔ字状の透孔が彫り込まれる。透孔は脚裾上部に４箇所，有段部に４箇所と互い違いに配されている。裾端部は折り返され断面三角形に肥厚する。杯底部外面はハケメ調整で，ヘラミガキ調整されない。脚基部と擬凹線文が施される範囲は赤彩される。*825* は口縁部が外折れする拡張有段高杯で，口縁端部内面には突帯が巡る。*827* ～*829* は高杯の脚部である。*827* の脚基部には平行沈線文が施され，透孔は３孔である。*828* の脚裾端部は面取り，*829* は丸縁で赤彩される。

鉢は擬凹線鉢（*830*），有段鉢（*831* ～*833*）と無頸鉢（*836* ・*837*）がある。*830* は擬凹線文が施される有段部にも横方向のヘラミガキ調整がされる。有段鉢は口縁端部が外反するもの，斜め上方に摘み上げるもの，上端部で面取りするものがある。いずれも器高が低く底部が小さい，椀形を呈する器形である。*831* は口縁部が受口状で，上端部は赤彩される。体部は中位で屈曲し，下半はヘラケズリ調整である。無頸鉢はいずれも内外面ヘラミガキ調整であるが，*837* はミガキが強く逆に表面が凸凹している。*834* は台付鉢の脚基部。外面と底部内面は赤彩される。*835* は鉢の把手。

木製品は礎板・用途不明材が出土している。*947* ・*948* はＰ14から出土した礎板で，いずれも遺存状態が悪い。*947* は断面がかまぼこ形で，他にも残片がある。樹種はヤマウルシ。*948* は断面三角形の棒材で，角の部分に不明瞭だが数箇所に刻みが彫られている。下端は炭化して欠損する。樹種はヤマグワ。*956* は周溝から出土した用途不明部材で，３箇所に小孔が開けられる。両端は欠損している。

石製玉作関連遺物は屋内部からは緑色凝灰岩剥片，緑色凝灰岩製管玉未成品，鉄石英石核・剥片，石英石核・剥片，ひすい石核・剥片，勾玉未成品が出土した。*1554* ～*1567* ・*1571* は緑色凝灰岩製管玉未成品。*1554* は淡緑色で硬質の石材の荒割工程品。*1555* は濃緑色で硬質の石材の形割工程品。表面に擦跡がみられるが，これは荒割工程の時の整形痕と思われる。*1571* は研磨工程品。*1556* ～*1567* は穿孔工程品。*1556* は天面に穿孔前の窪みを付けている。地面側は欠損している。*1557* は天面の穿孔が大きく端に寄り，外面が大きく欠損している。*1567* は縦方向に欠損しているが，残存部から四角柱の形状だったことがいえる。四角柱に研磨され，両側穿孔が行われている。天地面とも残存している穿孔工程品については全て両側穿孔である。*1568* はＳＩ14の*1553* と石材が類似しており，同じく花崗岩と思われる。勾玉未成品の可能性がある。

周溝から緑色凝灰岩剥片，緑色凝灰岩製管玉完成品・未成品，鉄石英製管玉未成品，鉄石英石核・剥片，石英剥片，ひすい剥片，蛇紋岩剥片，その他の石材加工品が出土した。*1569* ～*1579* は緑色凝灰岩製管玉完成品・未成品。*1569* は形割工程品。*1570* は研磨工程品。*1572* ～*1578* は穿孔工程品。*1572* は天面から穿孔が行われている。長さの半分より地面側は石質が白濁しており，色調が均一な管玉は得られないものである。*1574* は天面から穿孔が行われ，貫通している。一応片側穿孔であるが，地面に穿孔前に付けられた窪みが残る。全長が9.18㎜あり，穿孔具はこれ以上の長さのものが使用されたと考えられる。*1579* は完成品。最大径7.5㎜，孔径3.64㎜を測り，ほかのものと比べて大きい。

1581 は鉄石英の石核。天面・表面・地面の３面に礫面があり，転石であった可能性が高い。*1580* は鉄石英製管玉研磨工程品。*1582* は石英の円礫を分割したもの。*1584* はひすいの石核。上半分は光にかざすと半透明の淡緑色である。勾玉の未成品の可能性がある。*1583* は蛇紋岩の加工品。一部に礫面が残る。右側面･裏面には仕上げに匹敵する光沢を持つ研磨が施され,研磨痕は観察できない。*1585* は勾玉未成品。研磨により半円状に整形されている。石材は不明。

16号周溝式竪穴建物（ＳＩ16，第100・102・103・106・127・128・137・139・181図，図版27・82・83・138・152・156・166・168）

Ｂ６地区中央に位置する。平面形は隅丸方形に壁溝が巡る。床面は包含層掘削後ほとんど掘り下げずに検出した。噴砂によって荒れているため，床面の状況は不明である。主柱穴はＰ１～４の４基で，柱根は出土していない。そのほか，Ｋ５は最大径74㎝，深さ21㎝，Ｋ６は最大径99㎝，深さ13㎝を測る楕円形土坑。内部に炭化物はみられなかった。貯蔵穴のようなものであろうか。炉などの施設はわからなかった。建物の周りは円形に巡る周溝をもつ。ＳＩ15と隣接するが，切り合いは不明である。

遺物は屋内部から弥生土器・砥石・石製玉作関連遺物・炭化米，周溝から弥生土器・木製品・石製玉作関連遺物・炭化米が出土した。

弥生土器には甕・壺・台付壺・器台・高杯・鉢がある。

甕には擬凹線甕（*838*～*840*・*849*）・有段甕（*852*）・受口甕（*843*・*844*・*850*・*851*）・刺突受口甕（*845*～*848*）・平縁甕（*841*）・丸縁甕（*842*）・付加状甕（*853*）がある。量的には受口甕の比率が高い。擬凹線甕は端部を面取りするものと口縁部が有段となるものがある。*840* は頸部が屈曲せず外傾し，有段部直下から縦方向のハケメ調整が施される。*849* は口縁部が受口状となる。有段甕はすべて口縁端部を摘み上げただけの有段部が短いものである。*853* は口縁部が外傾し，胴部の張りが弱い器形で，口縁端部が外反し，内外面ハケメ調整で，頸部内面にまでハケメが施される。受口甕は口縁上端部の面取りをしっかりしているものと丸縁になっているものがある。また，口縁端部の屈曲は直立するものからなだらかなものまであり，肩部にまで刺突文が施されるものはない。

壺には長頸壺（*854*～*857*）と広口壺（*860*）と擬凹線短頸壺（*859*）がある。長頸壺は口縁部が直線的に斜め上方に伸びるものとやや外反するものがあり，口縁端部は面取りするものと丸縁にするものに分けられる。丸縁のものは外側に向かって丸めている。内外面ハケメ調整で，表面にＵ字状の沈線文が残るものが３個体もある。いずれも草木の茎類を１本または束ねたもので施文したものと推定される。*859* は擬凹線短頸壺で，直立する口縁部は外面縦方向，内面横方向のヘラミガキ調整である。*860* は広口壺。

861 は台付壺の胴部で，中折れの突帯は棒状浮文を２本垂直に貼り付けて装飾される。

862 は有段器台の脚部。有段部に巡る２重の突帯は両側面から櫛状工具によって斜位に連続刺突される。脚裾部には透孔が上段に１孔以上，中段に４孔，下段に５孔とやや間隔が不揃いに穿たれる。

高杯（*863*～*866*）は口縁部のみの出土が多い。口縁端部は面取りするものと丸縁のものがあり，端部内面に突帯が巡るものもある。口縁部の調整は縦方向と横方向のヘラミガキ調整があり，外面は *864* のみ横方向，内面は*863* のみ縦方向である。*863* は杯部の屈曲部に３本の沈線が巡り，そこには帯状に赤彩が加えられている。*867* と *868* はハの字状に外展する脚部である。*868* の裾端部は丸縁に仕上げられる。脚裾部外面はヘラミガキ前のハケメ調整痕が顕著で，一部に赤彩痕が残る。*867* は *868* に比べ脚基部が細く，裾端部は面取りされて，内面には中心から外に向かって柔らかい原体で，浅い刺突が加えられており，整形痕と考えられる。透孔は共に３孔である。

鉢は有段鉢（*869*）と無頸鉢（*870*）がある。*870* は内外面ヘラミガキ調整，口縁端部内面に緩い屈曲をもつ。*871* は鉢の体部で，有段口縁またはくの字口縁の鉢であったと推測する。

木製品は周溝から用途不明の板状部材（*953*）が出土している。上端は凸型に削りだし，下端は段を作って厚くする。形状から当初は容器かと考えられたが，両側辺が欠損しているようには見えず，用途不明品とした。樹種はスギ。

石製品は凝灰岩製の砥石（*968*）が出土した。表面は平坦で，細かな線状痕が長軸方向にみられる。同様の痕跡が左右側面にもみられる。裏面は短軸方向に表面よりも荒い線状痕が観察できる。

石製玉作関連遺物は周溝からは緑色凝灰岩剥片，緑色凝灰岩製管玉完成品・未成品，鉄石英剥片，石英剥片，ひすい加工礫，蛇紋岩剥片が出土した。屋内部からは緑色凝灰岩剥片・鉄石英剥片・石英剥片が出土したのみで玉の完成品・未成品の出土はなく，玉作工房ではないと判断した。周溝から出土した玉作関連遺物は隣接するＳＩ15から流れ込んだ可能性が高いと思われる。なおＳＩ16周堤部分直上の包含層から勾玉の未成品が１点，ＳＩ16とＳＢ８の間の包含層から勾玉の未成品が３点出土した。包含層資料のため積極的には言えないが，比較的まとまっており，この辺りで勾玉を作っていた可能性がある。*1586* ～*1588* は緑色凝灰岩製管玉の完成品・未成品。*1586* は穿孔工程品。*1587* は円筒状に整形され完成品に近いが，外面に荒い擦痕が残っており，仕上げ工程のもの。孔内壁の中央付近には両側穿孔の際に生じた双方向からの行き違いがわずかに観察できる。*1588* は完成品の小破片。*1589* ～*1591* はひすい。*1589* は自然円礫。*1590* ・*1591* は礫面が残る石核。*1590* は打割分割のほかに施溝分割が４箇所で行われている。両側面を分割した後，裏面さらに天面の分割を行っている。この石核を取り出すための施溝分割と思われる。*1591* は裏面で施溝分割が１箇所確認できる。

17号周溝式竪穴建物（ＳＩ17，第104～106・129・139・182・213図，図版84・85・149・156・157・160・163・166）

Ｂ６地区の北東部に位置する。平面形は隅丸方形に壁溝が巡る竪穴建物。屋内部は楕円形の土坑を２基検出した。Ｐ１は最大径47㎝，深さ23㎝を測る。Ｐ２は最大径59㎝，深さ13㎝を測る。埋土はともに褐灰色シルト質ロームを基調とし，炭化物はみられなかった。柱穴や貯蔵穴のようなものであろうか。建物の中央は炉などの施設は検出されなかった。建物の周りは周溝をもつ。東側は噴砂により幅が広がった状態で検出された。主柱穴や炉は確認されず，ほかの周溝式竪穴建物に比べると規模が小さく，周溝式平地建物の可能性もある。

遺物は屋内部から弥生土器片・木製品（柱材の一部・板材）・石製品・石製玉作関連遺物・炭化米，周溝からは弥生土器片・石製玉作関連遺物・炭化米，周堤盛土からは緑色凝灰岩剥片が出土した。緑色凝灰岩製管玉は各工程のものが出土しており，玉作工房と考えられる。

弥生土器は，甕・壺・器台・高杯・鉢が出土した。

甕は擬凹線甕（*880* ～*883*）・有段甕（*892*）・受口甕（*885* ・*890*）・刺突受口甕（*887* ・*891*）・平縁甕（*884*）・丸縁甕（*888*）がある。擬凹線甕は口縁部片ばかりで全形を知り得るものはない。*892* は肩部を欠損する有段甕で，外面には全面にススが付着する。底部は平底で，外面に「井」字状にハケメ痕が残る。*887* は胴部が球形を呈する中型の受口甕で，口縁帯と肩部に列点文が施される。内外面ハケメ調整である。*891* も口縁帯に列点文が施され，内外面ハケメ調整で，底部は中央が窪む上げ底である。*890* は大型の受口甕の口縁部か。*888* は外面ハケメ調整，内面は板状工具による縦方向のナデ調整である。*889* は甕の底部，*886* ・*896* は壺の底部である。*889* ・*896* は上げ底である。*897* は無頸壺で，丸い胴部に短く直立する口縁部が付く。底部は丸底で，内外面横方向のヘラミガキ調整

である。*893* は受部が浅い擬凹線器台で，口縁帯には円形浮文が５個１組で６箇所に貼付されていた形跡が残る。*894* は有段高杯で，短く外反する口縁部が端部でさらに外折れする。*895* は直線的に外傾する器形の無頸鉢。口縁端部は外側に折り返し，肥厚させる。口縁はヨコナデされるが水平ではない。内外面ハケメ調整である。

石製品は赤色をした流紋岩製のアメリカ式石鏃（*965*）が出土した。

石製玉作関連遺物は屋内部からは緑色凝灰岩石核・剥片，緑色凝灰岩製管玉未成品，鉄石英剥片，石英剥片が出土した。*1592* ・*1593* は緑色凝灰岩の荒割工程品。この２点は*1592* の右側面と*1593* の裏面で接合する。*1594* ・*1595* は緑色凝灰岩製管玉の形割工程品。*1596* は緑色凝灰岩製管玉の研磨工程品。*1597* ～*1600* は緑色凝灰岩製管玉の穿孔工程品。*1597* は地面側が欠損しているが，両側穿孔の痕跡が観察できる。ここにさらに研磨を施しており，欠損していながらも完成品を製作しようとしていた様子が窺える。*1599* も同様に地面側が欠損しているが，両側穿孔の痕跡が観察できる。欠損後は特に加工はされていない。なお，*1597* と*1599* の２つの孔を合わせると位置がほぼ一致し，さらに多角柱の面数，面幅がほぼ一致する。元々一つであった両者は両側穿孔が行き違いを生じたまま貫通することなく欠損し，長さのある*1597* のみさらに加工されたと思われる。

周溝からは緑色凝灰岩剥片，緑色凝灰岩製管玉未成品，鉄石英剥片，石英剥片，ひすい剥片，その他石材加工品が出土した。*1601* ～*1607* は緑色凝灰岩製管玉未成品。*1601* ～*1603* は形割工程品。*1604* は研磨工程品。*1605* ～*1607* は穿孔工程品。*1608* は四角柱状の加工品。色調は橙色で石材は不明である。管玉の形割未成品のように打割によって四角柱状に加工されている。

18号周溝式竪穴建物（ＳＩ18，第107・108・128図，図版27・82・83）

Ｂ６地区の中程東端に位置する。周溝の一部は調査区外となる。平面形は不整形な隅丸方形状に壁溝が巡る竪穴建物。屋内部は中央に黒色の灰を多く含む灰穴炉（Ｋ５）を検出した。楕円形で最大径64㎝，深さ８㎝を測る。柱穴はＰ１・２・６を検出した。全部で６基の主柱穴があると思われるが，噴砂・攪乱によって荒れており，南西側半分は検出できなかった。そのほか，楕円形土坑Ｋ３・４を検出した。内部に炭化物はみられなかった。貯蔵穴のようなものであろうか。建物の周りは円形に巡る周溝をもつ。周溝の南側は最も深くなる。南側でＳＤ3973に接続し，さらに南側の低地へ向けて流れていったことが窺える。周溝はＳＩ15に切られる。

遺物は弥生土器・緑色凝灰岩剥片が出土した。緑色凝灰岩は剥片がわずかに出土したのみであった。隣接するＳＩ15から流れ込んだ可能性が高く，ＳＩ18は玉作工房ではないと判断した。

弥生土器は甕・壺・小型壺・高杯・ミニチュア土器が出土した。甕（*872* ・*873*）は刺突受口甕で，共に口縁帯に刺突文が施される。*872* は内外面ハケメ調整である。*875* は短頸壺である。胴部が膨らむ器形で，口縁部はやや外反し，端部はヨコナデ調整されて丸縁に仕上げられる。*874* は有段小型壺で，内外面赤彩される。*878* はくの字口縁の小型壺で，内外面赤彩される。*877* は高杯の脚基部で，４条の沈線が巡る。*879* は鉢形ミニチュアで，口縁端部は摘まれて小波状となっている。完形である。

19号周溝式竪穴建物（ＳＩ19，第109・110・130・137・138・140，182図，図版28・84・85・138・139・150）

Ｂ７地区南東部で，弥生時代から古墳時代にわたる自然流路ＳＤ4001のすぐ西側に位置する。ＳＤ4011は建物の周溝とＳＤ4001とを連結し，排水溝の機能を持つと考えられる。またＳＤ4001は，ＳＤ4011との合流点付近の河岸斜面に原木を流路に平行に並べており，護岸工事の可能性が考えられる。

屋内部は壁溝が北東部で２重に巡ることから，１度建て替えを行っていると考えられ，新段階は旧

段階よりも南西にずれて建て替えられている。旧段階はその床面全体の約2/3を検出し，平面形は不整形な円形に近く，それに沿って，やや崩れた感のある壁溝が巡る。旧段階に伴う柱穴などの施設は確認できなかった。遺物は壁溝から極少量の弥生土器片が出土している。

新段階の床面は，平面形はほぼ正方形に近い隅丸方形，規模は長軸5.4m・短軸5.1m・屋内部面積26.6m²を測り，中央の灰穴炉と主柱穴４基，壁溝を検出した。灰穴炉は直径1.2mの不整形で，断面は２段落ちとなり，第２層は炭層となっている。極少量の弥生土器片のほか，拳大の礫が２段落ちの下段の底部下端に沿って数個出土している。柱穴の軸方向はＮ－７°－Ｅで，柱穴規模は直径約40～80㎝，深さ約15～30㎝，柱穴Ｐ１・４には柱根が遺存していたが，噴砂によって原位置をとどめていなかった。壁溝は規模が幅約20～80㎝，深さ約10～20㎝で，南側で灰白色の粘土塊（47×48×15㎝）を検出した。遺物は主に壁溝南側から弥生土器が出土した。

周溝は北東部で先述したＳＤ4011と連結し，南西側に開口部がある。周溝の南西端ではＳＤ4012と連結し，このＳＤ4012は周溝式掘立柱建物ＳＢ２の周溝と連結している。周溝規模は幅約1.1～1.5m，深さ約20～50㎝，遺物は特に西側で周溝底から弥生土器と大量の木材が出土しており，木材はわずかな製品のほかは，部分的に炭化している角材や板材などの建築部材と考えられるものが多かった。

遺物は主に周溝から弥生土器・木製品・石製品・石製玉作関連遺物が出土している。

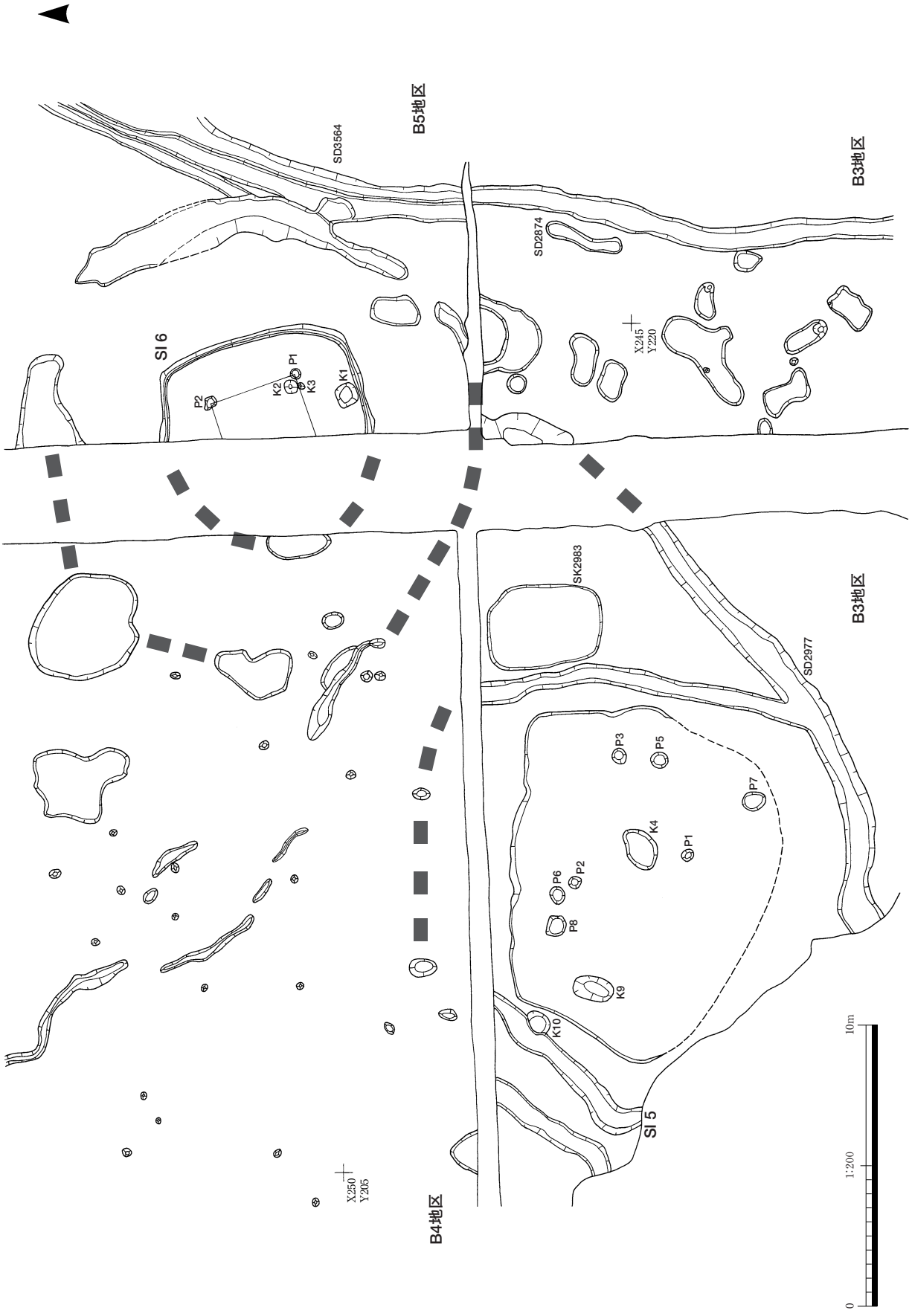
弥生土器は甕・壺・鉢がある。*898*～*904*は甕。*898*～*902*は擬凹線甕で，*898*は口縁部が伸長せず，外面にやや波状の擬凹線を施し，肩部には原体不明の円形の刺突文を施す。*901*は肩部に平行沈線２条と列点文，*902*は斜行短線文を施す。*902*は頸部内面に板状工具のナデ。*903*・*904*は受口甕。*905*・*906*は短頸壺。*905*は頸部がわずかに内湾する。*906*は頸部がやや外反し，端部で短く直立して有段となる。底部は内面に指頭圧痕が残り，丸みのある小平底となる。*907*は鉢で，付加状口縁。*908*は拡張有段高杯で，有段部に細く粘土帯を貼り付けて稜をつくる。*909*～*917*は天王山系土器。

木製品は工具・農具・建築部材がある。*959*はＢ５地区ＳＩ９出土の水準器（*958*）と同様のもので，角材を断面逆台形に削りこみ，長辺上面に鑿状の工具で浅い刻みを施す。この刻みは両長辺の同じ位置には彫り込まれず，左右で違っている。とはいえ残存部分が短いため，互い違いのようになるとは断言できない。短辺部分は内面からほぼ直角に立ち上がる。側面と裏面は炭化や破損があるが，裏面は平坦に見える。樹種はヤナギ科。*949*は農具で，ナスビ形鍬。刃部は欠損しているが，下端でやや狭まるように見えるため，又鍬ではなく平鍬だろうか。笠部の上端も欠損しているが，こちらはやや広がるようであるため，上部にホゾ孔があくタイプのものかもしれない。樹種はクヌギ節。*960*・*961*は建築部材か。いずれも板材で，*961*には側辺に沿って５箇所に小さな円形孔があけられる。樹種はいずれもスギ。*960*は放射性炭素年代測定を行っており，^{14}Ｃ年代では1840±40と測定されている。図示していないが，Ｐ１・４から出土した柱根は順に1940±40・1910±40と測定されている。

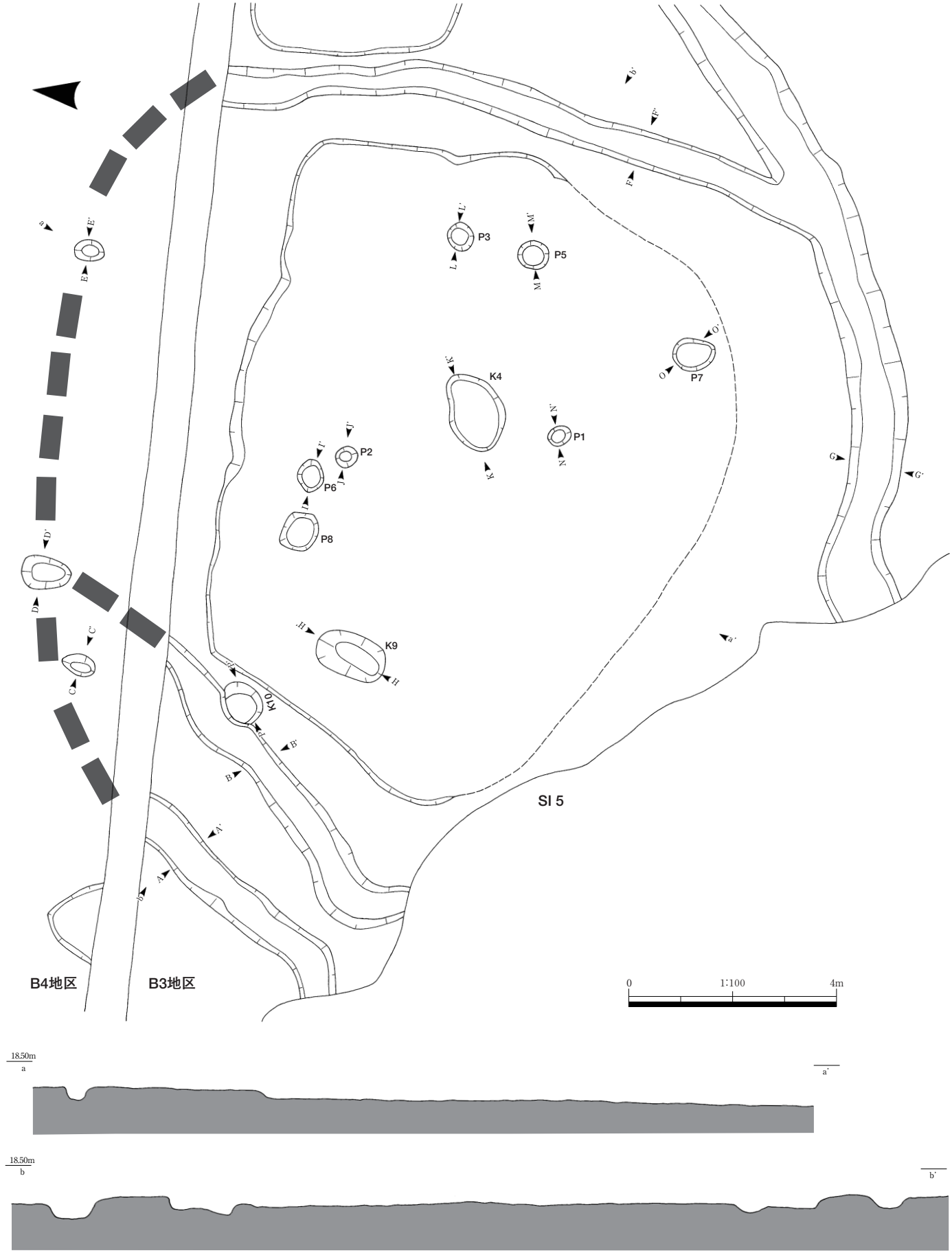
石製品は敲石（*975*）が出土した。花崗岩製で，敲打面は天地面にみられる。

石製玉作関連遺物は屋内部からは緑色凝灰岩剥片，石英剥片，ひすい剥片が出土した。周溝からは緑色凝灰岩剥片，緑色凝灰岩製管玉未成品，石英剥片が出土した。*1609*～*1611*は緑色凝灰岩製管玉の穿孔工程品。いずれも貫通していない。屋内部や周溝から緑色凝灰岩や石英，ひすいの剥片が出土しているが極僅かであり，周辺からの流れ込みと思われる。

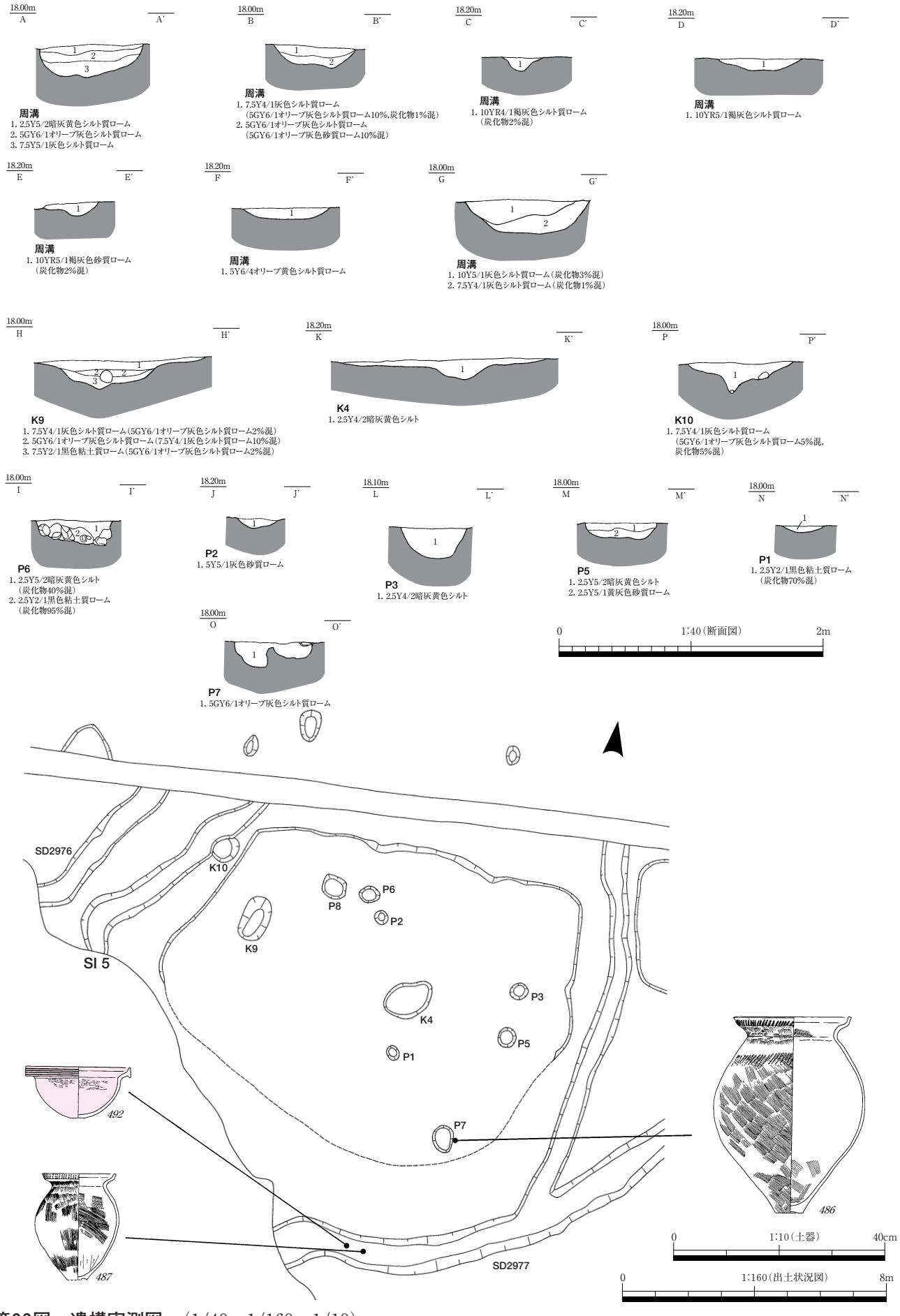
第66図　B地区遺構全体図　(1/1200)



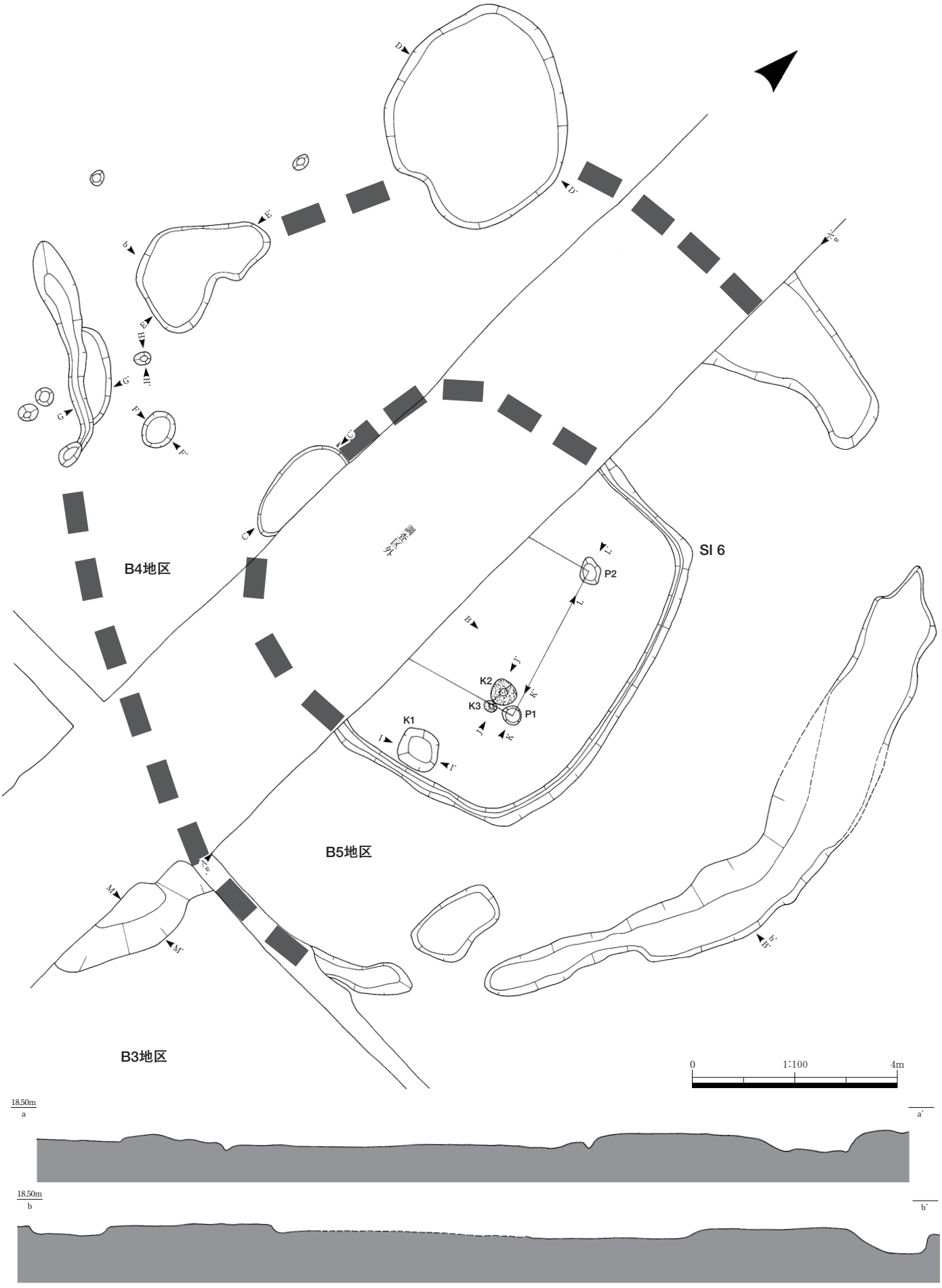
第67図　遺構実測図　(1/200)
Ｂ３地区　ＳＩ５
Ｂ５地区　ＳＩ６



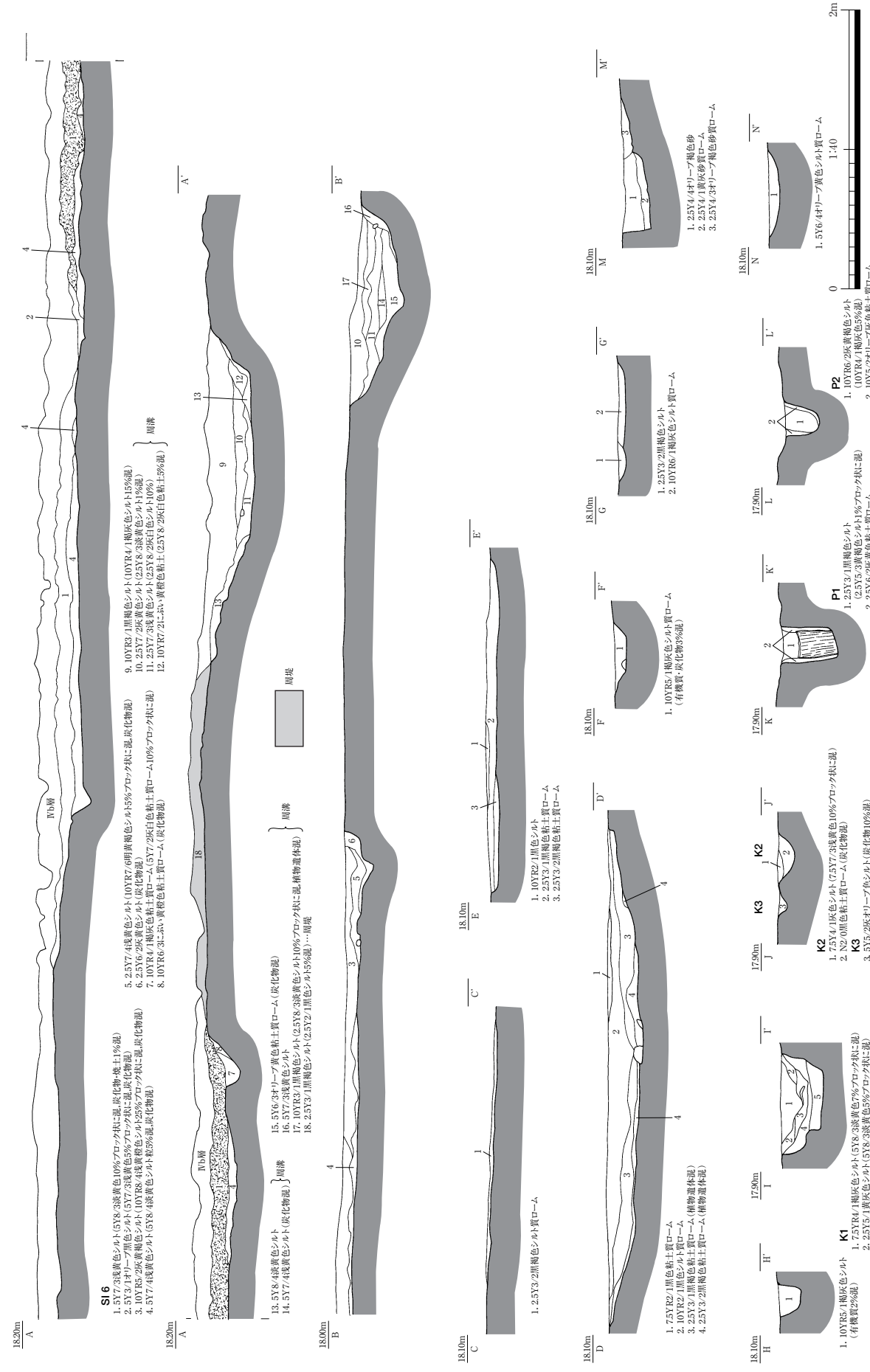
第68図　遺構実測図　(1/100)
B３地区　ＳＩ５



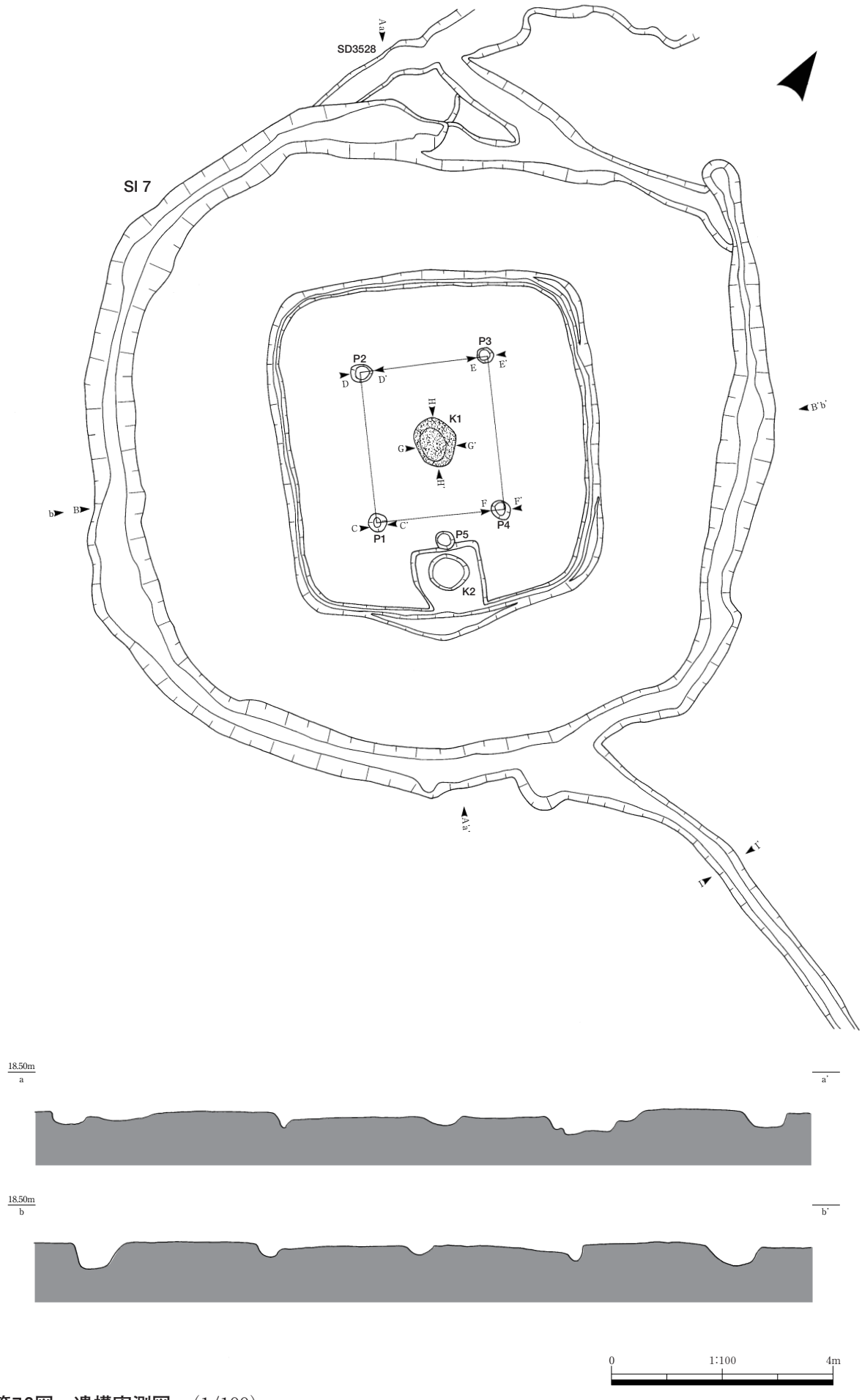
第69図　遺構実測図　(1/40・1/160，1/10)
B３地区　ＳＩ５



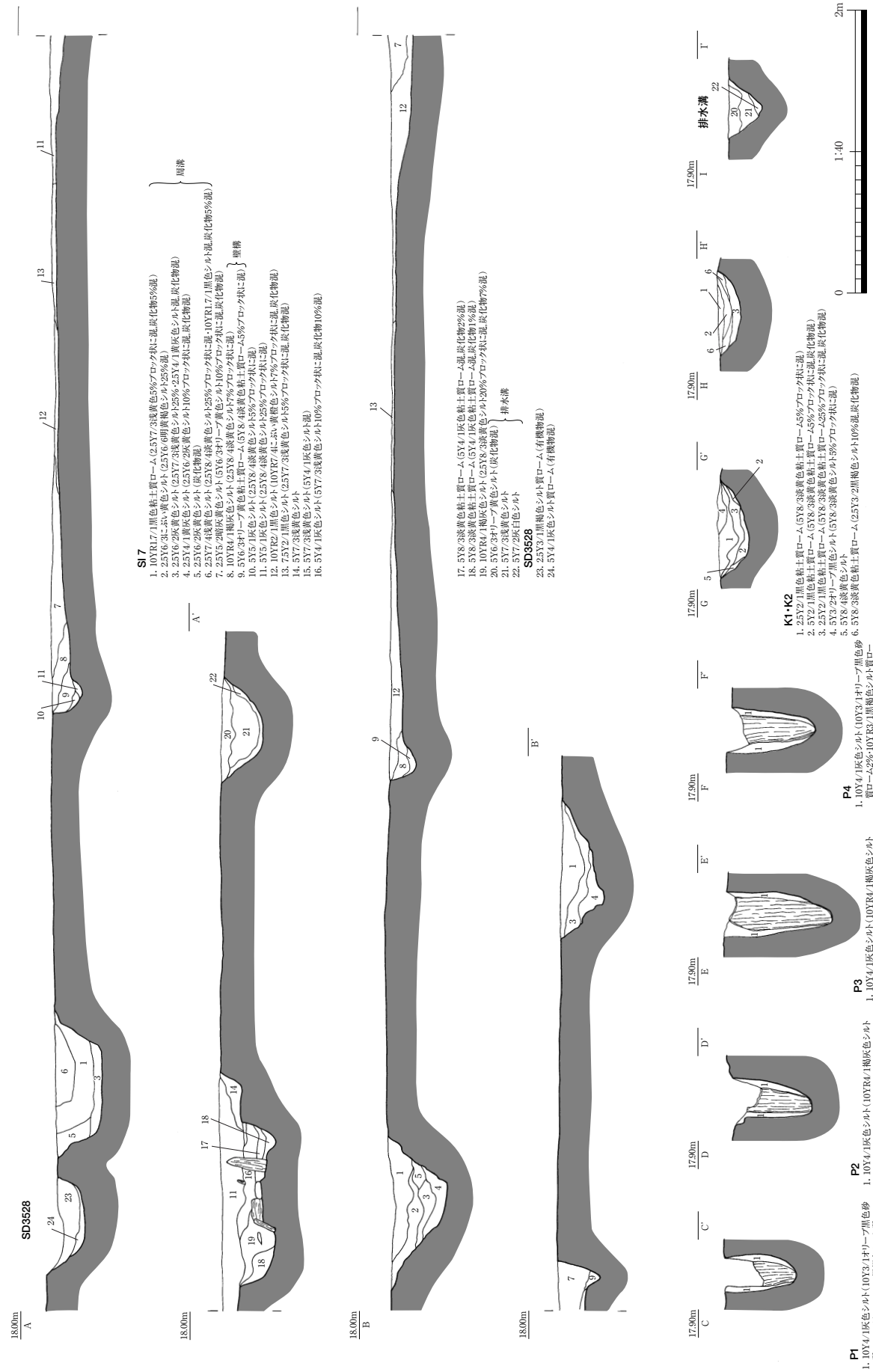
第70図　遺構実測図　(1/100)
B５地区　ＳＩ６



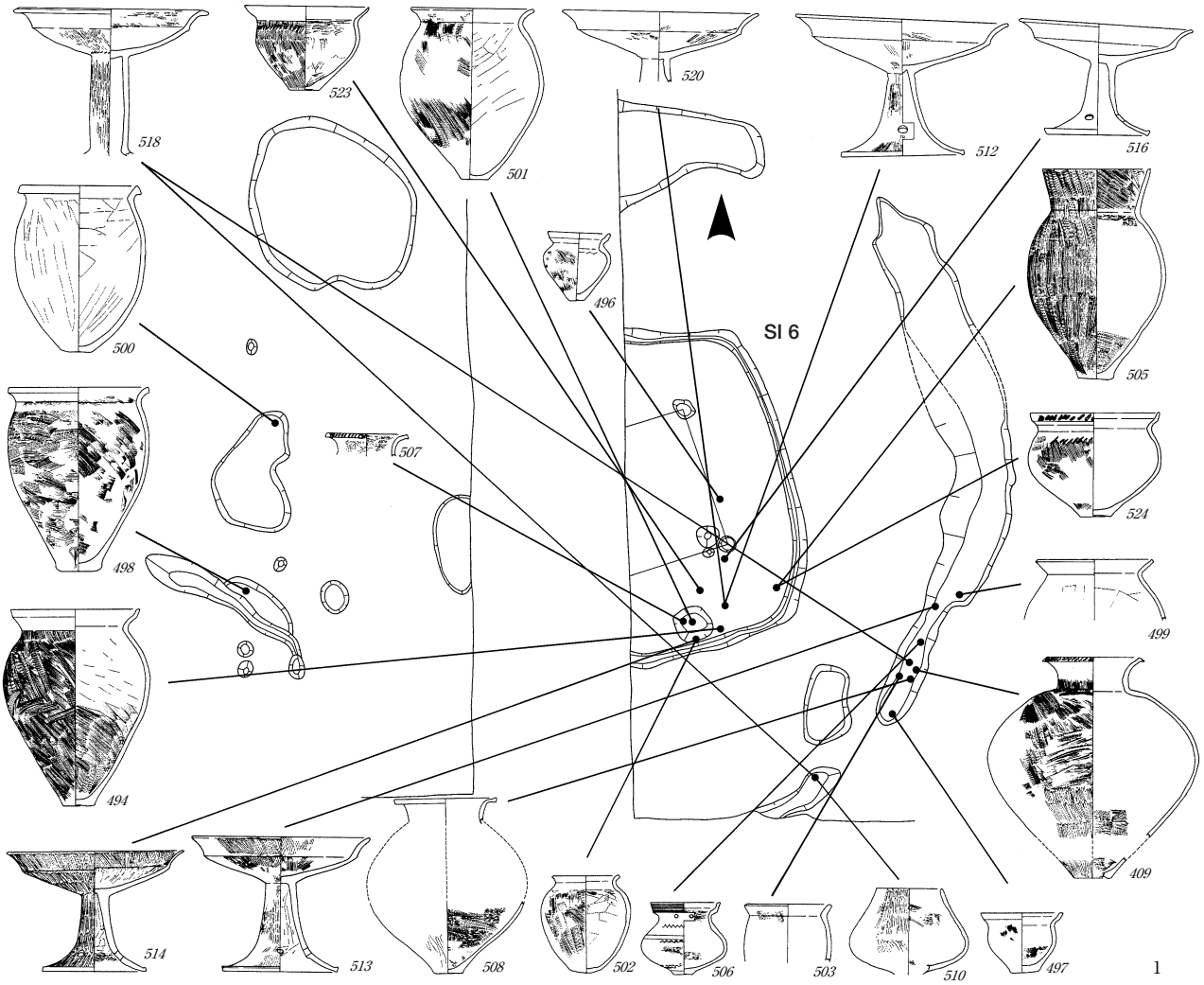
第71図　遺構実測図　(1/40)
B５地区　ＳＩ６

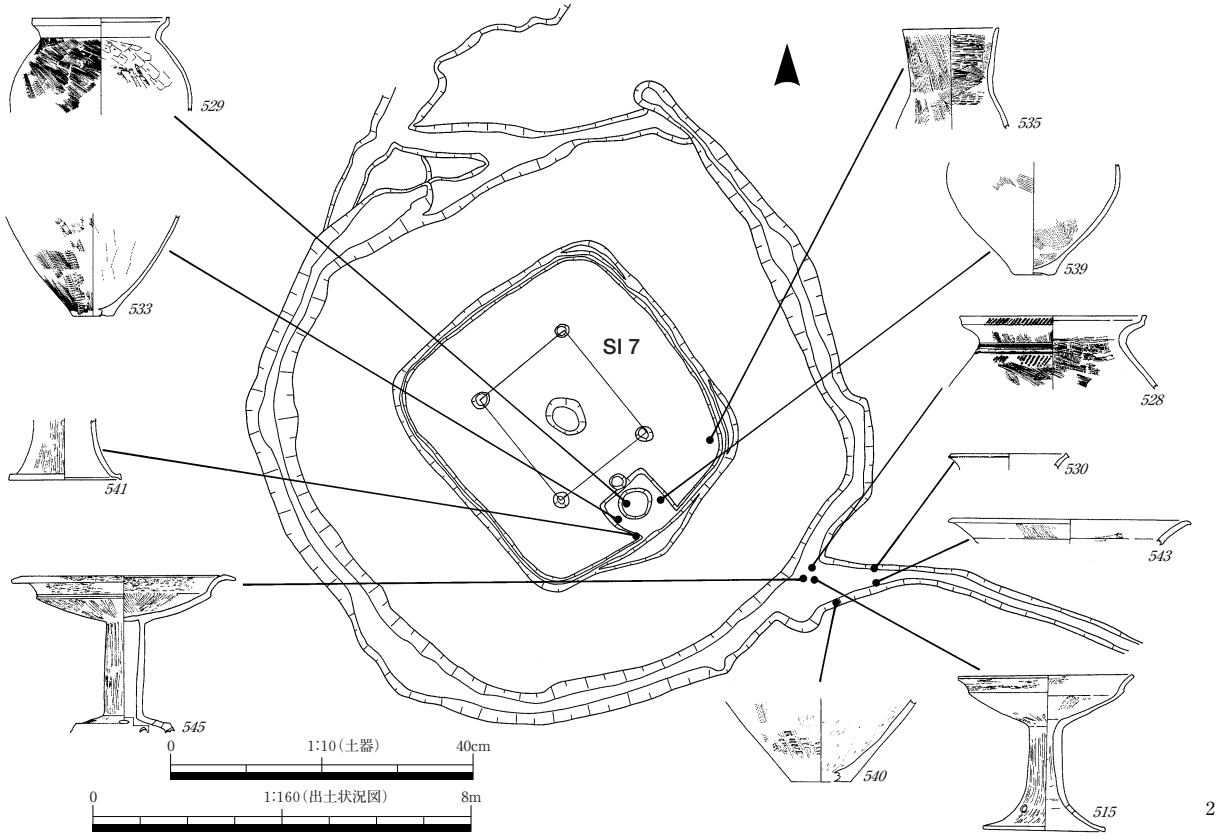


第72図　遺構実測図　(1/100)
B５地区　ＳＩ７・ＳＤ3528

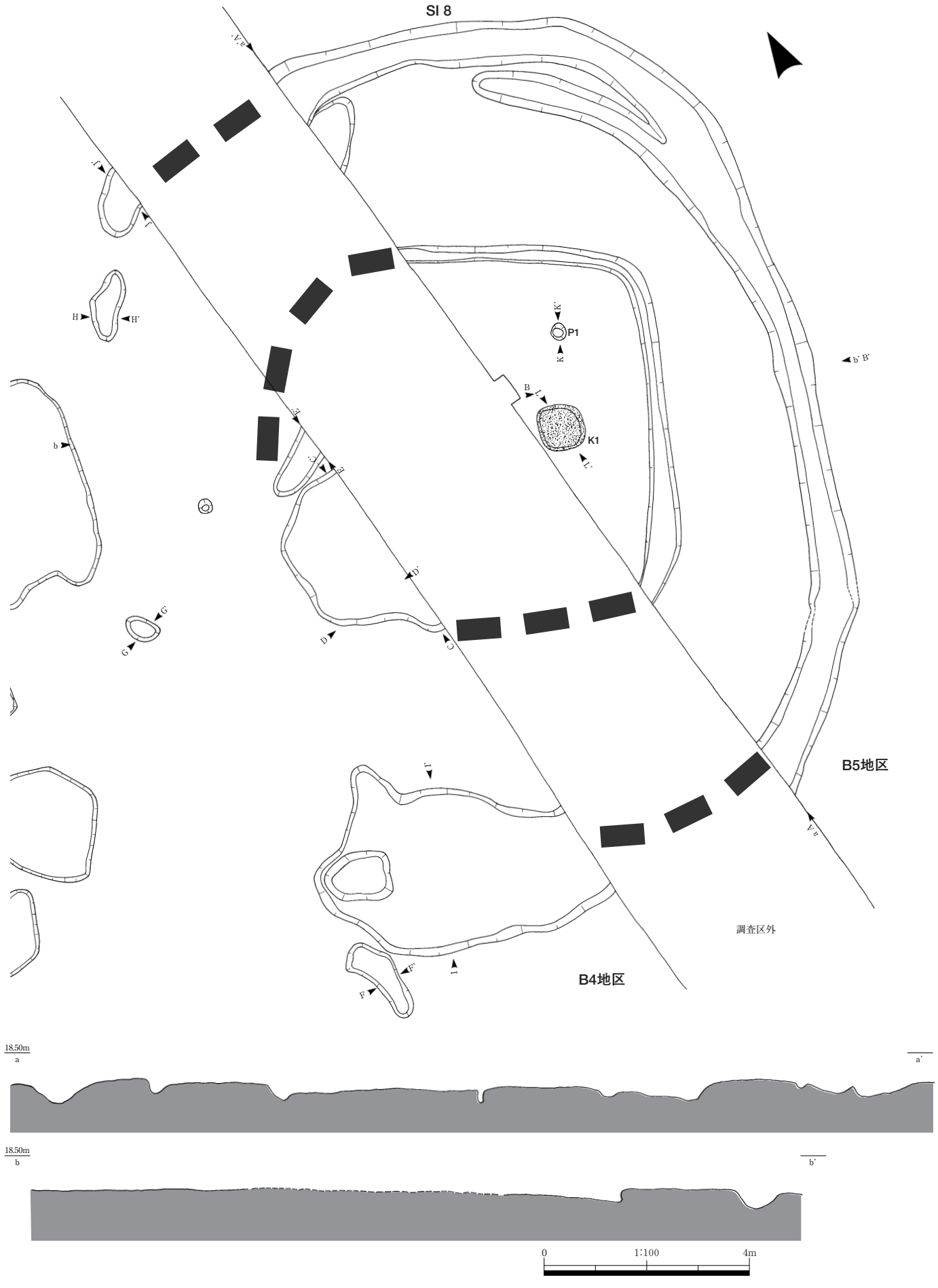


第73図　遺構実測図　(1/40)
Ｂ５地区　ＳＩ７・ＳＤ3528

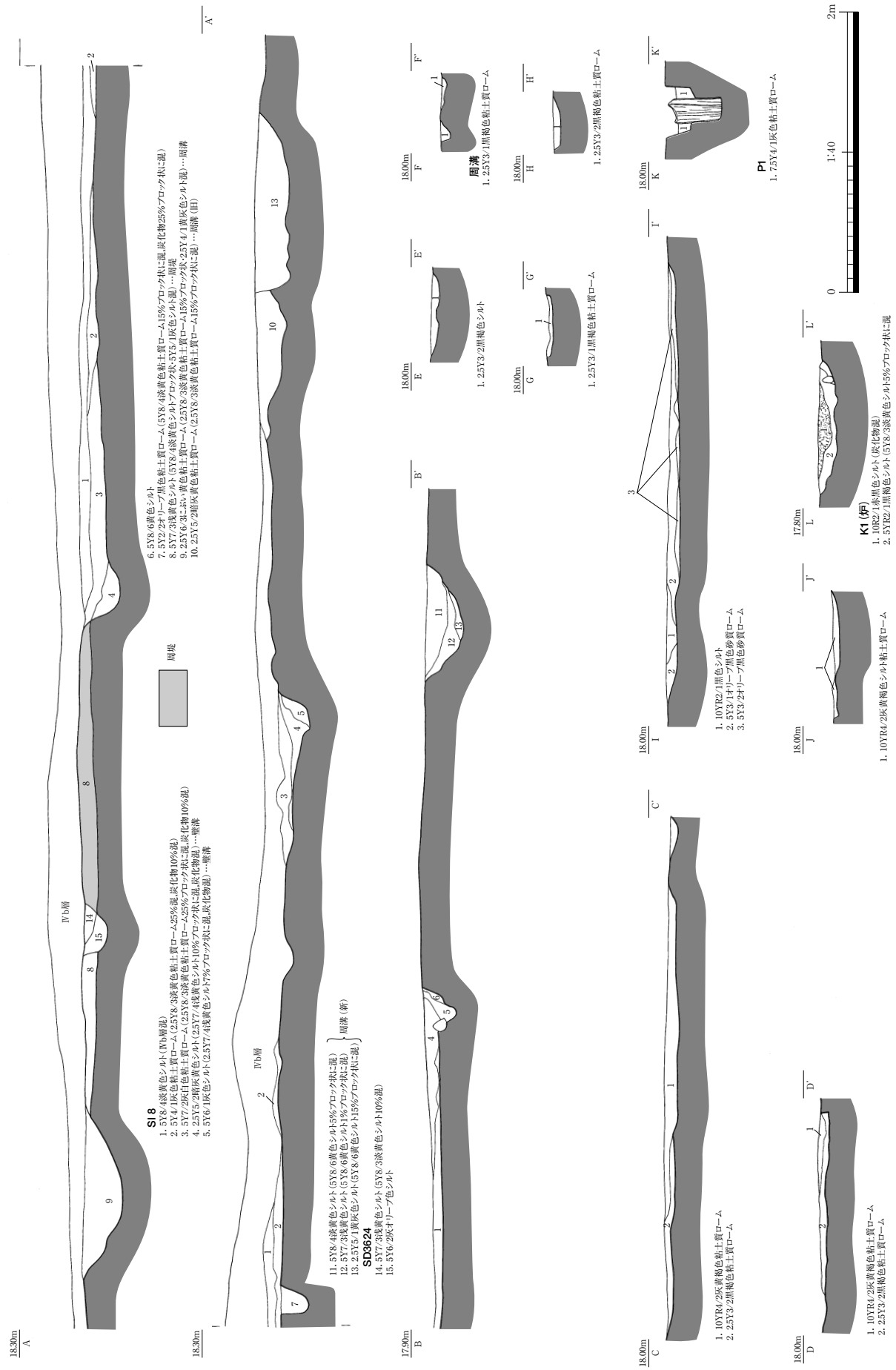




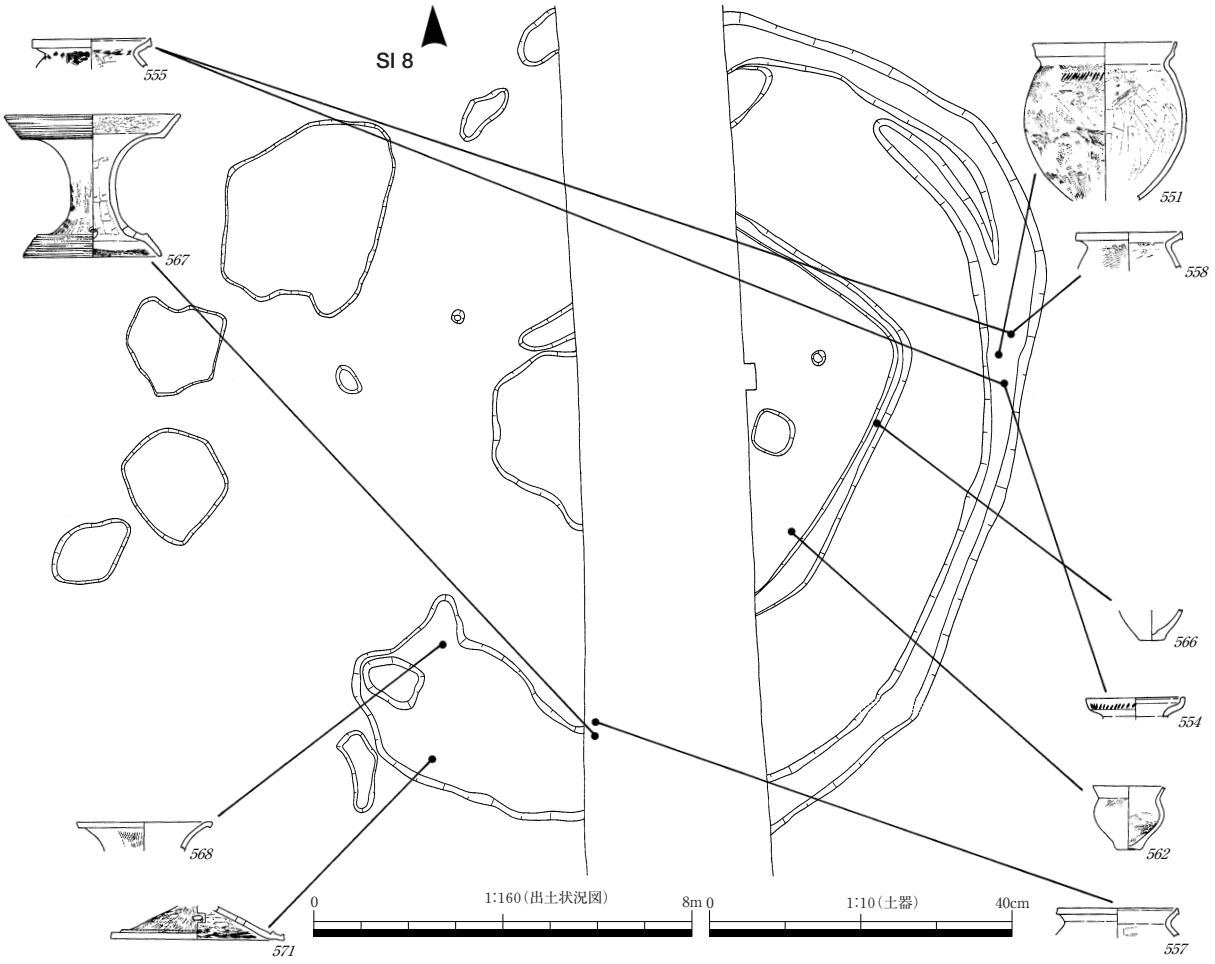
第74図　遺構実測図　(1/160, 1/10)
B５地区　1.ＳＩ６　2.ＳＩ７

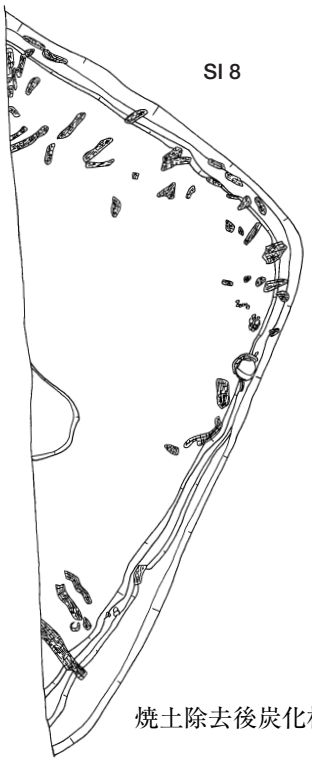


第75図　遺構実測図　(1/100)
Ｂ５地区　ＳＩ８



第76図　遺構実測図　(1/40)
B５地区　ＳＩ８・ＳＤ3624



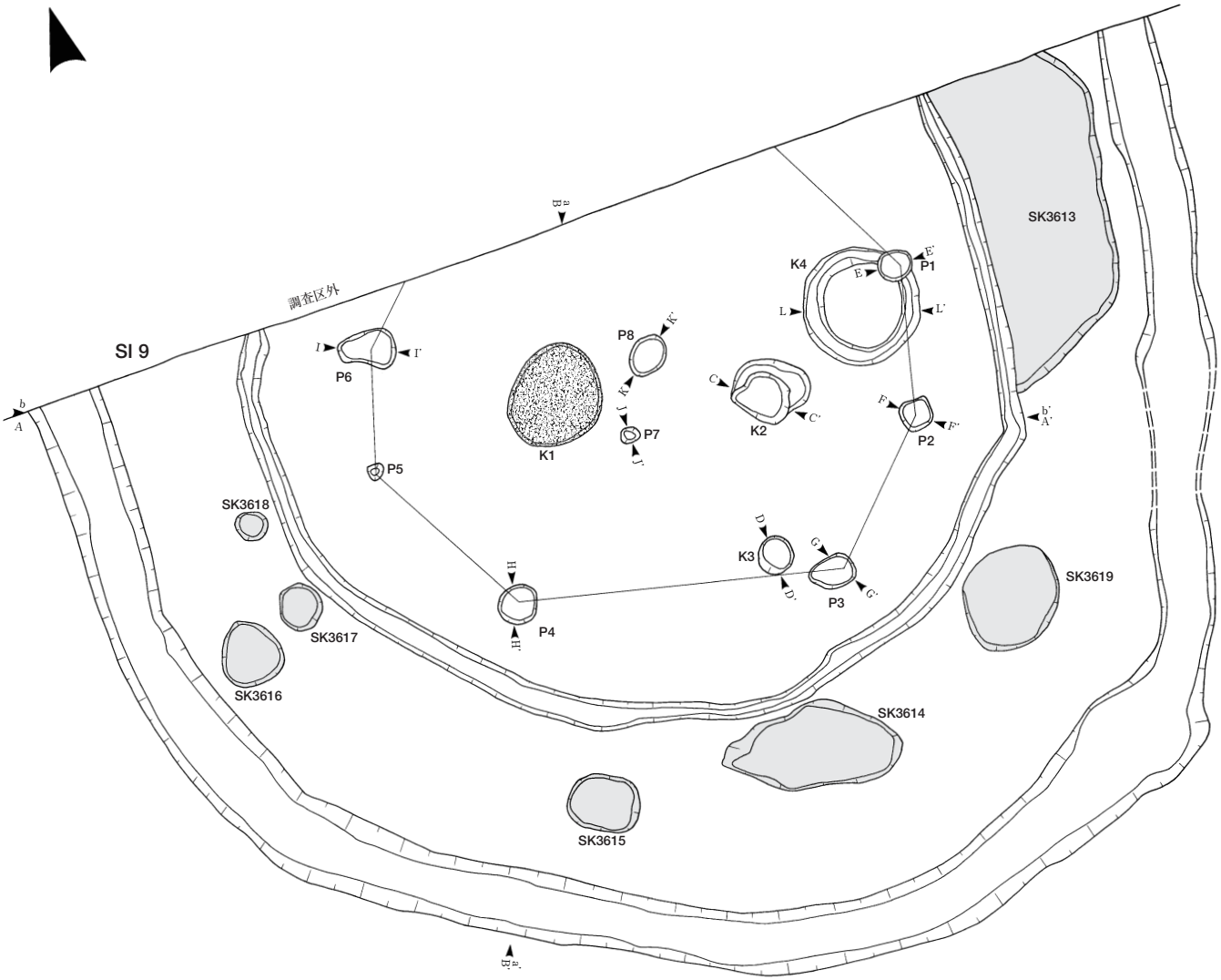


焼土除去後炭化材出土状況

0　1:80（出土状況図）　4m

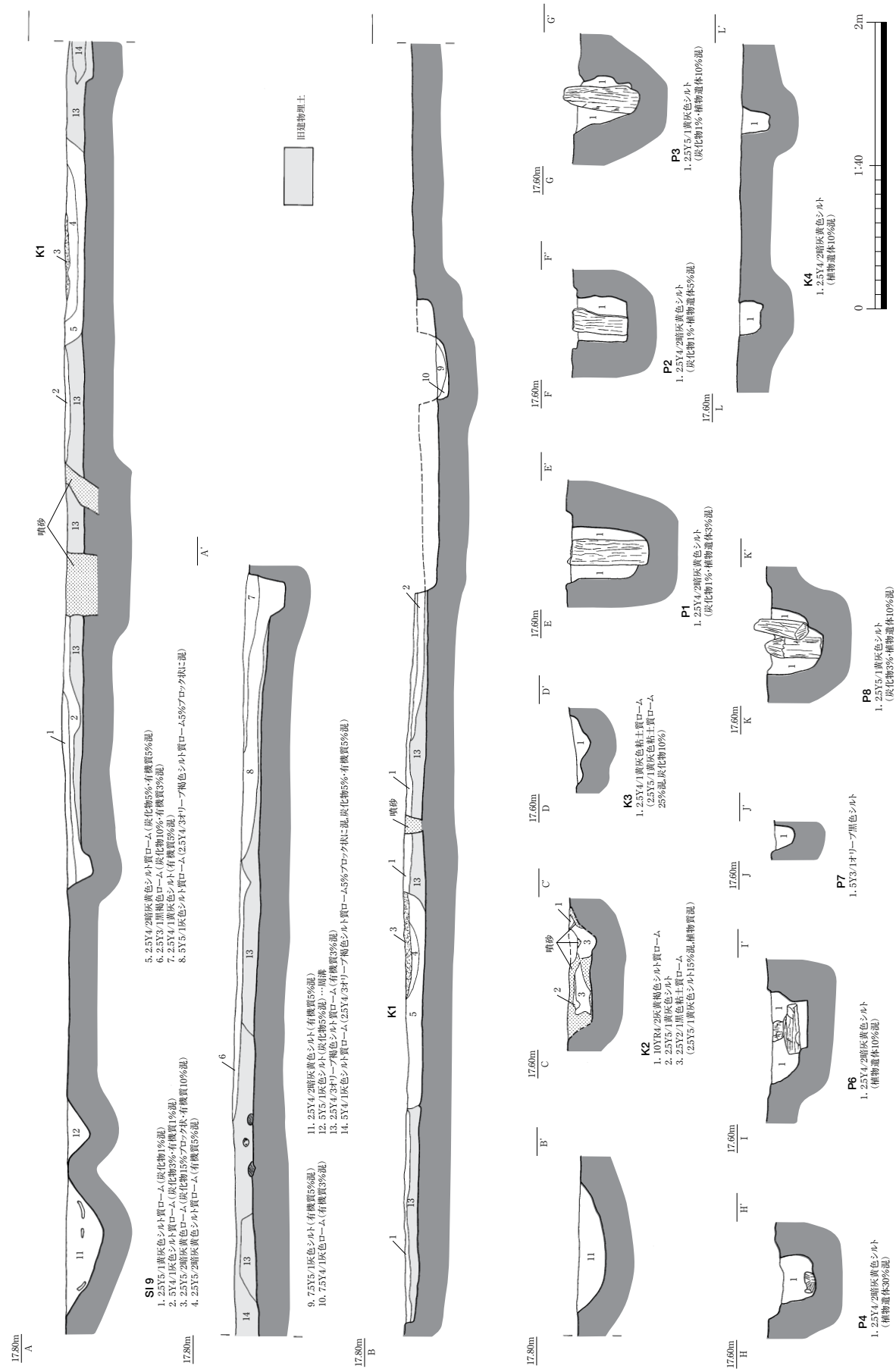
第77図　遺構実測図　（1/80・1/160，1/10）
Ｂ５地区　ＳＩ８

第78図　遺構実測図　(1/150)
B５地区　ＳＩ９～ＳＩ11・ＳＨ15

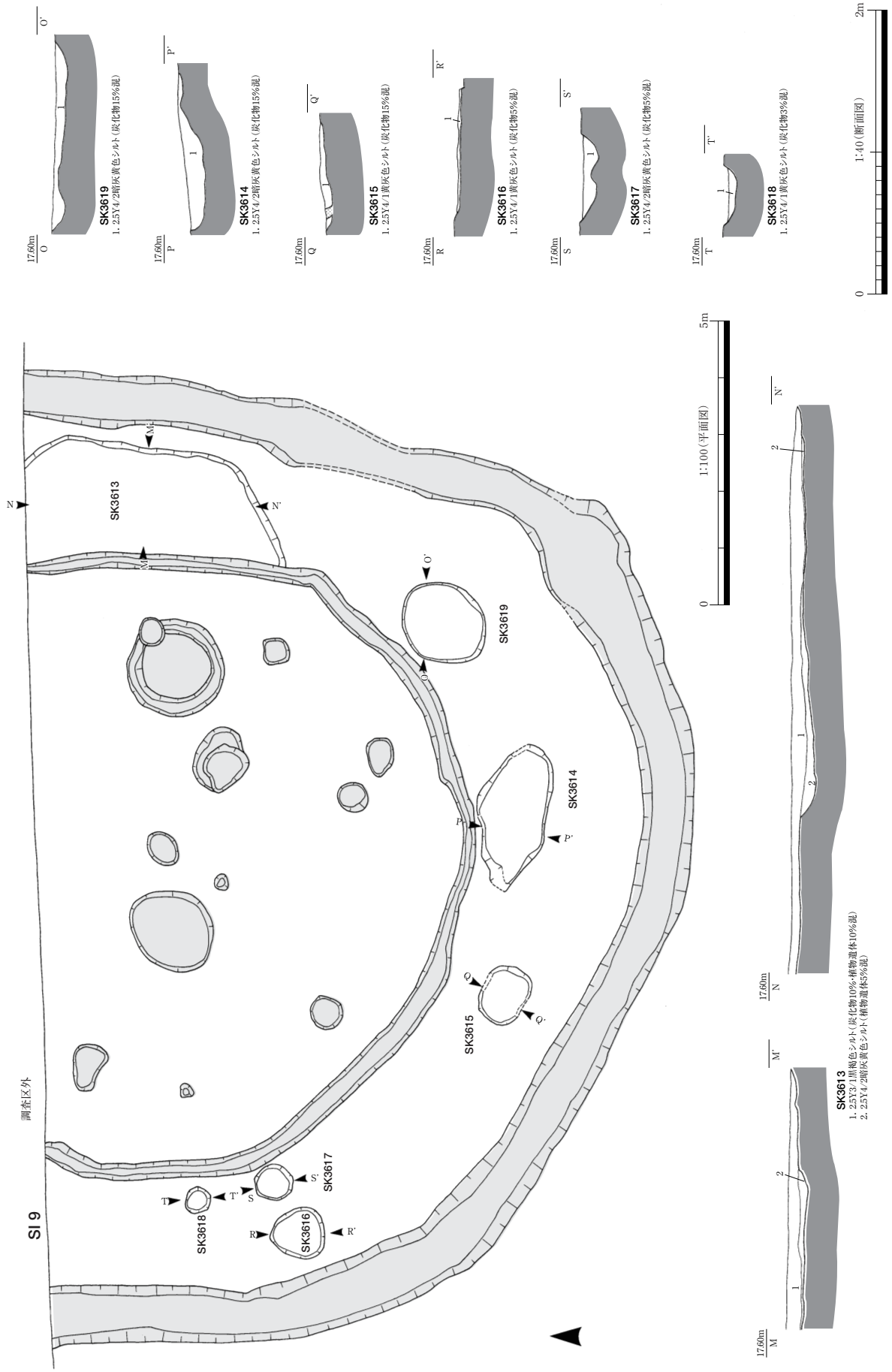


0　1:100　4m

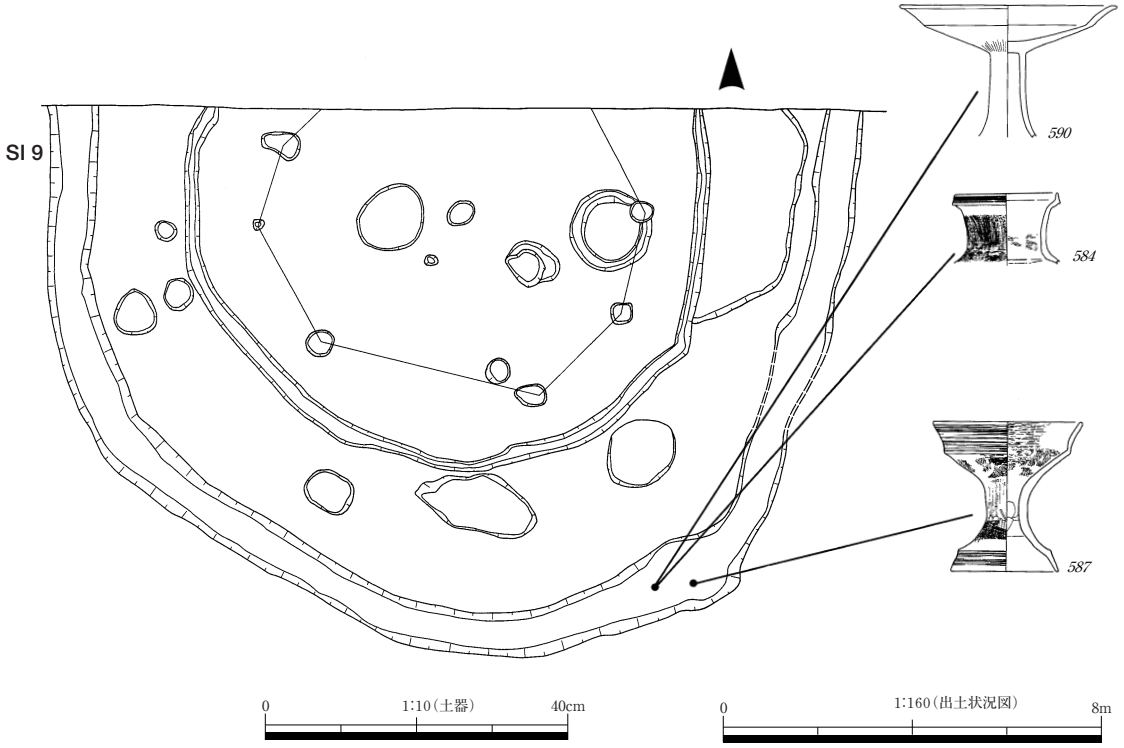
第79図　遺構実測図　(1/100)
Ｂ５地区　ＳＩ９・ＳＫ3613～ＳＫ3619



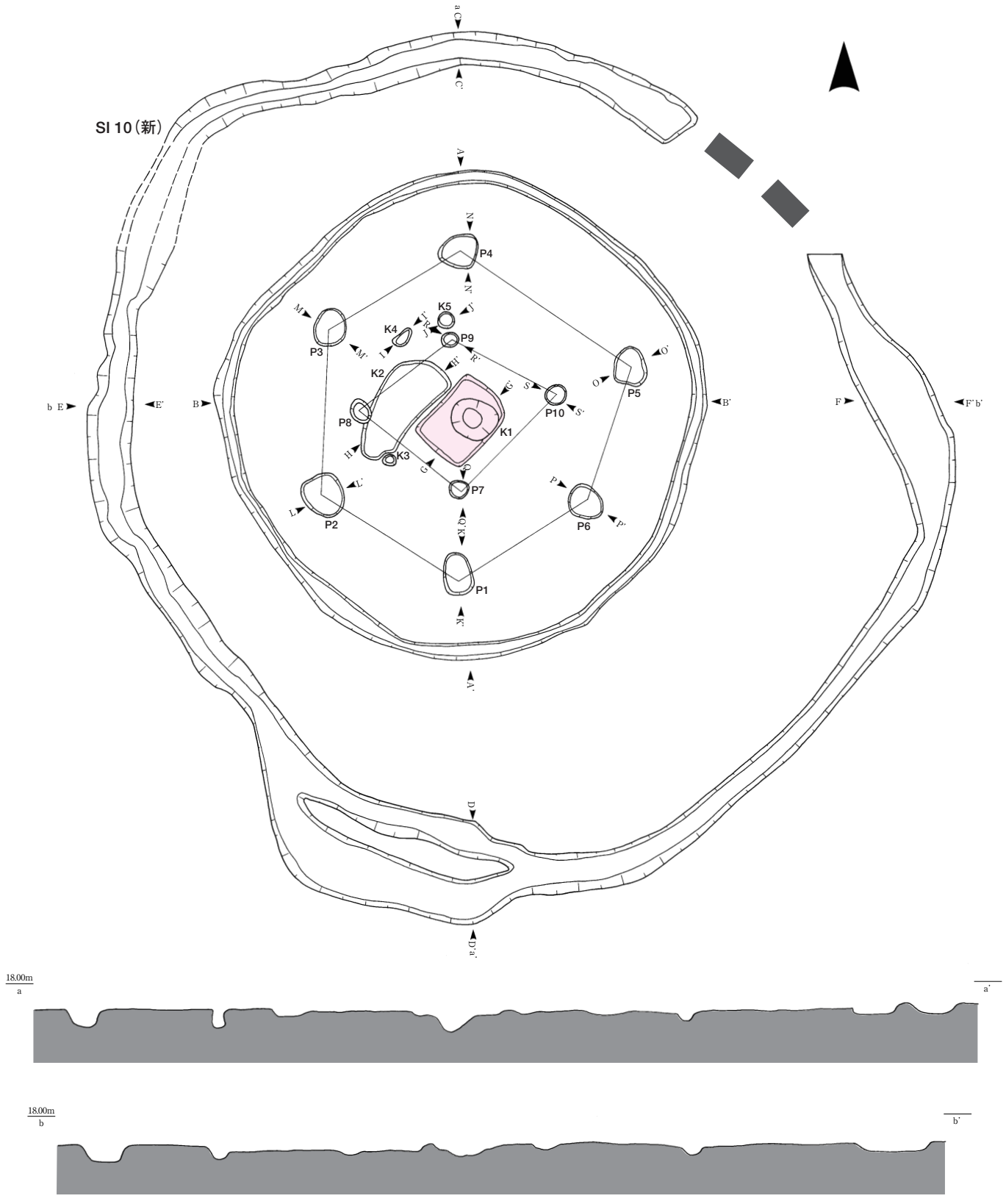
第80図　遺構実測図　(1/40)
B５地区　ＳＩ９



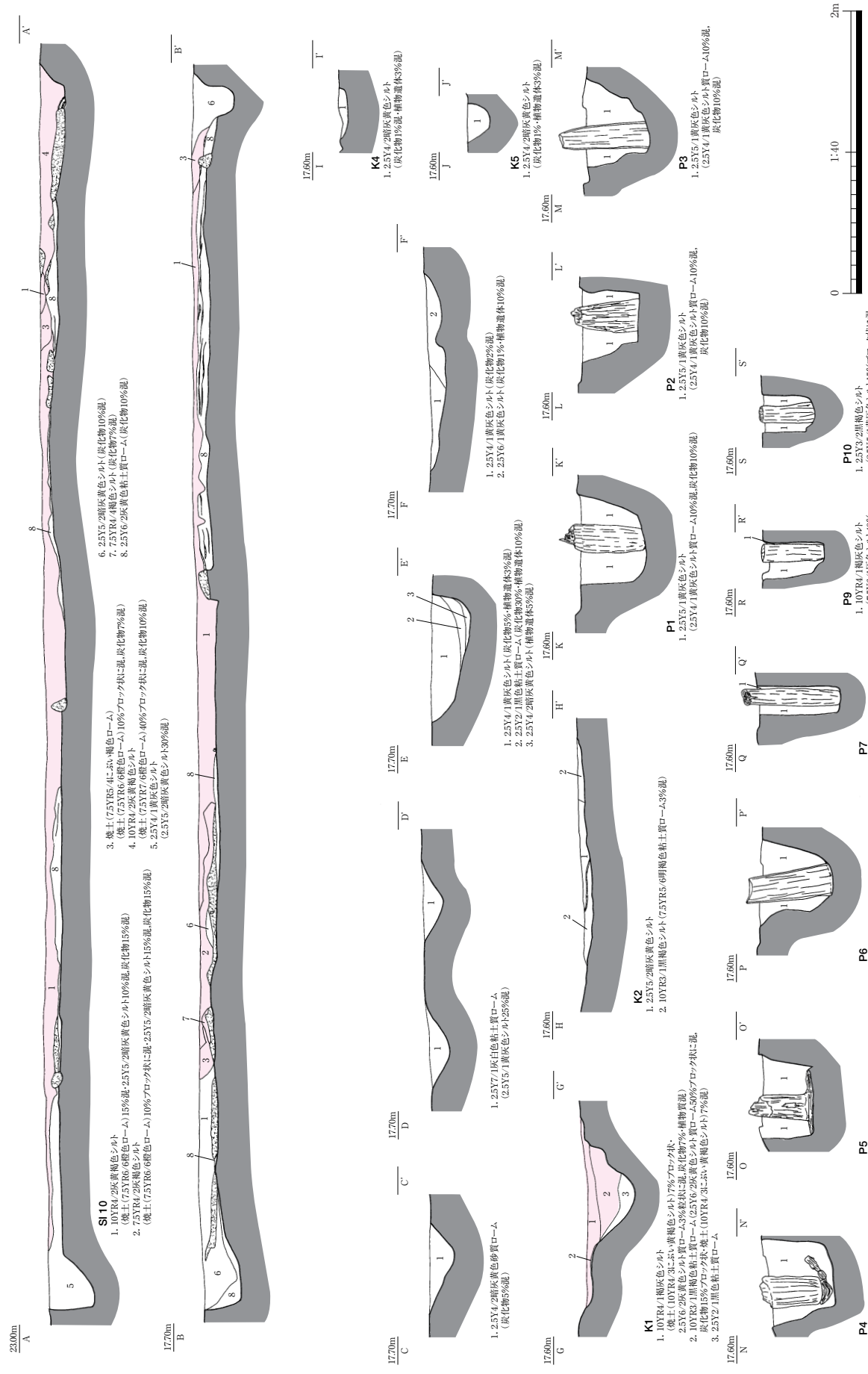
第81図　遺構実測図　(1/40・1/100)
Ｂ５地区　ＳＩ９・ＳＫ3613～ＳＫ3619



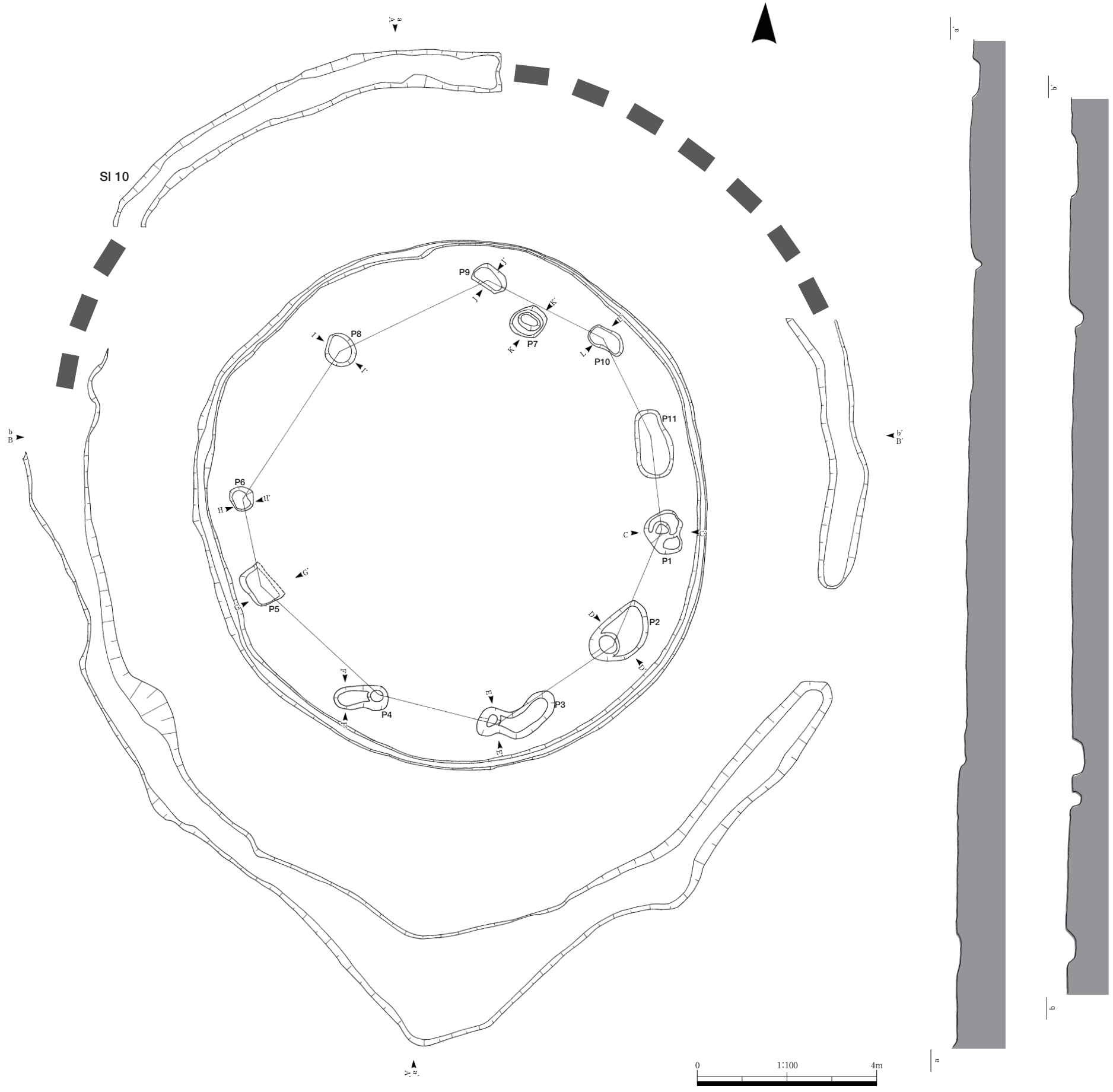
第82図　遺構実測図　（1/80・1/160，1/10）
B５地区　ＳＩ９



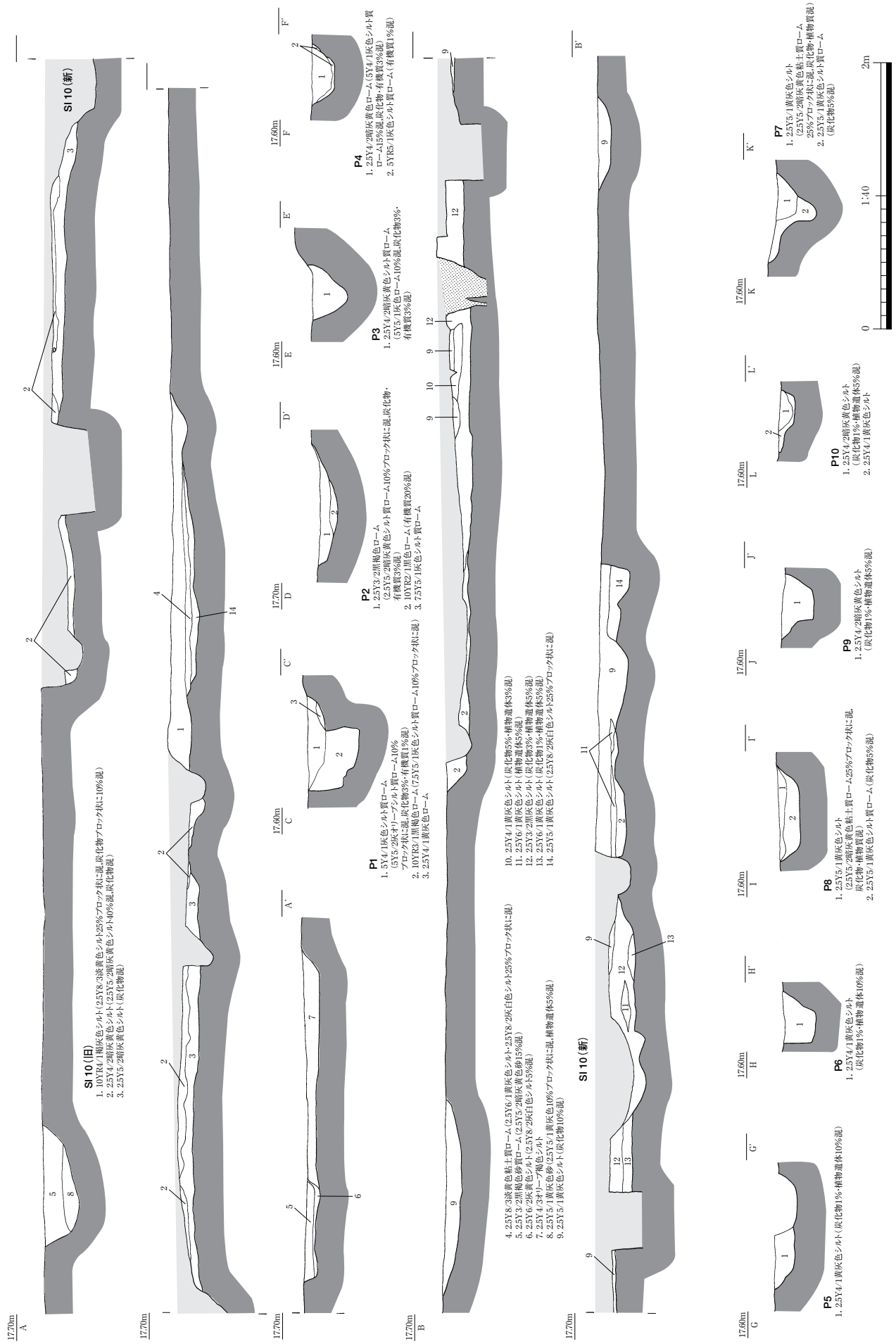
第83図　遺構実測図　(1/100)
Ｂ５地区　ＳＩ10（新）



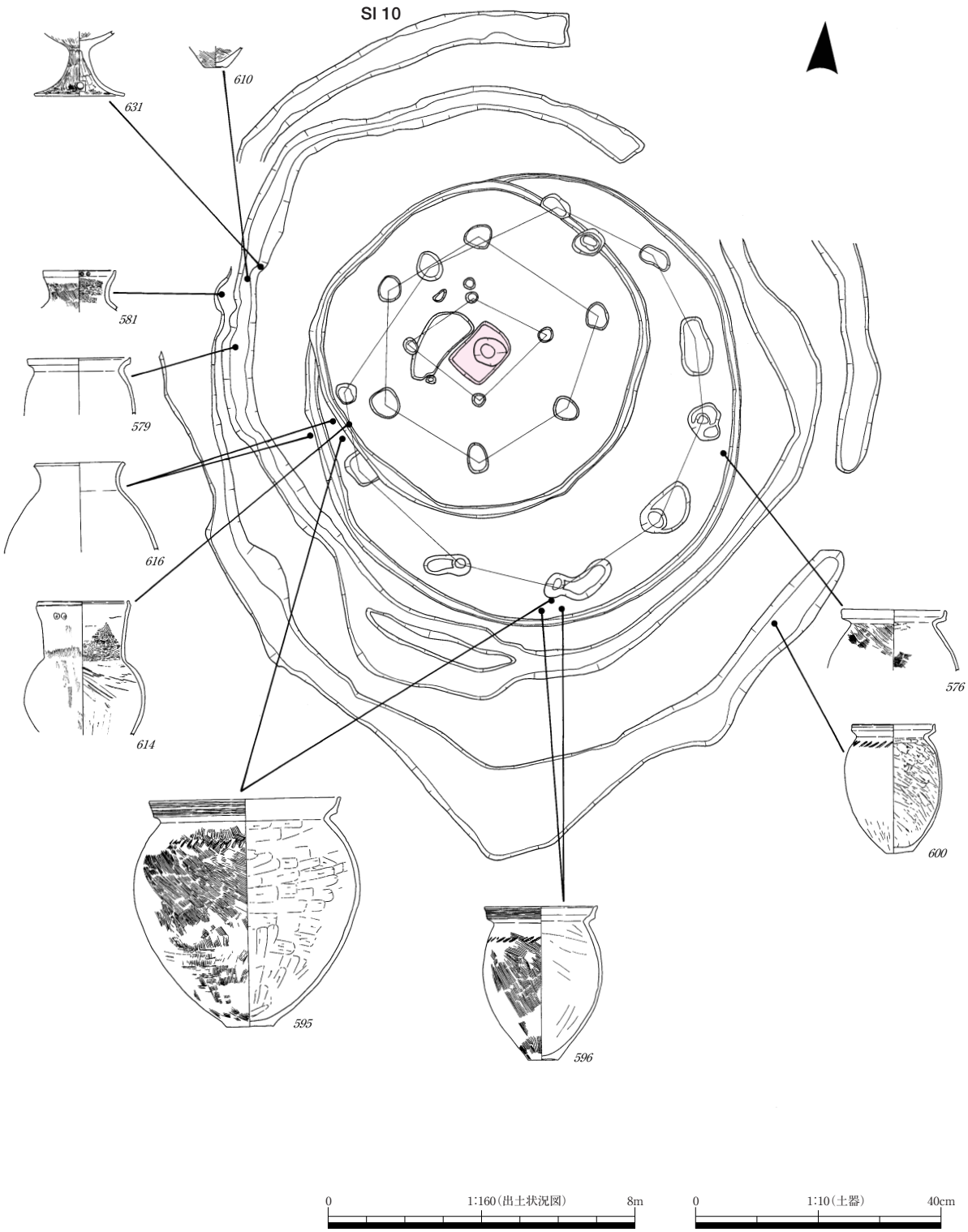
第84図　遺構実測図　(1/40)
B５地区　ＳＩ10(新)



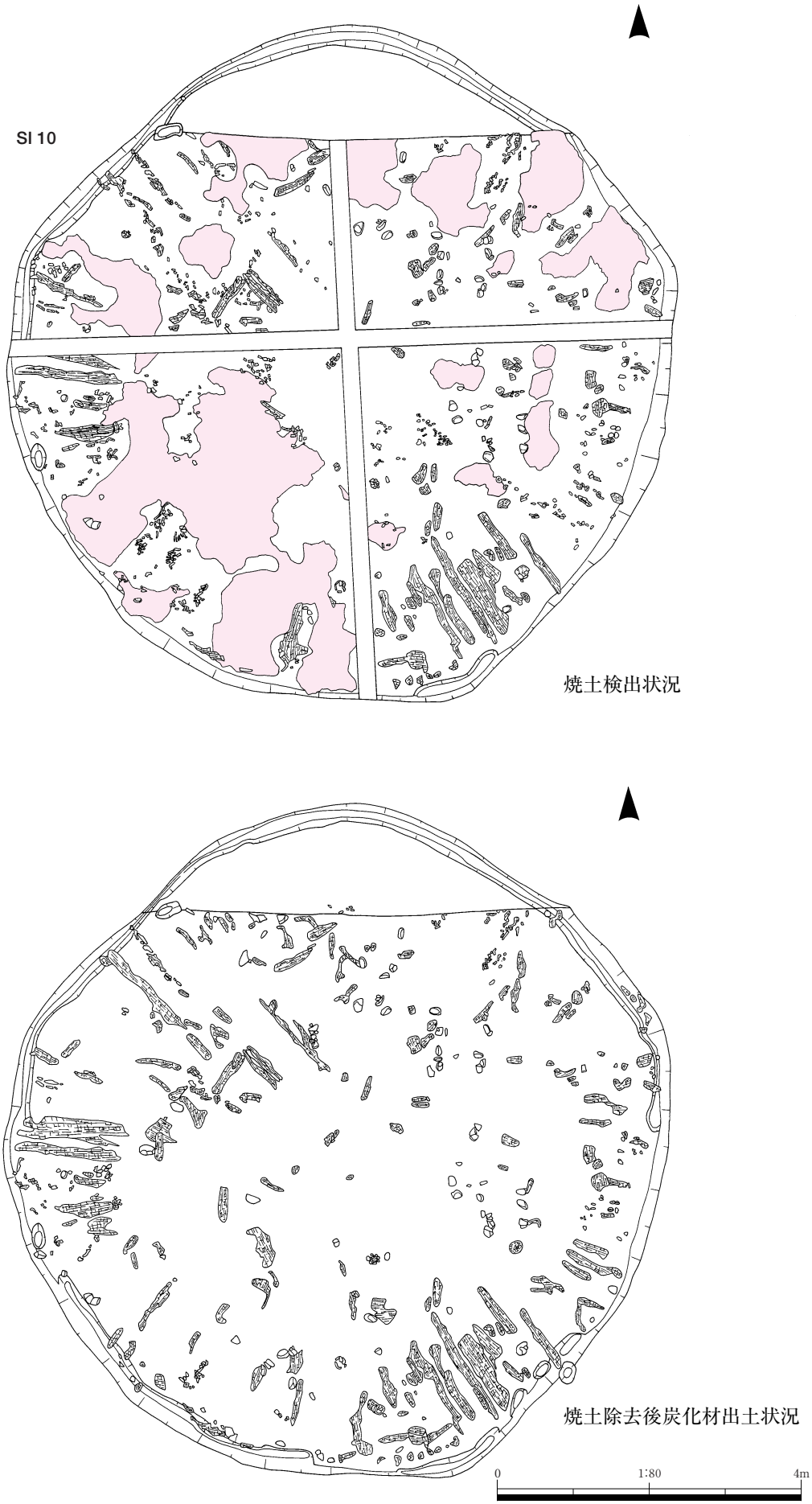
第85図　遺構実測図　(1/100)
Ｂ５地区　ＳＩ10(旧)



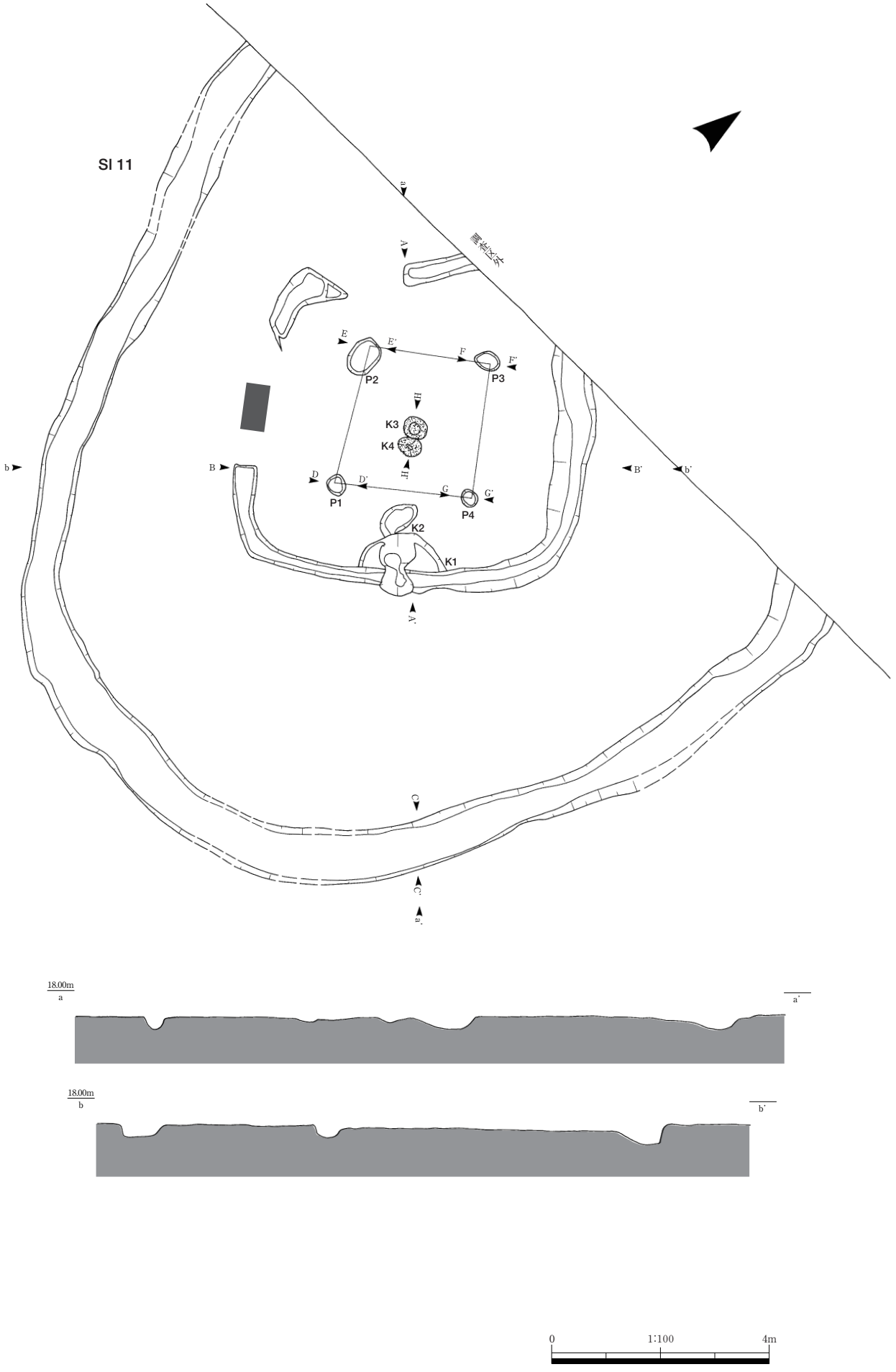
第86図　遺構実測図　(1/40)
Ｂ５地区　ＳＩ10(旧)



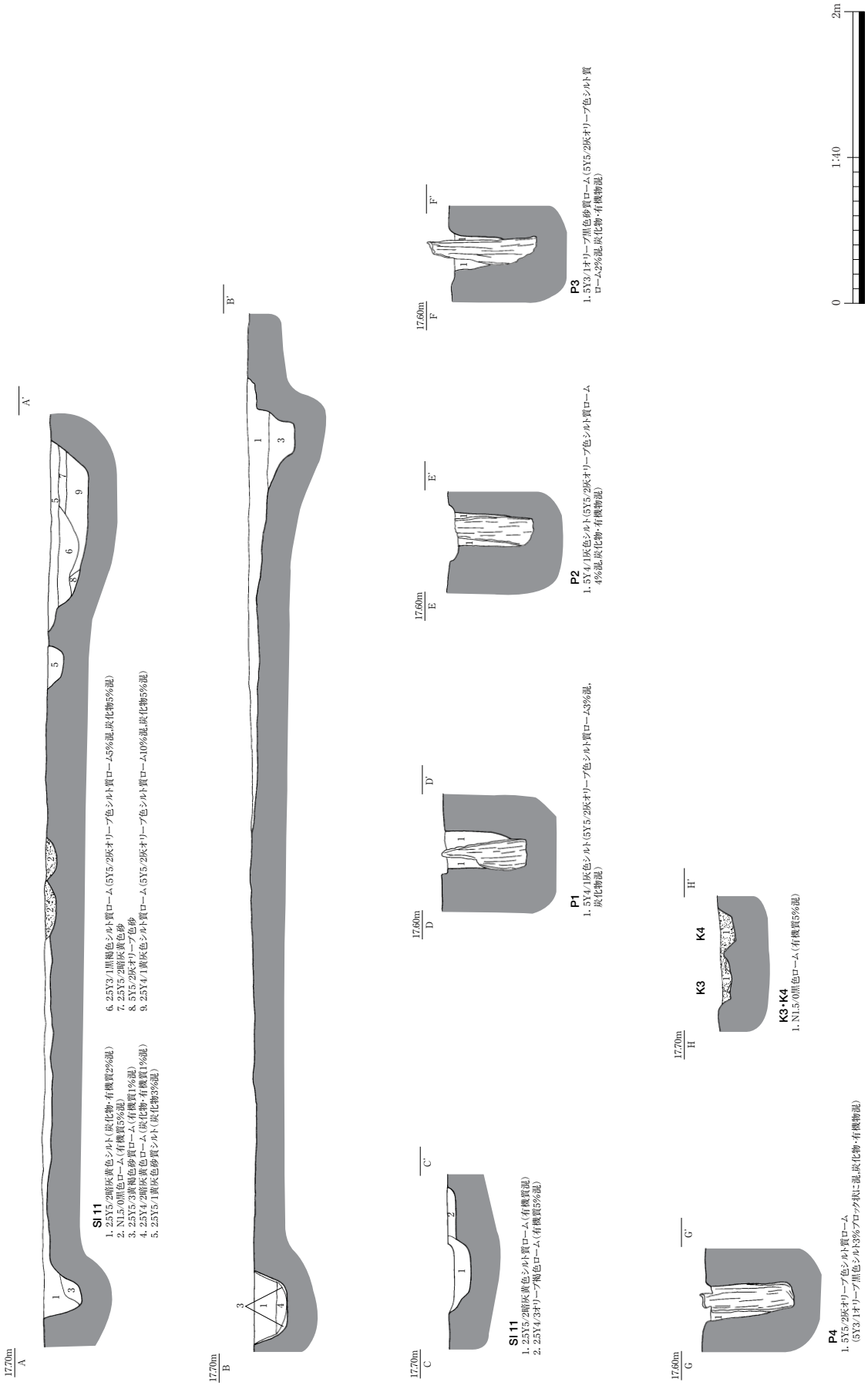
第87図　遺構実測図　(1/160，1/10)
B５地区　ＳＩ10



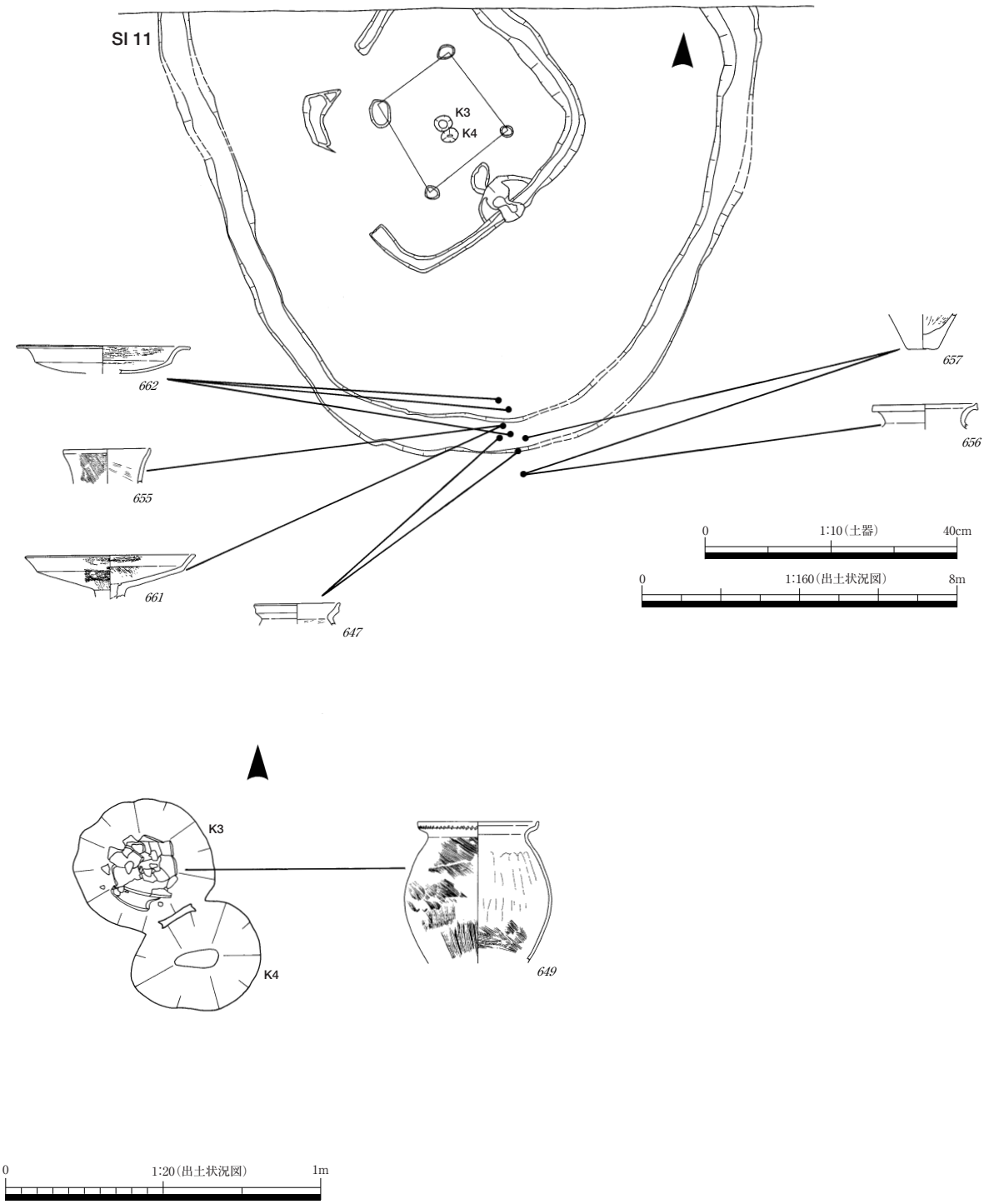
第88図　焼土・炭化材出土状況図　(1/80)
Ｂ５地区　ＳＩ10(新)



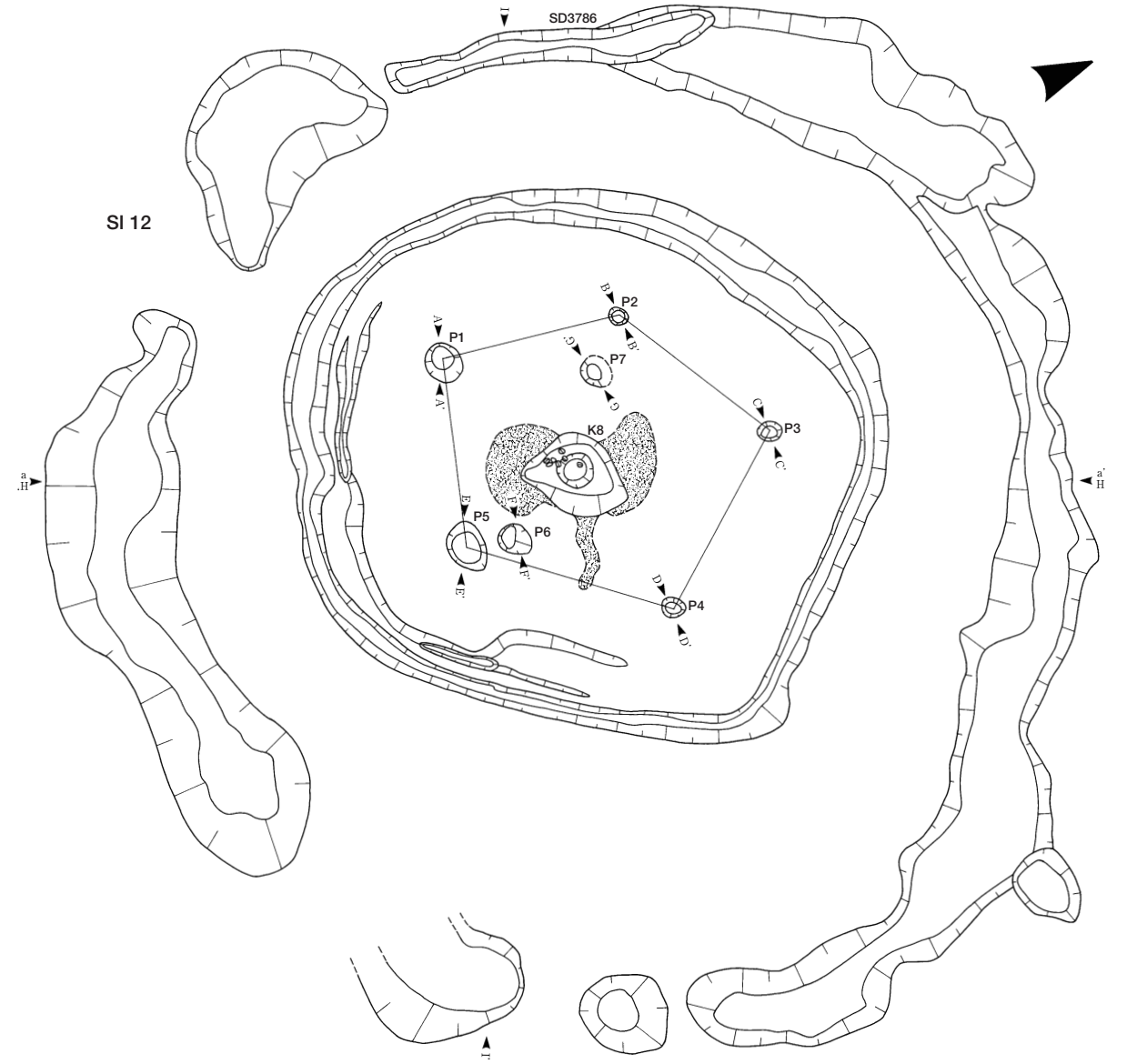
第89図　遺構実測図　(1/100)
B５地区　ＳＩ11

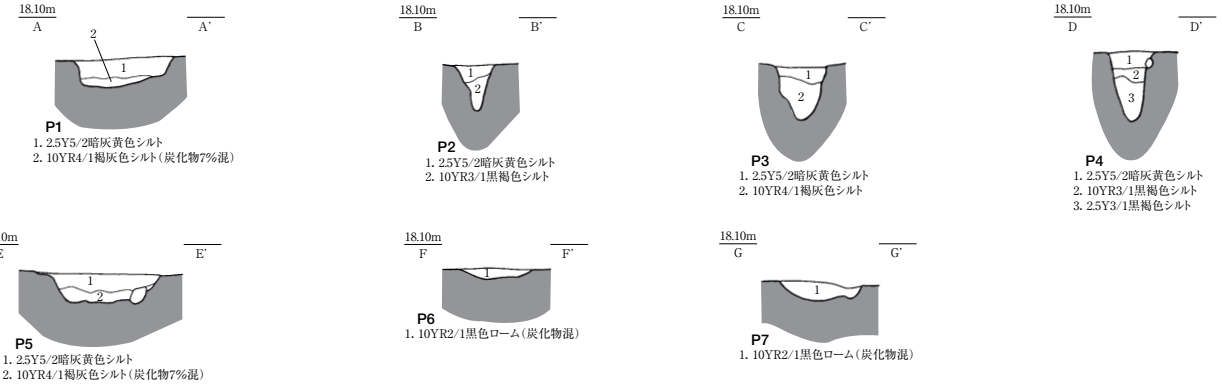


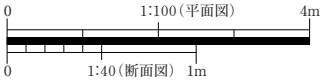
第90図　遺構実測図　(1/40)
B５地区　ＳＩ11



第91図　遺構実測図　(1/20・1/160，1/10)
B５地区　ＳＩ11

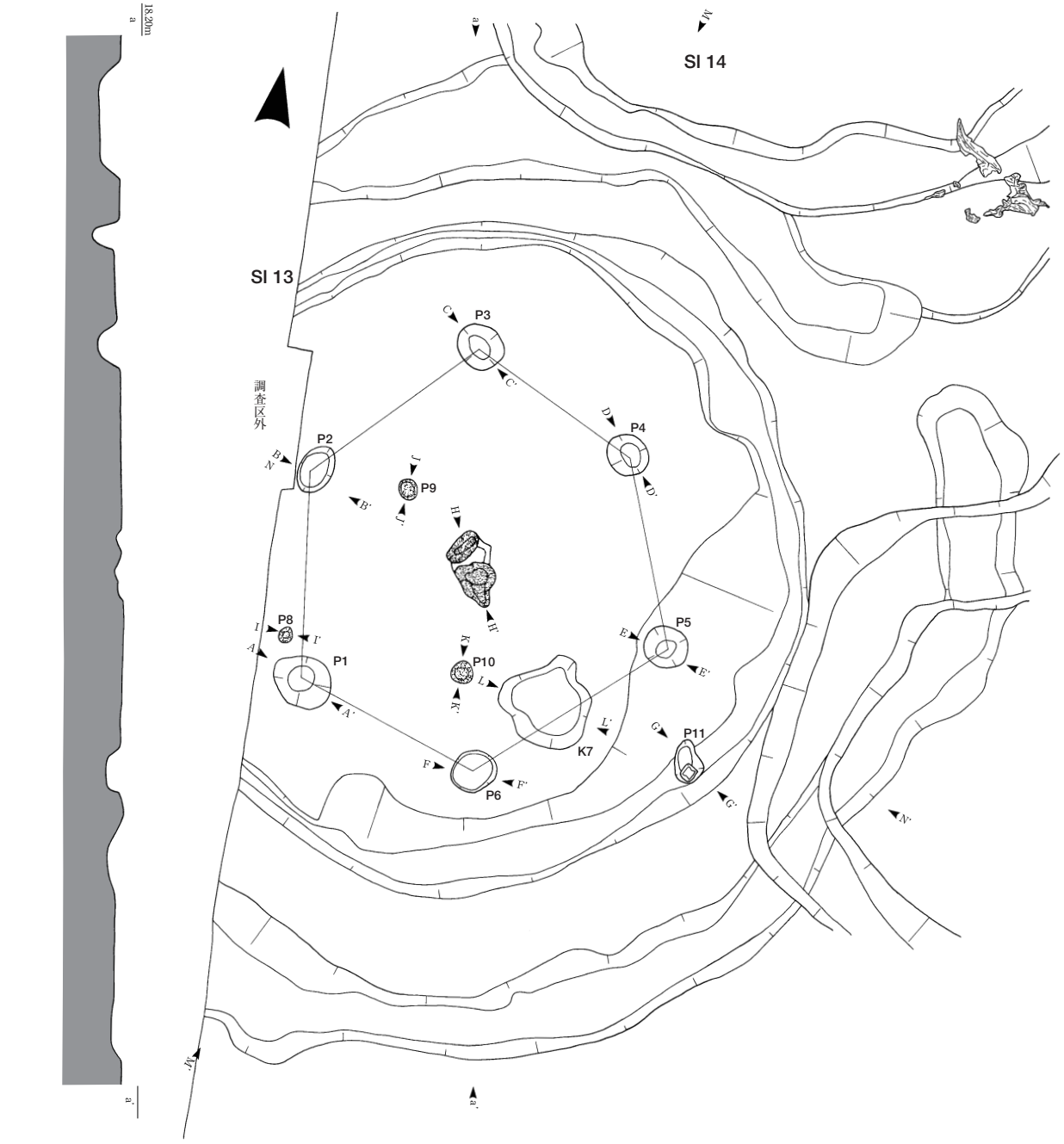


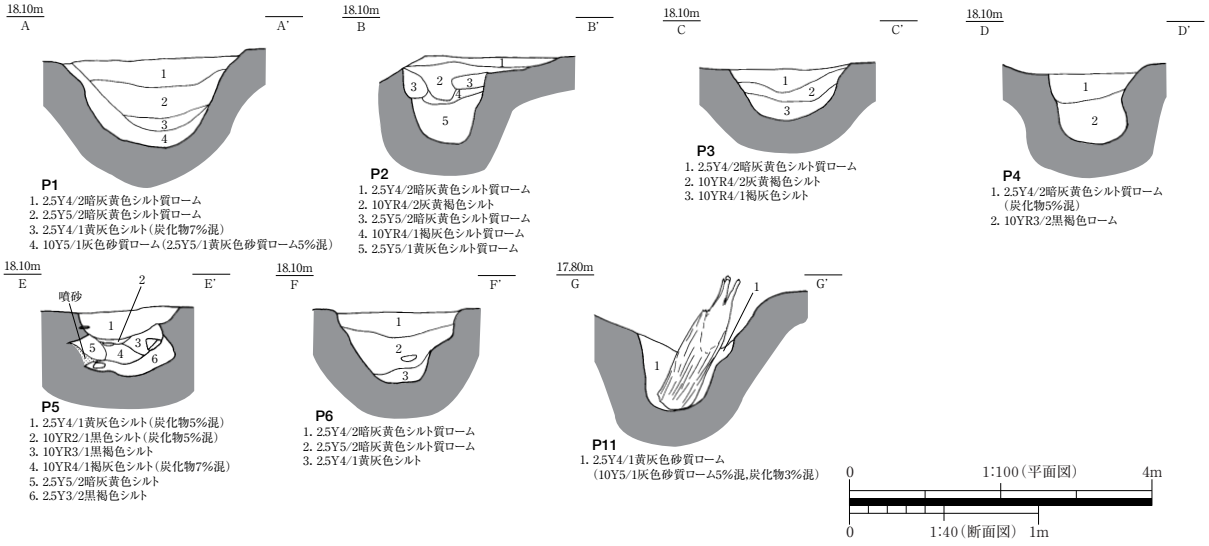




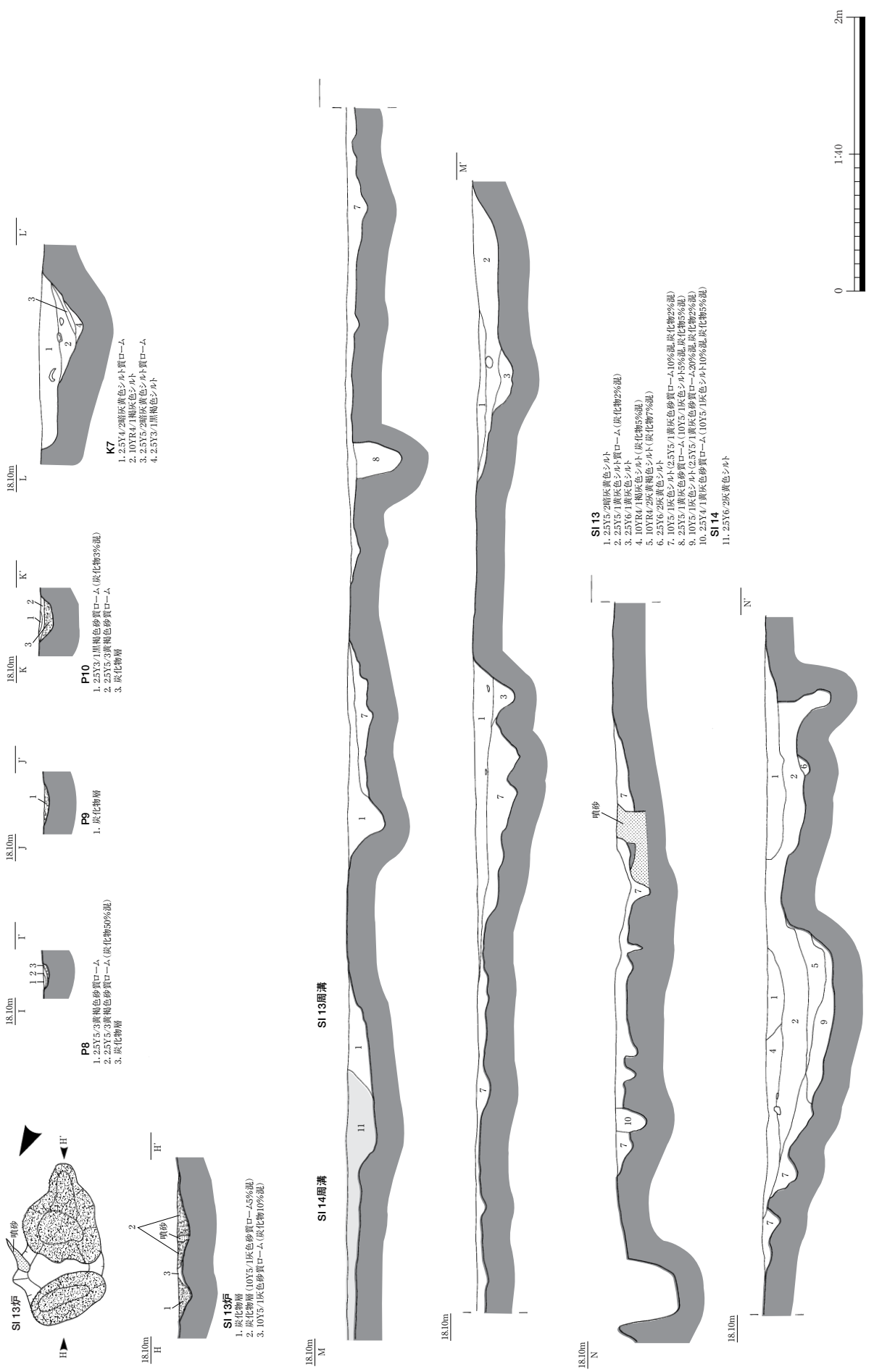
第92図　遺構実測図　(1/40・1/100)
Ｂ６地区　ＳＩ12・ＳＤ3786

第93図　遺構実測図　(1/40)
B６地区　ＳＩ12・ＳＤ3786

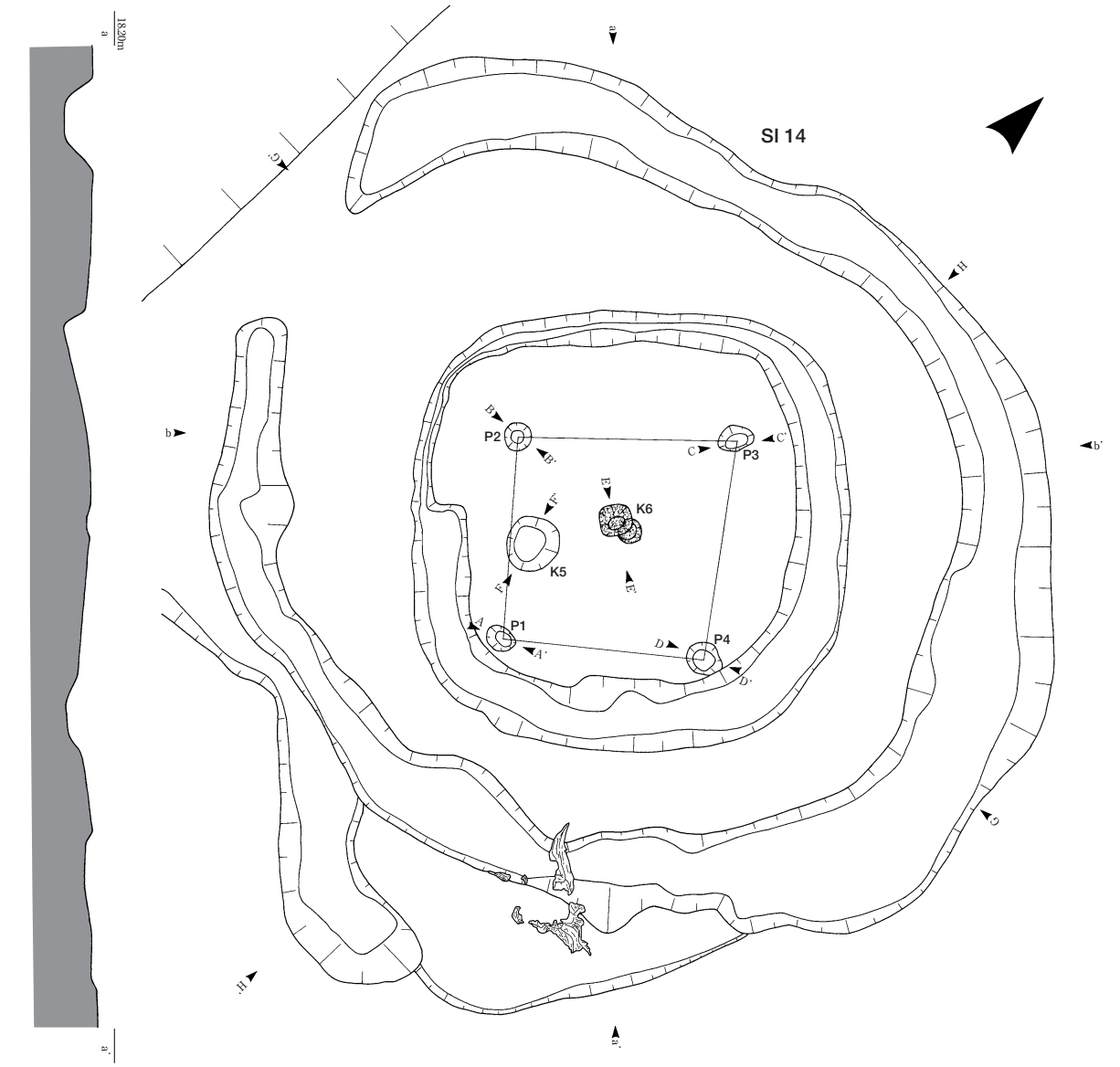


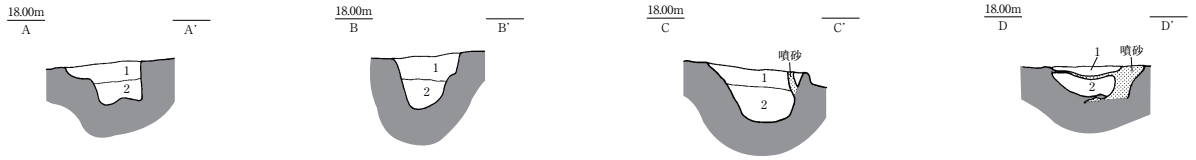


第94図　遺構実測図　(1/40・1/100)
B６地区　ＳＩ13・ＳＩ14

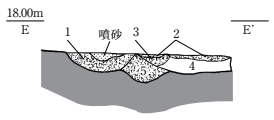


第95図　遺構実測図　(1/40)
B６地区　ＳＩ13・ＳＩ14

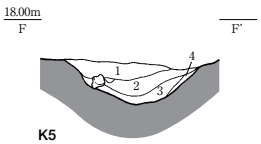




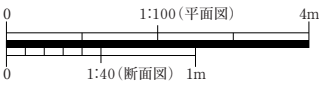
P1～4
1. 2.5Y4/2暗灰黄色シルト
2. 10YR4/1褐灰色シルト



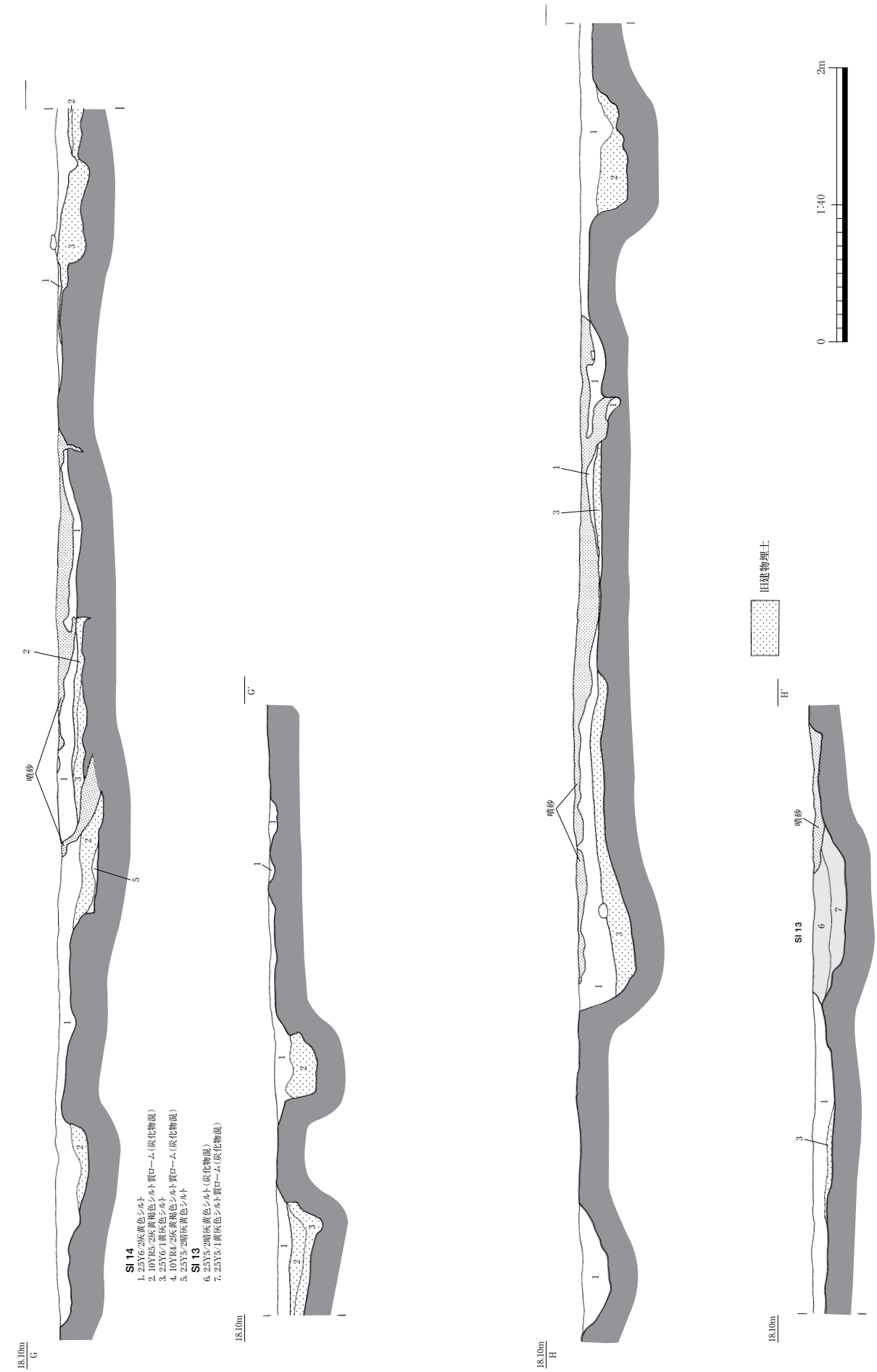
K6
1. 炭化物層
2. 炭化物層（10Y5/1灰色砂質ローム10%混）
3. 炭化物層（10Y5/1灰色砂質ローム20%混）
4. 10Y5/1灰色砂質ローム（2.5Y5/1黄灰色砂質ローム10%混）
5. 炭化物層



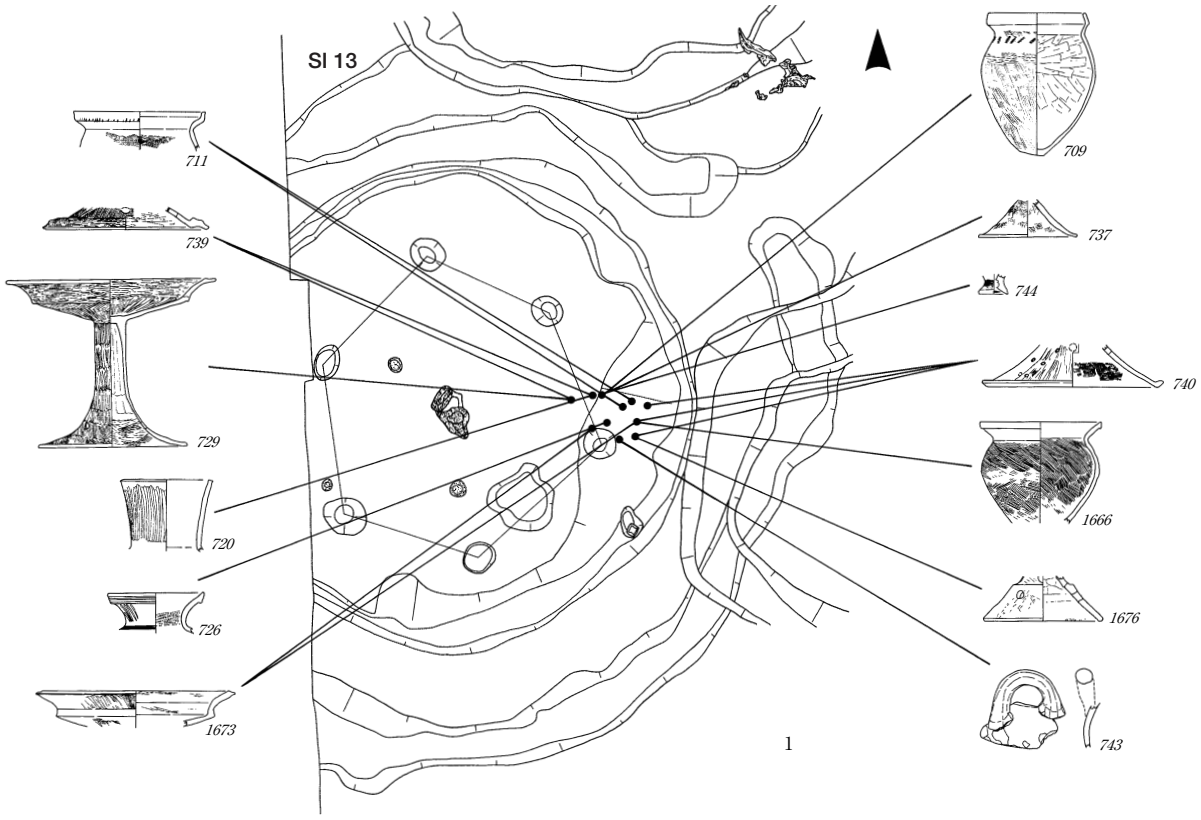
K5
1. 10Y5/1灰色砂質ローム（2.5Y5/1黄灰色砂質ローム50%混）
2. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト（有機質混）
3. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト（10Y5/1灰色砂質ローム50%混）
4. 10Y5/1灰色砂質ローム（2.5Y5/1黄灰色砂質ローム30%混）

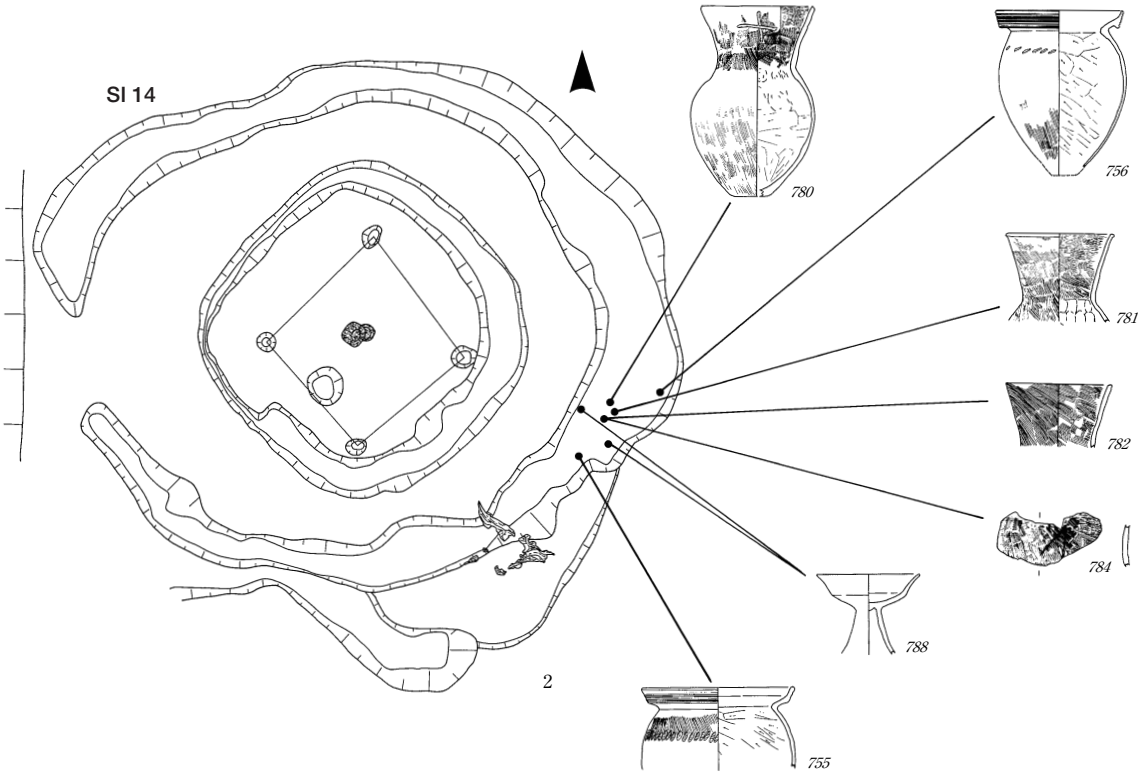


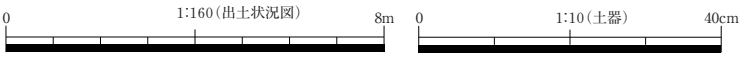
第96図　遺構実測図　(1/40・1/100)
B 6 地区　S I 14



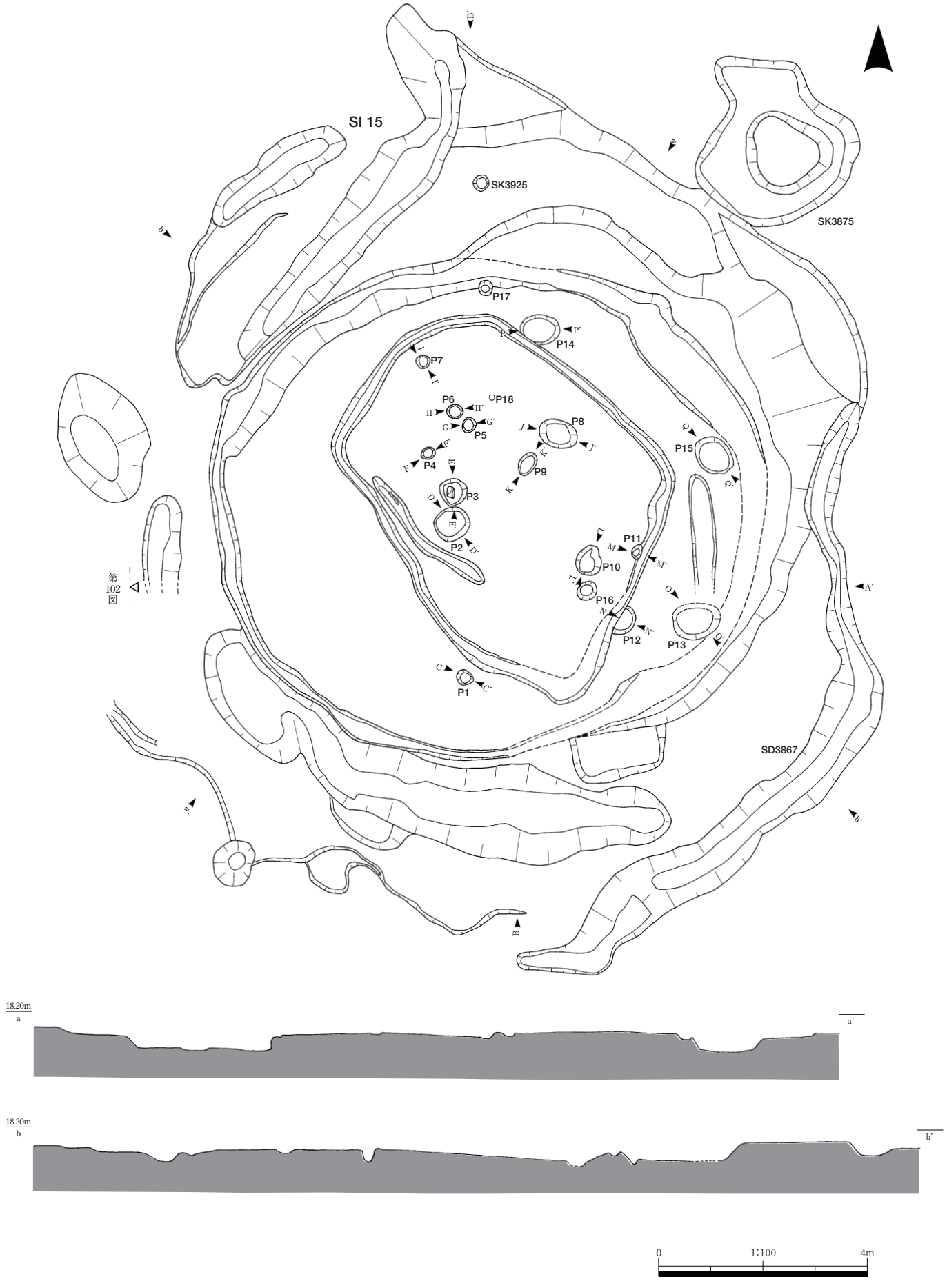
第97図　遺構実測図　(1/40)
B 6 地区　ＳＩ14



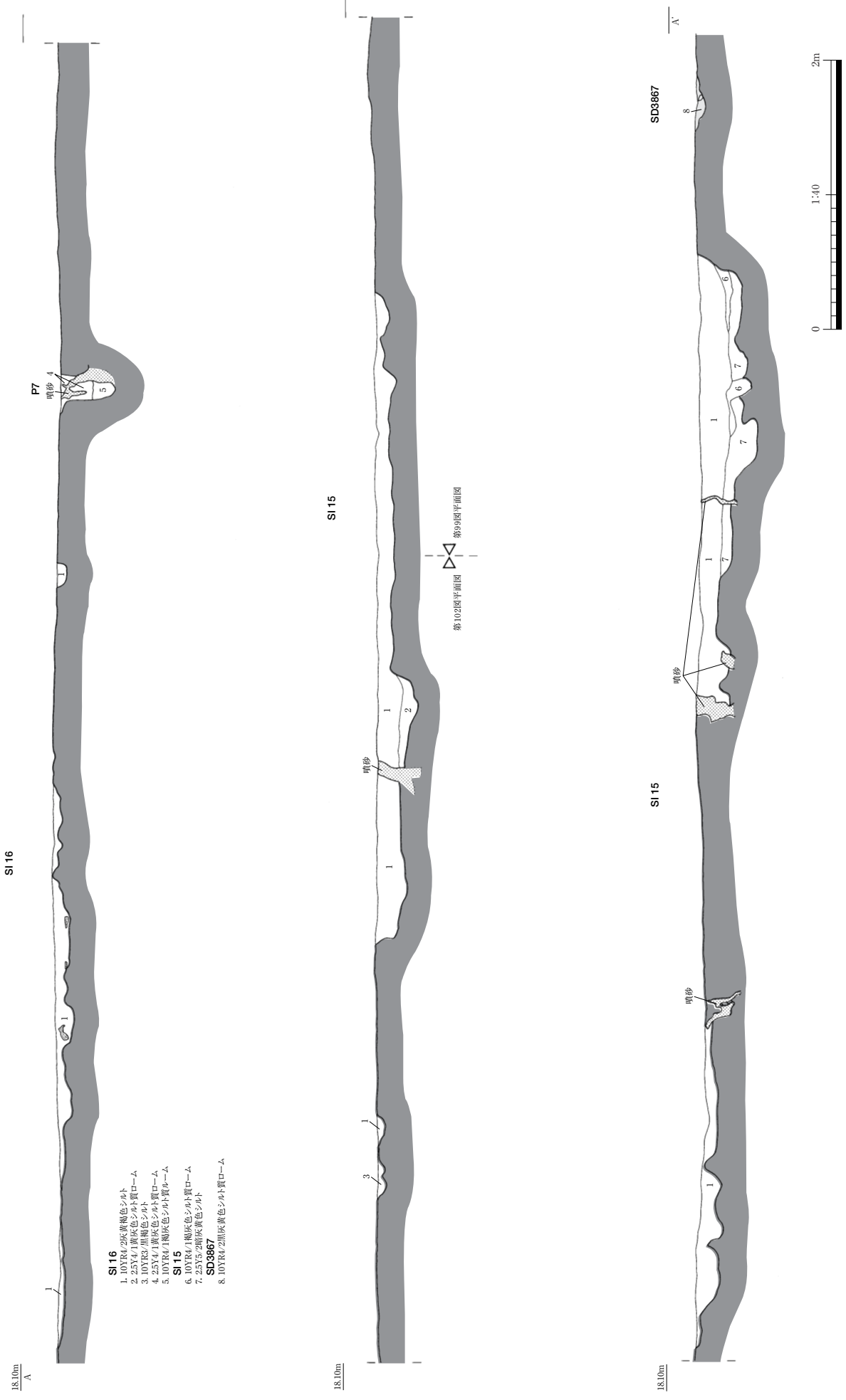




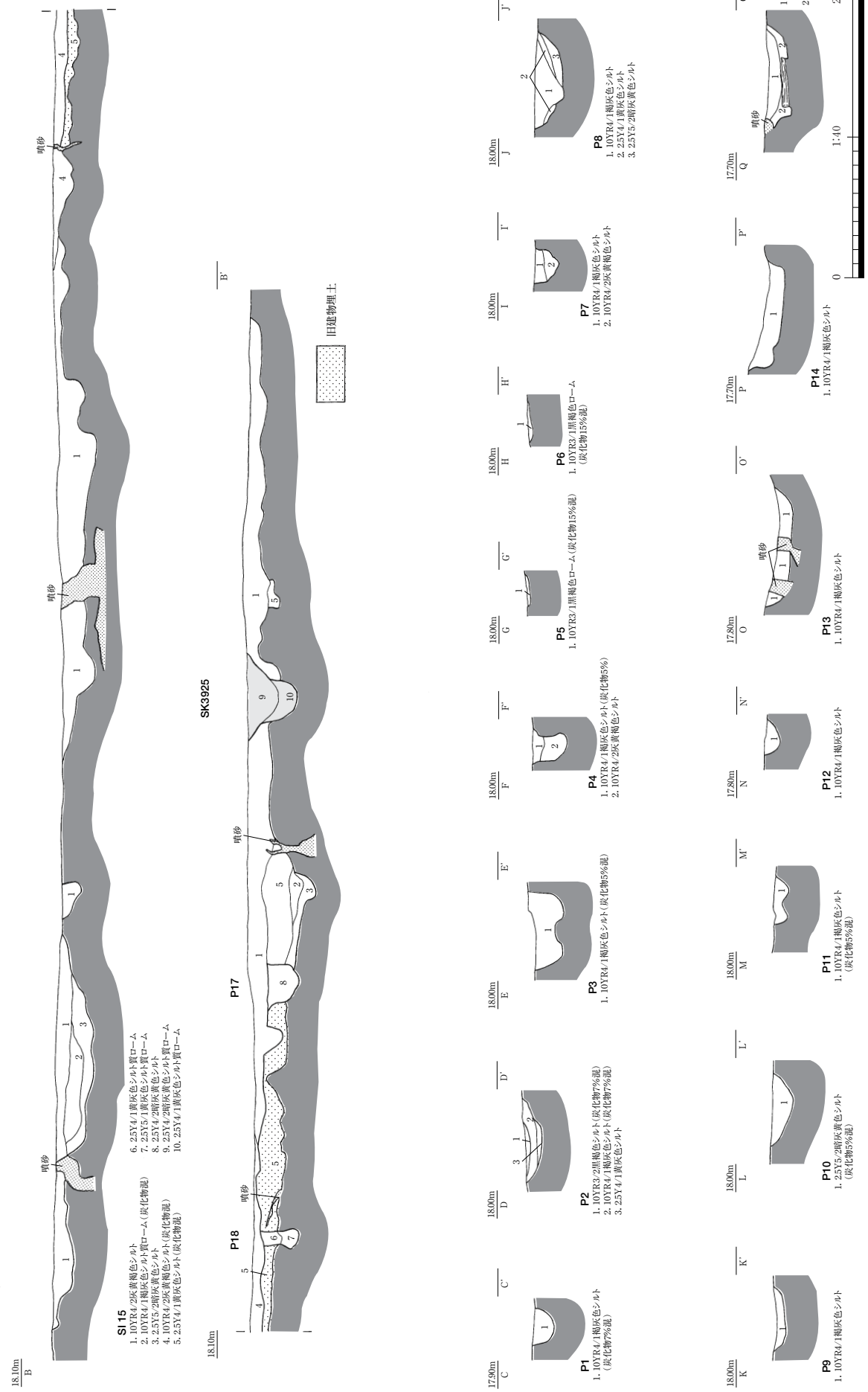
第98図　遺構実測図　(1/160, 1/10)
Ｂ６地区　1.ＳＩ13　2.ＳＩ14



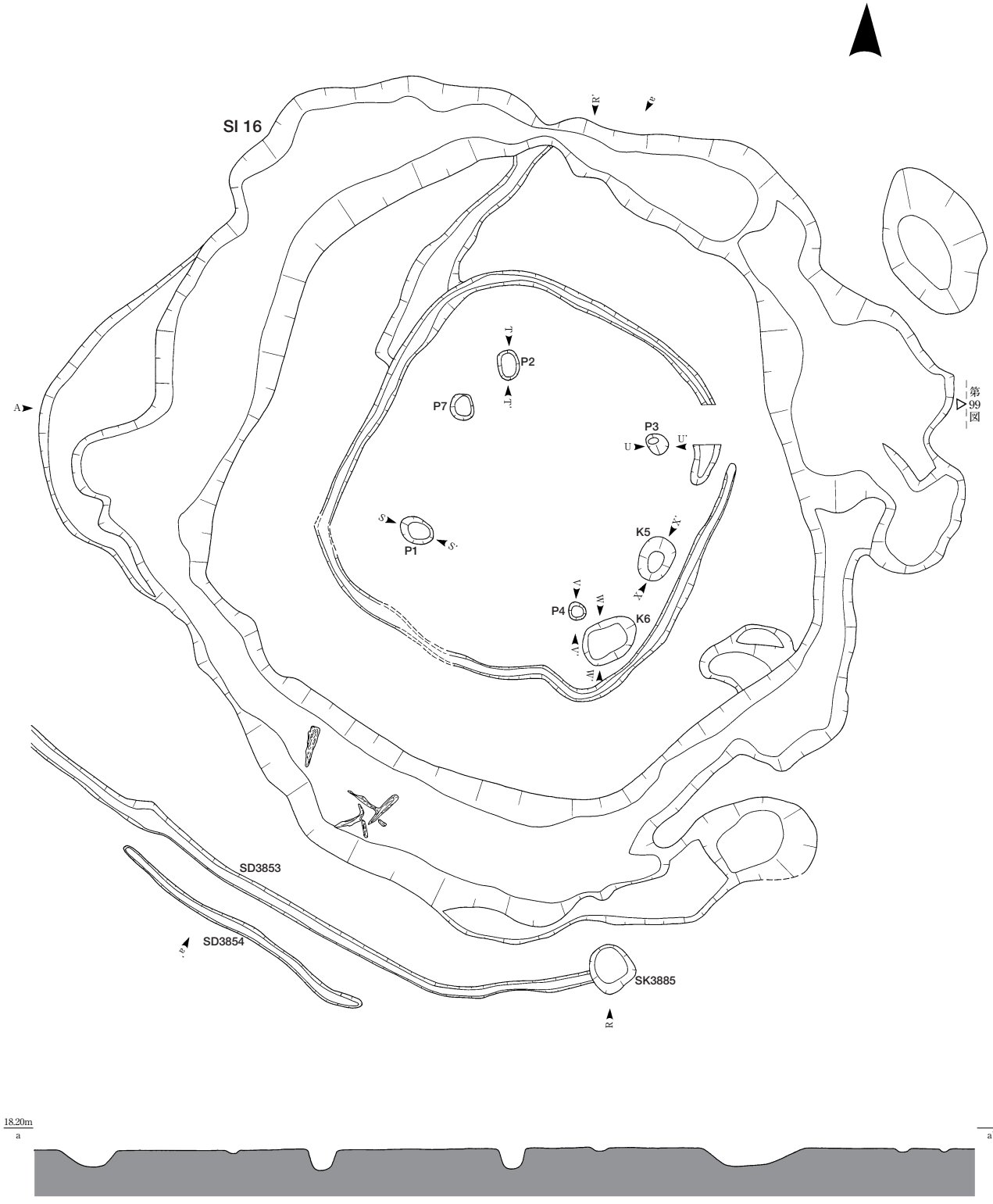
第99図　遺構実測図　(1/100)
B６地区　ＳＩ15・ＳＫ3925・ＳＤ3867



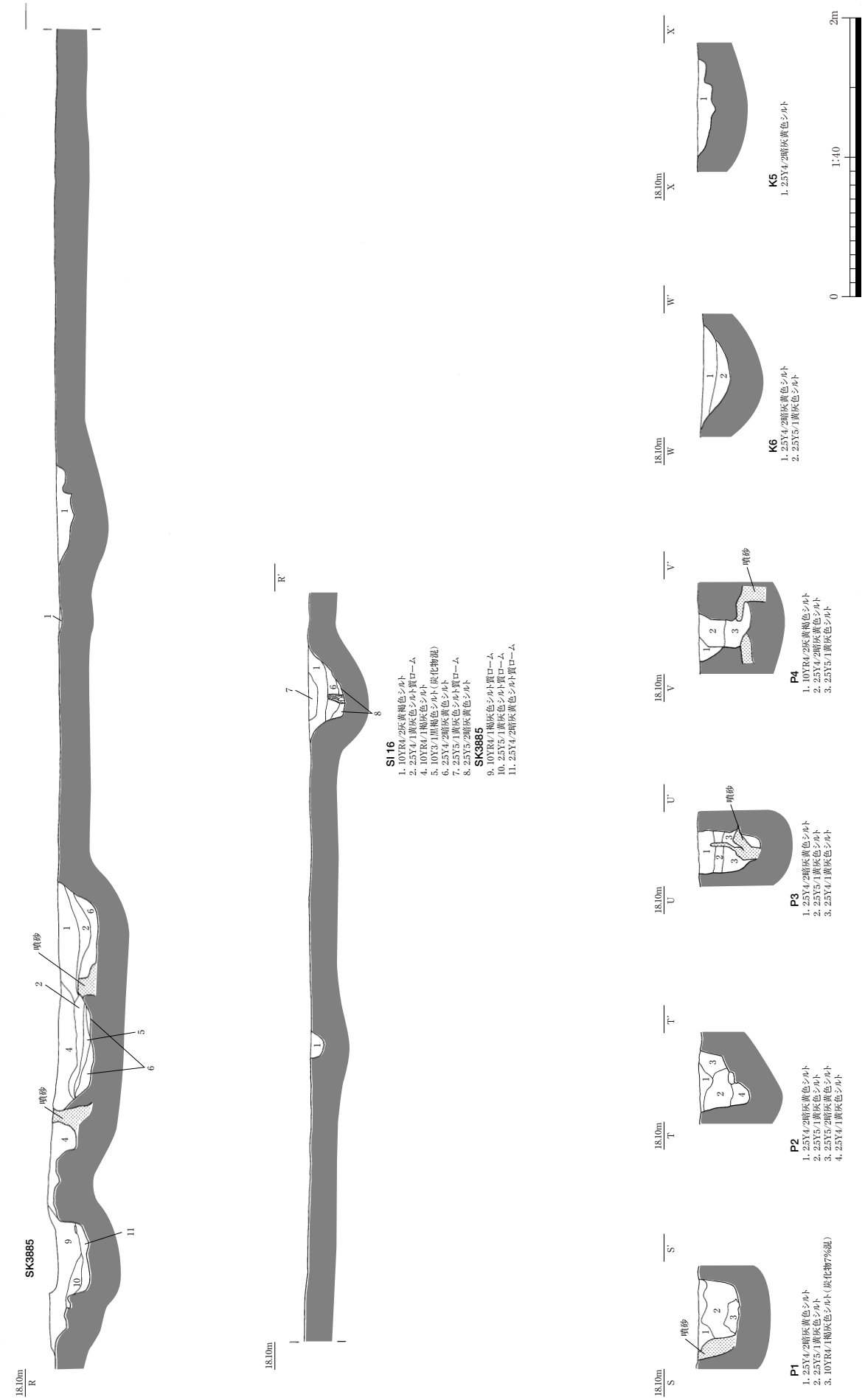
第100図　遺構実測図　(1/40)
Ｂ６地区　ＳＩ15・ＳＩ16・ＳＤ3867



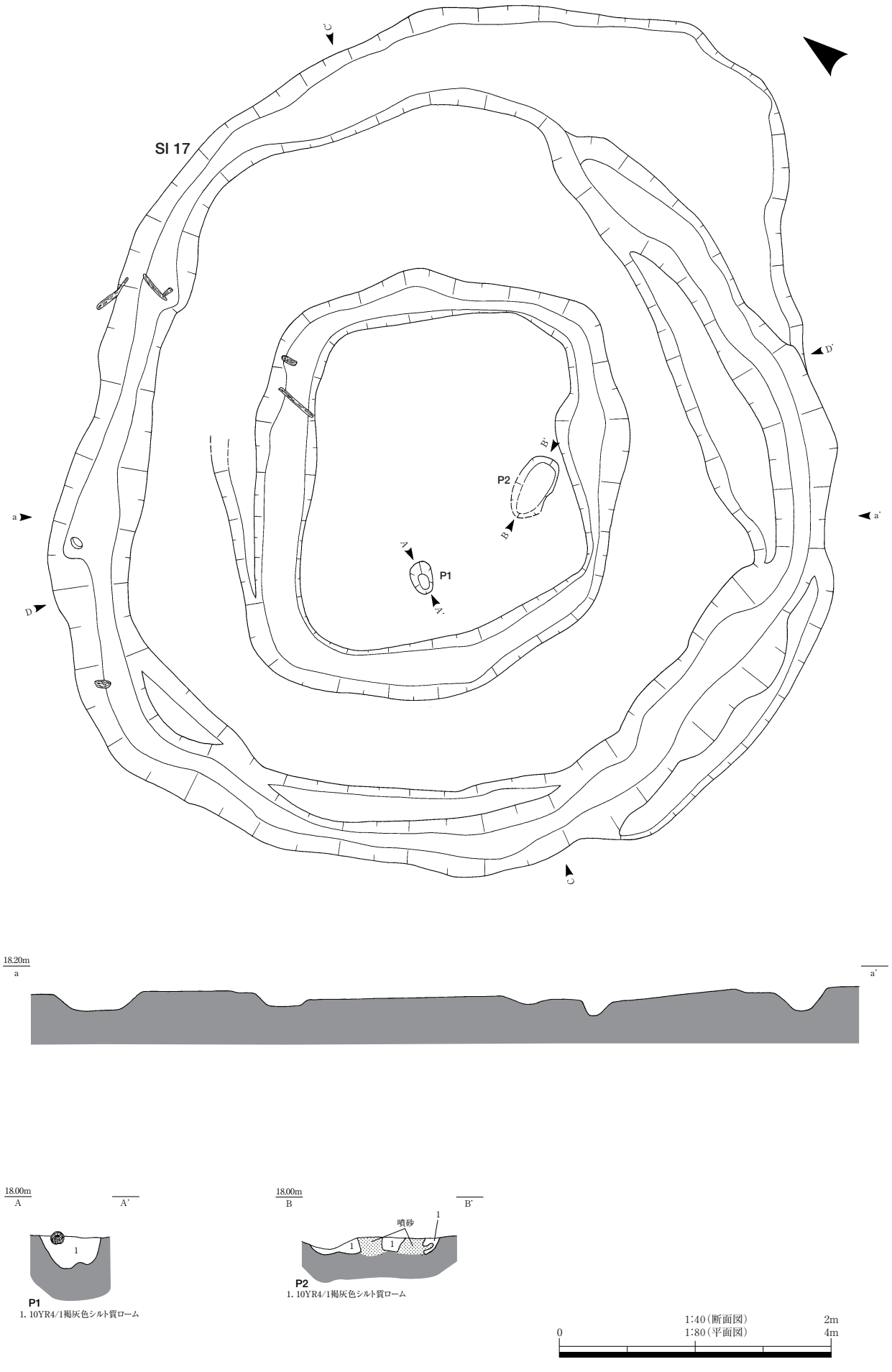
第101図　遺構実測図　(1/40)
B 6 地区　S I 15・S K3925



第102図　遺構実測図　(1/100)
Ｂ６地区　ＳＩ16・ＳＫ3885・ＳＤ3853・ＳＤ3854

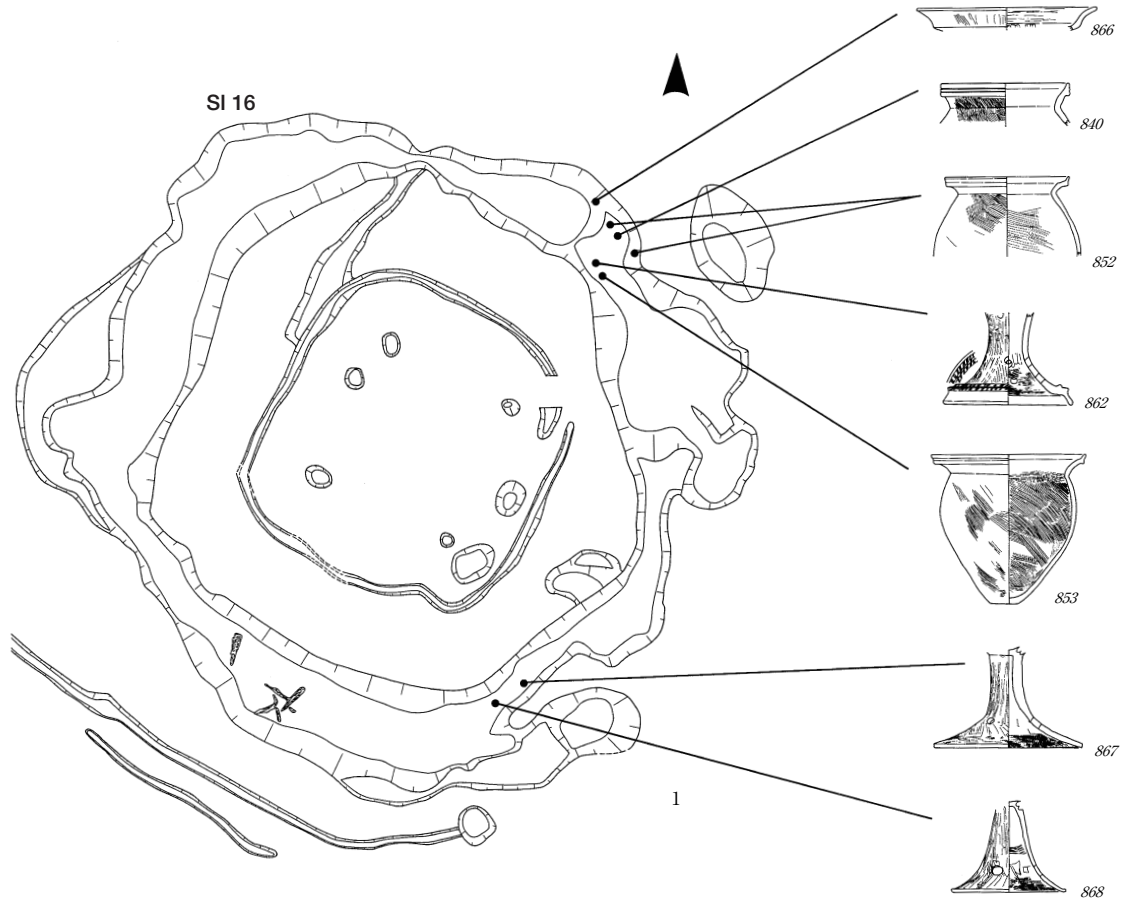


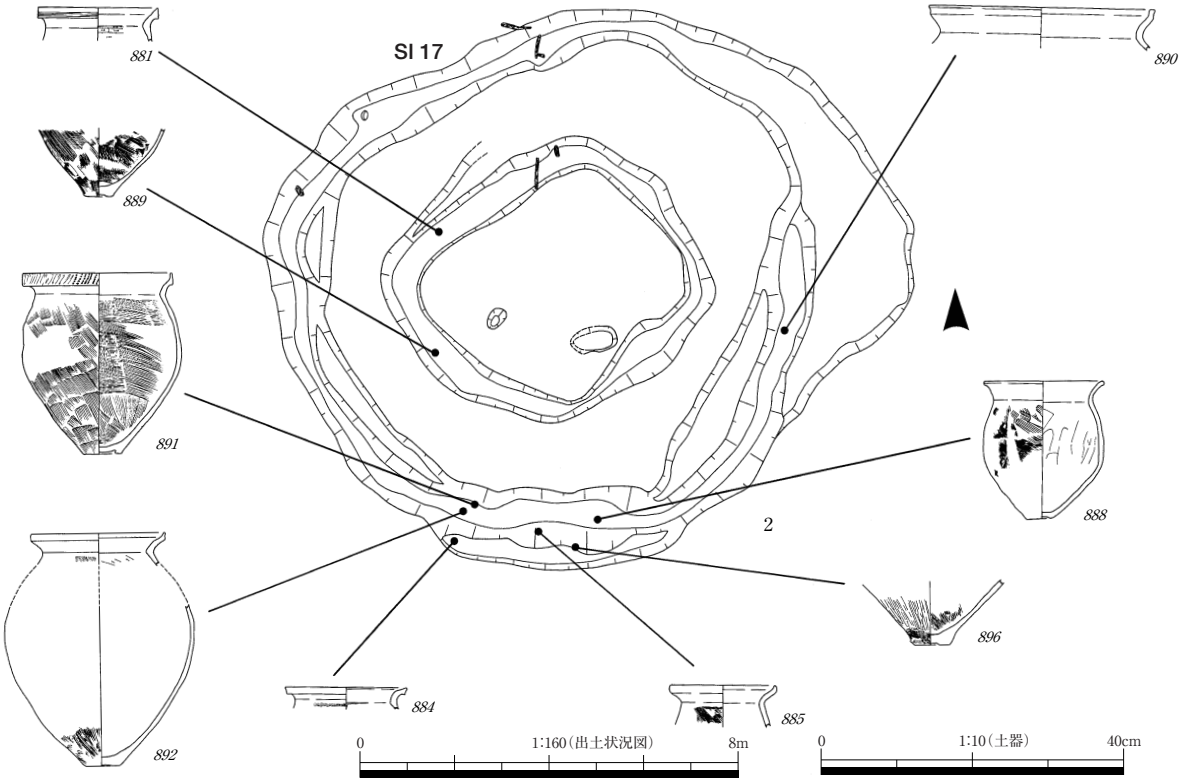
第103図　遺構実測図　(1/40)
B６地区　ＳＩ16・ＳＫ3885



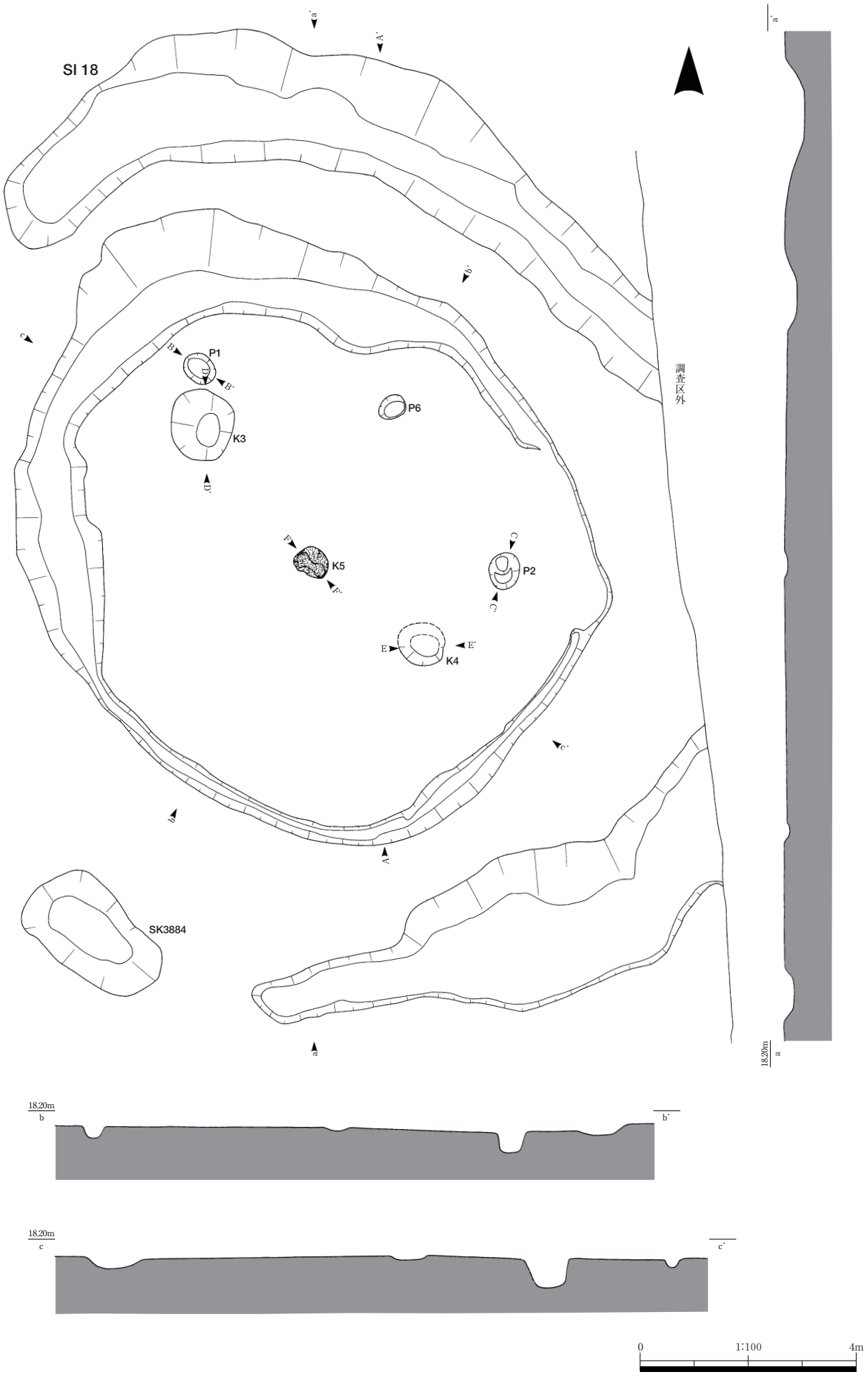
第104図　遺構実測図　(1/40・1/80)
Ｂ６地区　ＳＩ17

第105図　遺構実測図　(1/40)
B 6 地区　S I 17

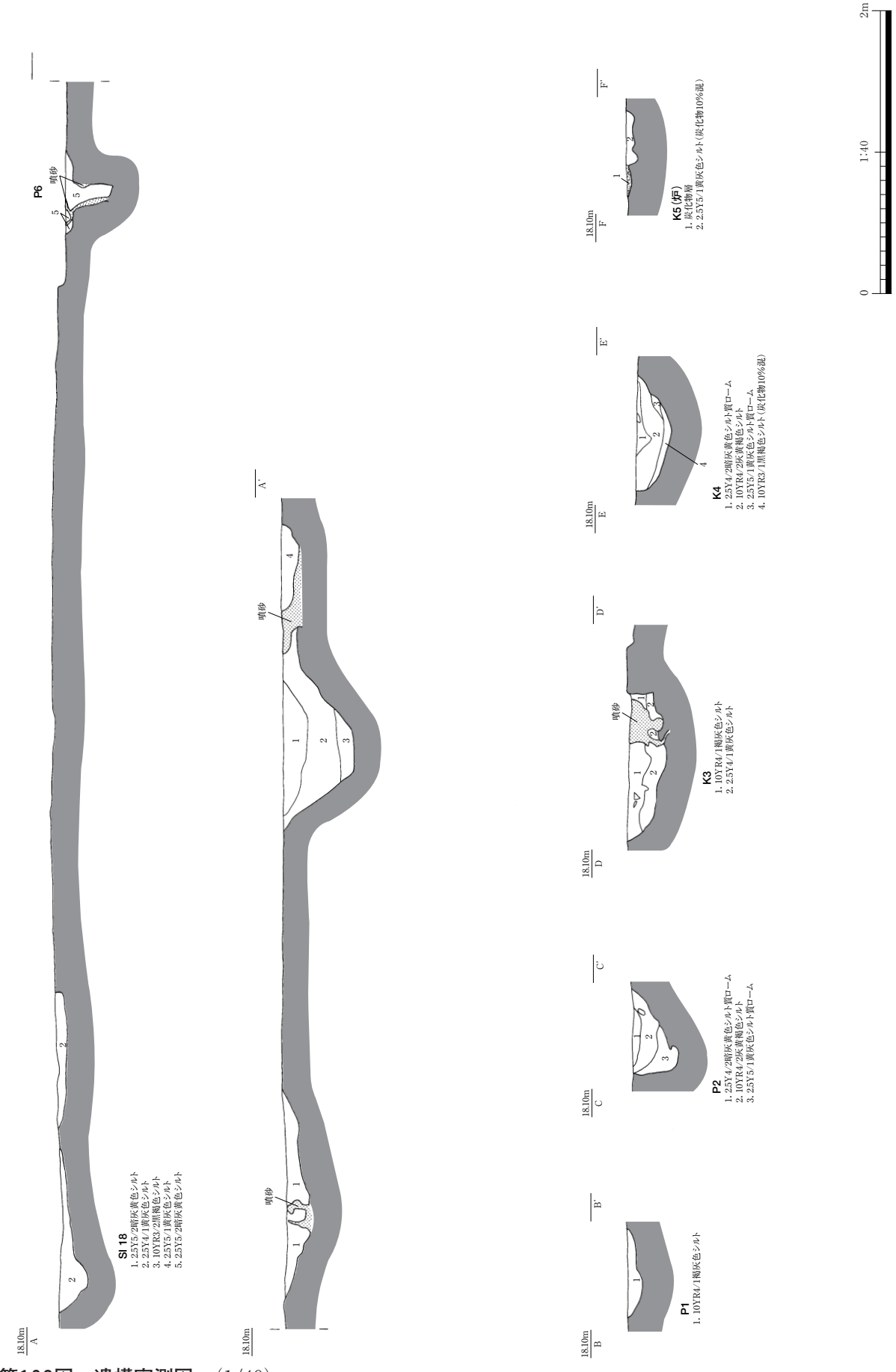




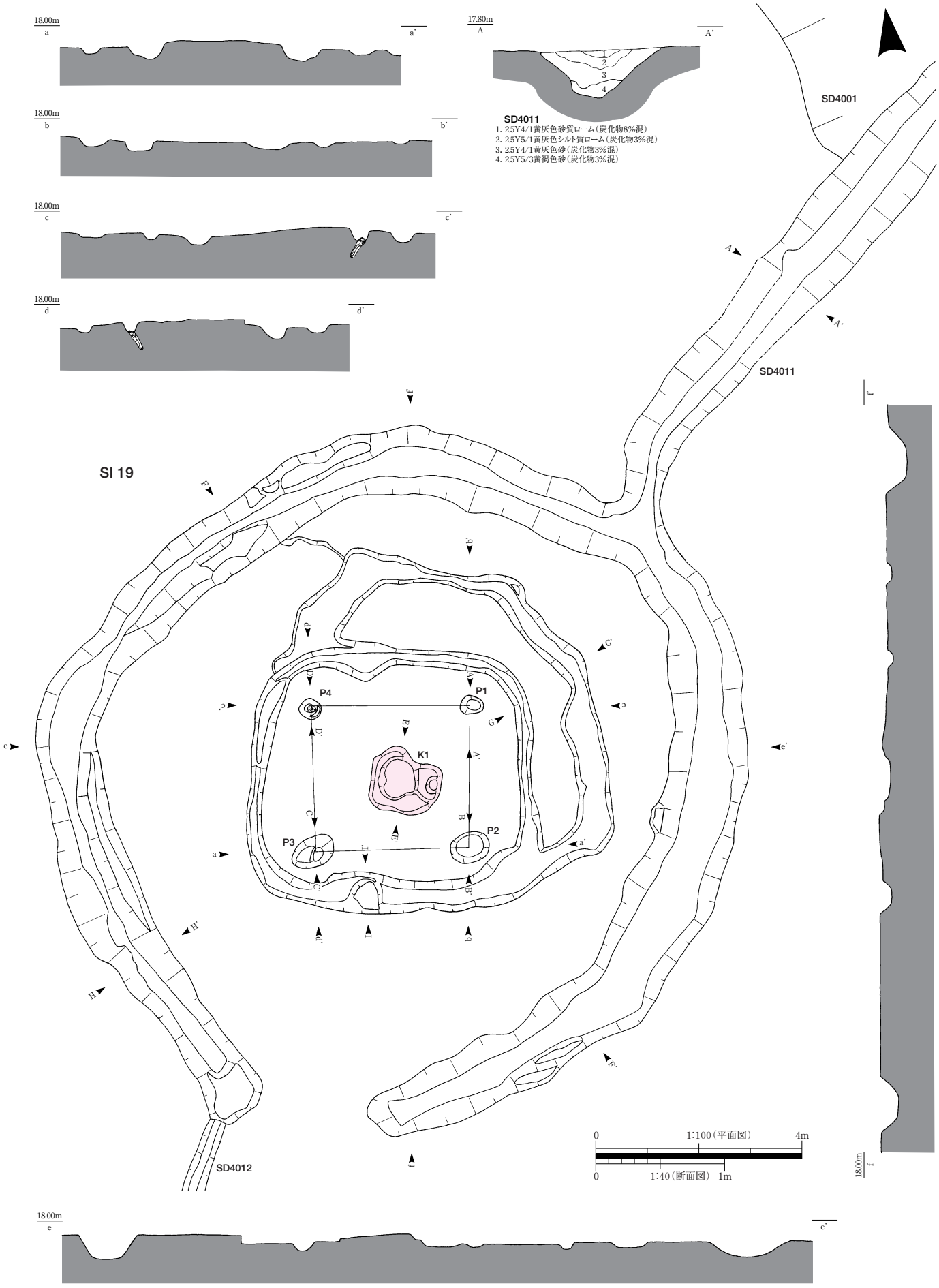
第106図　遺構実測図　(1/160，1/10)
B６地区　1.ＳＩ16　2.ＳＩ17



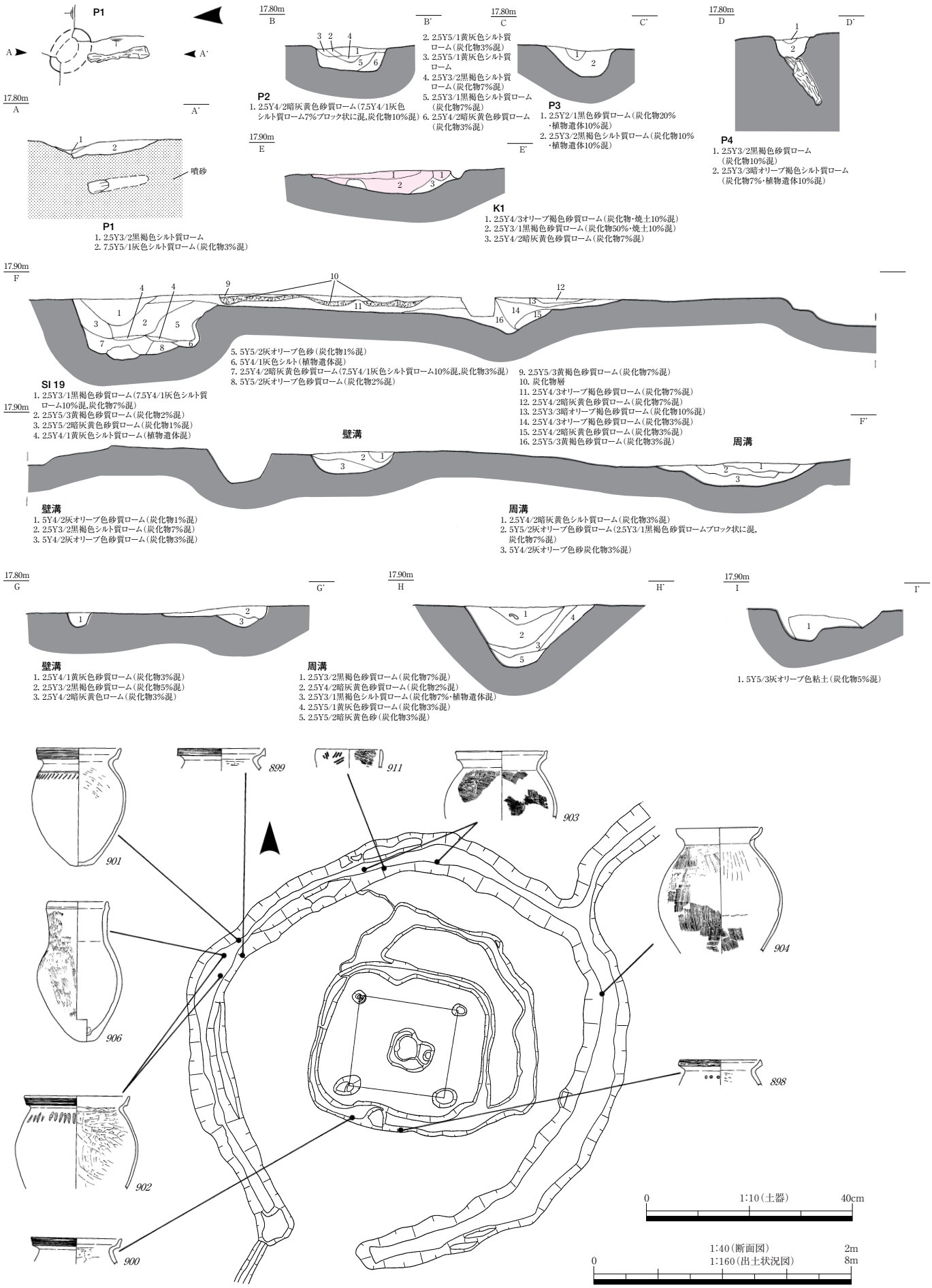
第107図　遺構実測図　(1/100)
B 6 地区　ＳＩ18・ＳＫ3884



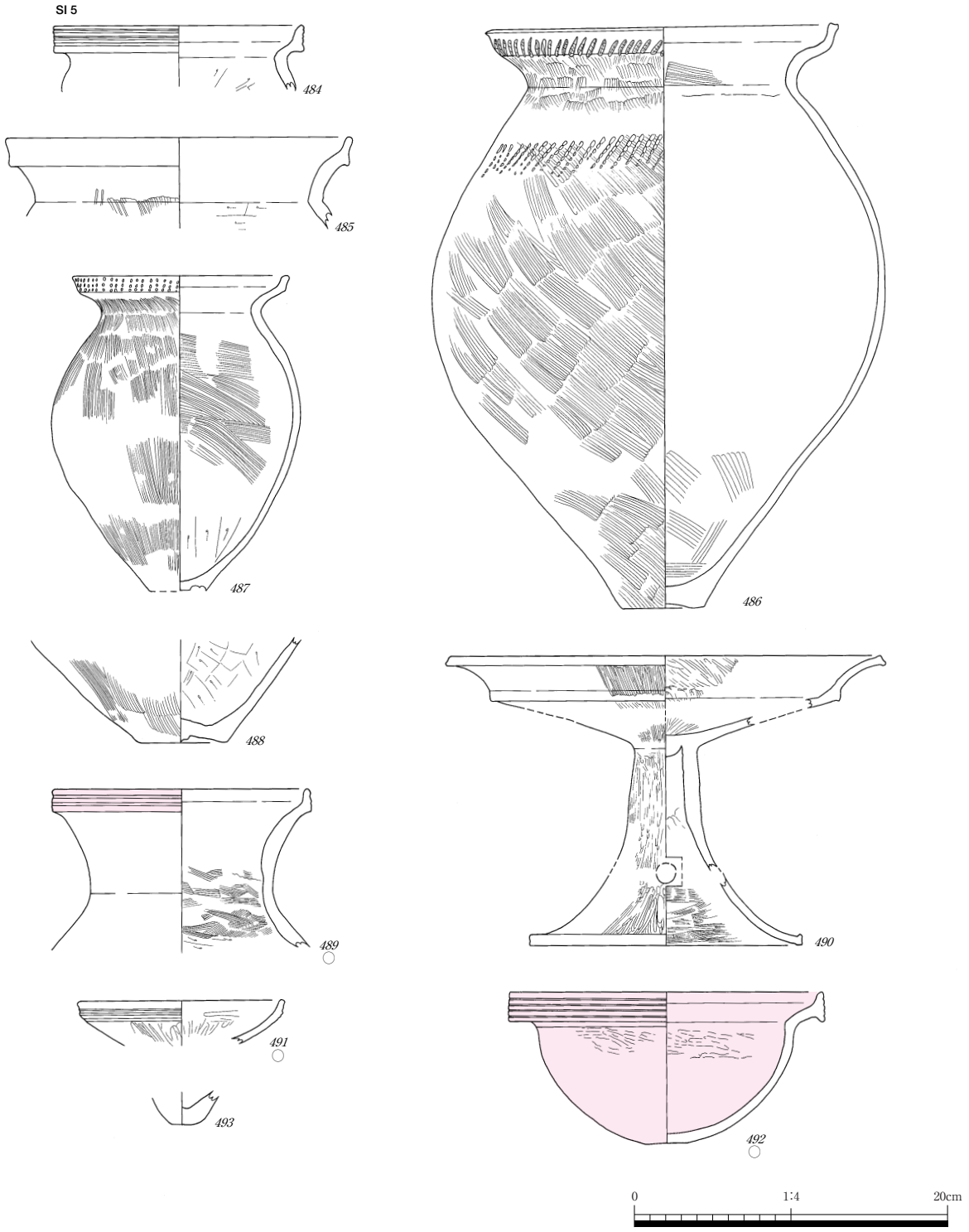
第108図　遺構実測図　(1/40)
Ｂ６地区　ＳＩ18



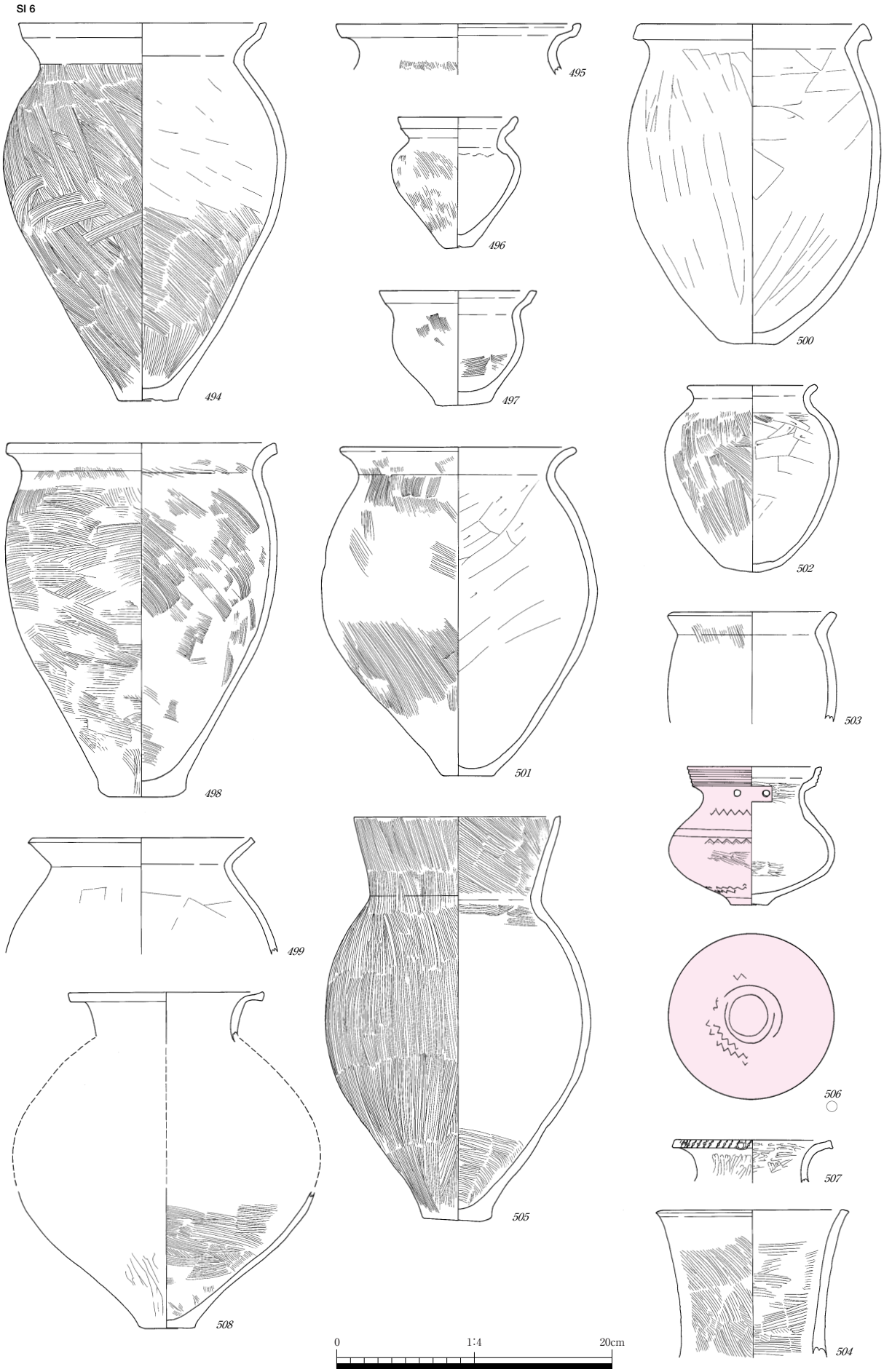
第109図　遺構実測図　(1/40・1/100)
B７地区　ＳＩ19・ＳＤ4011



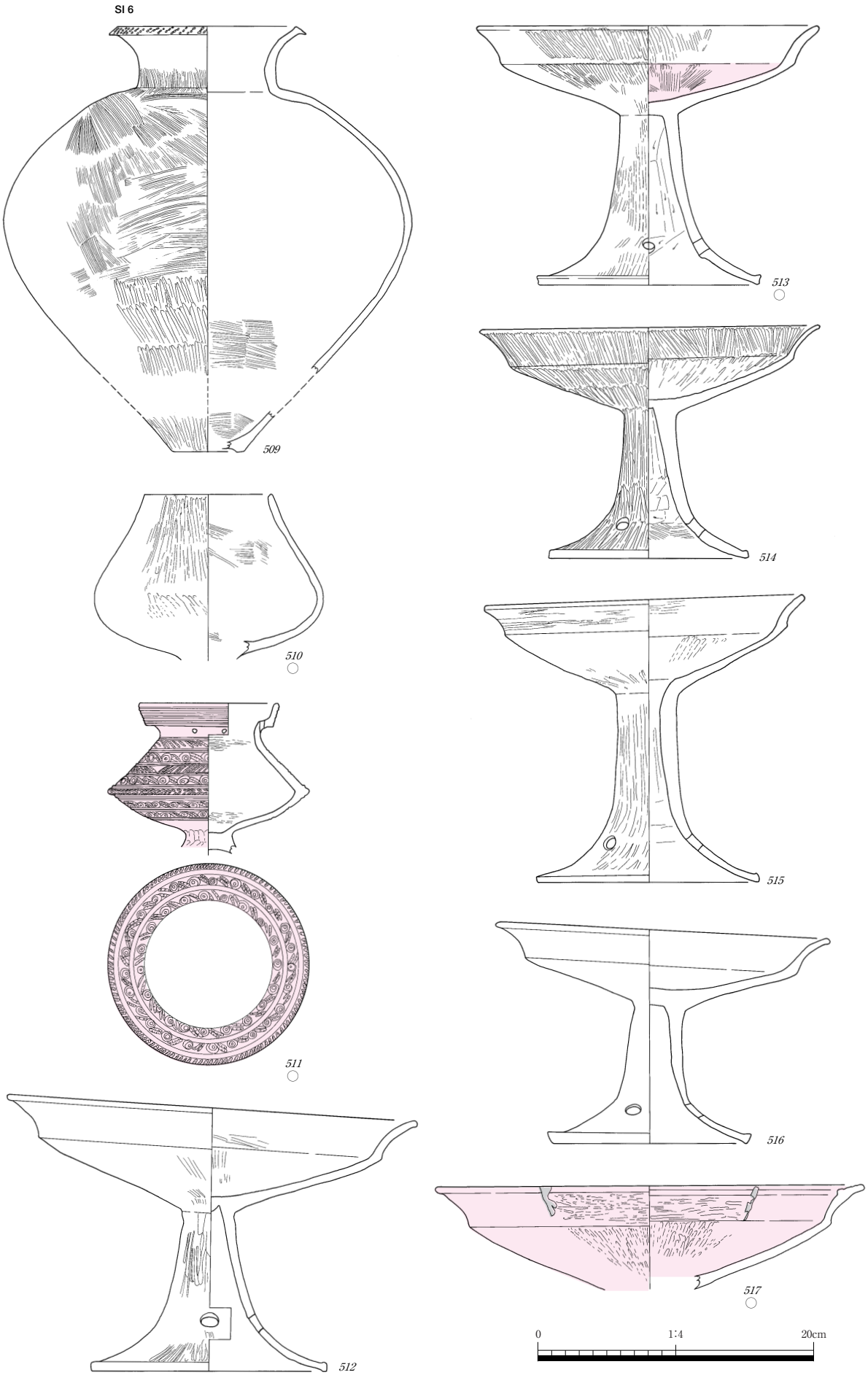
第110図　遺構実測図　（1/40・1/160，1/10）
B７地区　ＳＩ19



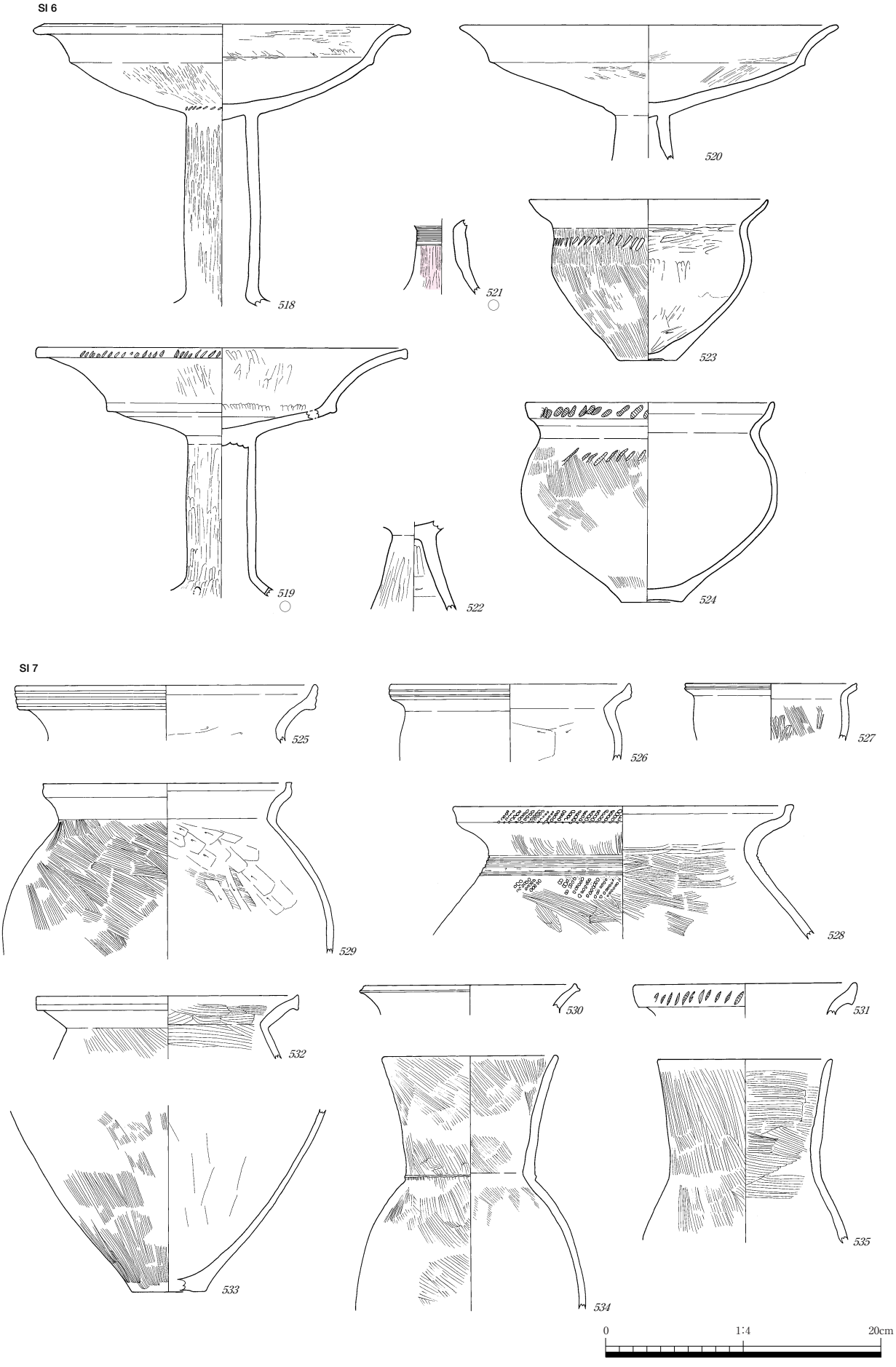
第111図　遺物実測図　(1/4)
B３地区　ＳＩ５



第112図　遺物実測図　(1/4)
Ｂ５地区　ＳＩ６

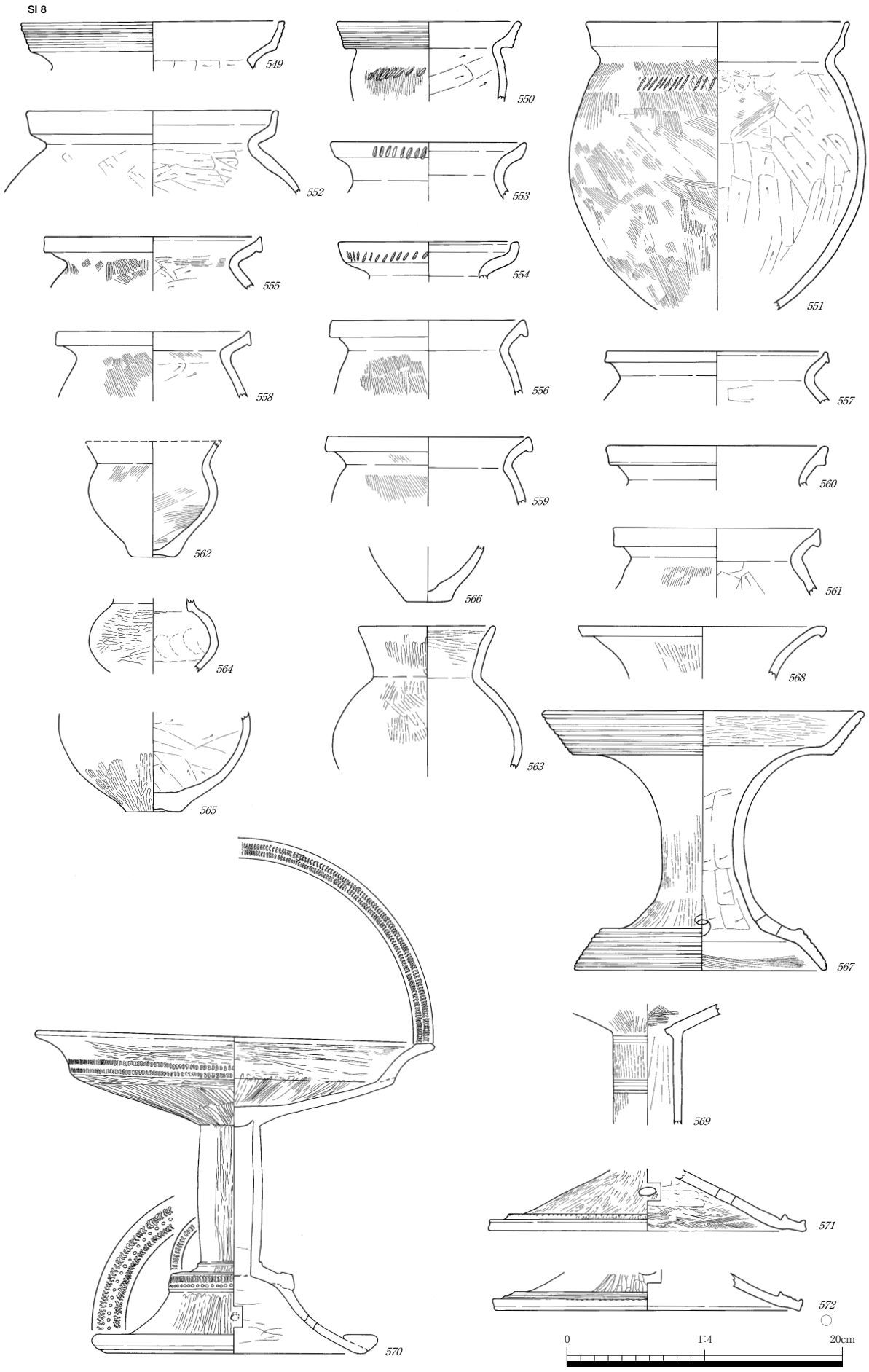


第113図　遺物実測図　(1/4)
B５地区　ＳＩ６

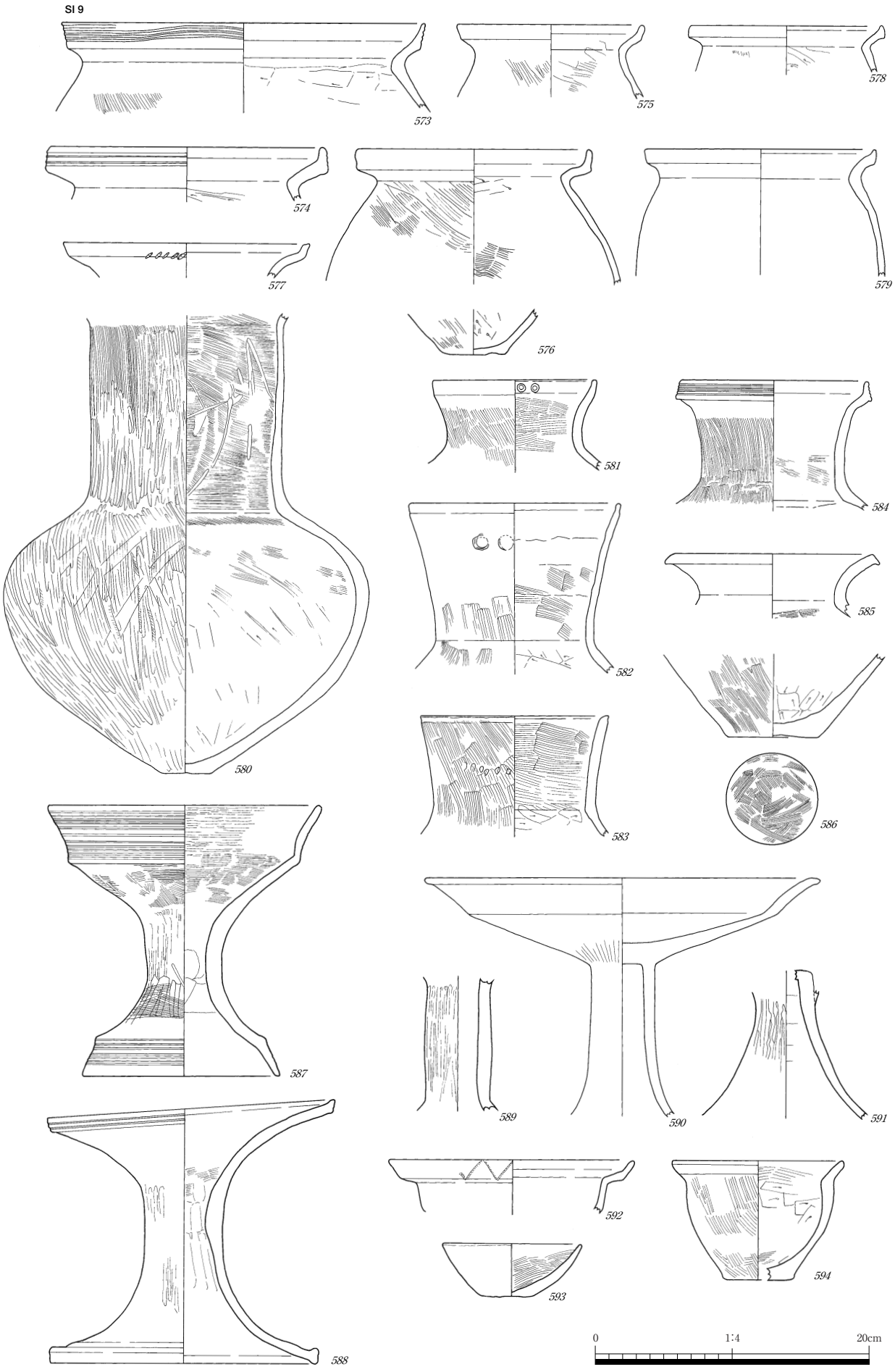


第114図　遺物実測図　(1/4)
Ｂ５地区　ＳＩ６(*518～524*)　ＳＩ７(*525～535*)

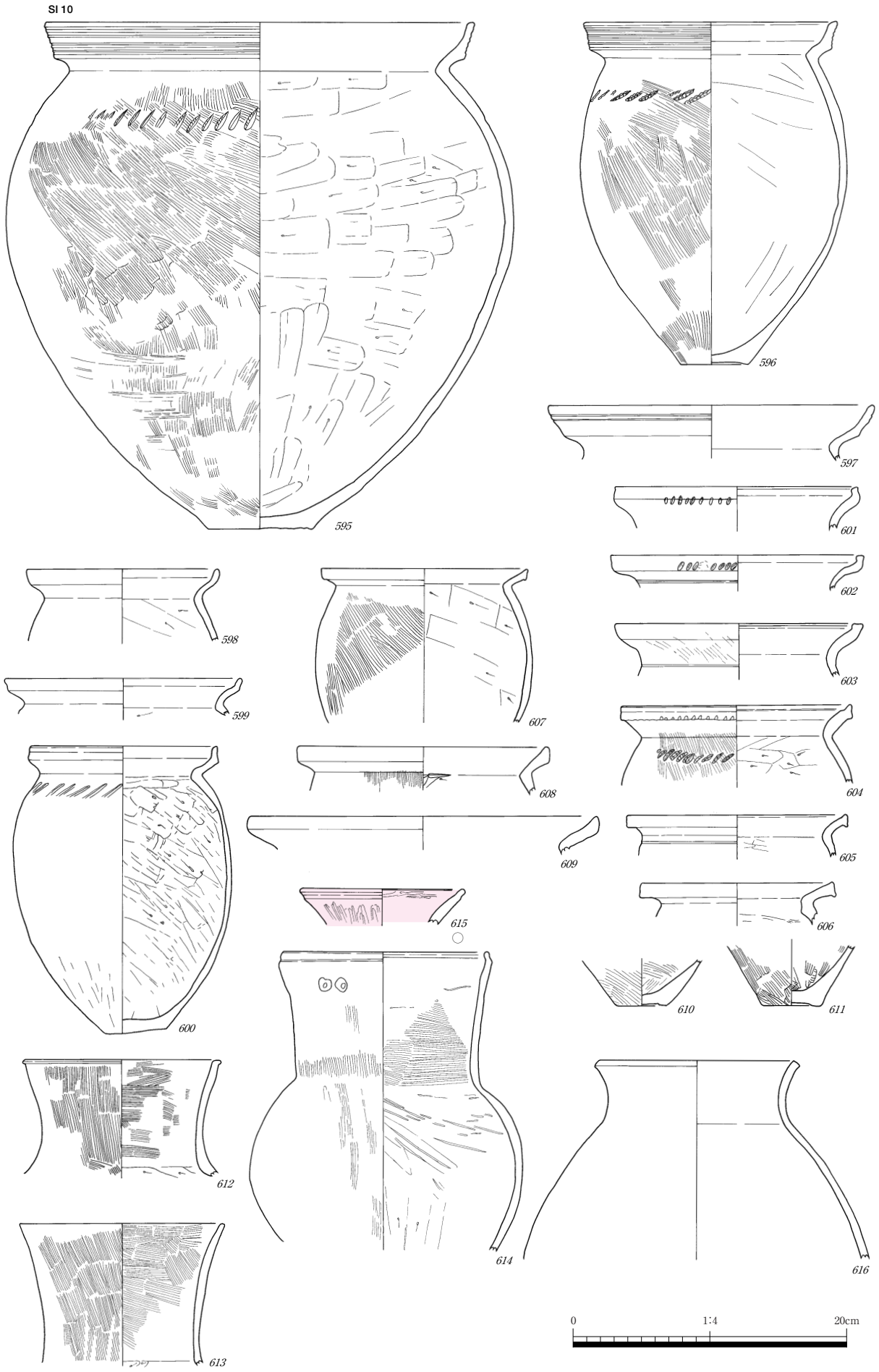
第115図　遺物実測図　(1/4)
B５地区　ＳＩ７



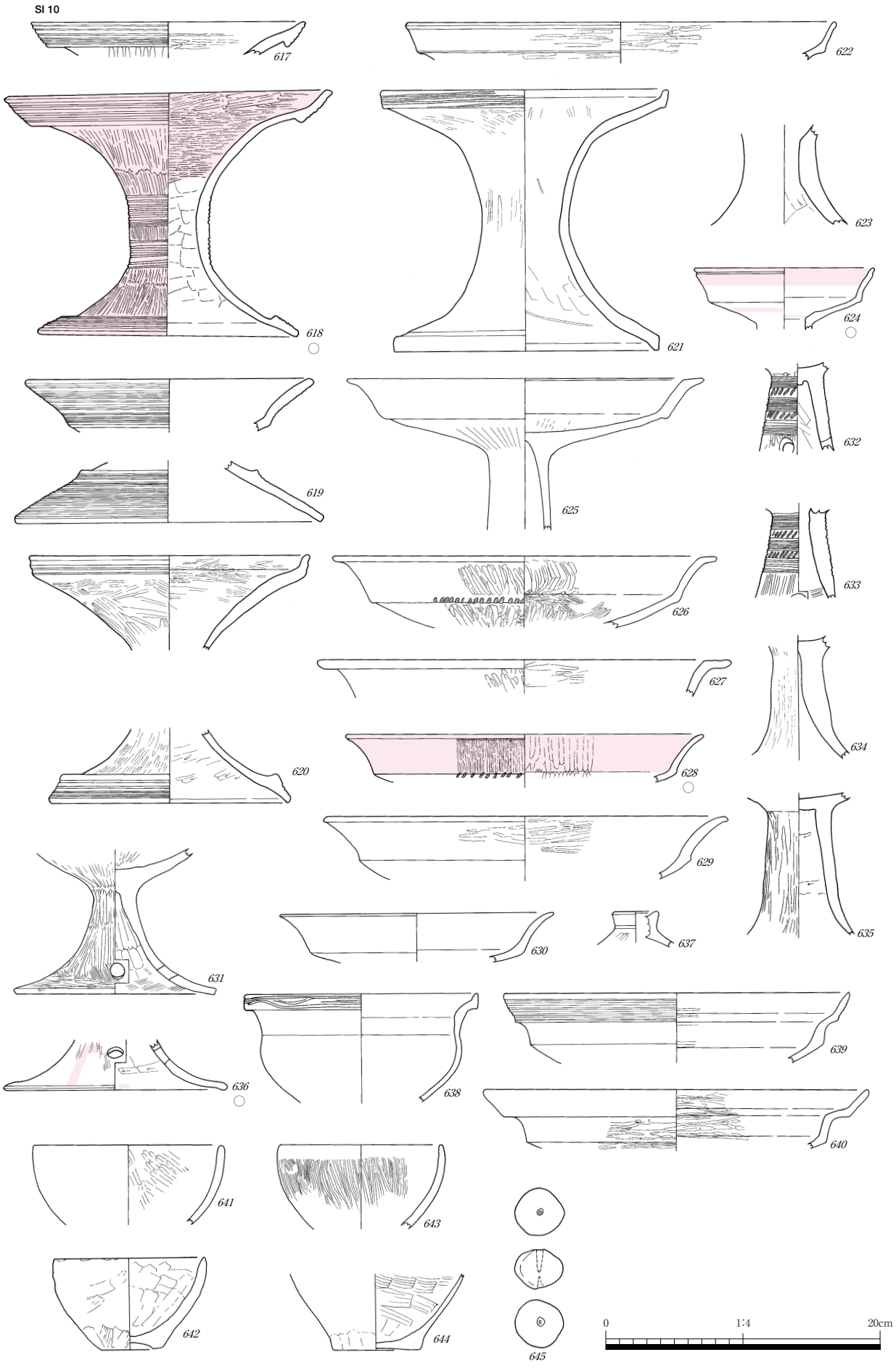
第116図　遺物実測図　(1/4)
Ｂ５地区　ＳＩ８



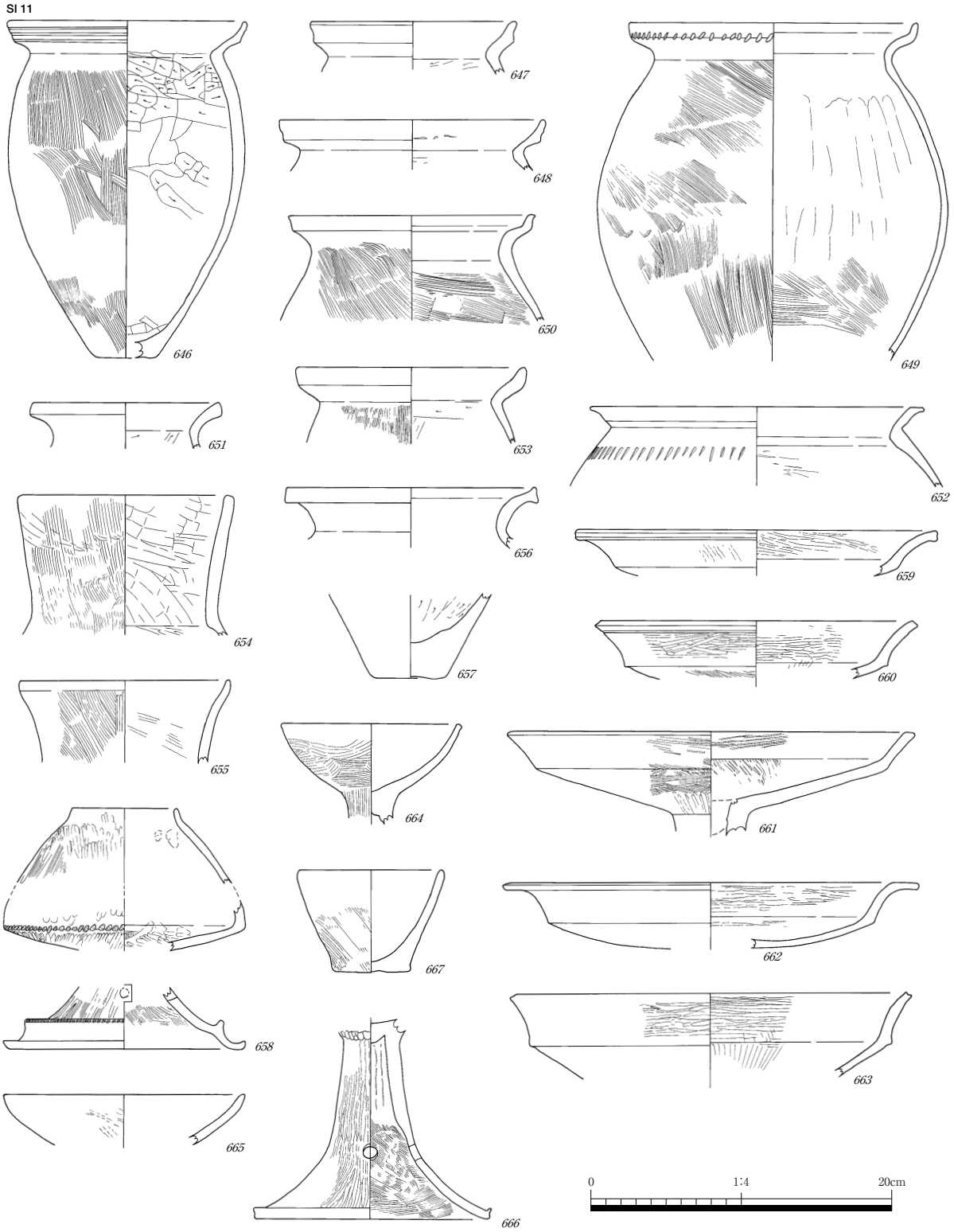
第117図　遺物実測図　(1/4)
B５地区　ＳＩ９



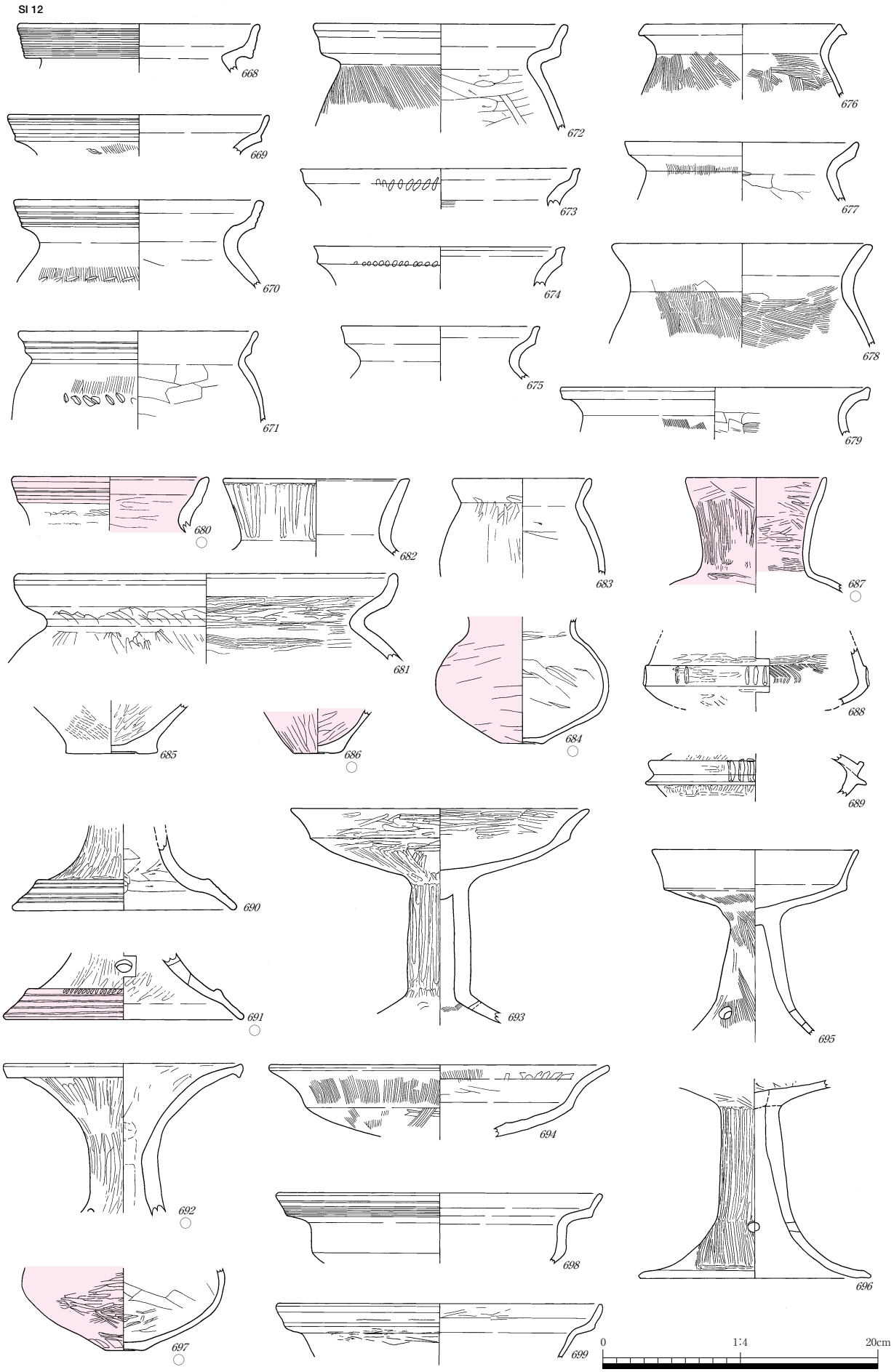
第118図　遺物実測図　(1/4)
Ｂ５地区　ＳＩ10



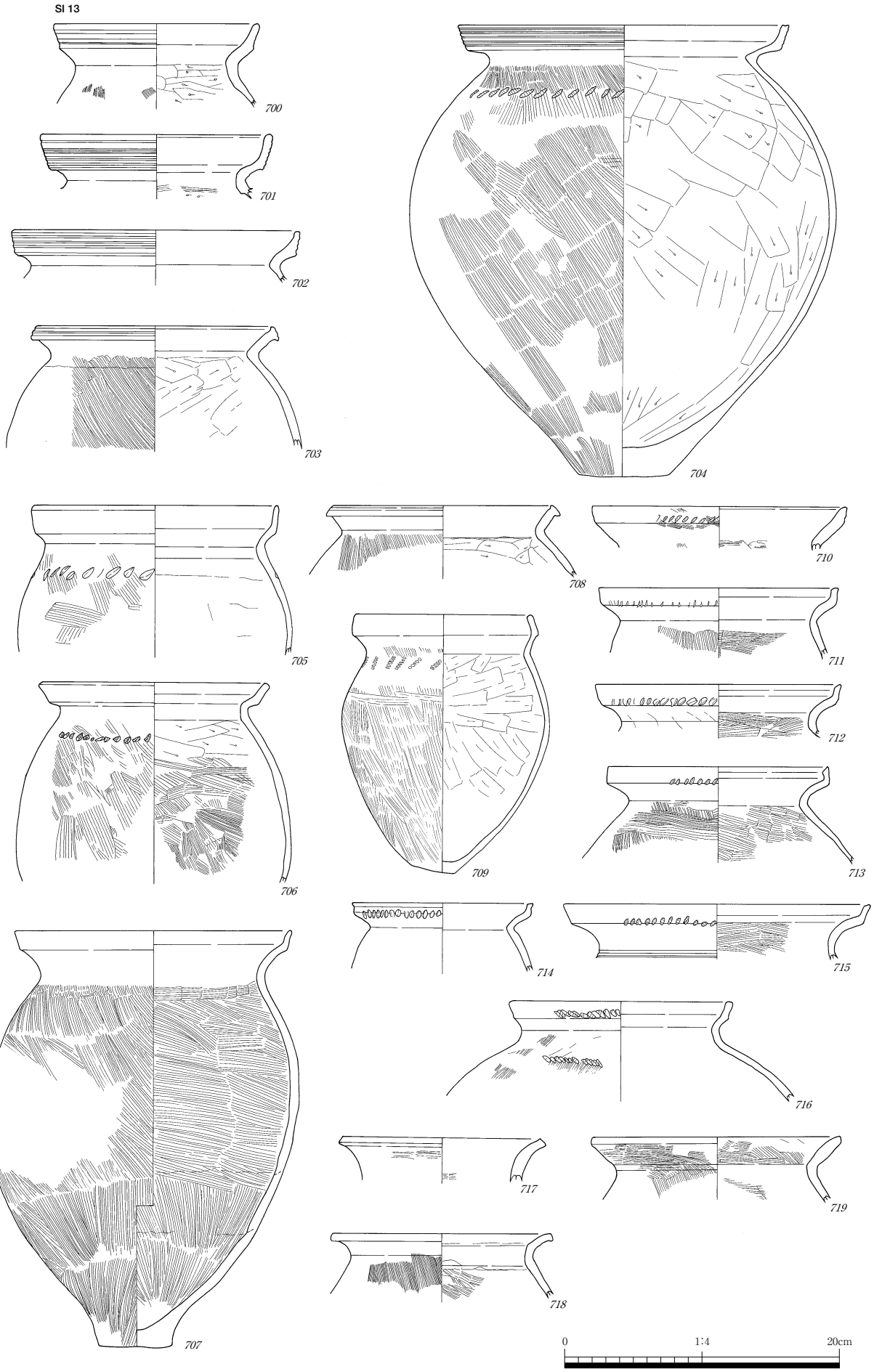
第119図　遺物実測図　(1/4)
B５地区　ＳＩ10



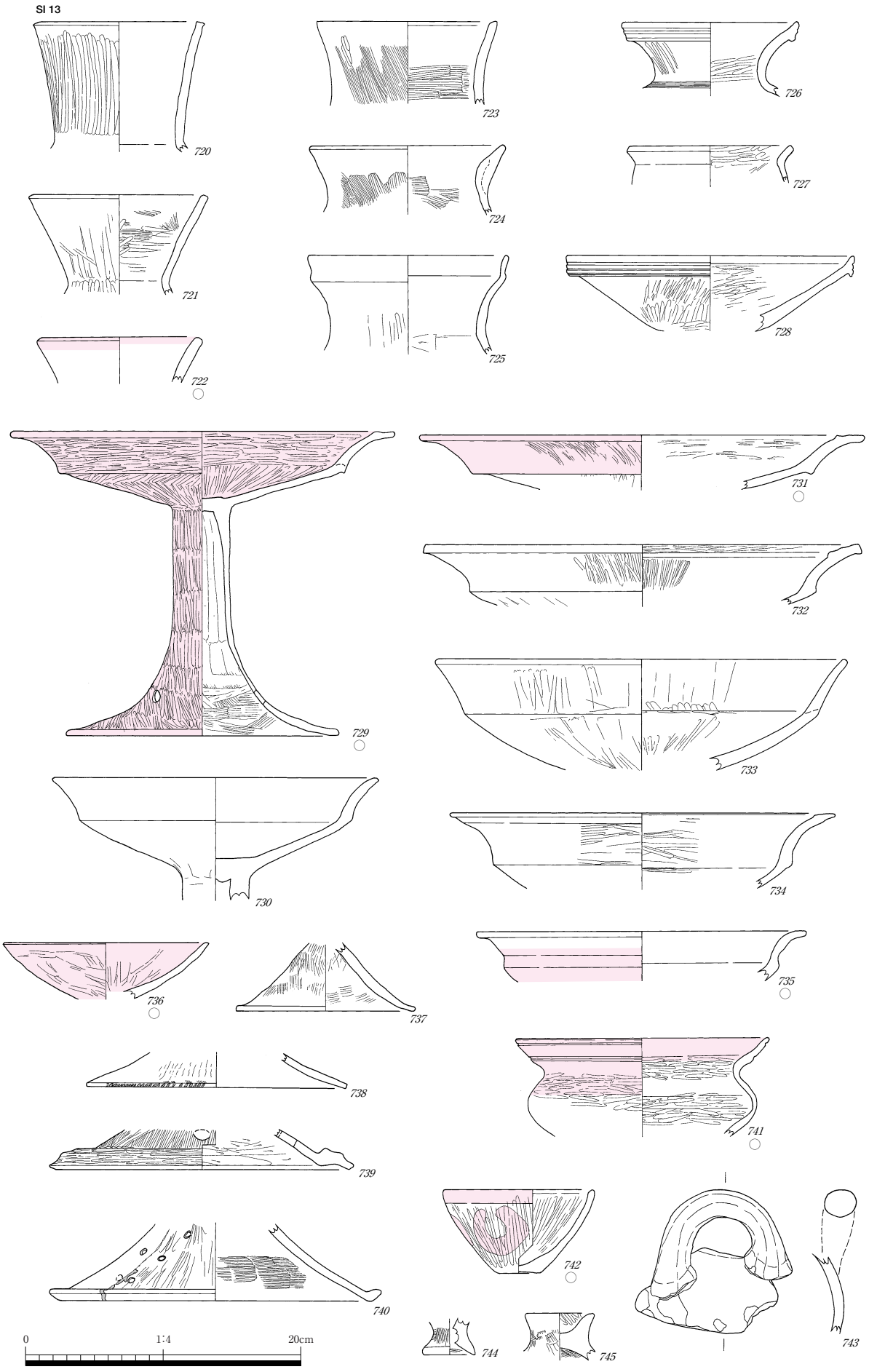
第120図　遺物実測図　(1/4)
Ｂ５地区　ＳＩ11



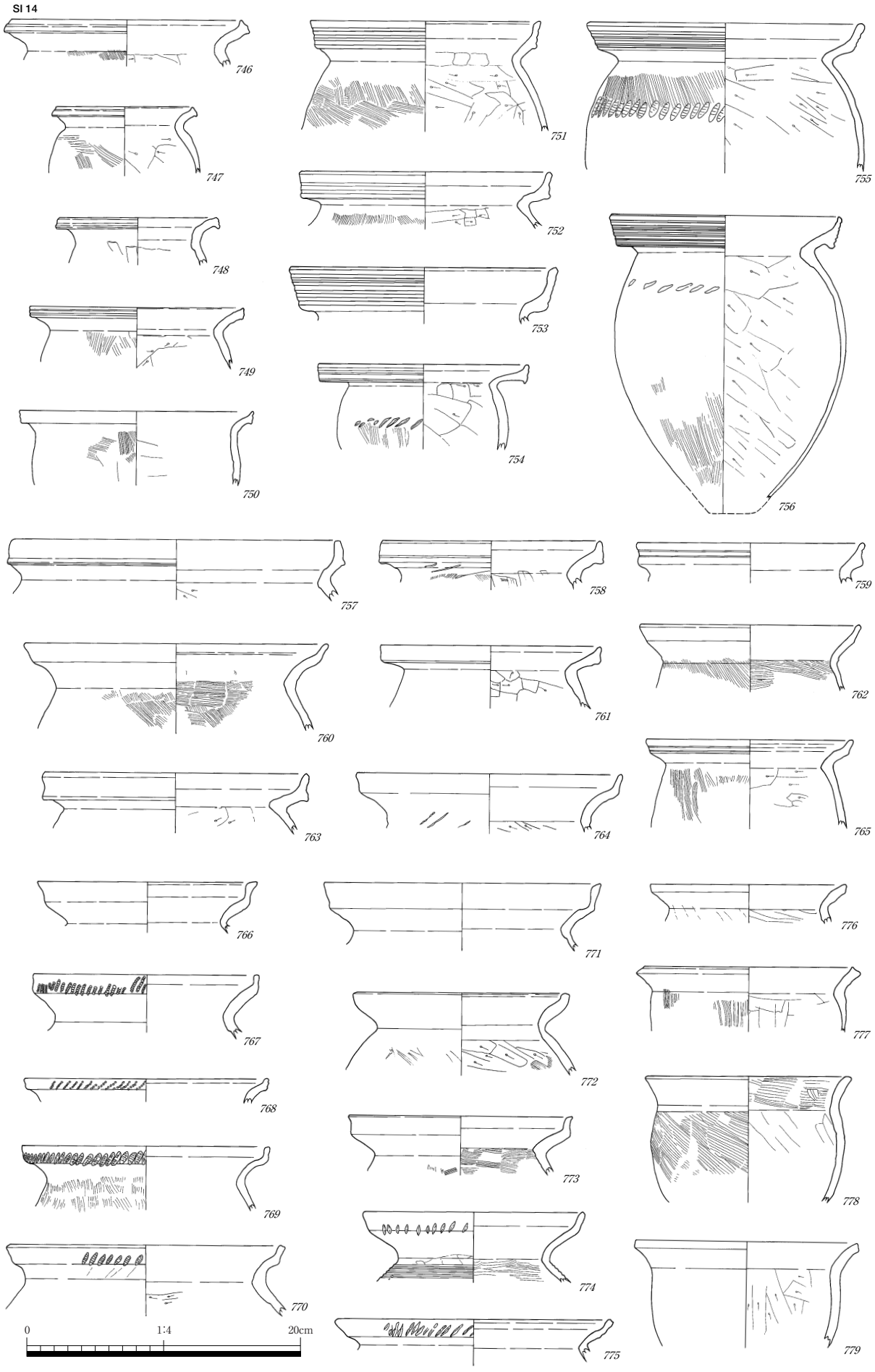
第121図　遺物実測図　(1/4)
B 6 地区　S I 12



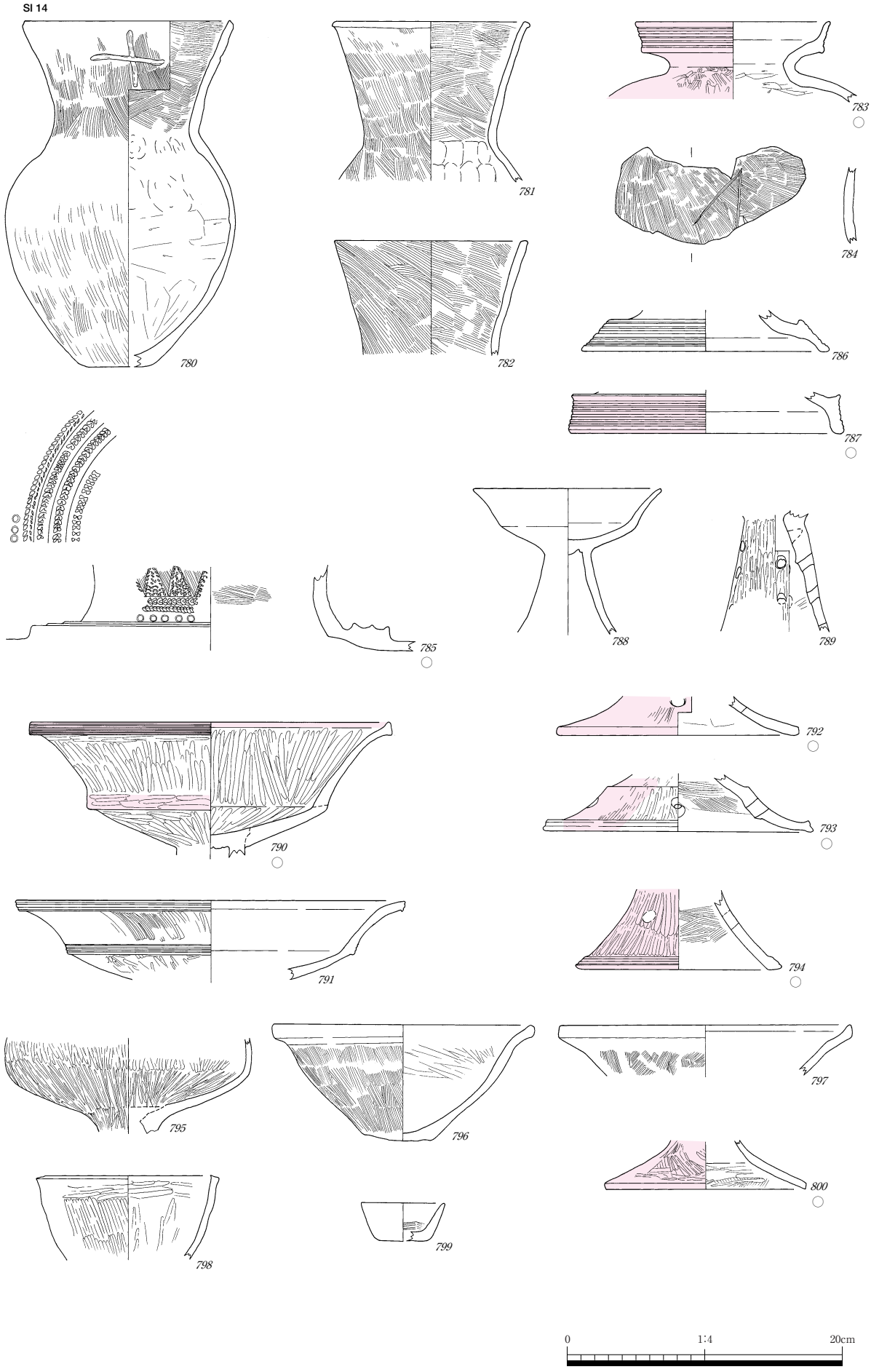
第122図　遺物実測図　(1/4)
Ｂ６地区　ＳＩ13



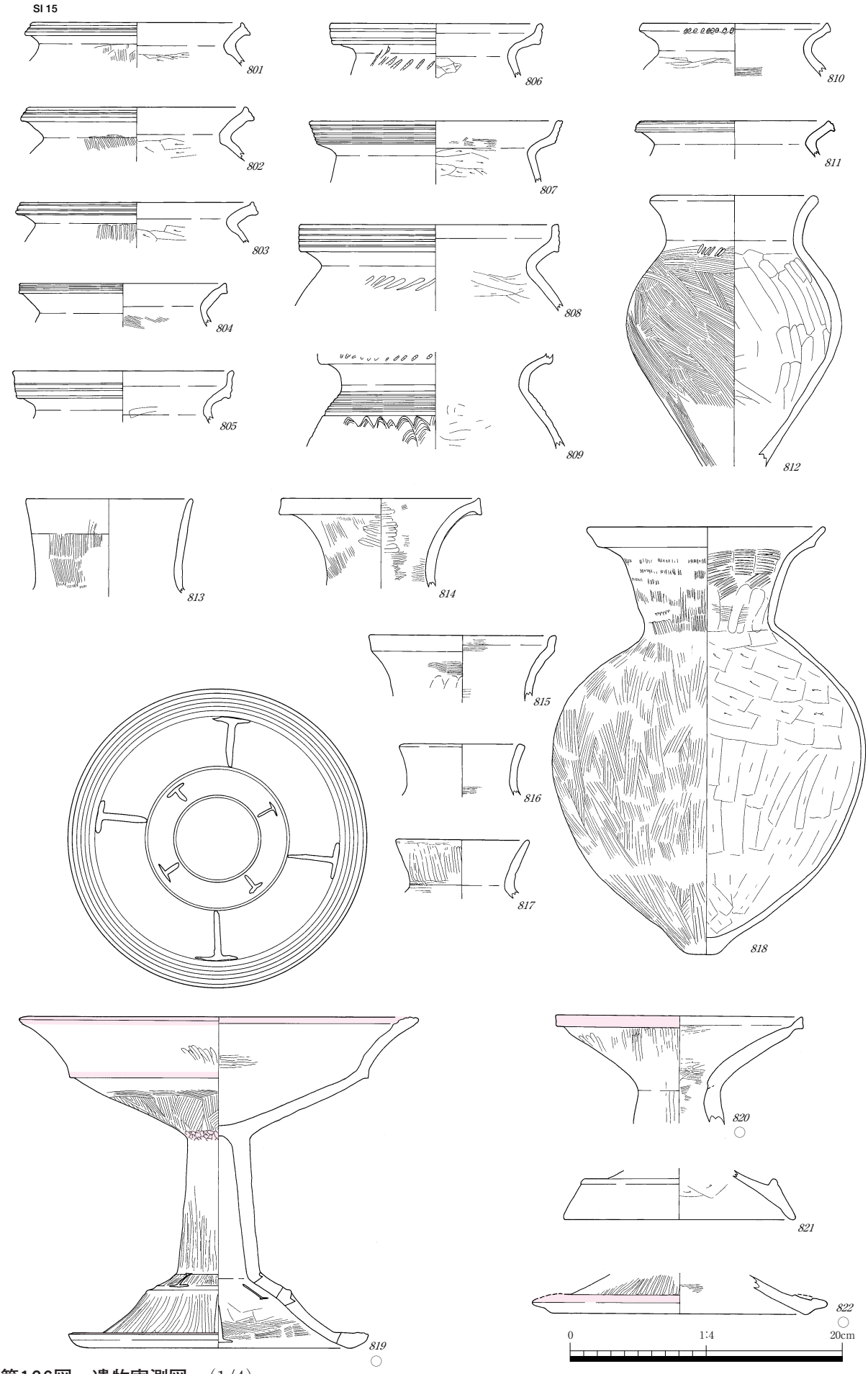
第123図　遺物実測図　(1/4)
B６地区　ＳＩ13



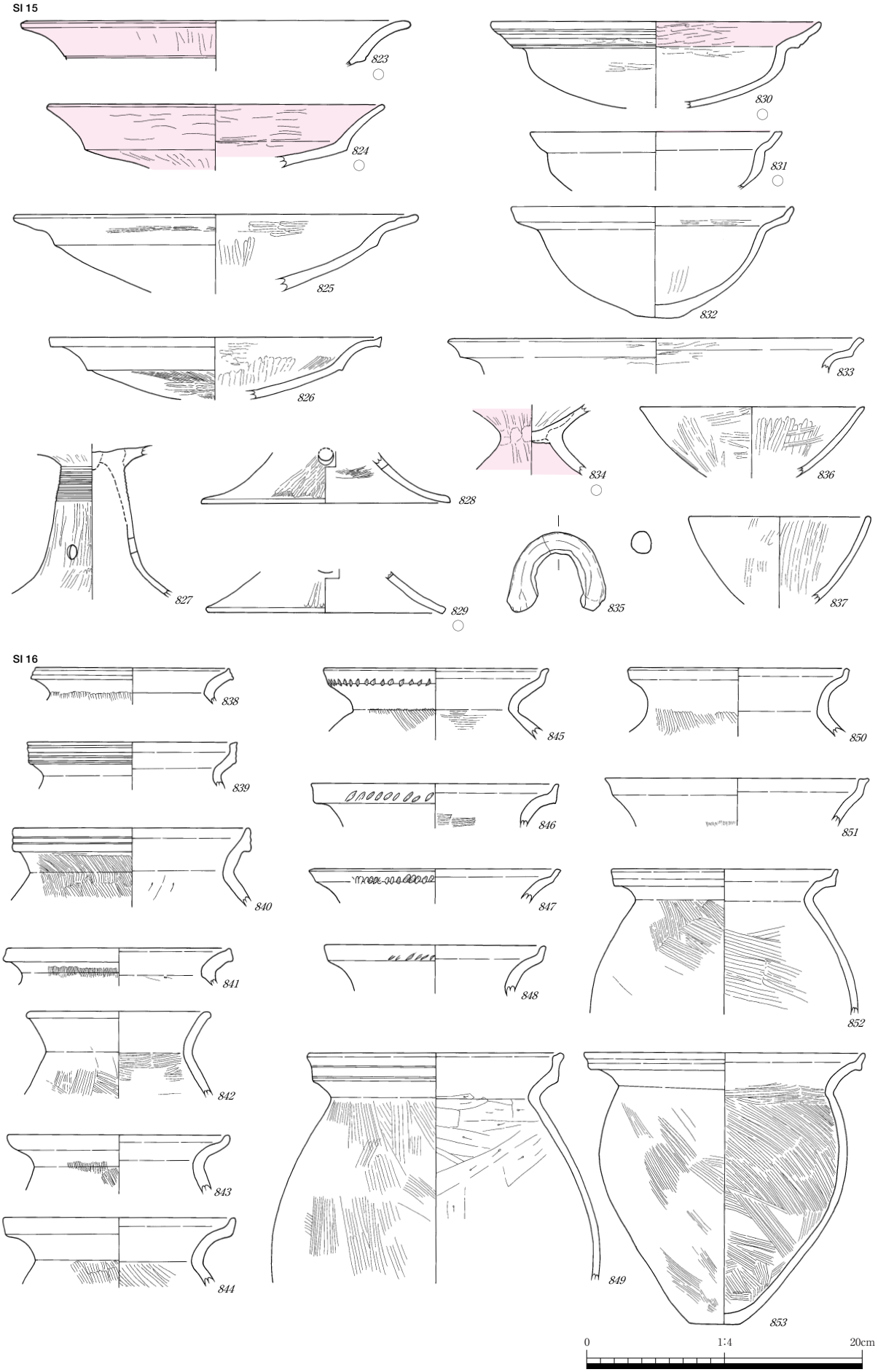
第124図　遺物実測図　(1/4)
Ｂ６地区　ＳＩ14



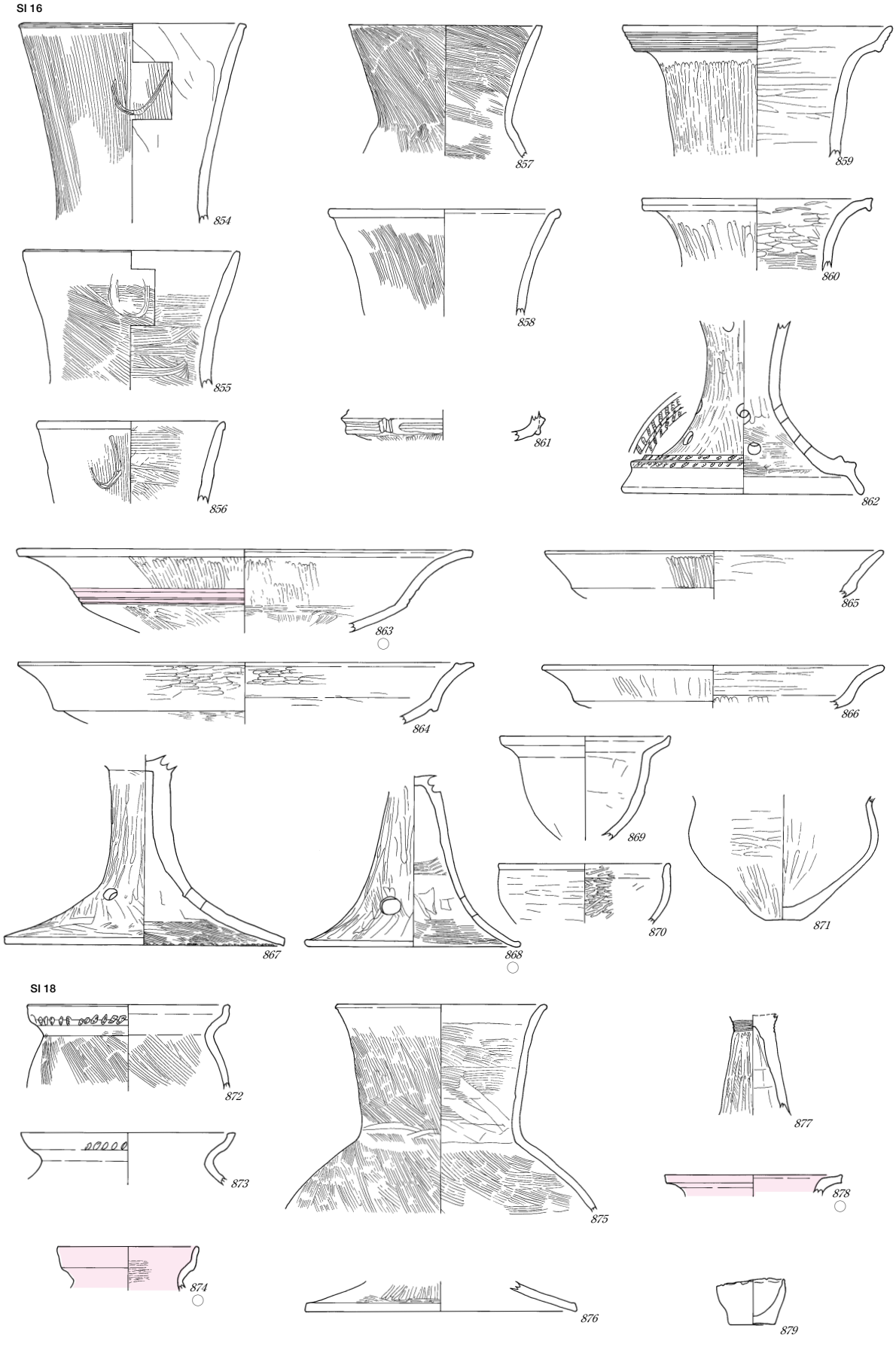
第125図　遺物実測図　(1/4)
B 6 地区　S I 14



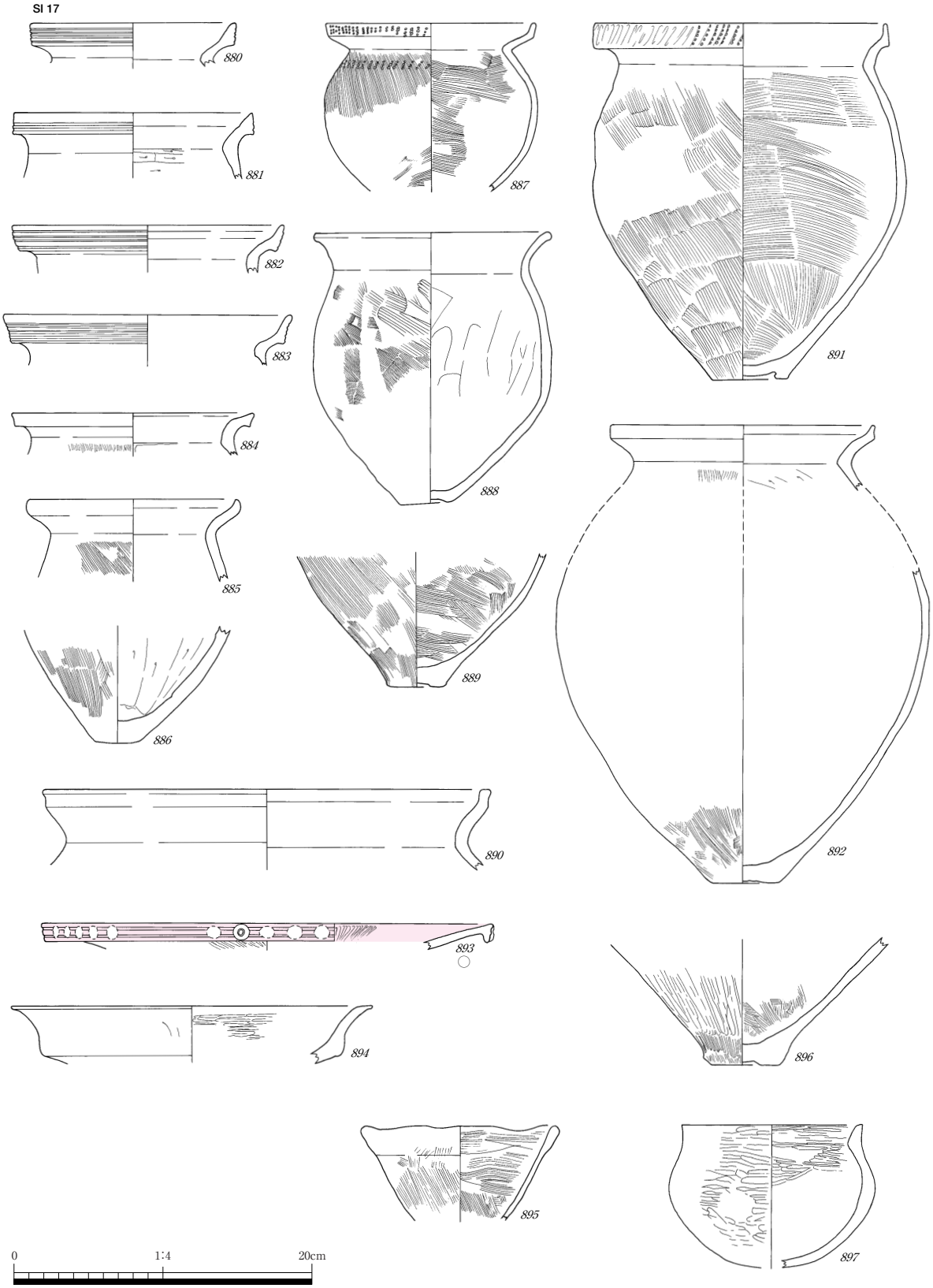
第126図　遺物実測図　(1/4)
Ｂ６地区　ＳＩ15



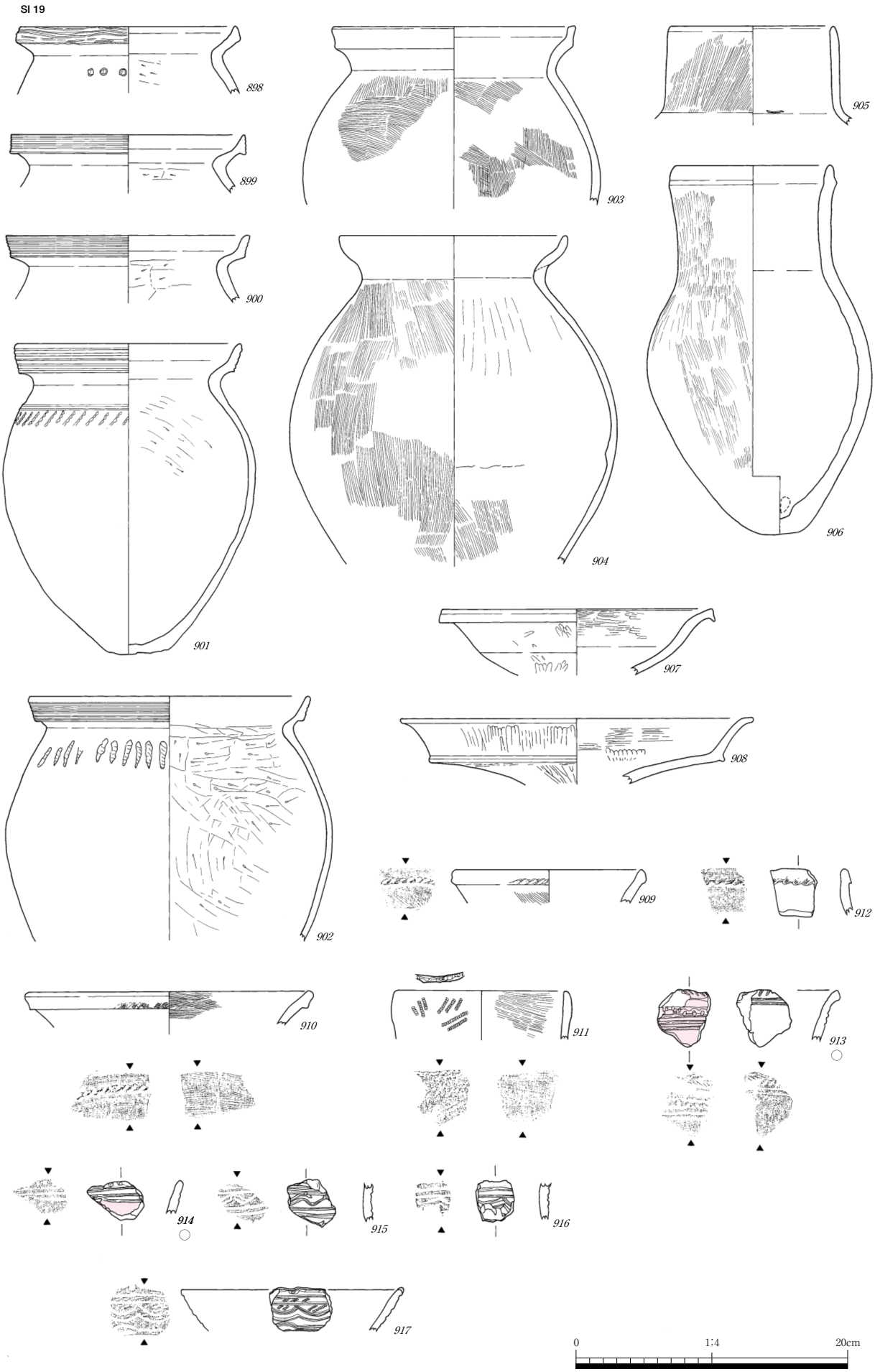
第127図　遺物実測図　(1/4)
B 6 地区　ＳＩ15(*823～837*)　ＳＩ16(*838～853*)



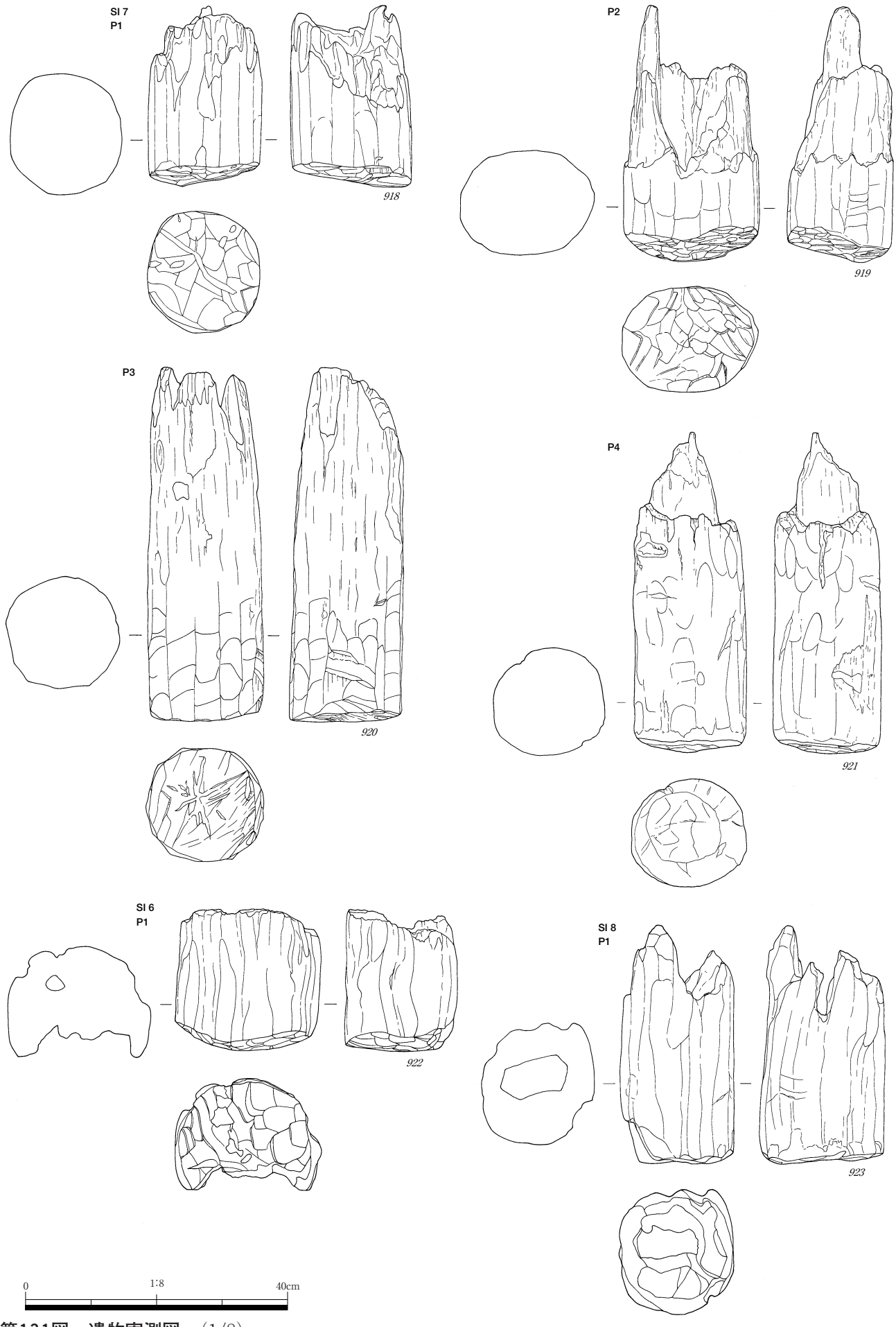
第128図　遺物実測図　(1/4)
Ｂ６地区　ＳＩ16(*854～871*)　ＳＩ18(*872～879*)



第129図　遺物実測図　(1/4)
B 6 地区　ＳＩ17

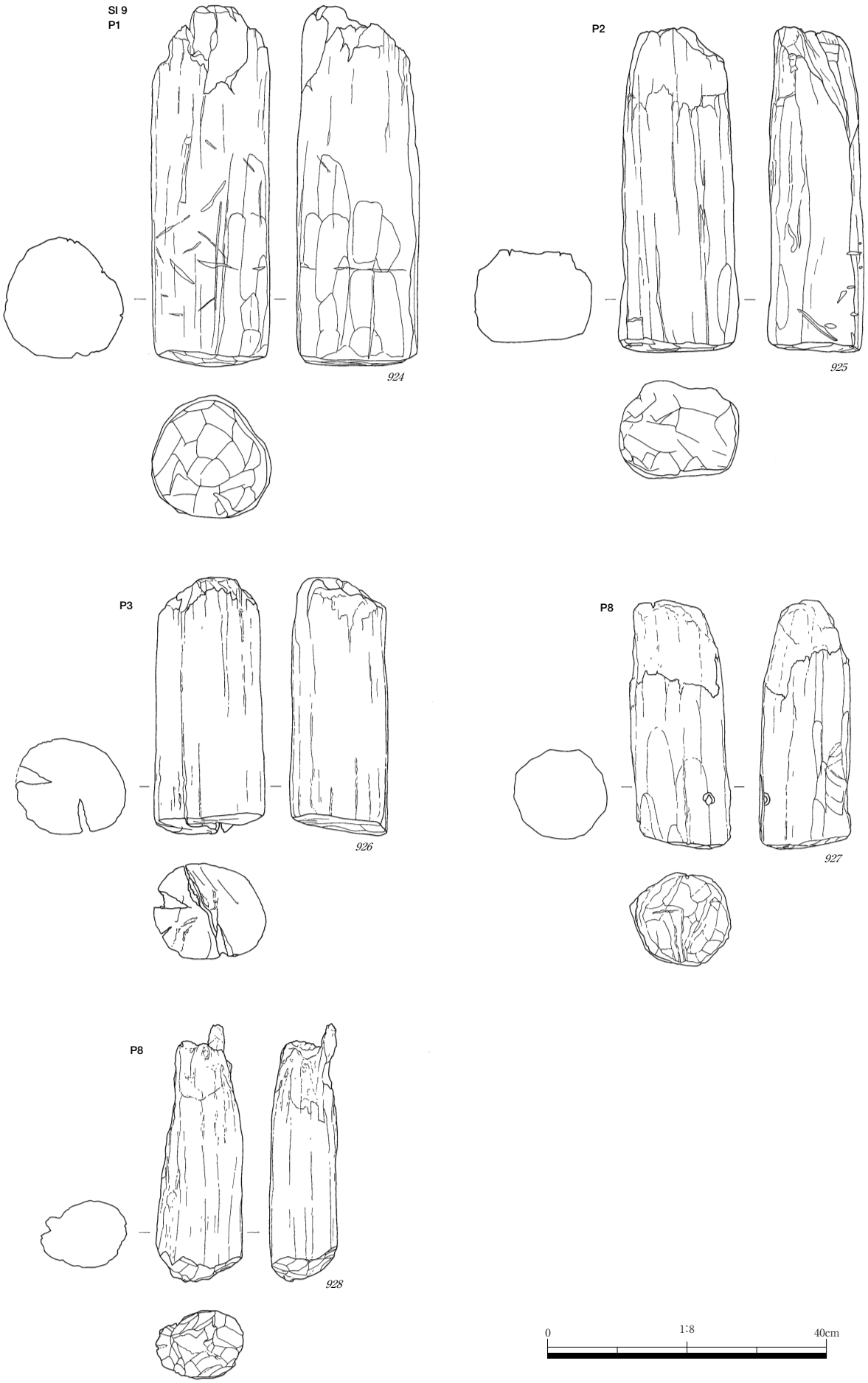


第130図　遺物実測図　(1/4)
B７地区　ＳＩ19



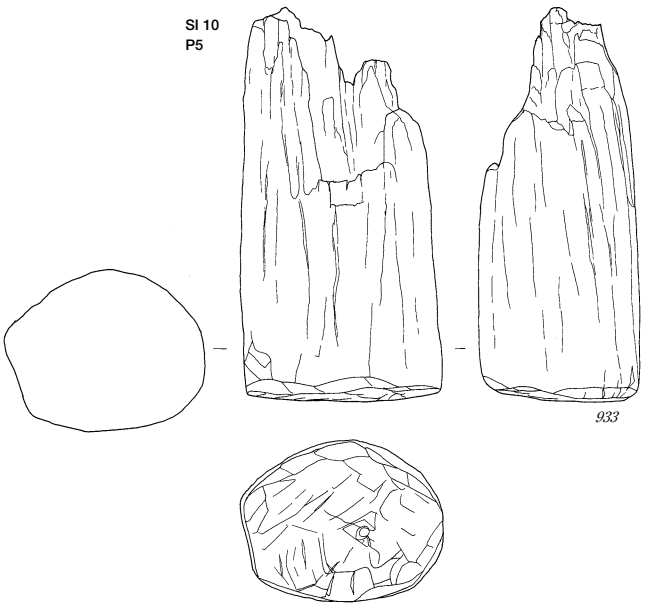
第131図　遺物実測図　(1/8)

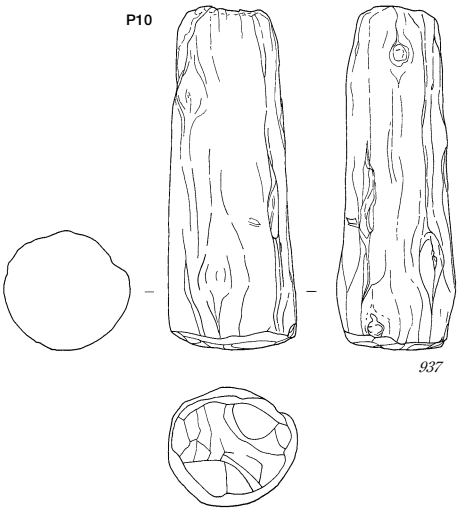
B５地区　ＳＩ６　Ｐ２(*922*)
ＳＩ７　Ｐ１(*918*)　Ｐ２(*919*)　Ｐ３(*920*)　Ｐ４(*921*)
ＳＩ８　Ｐ１(*923*)

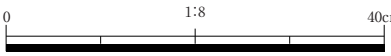


第132図　遺物実測図　(1/8)
Ｂ５地区　ＳＩ９

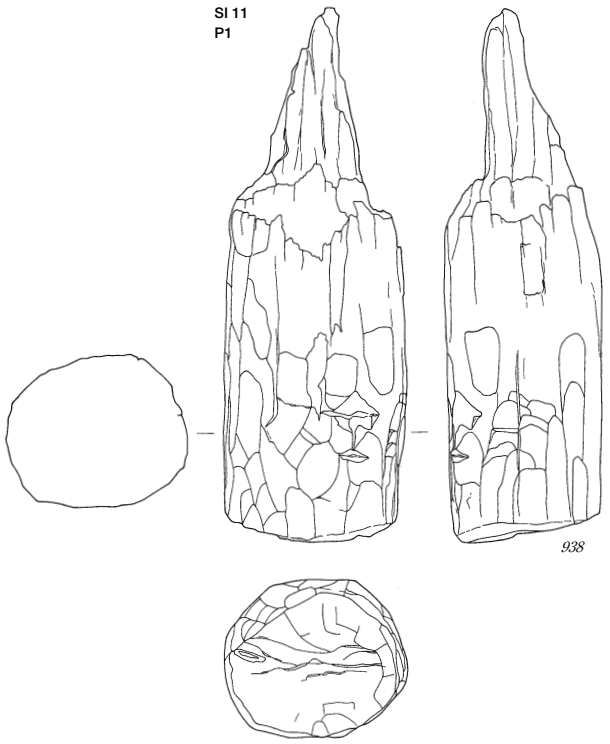
第133図　遺物実測図　(1/8)
B５地区　ＳＩ10

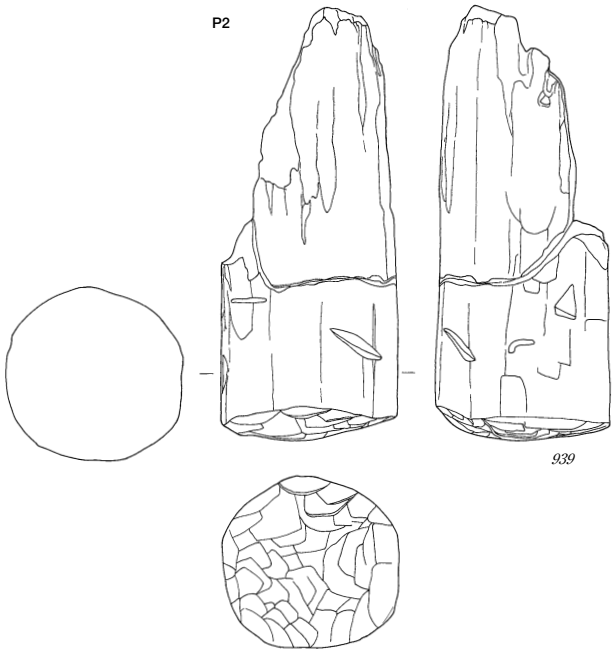


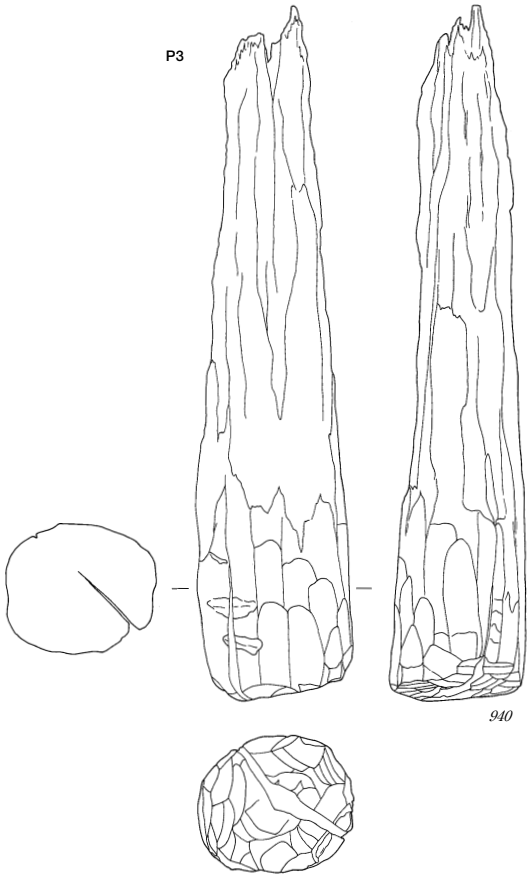


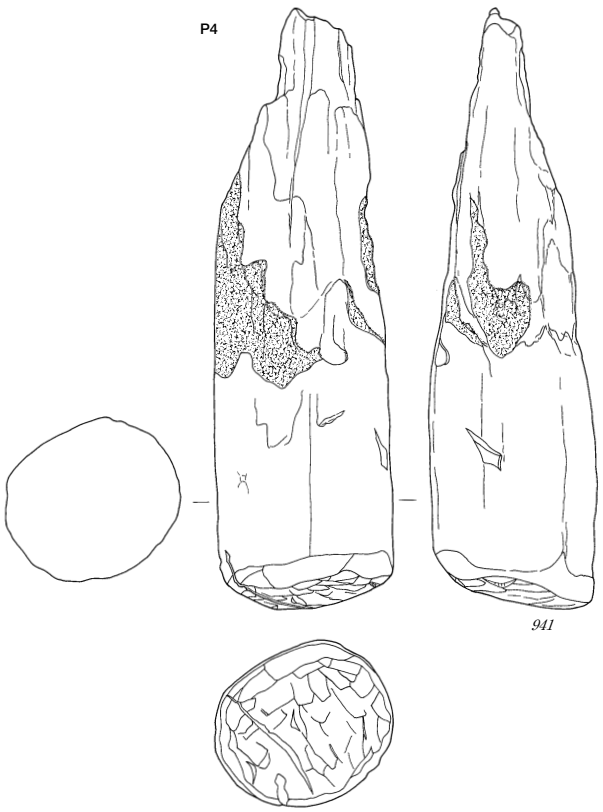


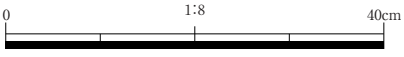
第134図　遺物実測図　(1/8)
Ｂ５地区　ＳＩ10



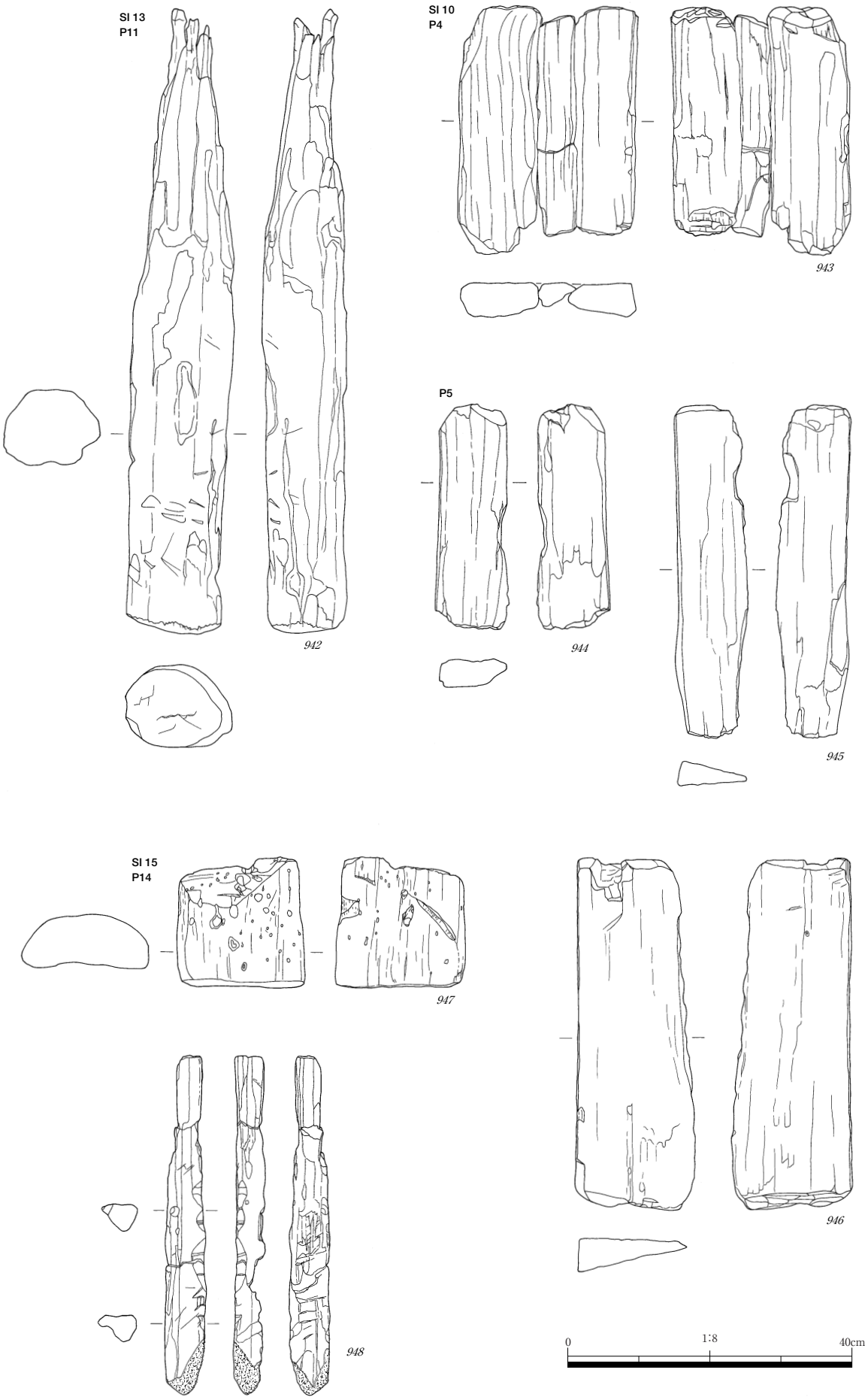






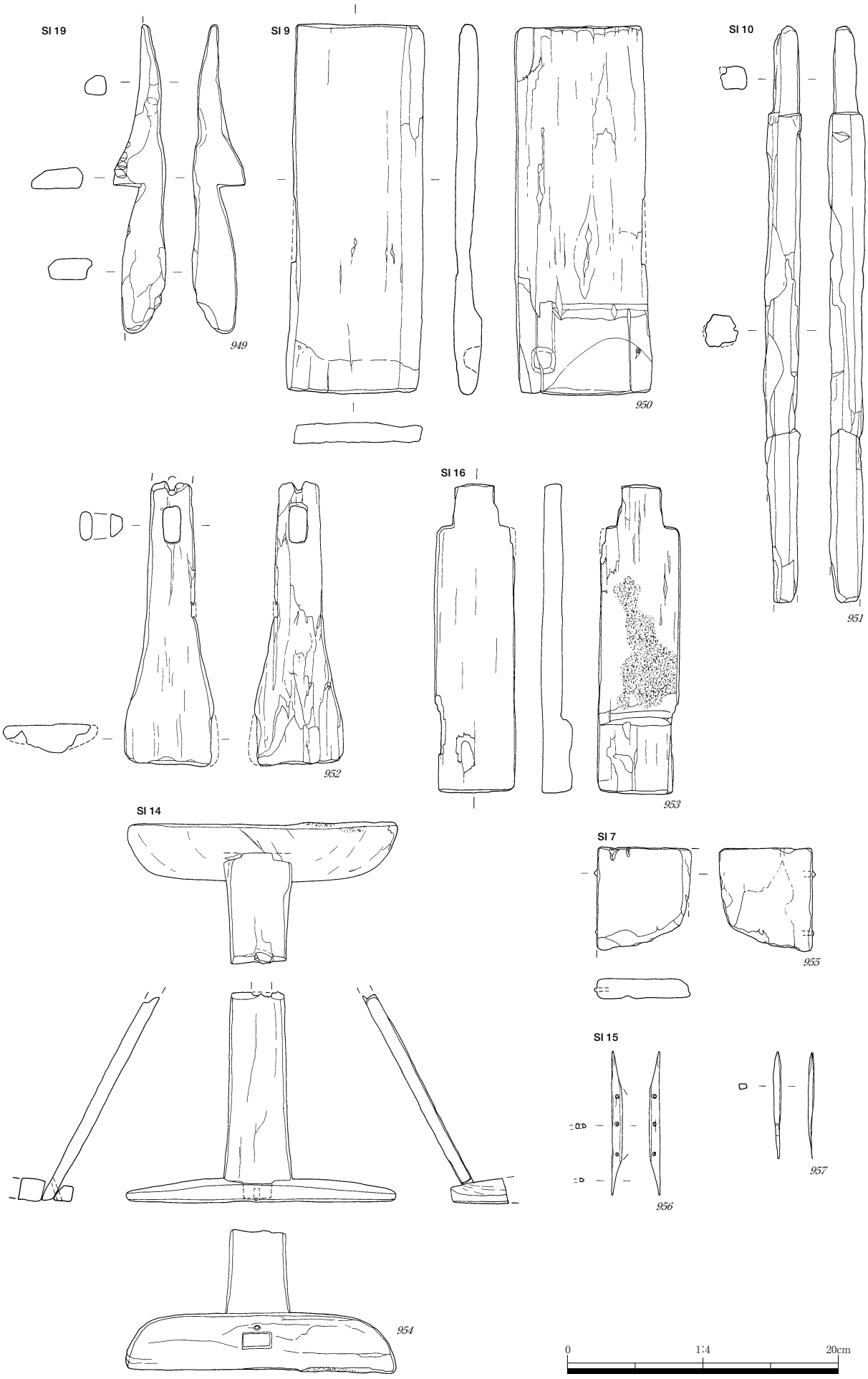


第135図　遺物実測図　(1/8)
B５地区　ＳＩ11



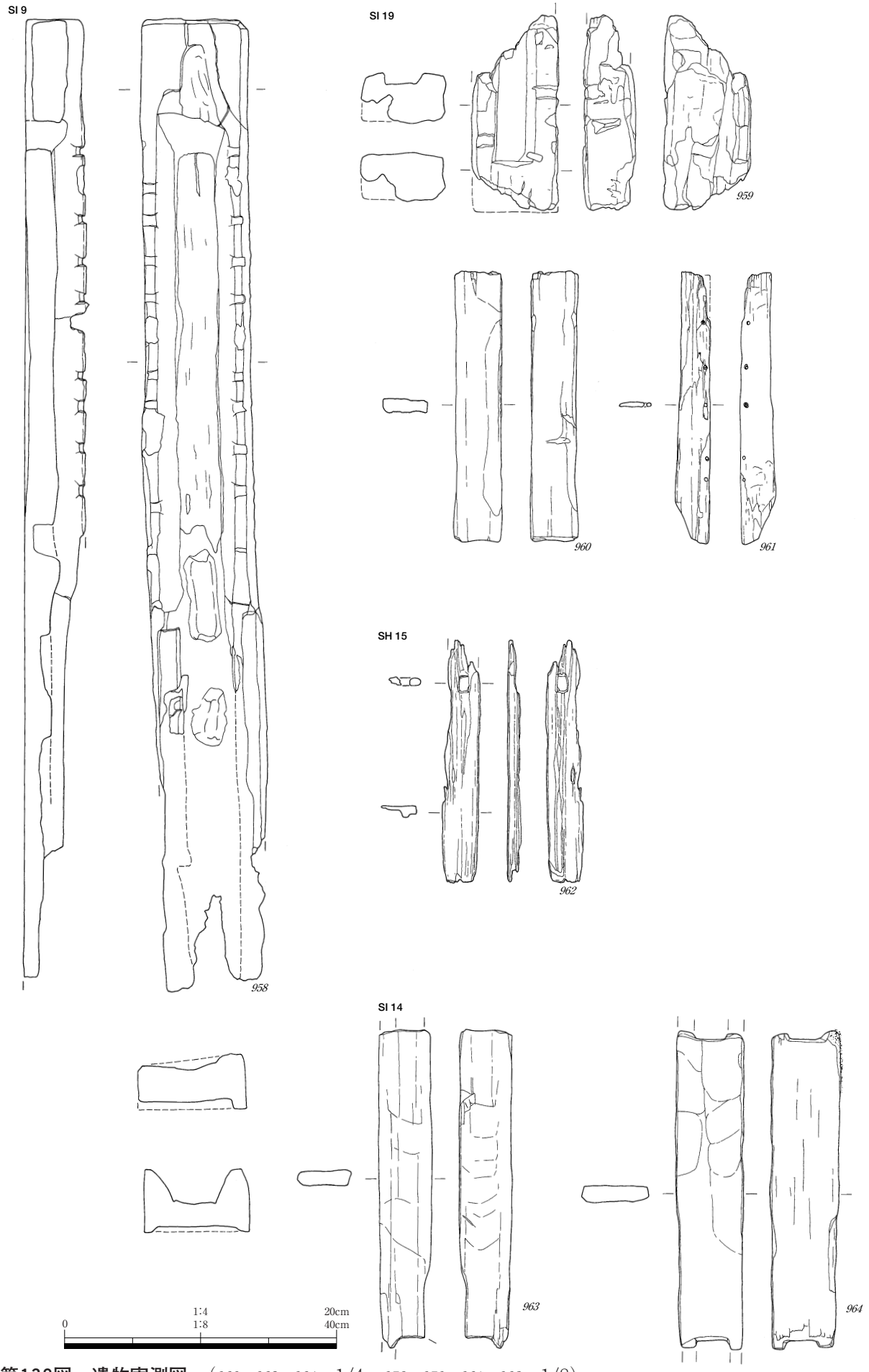
第136図　遺物実測図　(1/8)

Ｂ５地区　ＳＩ10　Ｐ４(*943*)　Ｐ５(*944～946*)
Ｂ６地区　ＳＩ13　Ｐ11(*942*)　ＳＩ15　Ｐ14(*947・948*)

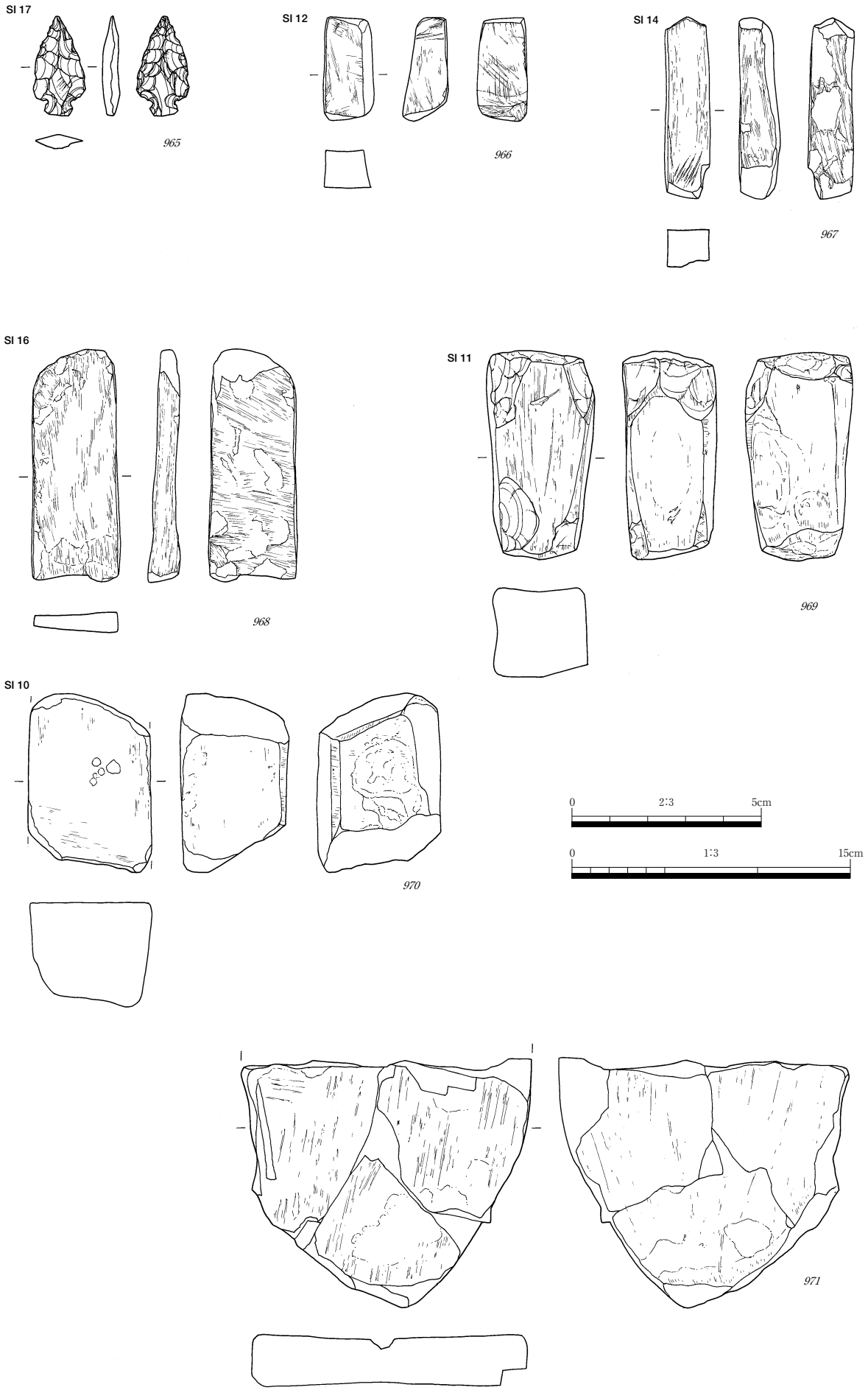


第137図　遺物実測図　(1/4)

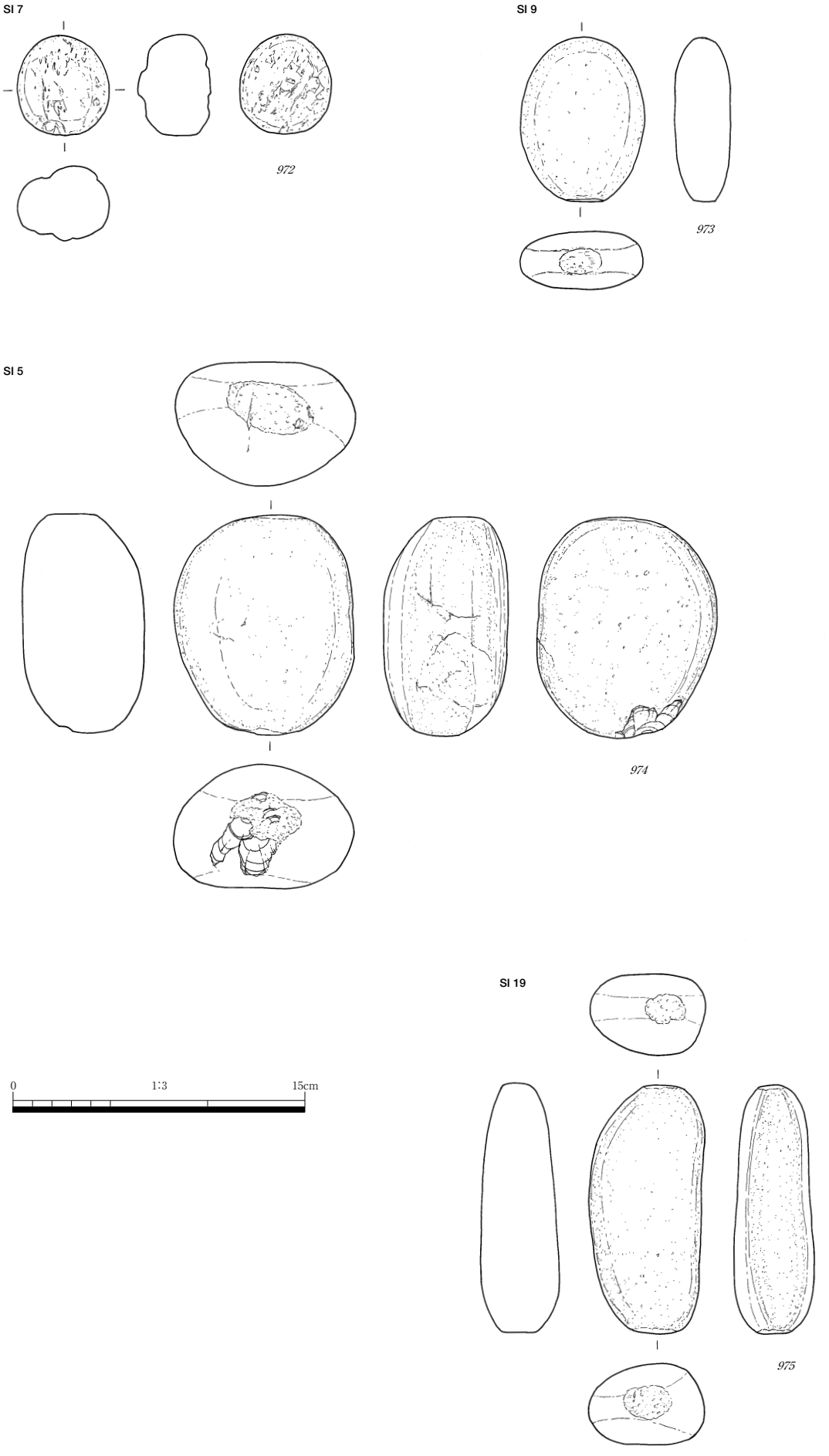
B地区　ＳＩ７(*955*・*957*)　ＳＩ９(*950*)　ＳＩ10(*951*・*952*)　ＳＩ14(*954*)　ＳＩ15(*956*)
ＳＩ16(*953*)　ＳＩ19(*949*)



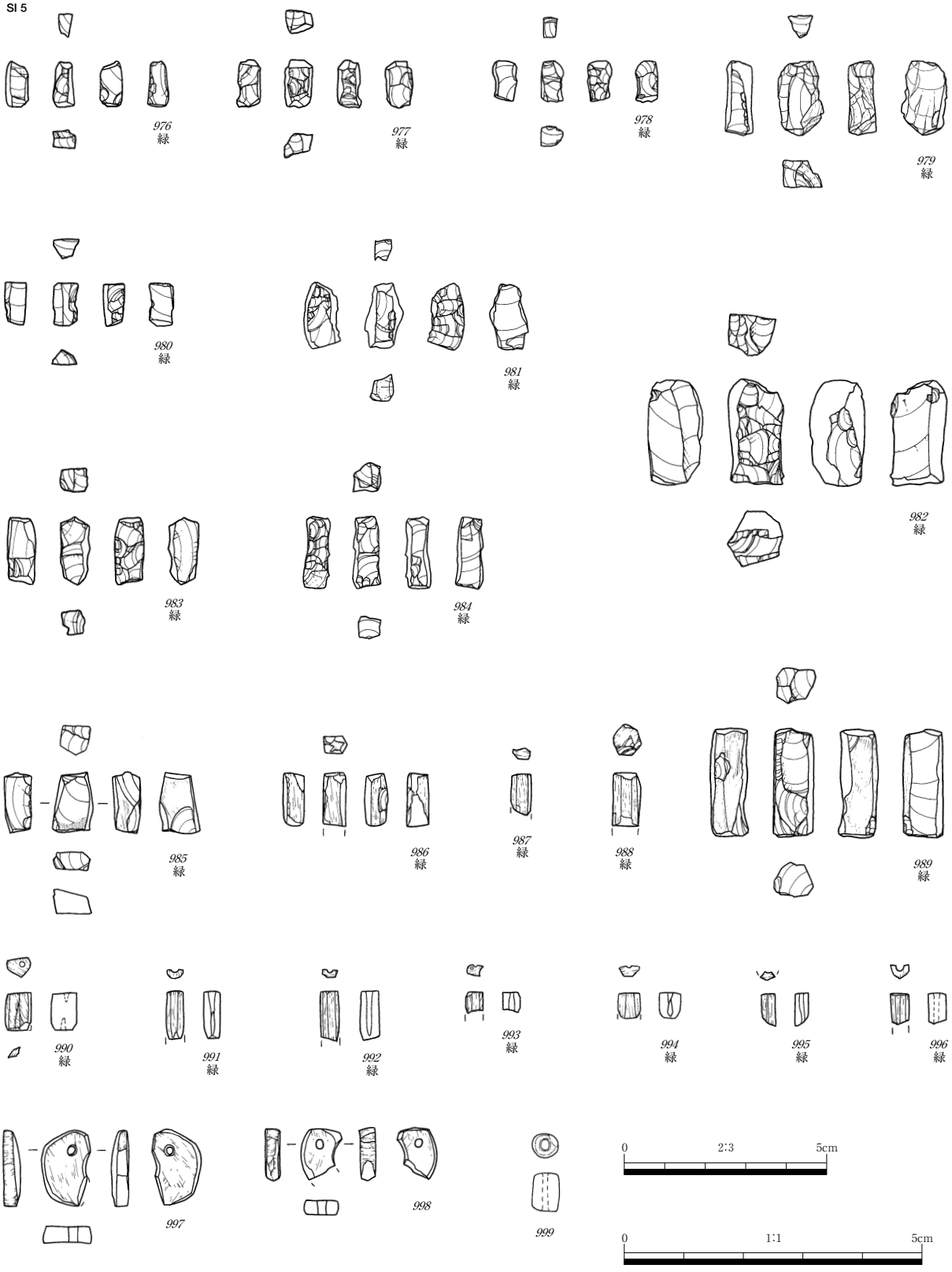
第138図　遺物実測図　(*960・963・964*　1/4, *958・959・961・962*　1/8)
B地区　ＳＩ９(*958*)　ＳＩ14(*963・964*)　ＳＨ15(*962*)　ＳＩ19(*959～961*)



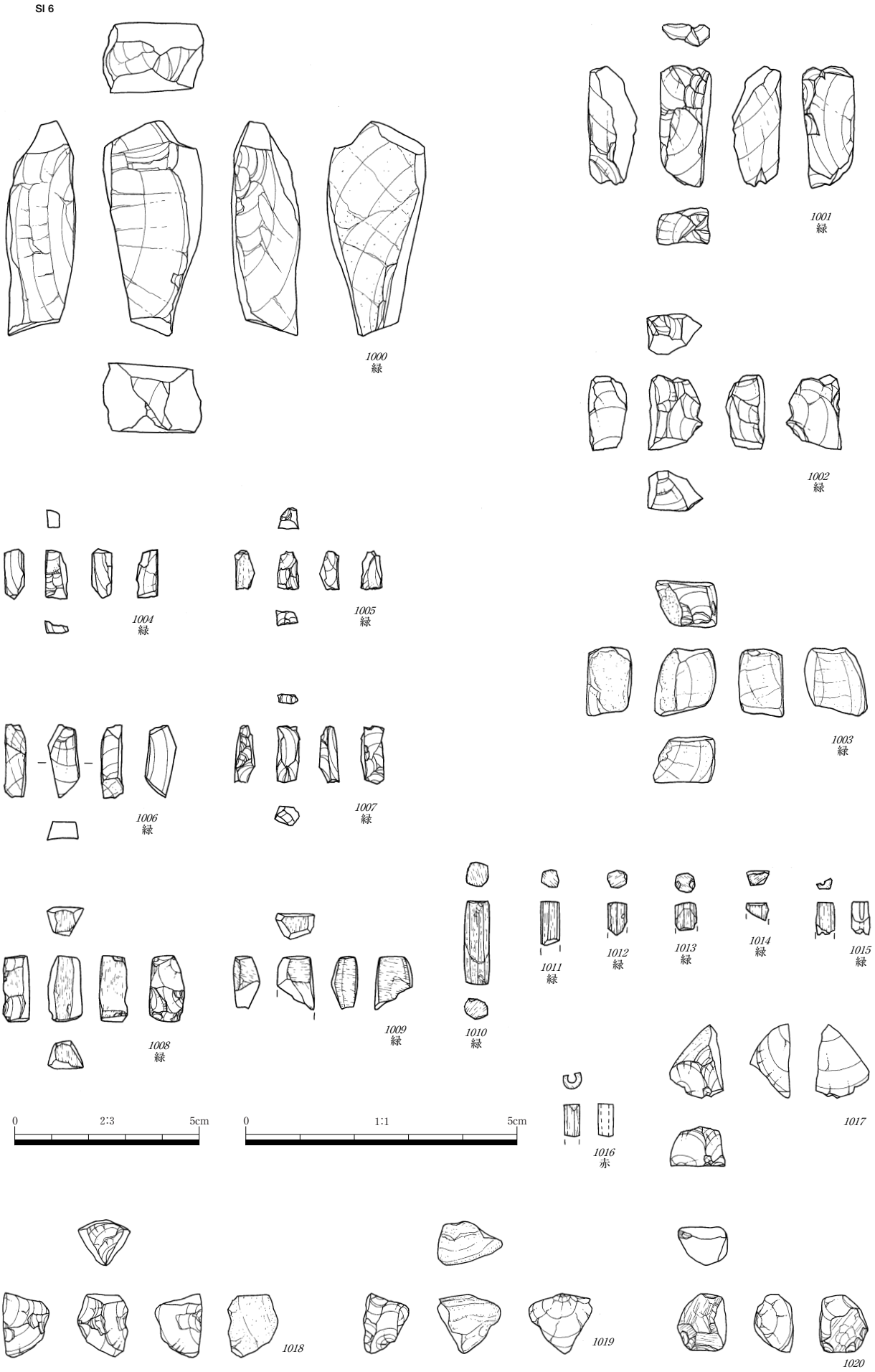
第139図　遺物実測図　(*965*　2/3, *966*～*971*　1/3)
B地区　ＳＩ10(*970*・*971*)　ＳＩ11(*969*)　ＳＩ12(*966*)　ＳＩ14(*967*)　ＳＩ16(*968*)　ＳＩ17(*965*)



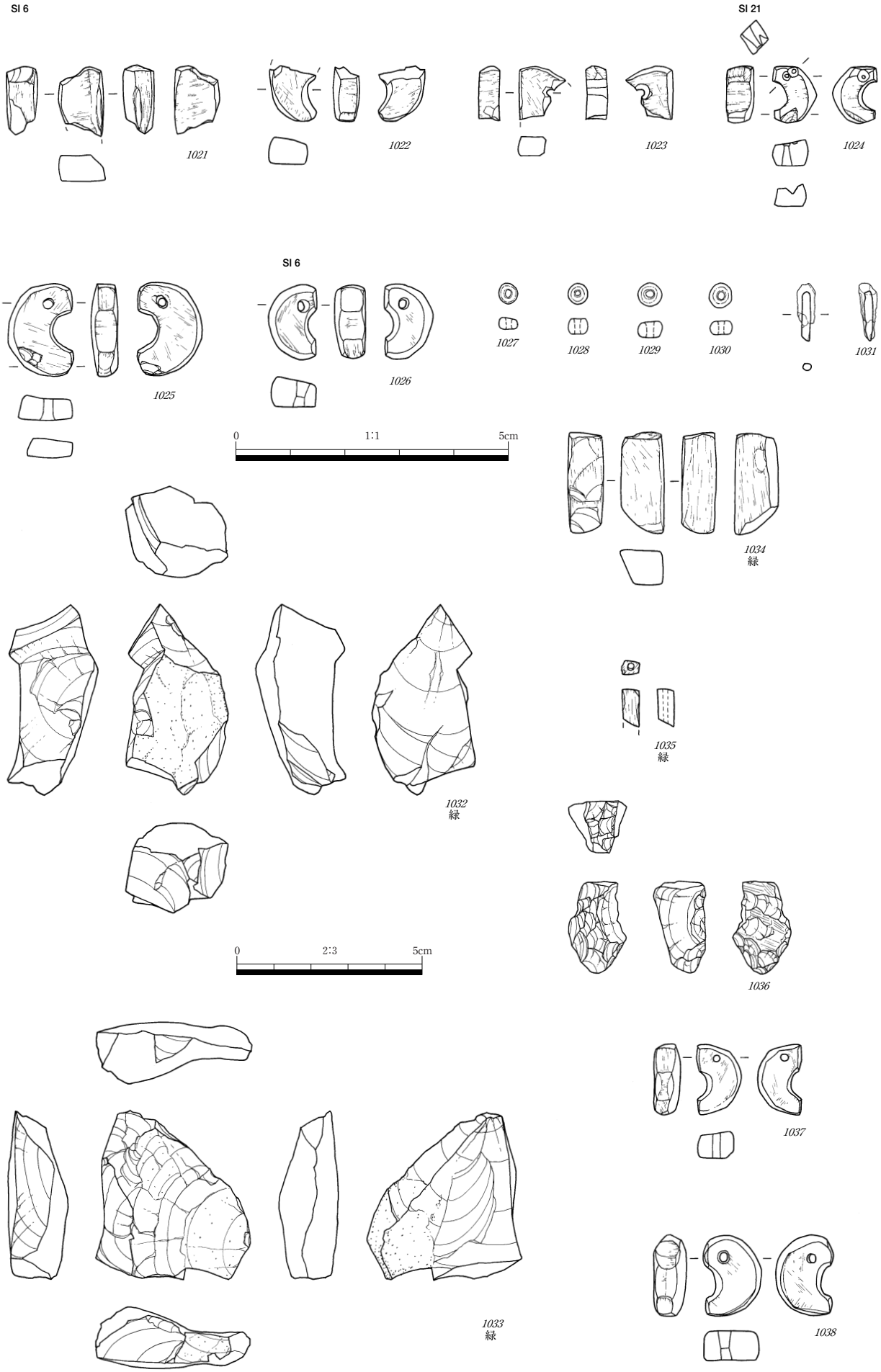
第140図　遺物実測図　(1/3)
Ｂ地区　ＳＩ５(*974*)　ＳＩ７(*972*)　ＳＩ９(*973*)　ＳＩ19(*975*)



第141図　遺物実測図　（*985～988・990～999*　1/1，*976～984・989*　2/3）
B３地区　ＳＩ５

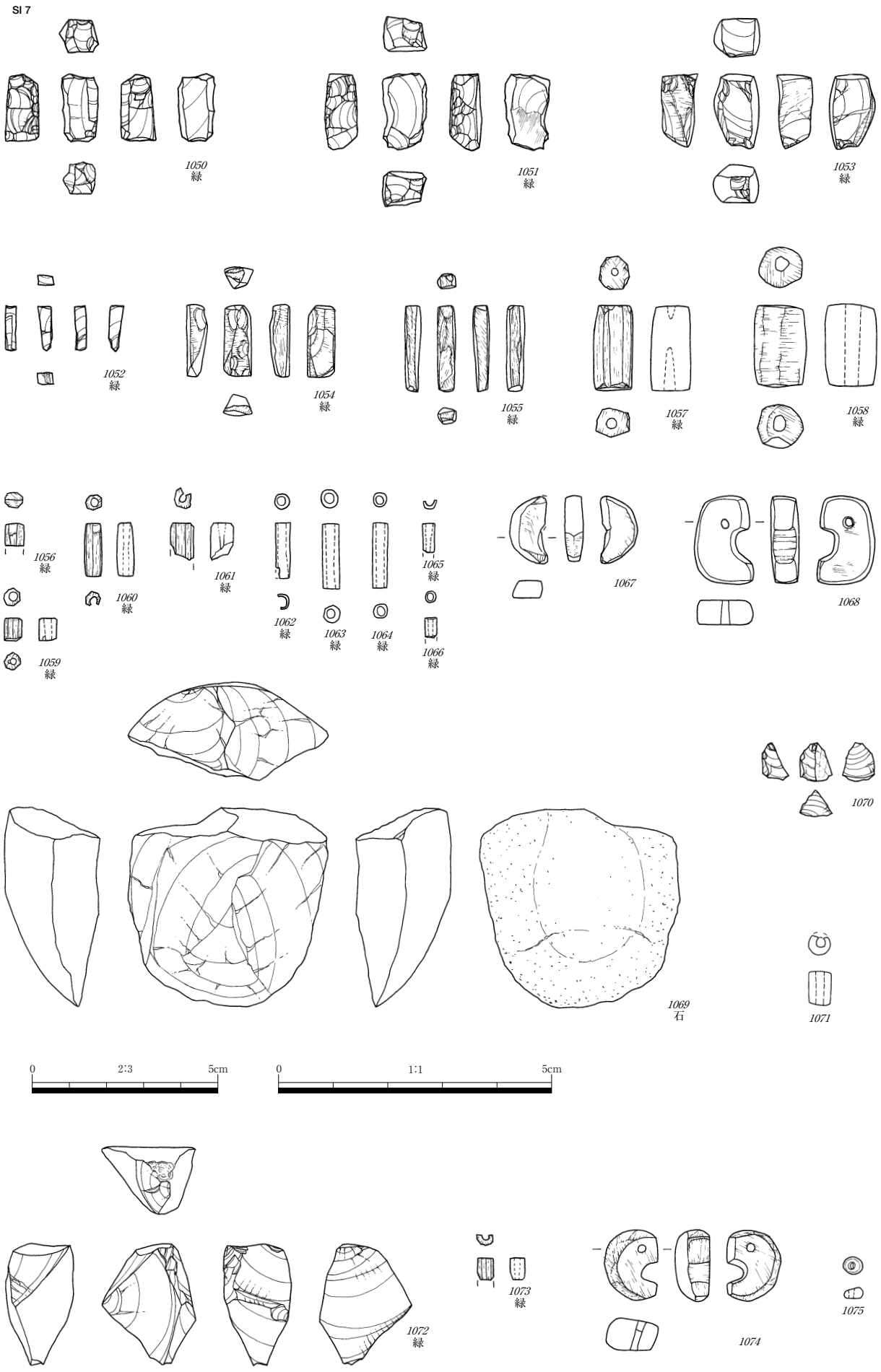


第142図　遺物実測図　（*1008～1016*　1/1，*1000～1007・1017～1020*　2/3）
Ｂ５地区　ＳＩ６

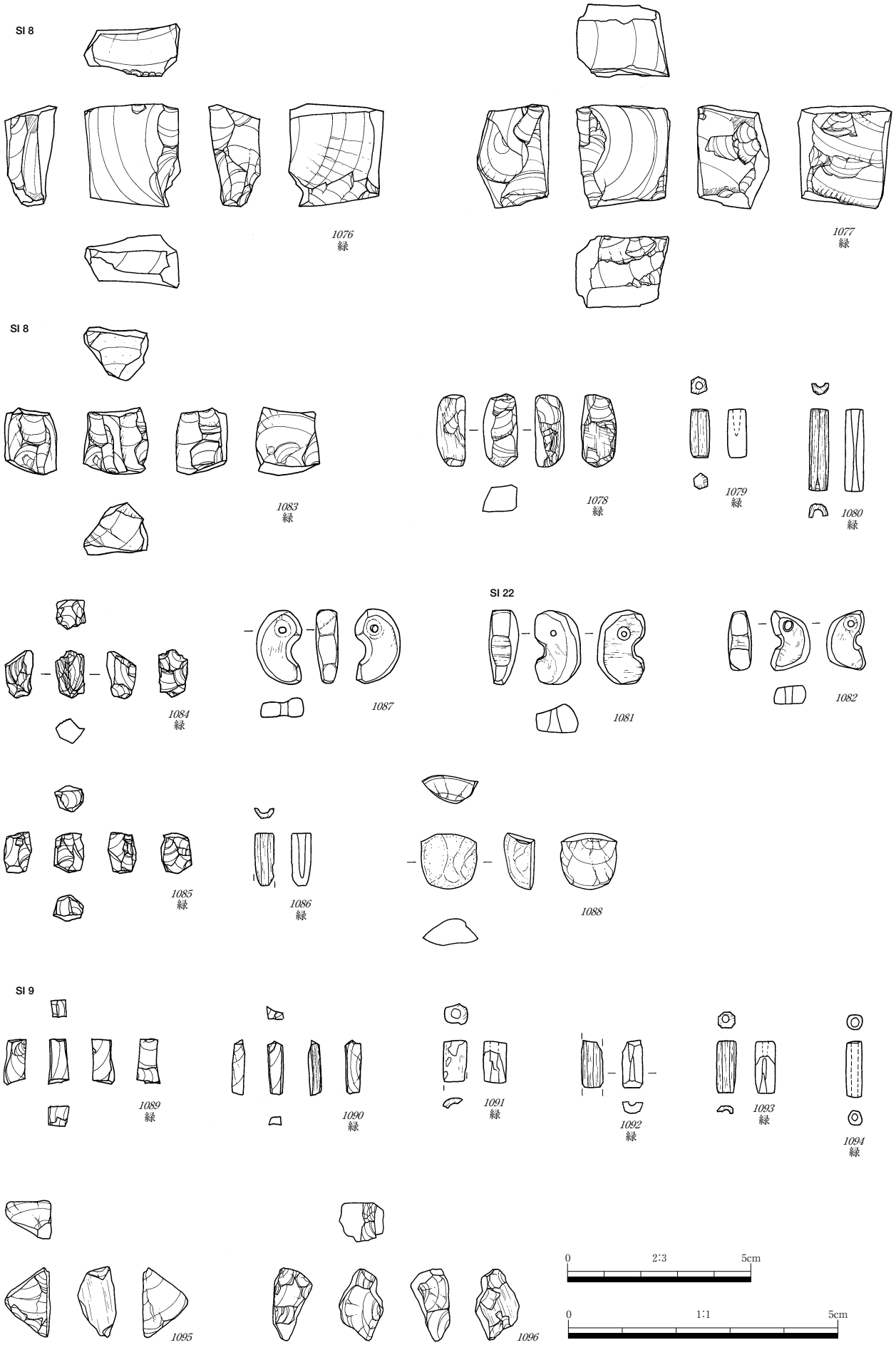


第143図　遺物実測図　（*1021～1031・1034・1035・1037・1038*　1/1，*1032・1033・1036*　2/3）
B５地区　ＳＩ６（*1021～1023・1026～1038*）
B６地区　ＳＩ21（*1024・1025*）

第144図　遺物実測図　(2/3)
Ｂ５地区　ＳＩ７



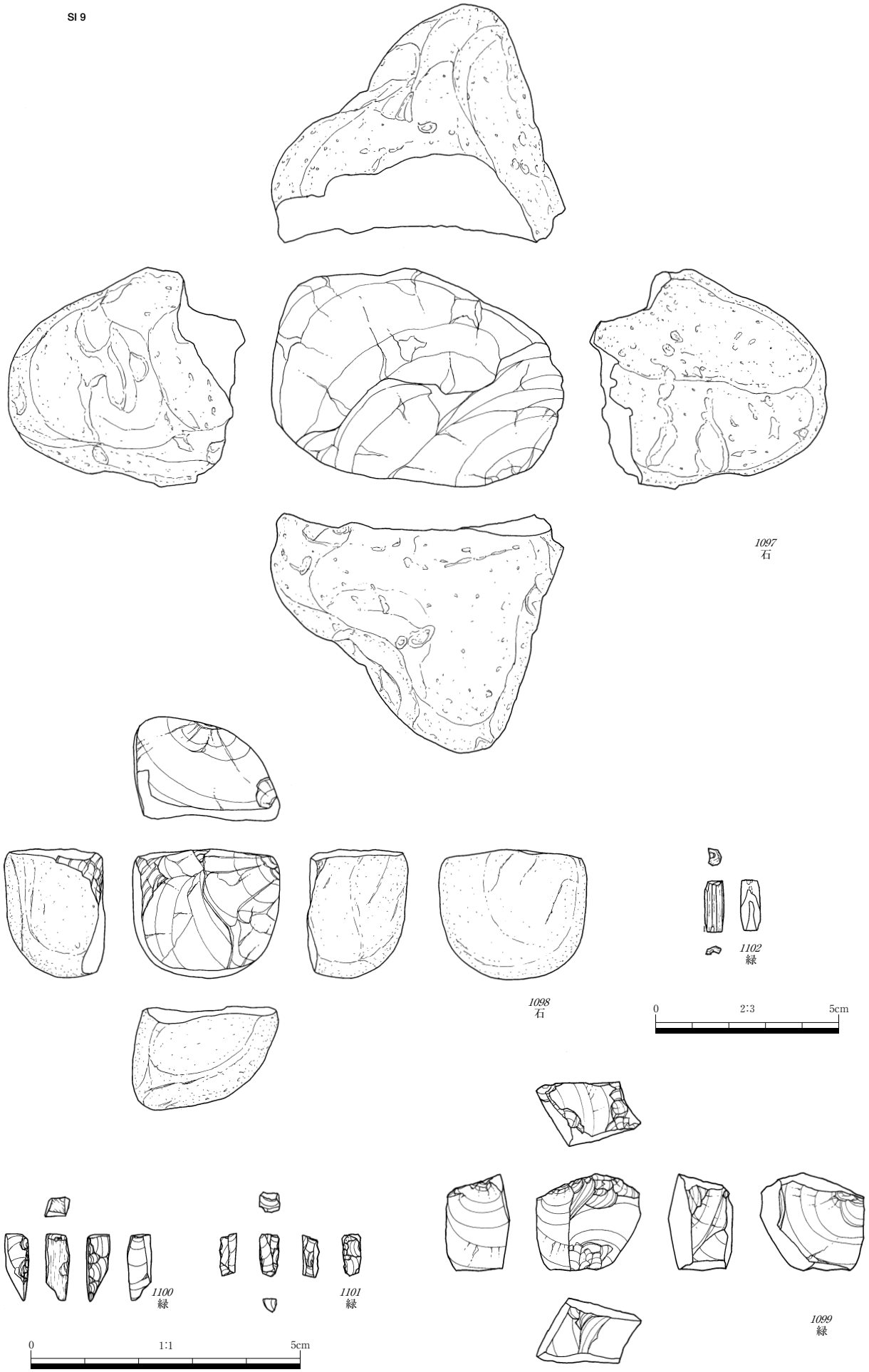
第145図　遺物実測図　（*1053～1068・1071・1073～1075*　1/1，*1050～1052・1069・1070・1072*　2/3）
B５地区　ＳＩ７



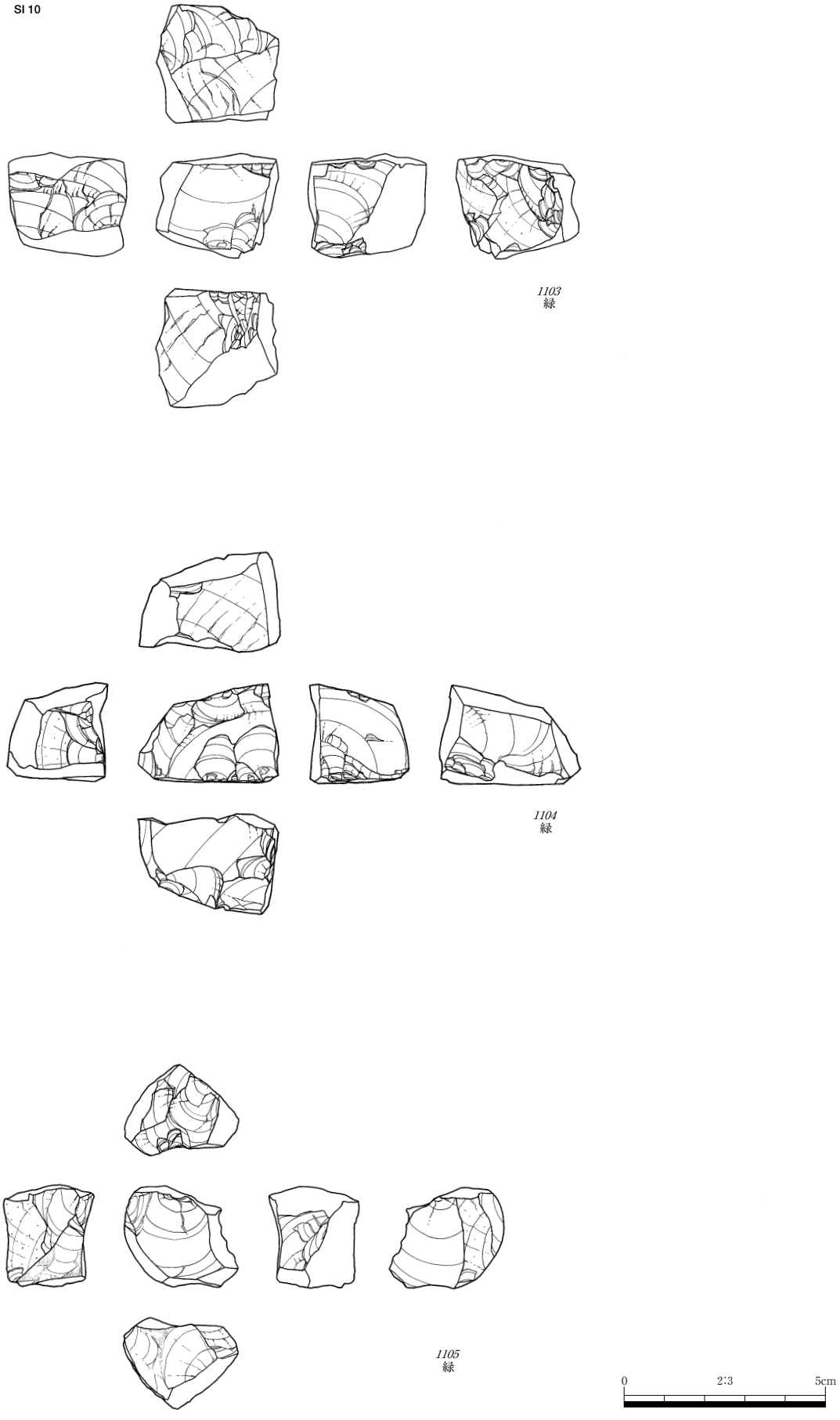
第146図　遺物実測図　(*1078～1082・1086・1087・1091～1094*　1/1, *1076・1077・1083～1085・1088～1090・1095・1096*　2/3)

Ｂ５地区　ＳＩ８(*1076～1080・1083～1088*)　ＳＩ９(*1089～1096*)

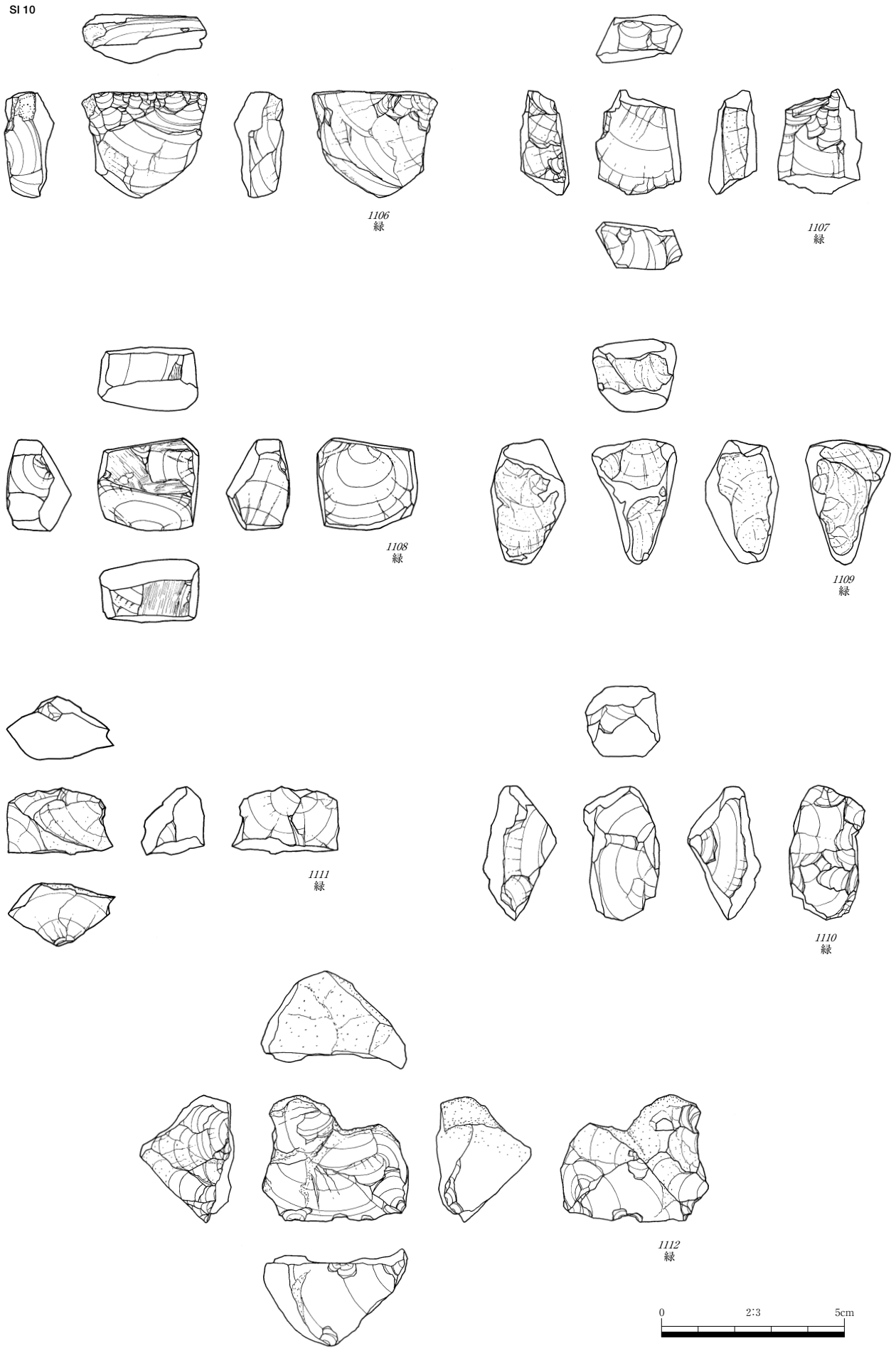
Ｂ６地区　ＳＩ22(*1081・1082*)



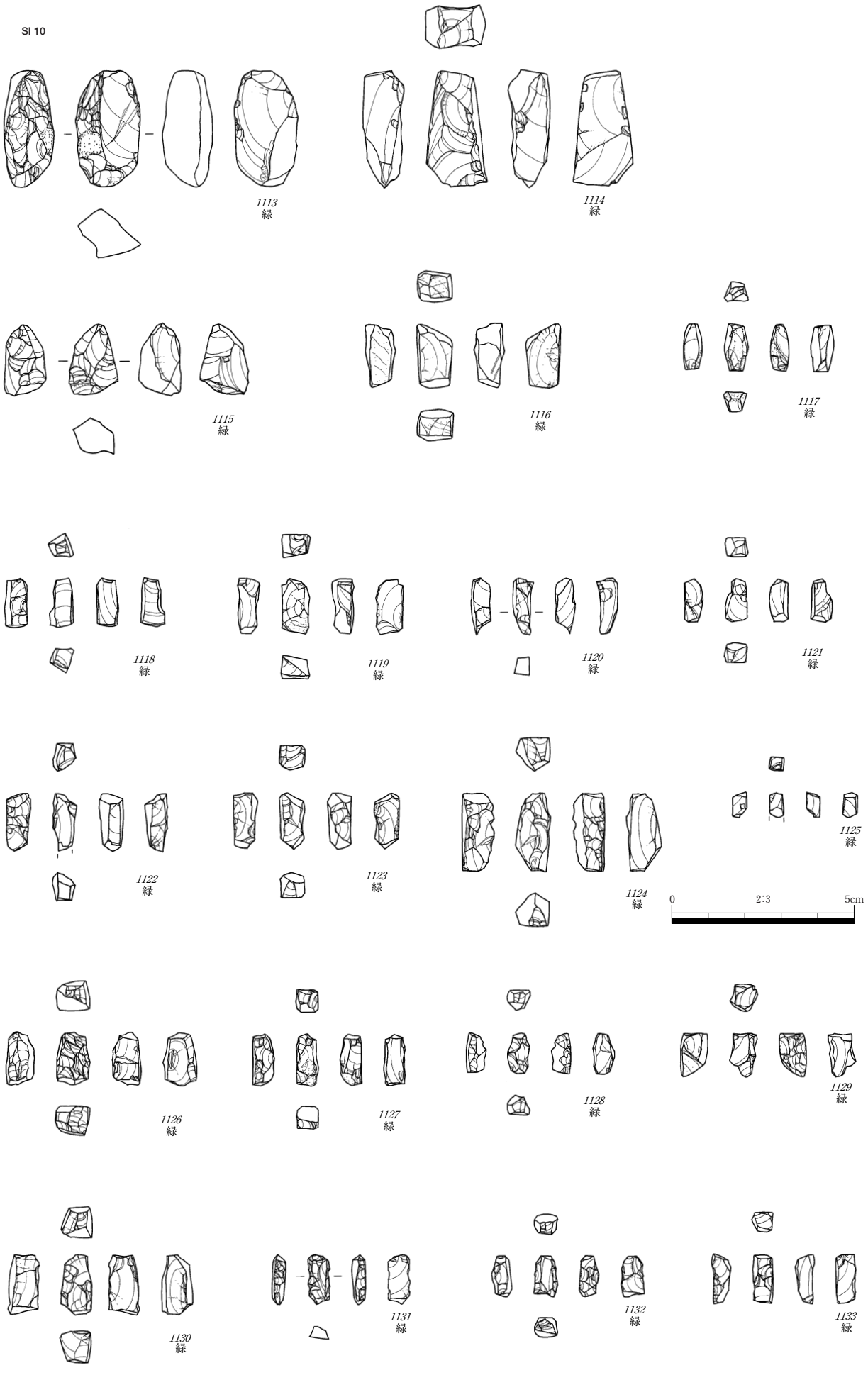
第147図　遺物実測図　（*1100・1102*　1/1，*1097～1099・1101*　2/3）
B５地区　ＳＩ９



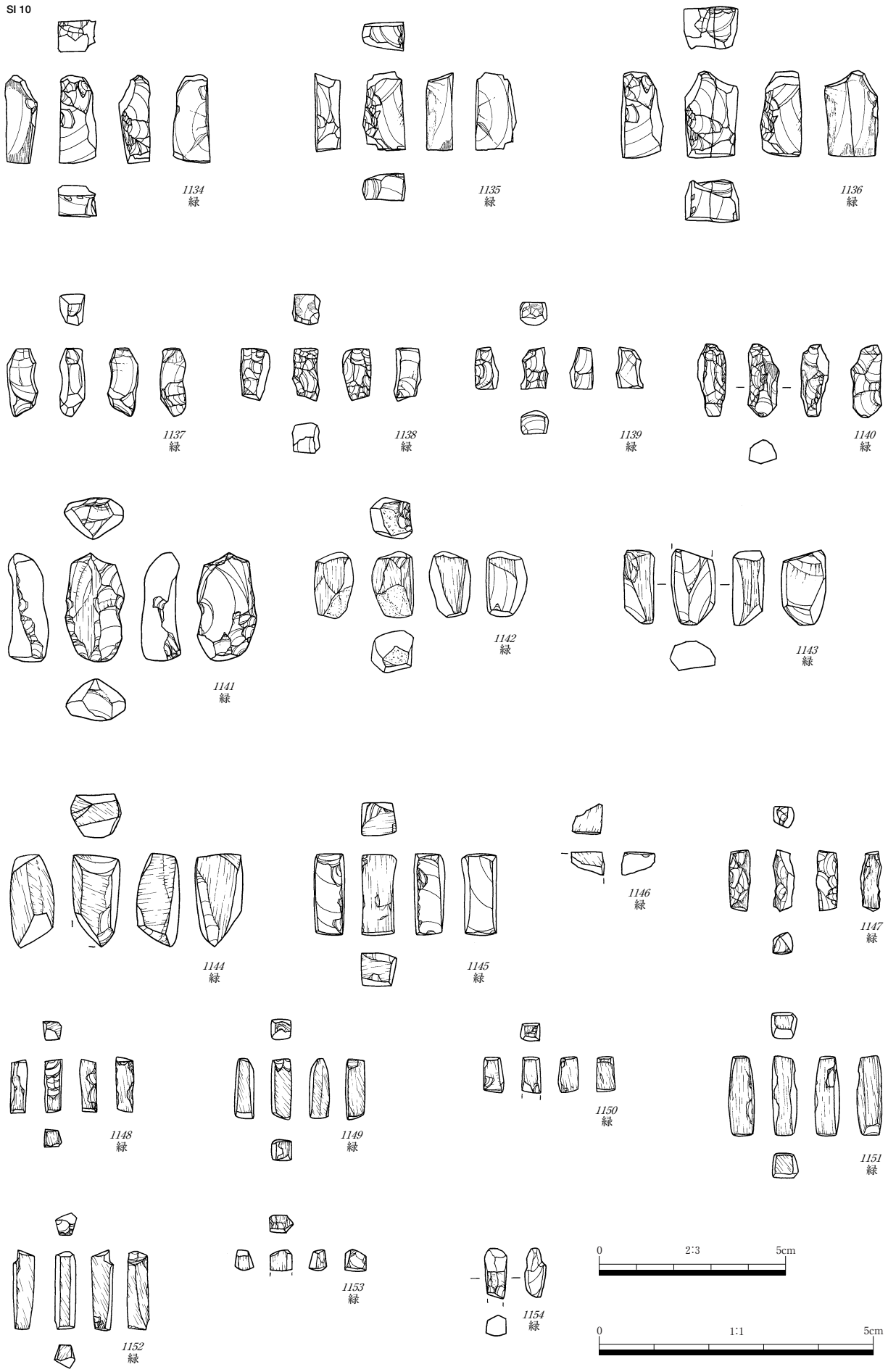
第148図　遺物実測図　(2/3)
Ｂ５地区　ＳＩ10



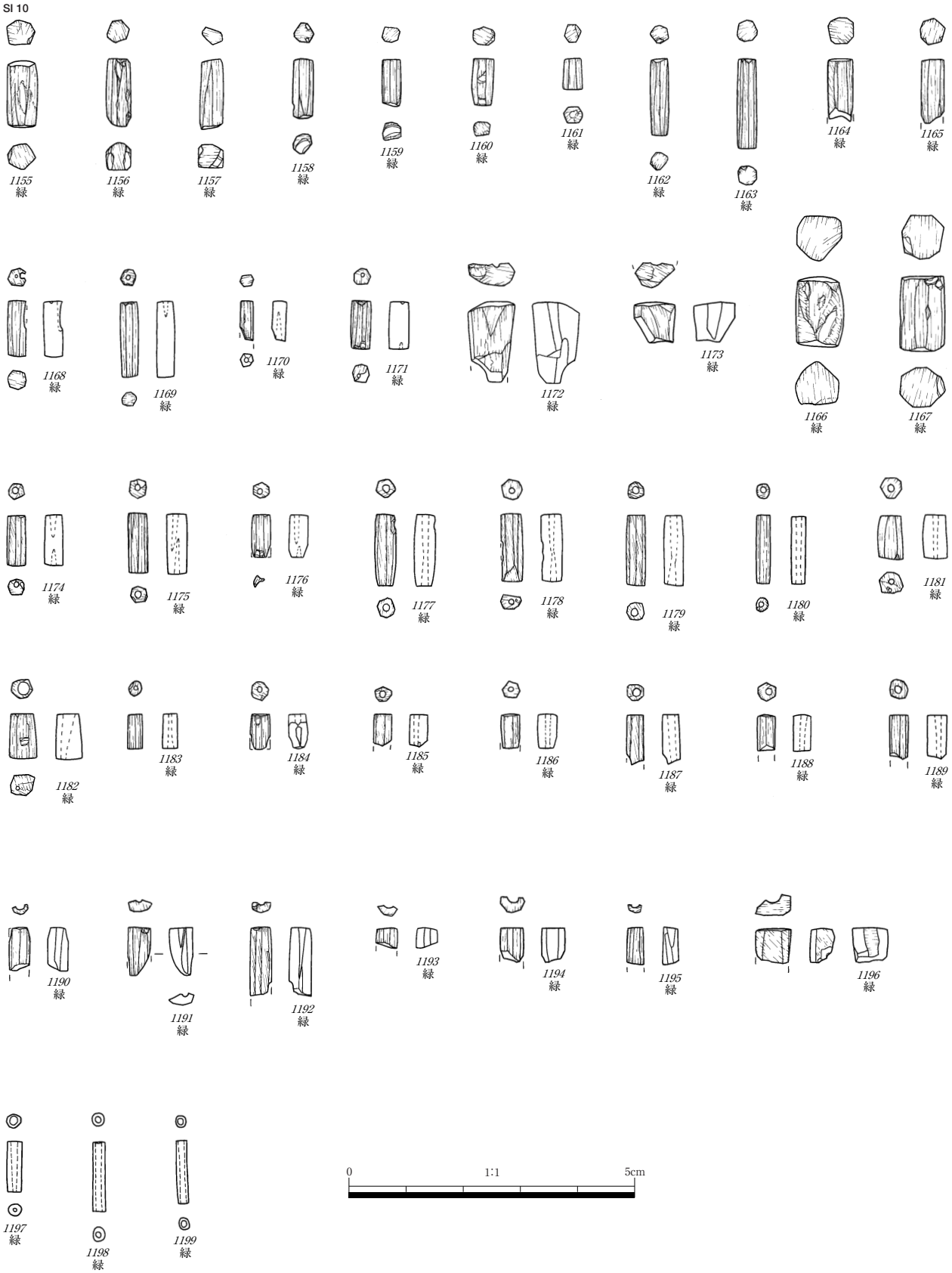
第149図　遺物実測図　(2/3)
B５地区　ＳＩ10



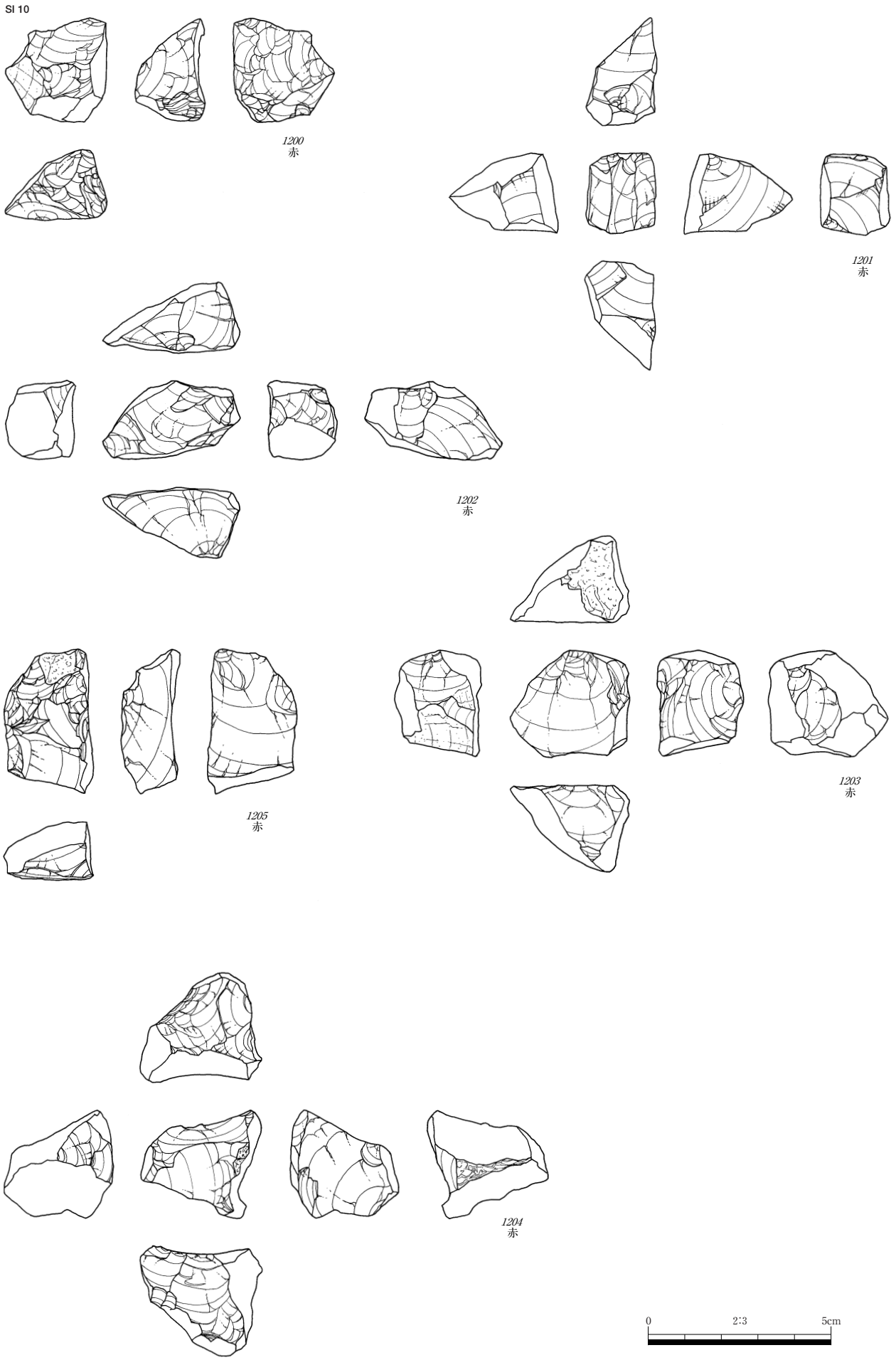
第150図　遺物実測図　(2/3)
Ｂ５地区　ＳＩ10



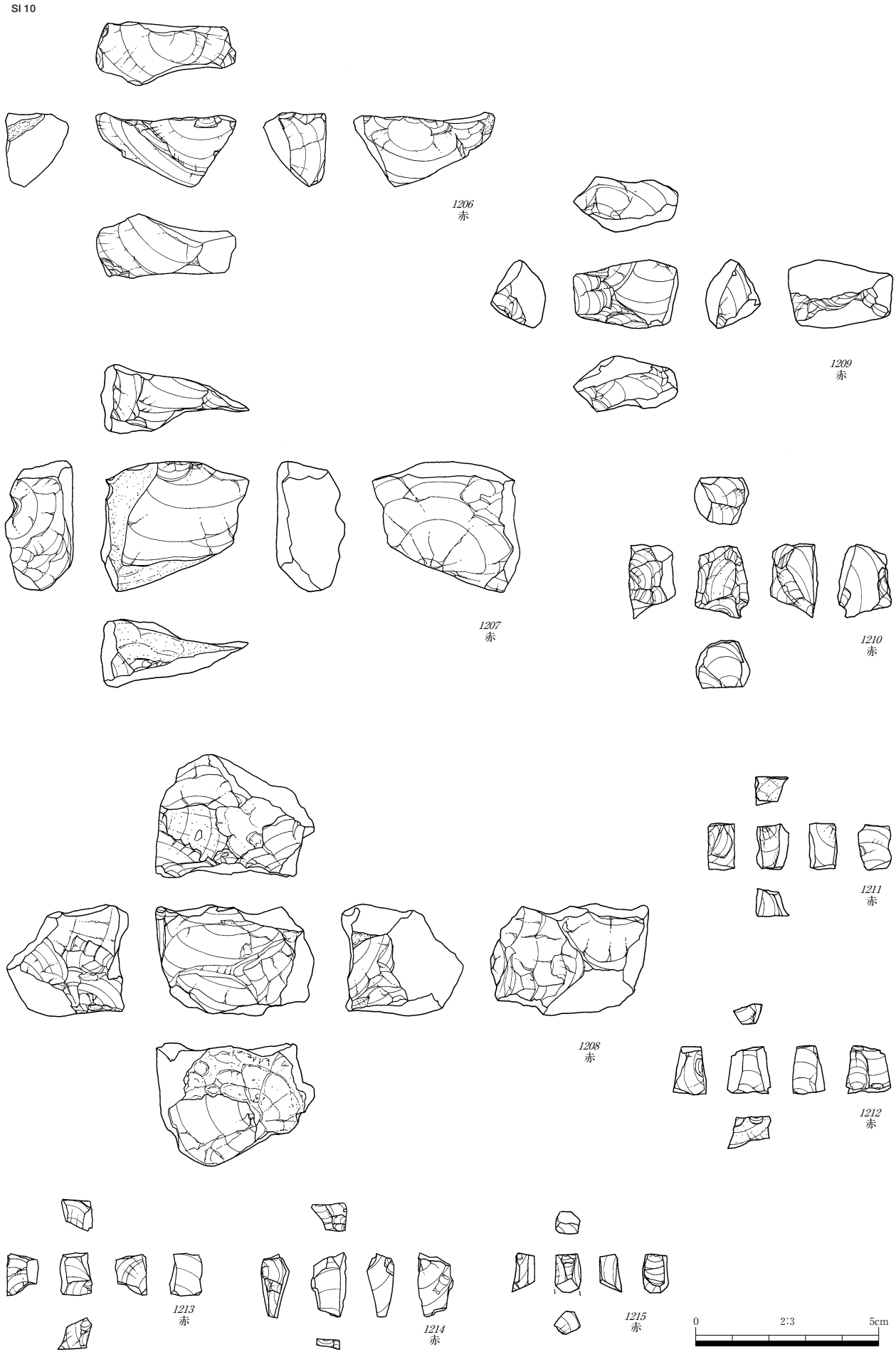
第151図　遺物実測図　（*1141～1146・1148～1154*　1/1，*1134～1140・1147*　2/3）
B５地区　ＳＩ10



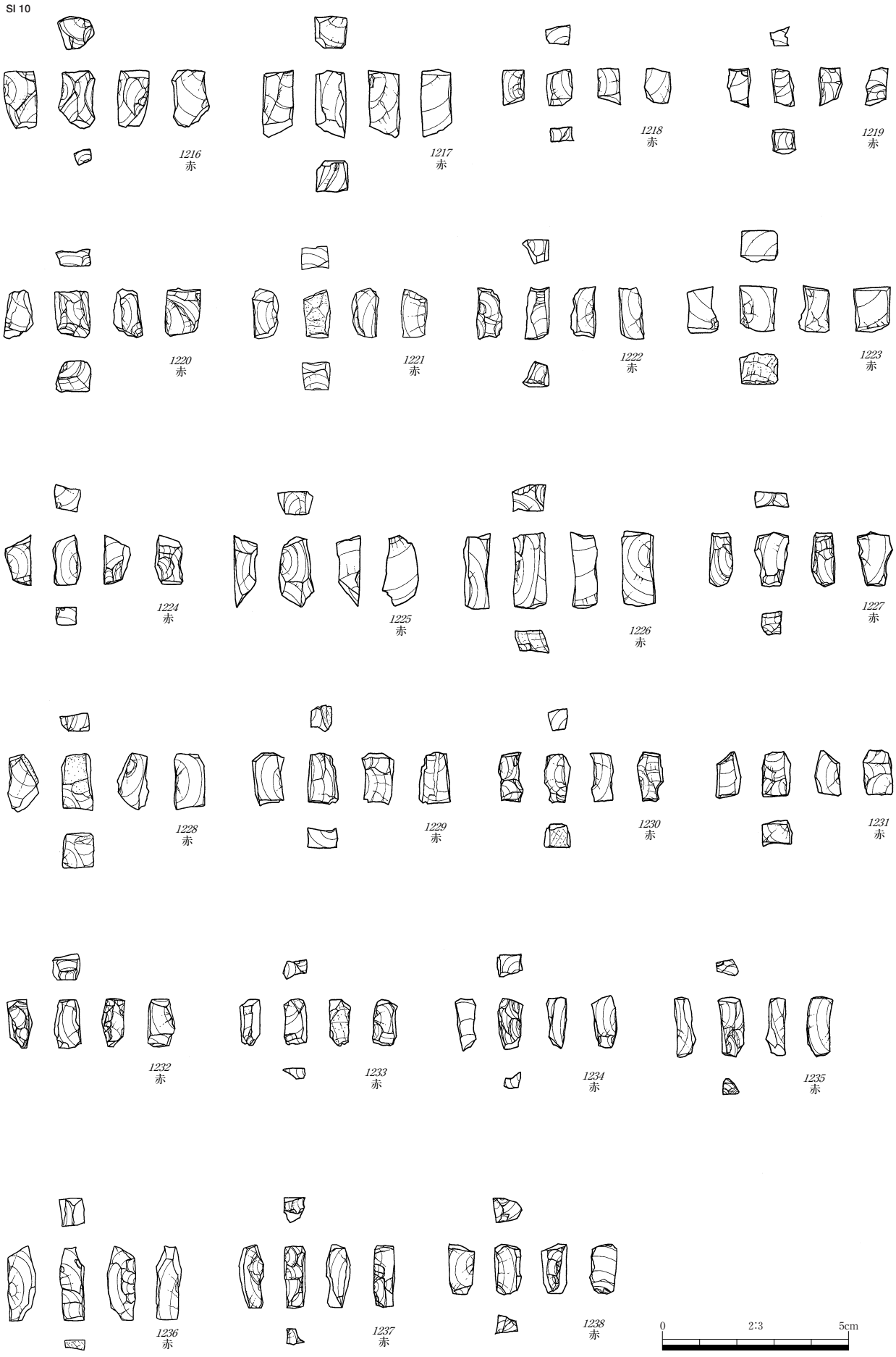
第152図　遺物実測図　(1/1)
Ｂ５地区　ＳＩ10



第153図　遺物実測図　(2/3)
B５地区　ＳＩ10

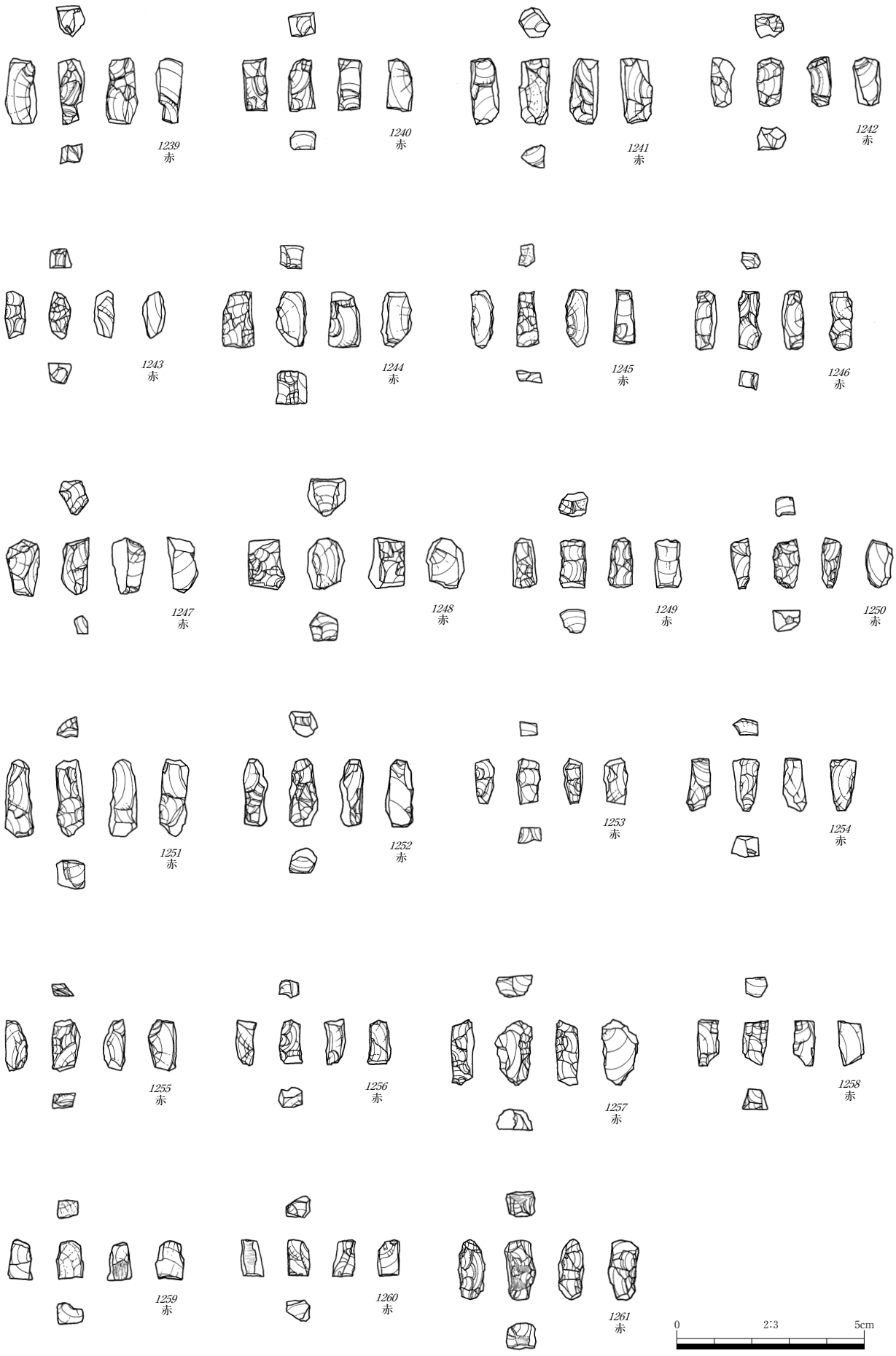


第154図　遺物実測図　(2/3)
Ｂ５地区　ＳＩ10

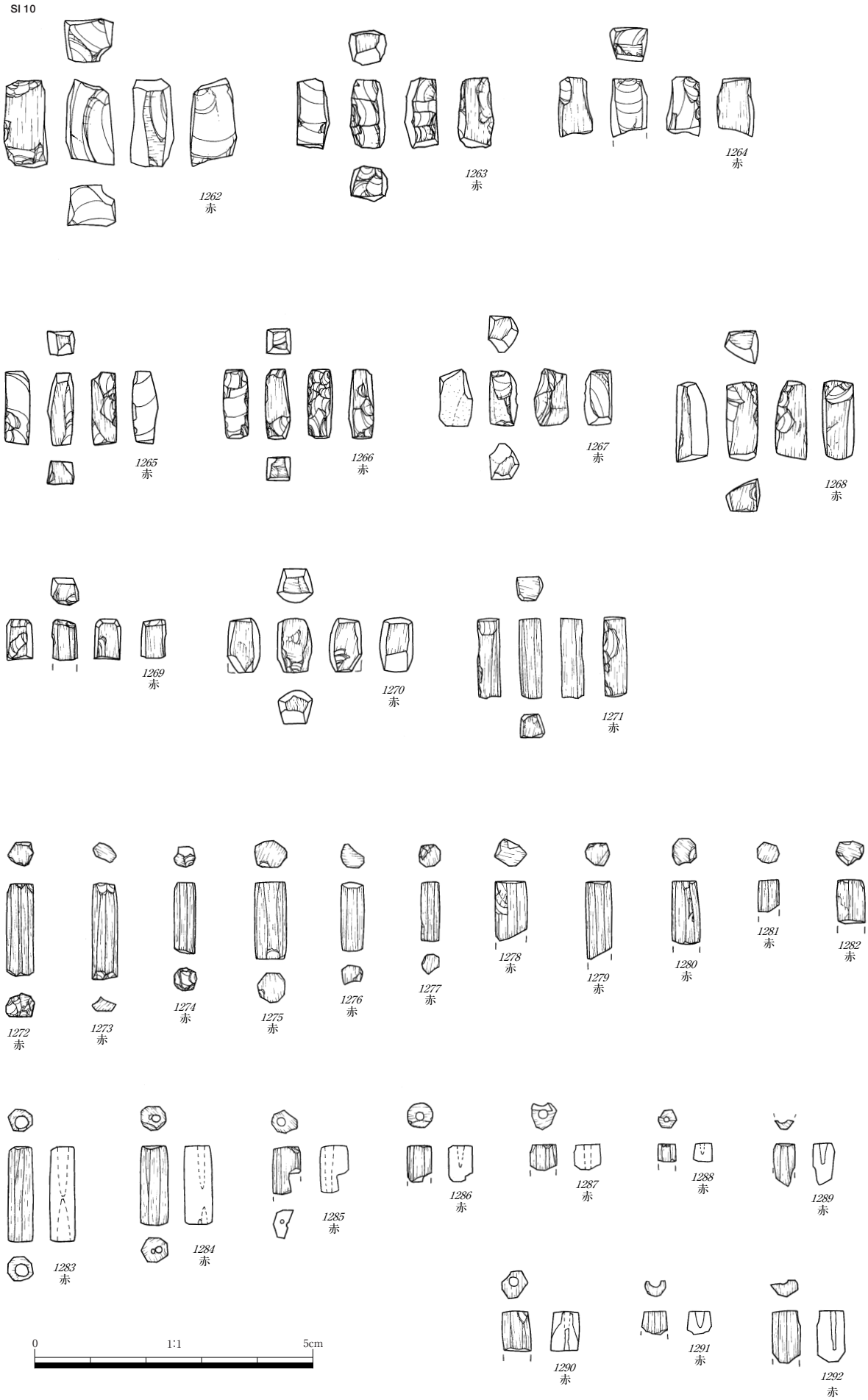


第155図　遺物実測図　(2/3)
B５地区　ＳＩ10

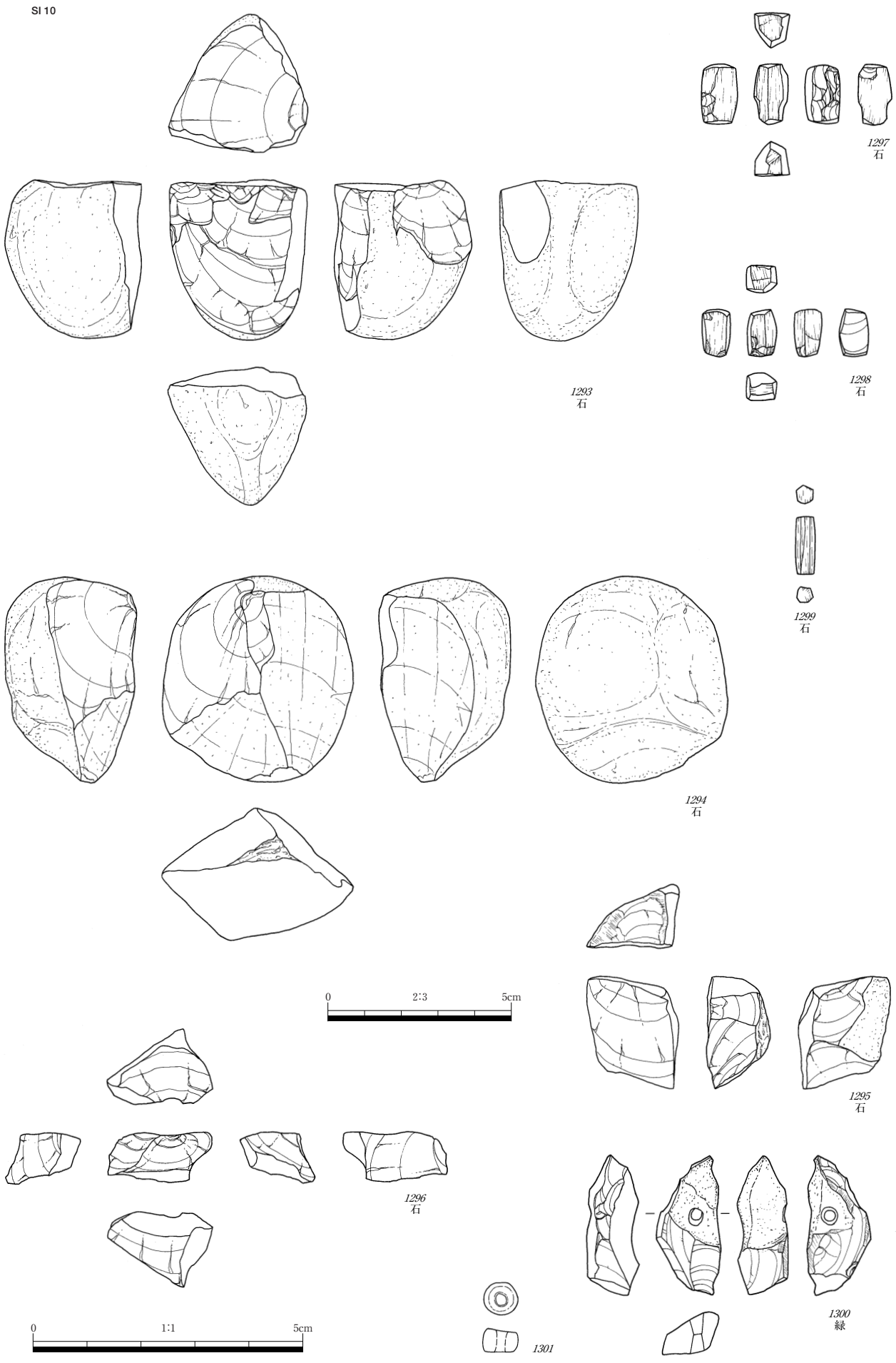
SI 10



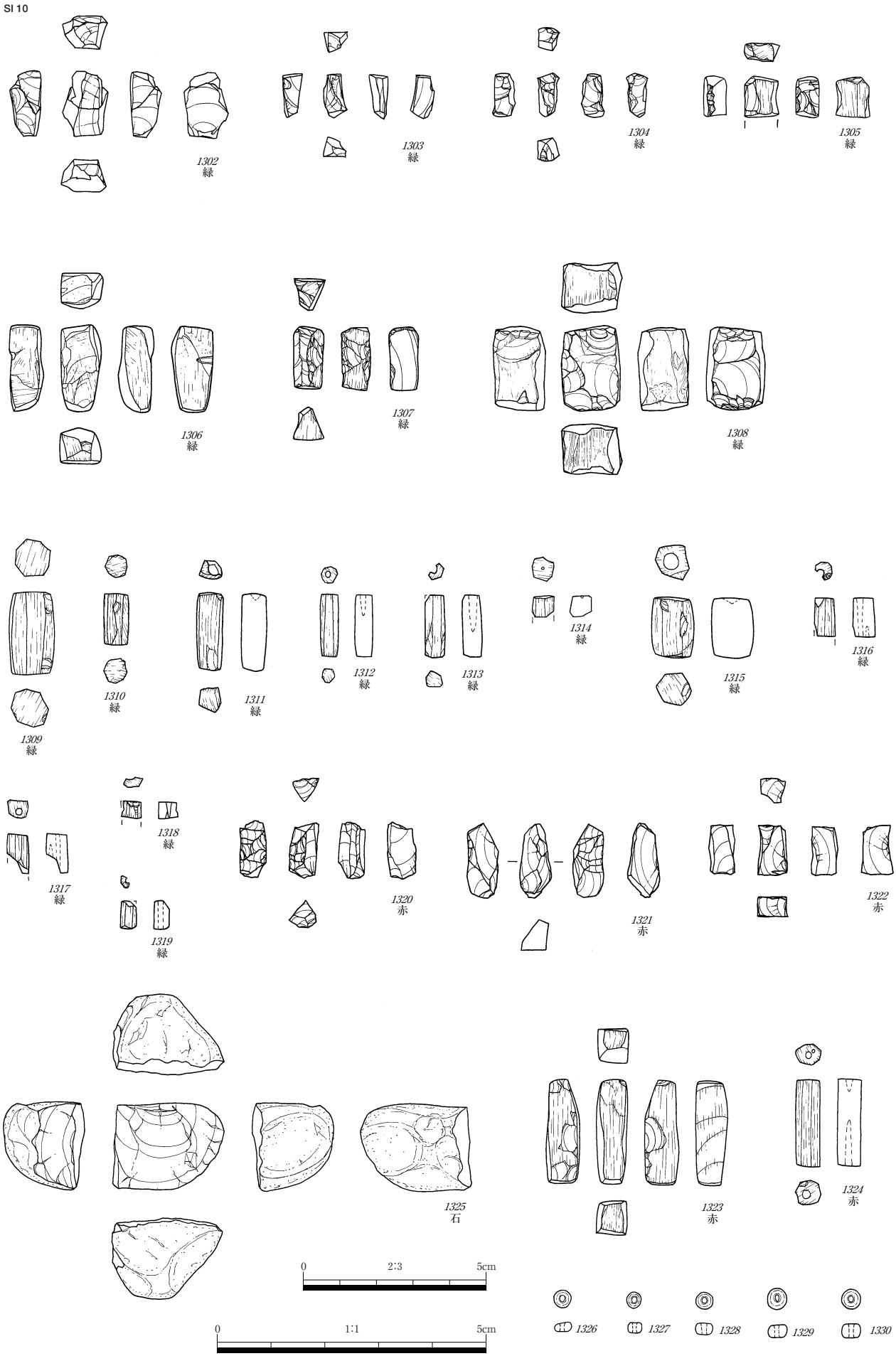
第156図　遺物実測図　(2/3)
Ｂ５地区　ＳＩ10



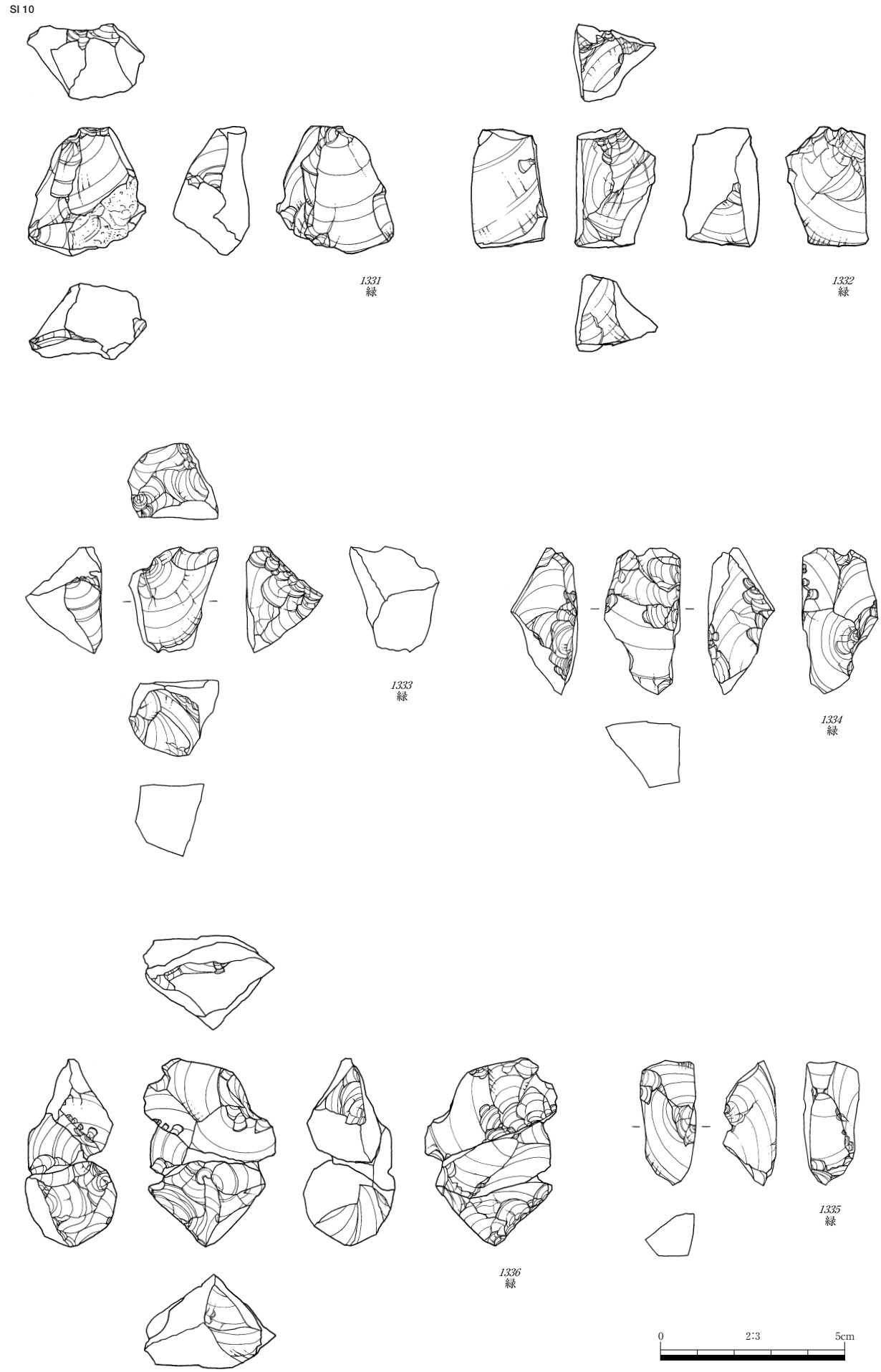
第157図　遺物実測図　(1/1)
B５地区　ＳＩ10



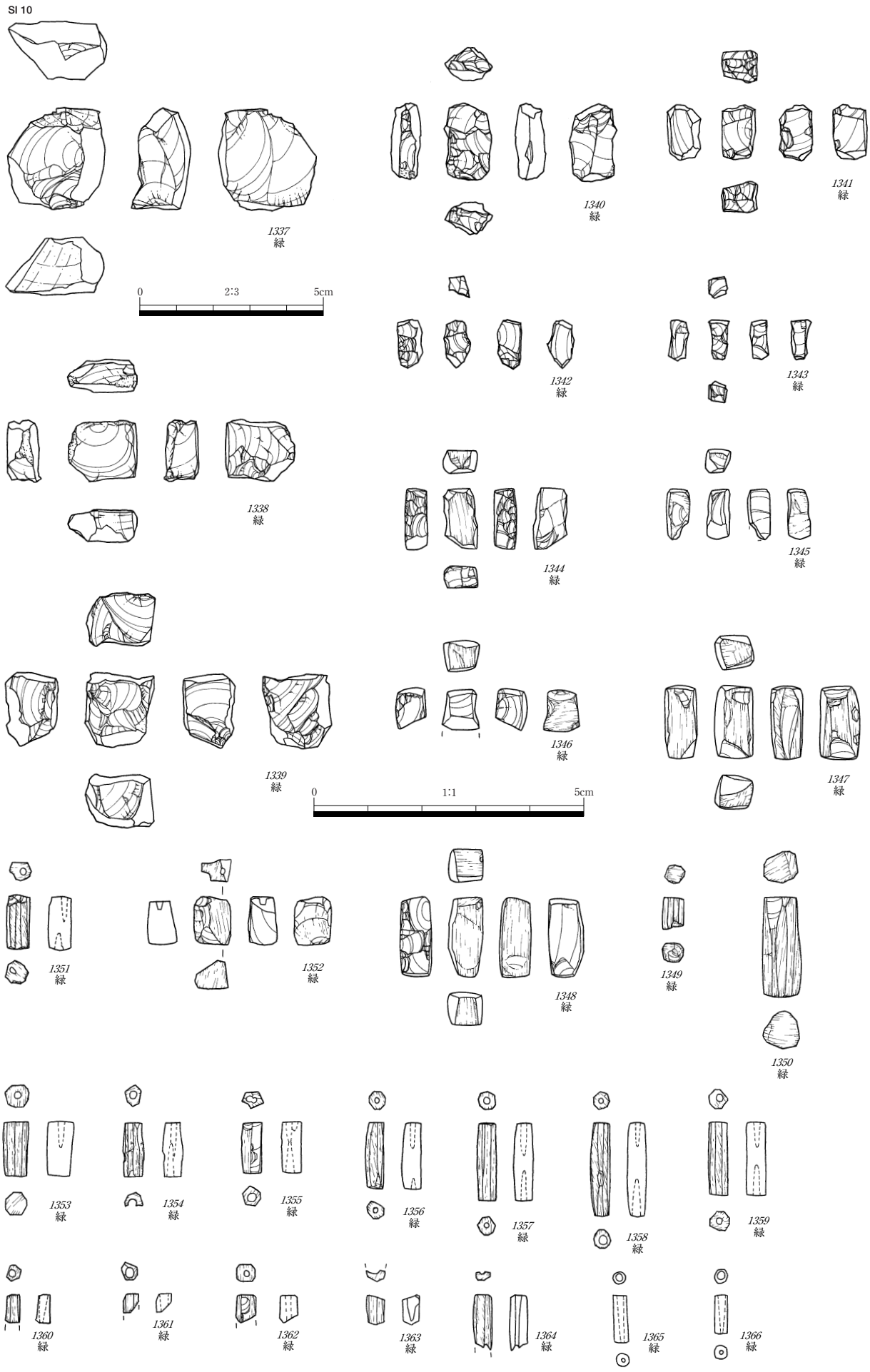
第158図　遺物実測図　（*1297～1301*　1/1，*1293～1296*　2/3）
Ｂ５地区　ＳＩ10



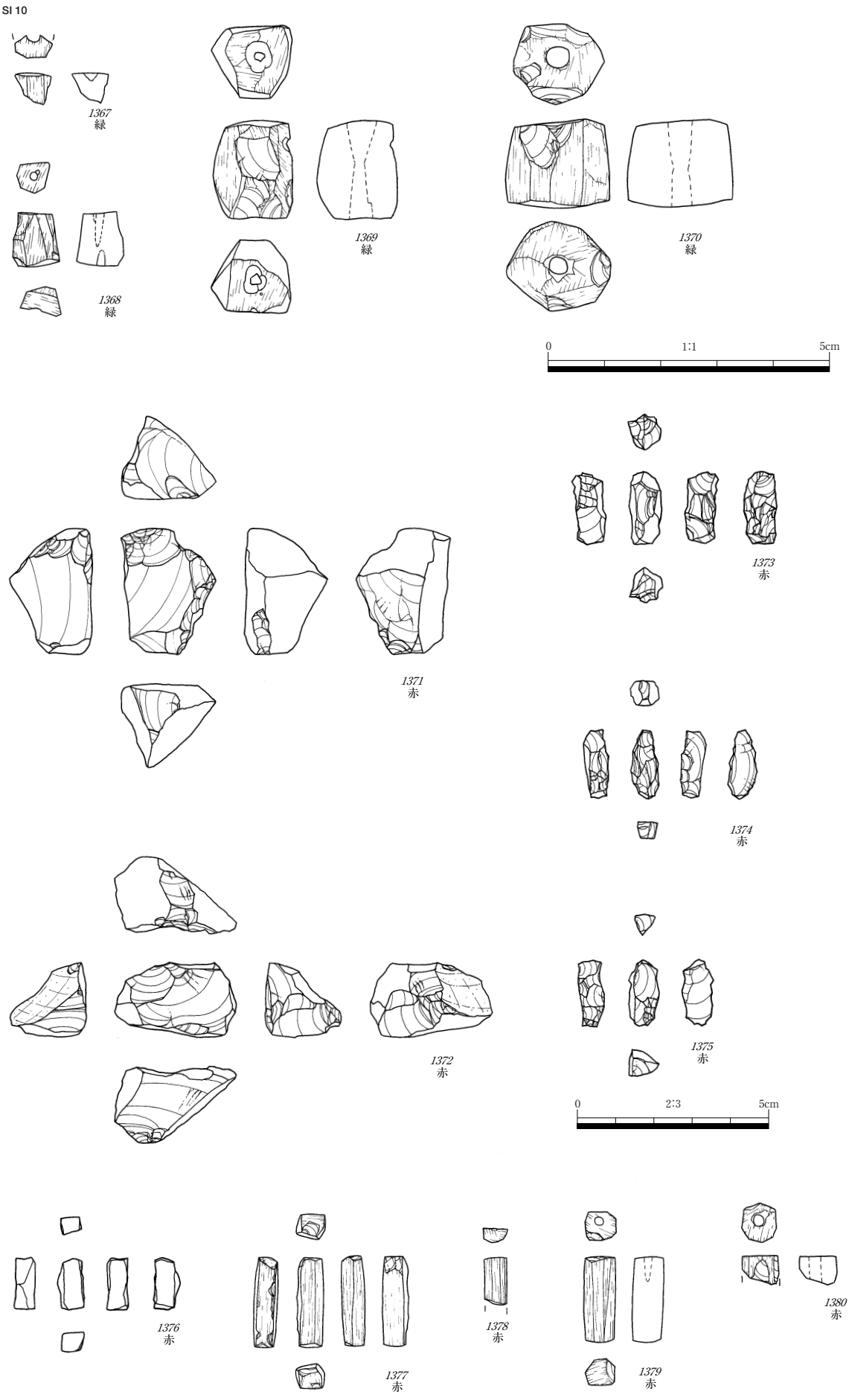
第159図　遺物実測図　(*1305～1319・1323・1324・1326～1330*　1/1, *1302～1304・1320～1322・1325*　2/3)
B５地区　ＳＩ10



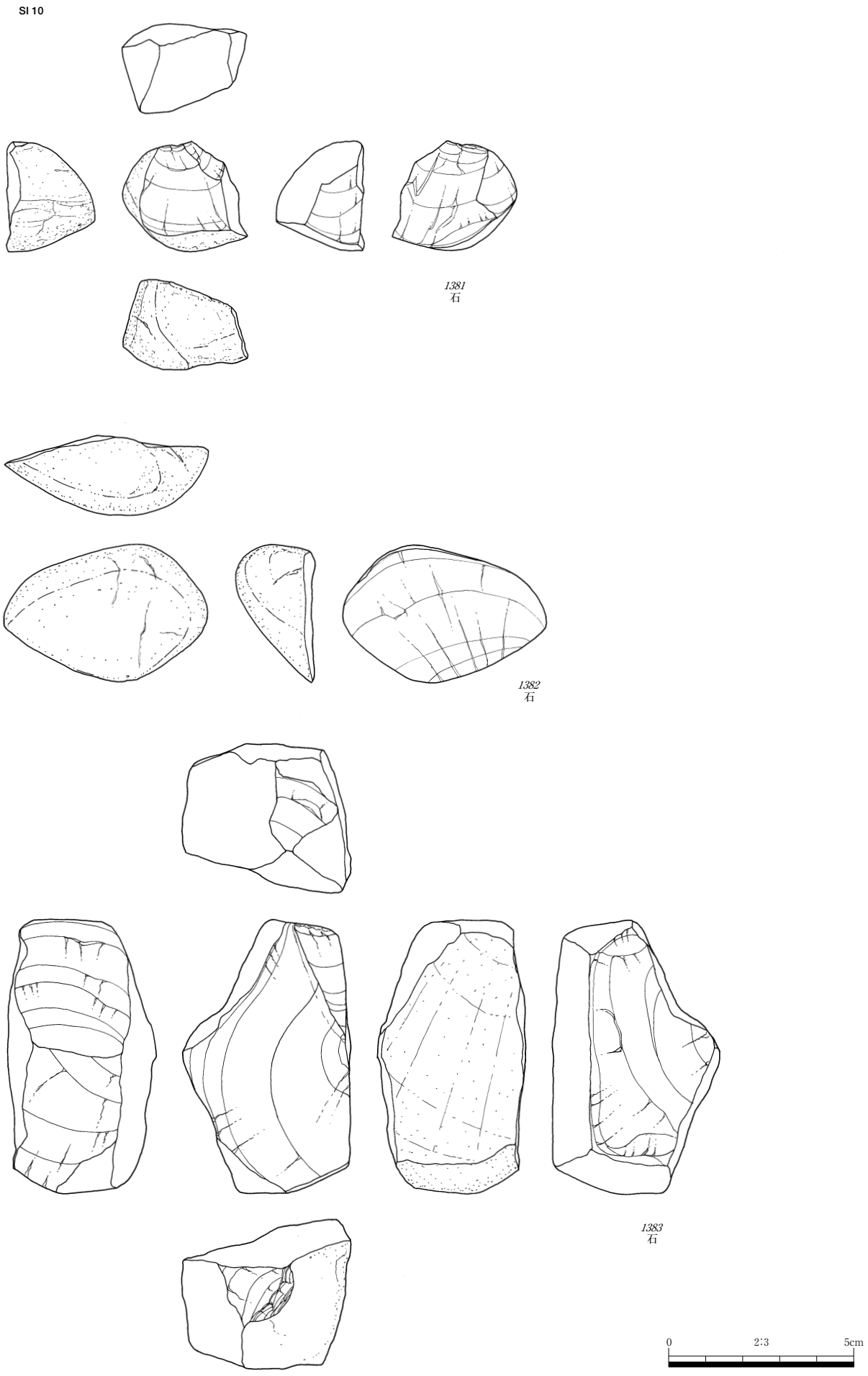
第160図　遺物実測図　(2/3)
Ｂ５地区　ＳＩ10



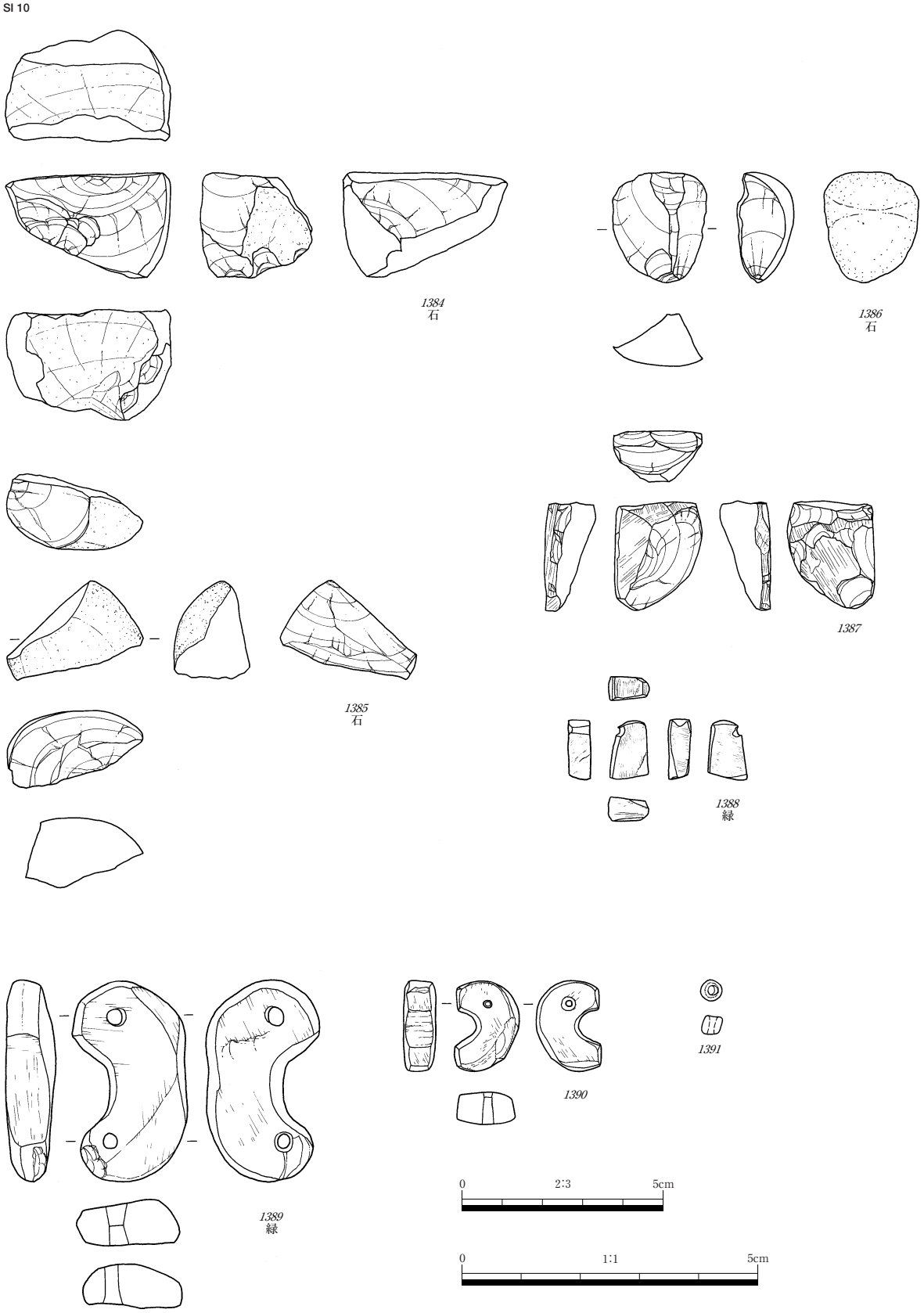
第161図　遺物実測図　(*1344～1366*　1/1, *1337～1343*　2/3)
B５地区　ＳＩ10



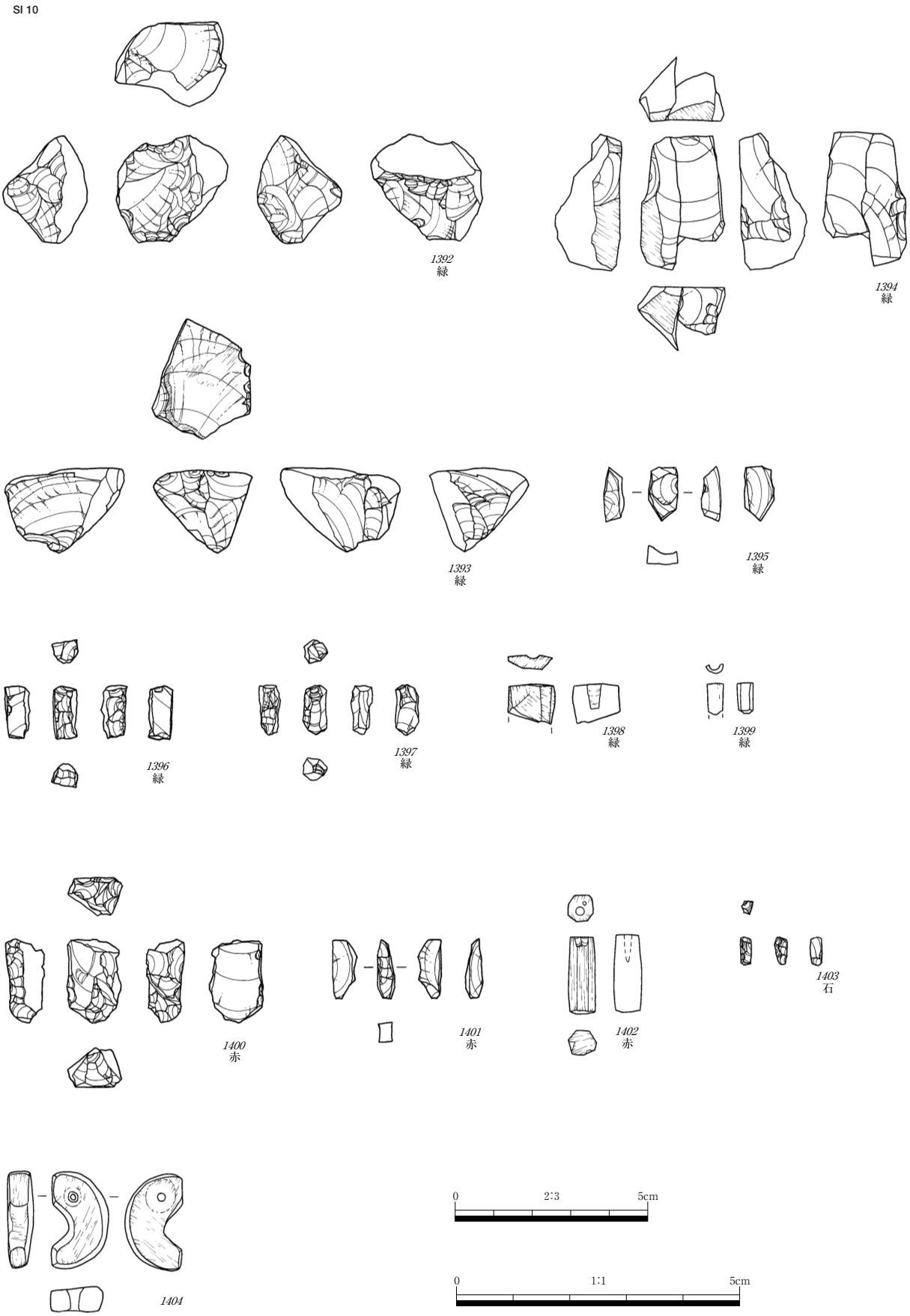
第162図　遺物実測図　（*1367～1370・1377～1380*　1/1，*1371～1376*　2/3）
B地区　ＳＩ10



第163図　遺物実測図　(2/3)
B５地区　ＳＩ10



第164図　遺物実測図　（*1387～1391*　1/1，*1384～1386*　2/3）
Ｂ５地区　ＳＩ10



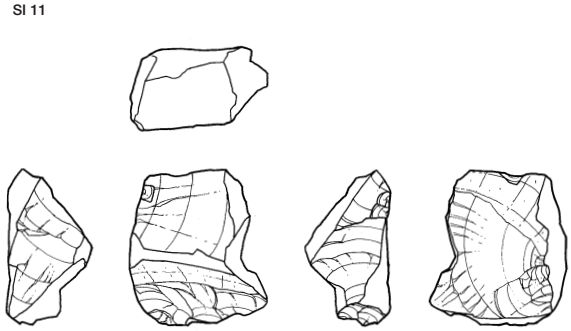
第165図　遺物実測図　（*1394・1398・1399・1402・1404*　1/1，*1392・1393・1395～1397・1400・1401・1403*　2/3）
B５地区　ＳＩ10

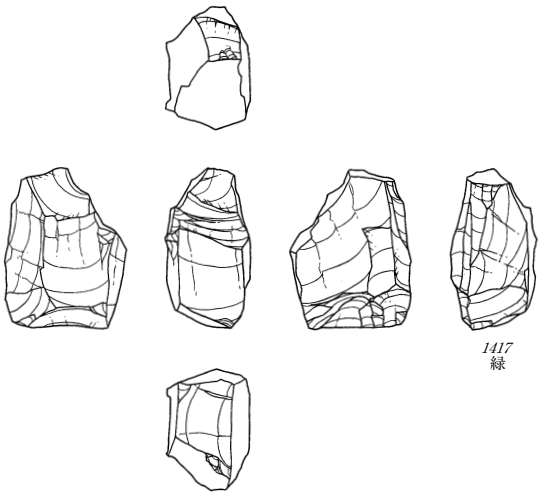
第166図　遺物実測図　(2/3)
Ｂ５地区　ＳＩ11

SI 11

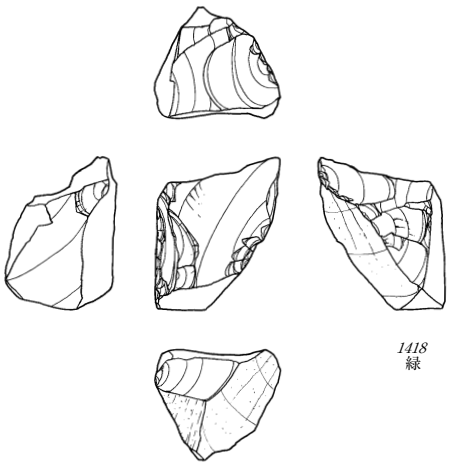
第167図　遺物実測図　(2/3)
B５地区　ＳＩ11

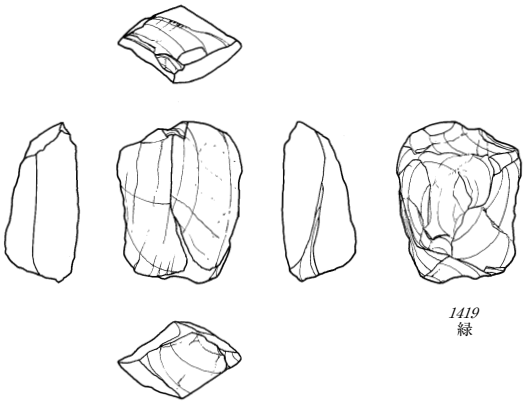
SI 11

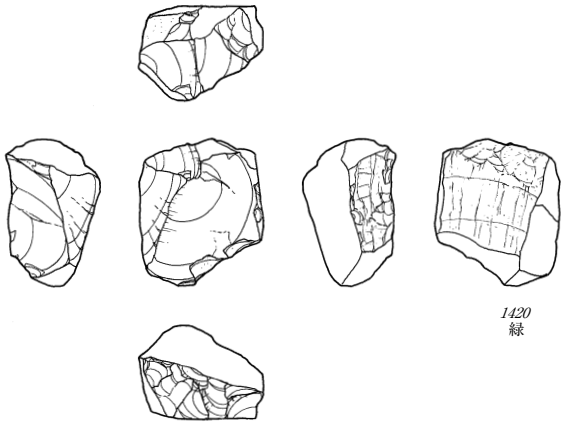

1416
緑

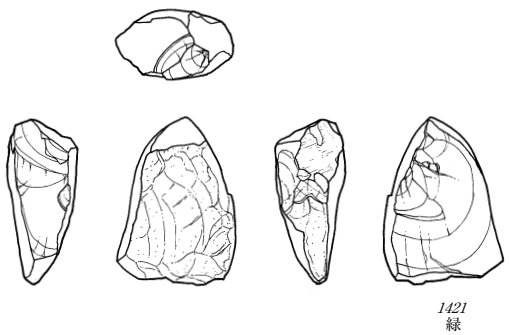

1417
緑

0　2:3　5cm

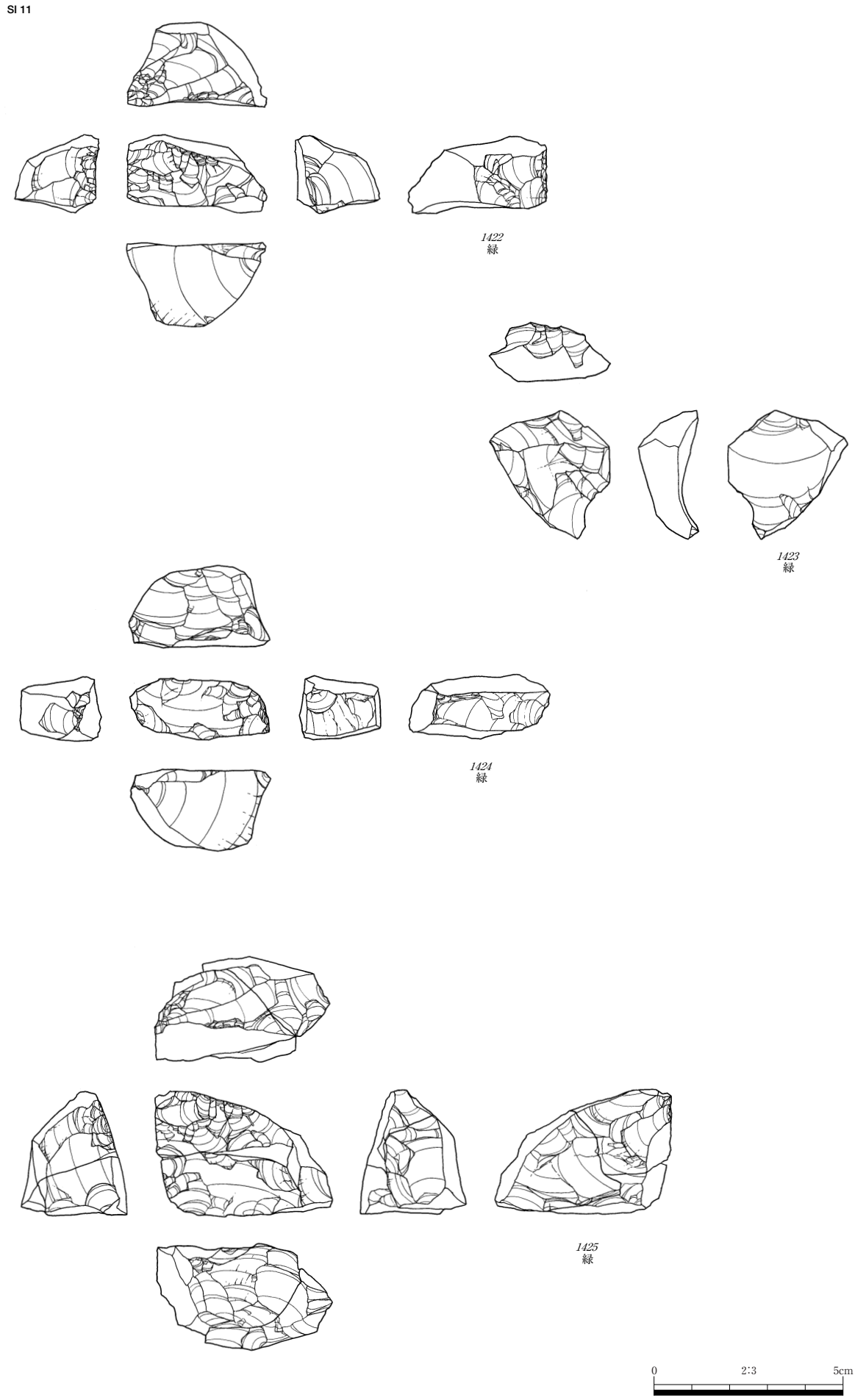

1418
緑


1419
緑

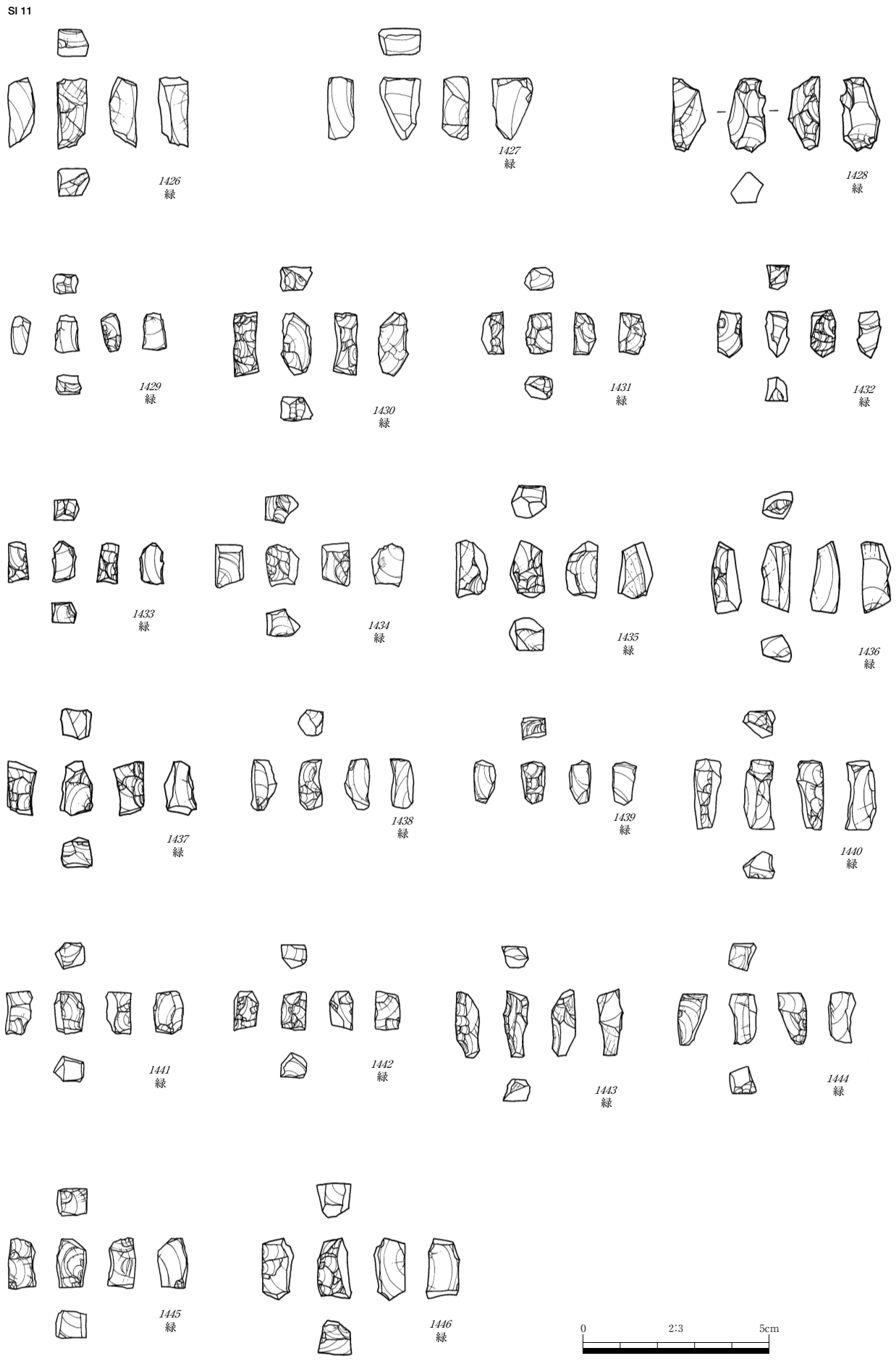

1420
緑


1421
緑

第168図　遺物実測図　(2/3)
Ｂ５地区　ＳＩ11



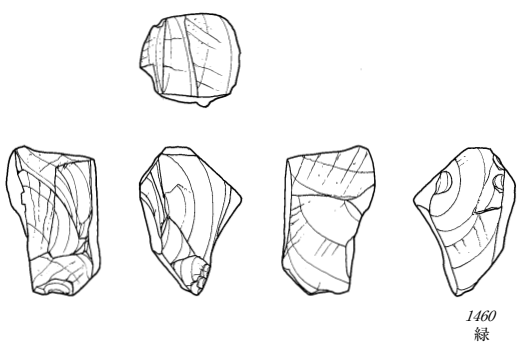
第169図　遺物実測図　(2/3)
B５地区　ＳＩ11

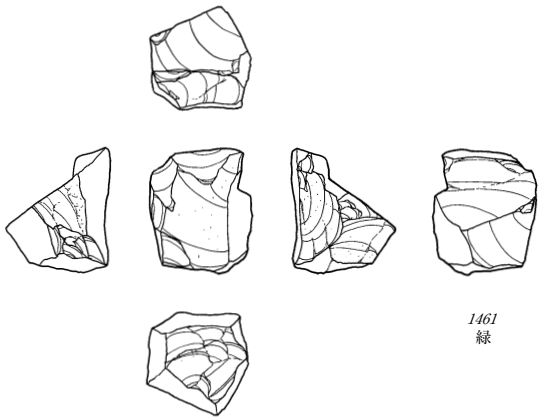


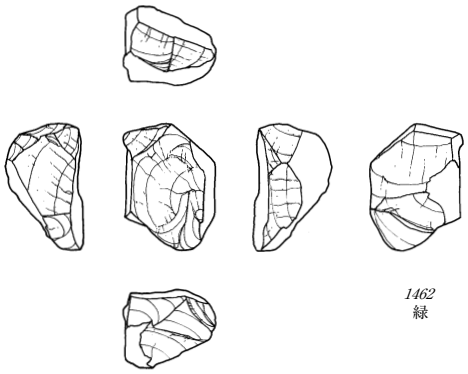
第170図　遺物実測図　(2/3)
Ｂ５地区　ＳＩ11

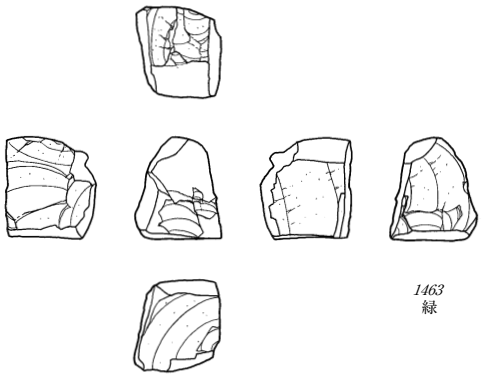
第171図　遺物実測図　(2/3)
B５地区　ＳＩ11

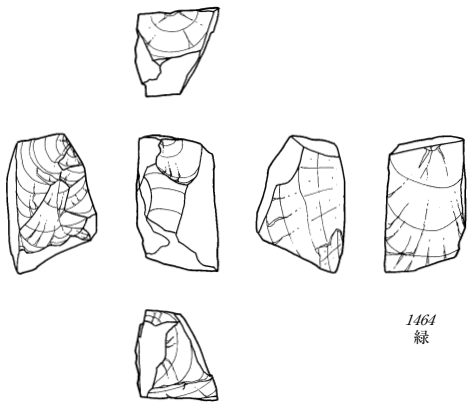
SI 11

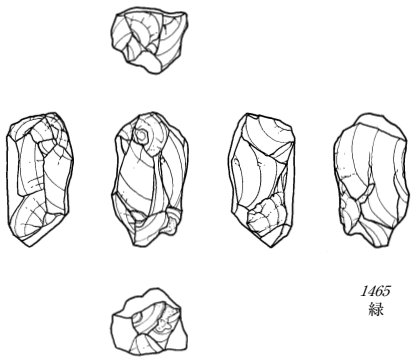


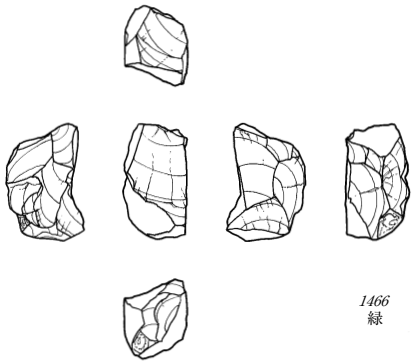


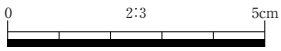


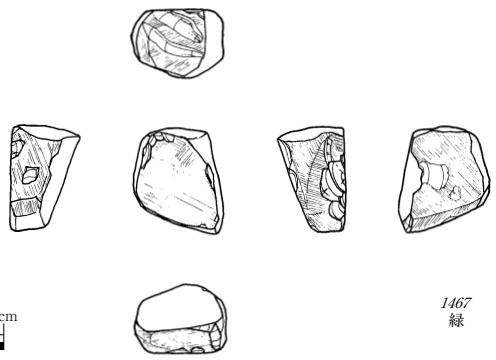






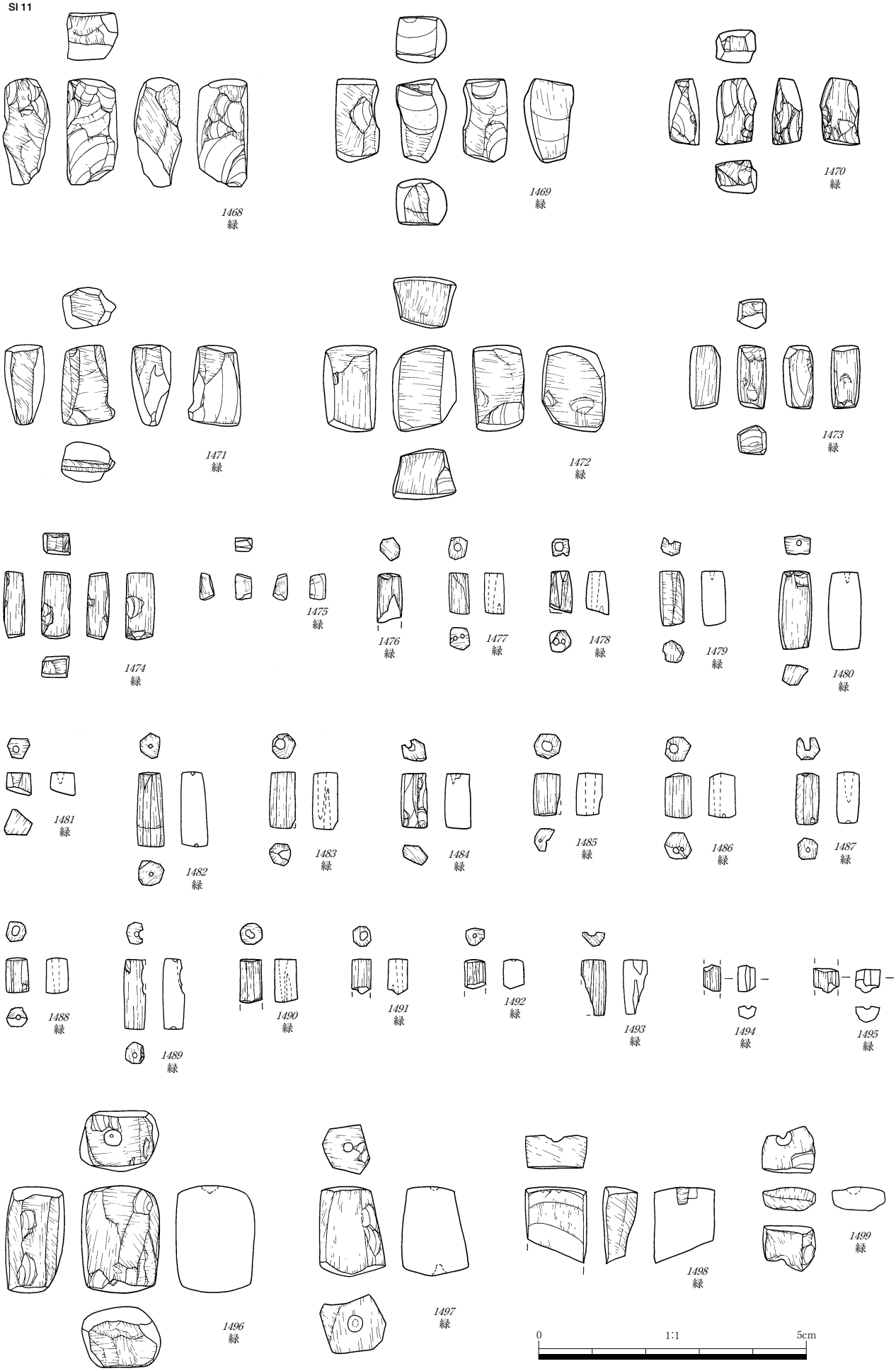




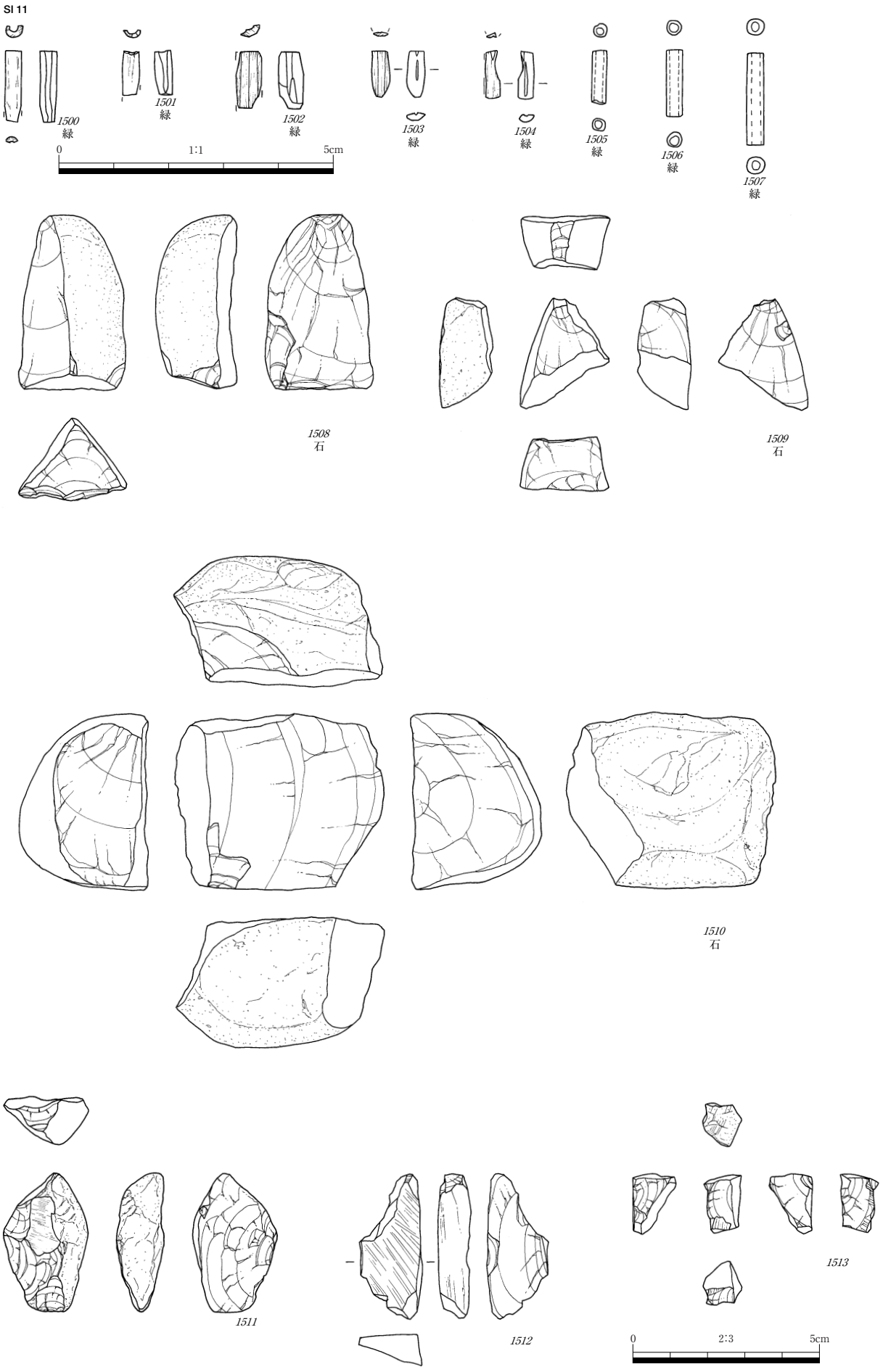


第172図　遺物実測図　(2/3)
Ｂ５地区　ＳＩ11

SI 11



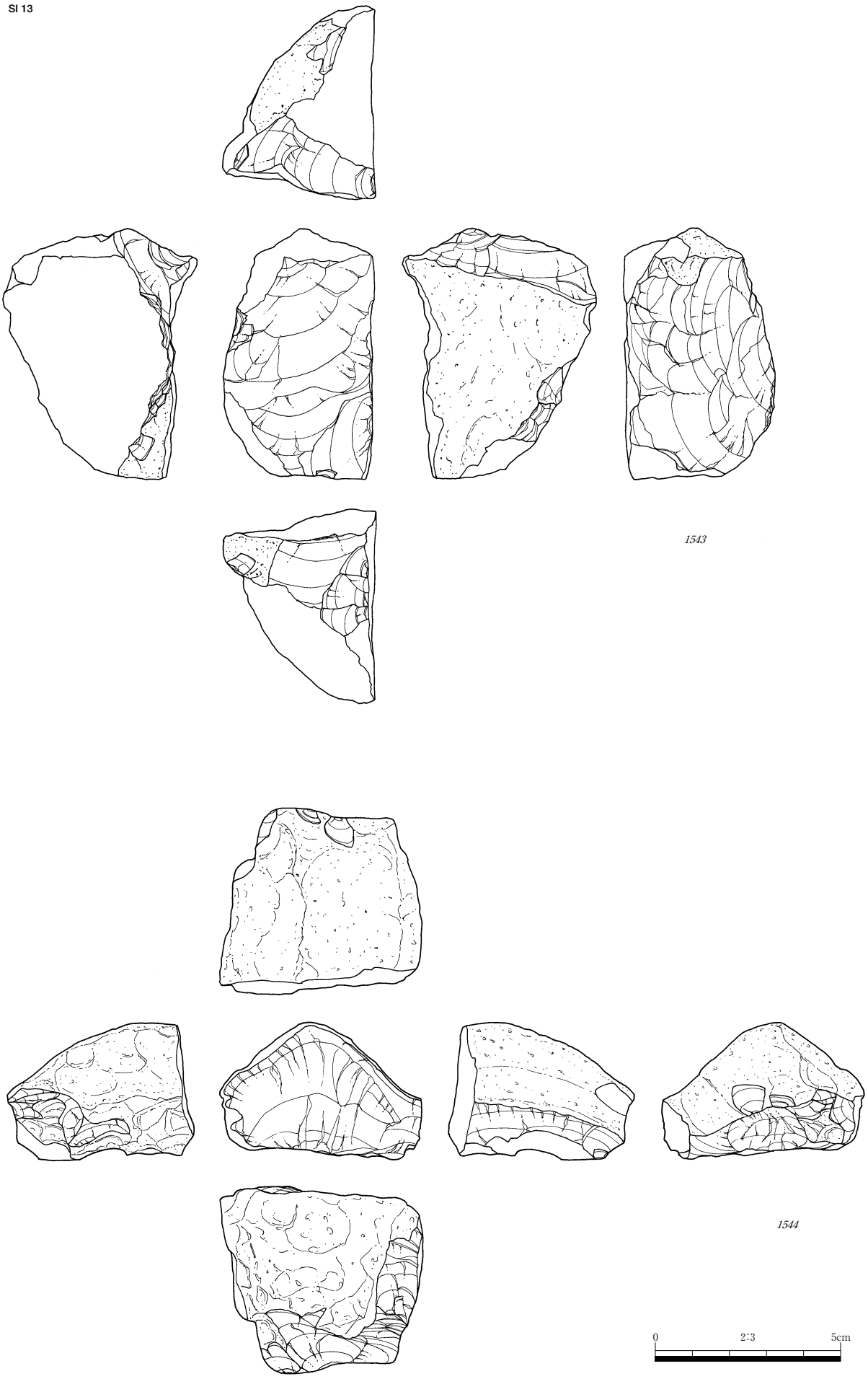
第173図　遺物実測図　(1/1)
B５地区　ＳＩ11



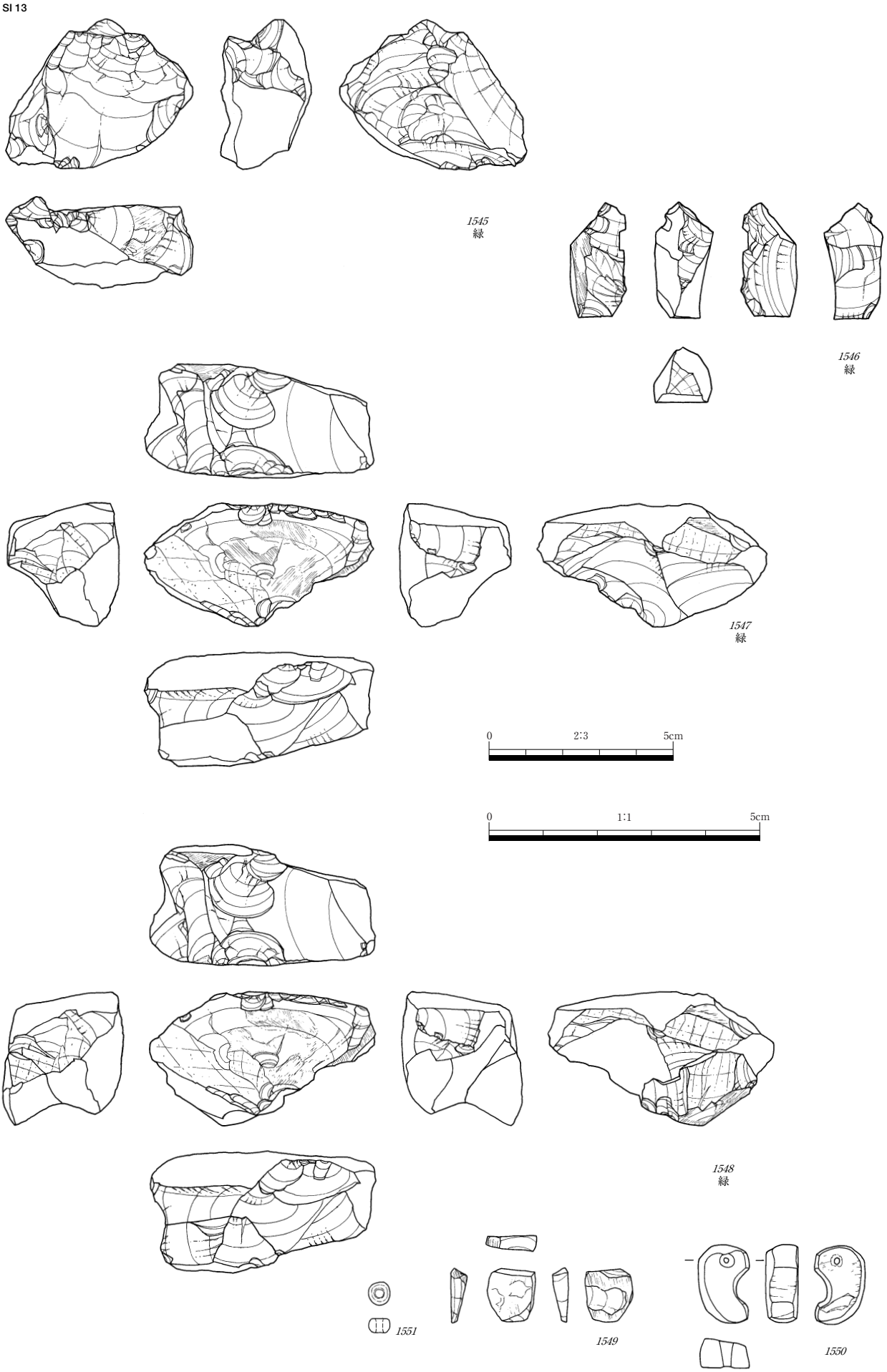
第174図　遺物実測図　（*1500～1507・1512*　1/1，*1508～1511・1513*　2/3）
Ｂ５地区　ＳＩ11

第175図　遺物実測図　（*1514・1516～1518・1521～1524*　1/1，*1515・1519・1520・1525*　2/3）
B５地区　ＳＩ11

第176図　遺物実測図　(*1527～1532・1537～1541*　1/1, *1526・1533・1534～1536・1542*　2/3)
Ｂ６地区　ＳＩ12(*1526～1534*)　ＳＩ13(*1535～1542*)

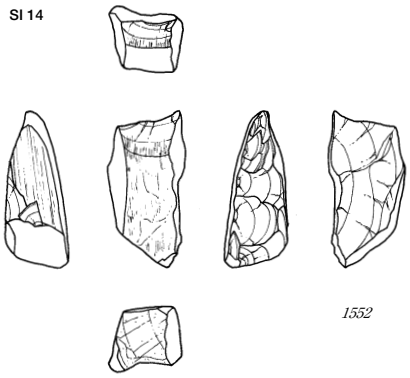


第177図　遺物実測図　(2/3)
B 6 地区　S I 13

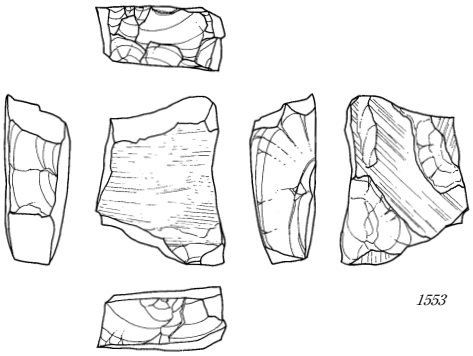


第178図　遺物実測図　（*1549～1551*　1/1，*1545～1548*　2/3）
Ｂ６地区　ＳＩ13

SI 14

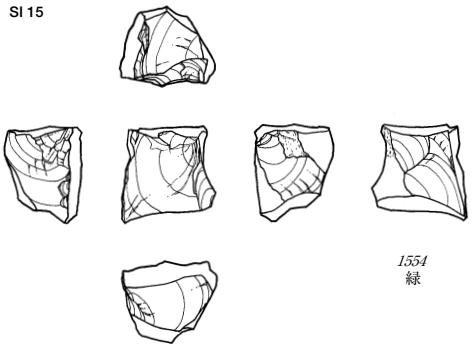


1552

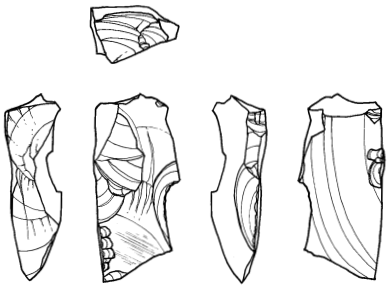


1553

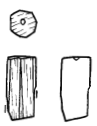
SI 15



1554
緑

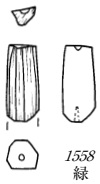


1555
緑

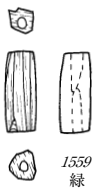


1556
緑

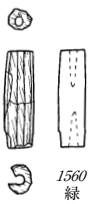
1557
緑



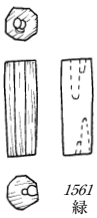
1558
緑



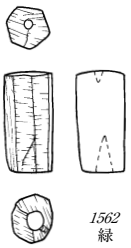
1559
緑



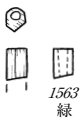
1560
緑



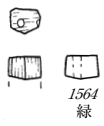
1561
緑



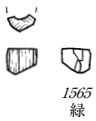
1562
緑



1563
緑

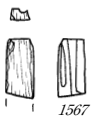


1564
緑

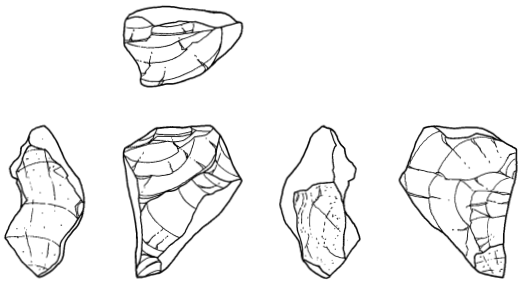


1565
緑

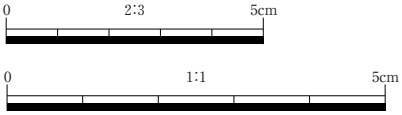
1566
緑



1567
緑

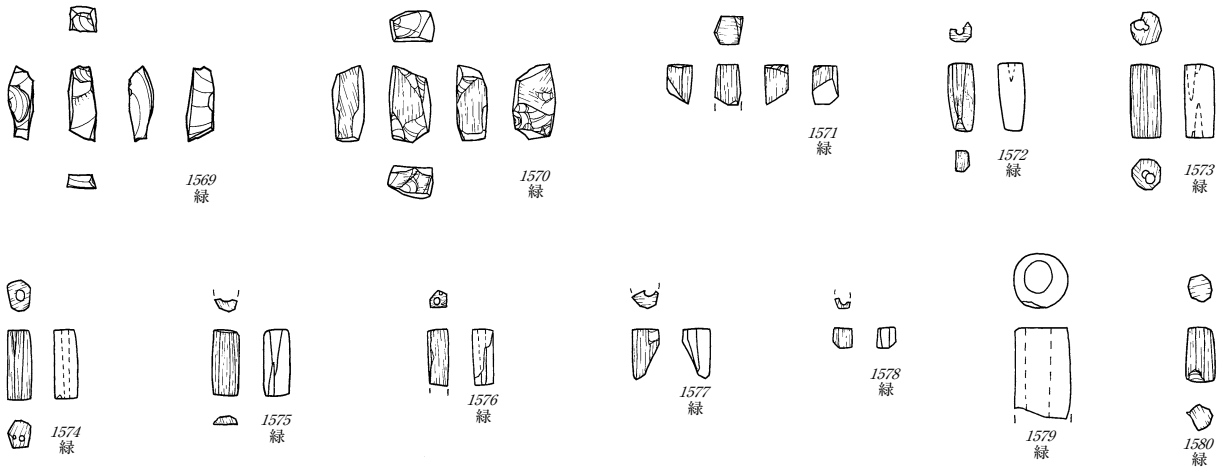


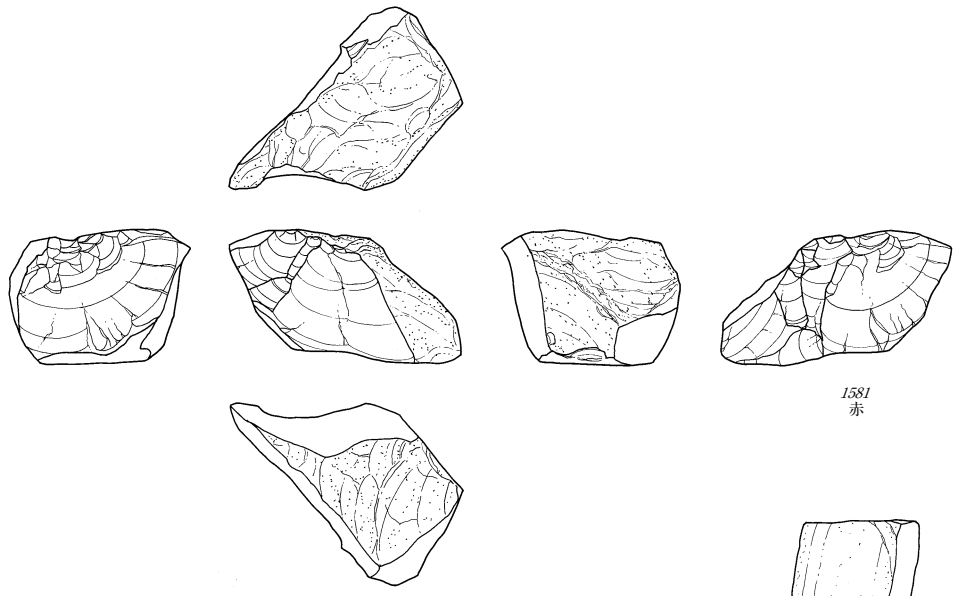
1568

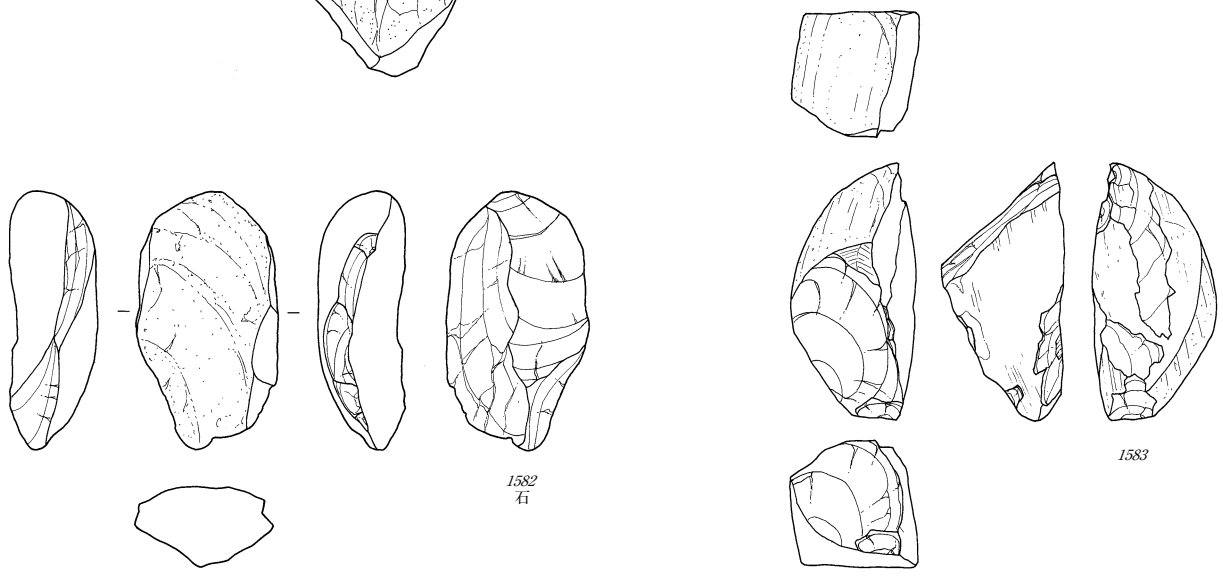


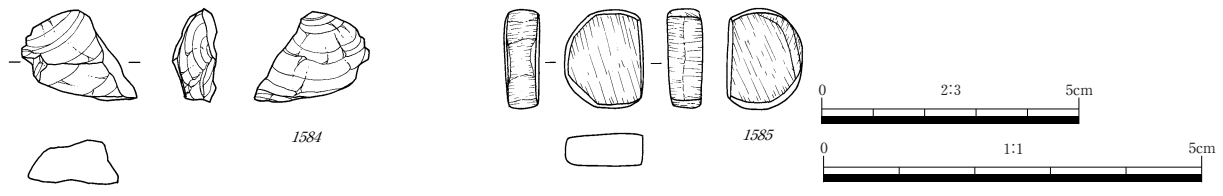
第179図　遺物実測図　(*1553・1556～1567*　1/1, *1552・1554・1555・1568*　2/3)
B６地区　ＳＩ14(*1552・1553*)　ＳＩ15(*1554～1568*)

SI 15

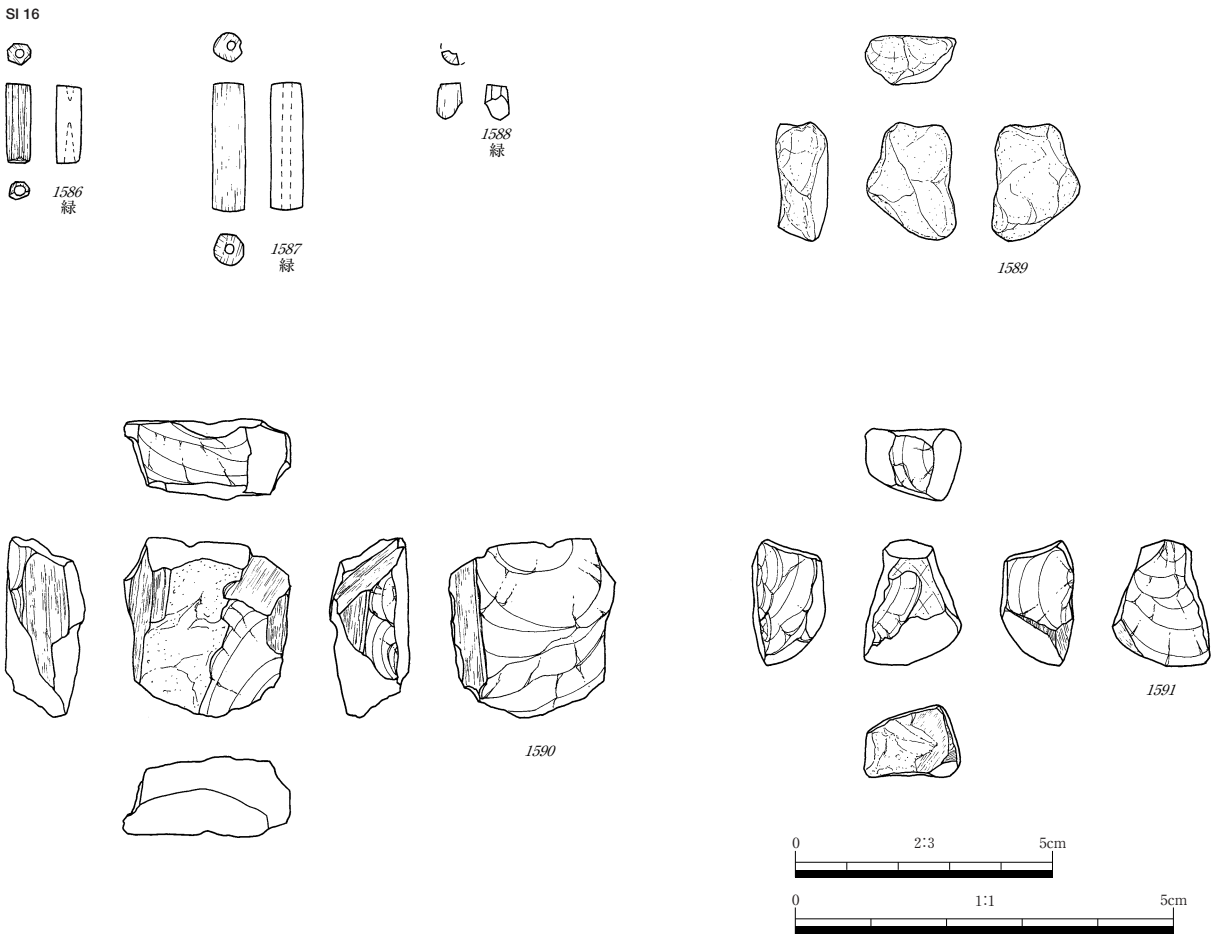




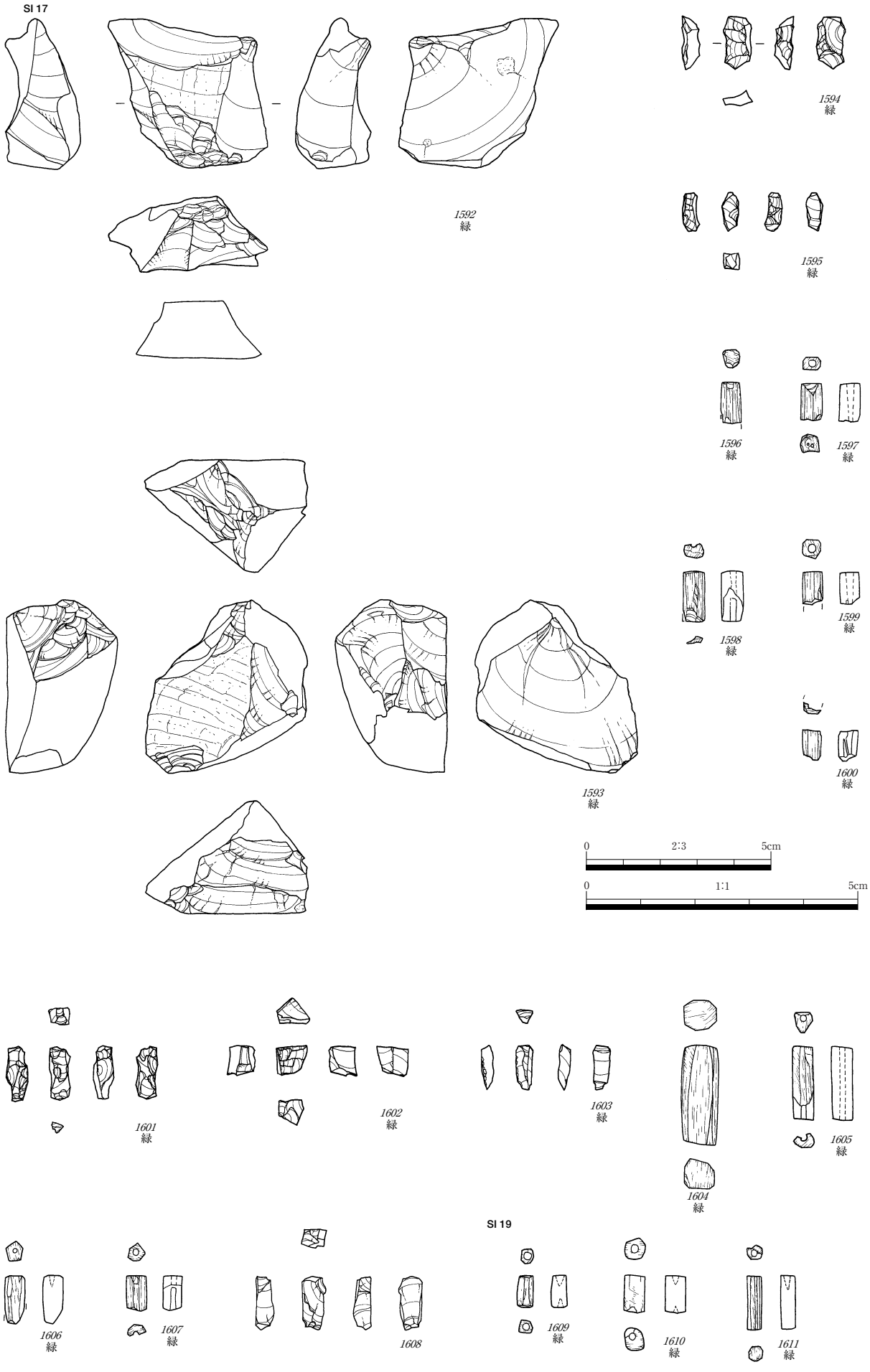




第180図　遺物実測図　（*1570～1580・1583・1585*　1/1，*1569・1581・1582・1584*　2/3）
B6地区　ＳＩ15



第181図　遺物実測図　（*1586～1588*　1/1，*1589～1591*　2/3）
B 6 地区　ＳＩ16



第182図　遺物実測図　(*1596～1600・1604～1607・1609～1611*　1/1, *1592～1595・1601～1603・1608*　2/3)
Ｂ６地区　ＳＩ17(*1592～1608*)　Ｂ７地区　ＳＩ19(*1609～1611*)

b　竪穴建物

20号竪穴建物（ＳＩ20，第183図）

Ｂ２地区の南東部に位置する。盛土ＳＸ3990掘削後に検出した。炭や黒色の灰の広がりが直径約２ｍにわたって地山上面にみられ，これを中心に幅0.4～１ｍ，深さ12～18㎝の壁溝が巡る。柱穴は確認できなかった。調査時は建物としていなかったが，立地や遺構の形態から竪穴建物とした。ＳＤ2561・2581・2583に切られる。遺物は弥生土器片が出土した。

21号竪穴建物（ＳＩ21，第143・184～186・188・189・191～194図，図版29・86～89・149・150・154）

Ｂ６地区の南側西端に位置する。壁溝の一部は調査区外となる。平面形は隅丸長方形状に壁溝が巡る。周溝はもたない。屋内部は中央に最大径1.76m，深さ38㎝を測る２段掘りの土坑Ｋ１をもつ。この土坑の埋土は上層が炭化物を含む褐灰色ローム，下層が灰黄褐色ロームを基調とする。Ｋ１からは弥生土器や緑色凝灰岩製管玉未成品・緑色凝灰岩剥片・石英剥片・炭化米が出土したが，屋内部と比較して特別多くはなかった。また炭化物や黒色の灰が検出されることはなく，Ｋ１の性格は不明である。土坑の上端は隅丸方形状に地山の土を盛土して，堤状になっている。この盛土を取り除くと，平面形は不明瞭であったが炭化物や灰の広がりが確認され，灰穴炉と考えられる。このことからＫ１は灰穴炉があった場所に新たに作り替えられたものであることがいえる。ほかの土坑にはＰ１～６・Ｐ14があり，いずれも炭化物を多く含んでいた。Ｐ１は最大径60㎝，深さ６㎝を測り，直径10㎝前後の石が底から４㎝程浮いた状態で並んで検出された。柱穴は中央の２段掘りの土坑を取り囲むように４本と，壁溝に沿って５本みられる。中央の４本のうちＰ13は灰穴Ｐ14を切っており，これより後に作られたものであることがいえる。従って，中央にＫ１が作られる前にこれに切られた灰穴炉を炉とし，壁溝に沿って並ぶＰ７・９・11・12・17を主柱穴とし，Ｐ14などを伴う建物が作られ，その後Ｋ１と，これを取り囲むＰ８・10・13・18を主柱穴とした建物が作られたと思われる。なお並びから西側の調査区外やＰ11～Ｐ17間にも柱穴があった可能性がある。床面は１面のみを検出した。壁溝は一部幅が広くなる箇所があり，建て替えによって壁溝の作り直しが行われたことが考えられるが，断面では確認できなかった。

遺物は弥生土器・木製品（板材）・石製品・石製玉作関連遺物・ガラス製玉類・炭化米が出土した。緑色凝灰岩，ひすいの剥片が屋内部から多く出土しており，これらの玉作りを行っていた建物であったことがいえる。なおＳＩ21はＢ６地区では石製玉作関連遺物が最も多く出土した建物である。弥生土器は北側の壁溝から床面にかけて甕・壺・高杯がまとまって出土した。

弥生土器には甕・壺・器台・高杯・鉢・ミニチュア土器がある。

甕は擬凹線甕（*1612*～*1616*），有段甕（*1618*～*1620*・*1622*・*1623*），刺突受口甕（*1624*～*1626*），受口甕（*1627*），付加状甕（*1617*・*1621*・*1628*・*1629*），平縁甕（*1630*・*1631*・*1633*）がある。*1612* は中型の甕で，口縁帯には歪んだ擬凹線文が施され，肩部には刺突文が施される。*1617* は口縁端部を斜め上方に摘み上げて有段部を作り出すもので，外面はヘラ状器具で強くヨコナデされる。肩の張らない胴部は外面ハケメ調整，内面ヘラケズリ調整である。*1618* の有段部外面は斜位のハケメ調整で，球形の胴部も内外面ハケメ調整である。*1624* の口縁端部は丸く肥厚し，口縁帯と肩部には刺突文が施され，丸く張った胴部は内外面ハケメ調整である。くの字口縁甕は口縁端部を面取りしたもの，口縁上端部を摘み上げるものがある。*1631* は口縁部が強く外反するが肩の張りがないくの字口縁の中型の甕で，*1618* と共にＫ１から出土した。胴部外面ハケメ調整で底部外面にまで至る。内面

はケズリ調整である。*1632* は甕の底部であるが，ハケメ調整した後「×」の記号が記されている。

壺は細頸壺・広口壺・短頸壺がある。*1634* は細頸壺の口縁部で，口縁端部は摘んでヨコナデする。外面縦方向のヘラミガキ調整，内面ナデ調整である。擬凹線壺には*1635* ・*1636* がある。*1635* は口縁部が有段で，内外面赤彩される。*1636* は口縁端部が肥厚し，上端部は面取りされる。外面のみ赤彩される。*1637* は口縁端部を摘んでヨコナデする広口壺で，頸部には沈線が巡る。*1638* は短頸壺で，口縁端部は面取りされる。低い器高で楕円形の胴部が付き，低い平底の底部が付く。内外面ハケメ後ナデ調整である。

1639 は台付壺の胴部である。胴部最大径の直上に貼り付け突帯が設けられ，４箇所以上に３本１組の棒状浮文を垂直に貼付する。*1654* は台付壺の脚部で，脚裾有段部には擬凹線文が巡らされる。

器台は擬凹線器台（*1640* ～*1642* ）と有段器台（*1643* ）がある。擬凹線器台はいずれも幅の狭い口縁端部に施文される。*1640* は内外面赤彩である。*1642* は受部径と脚裾部径がほぼ同じで，鼓形の器形を呈する。口縁部のみに２条の擬凹線文が施され，脚裾端部は面取りされる。脚部には上下２段に４個ずつ透孔が穿たれるが，不規則である。

高杯は有段高杯（*1644* ～*1646* ）と鉢形高杯（*1647* ）がある。*1644* は短い口縁部が大きく外反し，端部でさらに屈曲する拡張有段高杯で，口縁端部内面には沈線が巡る。内外面横方向のヘラミガキ調整である。*1645* は外傾する口縁端部が外側に丸められる。外面ヘラミガキ，内面ハケメ後ナデ調整である。*1646* は杯部が3/4残存するが脚部を欠損する。内面は表面が荒れてわかりにくいが，外面は縦方向のヘラミガキ調整で仕上げる。*1647* は小型の鉢形高杯で，口縁端部はヨコナデで僅かに屈曲する。内外面はヘラミガキ調整である。*1648* ～*1652* は器台または高杯の脚部である。ハの字状に外展するもので，脚裾端部は面取りするものと丸縁のものがある。外面調整はヘラミガキ調整であるが，*1648* と*1651* にはハケメ調整痕が残る。

1653 は擬凹線鉢で，擬凹線文はヘラミガキで消されて痕跡だけが残る。底部は小さい平底で，体部は内外面に丁寧なヘラミガキが施される。ヘラミガキの方向は外面は口縁部が横方向，体部が縦方向で，体部は最大径の周辺を再度横方向に磨いている。

1655 ・*1656* はミニチュア土器である。*1655* は鉢形で，口縁端部内側が面取りされ，口縁部ヨコナデ，体部外面ヘラミガキ，内面ケズリ調整である。*1656* は上げ底の底部で，ナデ調整である。

石製品は石鏃・軽石・敲石が出土した。*1682* は黒耀石製の有茎式石鏃。*1684* は軽石。表面には平行して２本，裏面には１本，左右方向の断面Ｕ字状の溝を持つ。また表面には線状痕の残る平坦面もあり，砥石として使用されたことが考えられる。*1683* は花崗岩製の敲石。天面側が欠損しており，残存する敲打面は地面側のみである。

石製玉作関連遺物は緑色凝灰岩剥片，緑色凝灰岩製管玉完成品・未成品，鉄石英剥片，鉄石英製管玉未成品，石英剥片，ひすい石核・剥片，勾玉完成品・未成品，ひすい製加工品が出土した。

1694 ～*1786* は緑色凝灰岩製管玉の完成品・未成品。石材は硬質で濃緑色のものが使われている。*1694* ～*1705* は形割工程品。*1699* はＰ４，*1696* はＰ16から出土した。*1694* は全長19.88㎜，最大幅10.54㎜と大きめであるが，それ以外は全長8.89～12.80㎜の間に収まる。*1706* ～*1718* は研磨工程品。*1706* は表・裏面の幅が広い，平たい四角柱状，*1712* は四角柱状に研磨されている。*1708* はＰ１～３，*1713* はＰ４から出土した。*1719* ～*1773* は穿孔工程品。*1719* は直径が2.05～2.14㎜となり非常に細身で，天面中央に穿孔前の窪みを付けている。穿孔は行われていない。*1720* も天面中央に穿孔前の窪みを付けている。地面は半分欠損しているため不明である。*1721* は天面の中央に浅い窪み

を付け，その両側に中央の窪みよりも深い孔を開けている。*1725* は地面中央に穿孔前の窪みを付けている。*1726* は地面に穿孔前の浅い窪みがある。*1727* は天地面共に穿孔前の窪みを付けている。穿孔は端に寄った位置で天面からのみ行われている。*1729* は両側穿孔で，貫通していない。*1740* は多角柱というよりは四角柱に近い形状。やや丸味を帯びた四角柱状で，両側から穿孔が行われている。*1741* は四角柱状に研磨した後両側穿孔を行っている。*1746* は地面から片側穿孔を行っている。*1748* は孔内壁中央付近に若干の盛り上がりがみられ，両側穿孔が行われている。*1749* は地面から片側穿孔を行っている。*1757* は天面中央に浅い窪みがある。穿孔は天面から行われているが，端に寄った位置で開けられている。*1762* は天面に穿孔のほかに穿孔具の先で突いたかのような浅い窪みがある。*1774* ～*1786* は完成品。*1780* ～*1784* の孔内は穿孔方向の判断がつかないほどほぼ均一な筒状になっている。孔内の整形も行われたのだろう。なお*1781* は孔内壁中央付近に若干の盛り上がりがみられ，両側穿孔である。

最も多く出土した緑色凝灰岩製管玉をみてみると，管玉の大きさがほぼ決まる，研磨工程多角柱状品から穿孔を経て完成品までのものを計測すると，全長は小さいもので4.8㎜，ほかは6.21～13.34㎜の間に収まる。最大径は多角柱状品で2.44～3.92㎜，完成品で若干小さくなり1.92～2.98㎜の間に収まる。細型の管玉の生産を中心に行っていたと思われる。

1787 は鉄石英製管玉の研磨工程の多角柱状品。このほかに鉄石英は剥片がわずかに0.3ｇ出土しているのみで，鉄石英製の加工が行われたとは積極的には言えない。*1788* ～*1796* はひすい。いずれも打割により分割される。*1788* ～*1790*・*1792*・*1793* は礫面が残っており，原石が円礫であったことがいえる。*1794* はほぼ四角柱状に研磨したもの。*1795* は勾玉の形割工程品，*1796* は勾玉の研磨工程品で表面のみ研磨を行っている。両者とも*1788* と石質が似ており，原石は同じものだった可能性がある。ひすいは白い部分が灰色がかっているものが多く，まとまって出土したＢ２地区ＳＤ2570と比較すると，色調が悪いように感じる。ひすいは建物の北東側で多く出土した。*1797* は緑がかった石英製の勾玉未成品。半月状に研磨されている。*1024*・*1025* は勾玉完成品。*1024* は表面に２箇所の穿孔がある。２点共石材は不明である。建物の内部施設からも緑色凝灰岩製管玉の未成品は出土しているが，Ｋ１から１点，灰穴から６点，その他に２点出土した。特に石製玉作関連遺物が多く出土した内部施設はなく，玉作りに関わる工作施設はわからなかった。

ガラス製玉類は小玉（*1798*）が出土した。色調はターコイズブルーである。

22号竪穴建物（ＳＩ22，第146・187・190・191図，図版26・88・89・155・156・166・168）

Ｂ６地区の中程西側に位置する。南側は試掘トレンチに切られる。ほぼ隅丸方形状に溝が巡り，調査時にははっきりと検出できた。壁溝の幅は最大2.54ｍ，最小1.13ｍ，深さは最大20㎝，最小５㎝，壁溝の内側は土坑を３基検出した。切り合いから，ＳＩ13の周溝が埋まった後ＳＩ22が作られたものと思われる。

遺物は弥生土器・石製玉作関連遺物・ガラス製玉類・炭化米，Ｋ３の上面では板材が出土した。

弥生土器は甕・壺・器台・高杯・鉢・ミニチュア土器がある。

甕には擬凹線甕（*1657*）・有段甕（*1658* ～*1660*）・刺突受口甕（*1661*・*1662*）・平縁甕（*1663* ～*1665*）・付加状甕（*1666*）がある。有段甕の有段部は強いヨコナデによって端部が肥厚するものがある。*1660* の肩部には刺突文が施される。*1658* は口縁端部が受口状となる。*1662* は頸部が長く外傾する受口状口縁で口縁部に櫛描き列点文，肩部に櫛描き直線文と連続刺突文が施される。胴部外面はハケメ後板状工具によるナデ調整，内面は縦方向のケズリ調整がなされる。*1666* は胴部上位が張

り，底に向かってすぼまる器形で，内外面ハケメ調整である。*1664* は口縁が上端部で面取りされる受口状の小型甕である。内外面ナデ調整である。*1665* は器高13㎝の小型甕である。胴部のあまり張らない細長い器形で，内外面は板状工具によるナデ仕上げである。

壺は長頸壺（*1671*）・擬凹線壺（*1668*）・有段壺（*1669*）・広口壺（*1667*）がある。*1667* は直線的に外傾する口縁部で，外面縦方向のヘラミガキ，内面ヨコナデ調整である。*1671* は直線的に伸びる口縁部に扁球形の胴部がつくもの。口縁部は表面が摩滅しているが，ハケメ後ヘラミガキ調整である。*1668* ・*1669* は口縁部内外面，胴部外面は赤彩される。*1670* は小型の壺の胴部小破片で，表面に細線による矢羽根状の文様が描かれている。

高杯は口縁端部を丸縁と面取りするものがある。口縁部外面のヘラミガキ調整は縦方向と横方向がある。*1675* は口縁部と杯底部の間に擬凹線文が巡り，その表面と口縁端部にのみ赤彩痕が残る。*1673* は強く外反する口縁部をもち，面取りされた端部は赤彩される。*1676* ～*1679* は高杯の脚裾部である。*1676* は裾部有段脚で，有段部とその上部に透孔が穿たれる。脚裾端部は 2 方向から面取りされる。有段部外面は赤彩される。*1677* は裾端部は 2 方向から面取りされ，端部と外面は帯状に赤彩される。*1678* は端部を折り返し肥厚させて縁帯をつくる。*1679* は面取りするもので，端部から裾部にかけては赤彩される。

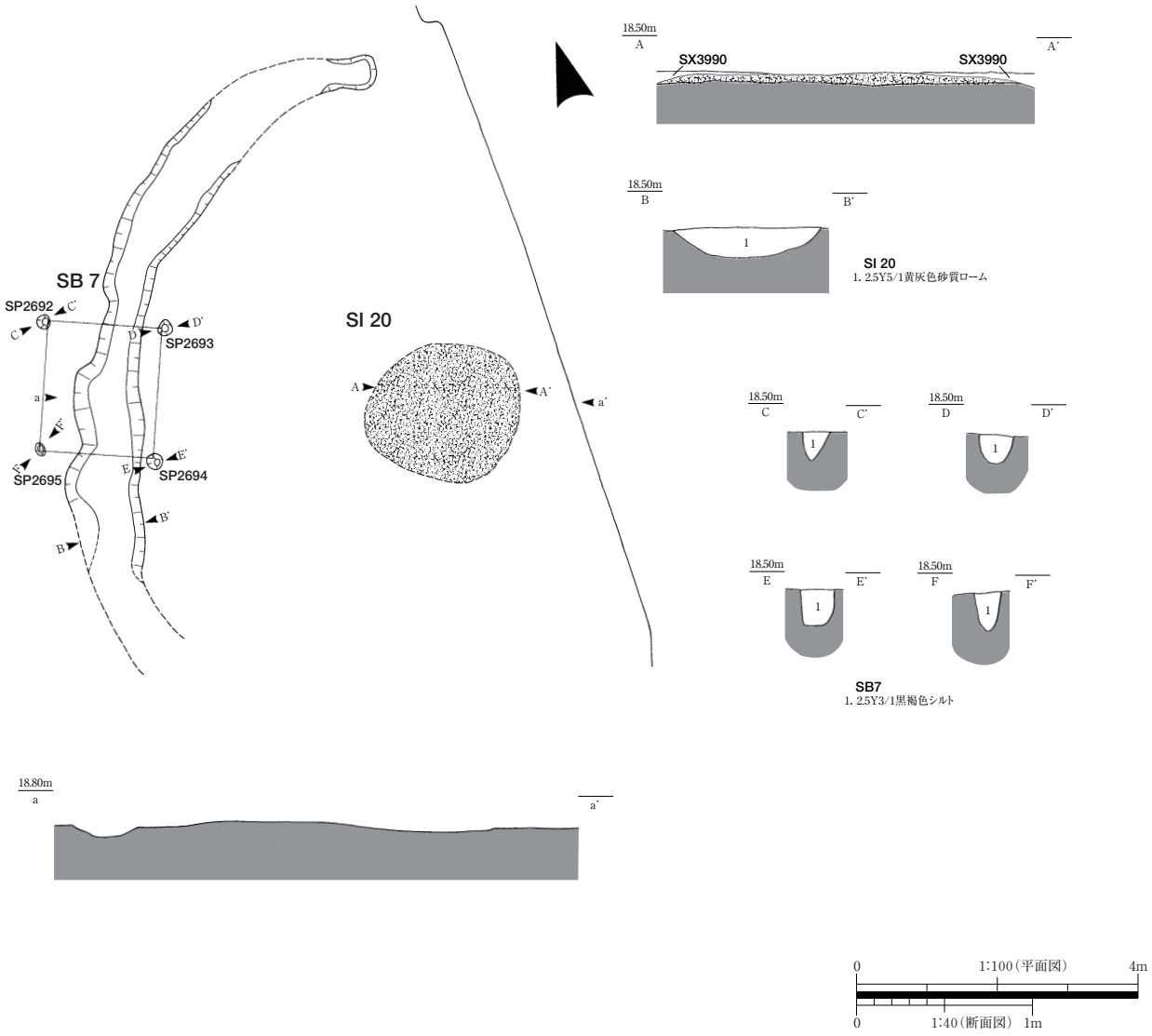
1680 は擬凹線鉢の口縁か。体部内面にヘラミガキがわずかに残る。外面にススが付着する。

1681 は台付の鉢形ミニチュア土器。口縁は上端部で面取りし，口縁部内外面には指頭圧痕が残る。

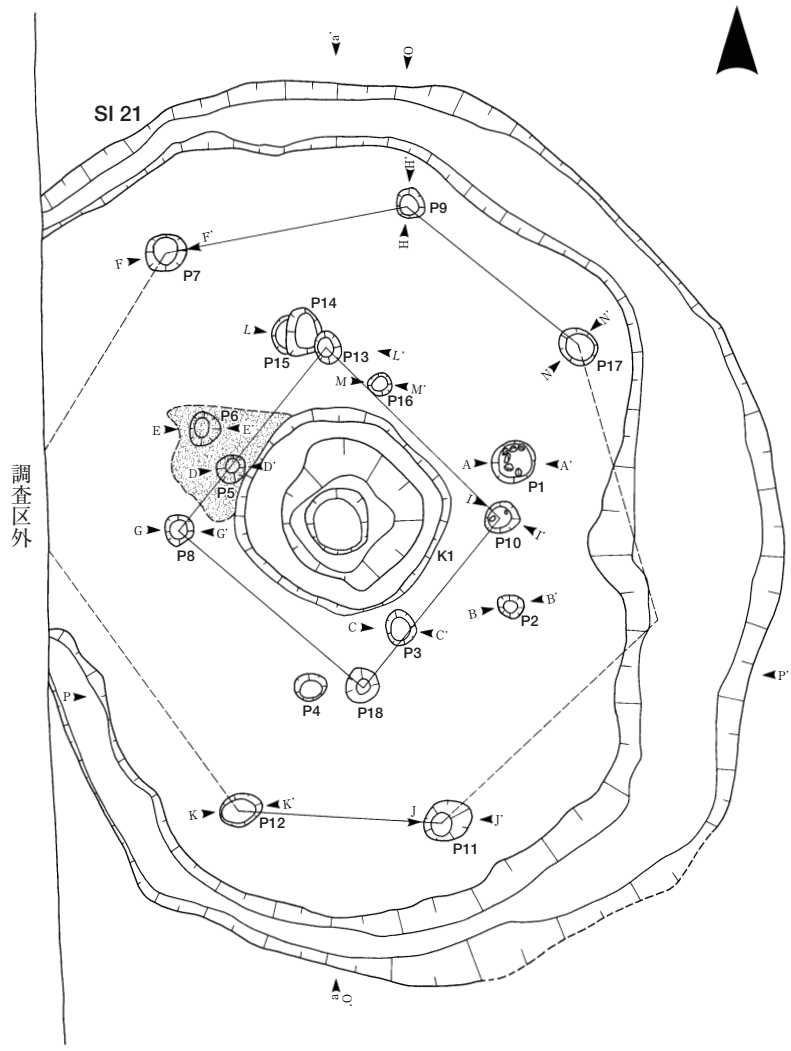
石製玉作関連遺物は緑色凝灰岩剥片，緑色凝灰岩製管玉未成品，鉄石英剥片，石英剥片，ひすい石核，勾玉完成品・未成品が出土した。*1685* ～*1687* は緑色凝灰岩製管玉未成品。*1685* は穿孔工程品。地面からの穿孔が貫通しているが，天面にも穿孔の痕跡があり，初めは両側穿孔の予定で作られていたことがいえる。*1687* は完成品の破片。*1688* ・*1689* はひすいを打割したもの。*1688* は勾玉の形割工程品と思われる。側面の一部には研磨痕がみられる。*1691* は勾玉の仕上げの研磨が施されたもので，完成品と思われる。頭部と尾部は欠損する。頭部はちょうど穿孔箇所で欠けており，両側穿孔が確認できる。もう一箇所，残存部の中央あたりに穿孔される。こちらは穿孔方向が分からないほどに孔内壁が整形されており，もう一方の穿孔も同様に整形されるものであったと思われる。*1690* は形状から勾玉の未成品と思われる。穿孔方向は両側穿孔で，石材は不明である。*1081* はひすい製の勾玉完成品。*1082* は不明石材の勾玉完成品。

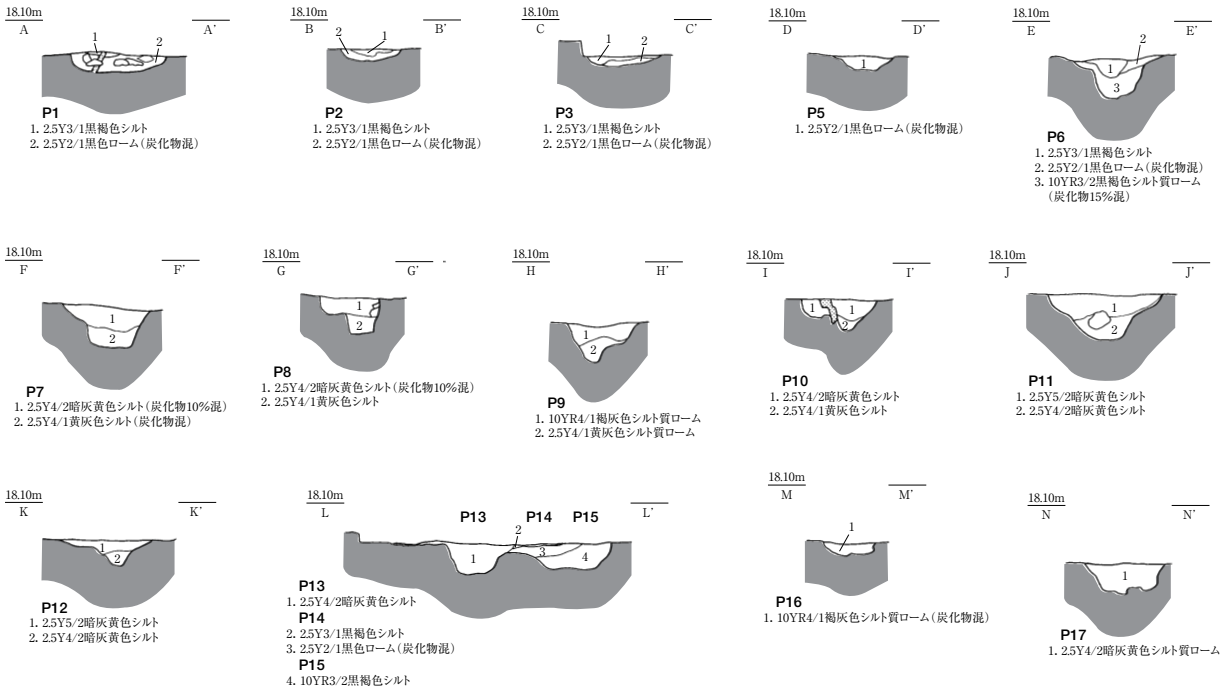
ここでは石製玉作関連遺物は緑色凝灰岩製管玉未成品が穿孔工程品のみ出土している。さらに剥片の出土量が少ないことから，研磨までの工程を済ませた後穿孔のみを行った可能性がある。ただし出土量は遺跡全体からみると少ない。

ガラス製玉類は小玉（*1692* ・*1693*）が出土した。*1692* は完形，*1693* は半分ほど欠損している。色調は共に海緑色で，孔にほぼ直交して縞模様が観察でき，巻き技法で製作されたことがいえる。2 点は法量も似ており，一連のものであった可能性がある。



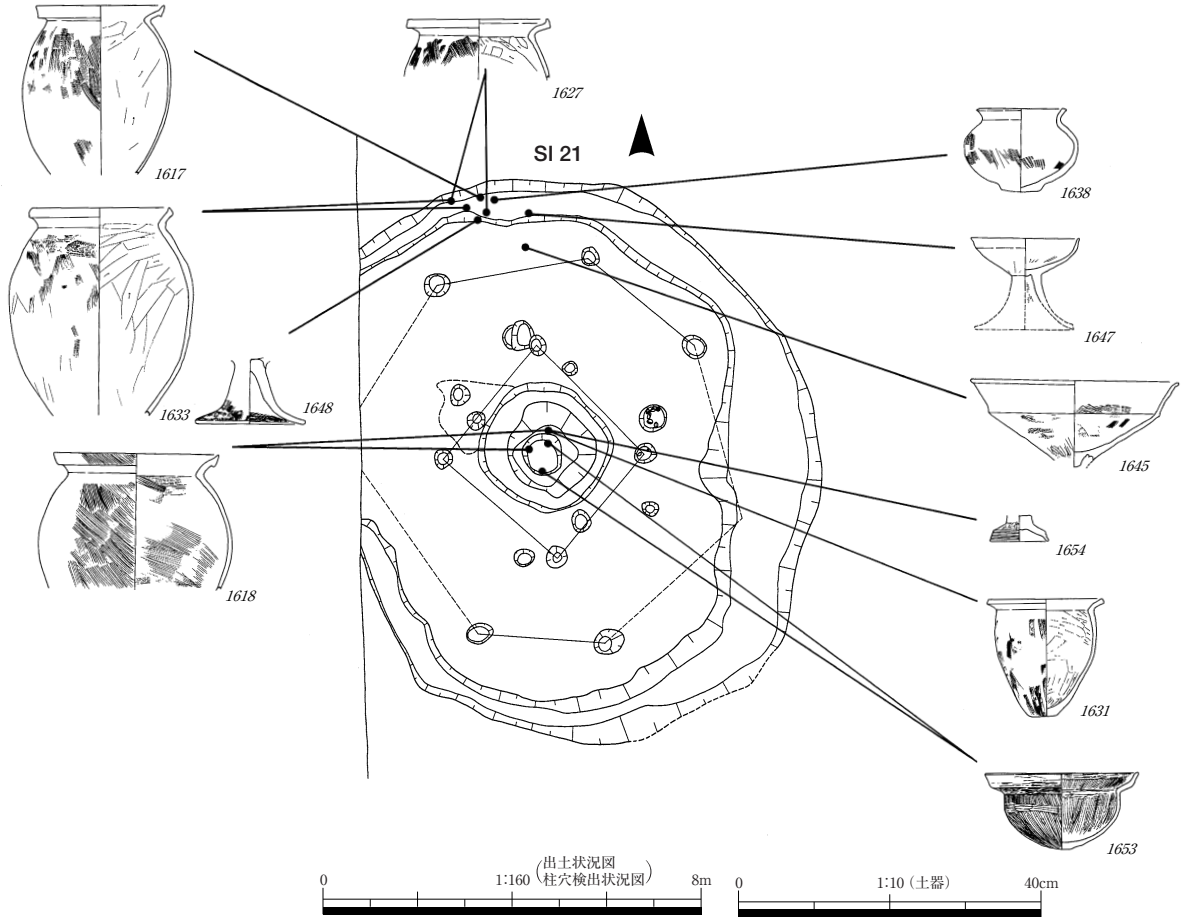
第183図　遺構実測図　(1/40・1/100)
B２地区　ＳＩ20・ＳＢ７

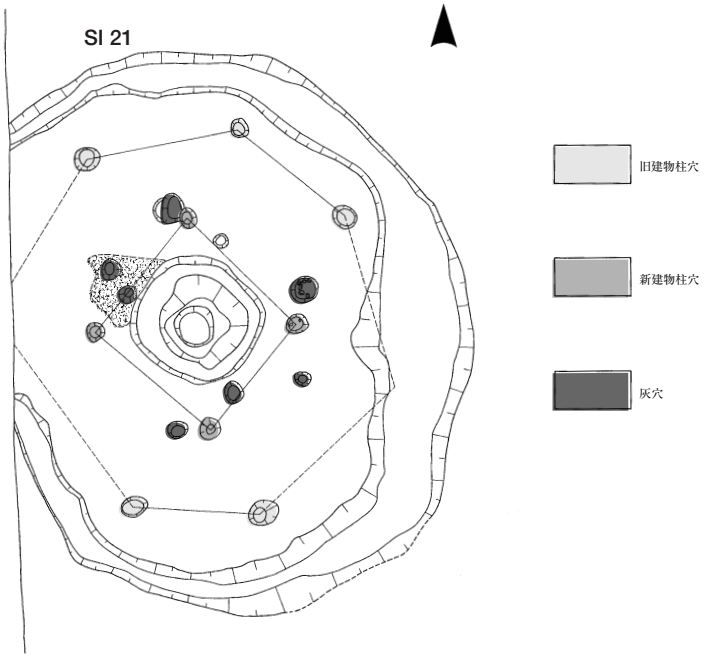




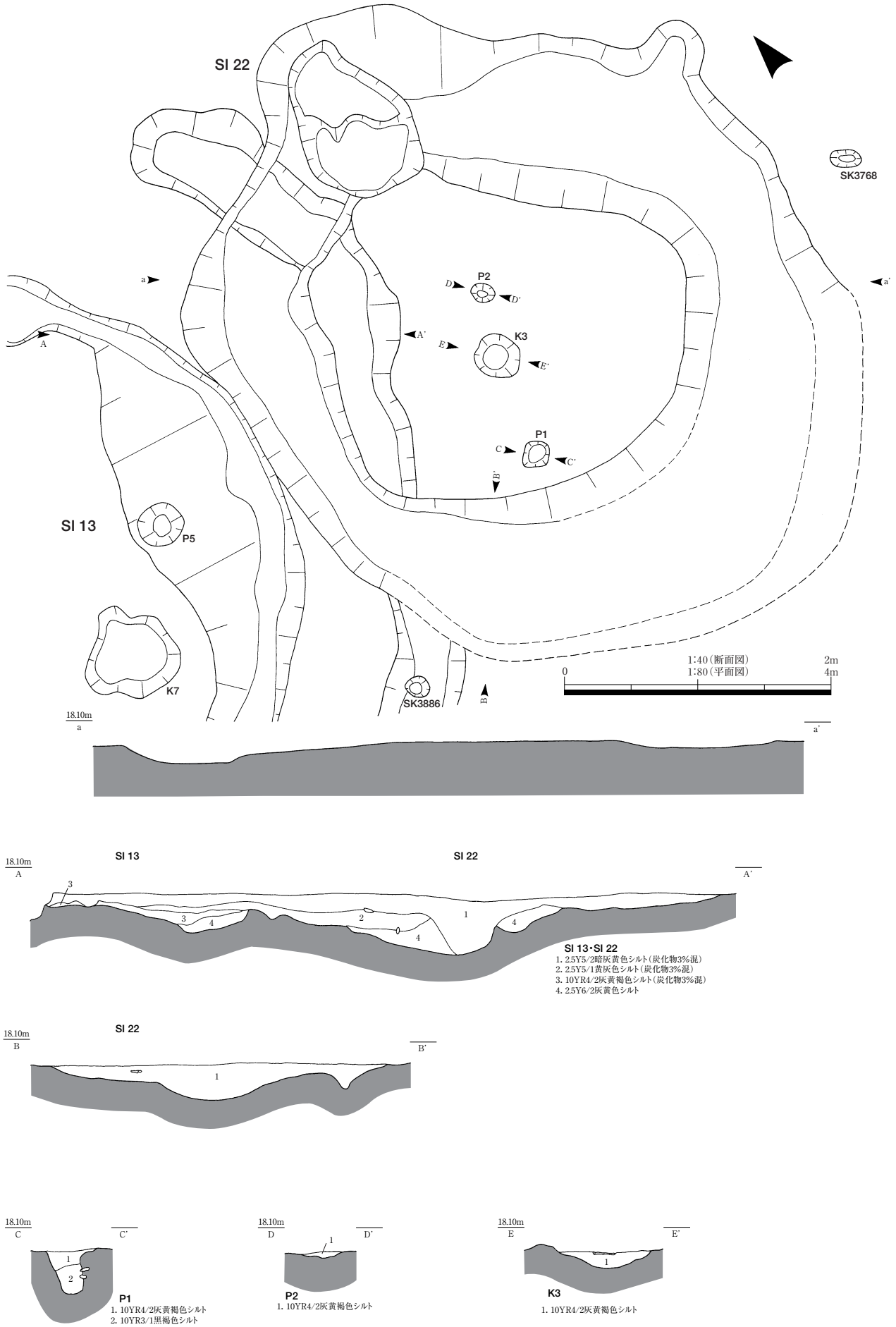
第184図　遺構実測図　(1/40・1/100)
Ｂ６地区　ＳＩ21

第185図　遺構実測図　(1/40)
B６地区　ＳＩ21

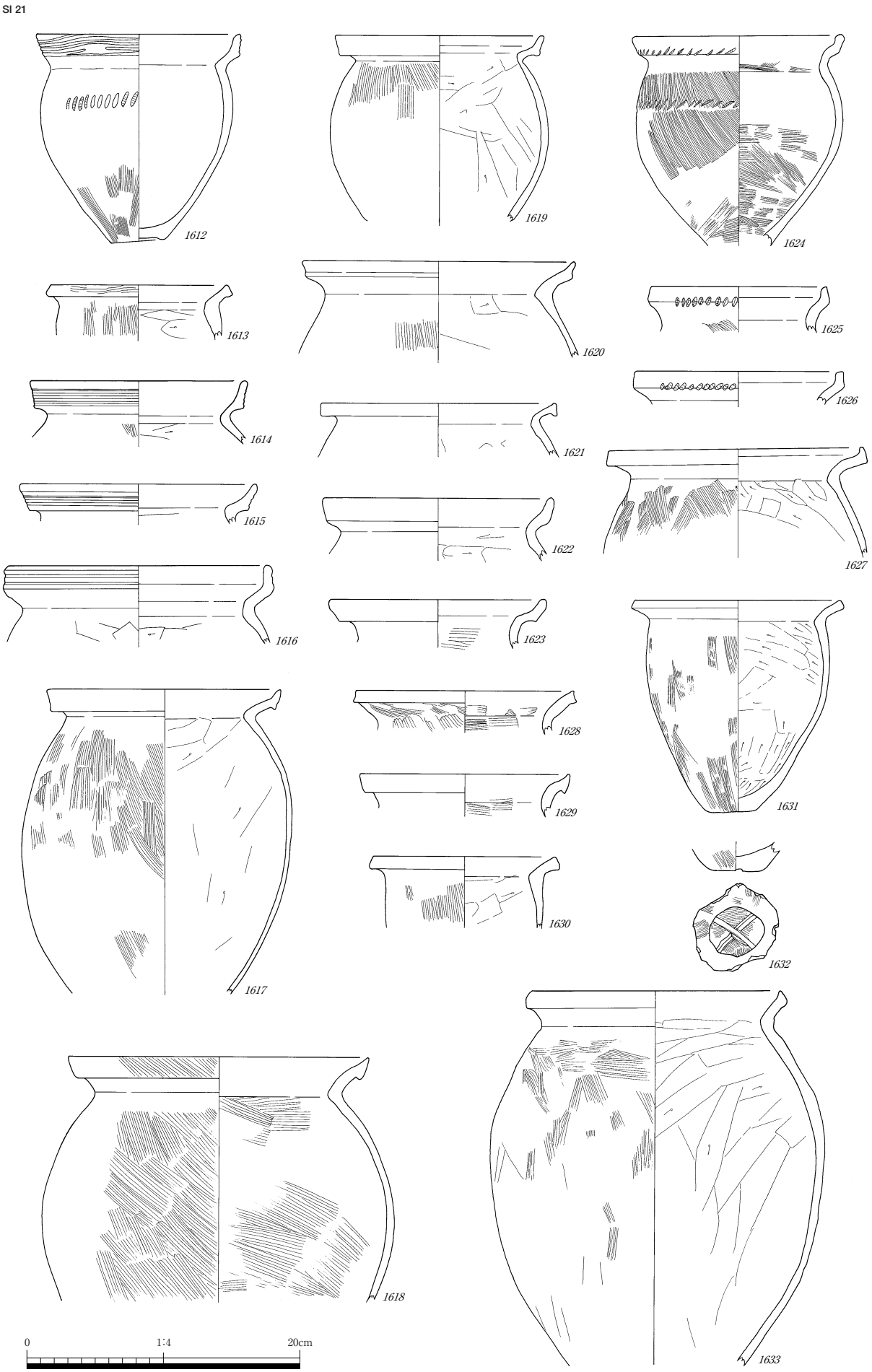




第186図　遺構実測図（1/160，1/10）
Ｂ６地区　ＳＩ21

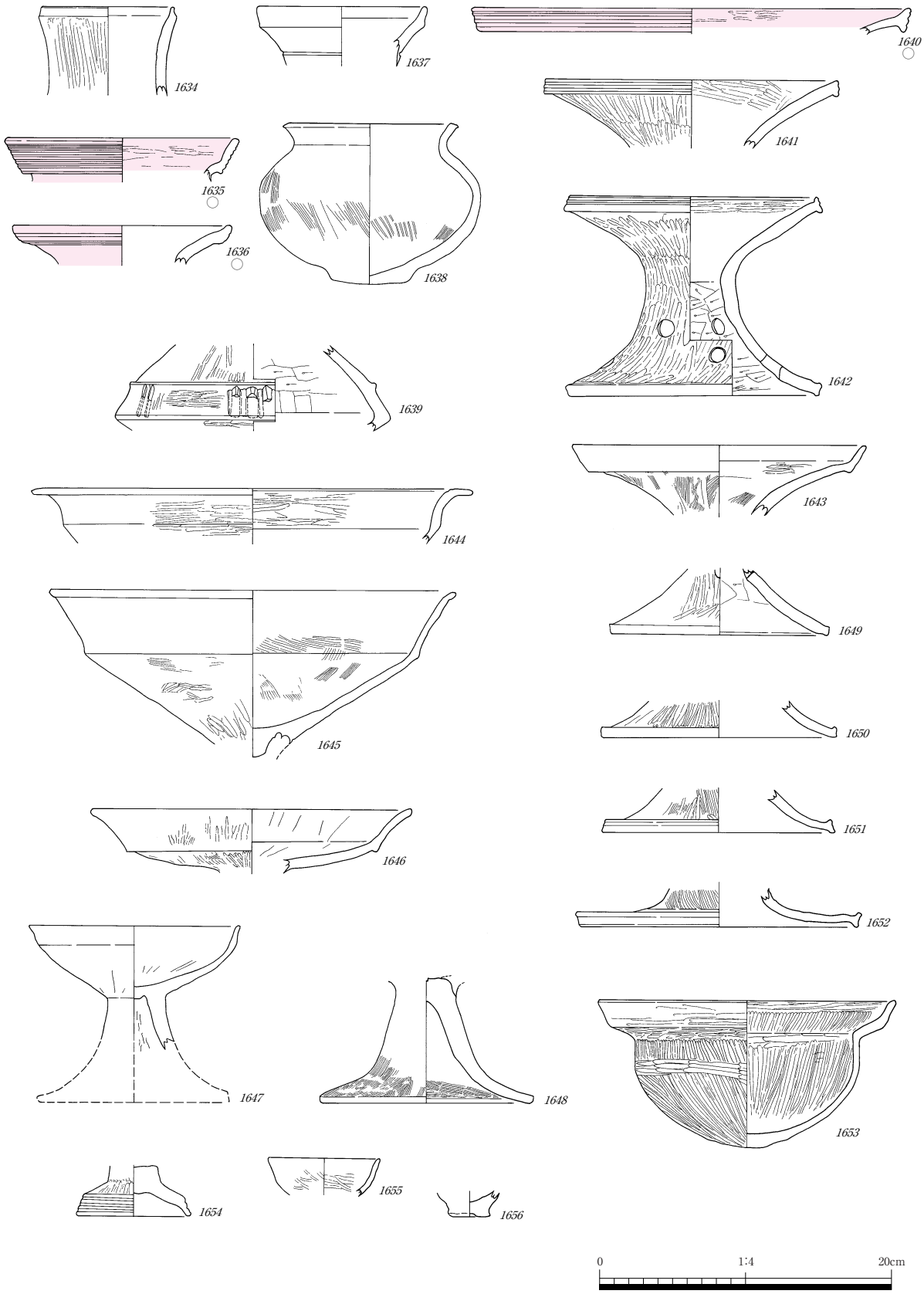


第187図　遺構実測図　(1/40・1/80)
B６地区　ＳＩ13・ＳＩ22

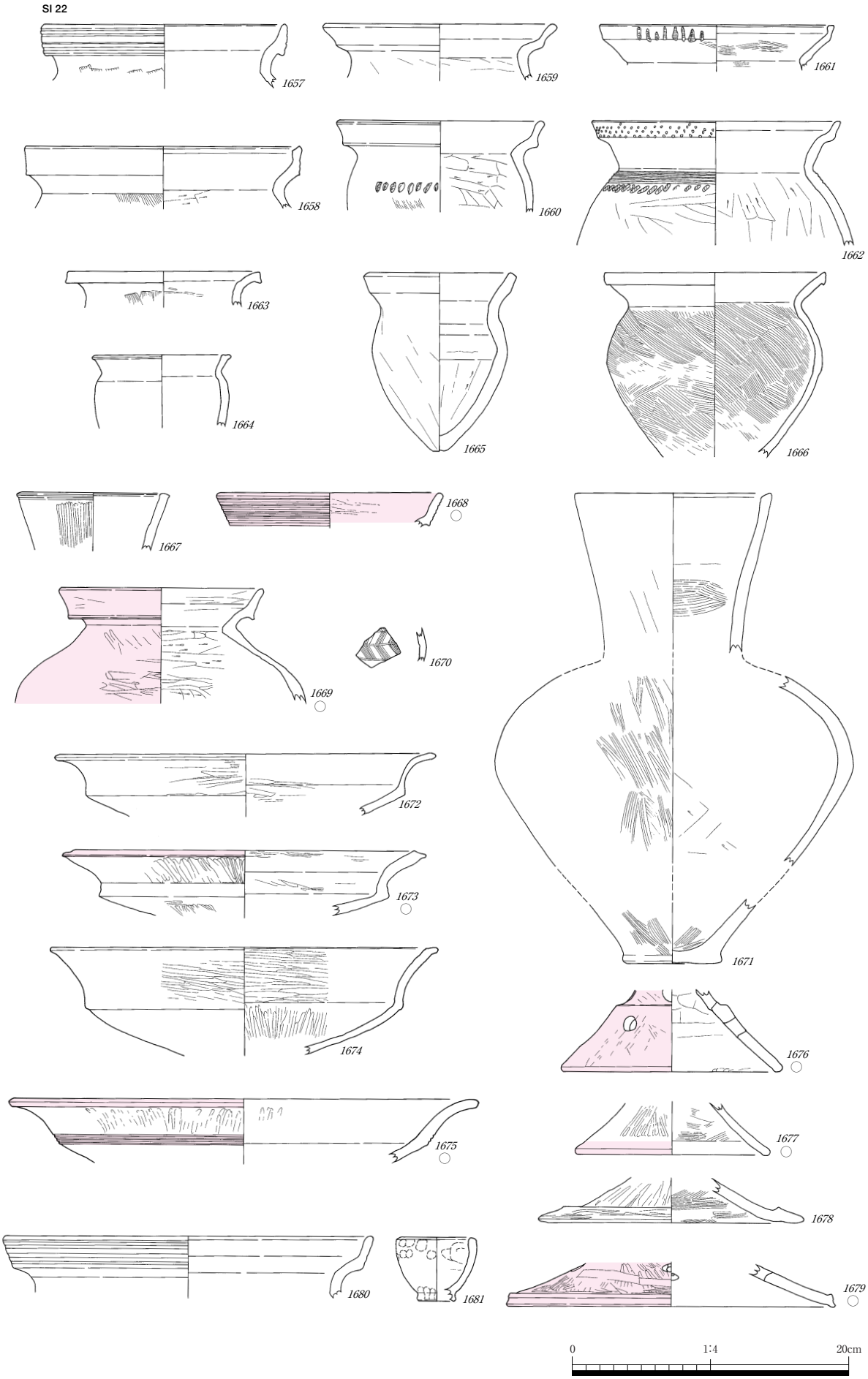


第188図　遺物実測図　(1/4)
Ｂ６地区　ＳＩ21

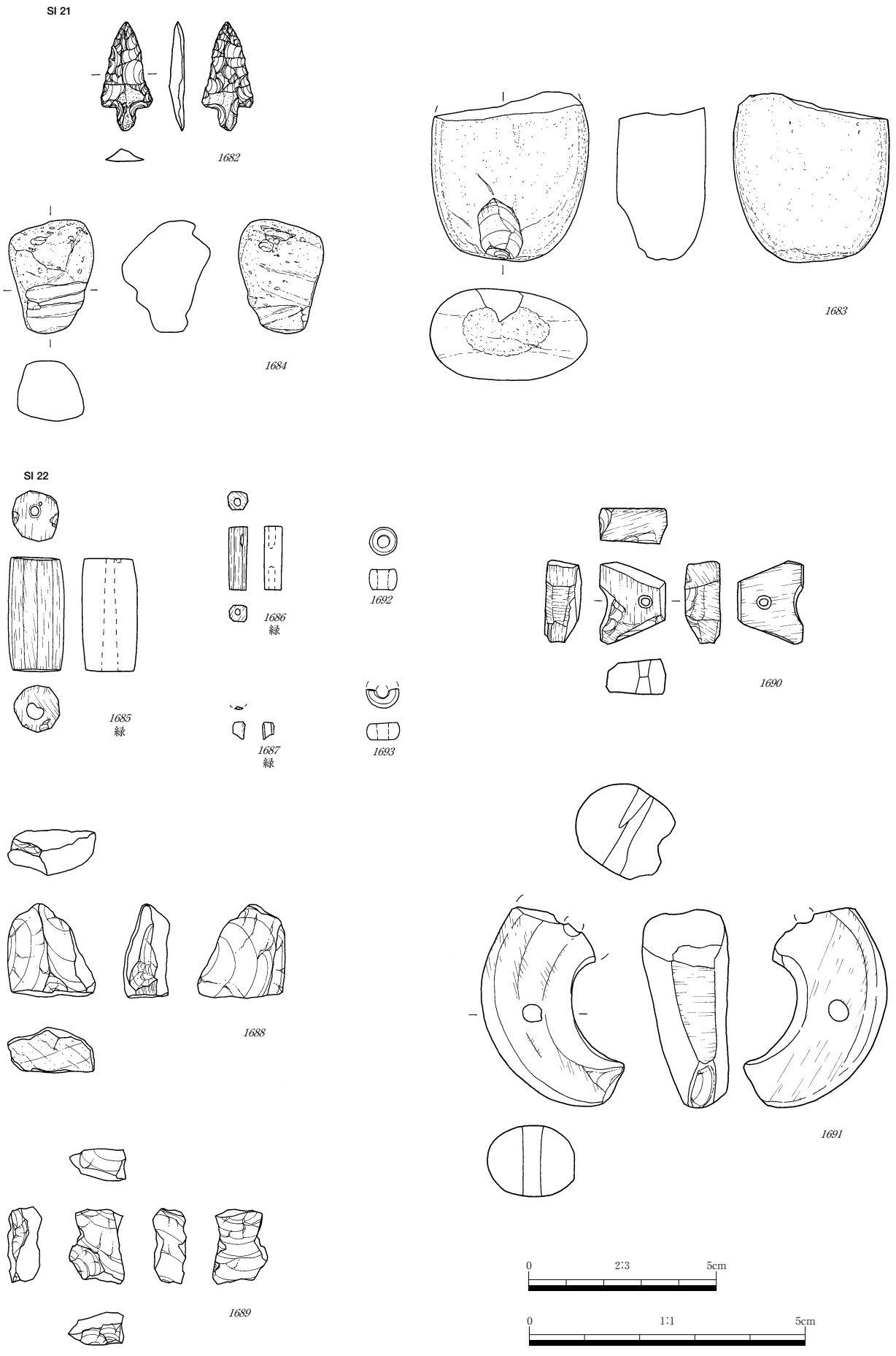
SI 21



第189図　遺物実測図　(1/4)
B６地区　ＳＩ21

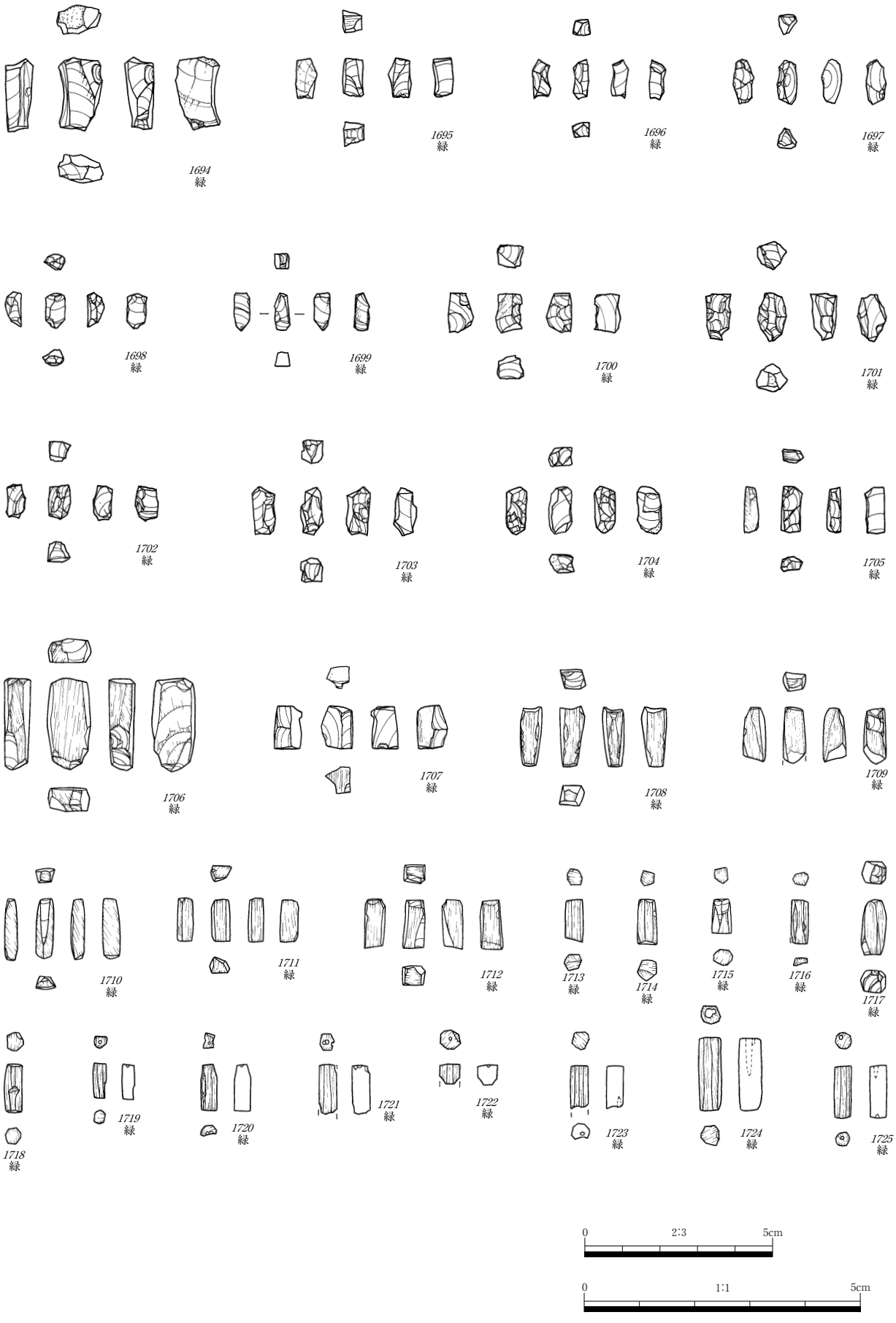


第190図　遺物実測図　(1/4)
Ｂ６地区　ＳＩ22

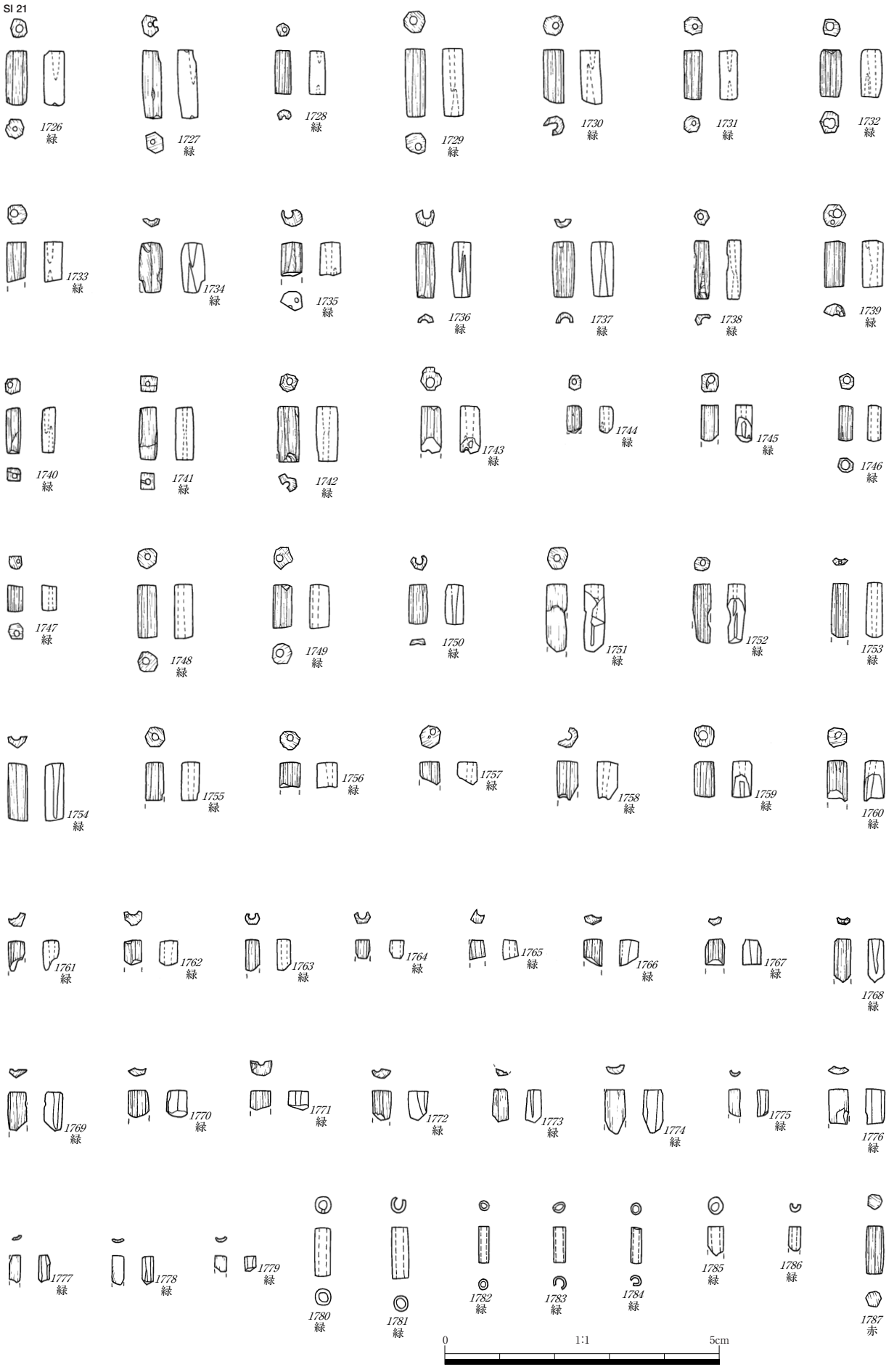


第191図　遺物実測図　(*1685～1687・1690～1693*　1/1, *1682～1684・1688・1689*　2/3)
B６地区　ＳＩ21(*1682～1684*)　ＳＩ22(*1685～1693*)

SI 21



第192図　遺物実測図　（*1706～1725*　1/1，*1694～1705*　2/3）
Ｂ６地区　ＳＩ21



第193図　遺物実測図　(1/1)
B６地区　ＳＩ21

第194図　遺物実測図　(*1794・1797・1798*　1/1, *1788～1793・1795・1796*　2/3)
Ｂ６地区　ＳＩ21

c　周溝式平地建物

23号周溝式平地建物（ＳＩ23，第195，196図）

Ｂ６地区の北側中央部に位置する。楕円形状に溝が巡り，その外側にも楕円形状の溝が巡る。内側の楕円形状の溝の内側からＫ１～４を検出した。Ｋ１からは多くの弥生土器片が出土したが，ＳＩ23に伴うものかは不明である。周溝から弥生土器片・緑色凝灰岩剥片・炭化米が出土した。

24号周溝式平地建物（ＳＩ24，第197・200図，図版30・91）

Ｂ６地区の中央部に位置する。方形状に溝が巡り，その外側に時期を分けてＣ字状の溝が巡る。内外の溝間は若干掘り窪められ，方形状に巡る周溝に囲まれた内側は微高地となっている。ここから遺構は検出されなかった。またＳＩ24や周辺の土坑を含めてＳＤ3873に大きく囲まれる。

遺物は弥生土器・鉄石英剥片が出土した。*1800* は丸縁甕。*1801* は外反器台の受部で，口縁部と内面の周縁に炭化物の付着が認められ，転用されていたことが窺える。

25号周溝式平地建物（ＳＩ25，第198・200図，図版30・89～91・104・166）

Ｂ６地区の北側中央部に位置する。隅丸方形状に溝が巡り，その外側に楕円形状の溝が巡る。隅丸方形状の溝に囲まれた内側から遺構は検出されなかった。ＳＩ26・ＳＨ33・ＳＤ3873を切る。

遺物は弥生土器・軽石・石製玉作関連遺物が出土し，特に弥生土器は周溝から多く出土した。多くは破片で出土したが，周溝の北側では高杯が完形で出土した。また，周溝から炭化米が出土した。

弥生土器には甕・壺・高杯・鉢・蓋がある。

甕は擬凹線甕（*1802*）・有段甕（*1805*）・受口甕（*1803* ・*1804*）・刺突受口甕（*1806* ～*1808*）・平縁甕（*1809* ～*1811*）がある。*1802* は面取りした口縁端部に擬凹線文が施される。*1805* は胴部内外面ハケメ調整で，器面は爆ぜて剥離しているところが多い。受口甕はこの遺構では甕の中で占める割合が高い。胴部はすべて外面ハケメ調整，内面ハケメ・ナデ調整である。*1806* は口縁部にまでハケメ調整されるもので，口縁端部外面と胴部には全体にススが付着するが，肩部には帯状にススの付着が認められず，器面が現れる。*1807* ・*1808* は口縁帯と肩部に刺突文が残り，*1808* には肩部に櫛描き直線文が巡る。*1808* は胴部があまり張らない先細りの器形で，頸部内面にはハケメ調整痕が残る。*1809* はほぼ完形に近い残存状況だったもので，口縁部内面に施されたヨコハケメは端部のみヨコナデで消される。口縁部から胴部下半までは厚くススが外面に付着するが，胴部下半から底部にかけてはススの付着は認められない。底部は上げ底である。

1812 ～*1814* は短頸壺である。口縁端部が丸縁のものと内端面に面を取るものがある。*1814* には口縁部外面に２重線でＵ字状のヘラ描きが認められ，これと同じ記号が南側に隣接するＳＩ16から出土した３個体の長頸壺にも残っている。

高杯はすべて有段高杯（*1815* ～*1817*）である。*1815* は周溝から出土した完形の高杯で，やや深めの杯底部に短く外反する口縁部が付く。外面の調整は縦方向のヘラミガキ調整で，内面は口縁部が横方向，杯底部が縦方向のヘラミガキ調整である。口縁部と杯底部の接合の仕上げはやや雑で，ナデつけが緩い。脚部はやや膨らみをもった太めの脚基部にハの字状に外展する裾部がつくもので，裾端部は面取りされる。透孔は３箇所に穿たれる。*1816* は口縁部と杯底部の境には擬凹線文が巡り，口縁部外面には部分的に赤彩痕が残る。口縁部はヨコナデ，杯底部は縦方向のヘラミガキ調整である。*1817* は脚基部で，裾部が開脚する脚部である。脚裾端部は面取りされ，上面に貼り付けられていた粘土帯は剥落している。裾部中央には４箇所に透孔が穿たれ，内面はケズリ調整される。*1818* ・*1819* は高杯の脚部である。*1819* は脚基部が棒状で，裾部に透孔が４箇所穿たれる。

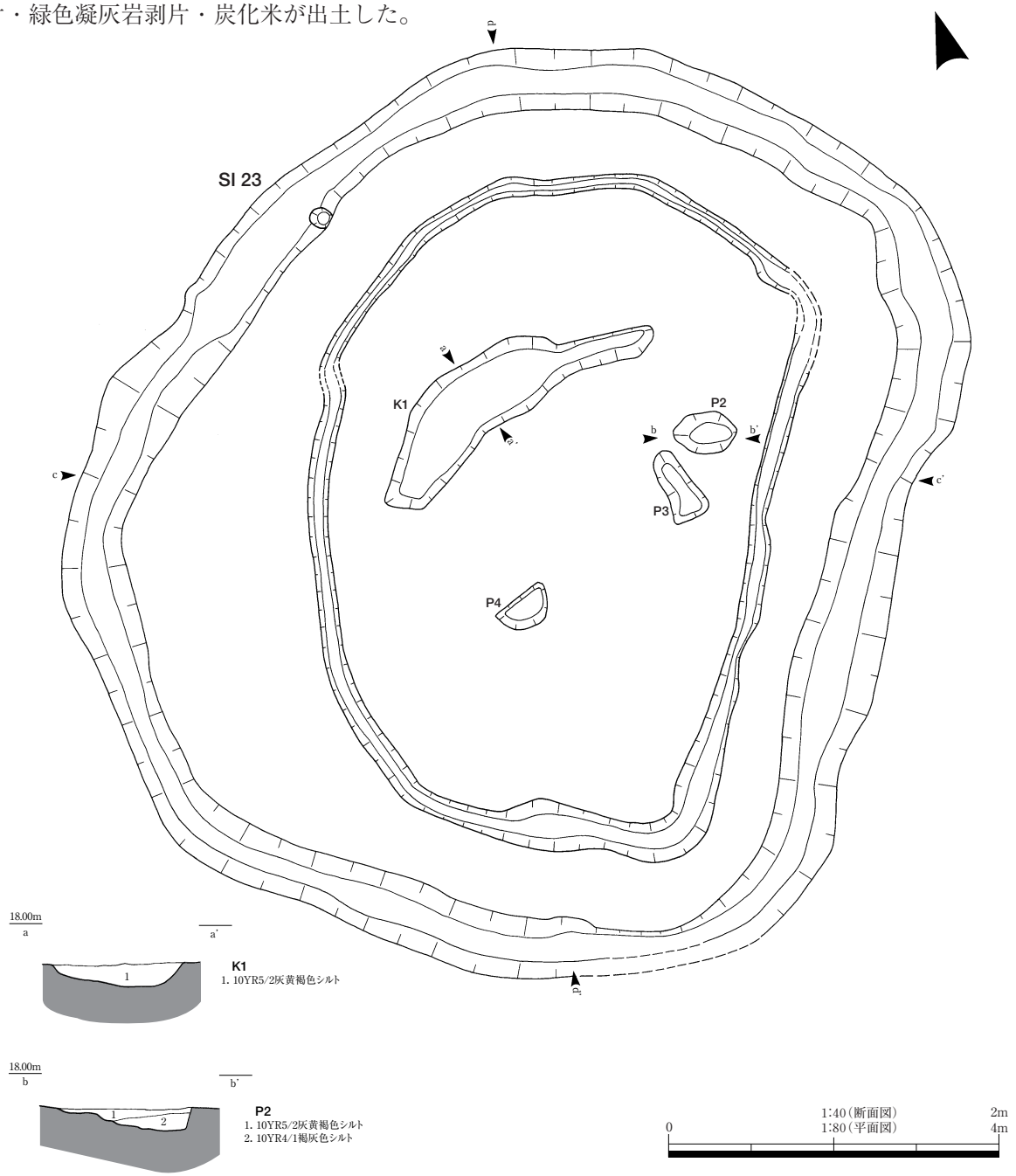
1820 は片側に把手が付く丸底の無頸鉢である。把手の下端は欠損する。口縁部ヨコナデ調整，体部外面ハケメ調整。内面ヘラケズリ調整である。

1821 はつまみの端部が欠損する有鈕蓋。口縁部は椀形の器形で，つまみは直立する。外面はハケメ後ヘラミガキ調整，内面はナデ調整である。*1822* も蓋の口縁部で，外面ハケメ後ヘラミガキ，内面ナデ調整である。

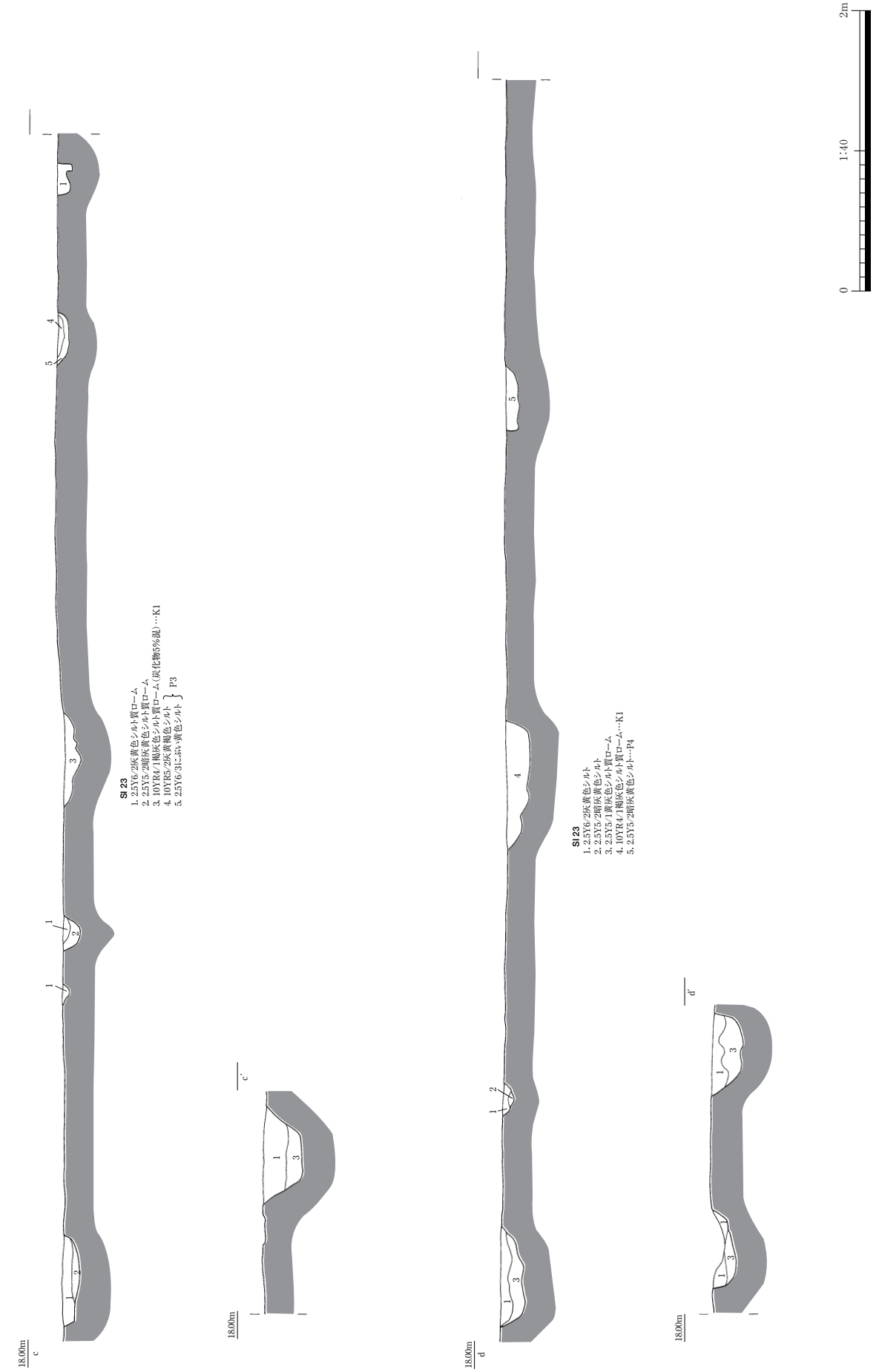
石製玉作関連遺物は周溝から緑色系の不明石材の加工品が出土した。*1799* は表面の一部に仕上げのような光沢をもつ研磨が施されている。勾玉の未成品か。そのほか緑色凝灰岩剥片，鉄石英剥片が出土した。

26号周溝式平地建物（ＳＩ26，第199図）

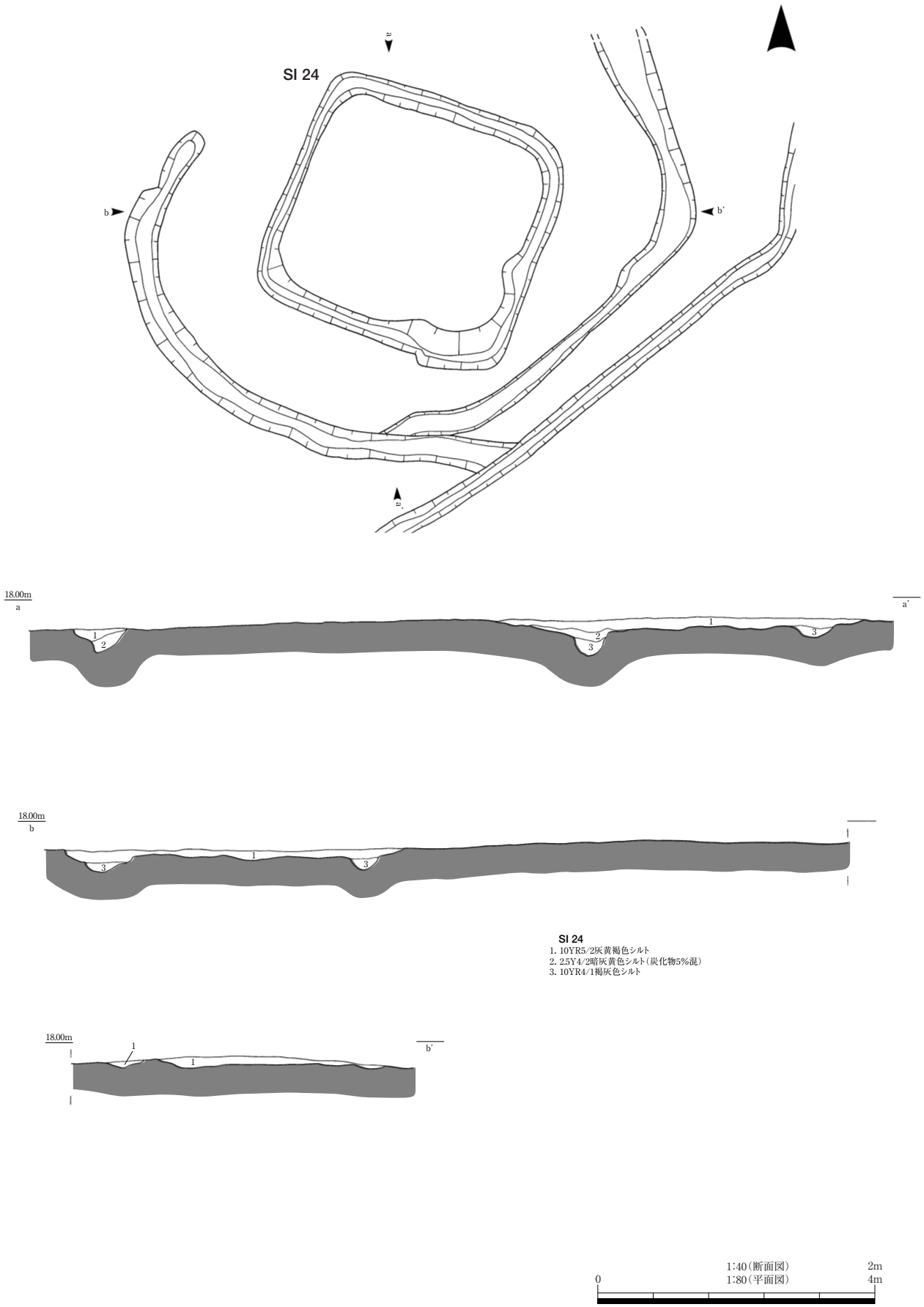
Ｂ６地区の北側中央部に位置する。方形状に溝が巡り，その外側に楕円形状の溝が巡る。方形状の溝に囲まれた内側から遺構は検出されなかった。ＳＩ23を切り，ＳＩ25に切られる。遺物は弥生土器片・緑色凝灰岩剥片・炭化米が出土した。



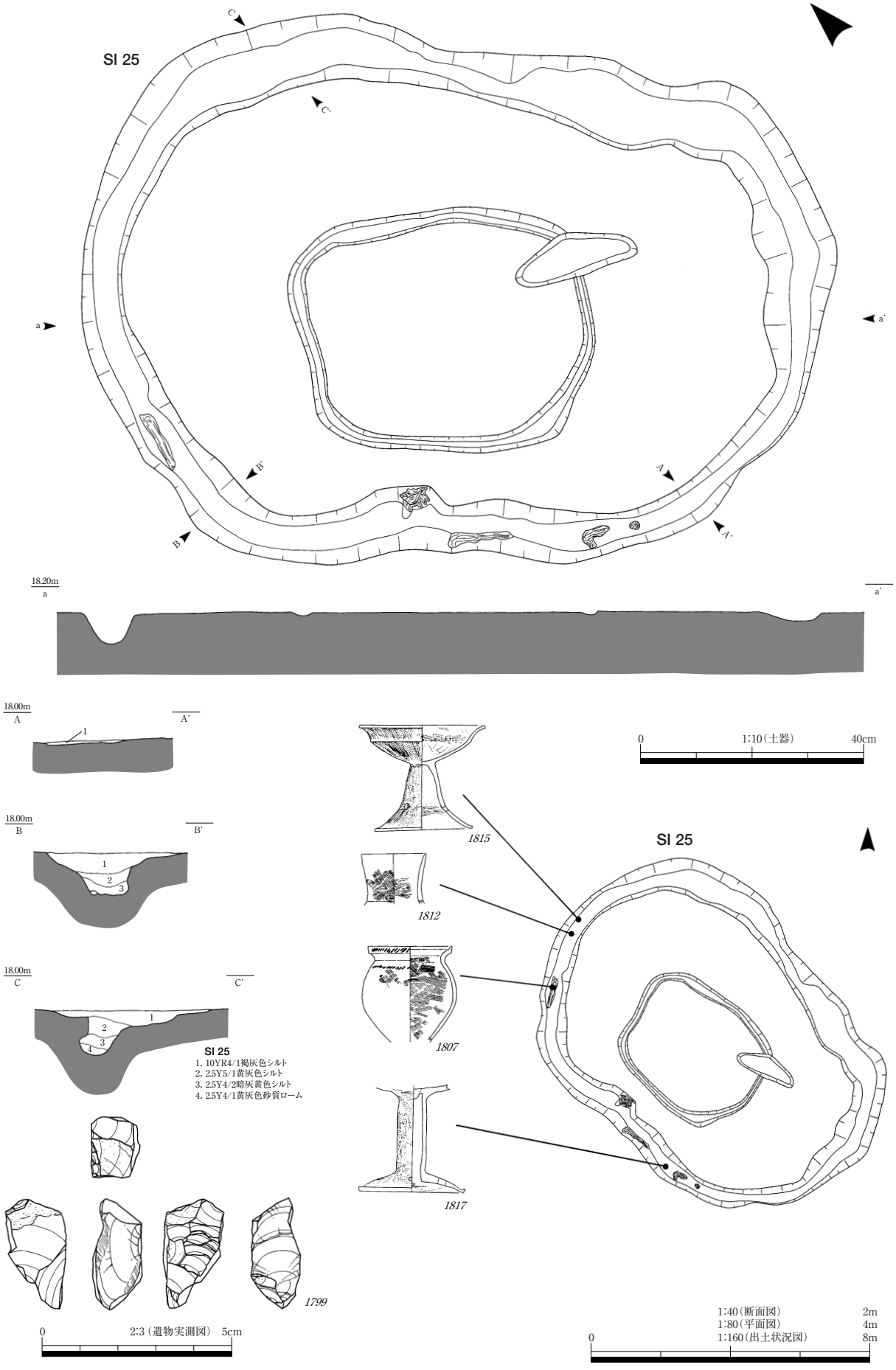
第195図　遺構実測図（1/40・1/80）
Ｂ６地区　ＳＩ23



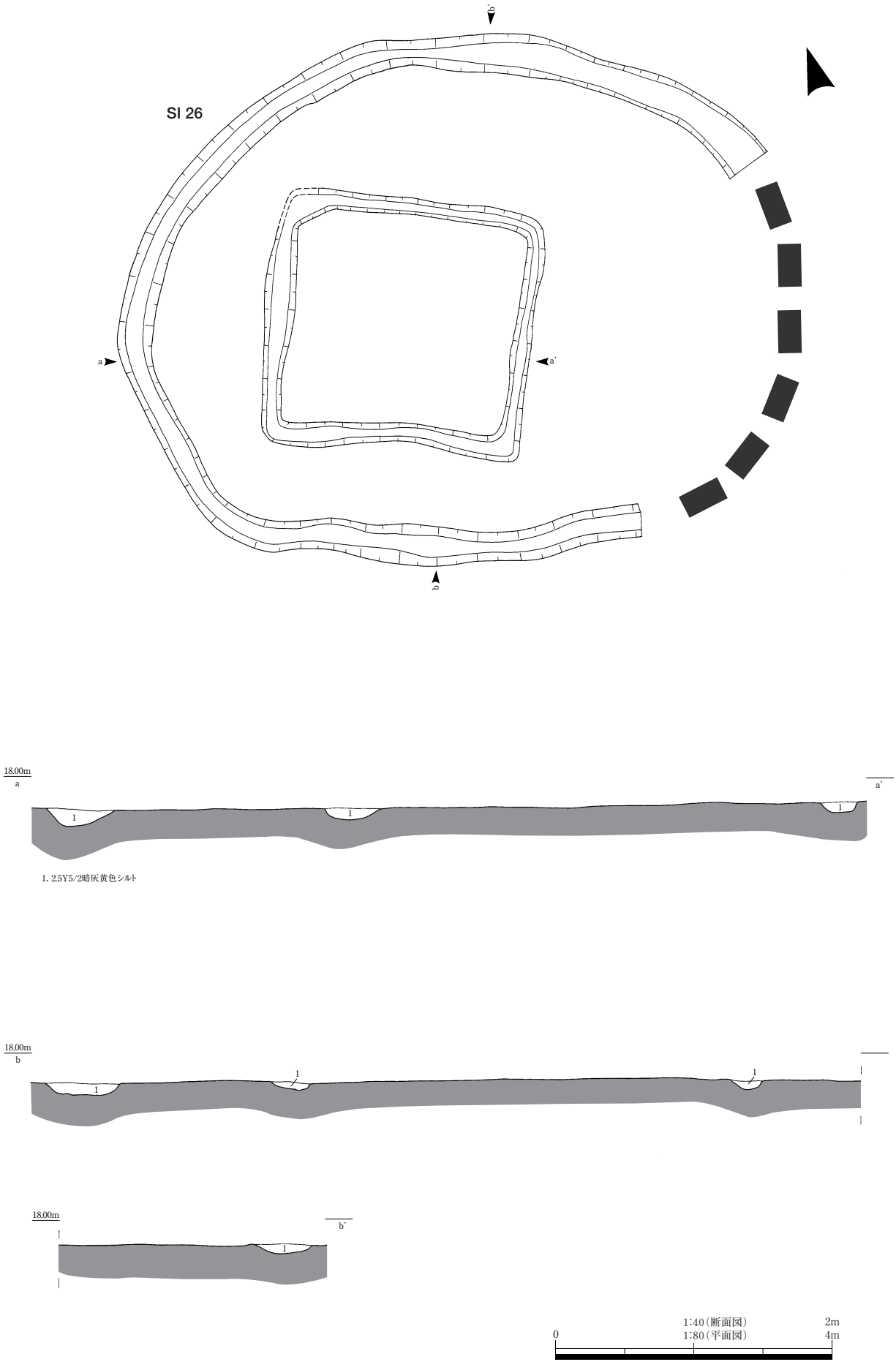
第196図　遺構実測図　(1/40)
B 6 地区　ＳＩ23



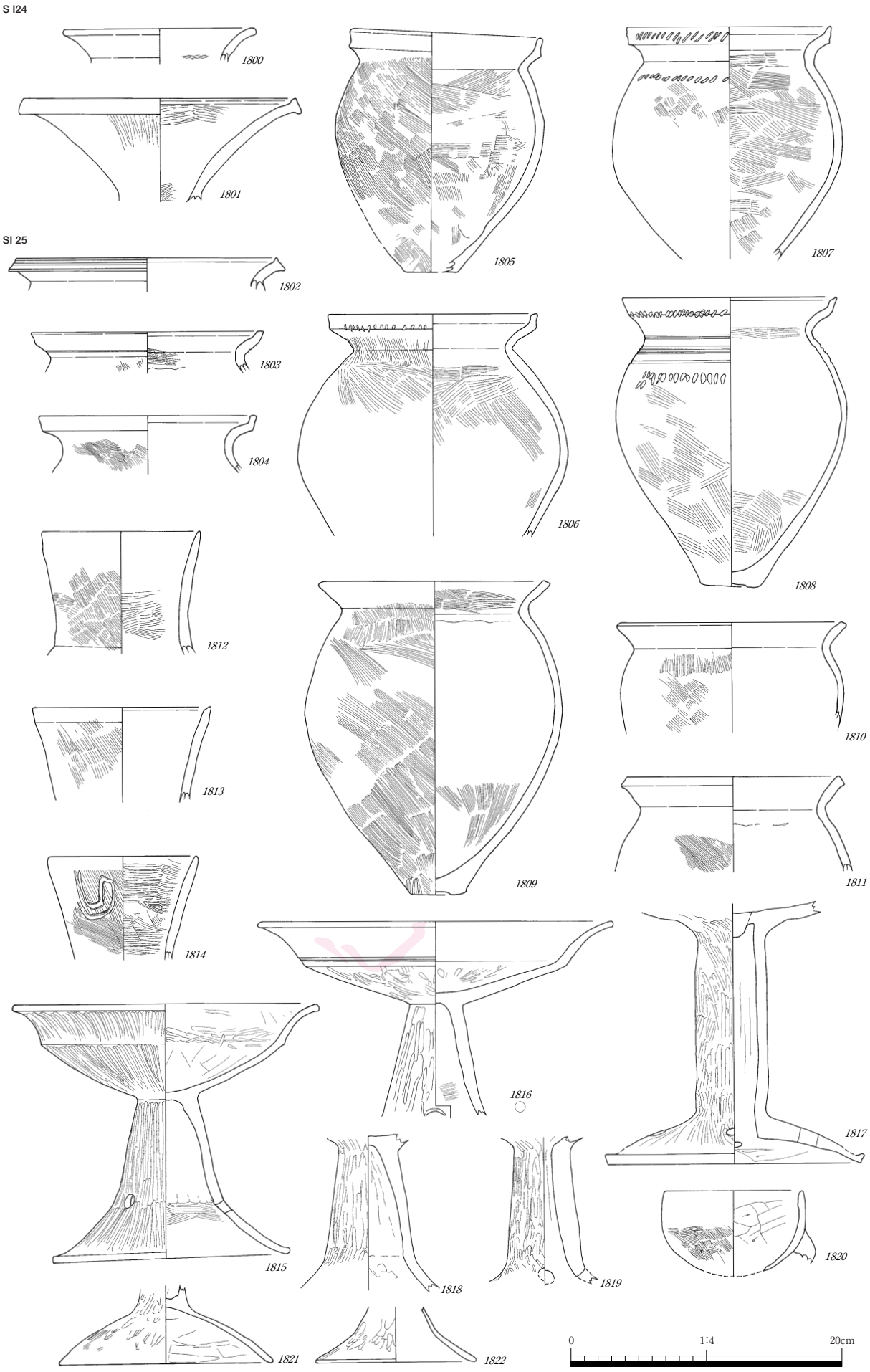
第197図　遺構実測図　(1/40・1/80)
Ｂ６地区　ＳＩ24



第198図　遺構・遺物実測図　(1/40・1/80・1/160，2/3・1/10)
B 6 地区　S I 25(*1799*)



第199図　遺構実測図　(1/40・1/80)
Ｂ６地区　ＳＩ26



第200図　遺物実測図　(1/4)
B６地区　ＳＩ24(*1800・1801*)　ＳＩ25(*1802～1822*)

B　掘立柱建物

a　周溝式掘立柱建物

1号周溝式掘立柱建物（ＳＢ１，第201図，図版30・92）

Ｂ５地区の南東に位置する。周溝は全周し，北東側で排水溝ＳＤ3578に接続し，調査区外ではあるが自然流路ＳＤ2541へ流れるものと考えられる。形状は隅丸方形を呈する。周溝の埋土は２層あり，２層目に炭化物が多く含まれる。深さは14～20㎝を測る。周溝の幅は西側が他の部分に比べ広くなっている。排水溝は２層の埋土からなり，深さは約14㎝。中央付近で埋土に炭化物を多く含むＳＫ3592を切る。周溝内部にはＢ７地区ＳＢ２と同規模の柱穴があるが，検出状況が悪く並ばなかった。遺物は少なく，周溝から弥生土器片が出土している。*1823* は高杯の裾部。４方透孔と考えられる。内外面にススが付着し，破損後蓋としての二次利用が窺える。

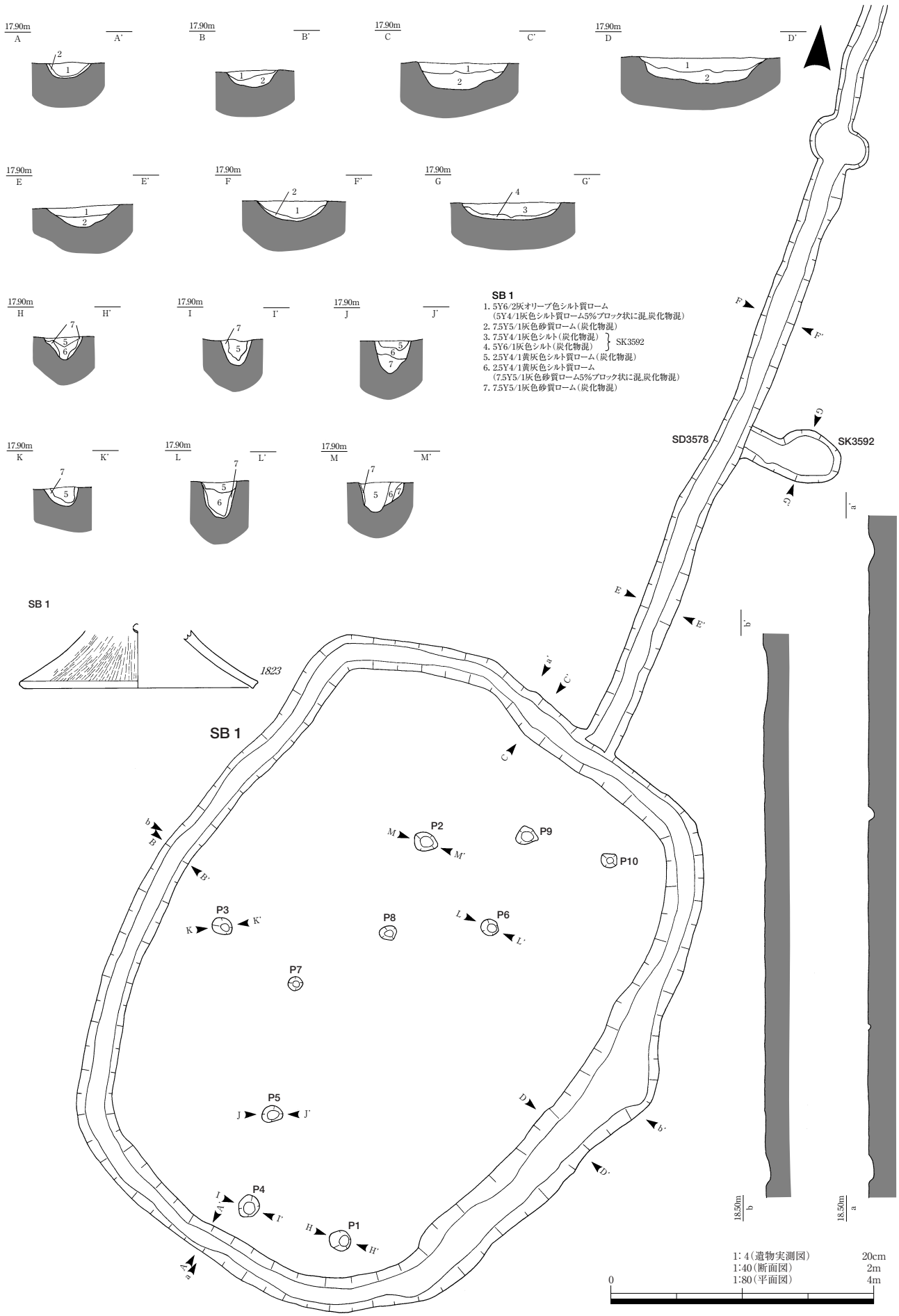
2号周溝式掘立柱建物（ＳＢ２，第202図，図版30・31・85・139）

Ｂ７地区南東部に位置する。周溝の内側に３間×１間の掘立柱建物が建つ。ＳＤ4012はＳＢ２の周溝と周溝式竪穴建物ＳＩ19の周溝を連結し，排水溝の機能を持つと考えられる。

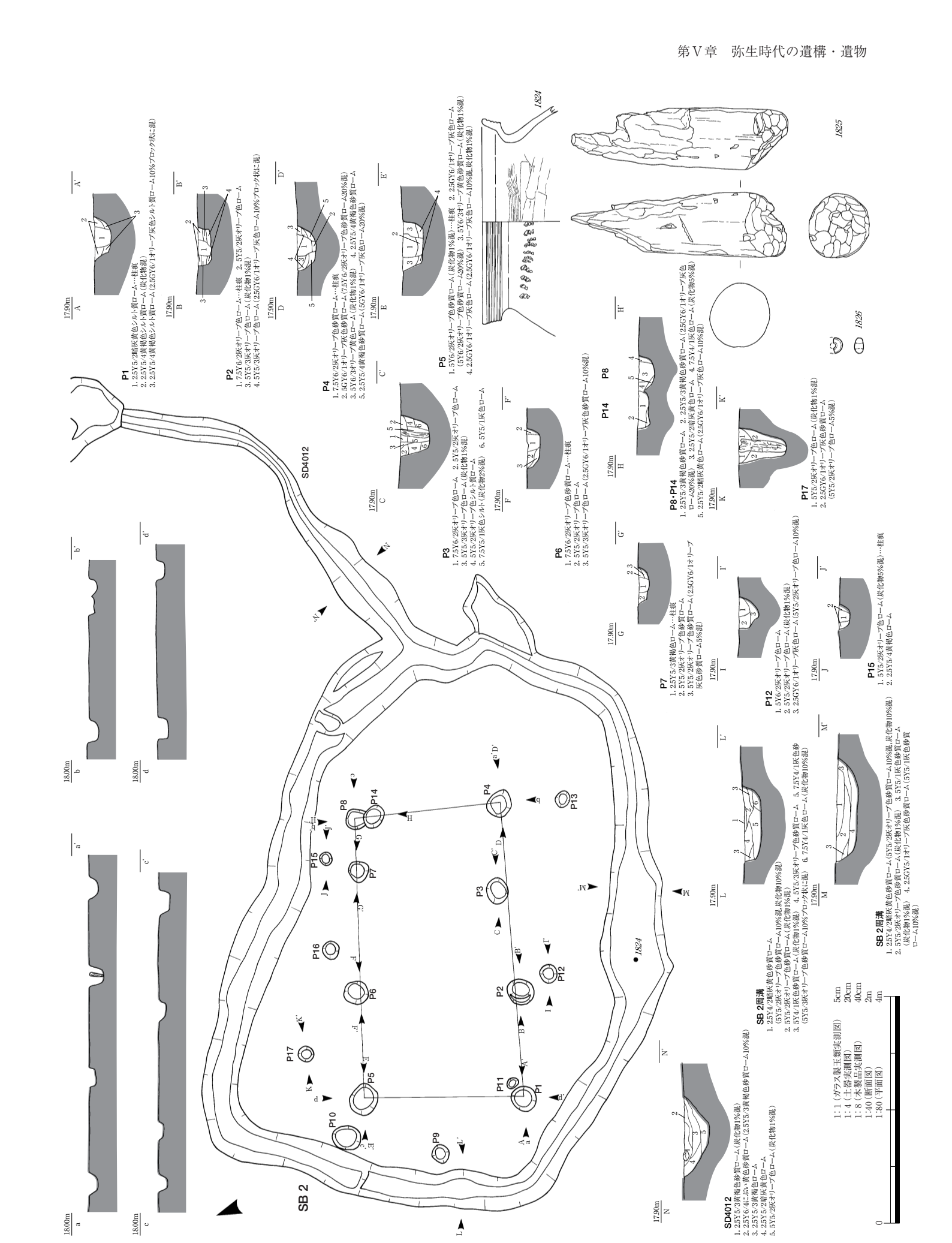
掘立柱建物は桁行5.1ｍ，梁行2.8ｍで，主軸方向はＮ－75°－Ｗの東西棟である。８基の柱穴は規模が直径約35～50㎝，深さ10～26㎝を測り，Ｐ３のみ柱根が遺存していたが，ほか７基ではすべて柱痕跡を確認している。また周溝の内側には建物を構成するには至らなかった土坑が９基あったが，Ｐ17は柱根が遺存しており，Ｐ15では柱痕跡を確認した。周溝は幅約70～90㎝，深さ約20㎝で，隅丸方形に巡り，長軸10ｍ，短軸6.8ｍを測る。軸方向はＮ－57°－Ｗである。周溝内部からはまとまって弥生土器が出土した。

ＳＢ２の建物軸方向は周溝軸方向とズレが生じており，この周溝内側で建て替えが行われた可能性がある。ＳＤ4012によってＳＩ19と連結しているため，この２つの建物の存在時期を考えると，ＳＢ２の梁行の軸方向はＮ－14°－ＥとＳＩ19新段階の柱穴軸方向と似ており，同時期に存在したのではないかと考える。またＳＩ19旧段階の軸方向は判然としないながらも，新段階の軸方向よりもやや東にふると考えられ，ＳＢ２もまた，建物の軸方向よりも周溝の軸方向が東にふることから，ＳＢ２の旧段階においてはＳＩ19旧段階と同時期に軸方向を揃えて建てられていた可能性がある。どちらの建物においても周溝は旧段階のままを利用して，内部の建て替えを行ったのではないだろうか。

遺物は柱根のほか，周溝内から弥生土器，ガラス製小玉，炭化米が出土した。*1824* は擬凹線甕で，肩部外面に櫛描き列点文，頸部内面はヨコハケで面取りする。*1825* はＰ17の柱根。木口は伐採時のままか，２方向からの粗い工具痕が残る。樹種はミズメ。*1826* はガラス製小玉。半分欠損しているが，均一に丸みを帯び，整った形状である。色調は瑠璃色で，Ａ７地区ＳＩ１で出土した*220*・*221* と比較すると青みが強い。炭化米は周溝内埋土を土壌洗浄して検出したもので，放射性炭素年代測定を行ったところ，^{14}Ｃ年代で1890±40と測定された。



第201図　遺構・遺物実測図　(1/40・1/80，1/4)
B５地区　ＳＢ１(*1823*)・ＳＫ3592・ＳＤ3578



第202図　遺構・遺物実測図（1/40・1/80，1/1・1/4・1/8）
B 7 地区　S B 2（*1824～1826*）・S D4012

b　掘立柱建物

7号掘立柱建物（ＳＢ７，第183図）

Ｂ２地区の南東部に位置する。包含層掘削後，盛土ＳＸ3990上面で検出した。従って，盛土下で検出したＳＩ20より新しい遺構である。１間×１間，桁行1.8m，梁行1.6m，平面積は2.88㎡である。主軸の方位はＮ－21°－Ｅである。柱穴は４基ある。平面は楕円形で，最大径20～24㎝，深さ16～23㎝を測る。Ｂ６地区で検出された掘立柱建物に比べ柱穴の規模が小さく，小規模で簡易な建物だったことが考えられる。埋土は黒褐色シルトの単層である。埋土から，この建物はＳＤ2560・2561・2562・2584・2587・2622などの溝と同時期のものと考えられ，溝に挟まれた微高地上に立地する。遺物は出土していない。

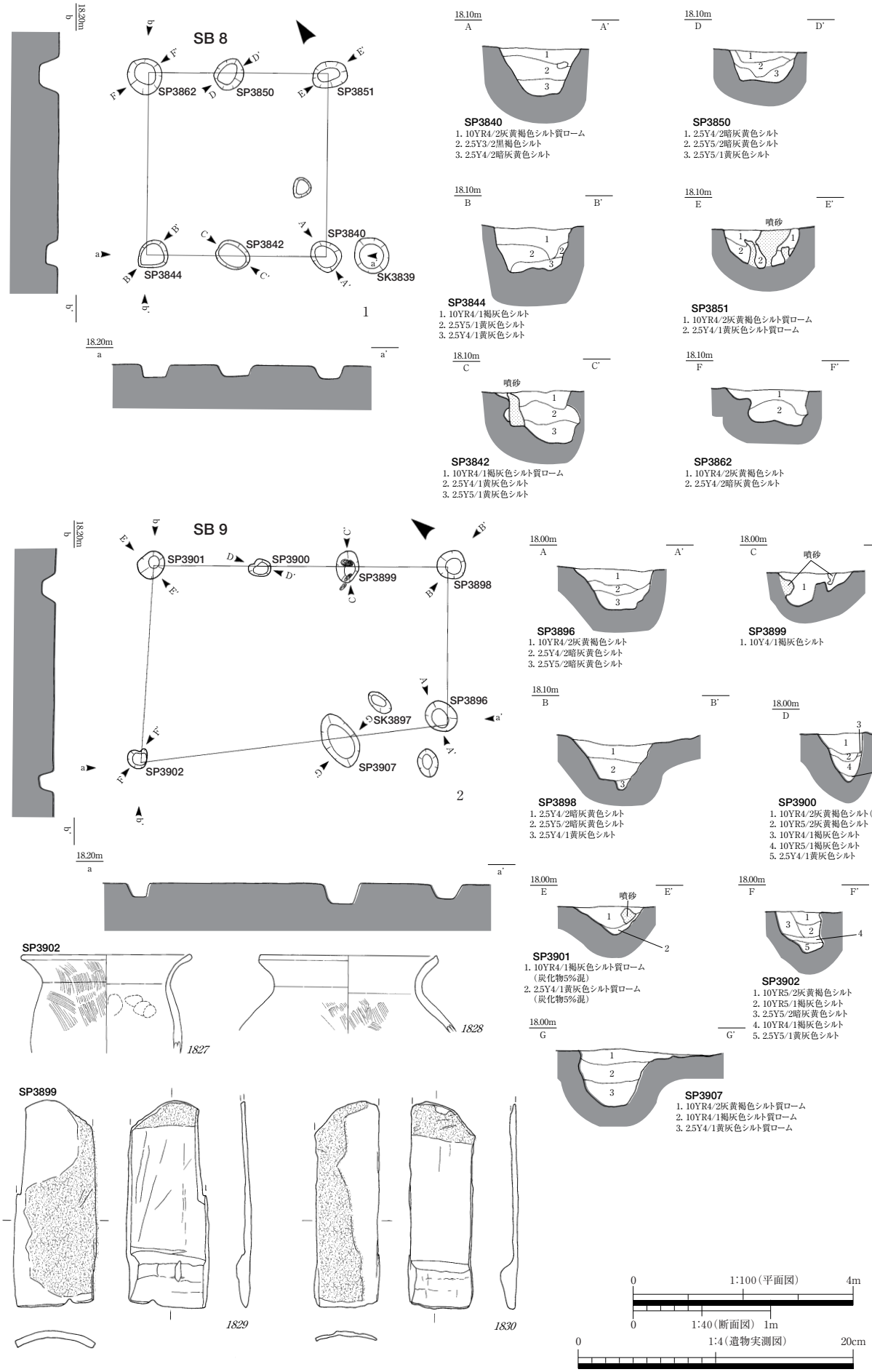
8号掘立柱建物（ＳＢ８，第203図，図版31）

Ｂ６地区の中程，ＳＩ15・16の間の南側に位置する。２間×１間，桁行3.3m，梁行3.3m，平面積は10.89㎡である。主軸の方位はＮ－53°－Ｗである。周辺の竪穴建物や周溝遺構，畠跡と思われる溝群などの主軸方向もほぼ同じ向きになっている。柱穴は６基あるが柱根は残存していなかった。柱穴平面は楕円形で，最大径が51～65㎝，深さが27～38㎝を測る。遺物は弥生土器片が出土した。また，ＳＩ16とＳＢ８の間に相当する所では，包含層からであるが勾玉の未成品が３点出土した。

9号掘立柱建物（ＳＢ９，第203図，図版31・91）

Ｂ６地区の中程，ＳＩ15の北側に位置する。３間×１間，桁行5.4m，梁行3.6m，平面積は19.44㎡である。主軸の方位はＮ－46°－Ｗである。柱穴は７基が検出され，ＳＰ3899～3902・3907は柱根が残存していた。柱穴平面は楕円形で，最大径が39～103㎝，深さが20～41㎝を測る。

遺物は弥生土器・柱根のほか，ＳＰ3899からは桶が出土した。*1827*・*1828*はＳＰ3902から出土した丸縁甕である。*1827*は外面タテハケメ調整，内面はヨコナデ調整で，胴部内面には指押さえ痕が残る。*1828*の口縁部は口縁上端部を摘み上げる形態である。*1829*・*1830*は刳物桶の断片。*1829*・*1930*は同一個体と考えられるが，接合できる部分ではない。いずれも上部は欠損し，内外面が部分的に炭化する。底部内面の段は突帯状に削り出される。直径10～15㎝の小型桶かと考えられる。樹種はスギ。



第203図　遺構・遺物実測図　（1/40・1/100，1/4）

B６地区　1.ＳＢ８　ＳＰ3840・ＳＰ3842・ＳＰ3844・ＳＰ3850・ＳＰ3851・ＳＰ3862
　　2.ＳＢ９　ＳＰ3896・ＳＰ3898・ＳＰ3899（*1829*・*1830*）～ＳＰ3902（*1827*・*1828*）・ＳＰ3907

C　周溝遺構

11号周溝遺構（ＳＨ11，第204・220・270図，図版91・92）

Ｂ５地区の西側に位置する。周溝は全周し，隅丸方形を呈する。また，内部に南東から北西方向に溝があり，切り合い関係にないことから付属施設と考えられる。周溝の埋土は３層あり，２層目に炭化物が多く含まれている。深さは20～24㎝を測る。

遺物は周溝から弥生土器甕・高杯片，若干量の緑色凝灰岩剥片・鉄石英剥片が出土している。*1837*～*1839* は甕。*1837* は擬凹線甕で３条の擬凹線を施す。*1838* は刺突受口甕で口縁部にヘラ状工具による連続刺突文を施す。*1839* は付加状甕か。*1840* は台付壺で，突帯部に擬凹線状のナデを施す。底部スス付着。*1841* は有段高杯。*1842* は外面赤彩で裾端部を剥落する。*1843* は無頸鉢。外面はススが付着し，黒斑が残る。

12号周溝遺構（ＳＨ12，第205・270・271図）

Ｂ５地区の中央に位置する。周溝は全周し，南東隅で排水溝に接続し，ＳＤ3546へ流れる。形状は周溝部分が隅丸方形で，排水溝まで含めると９字状を呈する。周溝の埋土は３層あり，噴砂に切られる。深さは26～40㎝を測る。排水溝は２層の埋土からなり，深さは約16㎝。遺物は少なく，周溝から弥生土器片が出土している。

13号周溝遺構（ＳＨ13，第204・220・221図，図版92・162）

Ｂ５地区の北側に位置する。その位置から隣接するＳＩ10（新・旧）の付属施設と考えられる。周溝は全周し，隅丸方形を呈する。周溝の埋土は２～３層あり，炭化物が含まれている。深さは16～30㎝を測る。

遺物は周溝から弥生土器片，砥石，緑色凝灰岩石核・剥片が出土している。*1844* は有段甕。口縁端部を面取りし，受口状口縁の変形か。*1845* は装飾広口壺。口縁端部を面取りし，３条の擬凹線と２個１対の竹管文を４箇所に施す。頸部は貼り付け突帯をもつ。東海系か。*1868* は凝灰岩製の砥石。大部分が欠損しており，破片の状態であるが，表・側面が平坦面を持ち，細かい線状痕がみられる。中～仕上げ砥と思われる。裏面は平坦であるが，表・側面ほど平坦ではなく，整形加工後砥面としての使用はほとんどなかったと思われる。*1869* は緑色凝灰岩石核。緑色の部分は硬質であるが石核の大部分は緑色ではなく玉の素材として使えない部分で占められ，良質な玉の素材を取った後の残核と考えられる。

14号周溝遺構（ＳＨ14，第205・220・221図，図版92・164）

Ｂ５地区の北西端に位置する。その位置からＳＩ９に付随する施設か。周溝は全周し，楕円形を呈する。ＳＨ20を切る。周溝の埋土は１～２層あり，深さは20～28㎝を測る。断面形はほぼ逆台形。遺物は少なく，周溝から弥生土器片，鉄石英製管玉未成品１点が出土している。弥生土器には甕・高杯がある。*1846* ・*1847* は擬凹線甕。*1846* は口縁端部が断面三角形を呈し，古い様相が窺える。*1848* は有段で，口縁下端が突出しており，山陰系の影響か。*1849* は受口甕で外面にススが厚く付着。*1850* は高杯の杯部で，口縁端部を面取りする。*1870* は鉄石英製管玉の研磨工程品。天地面と右側面が研磨されている。

15号周溝遺構（ＳＨ15，第78・138・206・220図，図版92）

Ｂ５地区の北端に位置する。北側は調査区外，ＳＩ10（旧）･11の周溝に切られ，この付近の建物で一番古い。形状は大半が調査区外にあるため不明。断面は逆台形で，深さは10～20㎝を測る。周溝の幅が他の周溝遺構に比べて細いことと，大半が調査区外であることから，周溝が壁溝に相当し，当建

物は竪穴建物の可能性がある。

遺物は周溝から弥生土器甕・高杯・木製品・緑色凝灰岩剥片・鉄石英剥片・炭化材が出土している。*1851*・*1852*は有段甕で，受口状口縁の変形か。*1853*は有段高杯で，杯・裾部の端部と有段部に赤彩を施す。裾部は4方透孔で，内面にススが付着し，破損後，蓋としての2次利用が窺える。*1854*は高杯脚部のみで，上半に平行沈線文6条・ヘラ状工具による連続刺突文・平行沈線文7条を施し，下半に3方透孔。*1855*は台付鉢の底部で，台部に指頭圧痕が残る。*1856*は用途不明の土製品。外面ケズリ調整で，底面に黒斑あり。木製品は用途不明の板材（*962*）がある。上端は欠損しており，それに近い部分に長方形の孔を開ける。樹種はスギ。

16号周溝遺構（ＳＨ16，第207図）

Ｂ５地区の西側に位置する。周溝は北・南側に残り，北側で排水溝に接続する。調査時は，周溝・排水溝部分と南側の周溝部分を別の遺構としていたが，整理段階で削平を受けた周溝遺構とした。形状は周溝部分が楕円形になるものと考えられる。周溝および排水溝の埋土は，削平を受けているものと思われ１～２層で浅い。深さは10～18㎝程度。遺物は少なく，周溝・排水溝から弥生土器片・石英剥片が出土している。

17号周溝遺構（ＳＨ17，第208図，図版92）

Ｂ５地区の中央に位置する。周溝は東・南側に残り，南東隅で土坑ＳＫ3586に切られる。調査時はＬ字状の溝としていたが，整理段階で削平を受けた周溝遺構とした。形状は楕円形になるものと考えられる。周溝の埋土は削平を受けているものと思われ，１～２層で浅い。炭化物を含む。深さは８～10㎝程度。ＳＫ3586は円形を呈する土坑で，断面は半円形。埋土は2層で炭化物をわずかに含む。遺物はＳＫ3586で弥生土器・緑色凝灰岩剥片が出土している。*1858*は壺の底部。底面は上げ底状でミガキ調整。

18号周溝遺構（ＳＨ18，第207・220図，図版92）

Ｂ５地区の中央に位置する。周溝は東・南側に残り，ＳＤ3545へ流れる。調査時は周溝部分と南側周溝・排水溝部分を別の遺構としていたが，整理段階で削平を受けた周溝遺構とした。形状は周溝部分が隅丸方形になるものと考えられ，排水溝まで含めるとＳＨ12と同様に９字状を呈すると想定される。周溝および排水溝の埋土は，削平を受けているものと思われ，単層で浅い。深さは６～８㎝程度。周溝内部には炭化物を含む土坑ＳＫ3588があり，関連施設と考えられる。

遺物は少なく，周溝・排水溝から弥生土器が出土している。*1857*は平縁の小型甕。口縁端部にヘラ状工具による刺突文が2箇所見られる。

19号周溝遺構（ＳＨ19，第208図）

Ｂ５地区の北側に位置する。周溝は東・南側に残り，ＳＩ10（旧）の周溝を切る。試掘トレンチに切られる。調査時はＬ字状の溝としていたが，整理段階で削平を受けた周溝遺構とした。形状は隅丸方形になるものと考えられる。周溝の埋土は削平を受けているものと思われ，単層で浅い。炭化物を含む。深さは６～10㎝程度。遺物は弥生土器片が出土している。

20号周溝遺構（ＳＨ20，第206・220図，図版92）

Ｂ５地区の北西端に位置する。その位置から，ＳＩ19に付随する施設か。ＳＨ14に切られる。周溝は全周し，不整円を呈する。周溝の埋土は3層あり，炭化物を多く含む。深さは26～30㎝を測る。断面形は幅広の逆台形。周溝から弥生土器・鉄石英剥片が出土しているが，遺物は少ない。*1859*は有段高杯の杯部で，口縁部が強く外反するもの。

21号周溝遺構（ＳＨ21，第209・220・221図，図版91・156）

Ｂ６地区の中程西側に位置する。ほぼ隅丸長方形状に深さ４～10㎝の溝が巡るが，東側で溝が途切れる。この部分に検出されたＳＫ3805は埋土の色・質が異なり，関連のない遺構と思われる。周溝の内側から遺構は検出されなかった。遺物は弥生土器・緑色凝灰岩剥片・緑色凝灰岩製管玉未成品が出土した。*1860* は擬凹線甕，*1861* は外面ハケメ調整のミニチュア土器の鉢で，口縁端部は面取りされる。*1872* は緑色凝灰岩製管玉の研磨工程品，*1871* は仕上げ工程品。多角柱状の稜に丸みをつけるように荒い研磨が施される。穿孔は天面からが大部分を占めるが，地面からも1/4程度行われている。

22号周溝遺構（ＳＨ22，第210図，図版31）

Ｂ６地区の中程西側に位置する。隅丸方形状に深さ約12㎝の溝が巡り，周溝の内側では長軸2.84ｍ，短軸2.5ｍを測る。周溝の内側は検出面より若干低くなり，遺構は検出されなかった。遺物は弥生土器片と，緑色凝灰岩剥片・鉄石英剥片が若干出土した。

23号周溝遺構（ＳＨ23，第210・220図，図版31・91）

Ｂ６地区の中程東側に位置する。隅丸方形状に深さ2.5～８㎝の溝が巡り，周溝の内側では長軸3.42ｍ，短軸2.72ｍを測る。周溝の内側から遺構は検出されなかった。遺物は弥生土器が出土した。*1862* は受口甕，外面ハケメ調整で肩部に刺突文が残る。*1863* は平縁甕で胴部内面はヨコケズリ調整。

24号周溝遺構（ＳＨ24，第209・220図，図版91）

Ｂ６地区の中程東側に位置する。ほぼ隅丸長方形状に深さ６～10㎝の溝が巡るが北側で溝が途切れる。周溝の内側では長軸4.15ｍ，短軸1.58ｍを測る。周溝の内側から遺構は検出されなかった。ＳＩ12に切られる。遺物は弥生土器が出土した。*1864* は口縁端部が折れ曲がる形状の拡張有段高杯の口縁部で，杯底部への屈曲部には突帯が貼り付けてあった痕跡が残る。ヘラミガキ方向は内外面縦方向。

25号周溝遺構（ＳＨ25，第211図，図版31）

Ｂ６地区北端中央部に位置する。楕円形状に深さ約15㎝の溝が巡り，周溝の内側では長軸3.22ｍ，短軸2.48ｍを測る。周溝の内側から遺構は検出されなかった。遺物は弥生土器片が出土した。

26号周溝遺構（ＳＨ26，第211図，図版32）

Ｂ６地区北端東側に位置する。隅丸長方形状に深さ13～21㎝の溝が巡り，周溝の内側では長軸2.34ｍ，短軸1.65ｍを測る。周溝の内側から遺構は検出されなかった。遺物は弥生土器片・石英剥片が出土した。

27号周溝遺構（ＳＨ27，第212図，図版32）

Ｂ６地区北端東側に位置する。楕円形状に深さ約10㎝の溝が巡り，周溝の内側では長軸４ｍ，短軸3.76ｍを測る。周溝の内側から遺構は検出されなかった。遺物は弥生土器片が出土した。

28号周溝遺構（ＳＨ28，第213図，図版32）

Ｂ６地区北側中央部に位置する。楕円形状に深さ９～14㎝の溝が巡り，周溝の内側では長軸4.22ｍ，短軸2.6ｍを測る。周溝の内側から遺構は検出されなかった。ＳＩ17の周溝とＳＨ29に切られる。ＳＩ17と切り合う部分は噴砂により平面形が変形している。遺物は弥生土器片が出土した。

29号周溝遺構（ＳＨ29，第213図，図版32）

Ｂ６地区北側中央部に位置する。楕円形状に深さ６～11㎝の溝が巡り，周溝の内側では長軸5.5ｍ，短軸4.5ｍを測る。周溝の内側から遺構は検出されなかった。ＳＨ28を切る。遺物は弥生土器片が出土した。

30号周溝遺構（ＳＨ30，第212・220図，図版32・93）

Ｂ６地区北端西側に位置する。楕円形状に深さ約14㎝の溝が巡り，周溝の内側では長軸4.5m，2.9ｍを測る。周溝の内側から最大径1.4m，深さ24㎝を測る楕円形土坑ＳＫ3961を検出した。遺物は弥生土器が出土した。*1865* は内部のＳＫ3961から出土したもので，小型の丸縁甕である。やや外傾しながら直立する口縁部で，端部はナデて丸く仕上げる。内外面ハケメ調整で胴部上位には欠損しているが逆Ｕ字状の把手が貼り付けられていた痕跡が残る。

31号周溝遺構（ＳＨ31，第214・221図，図版160）

Ｂ６地区中央部に位置する。方形状に深さ約10㎝の溝が巡るが北側を試掘トレンチに切られ，全体の形は不明である。周溝の内側から楕円形土坑を検出したがＳＨ31に伴うものかは不明である。遺物は弥生土器片・緑色凝灰岩剥片・緑色凝灰岩製管玉未成品・炭化米が出土した。*1873* は緑色凝灰岩製管玉の形割工程品。石は硬質であるが，色調が均一ではなく，縦縞状になっている。緑色凝灰岩は流れ込みと思われる。

32号周溝遺構（ＳＨ32，第215図）

Ｂ６地区北西部に位置する。方形状に深さ約７㎝の溝が巡り，周溝の内側では長軸3.72m，短軸3.46ｍを測る。ＳＨ34を切る。またＳＩ24を大きく囲む区画溝ＳＤ3873を切る。遺物は弥生土器片が出土した。

33号周溝遺構（ＳＨ33，第214・220図，図版91）

Ｂ６地区北側中央部に位置する。方形状に深さ約７㎝の溝が巡り，周溝の内側では長軸3.66m，短軸2.64ｍを測る。周溝の内側から遺構は検出されなかった。ＳＩ25の周溝に切られる。遺物は弥生土器が出土した。*1866* は口縁部の屈曲が弱い，口縁上端部が面取りされる受口甕である。

34号周溝遺構（ＳＨ34，第215図）

Ｂ６地区北西部に位置する。楕円形状に深さ４～11㎝の溝が巡るが，西側は一部検出されていない。ＳＨ32・ＳＤ3955に切られる。遺物は弥生土器片が出土した。

35号周溝遺構（ＳＨ35，第216・220図，図版91）

Ｂ６地区の北西部に位置する。隅丸方形状（ＳＨ35）とＣ字状（ＳＨ36）の溝が切りあっており，隅丸方形状の方が新しい。隅丸方形状は深さ約５㎝の溝が巡り，周溝の内側では長軸6.92m，短軸6.56ｍを測る。遺物は弥生土器が出土した。*1867* は有段高杯の口縁部で，端部は面取りされる。内外面横方向のヘラミガキ調整である。

36号周溝遺構（ＳＨ36，第216図）

Ｂ６地区の北西部に位置し，ＳＨ35に切られる。Ｃ字状の溝が巡り，深さ４～16㎝を測る。出土遺物はない。

37号周溝遺構（ＳＨ37，第217図，図版32）

Ｂ７地区南東部に位置する。北西側を試掘トレンチによって削平されてしまったが，平面形は不整形な方形で，長軸5.5m，短軸5.3ｍを測る。周溝は幅約30㎝，深さ約10㎝。周溝の内側で土坑を４基検出しており，Ｐ２では柱痕跡を確認した。遺物は周溝から弥生土器が出土したほか，屋内部から鳥類の骨が出土した。

38号周溝遺構（ＳＨ38，第217図，図版32）

Ｂ７地区南東部に位置する。平面形は隅丸長方形で，長軸4.75m，短軸2.9ｍを測る。周溝は幅30～48㎝，深さ15㎝で，北側をＳＫ4036に切られている。出土遺物はない。

39号周溝遺構（ＳＨ39，第218・219図，図版33・91）

Ｂ７地区南東部に位置する。平面形はやや不整形な円形で，長軸6.6m，短軸6.5mを測る。周溝は幅約20㎝，深さ約10㎝で，周溝底部には連続的に浅い凹凸があった。周溝内側では柱穴４基，土坑２基を検出した。柱穴は直径約30㎝，深さ20～40㎝で，Ｐ５・６には断面観察から柱痕跡があるようにみえるが，判然とはしない。土坑Ｋ１は90㎝四方の方形で，深さ10㎝と浅い。土坑Ｋ２は直径１m，深さ17㎝の円形で，周溝を切っており，弥生土器が集中して出土した。貯蔵穴かと考えられる。この建物付近は後世の削平が激しく，竪穴建物であった可能性もある。遺物はＫ１（*1835*）・Ｋ２（*1832*～*1834*・*1836*）から弥生土器が出土している。*1832* は有段甕。外面は風化しているため調整は不明だが，内面はケズリを施す。*1833* は擬凹線甕の口縁で，*1834* はおそらく同一個体の底部。*1835* は擬凹線壺。外面に黒斑がある。*1836* は短頸壺。口縁端部はわずかに内へ折り返して，丸く厚みをもたせる。外面はナデ，口縁部内面はハケ後ミガキ，体部内面はケズリを施す。

40号周溝遺構（ＳＨ40，第219図，図版91）

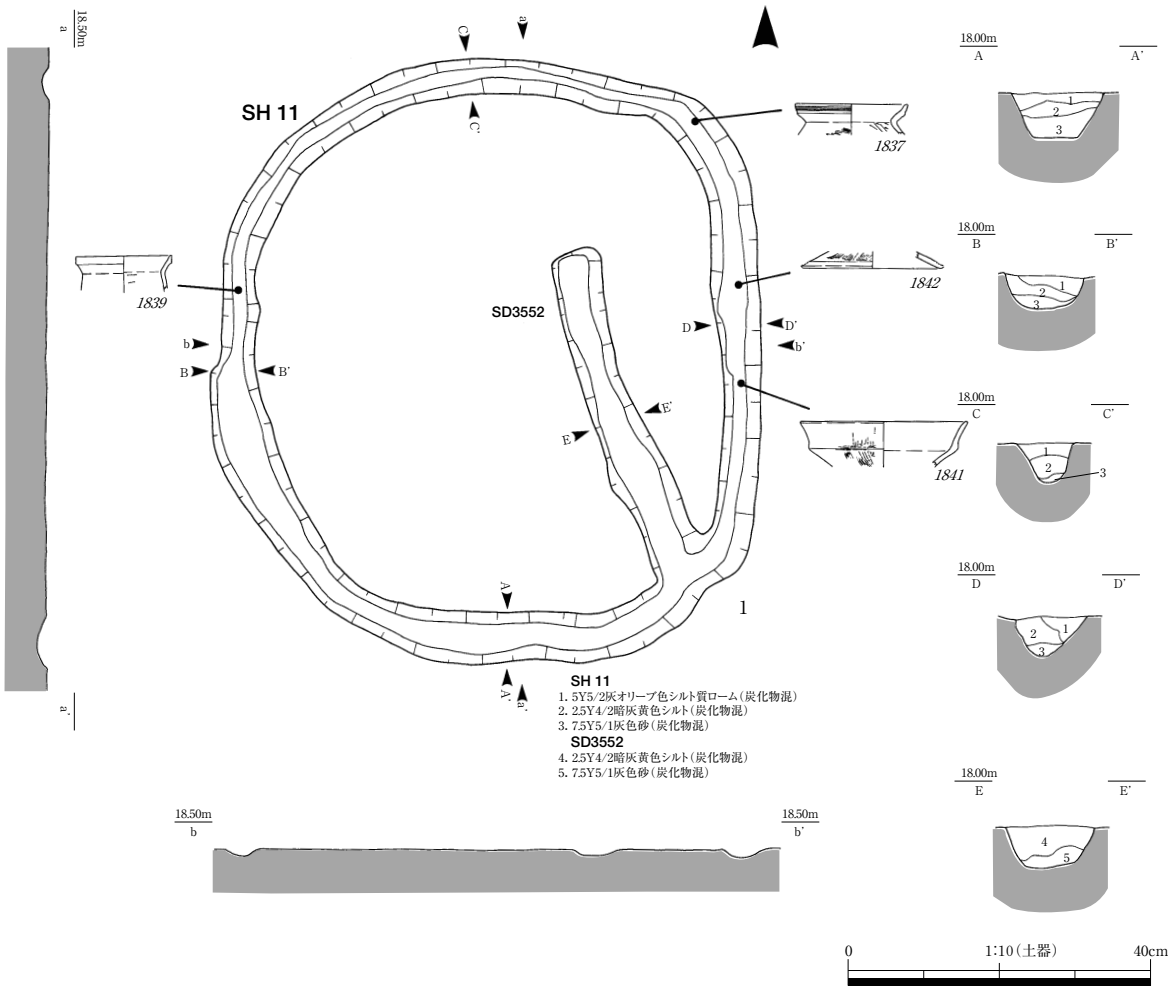
Ｂ７地区南東部に位置する。平面形は不整形で方形に近く，長軸5.15m，短軸4.8mを測る。周溝は幅約30㎝，深さ18㎝である。遺物は周溝から弥生土器が出土している。*1831* は器台の脚部で，外面は縦方向のミガキ，内面はナデを施す。外面は放射状に赤彩が施される。

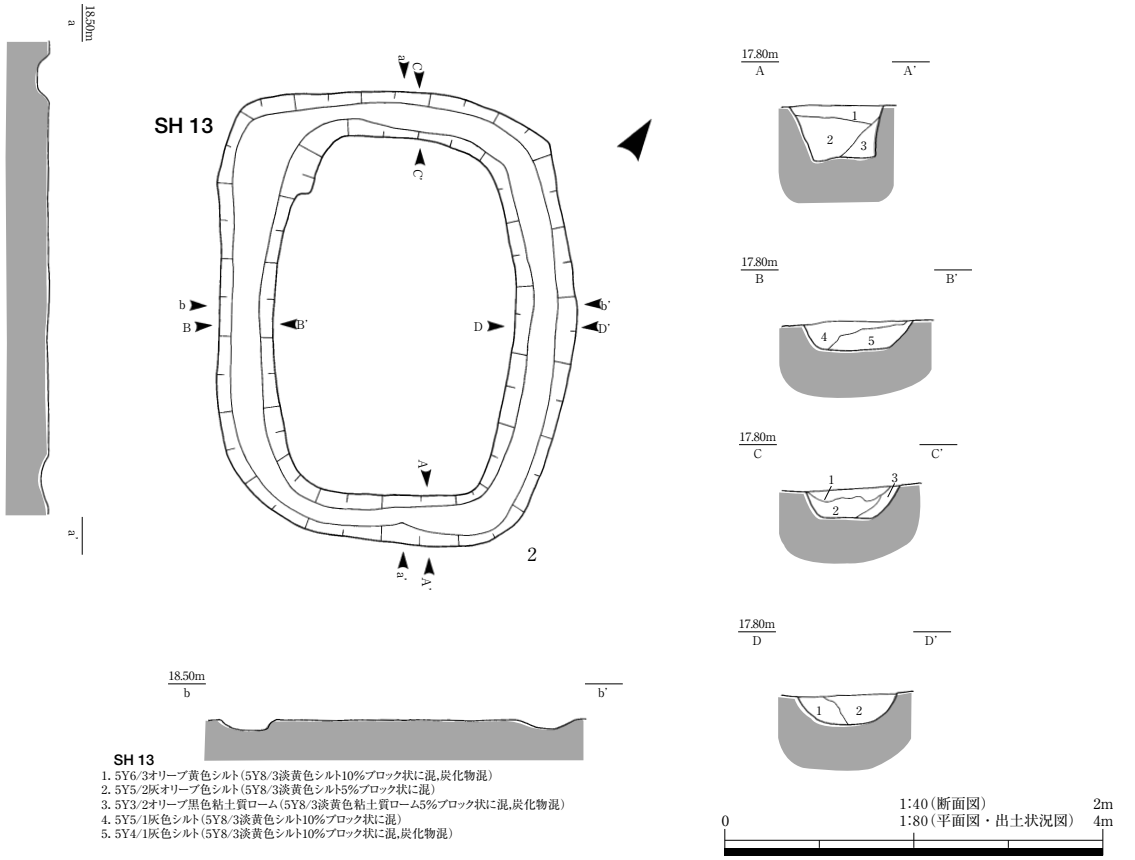
41号周溝遺構（ＳＨ41，第219図）

Ｂ７地区南東部に位置する。平面形は不整形で方形に近く，長軸4.2m，短軸４mを測る。周溝は幅32～66㎝，深さ12～23㎝で，噴砂によって寸断されている部分がある。北東部では炭を含んだ浅い埋土が周溝の内側に沿って巡っていた。遺物は周溝から弥生土器が出土した。

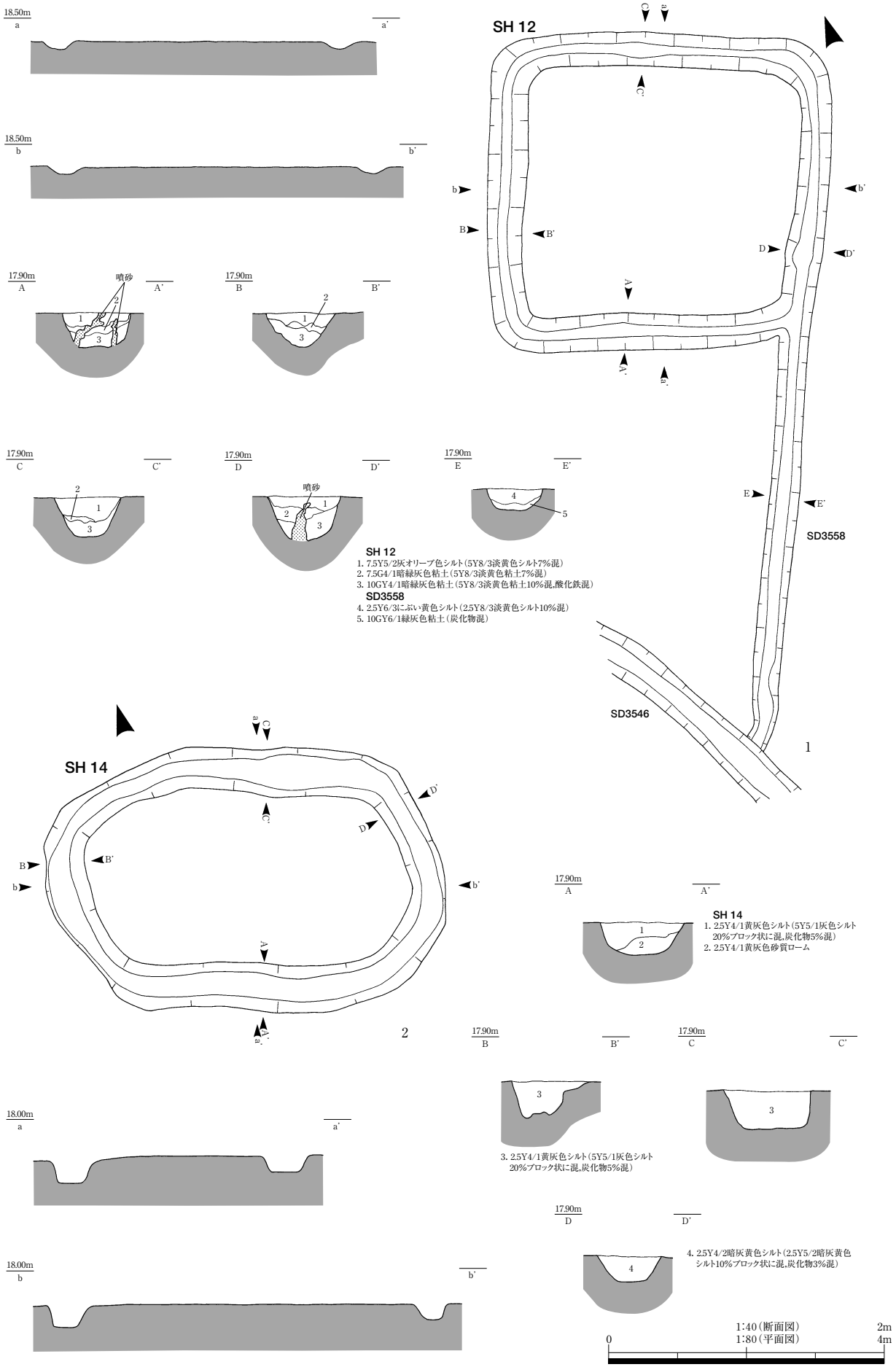
42号周溝遺構（ＳＨ42，第218図，図版32）

Ｂ７地区南東部に位置する。平面形は円形で，長軸3.85m，短軸3.55mを測る。周溝は幅約25㎝，深さ約10㎝である。出土遺物はない。

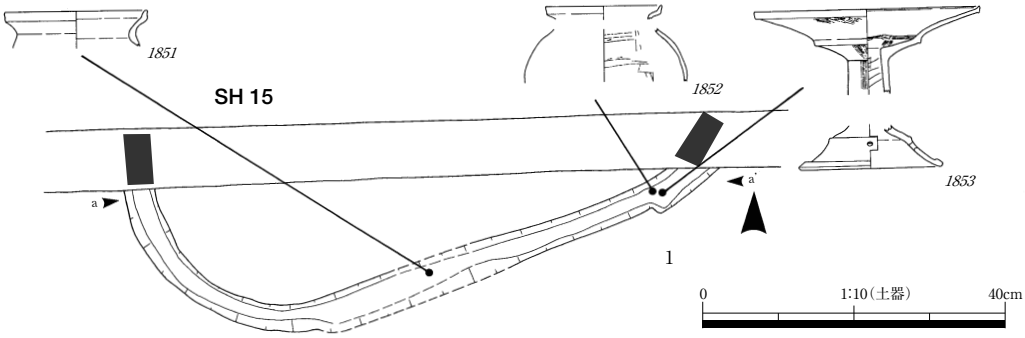


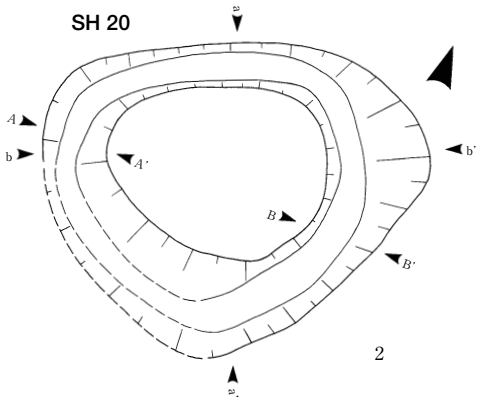


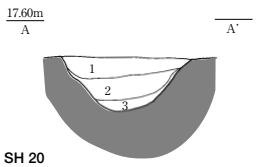
第204図　遺構実測図　（1/40・1/80，1/10）
Ｂ５地区　1.ＳＨ11・ＳＤ3552　2.ＳＨ13



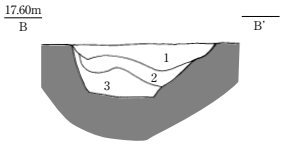
第205図　遺構実測図　(1/40・1/80)
B５地区　1.ＳＨ12・ＳＤ3558　2.ＳＨ14

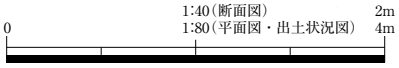




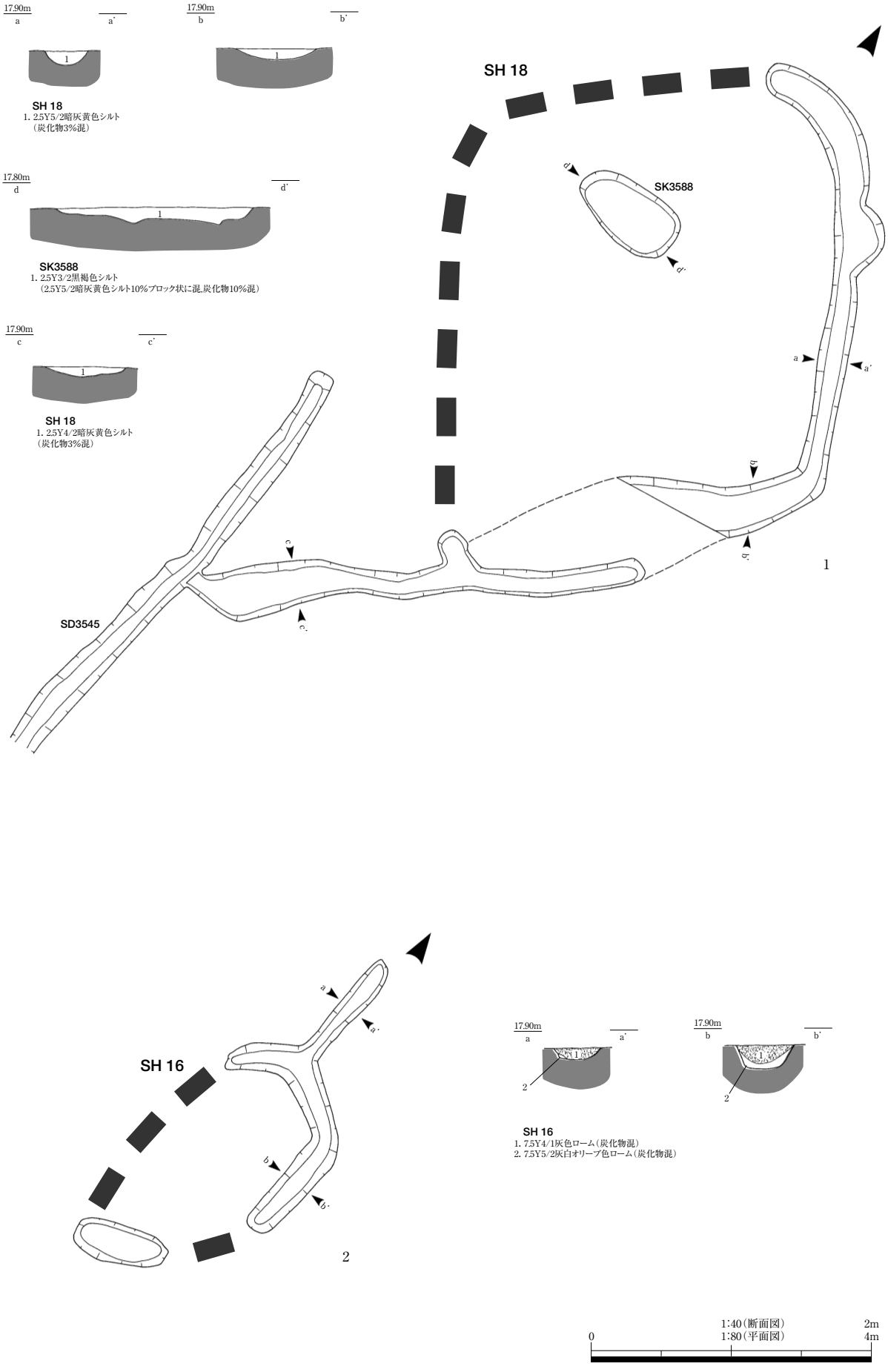


SH 20
1. 10YR4/2淡黄褐色シルト(炭化物5%混)
2. 2.5Y6/3にぶい黄色シルト(炭化物7%混)
3. 2.5Y5/1黄灰色シルト

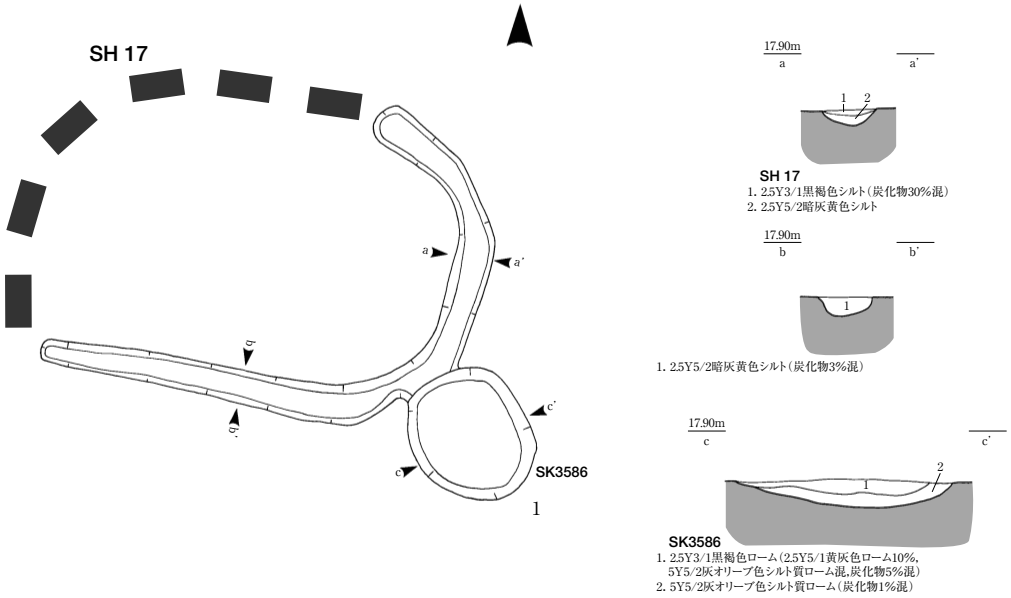


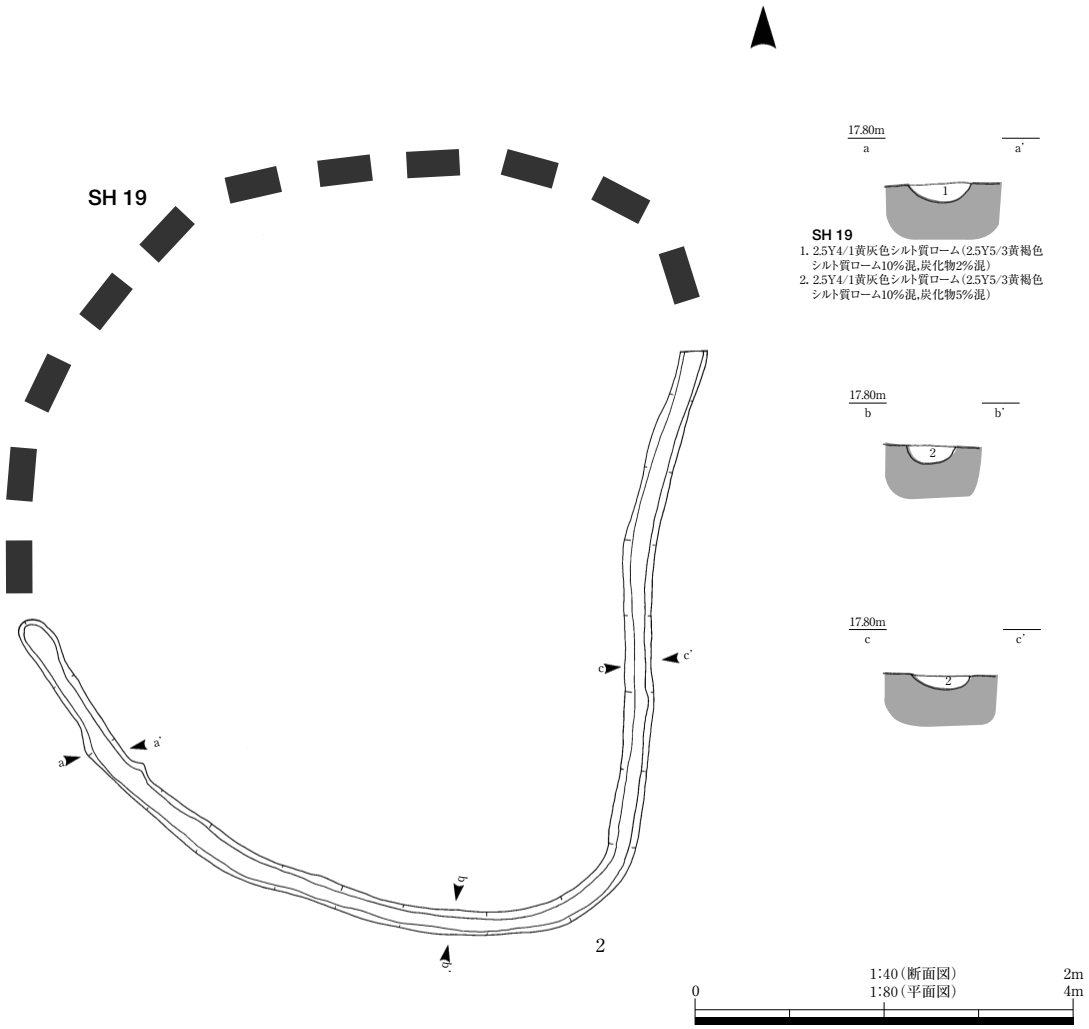


第206図　遺構実測図　(1/40・1/80，1/10)
B５地区　1. SH15　2. SH20

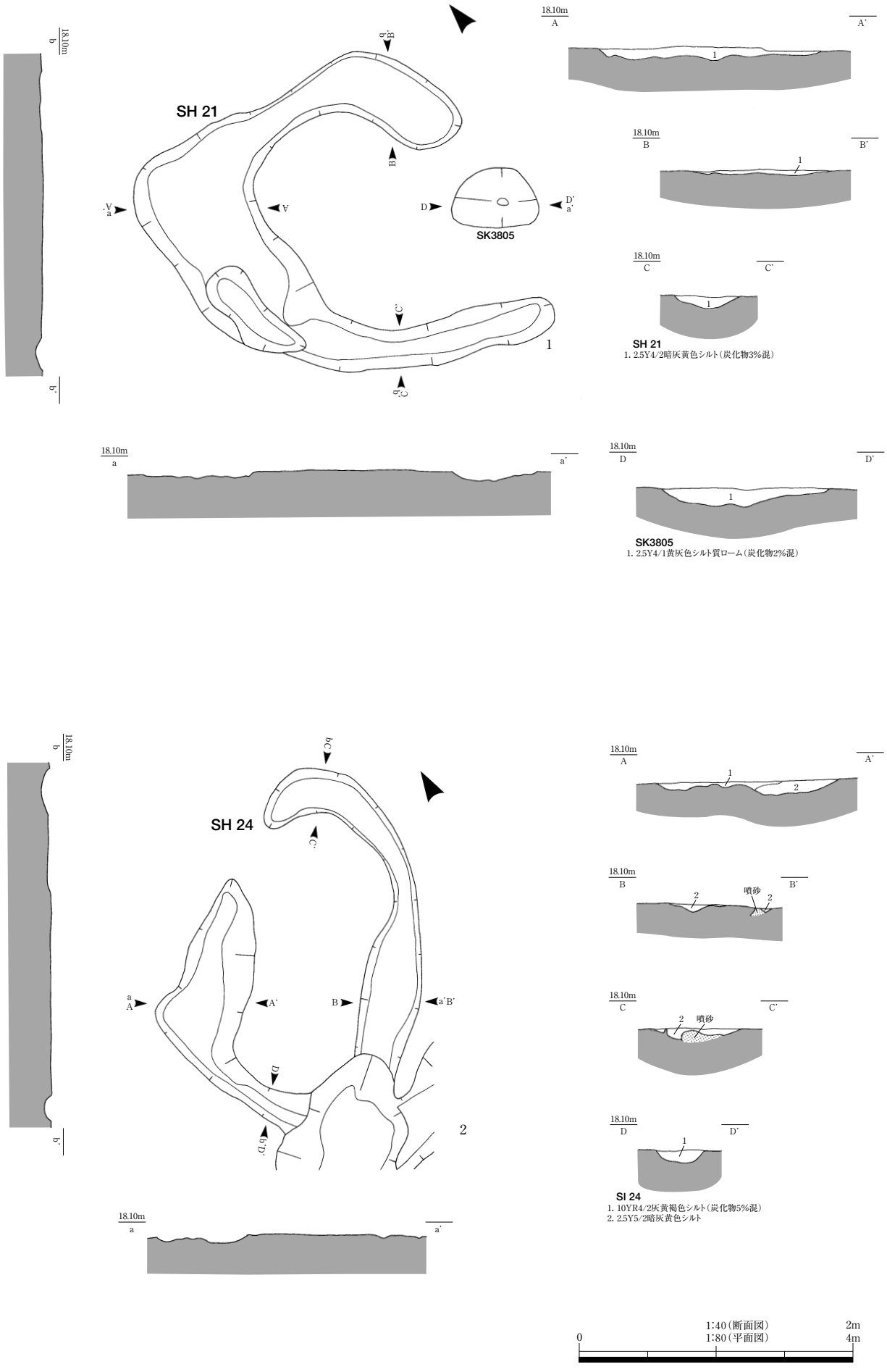


第207図　遺構実測図　(1/40・1/80)
B５地区　1.ＳＨ18・ＳＫ3588　2.ＳＨ16

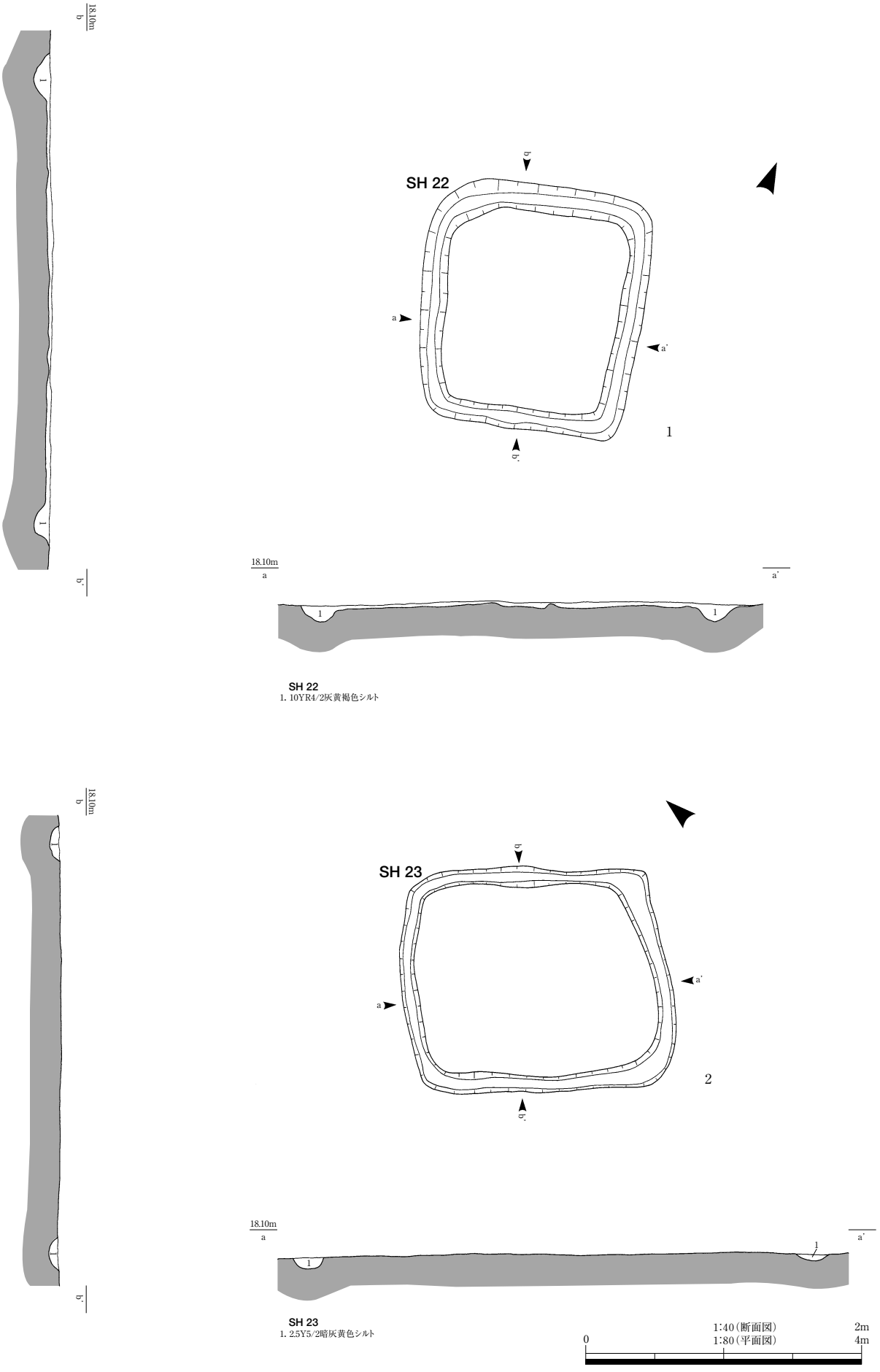




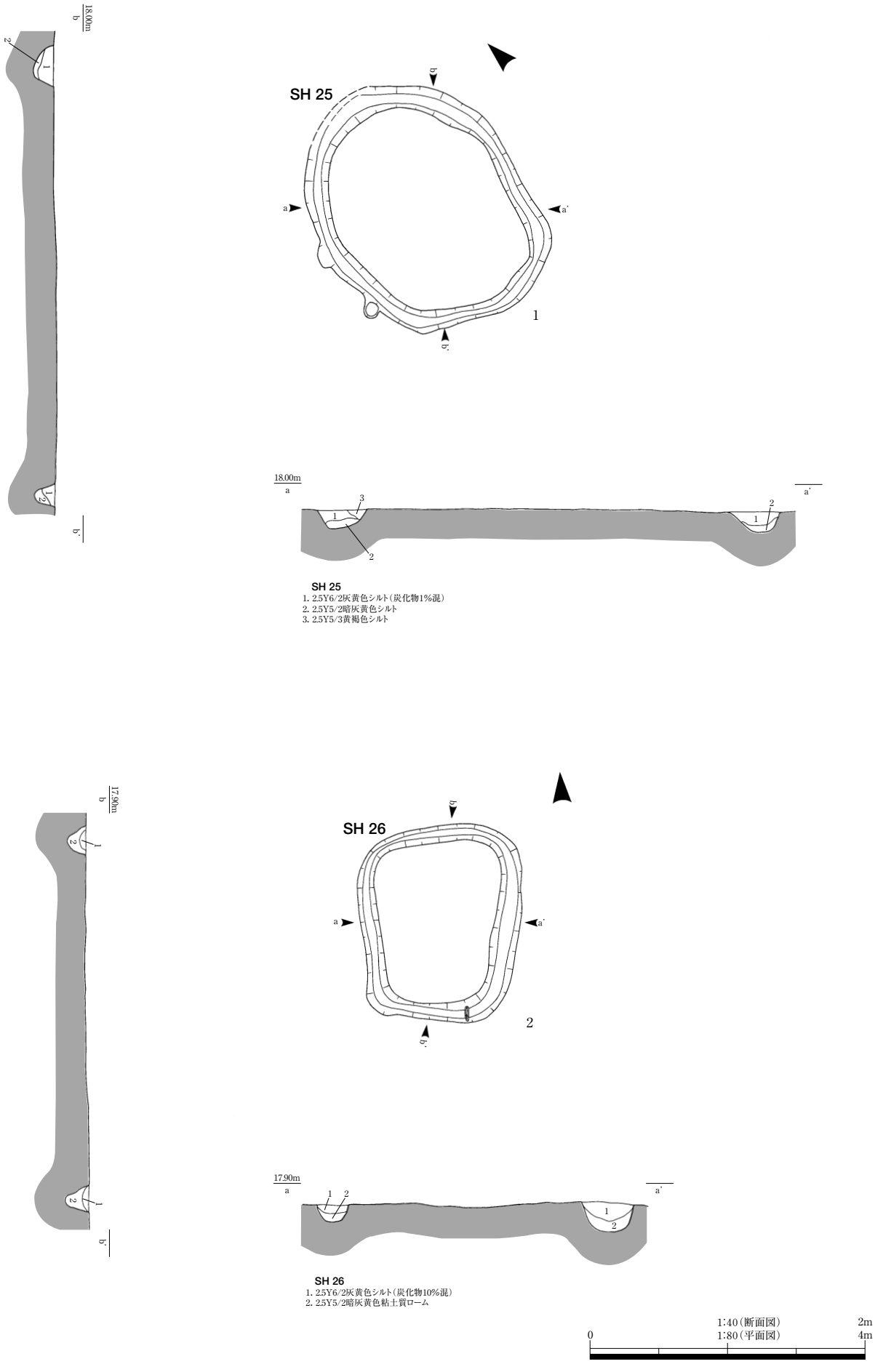
第208図　遺構実測図　(1/40・1/80)
Ｂ５地区　1.ＳＨ17・ＳＫ3586　2.ＳＨ19



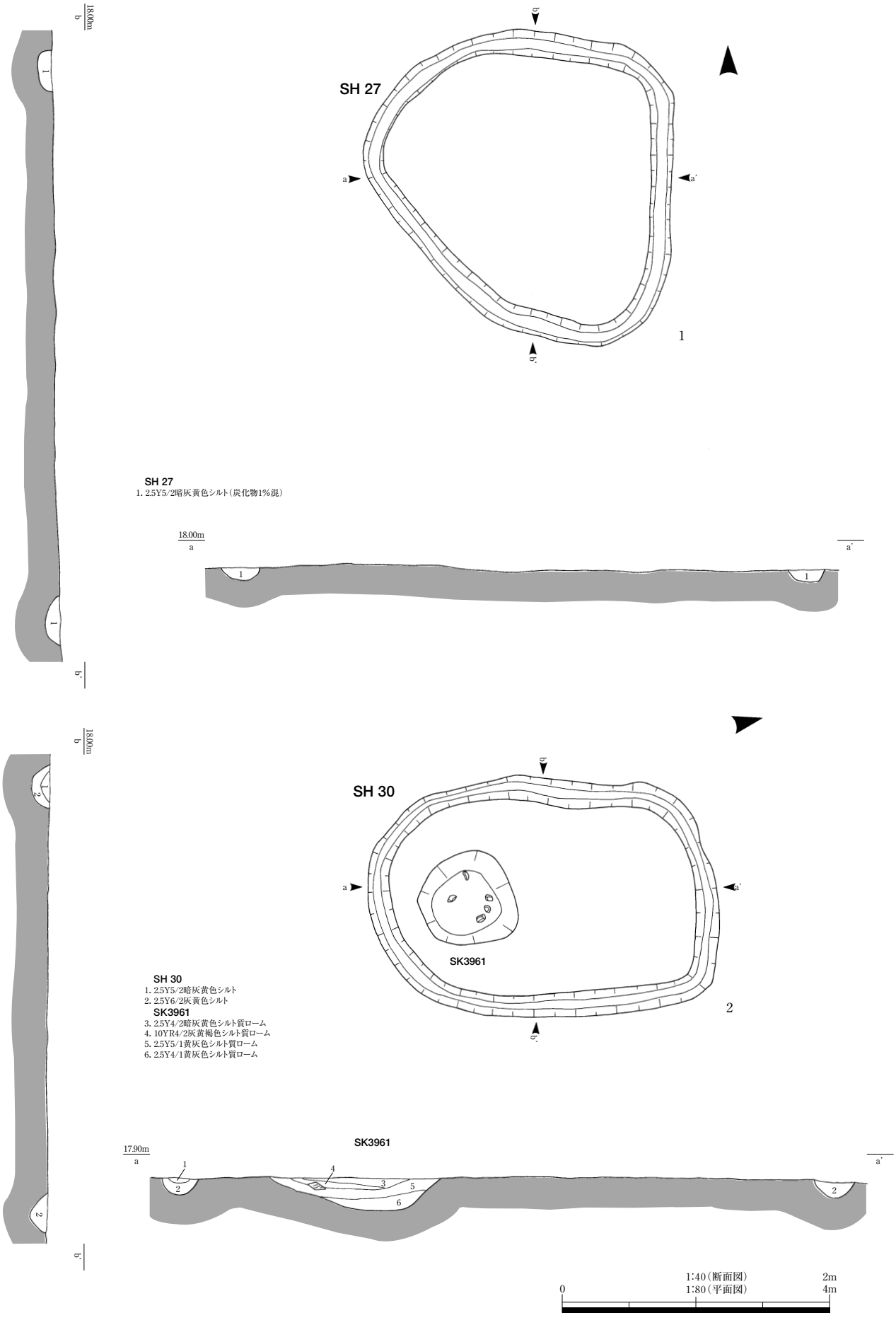
第209図　遺構実測図　（1/40・1/80）
B６地区　1.ＳＨ21・ＳＫ3805　2.ＳＨ24



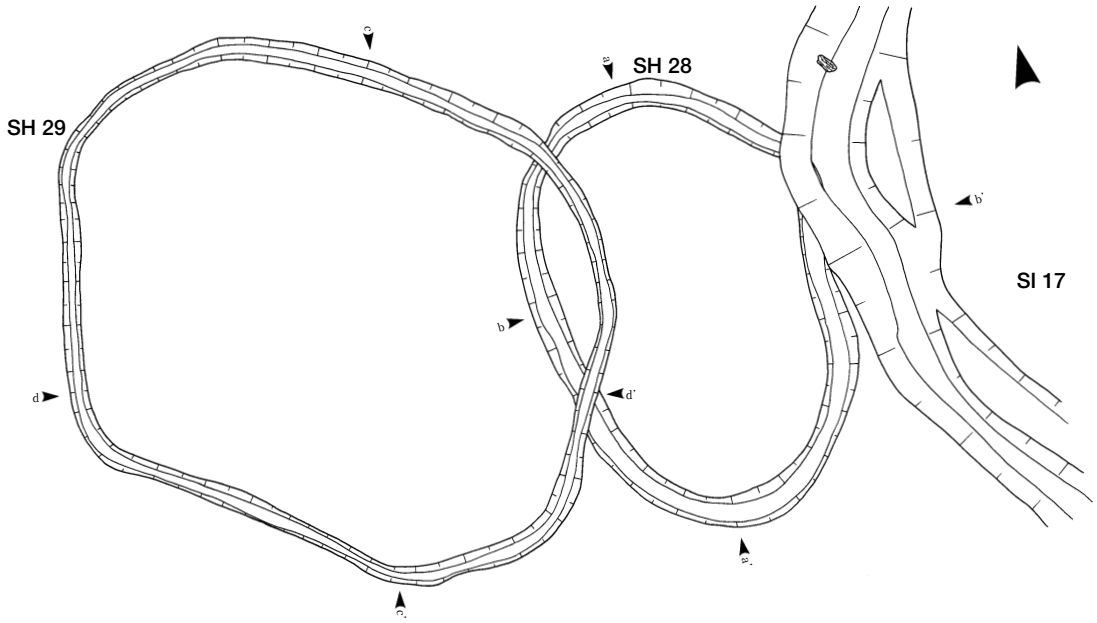
第210図　遺構実測図　(1/40・1/80)
B 6 地区　1. S H22　2. S H23

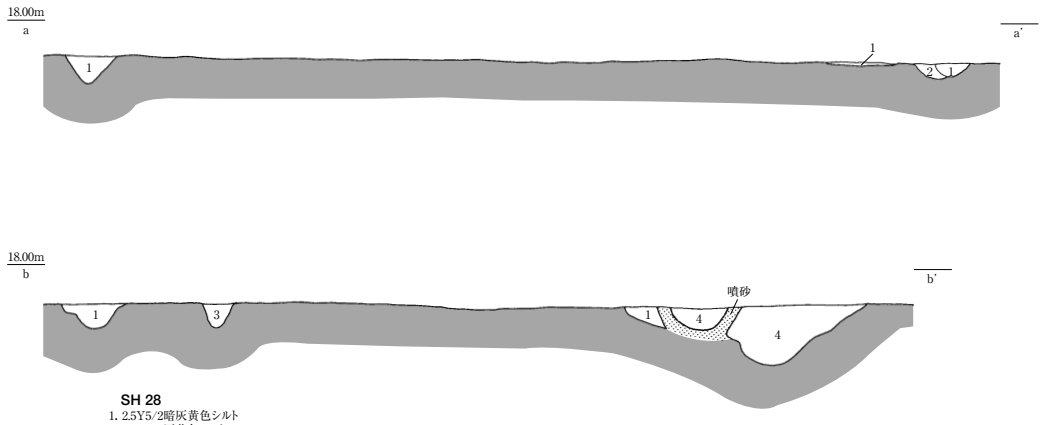


第211図　遺構実測図　(1/40・1/80)
B 6 地区　1. S H25　2. S H26

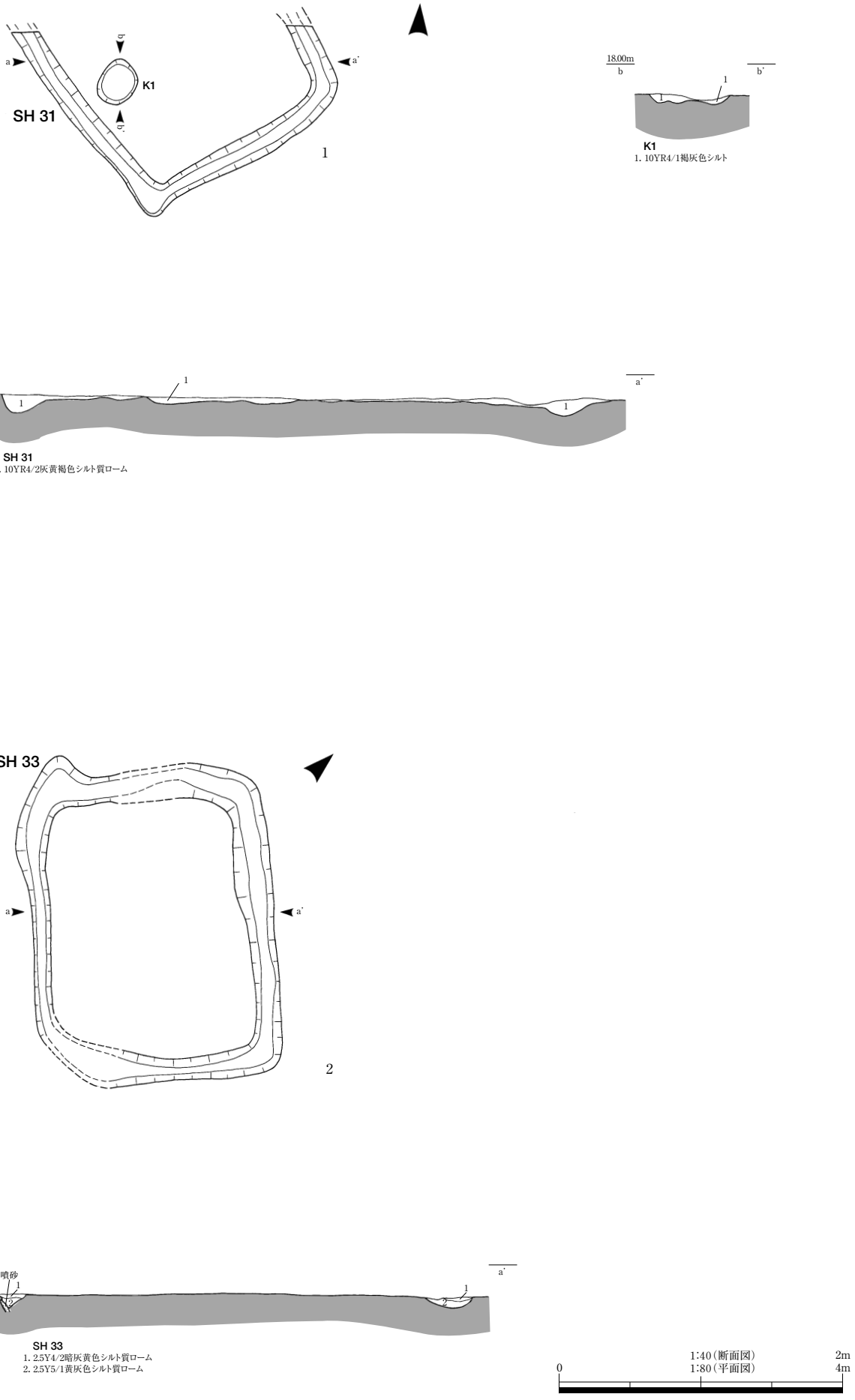


第212図　遺構実測図　(1/40・1/80)
Ｂ６地区　1.ＳＨ27　2.ＳＨ30・ＳＫ3961

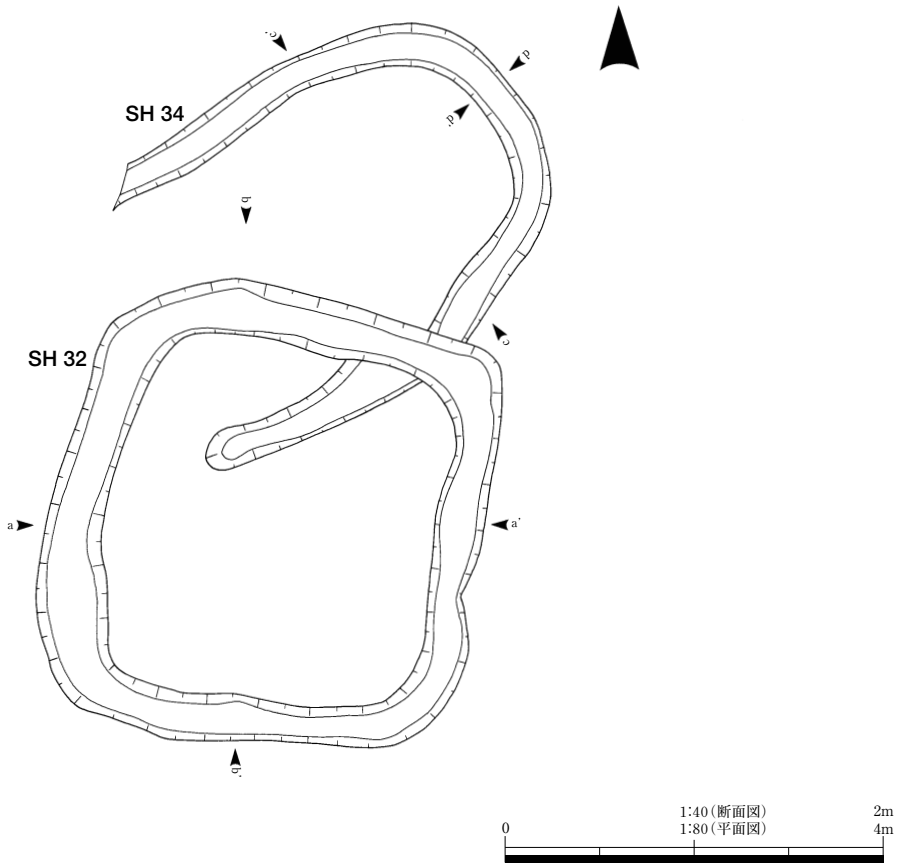




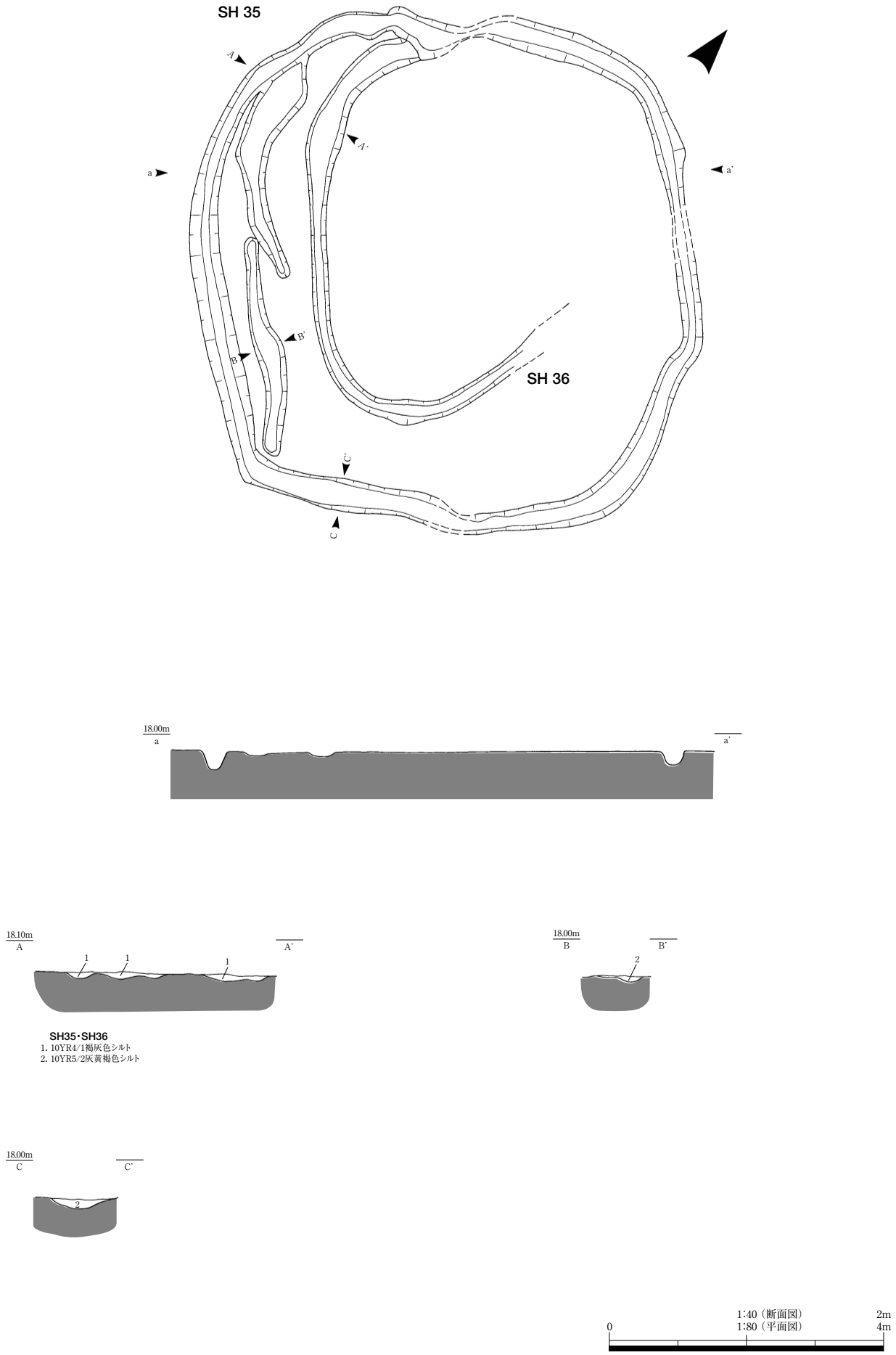
第213図　遺構実測図　(1/40・1/80)
B 6 地区　S I 17・S H28・S H29



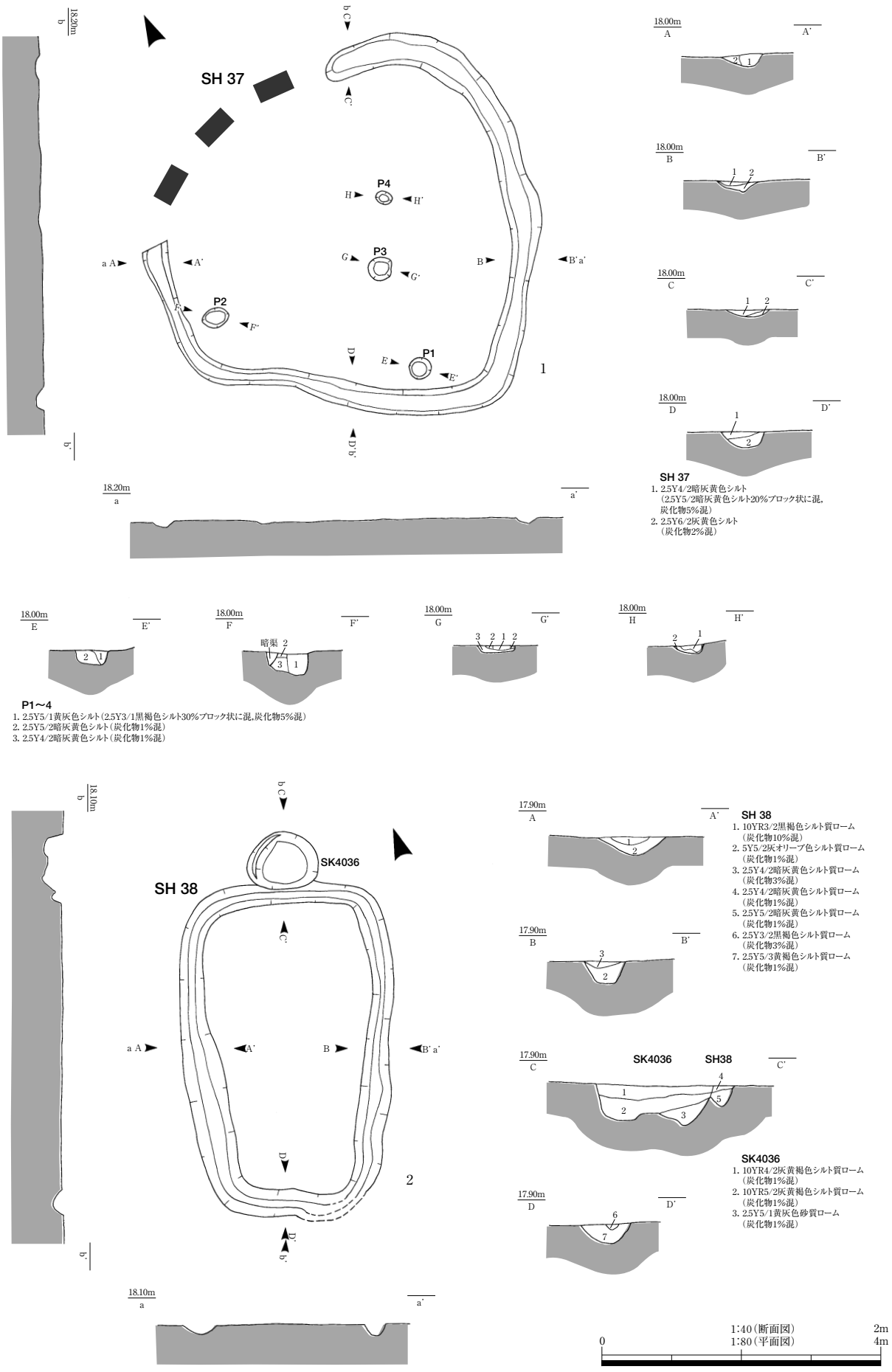
第214図　遺構実測図　(1/40・1/80)
B 6 地区　1. S H31　2. S H33



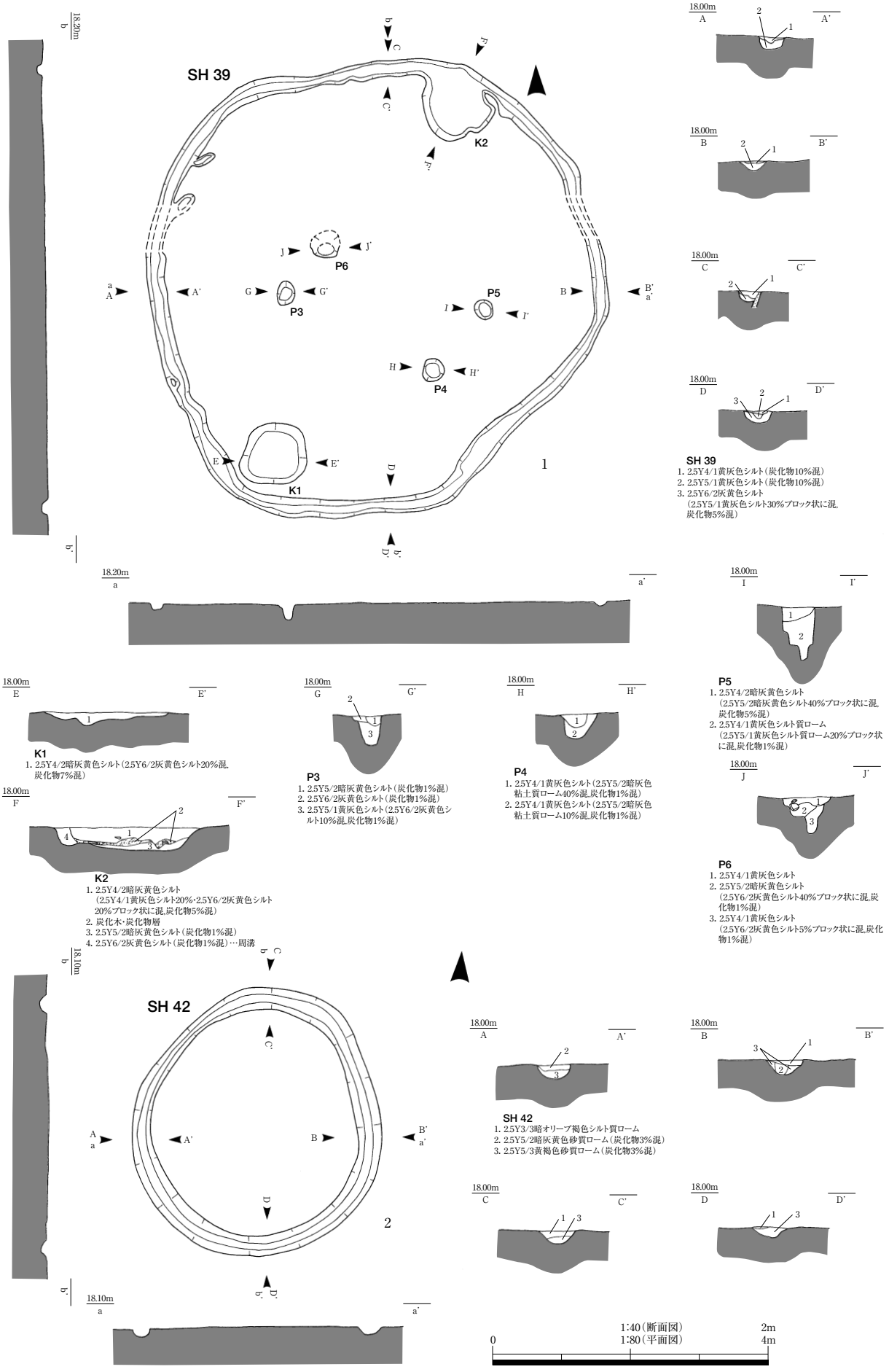
第215図　遺構実測図　(1/40・1/80)
B 6 地区　S H32・S H34



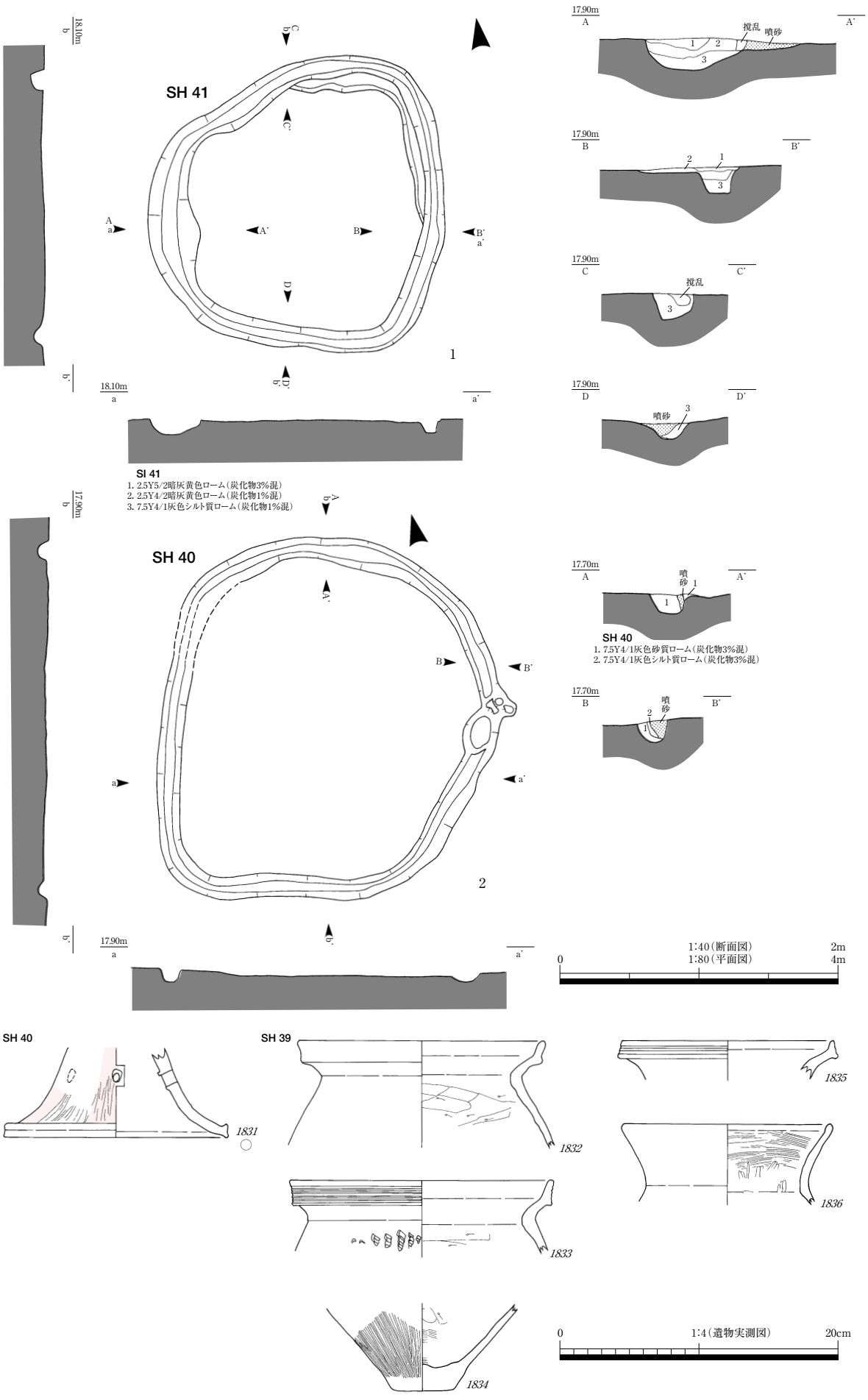
第216図　遺構実測図　(1/40・1/80)
Ｂ６地区　ＳＨ35・ＳＨ36



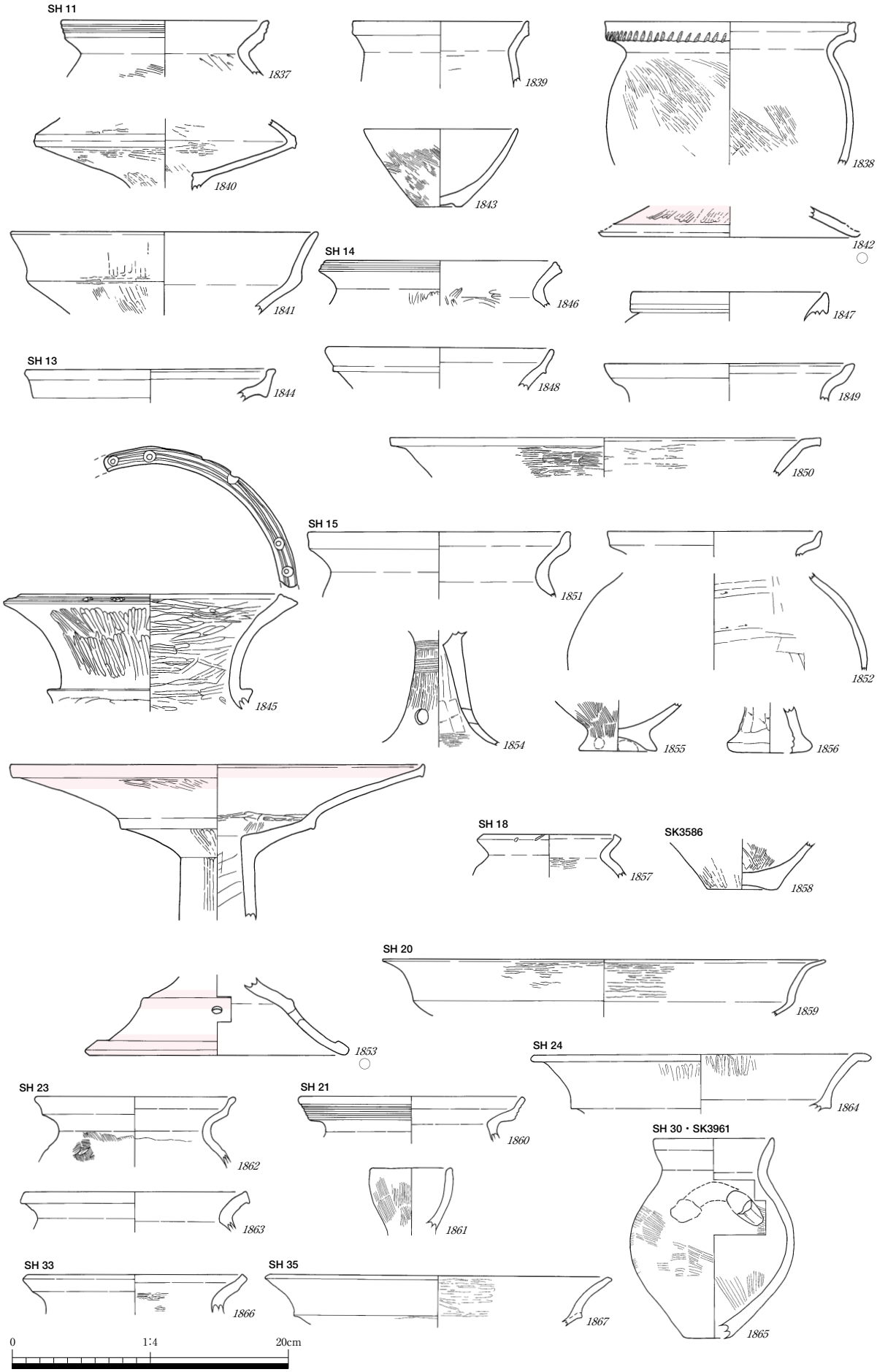
第217図　遺構実測図　（1/40・1/80）
B７地区　1.ＳＨ37　2.ＳＨ38・ＳＫ4036



第218図　遺構実測図　(1/40・1/80)
B 7 地区　1. S H39　2. S H42



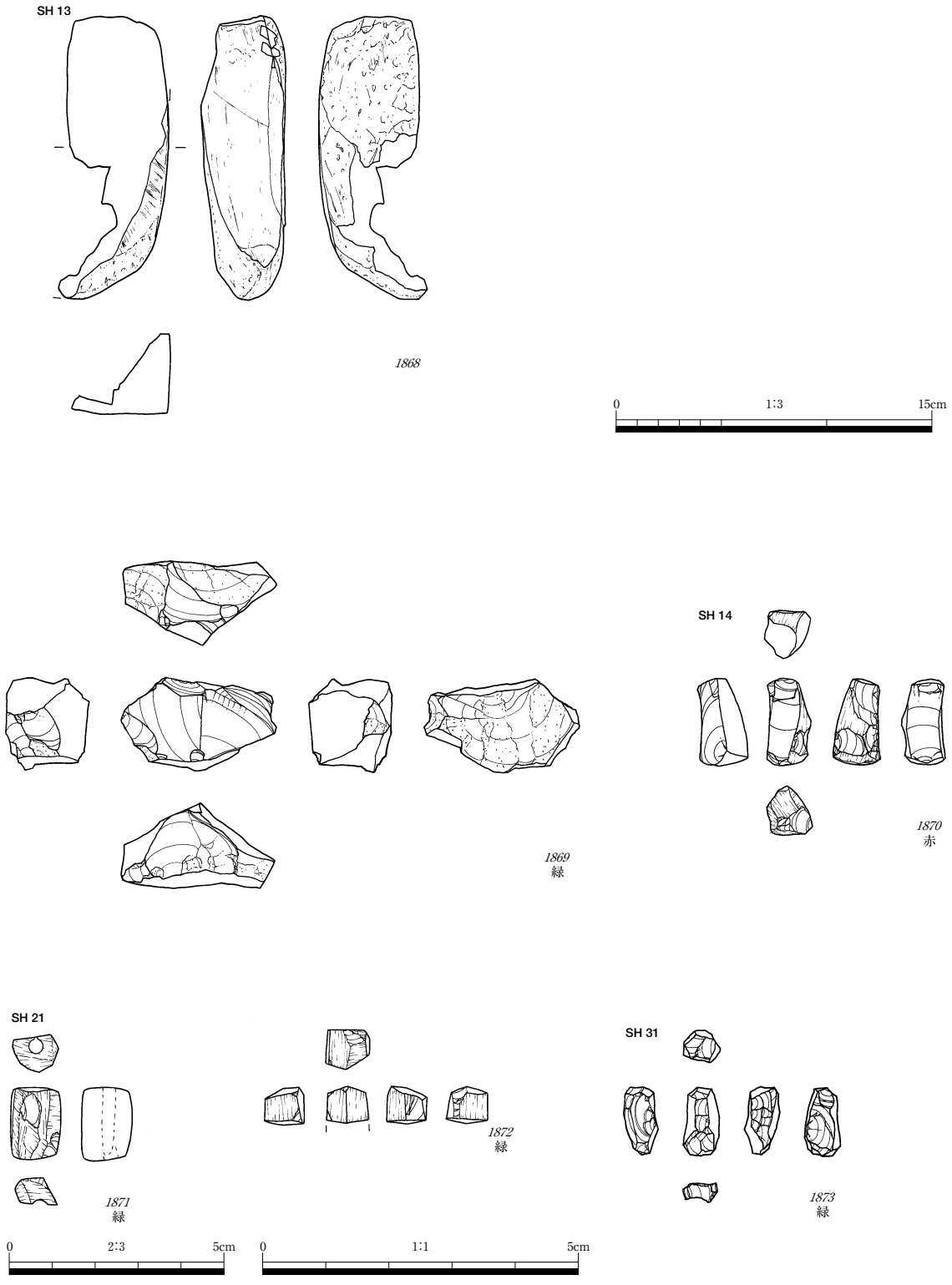
第219図　遺構・遺物実測図　(1/40・1/80，1/4)
B７地区　1.ＳＨ41　2.ＳＨ39(*1832～1836*)・ＳＨ40(*1831*)



第220図　遺物実測図　(1/4)

Ｂ５地区　ＳＨ11(*1837～1843*)　ＳＨ13(*1844・1845*)　ＳＨ14(*1846～1850*)　ＳＨ15(*1851～1856*)
ＳＨ18(*1857*)　ＳＨ20(*1859*)　ＳＫ3586(*1858*)

Ｂ６地区　ＳＨ21(*1860・1861*)　ＳＨ23(*1862・1863*)　ＳＨ24(*1864*)　ＳＨ30・ＳＫ3961(*1865*)
ＳＨ33(*1866*)　ＳＨ35(*1867*)



第221図　遺物実測図　(*1871・1872*　1/1, *1869～1870・1873*　2/3, *1868*　1/3)
B５地区　ＳＨ13(*1868・1869*)　ＳＨ14(*1870*)
B６地区　ＳＨ21(*1871・1872*)　ＳＨ31(*1873*)

D　柵

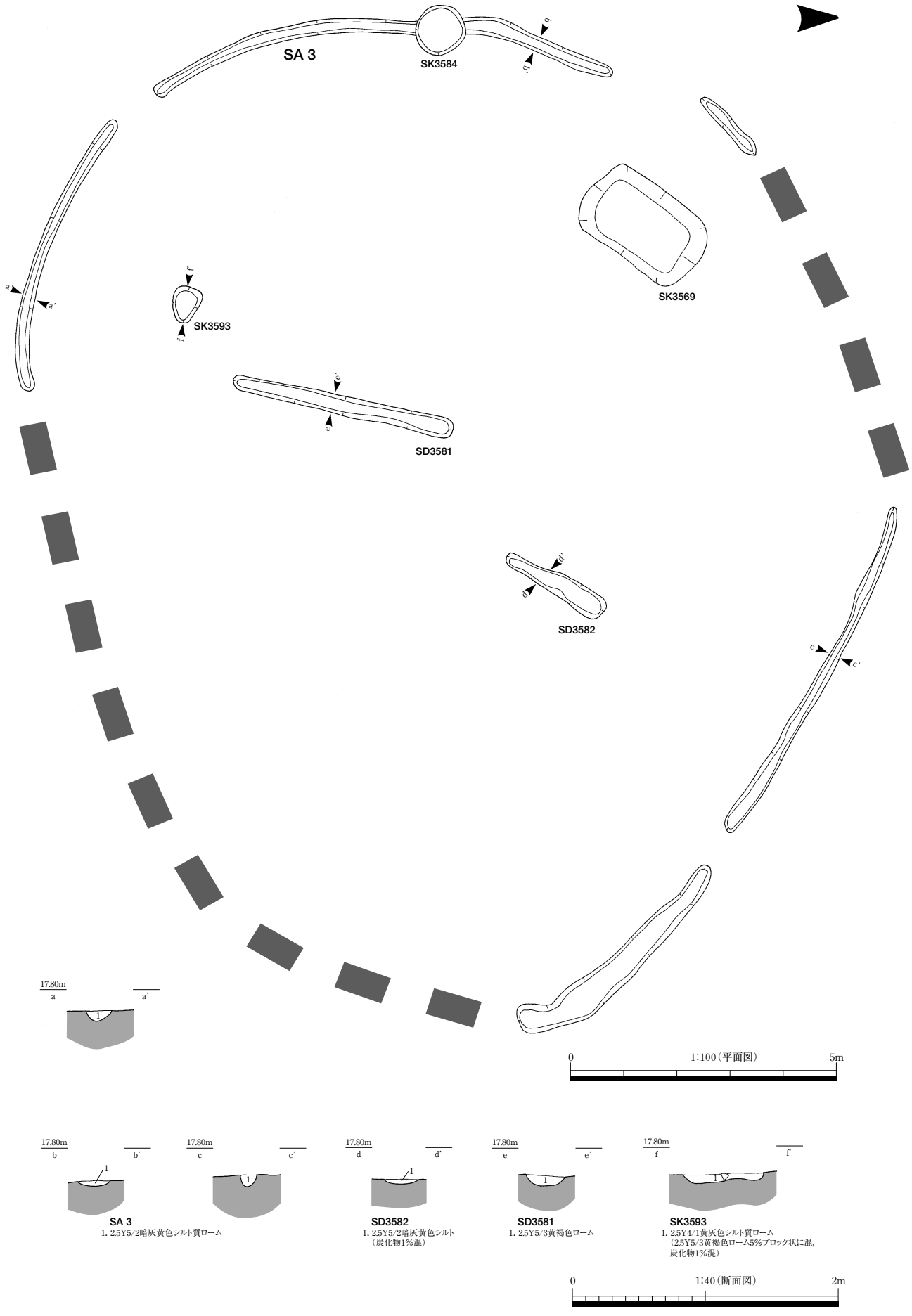
3号柵（ＳＡ3，第222図，図版33）

Ｂ5地区の東側に位置する。途切れ途切れでほぼ楕円形に溝が巡る。ＳＫ3584に切られる。埋土は，単層で浅い。深さは4～10㎝。内部には短い溝ＳＤ3581・3582，土坑ＳＫ3593と廃棄土坑ＳＫ3569がある。周溝は幅が狭く浅いものの非常に大きな空間を区画しており，内部に廃棄土坑があるなど，祭祀空間を区切る柵かと考えられる。そうすると，ＳＤ3581・3582は周溝同様に内部を区切る柵かと考えられる。遺物は，ＳＫ3593から弥生土器片が出土した。

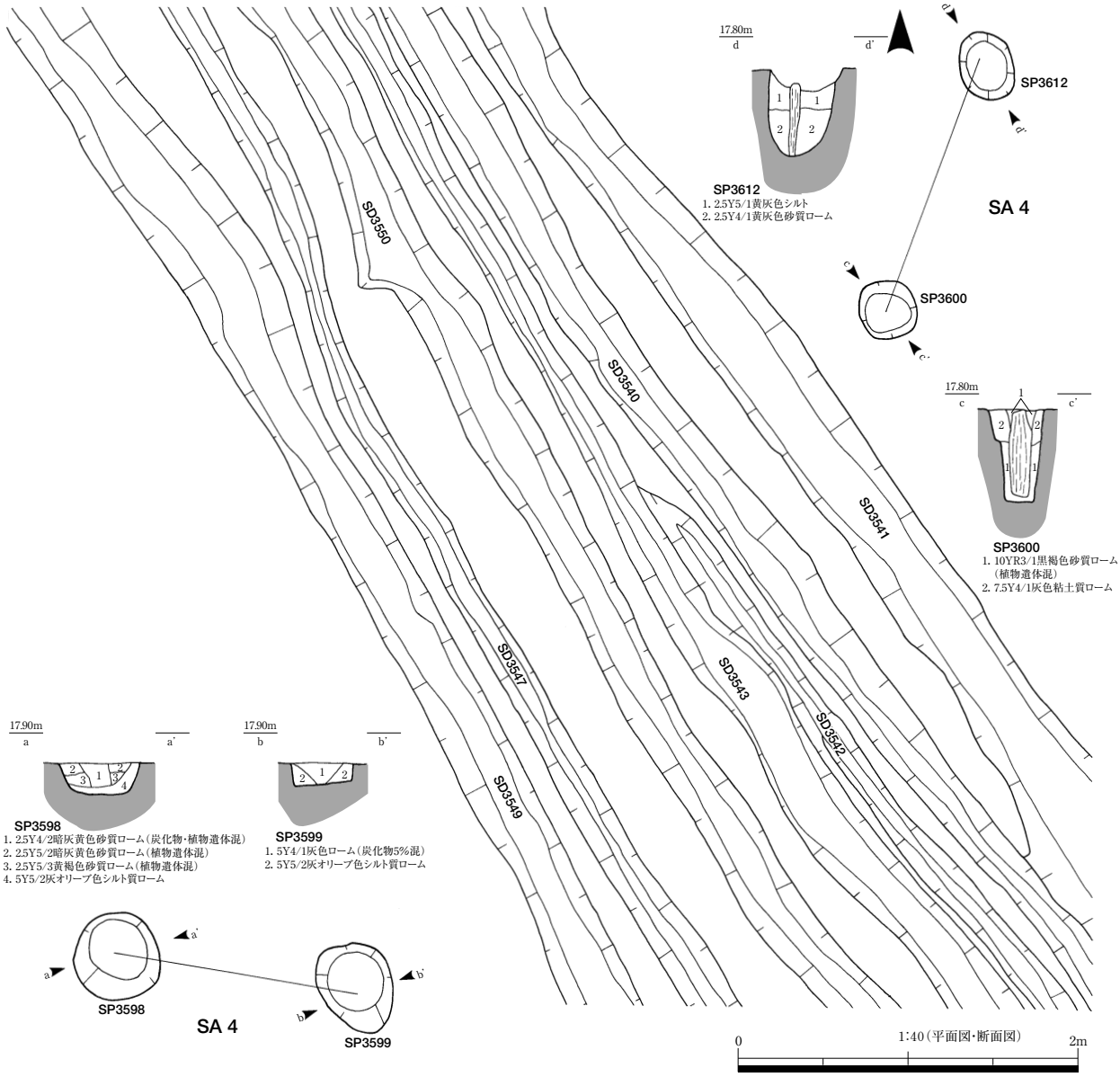
4号柵（ＳＡ4，第223図）

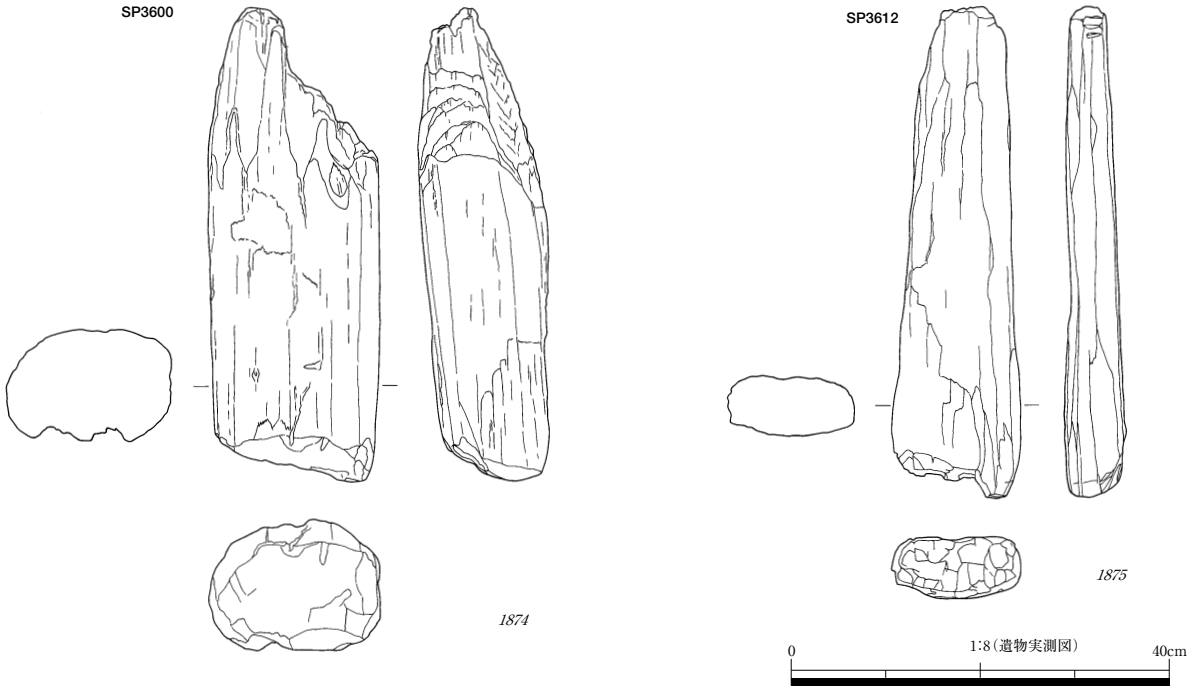
Ｂ5地区中央西側で北西－南東に延びる溝群ＳＤ3540～3550の両側に位置する。ＳＰ3598・3599は，ほぼ東西，ＳＰ3600・3612はほぼ南北にそれぞれ2基ずつ並ぶ。ＳＰ3598・3599は不整形で深さは10～20㎝と浅く，柱根は残っていなかったが，柱痕跡が見られた。ＳＰ3600・3612は不整形で深さは約50㎝と深く，2基とも柱根が残っていた。掘形はＳＰ3600が柱根より少し大きい程度であるのに対し，ＳＰ3612は柱根に関係なく大きなものとなっている。これらの柱穴は，2基ずつそれぞれであることから建物ではなく，道路とも考えられる溝群に関連する柵もしくは門（鳥居状）になるものと考えられる。これらは，南東の大きな道路ＳＦ3526から北西の建物ＳＩ8に向かう道路（溝群）の途中に位置し，その両側にほぼ同じ形状であることから，区画しているものと考えられる。つまり，ＳＩ8の区域への入り口を表す門的なものであったと考えられる。

遺物はＳＰ3598・3599から弥生土器片が出土した。*1874* はＳＰ3600から，*1875* はＳＰ3612から出土した柱根である。芯持材ではなく，板目材を使用しているため，断面はやや扁平である。いずれも木口・側面ともに遺存状態は悪いが，*1875* の木口は加工痕が確認できる。樹種は*1874* がヤマグワ，*1875* がクワ属。



第222図　遺構実測図　(1/40・1/100)
B５地区　ＳＡ３・ＳＫ3593・ＳＤ3581・ＳＤ3582





第223図　遺構・遺物実測図（1/40，1/8）
Ｂ５地区　ＳＡ４　ＳＰ3600（*1874*）　ＳＰ3612（*1875*）

E　道路

2702号道路（ＳＦ2702，第224・227・228・232図，図版93～95・152）

Ｂ２・６地区の南東部に位置する。ＳＤ2560・2561，ＳＸ3990で構成される遺構。ＳＤ2560～2562は基本的には同じ溝で，北へ流れを進めるに従って木枝状に分岐する。埋土はいずれも黒褐色シルトが中心で，Ｂ６地区の竪穴建物と比較すると新しい時期の遺構となるが，遺物から大差はみられない。ＳＤ2560はＳＤ2561から分岐してＢ６地区へ流れる溝。東へ向かうに従って，プランは不明瞭になる。溝の周辺には盛土層ＳＸ3990が観察される（第224図）。この盛土を挟んでＳＤ2560・2561は平行して流れる。ＳＤ2561はＢ２地区からＢ６地区へ流れる溝で，Ｂ６地区では数条に流れが分かれた様子がみられる。Ｂ６地区ＳＩ21を切る。２本の平行する溝と盛土の組合せとして同様なものではＢ５地区で検出された道路状遺構ＳＦ3526がある。ＳＦ2702は，平行する２本の溝に挟まれた部分以外にも盛土が及ぶことや溝のプランの一部が不明瞭であったことから，道路ではない可能性も考えられる。盛土は地山と非常によく似ており，にぶい黄褐色シルト質ロームを基調とする。おそらくＳＤ2560～2562などを掘削した際に生じた土と思われる。盛土から出土した遺物よりも溝から出土した遺物のほうが新しい時期のものとなる。

ＳＤ2560からは遺物は弥生土器・緑色凝灰岩の荒割工程品が出土した。

1906～*1908*は甕。*1906*は擬凹線甕で，口縁端部は内傾する。*1907*は刺突有段甕。*1908*は丸縁甕。*1909*・*1910*は壺。*1909*は擬凹線壺で，端部に擬凹線，頸部に工具痕を残す。Ｂ６地区東側では緑色凝灰岩荒割工程品（*1951*）が出土した。

ＳＤ2561からは弥生土器・杭・加工材・砥石・緑色凝灰岩剥片が出土した。

1911～*1915*は甕。*1911*～*1913*は擬凹線甕で，*1911*・*1912*は口縁部が上に伸長せず，断面三角形となる。*1914*は有段甕で，肩部に刺突文が入る。*1915*は丸縁甕だが，口縁部の中程で，やや段を作っており，有段甕の崩れたものかとも考えられる。胴部外面にもヘラケズリを施す。底部はやや広めの平底で，中心部がやや凹む。

1916～*1920*は壺。*1916*は擬凹線壺か。口縁部内面はミガキを施す。*1917*は短細頸壺か。口頸部は外反するが口縁端部は内傾し，外面に段を作る。*1918*・*1919*は広口壺か。*1918*は口縁端部内外面に赤彩する。*1920*は長頸壺で，口縁端部は付加状となる。胴部は上半のみ残るが，算盤玉形になると考えられる。胴部内面はナデ調整で，粘土紐接合痕と指頭圧痕が残る。

*1921*は有鈕蓋。つまみ部は上面を凹ませて，中央に細長く孔をあける。*1922*は有段高杯だが，口縁端部で再び外反して段をつくる。

*1952*は凝灰岩製の砥石。大部分が欠損していると思われるが，表・右側面に平坦な砥面がみられる。線状痕は細かく，長軸方向に沿ってみられる。

ＳＸ3990からは弥生土器・石製玉作関連遺物が出土した。

1876～*1890*は甕。*1876*～*1880*は擬凹線甕。*1876*は口縁部が上へ伸長し，頸部内面をハケメ調整する。*1877*・*1878*は短い口縁部が外へ開く。特に*1878*は口径が大きい。*1879*・*1880*は口縁部が断面三角形となる。*1881*は刺突有段甕。口縁端部外面を面取りし，口縁部外面に刺突文を施す。*1882*～*1886*は有段甕。*1886*は口縁部外面がナデによって凹んでいる。*1887*～*1890*は平縁甕。*1890*はやや小型で，底部は平底となる。

1891～*1894*は壺。*1891*は有段短頸壺。*1892*は口縁部が緩やかに外反し，口縁端部を内傾させる。端部外面には沈線１条を施す。*1893*は長頸台付壺。口縁部は内外面を赤彩し，外面に上から沈線２

条と双葉形刺突文４列を施す。肩部には赤彩した把手を貼り付けるが，把手の上面には沈線２条を施す。胴部中位の突帯は赤彩し，双葉形刺突文１列，間に沈線１条が入る双葉形刺突文を施す。脚基部にも沈線１条，双葉形刺突文１列と沈線２条を繰り返し施文する。この双葉形刺突文は方向が異なる。器面は丁寧なミガキ調整を施す。胴部から脚部への粘土充填は，粘土紐を巻いて円筒状にし，小口が上下になるように押し込んでおり，脚基部側からみると，渦巻き状の様子がそのまま残っていて観察できる。*1894* は無頸台付壺。外面はミガキ，胴部内面はナデ，脚部内面はケズリを施す。口縁端部と脚裾端部にそれぞれ沈線１条を施文する。

1895 ～*1897* は鉢。*1895* ・*1896* は有段鉢で，*1896* の底部はやや丸みのある平底。*1897* は有孔鉢で，底部は無調整。*1898* はミニチュア土器の壺形。

1899 ～*1905* は高杯。*1899* ・*1900* は有段高杯。*1899* は口縁端部外面を面取りして沈線１条を施文する。*1900* は口縁部が２重に外反する。いずれも口縁部と杯部の境に明瞭な稜をつくっている。*1901* は鉢形高杯か。杯部外面に突帯を貼り付け，赤彩する。*1902* ～*1905* は脚裾部で，*1902* は端部上面に粘土帯を貼り付ける。*1903* は端部を下に折り曲げて，接地面で面取りする。*1904* は緩やかに開いて，端部は丸くおさめる。いずれも外面は赤彩する。*1905* は有段の脚裾部で透孔は５箇所，段には稜をつくる。

石製玉作関連遺物は緑色凝灰岩剥片・緑色凝灰岩製管玉未成品（*1950*）・花崗岩の加工品（*1953*）が出土した。*1950* は穿孔工程品で，両側穿孔である。Ｂ２地区で出土した。*1953* は礫面が残っており，円礫を分割したもの。表面は研磨痕がわずかにみられる。裏面は右側で施溝分割を行った後，それ以外の凹凸のある所を平坦にしようと研磨を行っている。Ｂ６地区のＳＩ21近くで出土した。

3526号道路（ＳＦ3526，第225・226・228～232図，図版33・93・95・140・141・162）

Ｂ３地区からＢ５地区中央を抜け，Ｂ７地区北西端まで続く道路で，古墳時代中期の水田の大畦畔としても使用され，存続時期は弥生時代後期から古墳時代中期にわたる。ＳＦ3526は盛土と，これを挟む東西両側溝で構成され，両側溝間の心々距離は約1.3～２ｍを測る。西側溝はＢ５地区ＳＤ3524で，幅約50～80㎝，深さ約10～40㎝を測り，中央でＢ５地区ＳＩ８に向かう溝群と直交するが，その部分で一度途切れるほかはほぼ途切れなく続く。ＳＤ3524の外側にはＢ３地区ＳＤ2874，Ｂ５地区ＳＤ3564・3565・3574が併走しているが，これらの溝は切り合いからＳＤ3524よりも古い段階の西側溝であると考えられる。またＳＤ3524は上下２層に分けられるが，断面観察から下層が弥生時代のもので，上層は古墳時代の大畦畔の側溝となる。作り替えと掘り直しを行いながら，存続していったものと考える。東側溝はＢ３地区ＳＤ2877とＢ５地区ＳＤ3528で，幅約50～60㎝，深さ約20㎝を測る。Ｂ５地区ＳＤ3528はＢ５地区ＳＩ７の周溝に接続後，Ｂ３地区ＳＤ2877までの間は途切れているが，この途切れた間も盛土は確認されている。Ｂ５地区ＳＤ3525はＳＤ3528からほぼ直角に分岐し，自然流路Ｂ２地区ＳＤ2541に接続して排水溝の役目を果たすと考えられる。盛土は古墳時代の大畦畔のもので，弥生土器片や石製玉作関連遺物などを含んでいたが，これは側溝を掘り直した時の排土をそのまま道路に盛り上げたためと考えられる。路面には部分的にわずかだが，土の締まった硬化面が確認できた。弥生時代には盛土はなく，両側溝で挟まれた間に硬化面などは認められなかった。

東側溝内ＳＤ3528から出土した用途不明部材（*1944*）と盛土下から出土した建築部材（*1945*）は放射性炭素年代測定をかけており，^{14}Ｃ年代は*1944* が1750±40，*1945* は1810±40と測定された。

遺物は土師器・弥生土器・木製品・緑色凝灰岩石核が出土した。

弥生土器は甕・壺・高杯・鉢がある。*1923* ～*1925* は東側溝から出土した土器。*1923* は平縁甕。

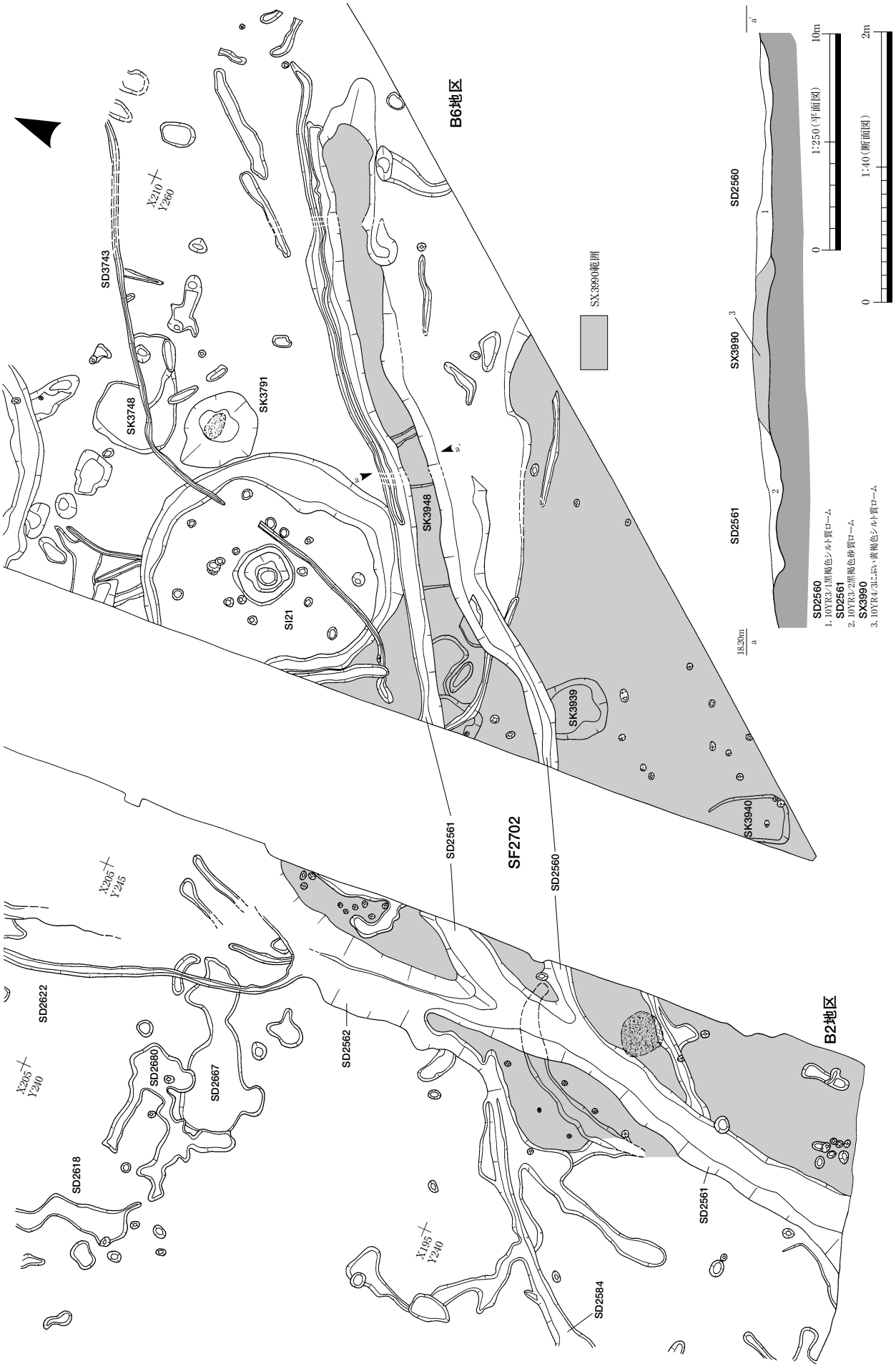
1924 は受口甕。*1925* は有段高杯で，内外面ともに摩滅してミガキは不鮮明。*1926* ～*1931* は西側溝から出土した土器。*1926* は受口甕。*1927* は鉢形高杯で，杯部は内外面ハケ，脚部はミガキのようだが摩滅している。*1928* ・*1929* は高杯か器台の脚部で，*1929* は脚裾部上端に刺突文を施す。*1930* は小型の鉢。底部は台となり，外面にユビオサエが残る。*1931* は短頸壺。口頸部内面には部分的に粘土紐接合痕が残り，口縁部もやや波打っており，粗いつくりである。*1932* ～*1934* は道路盛土から出土した土器。*1932* は有段甕で，段の下部は下垂させる。*1933* ・*1934* は受口甕。*1933* の口縁端部は強く屈曲して，外面に段をなす。

木製品には農具・用途不明部材・建築部材がある。*1935* ～*1937* は農具。*1935* は直柄狭鍬で，全体的に遺存状態は悪い。出土時には柄穴内にわずかに柄が残っていたが，ほどなく崩れてしまった。平面形は細い長方形で，刃先にむかって幅が細くなる。着柄隆起は逆雫形で，欠損が激しいものの，厚みもあり，頑丈なつくりである。前面の蟻溝は上部が欠落し，痕跡のみ残る。蟻溝内部は泥除けを組合せた時の圧迫痕が残っている。刃部の断面はいびつなかまぼこ形で，遺存状態が悪かったため，特に刃先に関しては詳細不明である。蟻溝が存在することや，着柄隆起の位置が片側に寄っていることなどから，広鍬として使用していたのを，狭鍬に作り直して再利用したのではないかと考えられる。樹種はクヌギ節。*1937* はナスビ形又鍬で，軸部上部に四角い孔をあけるタイプだが，上部は欠損している。ナスビ形の笠部下部に結縛痕は見られない。刃部は片方の刃が欠損しているが，遺存する刃の幅は上下ともほぼ同じで，刃先のみ細くなる。軸部はやや厚みがあるものの，刃部の厚さは薄い。樹種はコナラ節。*1936* は裏面全面が剥落したもので，形状から鍬かと考えているが，明らかではない。樹種はクヌギ節。

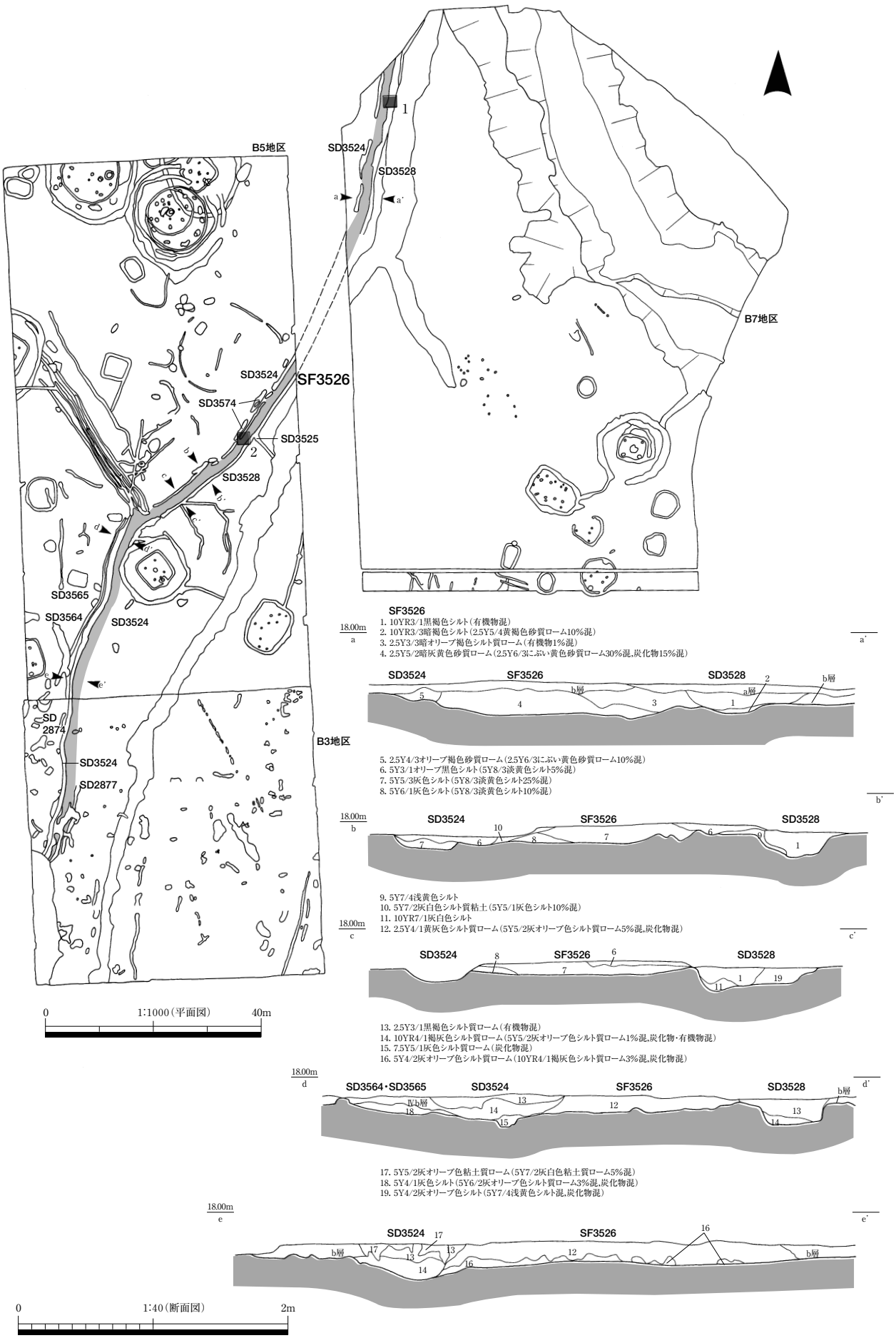
1938 ～*1944* は用途不明部材。*1938* ～*1940* は幅広の薄い板に複数の孔をあけた部材。*1938* は左下隅に大きめの孔１つと，右辺に沿って小さめの孔２つがあけられており，裏面左上には貫通していない穴が１つある。上端は断面凸形になっており，下端も段になっている。*1939* は右上隅に２つ，右下に１つ，大きめの円孔をあける。左辺には凸型に張り出した部分がある。*1940* は左右上隅に１つずつ，中ほどは左辺に１つ，下部は不規則に６つの孔をあける。上端が段になっており，その直下に刃あたり線が残っている。下端は欠損している。*1941* は細長い板の一端に段を削りだした部材。下部は欠損している。*1942* ～*1944* は棒状部材で，*1942* ・*1943* は両端を斜めに削る。樹種はいずれもスギ。

1945 ・*1946* は建築部材で，幅広の厚板の片側に方形の孔をあける。*1945* の上下端は粗い加工痕が残る。*1946* は上端が欠損しているが，上端は表面のみ，反対に下端は裏面のみを斜めに削って薄く仕上げる。また下端は側面も削って幅を細くする。いずれも壁材と考えられる。樹種はスギ。

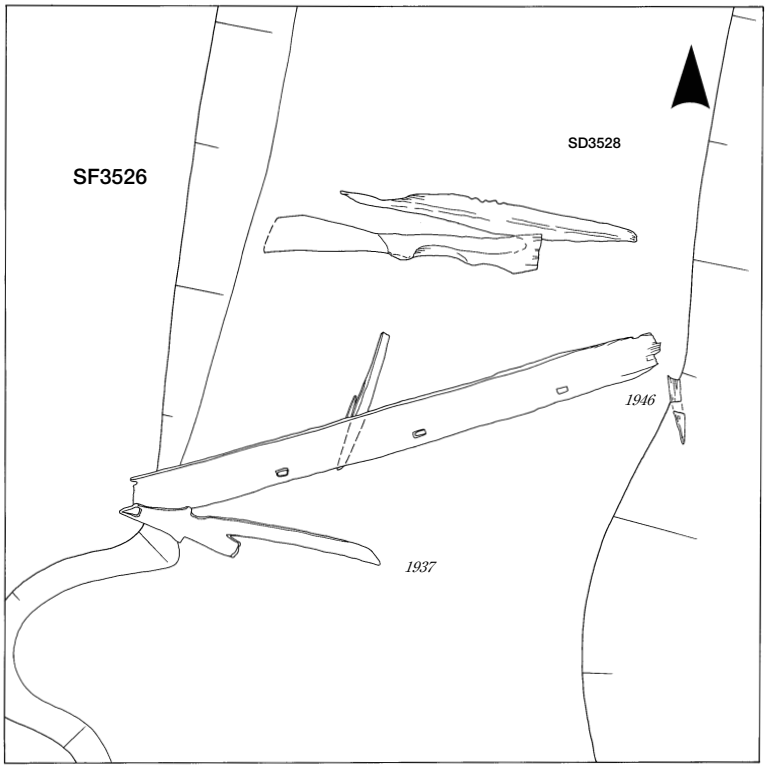
側溝の内，ＳＤ3524から緑色凝灰岩石核が出土した。*1947* ・*1948* は荒割工程品。石質は軟質で，多くの亀裂が入る。*1948* は摩耗・風化が著しい。出土地点は緑色凝灰岩が多く出土したＢ５地区ＳＩ６に近接し，ここからの流れ込みの可能性がある。道路の盛土部分からは，荒割工程品（*1949*）が出土した。硬質で磨耗・風化はみられないが，周辺からの流れ込みと思われる。



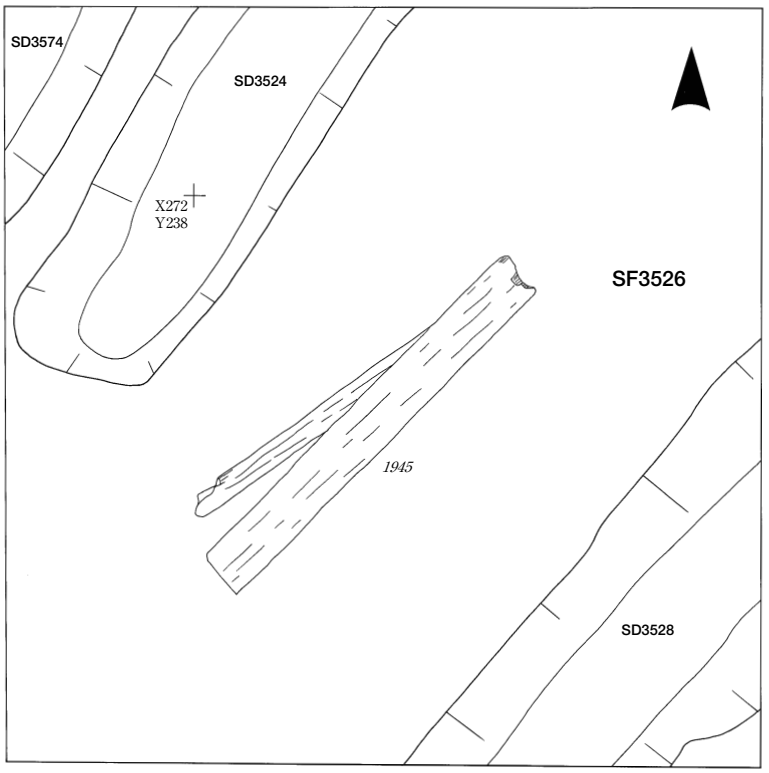
第224図　遺構実測図（1/40・1/250）
Ｂ２・Ｂ６地区　ＳＦ2702



第225図　遺構実測図　（1/40・1/1000）
Ｂ３・Ｂ５・Ｂ７地区　ＳＦ3526



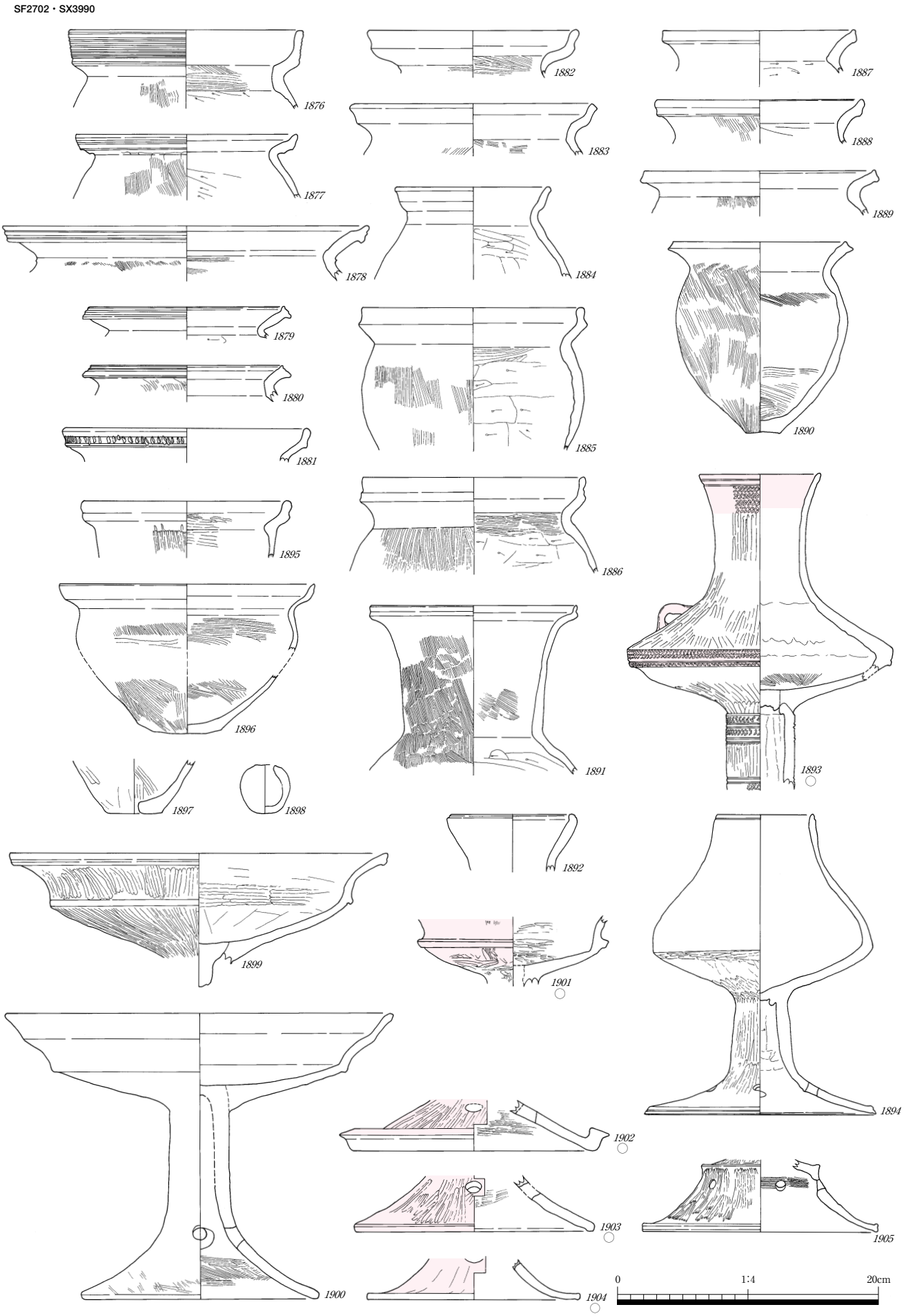
1



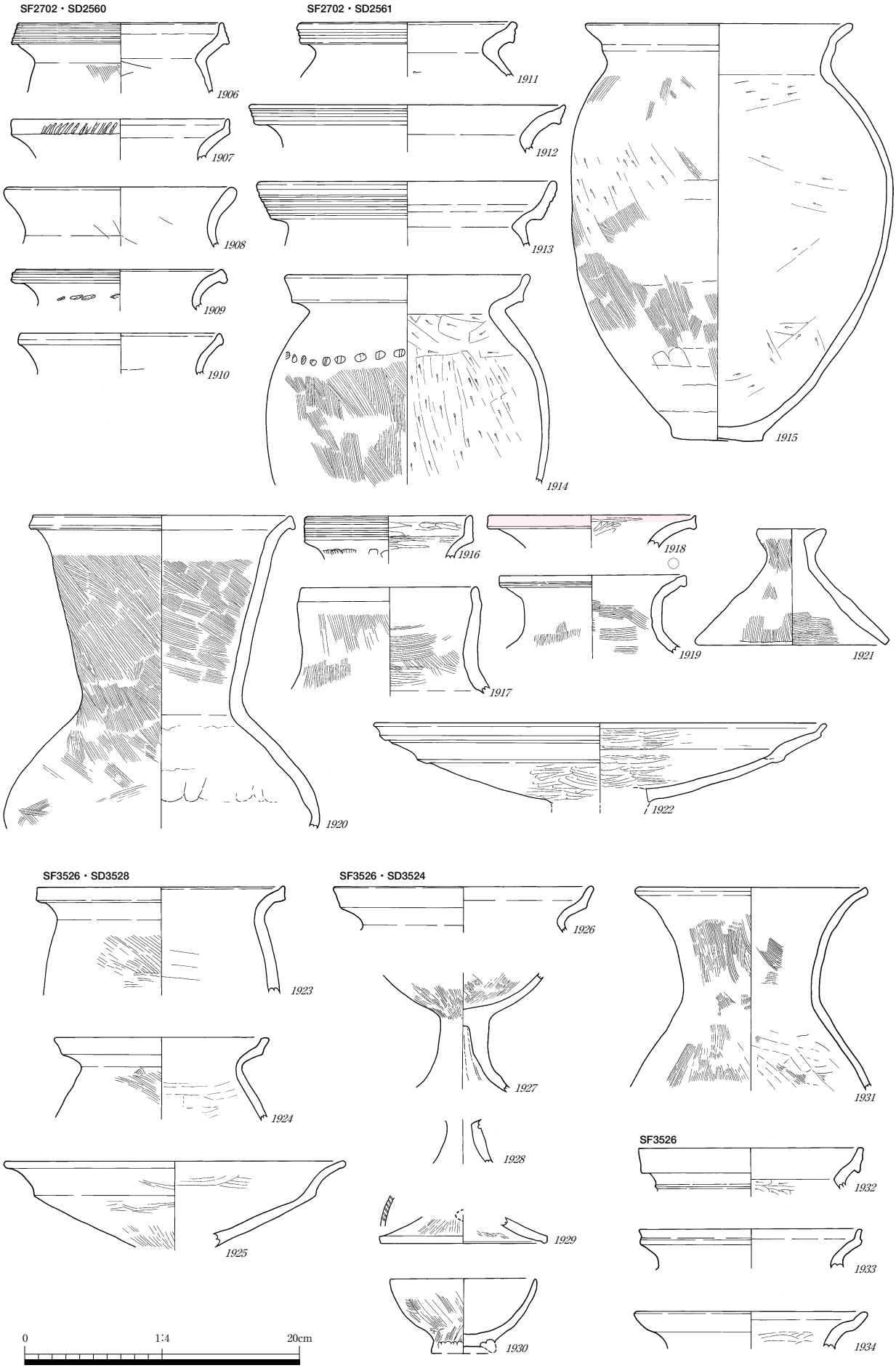
2

0　1:20　1m

第226図　遺構実測図　(1/20)
Ｂ５・Ｂ７地区　1・2.ＳＦ3526

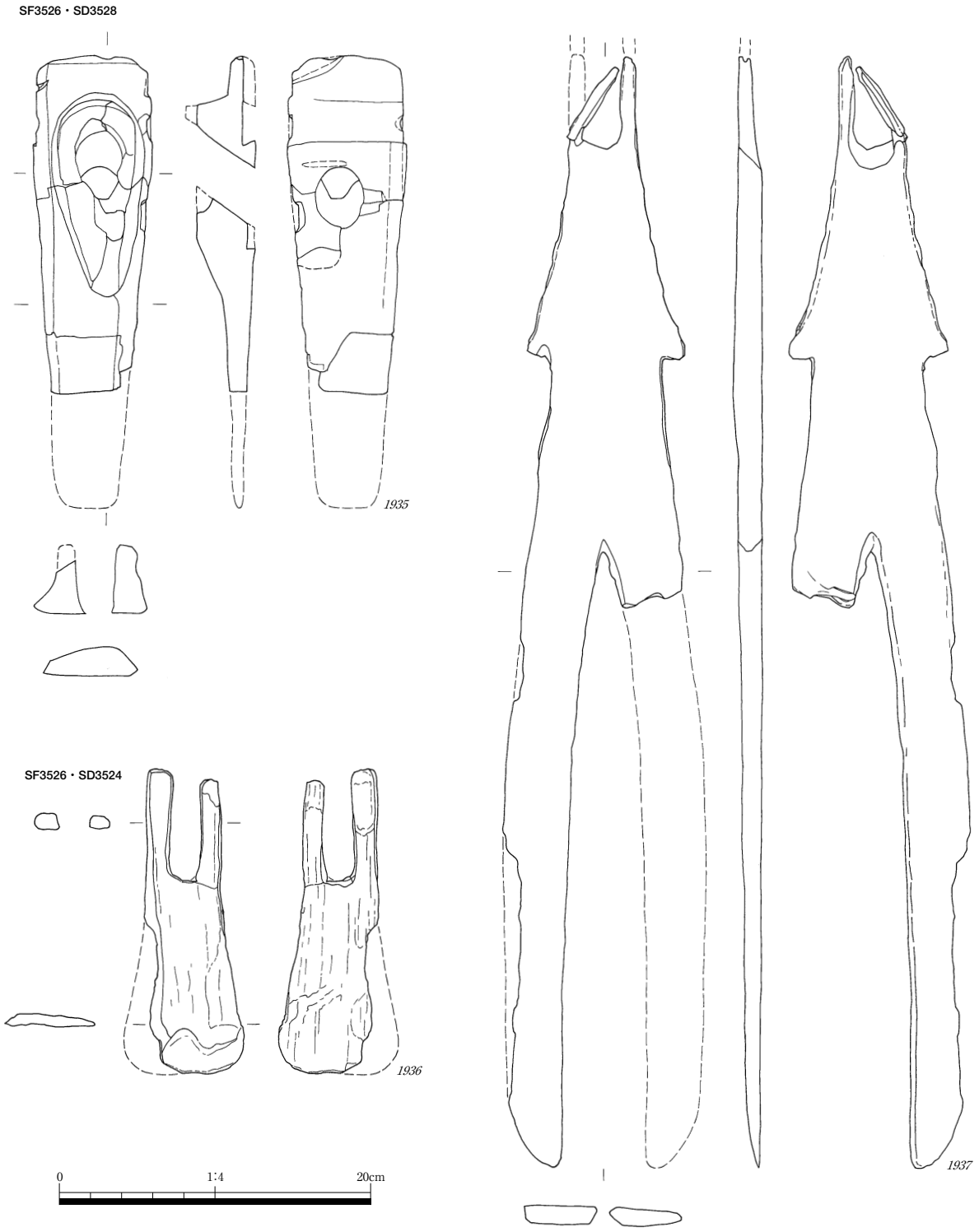


第227図　遺物実測図　(1/4)
B 6 地区　S F2702・S X3990

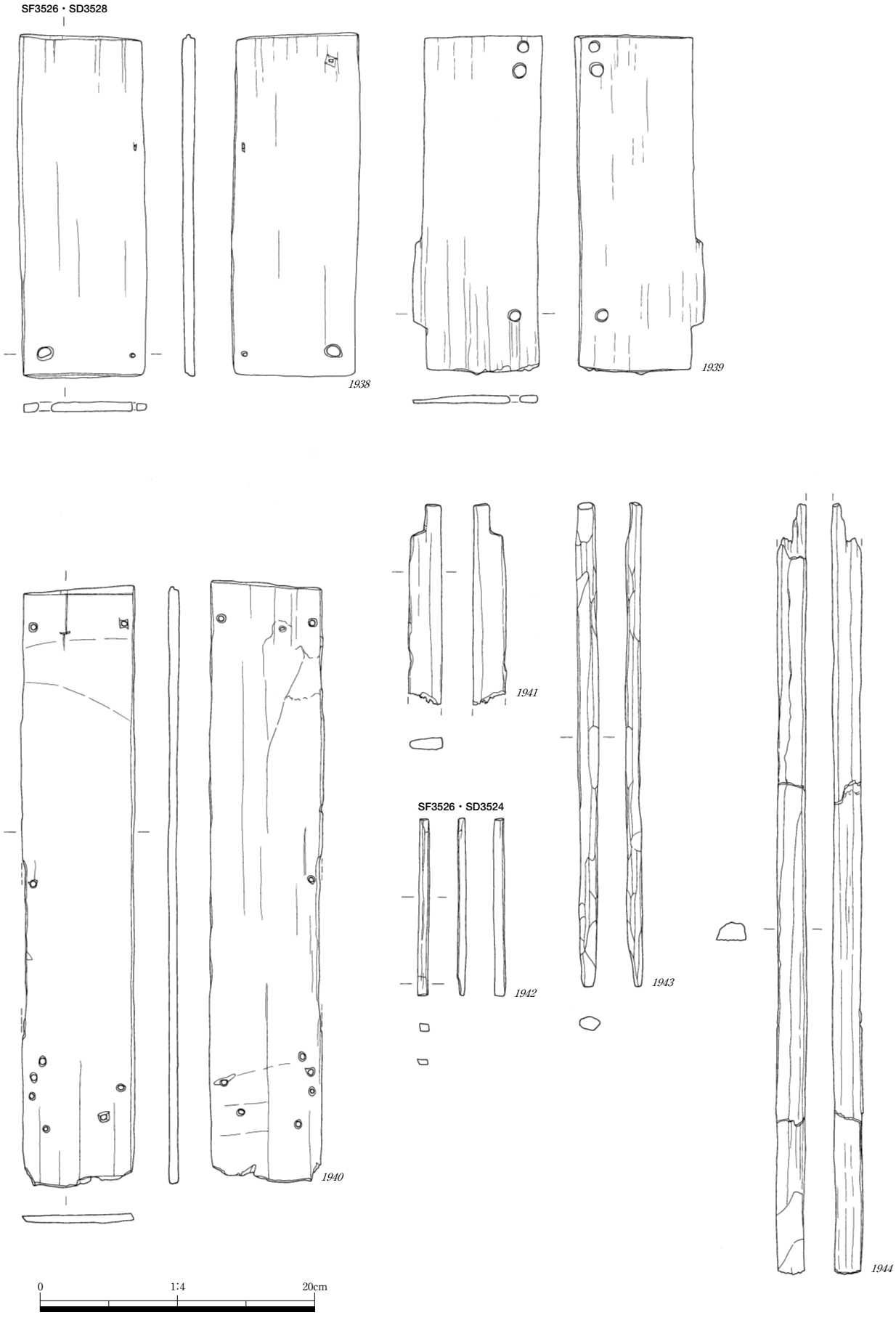


第228図　遺物実測図　(1/4)

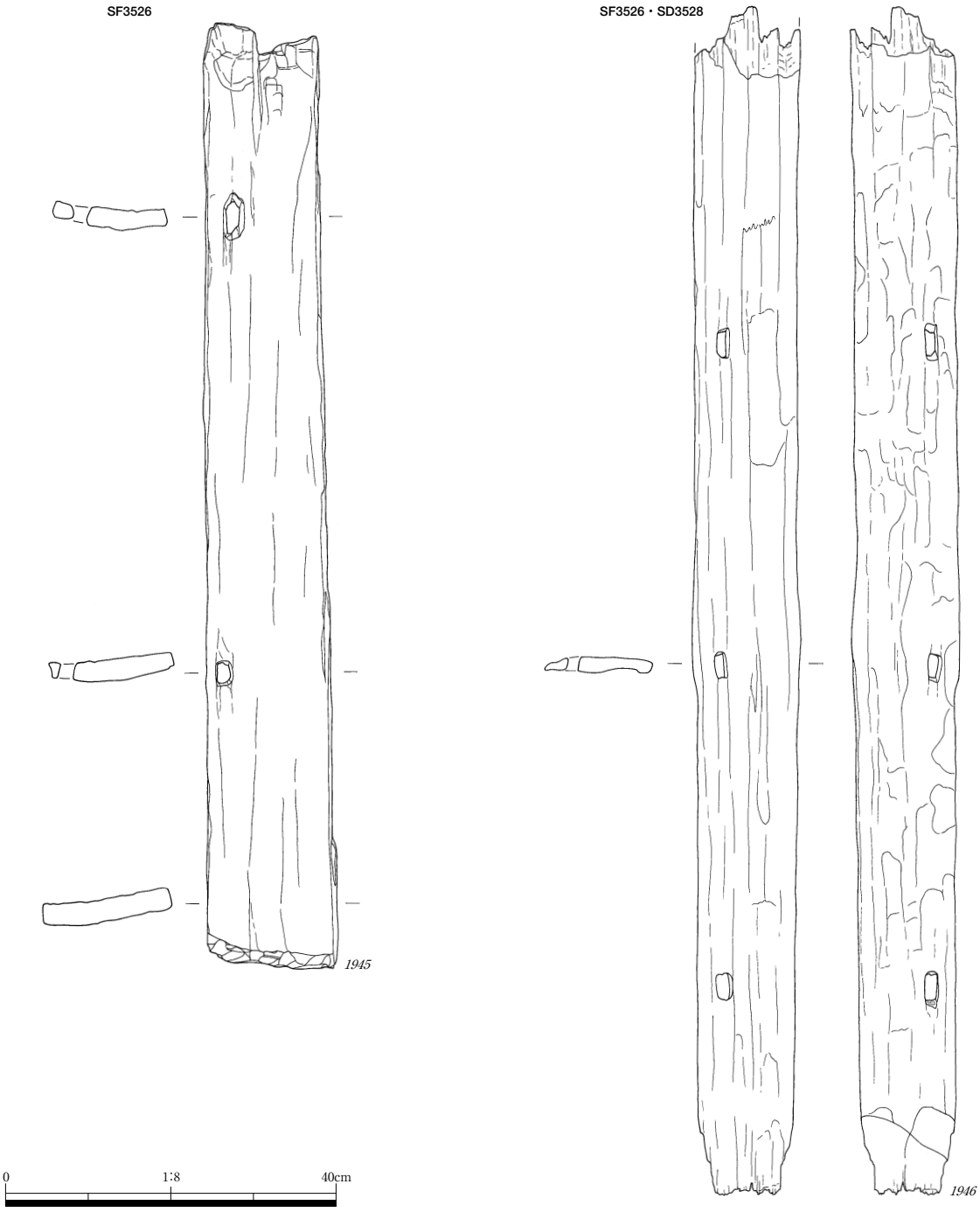
B地区　ＳＦ2702・ＳＤ2560(*1906～1910*)　ＳＦ2702・ＳＤ2561(*1911～1922*)
ＳＦ3526・ＳＤ3524(*1926～1931*)　ＳＦ3526・ＳＤ3528(*1923～1925*)　ＳＦ3526(*1932～1934*)



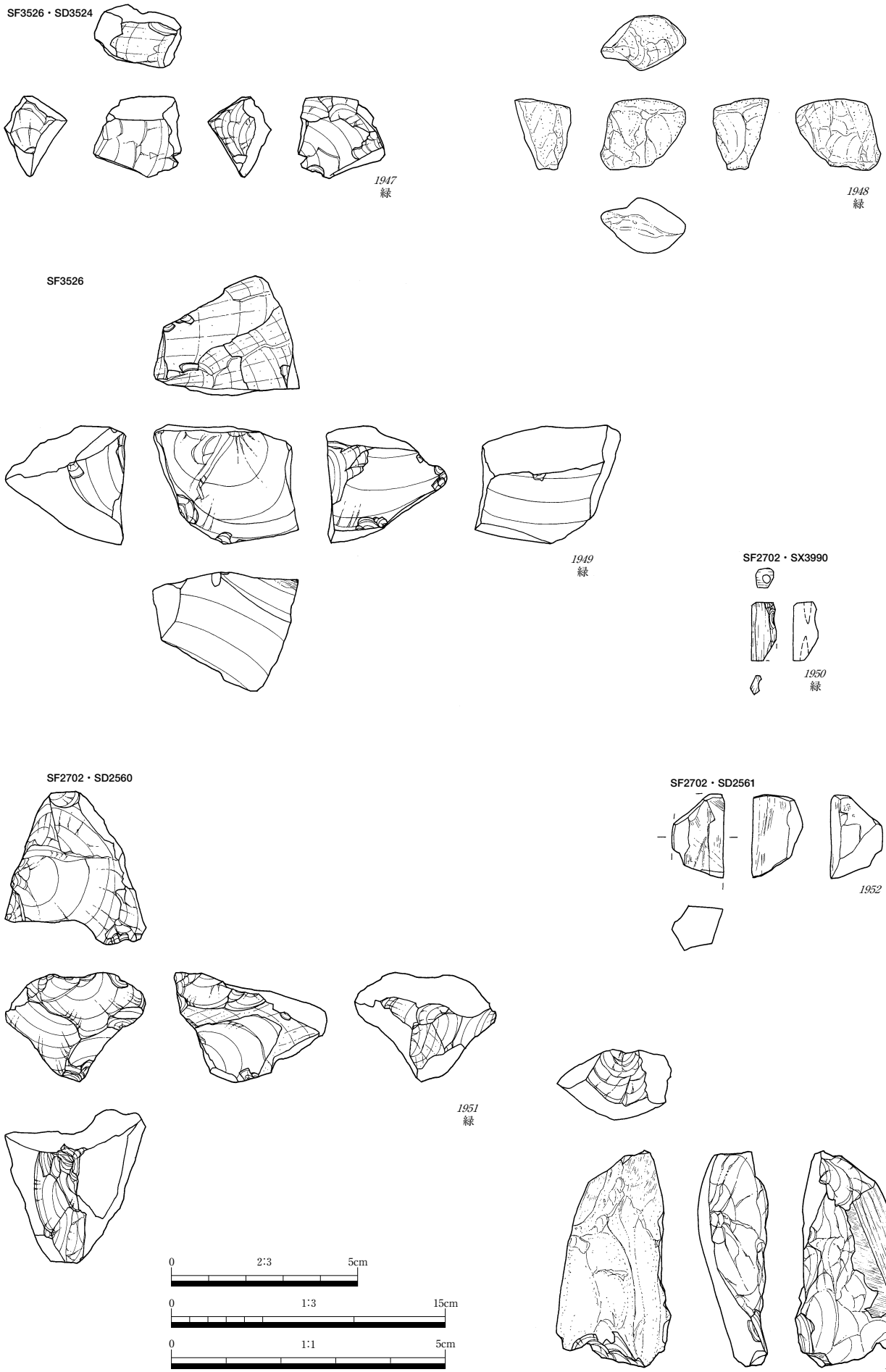
第229図　遺物実測図　(1/4)
B５地区　ＳＦ3526・ＳＤ3524(*1936*)　ＳＦ3526・ＳＤ3528(*1935・1937*)



第230図　遺物実測図　(1/4)
Ｂ５地区　ＳＦ3526・ＳＤ3524(*1942*)　ＳＦ3526・ＳＤ3528(*1938*～*1941*・*1943*・*1944*)



第231図　遺物実測図　(1/8)
B５地区　ＳＦ3526・ＳＤ3528(*1946*)　ＳＦ3526(*1945*)



第232図　遺物実測図　(*1950*　1/1, *1947～1949・1951・1953*　2/3, *1952*　1/3)
B地区　SF2702・SD2560(*1951*)　SF2702・SD2561(*1952*)　SF3526・SD3524(*1947・1948*)
SF3526(*1949*)　SF2702・SX3990(*1950・1953*)

F　土坑

2276号土坑（ＳＫ2276，第234図）

Ｂ１地区の南側に位置し，ＳＤ2275を切っている。ほぼ円形の土坑で最大径74㎝，深さ12㎝を測る。埋土は黒褐色粘土質ロームで，遺物は弥生土器片が出土した。

2330号土坑（ＳＫ2330，第234・252図，図版96・97）

Ｂ１地区ＳＤ2284の北に位置し，平面形はほぼ円形で最大径1.8m，深さ60㎝を測る。埋土は黒褐色砂質ローム，オリーブ黒色砂質ローム。遺物は弥生土器（*1972*～*1977*）が出土した。

1972 は擬凹線甕で４条の擬凹線を施す。*1973*～*1975* は刺突受口甕で口縁有段部下側に連続刺突文を持つ。調整は全て内外面共に口縁部ナデ，胴部内面はケズリ，外面はハケメである。*1974* の口縁端部は面取りが施されている。*1975* の肩部には４条の櫛描直線文と列点文を施している。*1976* は擬凹線広口壺で，口縁有段部に３条の擬凹線を施す。*1977* は有段高杯で口縁端部に面がある。杯有段部の外面は縦方向のナデで，一部縦方向のミガキを施す。杯部下半の内外面は縦方向，杯有段部内面は横方向のミガキ調整である。

2331号土坑（ＳＫ2331，第234・252図，図版97）

Ｂ１地区の西側南端部に位置する。平面形はほぼ楕円の土坑である。長径2.8m，短径90㎝，深さ７㎝を測る。埋土はオリーブ黒色砂質ロームで，出土遺物には弥生土器（*1978*）がある。*1978* は擬凹線甕で，口縁部に４条の擬凹線を施す。

2542号土坑（ＳＫ2542，第233・251図，図版95・96）

Ｂ２地区の西端に位置する。中近世まで続くＳＤ2501とその支流のＳＤ2541に挟まれた台地上に位置する，最大径2.5m，深さ10㎝を測る不整形土坑。赤彩された弥生土器の鉢（*1962*）・器台（*1963*）・高杯（*1964*）がまとまって出土した。また遺構の北側や周辺では甕（*1961*）の破片が散らばった状態で出土した。Ｂ２地区では，Ｂ６地区に隣接する東側の微高地部分では遺物が多く出土したが，ＳＤ2501に向かって地形が落ち込む西側ではＹ235ラインを境としてほとんど遺物が出土していない。窪地のような土坑であるが，この場所を選んで，赤彩した土器をまとめて置いていると考えられる点で，何らかの祭祀に関わる遺構・遺物と思われる。*1961* は有段甕。肩部に位置の乱れた刺突文が入る。頸部内面はハケメ調整。*1962* はくの字鉢。浅くひらく器形で，口縁端部を肥大させる。底部は平底だが，高杯のように底部中央に粘土を充填している。外面は板状工具によるナデの後ミガキを施し，内外面赤彩する。*1963* は有段器台で，外面と受部内面には細かいミガキを施し，内外面赤彩する。*1964* は有段鉢形高杯。摩耗が激しいが，内外面にミガキと赤彩を施す。

2559号土坑（ＳＫ2559，第66・251図，図版97）

Ｂ２地区の南東部に位置する。最大径78㎝，深さ16㎝を測る楕円形土坑。遺物は弥生土器が出土した。*1965* は刺突壺。口縁端部を有段につくり，刺突文を施す。外面はハケメ後ミガキ。

2563号土坑（ＳＫ2563，第66・251図，図版97）

Ｂ２地区の北東部に位置する。最大径1.46m，深さ５㎝を測る不整形土坑。遺物は弥生土器が出土した。*1969* は有段高杯の脚部。有段部には刻目文を施す。*1970* は高杯もしくは器台の脚部で，脚裾部端部は上端が肥大する。

2564号土坑（ＳＫ2564，第66・251図，図版97）

Ｂ２地区の北東部に位置する。最大径1.02m，深さ11㎝を測る楕円形土坑。遺物は弥生土器が出土した。*1967* は有段甕で，口縁部は外にひらく。肩部に１条の沈線文が入る。*1968* は装飾壺。口縁端

部に擬凹線文を３条施し，頸部には突帯を貼り付け，突帯上端に不揃いな刺突文を施す。

2590号土坑（ＳＫ2590，第66・251図，図版97）

Ｂ２地区の南東部に位置する。最大径1.89m以上，深さ11㎝を測る楕円形土坑。ＳＤ2584に切られる。遺物は弥生土器が出土した。*1958* は有鈕蓋の口縁部。内外面赤彩する。*1959* ・*1960* は受口甕で，*1959* は口縁部外面に刻目文。*1960* は口縁端部を面取りし，肥大する。

2603号土坑（ＳＫ2603，第66・251図，図版97）

Ｂ２地区の南東部に位置する。最大径1.85m，深さ９㎝を測る楕円形土坑。弥生土器が出土した。*1971* は擬凹線短頸壺。胴部は算盤玉形で，底部は上げ底。口頸部内面と胴部内面下半，胴部外面上半は粗いハケメ，口頸部外面から肩部と胴部下半は粗いハケメ後粗いミガキを施す。

2605号土坑（ＳＫ2605，第66・251図，図版96・97）

Ｂ２地区の中程東側に位置する。最大径1.77m，深さ９㎝を測る不整形土坑。弥生土器が出土した。*1955* ～*1957* は甕。*1955* は擬凹線甕で，口縁部は外に開き，端部は尖らせる。*1956* は受口甕。胴部のハケは下から削り上げ，頸部に工具が当たった痕跡が残る。*1957* は平縁甕で，内外面ハケ，底部は上げ底となる。

2621号土坑（ＳＫ2621，第233・251図，図版97）

Ｂ２地区の北東部に位置する。ＳＤ2622に切られ平面形は不明であるが，深さは４㎝と浅く，窪地のような土坑である。遺物は弥生土器が出土し，そのうち器台の脚部（*1966*）が遺構内に正位で据え置かれた状態で出土した。*1966* は外反器台の脚部。透孔は４箇所で，脚基部外面ミガキ，脚裾部外面はハケを施す。

2847号土坑（ＳＫ2847，第235・253・262図，図版34・96～98・152）

Ｂ３地区の西側に位置する。北西－南東に細長い土坑。深さは約30㎝。埋土は５層あり，いずれの層も炭化物を含んでいる。遺物は弥生土器甕が数個体潰れた状態で南側にまとまって出土。埋土に炭化物を含み，土器が多量に出土していることから，廃棄土坑と考えられる。また石製品が出土した。

1986 ～*1988* は擬凹線甕で，肩部に連続刺突文を施す。外面の調整は，*1986* ・*1987* がハケ，*1988* が板状工具によるナデ。*1989* は有段短頸壺。底面に穿孔途中の痕がある。胴部に黒斑があり，その上にＸ状の籠目痕が２段に残る被籠土器。*1990* は長頸台付壺。口縁部に４条の擬凹線，胴部に２条の山形文，突帯部に２列の半截竹管による連続刺突文，脚部下半に平行沈線文６条，裾有段部上面に２条の山形文，側面に一部欠損しているが，半截竹管による連続刺突文２列の間に２条の山形文，裾端部に２列の半截竹管による連続刺突文，その間に２条の山形文を施す。裾部には４方向の透孔が約90°ずらして上下２段にある。*1991* は有孔鉢。口縁端部を面取りし，内面にスス付着。胴部下半には黒斑がある。*2163* は花崗岩質砂岩製の砥石。表・裏・右側・天面に砥面がみられる。砥面は平坦で，肉眼では観察しにくいほど細かな線状痕が残る。

2858号土坑（ＳＫ2858，第235図）

Ｂ３地区の中央北側に位置する。不整円形で深さ約５㎝の浅い土坑。遺物は東側に弥生土器ほぼ１個体（*488*）が潰れた状態で出土。Ｂ３地区ＳＩ５の南に隣接することからそれに付随する貯蔵穴か。

2983号土坑（ＳＫ2983，第234・263図，図版157）

Ｂ３地区の北端に位置する。形状はほぼ隅丸方形を呈する。埋土は単層で浅い。遺構の性格は，Ｂ３地区ＳＩ５の周溝とＢ５地区ＳＩ６の排水溝の間に位置すること，Ｂ３地区ＳＩ５・Ｂ５地区ＳＩ６は，玉作りを行っていたことから，それらの補助的な施設であった可能性が考えられる。

遺物は，弥生土器片・石製玉作関連遺物が出土した。石製玉作関連遺物は緑色凝灰岩剥片・緑色凝灰岩製管玉未成品が出土した。*2177*・*2178* は形割工程品で側面調整も行っている。*2179* は研磨工程品。*2180*・*2181* は穿孔工程品。小片のため穿孔方向は不明である。*2181* は地面側を欠損している。

3370号土坑（ＳＫ3370，第236・254図，図版34・98・99）

Ｂ４地区の東側に位置する。不整形で深さは12㎝。埋土は２層で，上層に炭化物を含む。遺物は，北側に弥生土器甕が横位で潰れた状態と高杯の脚部などがまとまって出土。甕は隣接するＳＫ3371のものと接合した。埋土に炭化物を含み，土器が多量に出土していることから，廃棄土坑と考えられる。*1993* は刺突受口甕で，ハケ状工具による連続刺突文を施す。外面スス付着。*1994* は受口状口縁の崩れた平縁甕。外面スス付着。

3371号土坑（ＳＫ3371，第236・254図，図版98）

Ｂ４地区の東側に位置する。瓢箪形で深さは４㎝と浅い。埋土は単層で，弥生土器片を多く含む。遺物は南側に弥生土器甕ほぼ１個体が横位で潰れた状態で出土。甕は隣接するＳＫ3370のものと接合した。ＳＫ3370と同様に廃棄土坑か。*1995* は平縁甕で肩部にハケ状工具による連続刺突文を施す。外面は胴部中位～底部にスス付着。

3433号土坑（ＳＫ3433，第236・254図）

Ｂ４地区の北西に位置する。長方形に近い形状で，長軸4.45m，短軸2.15mと大きい。深さは４～16㎝と浅く，一部礫層が隆起している。遺物は弥生土器甕・壺などの破片が多く出土。*2000* は受口甕で外面スス付着。調整は外面ハケ，内面は頸部と胴部下半がハケ，胴部中位がケズリ。*2001* は有孔鉢の底部。

3441号土坑（ＳＫ3441，第236・254図）

Ｂ４地区の北西に位置する。南東の一部が調査区外。楕円形で，深さは４～10㎝と浅いが，西側が一段低くなっている。埋土は単層。遺物は弥生土器甕・壺破片が５箇所に分かれて出土。*1996*～*1998* は甕でいずれも外面スス付着。*1996* は変形した受口甕。*1997*・*1998* は付加状甕。*1997* は肩部に連続刺突文を施す。*1999* は擬凹線器台受部。口縁部下端に連続刺突文を施す。

3449号土坑（ＳＫ3449，第237・255図，図版98・99）

Ｂ４地区の北東端に位置する。北側でＳＫ3486に切られる。形状は台形状を呈する。埋土は２層あるが10㎝程度で浅い。遺物は床面に弥生土器甕・壺が横位で潰れた状態で出土している他，土器片が散在していた。*2010*・*2011* は有段甕。受口状口縁の変形か。*2012* は刺突受口甕で，口縁部にハケ状工具による連続刺突文を施す。口縁以下を欠損しているため，肩部の文様は不明。頸部に平行沈線文２条を施す。*2013* は甕の底部。外面は底面までハケ調整。*2014* は有段無文口縁または受口状口縁が変形した鉢。外面スス付着。

3532号土坑（ＳＫ3532，第237・255図，図版99・100）

Ｂ５地区の西側に位置する。形状は隅丸方形を呈する。埋土は３層あり，炭化物が２層を中心に多く含まれていた。深さは10～15㎝程度で浅い。埋土には，弥生土器片が多く混入していた。遺物は床面に弥生土器甕・壺・高杯がほぼ１個体ずつ潰れた状態で出土した。この他に緑色凝灰岩・鉄石英の剥片が出土した。*2015* は刺突受口甕。口縁・肩部に太い櫛描き列点文，肩部に同じ工具による直線文４条を施す。*2016* は平縁で，全体に摩滅が激しく調整は不明。*2017* は短細頸壺で胴部にスス付着。*2018* は棒状脚部をもつ高杯で口縁端部を面取りする。*2019* はハの字状脚部をもつ高杯で，裾部に３方透孔がある。*2020* は高杯の裾部で外面赤彩。４方透孔がある。

3533号土坑（ＳＫ3533，第238・254図）

Ｂ５地区南西で，ＳＩ７に隣接する。細長い楕円形で，深さは９㎝と浅い。埋土は２層で炭化物を少し含む。遺物は南側で弥生土器甕の破片がまとまって出土した。*2002* は丸縁甕。外面スス付着。

3538号土坑（ＳＫ3538，第238・254図，図版99）

Ｂ５地区南西に位置し，ＳＩ６の周溝に切られ，ＳＤ3564を切る。不整形で深さは16㎝。埋土は２層。遺物は弥生土器甕・高杯の破片が３箇所に分かれて出土した。この他に緑色凝灰岩剥片が出土。*2003* ・*2004* は有段高杯でいずれもミガキ調整。*2003* は強く外反する杯部。*2004* はハの字状脚部。

3555号土坑（ＳＫ3555，第238図）

Ｂ５地区中央北側に位置する。楕円形で深さは21㎝。埋土は３層で，噴砂２条に引き裂かれている。遺物は弥生土器片が出土した。

3556号土坑（ＳＫ3556，第239・254図，図版34・99）

Ｂ５地区中央西側に位置し，ＳＫ3577・ＳＤ3541に切られる。隅丸方形で深さは15㎝。埋土は３層。遺物は弥生土器片が多く出土した。この他に緑色凝灰岩剥片が出土している。廃棄土坑か。*2005* は変形した受口甕で外面スス付着。外面ハケ，内面ケズリ調整。

3557号土坑（ＳＫ3557，第240・256図，図版100）

Ｂ５地区中央西側に位置し，ＳＩ８と隣接する。楕円形で深さは14㎝。埋土は３層で炭化物を含む。埋土から炭化物や多くの弥生土器片などが出土していることから廃棄土坑と考えられる。また，隣接するＳＩ８に関連する施設とも考えられる。

遺物は弥生土器甕片・高杯が３箇所に分かれて出土した他，緑色凝灰岩・鉄石英・石英の剥片が出土した。*2021* は甕底部で内面と底面をケズリ，外面をハケ調整。*2022* は拡張有段高杯。口縁端部上面に半截竹管文による連続刺突文を３列施す。

3559号土坑（ＳＫ3559，第240・256図，図版99）

Ｂ５地区南西側に位置し，ＳＤ3564・3565に切られる。隅丸方形で深さは16㎝。埋土は２層で炭化物を含む。遺物は弥生土器壺が潰れた状態で出土した。埋土から炭化物・弥生土器片が出土していることから廃棄土坑と考えられる。*2023* は擬凹線壺で，５条の擬凹線を施す。*2024* は広口壺または甕。外面ハケ，内面ナデ調整。

3567号土坑（ＳＫ3567，第241図）

Ｂ５地区南側に位置する。ほぼ楕円形で深さは14㎝。埋土は５層で炭化物を含む。また南側から粘土がかたまって見つかり，粘土貯蔵施設と考えられる。遺物は弥生土器片が出土している。

3568号土坑（ＳＫ3568，第241・256・263図，図版100・159）

Ｂ５地区中央西側に位置する。隅丸方形で深さは30㎝。埋土は６層で炭化物・弥生土器片を多く含む。埋土から炭化物・多くの土器片・焼石が出土していることから廃棄土坑と考えられる。また，他の廃棄土坑に比べて焼石が多く出土していることから祭祀的な意味合いが強いのかもしれない。

遺物は，弥生土器甕片・高杯がほぼ２箇所に分かれて出土した他，焼石が多く出土している。また石製玉作関連遺物も出土した。*2028* は有段甕。内外面ハケ調整で，ススが点在する。*2029* は拡張有段高杯。棒状脚に強く外反する杯部がつく。裾部は上面と側面の２箇所に４方孔がある。裾端部を剥落する。*2166* は緑色凝灰岩製管玉形割工程品。表面の一部に荒い研磨を施し整形している。このほか緑色凝灰岩剥片も出土した。

3569号土坑（ＳＫ3569，第242・256・257図，図版34・101・102）

Ｂ５地区中央に位置し，ＳＡ３に内包される。隅丸方形で深さは36㎝。埋土は５層で下に行くほど炭化物を多く含む。遺物はほぼ全面に多くあり，弥生土器甕・壺・高杯が１個体ずつ分かれて出土した他，緑色凝灰岩剥片が出土した。埋土から多くの炭化物・土器片などが出土していることから廃棄土坑と考えられる。祭祀的な空間ＳＡ３内にあることから，それに関連する施設と考えられる。

2025・*2026* は甕。*2025* は平縁甕。*2026* は胴部下半～底部で，外面は底面までハケ調整。*2027*・*2034*～*2037* は壺。*2027*・*2034* は長頸壺。*2027* は有段無文口縁壺で，胴部下半の黒斑部分に籠目痕が残る被籠土器。底面は上げ底状を呈する。*2035* はくの字状口縁広口壺で，胴部に黒斑が残る。*2036* は有段広口壺で，内外面ハケ調整。*2037* は台付壺。口縁部に４条の擬凹線を施す。壺部に黒斑が残る。*2038* は有段高杯の杯部で，口縁端部上面を面取りし伸張する。*2039* は，擬凹線台付鉢で，３条の擬凹線を施す。裾部に３方孔がある。

3570号土坑（ＳＫ3570，第241・256図，図版100）

Ｂ５地区中央北側に位置し，ＳＫ3571・3607と隣接する。楕円形で深さは19㎝。埋土は４層で炭化物を少し含む。遺物は弥生土器片・加工木・焼石が出土している。性格は出土遺物から隣接するＳＫ3571と共に廃棄土坑と考えられる。*2030* は有段甕。外面ナデ，内面ケズリ調整。

3571号土坑（ＳＫ3571，第242図）

Ｂ５地区中央北側に位置し，ＳＫ3570・3607と隣接する。不整形で深さは32㎝で一部２段掘り。埋土は４層で炭化物を多く含む。性格は埋土に炭化物・土器片が出土していることから隣接するＳＫ3570と共に廃棄土坑と考えられる。遺物は弥生土器片が出土した。

3576号土坑（ＳＫ3576，第242図）

Ｂ５地区中央東側に位置し，東側が調査区外。瓢箪形で深さは14㎝。埋土は単層で炭化物を少し含む。遺物は弥生土器片が出土した。廃棄土坑か。

3577号土坑（ＳＫ3577，第239・254・256・263図，図版34・99・100・159・162）

Ｂ５地区中央西側に位置し，ＳＫ3556・ＳＤ3541を切り，ＳＤ3550に切られる。隅丸方形で，深さは14㎝。埋土は３層で炭化物や焼土を多く含む。埋土から炭化物・焼土・多くの土器片などが出土していることから廃棄土坑と考えられる。

遺物は弥生土器甕・高杯片などが多く出土した。この他に石製玉作関連遺物・焼石が出土した。*2006*・*2007* は付加状甕。*2007* は肩部にヘラ描きの波状文を施す。外面に黒斑が残る。*2008* は壺の胴部。調整は外面をハケの後にミガキ，内面を頸部～胴部上半がナデ，胴部中位以下をハケ。*2009* は器台受部。口縁端部をナデ，面取り状とする。*2031* は有段高杯。*2031* は土器製作時につけられたものと考えられる小孔が杯底部～脚部にあり，貫通する。裾部に４方孔がある。*2032* は拡張有段高杯。

石製玉作関連遺物は緑色凝灰岩石核・剥片，緑色凝灰岩製管玉未成品が出土した。*2168*・*2171* は荒割工程品。*2171* の天地面は打割により平坦に分割され，厚さ17.2㎜程の板状になっている。表裏面は両極打撃により分割される。*2168* の表面は打割により平坦に分割されているが，研磨も施されている。必要に応じて面を整えてから次の工程へ進んでいったようである。*2167*・*2169*・*2170* は形割工程品。*2169* は打割の後四角柱状に整えるのに側面調整を施している。

3579号土坑（ＳＫ3579，第243・257・263図，図版100・101・159）

Ｂ５地区北東端に位置し，ＳＩ11の周溝を切る。楕円形で深さは８～18㎝。埋土は２層で炭化物を含む。遺物は弥生土器・石製玉作関連遺物が出土した。*2040* は有段甕。*2041* は受口甕。*2042* は短頸

壺の口縁か。内外面ナデ調整。*2043* は有段器台。脚部にヘラ描きの平行沈線を９条，その上に縦方向のヘラ描き記号を３箇所に施す。口縁部に黒斑が残る。*2044* ～*2046* は高杯の脚部。*2045* は上から平行沈線文４条・連続刺突文・平行沈線文４条・連続刺突文・平行沈線文４条を施す。裾部に３方孔がある。*2046* はハの字状脚部で，裾部が強く外展する。*2172* と *2173* は緑色凝灰岩製管玉形割工程品。この２点は接合可能で，接合した状態は*2174* に示した。表裏面の研磨により厚さ７～9.2㎜程の板状に整えた後，表面からの打割によって*2172* が分割される。

3621号土坑（ＳＫ3621，第240・257図，図版101）

Ｂ５地区北東端に位置する。不整形で深さは15㎝。埋土は単層で炭化物を含む。遺物は弥生土器甕１個体が潰れた状態で出土した。*2052* は刺突受口甕。口縁･肩部にハケ状工具による連続刺突文，その間に10条の櫛描直線文を施す。外面にスス付着。

3622号土坑（ＳＫ3622，第241図）

Ｂ５地区北東側に位置する。楕円形で深さは16㎝。埋土は単層で炭化物を含み，上面に礫が多く入る。他の土坑と異なり，10㎝大の礫がまとまって入っているため，異なる性格が窺える。遺物は弥生土器片が出土している。

3728号土坑（ＳＫ3728，第244・258図，図版101）

Ｂ６地区の南側東端に位置する。最大径82㎝，深さ５㎝を測る楕円形土坑。埋土は炭化物が混じる黒褐色ロームである。時期は周辺の竪穴建物よりも新しいものと思われる。遺物は弥生土器が出土した。*2053* は器台または高杯の脚裾端部である。裾端部には粘土帯を貼り付け端部は上方に摘み上げる。縁帯と端部には，Ｍ字状の連続刺突文が押捺され，その上面は赤彩される。また，内面の周縁部にはススが付着し，蓋へと転用されていたようである。

3731号土坑（ＳＫ3731，第244・258図）

Ｂ６地区の南東側に位置する。最大径36㎝，深さ35㎝を測る楕円形土坑。埋土は直径５㎝大の礫が混じる暗灰黄色ロームである。遺物は弥生土器が出土した。*2054* は有段壺である。口縁部と頸部はヨコナデ調整である。

3740号土坑（ＳＫ3740，第244図）

Ｂ６地区の南側中央部に位置する。最大径1.53ｍ，深さ10㎝を測る楕円形土坑。埋土は暗灰黄色砂質ロームである。ＳＫ3749を切る。遺物は弥生土器片が出土した。

3748号土坑（ＳＫ3748，第244図）

Ｂ６地区の南側中央部に位置する。最大長3.9ｍ，最大幅2.58ｍ，深さ11㎝を測る不整形土坑。埋土は炭化物が混じる灰黄褐色シルト質ロームである。ＳＫ3740・3749に切られる。遺物は弥生土器片・緑色凝灰岩剥片が出土した。

3749号土坑（ＳＫ3749，第244図）

Ｂ６地区の南側中央部に位置する。最大長3.54ｍ，最大幅1.8ｍ，深さ17㎝を測る不整形土坑。埋土は上層が炭化物が混じる灰黄褐色シルト，下層が炭化物が混じる褐灰色シルトである。噴砂に切られ，ＳＫ3748を切る。遺物は弥生土器片が出土した。

3752号土坑（ＳＫ3752，第244・258図）

Ｂ６地区の中程東側に位置する。最大径1.69ｍ，深さ12㎝を測る楕円形土坑。埋土は黒褐色砂質ロームの単層で時期は周辺の竪穴建物よりも新しいものと思われる。遺物は弥生土器が出土した。*2055* は高杯の脚裾部である。裾端部は面取りされ，内面にはハケメ調整痕が残る。内面，及び透孔断面に

は炭化物の付着が認められ，転用された形跡が残る。

3777号土坑（ＳＫ3777，第245，258図，図版101，102）

Ｂ６地区の中央部，ＳＩ14の東側に位置する。最大径2.83m，深さ38㎝を測る楕円形土坑。埋土は下層近くに炭化物層がみられる。遺物は遺構の北半分から弥生土器の破片がまとまって出土し，廃棄土坑と考えられる。床面や床面から浮いた場所からも出土した。

弥生土器には，甕・器台・高杯・ミニチュア土器がある。甕には擬凹線甕・有段甕・刺突受口甕・平縁甕がある。*2057* は擬凹線甕の口縁部で，口縁端部は肥厚する。*2056* は有段部に緩やかな波状の櫛描文を巡らし，肩部には刺突文を施す。胴部内面はヘラケズリ調整である。*2061* は刺突受口甕で，口縁端部は摘み上げられて上方を向く。外傾する口縁帯には刺突文が施され，肩部には波状の櫛描文の下に直線文が巡る。胴部外面ハケメ調整，内面はハケメ後ヘラケズリ調整である。*2062* は口縁端部が外反する有段器台の受部である。有段部には１条の沈線が巡る。内外面横方向のヘラミガキ調整。*2064* は高杯の棒状有段脚裾部である。有段部には刻目文が施され，裾部上面には６箇所に透孔がある。外面は赤彩されるが，内面にはススが付着し，脚基部を欠損した後，蓋に転用されている。*2065* は鉢形のミニチュア土器で，丁寧に内外面ヘラミガキ調整される。底部は完形で，口縁部が一部欠損する。

3781号土坑（ＳＫ3781，第244・258図）

Ｂ６地区中央に位置する。最大径1.25m，深さ16㎝を測る楕円形土坑。埋土は炭化物が混じる灰黄褐色シルト。ＳＫ3782に切られる。遺物は弥生土器が出土した。*2066* ・*2067* は有段甕の小破片。

3782号土坑（ＳＫ3782，第244・258図，図版101）

Ｂ６地区中央に位置する。最大径1.31m，深さ14㎝を測る楕円形土坑。埋土は上層が炭化物が混じる暗灰黄色シルト，下層が褐灰色シルトである。ＳＫ3781・ＳＤ3769を切る。遺物は弥生土器が出土した。*2068* は擬凹線甕，*2069* は有段甕である。*2070* は口縁部が外反する拡張有段高杯で，口縁部と杯底部との境には突帯が巡る。口縁端部は外折れし，内側に粘土帯を貼り，肥厚させる。

3783号土坑（ＳＫ3783，第244・258図，図版101）

Ｂ６地区中央に位置する。最大径73㎝，深さ12㎝を測る楕円形土坑。埋土は暗灰黄色シルトである。遺物は弥生土器が出土した。*2071* は擬凹線甕で，頸部にまでハケメ調整される。外面には炭化物の付着が認められない。

3788号土坑（ＳＫ3788，第246・258図，図版101・103）

Ｂ６地区の中央部のＳＩ12の周溝と弥生土器廃棄遺構であるＳＤ3785の間に位置する。最大径1.21m，深さ10㎝を測る楕円形土坑。埋土は黄灰色シルトである。遺物は浅い窪地の遺構の北西肩から底にかけて弥生土器が一括に廃棄された状態で出土した。

弥生土器は甕・壺・器台・有孔鉢がある。*2072* は丸縁甕。胴部が丸く膨らむ器形で，胴部内外面はハケメ調整，外面には全体にススが付着する。*2074* は口縁端部丸縁で短く直立する頸部の壺で，内外面ヨコナデ調整である。*2075* は器台の受部で，垂下した口縁帯には３本１組の棒状浮文が６箇所に貼り付けられていたと推定する。*2076* は有段器台の脚部で，幅の狭い有段部には細い棒状工具による連続刺突文が３段に施され，その上面はさらにヘラミガキ調整が施されている。*2077* は甕の底部中央が穿孔されたものである。

3791号土坑（ＳＫ3791，第247・258図，図版101・103）

Ｂ６地区の南側中央部に位置する。最大径3.33m，深さ29㎝を測る楕円形土坑。埋土は上層が暗灰黄色シルト質ローム，下層が褐灰色シルト質ロームである。底部の北西寄りからは炭化物が検出され，

自然礫が出土した。遺物は弥生土器・ひすい剥片が出土した。*2078* は短頸壺の口縁部で，口縁端部は面取りされ内外面ヨコナデ調整である。外面には柔軟な植物質の原体によるU字状の浅い沈線文が残る。*2079* は有段短頸壺の口縁部か。口縁端部は上方に摘み上げられ，口縁部内面のみ丁寧にヘラミガキ調整される。*2080* は器台の脚基部である。基部には11条の沈線文が巡る。透孔は３箇所に穿たれる。*2081* は把手付鉢の把手である。

3792号土坑（ＳＫ3792，第246・259・262図，図版34・103・104・154）

Ｂ６地区の南西部，ＳＩ13とＳＩ21に挟まれた所に位置する。最大長1.92m，最大幅1.49m，深さ48cmを測る不整形土坑。埋土は４層に分かれ，上層が炭化物が混じる褐灰色シルト質ローム，次いで灰黄褐色シルト，黒色シルト，下層が暗灰黄色シルトである。遺物は遺構の東側の３・４層中でまとまって出土し，弥生土器は破片のみ，他は軽石・自然木や河原石が一括に廃棄された状態で出土した。

弥生土器は甕・壺・高杯・鉢がある。甕は擬凹線甕と丸縁甕がある。擬凹線甕は口縁端部が三角形のもの（*2082*）と有段部に擬凹線文を施すものがある。*2082* は口縁端部断面三角形で，上端部を摘み上げる。胴部外面ハケメ，内面ヨコケズリ調整である。*2086* は丸縁甕で，砂粒のあまり混じらない軟質な胎土である。壺は長頸壺と広口壺がある。*2087* は外反する長い頸部を持ち，口縁端部は面取りし，中央に浅い沈線が巡る。口縁部内外面ヨコナデ調整，頸部外面はハケメ調整，内面はナデ調整である。表面には筆状のものによる赤色顔料を塗布した文様が描かれる。乾燥する前に描かれたのか表面には施文具の動きが砂粒の動きに現れている。*2088* は広口壺か。口縁端部には擬凹線文が巡り，その上面は赤彩される。*2089* は口縁端部をわずかにつまんで屈曲させる広口壺か。*2090* は口縁端部が屈曲する拡張有段高杯で，口縁部は内外面横方向のヘラミガキ調整である。*2091* は高杯の棒状有段脚裾部である。裾端部には粘土帯を貼り付け縁帯を作り出し，その上面と有段部には双葉状に細かい連続刺突文が施される。透孔は有段部と裾部上面の２段に互い違いに穿孔される。内面には一部タールの付着が見られる。*2092* は有段鉢で，口縁部外面は横方向のヘラミガキ調整がなされるが，他は器表面が荒れており不明である。

2165 は軽石。線状痕がみられる平坦面は５面あり，そのうち断面Ｖ字状で鋭利な線状痕は裏・右側面にみられる。また断面Ｕ字状の溝が表・右側面にある。

3798号土坑（ＳＫ3798，第244・259図）

Ｂ６地区の南西部，ＳＩ13とＳＩ21に挟まれた所に位置する。最大径1.51m，深さ30cmを測る楕円形土坑。埋土は上層が灰黄褐色シルト，下層が暗灰黄色シルト。遺物は弥生土器が出土した。*2093* は高杯の脚裾部。裾端部は外面に粘土帯を貼り付けて縁帯を作り出し，その上面には擬凹線文が巡る。

3806号土坑（ＳＫ3806，第247図）

Ｂ６地区中央に位置する。最大長2.35m，最大幅2.31m，深さ17cmを測る不整形土坑。埋土は上層が暗灰黄色シルト，下層が灰黄色シルトである。噴砂に切られる。この辺りはＳＫ3806のような広く浅く掘り窪めた土間状の遺構が集中する（ＳＫ3811・3822・3991）。遺物は少ないが，建物や作業場などの可能性がある。遺物は弥生土器片が出土した。

3807号土坑（ＳＫ3807，第247・259図，図版101）

Ｂ６地区中央に位置する。最大径2.44m，深さ26cmを測る楕円形土坑。埋土は４層に分かれ，上層が暗灰黄色シルト，次いで黄灰色シルト，炭化物が混じる黒褐色シルト，下層が黒褐色シルトである。ＳＫ3822・ＳＤ3808を切る。遺物は弥生土器・緑色凝灰岩剥片が出土した。*2094* は器台又は高杯の脚部で，面取りされた脚裾端部には沈線が巡る。端部と内部周縁にはススが付着する。*2096* は台付鉢

の脚部と推定する。内外面ナデ調整。*2095* は口縁部が欠損するミニチュア土器で，甕形と推定する。外面は頸部がヨコナデ調整，胴部がヘラケズリ後ナデ調整。

3811号土坑（ＳＫ3811，第248・259図，図版103・104）

Ｂ６地区中央に位置する。最大長3.85m，最大幅2.83m，深さ19㎝を測る隅丸方形土坑。埋土は上層が暗灰黄色シルト，下層が灰黄色シルトである。ＳＫ3991に切られる。

遺物は弥生土器が出土した。弥生土器は甕・壺・器台がある。甕は擬凹線甕（*2100*）と口縁端部を摘み上げる有段甕（*2097*～*2099*）・平縁甕（*2101* ・*2102*）がある。*2100* は口縁端部断面三角形の擬凹線甕で，器壁は比較的薄く仕上げてあるが，粘土接合痕が目立ったためか，胴部外面にはタテハケメ調整の後，さらに横方向のヘラナデを帯状に施している。*2101* は頸部のくびれがほとんど無く，胴部の張らない器形で，口縁部外面ヨコナデ，内面ヨコハケメ，胴部は外面タテハケメ，内面タテケズリ調整である。*2102* は薄手の小型甕で，内外面ヨコナデ調整，肩部には刺突文が施される。外面にはススが付着する。*2105* は胴部が張らない長胴の器形の短頸壺で，内外面ハケメ調整，口縁端部は摘んだだけの仕上げで，胴部下半にはススが付着する。*2103* は外反器台の受部で，口縁帯には沈線が１条巡る。内面には赤彩痕が残る。*2104* は脚裾部で，端部は折り返して肥厚され，上方に摘み上げられる。

3822号土坑（ＳＫ3822，第249・259図，図版104）

Ｂ６地区中央に位置する。最大長4.55m，最大幅2.84m，深さ９㎝を測る不整形土坑。浅い窪地状の遺構である。埋土は暗灰黄色シルトである。ＳＫ3807・3823に切られる。遺物は弥生土器が出土した。弥生土器は有段甕（*2107*）・受口甕（*2106*）・平縁甕（*2108*）と壺（*2109*）の口縁部が出土した。*2109* は外傾する口縁の広口壺か。

3823号土坑（ＳＫ3823，第249・260図，図版104）

Ｂ６地区中央に位置する。最大径1.61m，深さ10㎝を測る楕円形土坑。埋土は暗灰黄色シルトである。ＳＫ3822を切る。遺物は弥生土器が出土した。弥生土器は擬凹線甕と刺突受口甕（*2111*）がある。擬凹線甕は断面三角形のもの（*2110*）と有段のもの（*2112*）がある。*2112* は胴部最大径が中位にあり，その上部に刺突文が巡らされる。外面はハケメ調整で，胴部内面は上位がハケメ，中位が板状工具による縦方向のナデ調整である。*2111* は口縁帯と肩部に斜行短線文が施される。

3864号土坑（ＳＫ3864，第248・260図，図版104）

Ｂ６地区中央に位置する。最大径1.61m，深さ19㎝を測る楕円形土坑。埋土は上層が暗灰黄色シルト，次いで黄灰色シルト，下層が炭化物が混じる黒褐色シルトである。遺物は弥生土器の破片が東端底部からまとまって出土した。弥生土器は甕・壺・高杯がある。甕には刺突受口甕（*2114*）と付加状甕（*2113*），平縁甕（*2115*）がある。*2113* は胴部が丸い中型の甕で，口縁上端部を摘み上げる。*2115* は胴部外面ハケメ調整後ナデ調整である。*2116* は口縁端部が受口状の有段広口壺である。有段部が浅く，口縁部･頸部は内外面ヨコナデ調整である。*2117* は有段高杯の口縁部で，口縁端部は丸縁で，内外面の調整は横方向のヘラミガキである。

3868号土坑（ＳＫ3868，第249・260図，図版104）

Ｂ６地区中央に位置する。最大径2.21m，深さ20㎝を測る楕円形土坑。埋土は上層が暗灰黄色シルト，下層が黄灰色シルトである。遺物は弥生土器が出土した。*2118* は丸縁口縁の小型甕である。口縁部から胴部中位までほぼ遺存しており，胴部下半を欠損する。胴部外面ハケメ，内面ナデ調整で，外面には全面にススが付着する。*2119* は外展する高杯又は器台の脚部で，裾端部は面取りされる。脚基

部内面には絞り痕が残る。透孔は３箇所に穿たれ，内面の周縁にはススが付着する。

3875号土坑（ＳＫ3875，第249・260図，図版104）

Ｂ６地区の中程東側に位置する。最大長3.71m，最大幅2.61m，深さ15㎝を測る。中央の最大長1.36m，最大幅1.12mを測る範囲が島状に残り，環状に溝が巡る土坑である。Ｂ２地区ＳＤ2667と類似する規模なので同様な遺構と思われるが，詳細は不明である。埋土は褐灰色シルトで，噴砂に切られる。遺物は弥生土器が南西側の溝からまとまって出土した。このほか鉄石英剥片が出土した。弥生土器は刺突受口甕（*2121*・*2122*）と平縁甕（*2120*），有段高杯（*2123*）がある。*2121* は口縁帯の屈曲が緩く，*2122* と共に口縁帯に刺突文が施される。*2123* は杯底部が浅く口縁部が外反する高杯で，調整は外面と口縁部内面は縦方向のヘラミガキ調整で，杯底部は横方向である。口縁端部内外面には擬凹線文が施された跡が残る。

3883号土坑（ＳＫ3883，第250・260図）

Ｂ６地区の中程東側に位置する。残存部で最大長1.75m，深さ28㎝を測る。埋土は上層が黄灰色砂質ローム，次いで黒色の灰が堆積し，その下が黒褐色粘土質ローム，下層が黄灰色シルト質ローム。ＳＩ15の周溝に切られ，建物よりも古い遺構である。遺物は弥生土器が出土した。*2124* は受口甕の口縁部小破片。*2125* は擬凹線器台の裾有段部。軟質で表面が摩耗している。

3884号土坑（ＳＫ3884，第107・250・260・272・273図，図版104）

Ｂ６地区の中程東側に位置する。最大径2.72m，深さ43㎝を測る楕円形土坑。埋土は８層に分層でき，上層が灰黄色シルトを中心とし，下層が黄灰色シルトを基調とする。さらに炭化物が１層置きに混じる。ＳＤ3867よりも古い遺構である。遺物は弥生土器が出土した。*2126* はくの字鉢で，内外面ヨコミガキ調整で，体部が扁球胴の器形である。

3885号土坑（ＳＫ3885，第102・103・249・260図，図版104）

Ｂ６地区中央に位置する。直径84㎝，深さ29㎝を測る円形土坑。埋土は上層が褐灰色シルト質ローム，次いで黄灰色シルト質ローム，下層が暗灰黄色シルト質ローム。遺物は弥生土器が出土した。*2127* は受口甕の口縁部。*2128* は拡張有段高杯で，外反する口縁部は端部で外側に折れ曲がる。杯部の屈曲部には突帯が巡り，細かい刻目文が施される。

3886号土坑（ＳＫ3886，第248・260図，図版103・104）

Ｂ６地区の中程西側に位置する。最大径36㎝，深さ22㎝を測る楕円形土坑。ＳＩ13の周溝上で検出されており，ＳＩ13の周溝が埋まった後に作られた遺構である。埋土は黄灰色ロームである。

遺物は弥生土器がまとまって出土した。弥生土器には，刺突受口甕（*2129*）・擬凹線壺（*2130*）・広口壺（*2131*）がある。*2130* は口縁部内面はヘラミガキ調整で，口縁部内外面は赤彩される。*2131* は外反する口縁部に扁球形の胴部が付く。口縁部外面はハケメ調整で，内面は縦方向のヘラミガキ調整，胴部外面は縦方向のヘラミガキ調整で，内面はハケメ調整の後上位はナデ調整される。また，胴部外面には格子状に色が変色する箇所が一部あり，籠目の跡と推定される。底部は平底で，ヘラケズリで仕上げられている。

3905号土坑（ＳＫ3905，第250・261図，図版104）

Ｂ６地区中央に位置する。最大長1.08m，残存部で最大幅1.05m，深さ13㎝を測る不整形土坑。埋土は褐灰色シルトである。ＳＤ3750に切られる。

遺物は弥生土器がまとまって出土した。弥生土器には，甕・壺・台付壺・器台・高杯がある。甕は有稜甕で，*2132* は口縁端部を摘み上げて稜を作り出す。*2133* は有段壺の口縁部である。*2134* は口縁

端部を面取りする壺または鉢で，内外面横方向のヘラミガキ調整である。*2135* は台付壺の胴部下半部である。胴部中央には浅い沈線が巡る突帯がある。*2136* は外反器台の受部で，垂下した口縁帯には円形浮文が4個貼り付けられている。*2137* は有段高杯の口縁部で，内外面縦方向のヘラミガキ調整で，口縁端部内面は赤彩される。*2138* ～*2140* は高杯又は器台の脚部である。*2138* はハの字に開脚する高杯の脚部で，脚裾部外面はヨコナデ後ミガキ調整で，端部は丸縁に仕上げられる。脚基部には２条の沈線が巡り，表面には赤彩痕が残る。透孔は3箇所に穿たれる。*2139* は裾端部が丸縁で，外面には細かい単位で縦方向のヘラミガキ調整がなされる。

3906号土坑（ＳＫ3906，第250・261・262図，図版103・106・141）

Ｂ６地区の中程西側に位置する。残存部で最大長2.43m，最大幅1.29m，深さ９㎝を測る不整形土坑。埋土は灰黄褐色シルトである。ＳＩ13の周溝に切られる。

遺物は弥生土器・木製品が出土した。弥生土器は擬凹線甕（*2141*）・擬凹線器台（*2142*）・高杯（*2143*・*2144*）がある。*2141* は外面ハケメ調整で，内面は胴部上半ハケメ調整，中位は横方向のヘラケズリ調整である。肩部には刺突文が施されるが，器面全面にはススが付着する。*2142* は受部径が脚裾部径よりやや大きく，共に大きく外反する器形の器台で，口縁端部・脚裾端部は面取りされる。*2143* は拡張有段高杯の口縁部で，端部は折り返して縁帯を作る。*2144* は高杯の棒状脚に付く開脚する脚裾部で，脚裾端部を折り返して粘土帯を貼り付けて作られた縁帯には小さい三角形の刺突文が4重に巡らされる。脚裾部には5箇所に透孔が穿たれる。縁帯上面には赤彩痕が残る。

木製品は刳物桶（*2161*）が出土した。楕円形の桶の短辺から長辺にかかる部分とみられる。下部は破損しているが，上部は口縁部にむけて厚みがやや薄くなる。樹種はスギ。

3939号土坑（ＳＫ3939，第224・261図，図版104）

Ｂ６地区の南端に位置する。盛土ＳＸ3990掘削後検出した。最大径2.74m以上，深さ15㎝を測る楕円形土坑。遺物は弥生土器が出土した。*2146* は有段甕で，胴部は内外面ハケメ調整で器面にススの付着は認められない。*2145* は有段広口壺で，口縁端部は受口状である。

3940号土坑（ＳＫ3940，第224・263図，図版155）

Ｂ６地区の南端に位置する。盛土ＳＸ3990掘削後検出した。最大径3.74m，深さ10㎝を測る楕円形土坑。弥生土器片・緑色凝灰岩製管玉完成品が出土した。*2183* は緑色凝灰岩製管玉完成品。地面側がわずかに欠損しているがほぼ完形の管玉。両側穿孔である。

3941号土坑（ＳＫ3941，第250・261図）

Ｂ６地区の南西部，ＳＩ13とＳＩ21に挟まれた所に位置する。最大径51㎝，深さ19㎝を測る。埋土は上層が黄灰色シルト質ローム，次いで褐灰色シルト質ローム，下層が暗灰黄色シルト質ロームである。遺物は弥生土器・緑色凝灰岩剥片が出土した。*2147* は有段鉢。表面は二次焼成を受けて表面は赤色に変化し，調整は不明である。

3948号土坑（ＳＫ3948，第261・263図，図版104・156）

Ｂ６地区の南側に位置する。盛土ＳＸ3990掘削後検出した。幅4.84mの遺構であるが，ほとんどが切られているため平面形は不明である。

遺物は弥生土器・石製玉作関連遺物が出土した。弥生土器には甕・壺・高杯・鉢がある。甕は擬凹線甕（*2148*），付加状甕（*2149*）がある。*2152* は外面ハケメ調整のやや外傾する短頸の壺の口縁部である。*2153* は有段広口壺で，口縁端部は受口状である。*2150* は有段高杯の口縁部で，短い口縁部が緩やかに外反する。調整は縦方向のヘラミガキ調整である。*2151* は有段鉢で，口縁部が大きく外

傾する。*2154* は器台又は高杯の脚部で，脚裾端部は面取りされ，外面は赤彩される。石製玉作関連遺物は緑色凝灰岩剥片・緑色凝灰岩製管玉穿孔工程品が出土した。*2182* は穿孔工程品。両側穿孔で，孔は貫通している。

3980号土坑（ＳＫ3980，第250・262図）

Ｂ６地区の中程西側に位置する。ＳＩ14の第１床面を検出後確認した。最大径91㎝，深さ27㎝を測る楕円形土坑。埋土は灰色砂質ロームを基調に黄灰色砂質ロームが混じる。

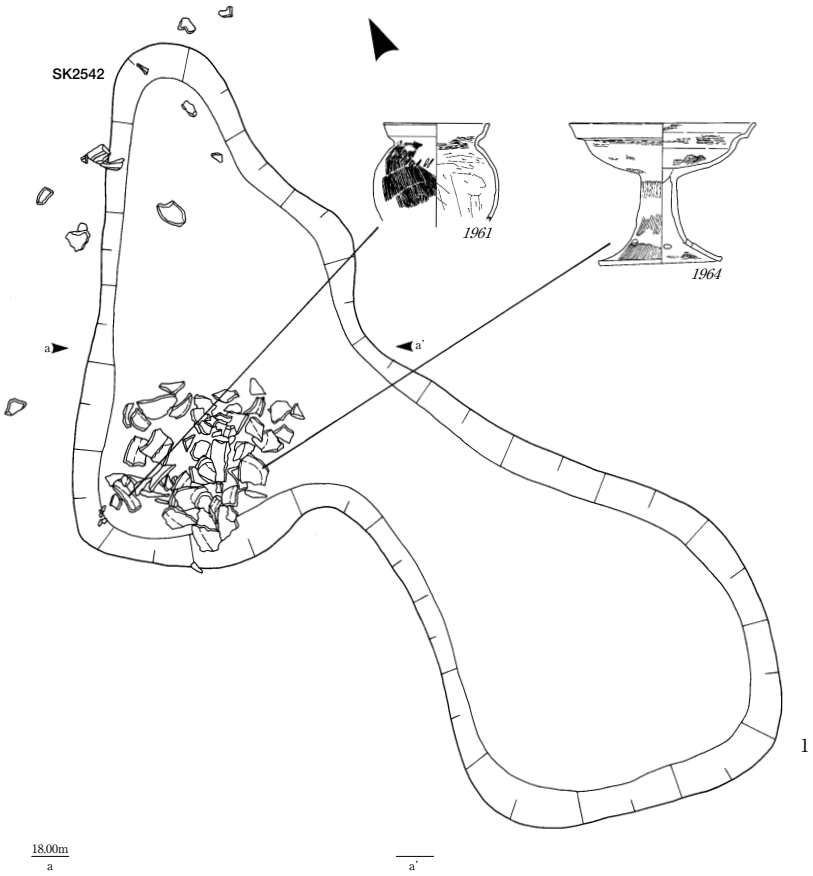
遺物は弥生土器片・木製品が出土した。木製品は円形板（*2162*）が出土している。楕円形の板が半分に割れたもので，厚さは全体に側辺に向けて薄くなる。桶の底板か。樹種はスギ。

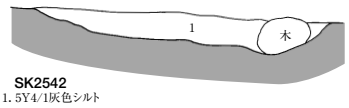
3983号土坑（ＳＫ3983，第244・261図）

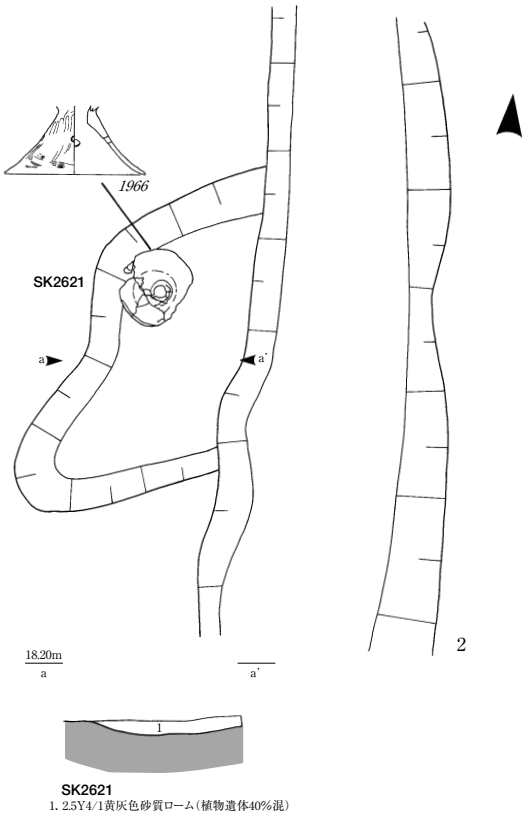
Ｂ６地区の南側中央部に位置する。最大径82㎝，深さ27㎝を測る楕円形土坑。埋土は上層が炭化物が混じる黄灰色砂質ローム，下層が炭化物が混じる灰色シルト質ロームである。遺物は弥生土器が出土した。*2155* は刺突受口甕で，口縁帯に刺突文が施される。炭化物の付着は認められない。

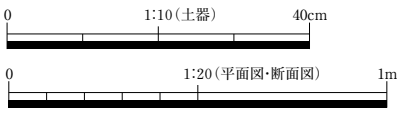
3991号土坑（ＳＫ3991，第250・261図，図版104）

Ｂ６地区中央に位置する。最大長6.26ｍ，最大幅4.62ｍ，深さ８㎝を測る不整形土坑で，広く浅く掘り窪めた土間状の遺構。埋土は灰黄褐色シルトで，噴砂に切られる。遺物は弥生土器が部分的にまとまって出土した。また，鉄石英剥片が出土した。弥生土器には擬凹線甕（*2156*）・小型の平縁甕（*2157*）・器台（*2158*）・高杯（*2159*）がある。*2158* は器台の脚部で，脚裾端部は面取りされ，ヘラ状器具でヨコナデされる。外面はハケメ調整後縦方向のヘラミガキ調整である。透孔は５箇所に穿たれる。*2159* は棒状有段の高杯脚部で，有段部が欠損する。

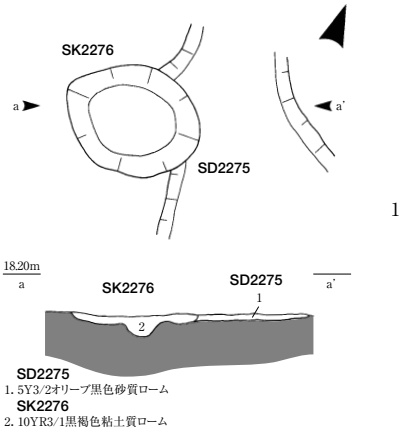


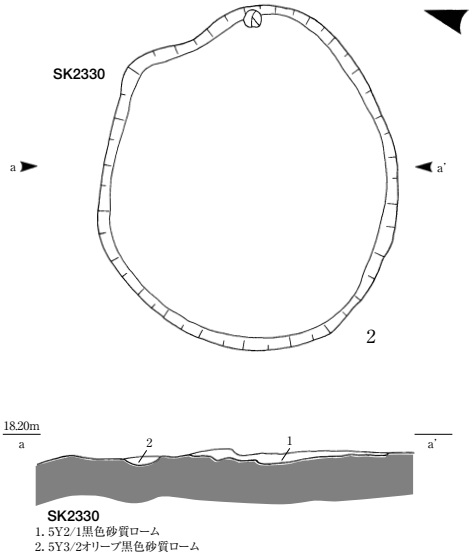


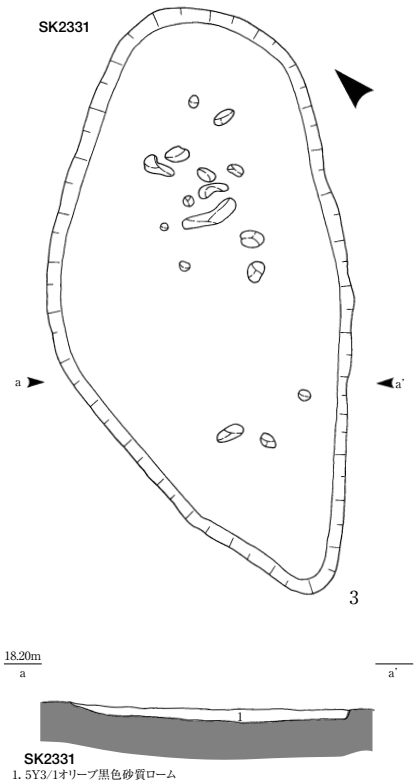


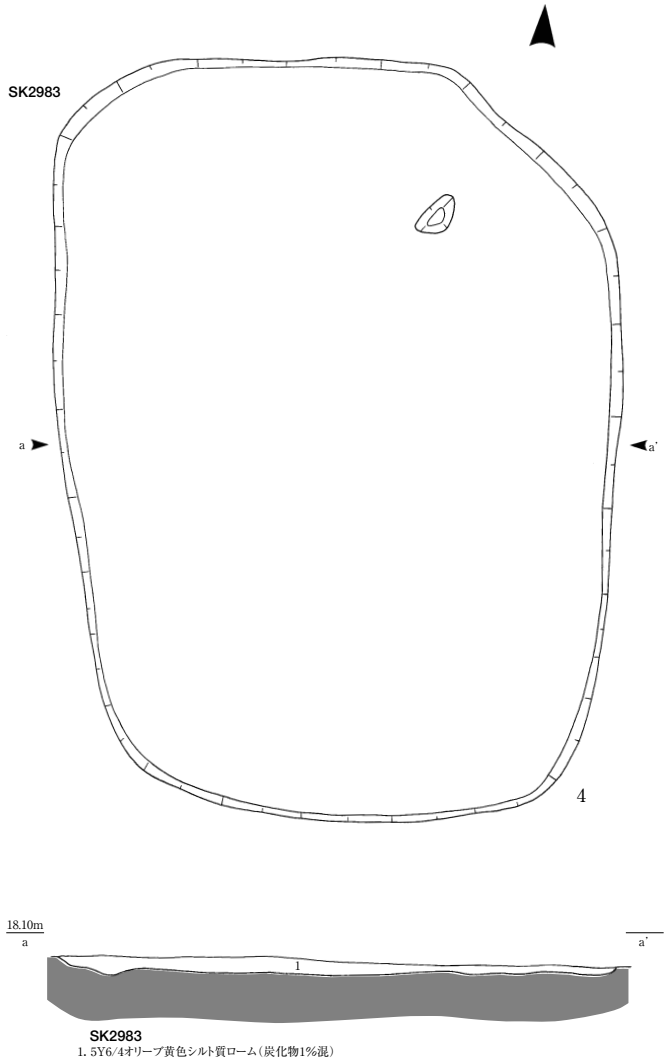


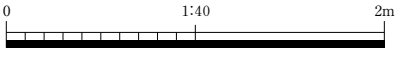
第233図　遺構実測図　(1/20, 1/10)
B 2 地区　1. S K2542　2. S K2621







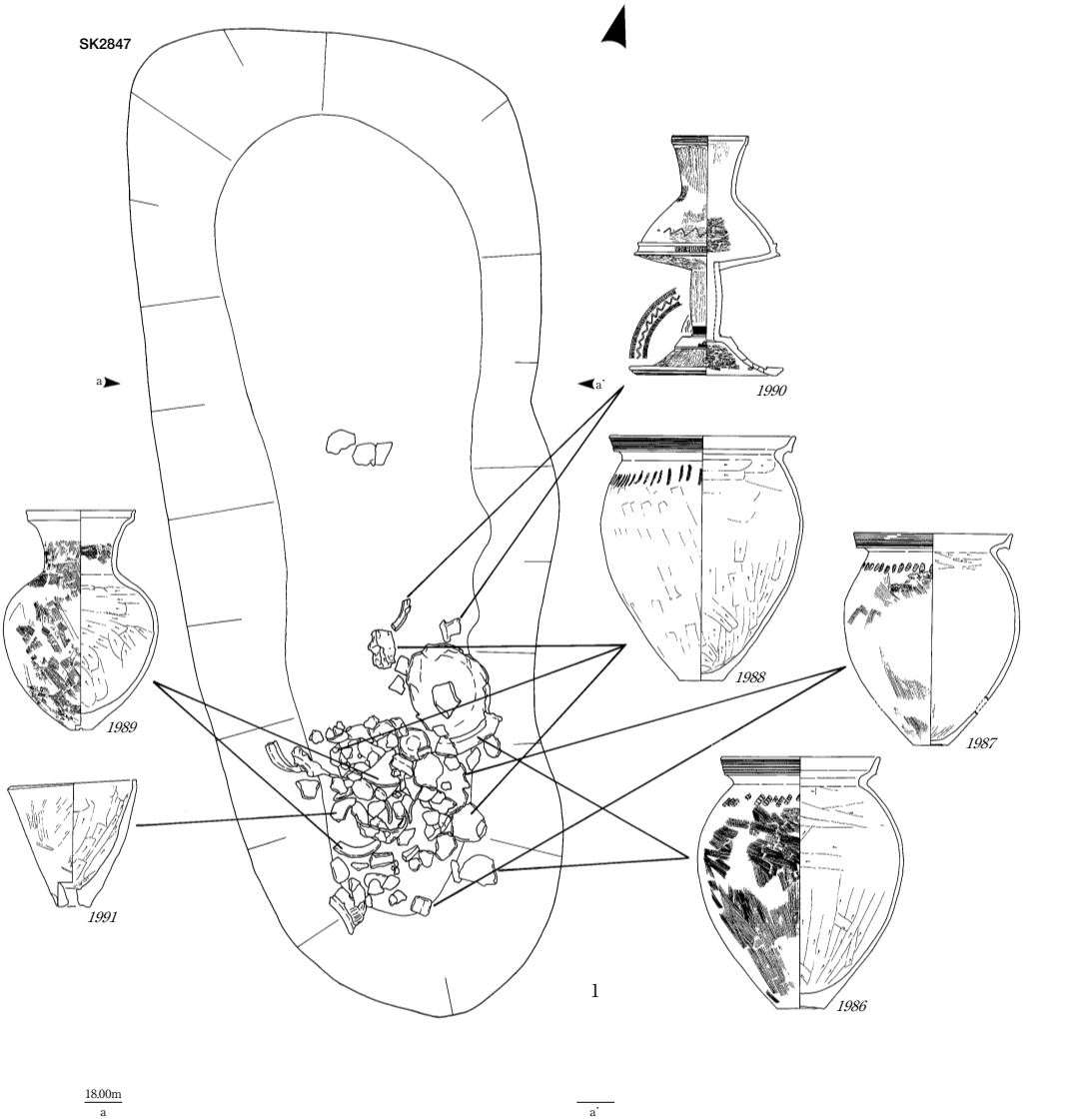




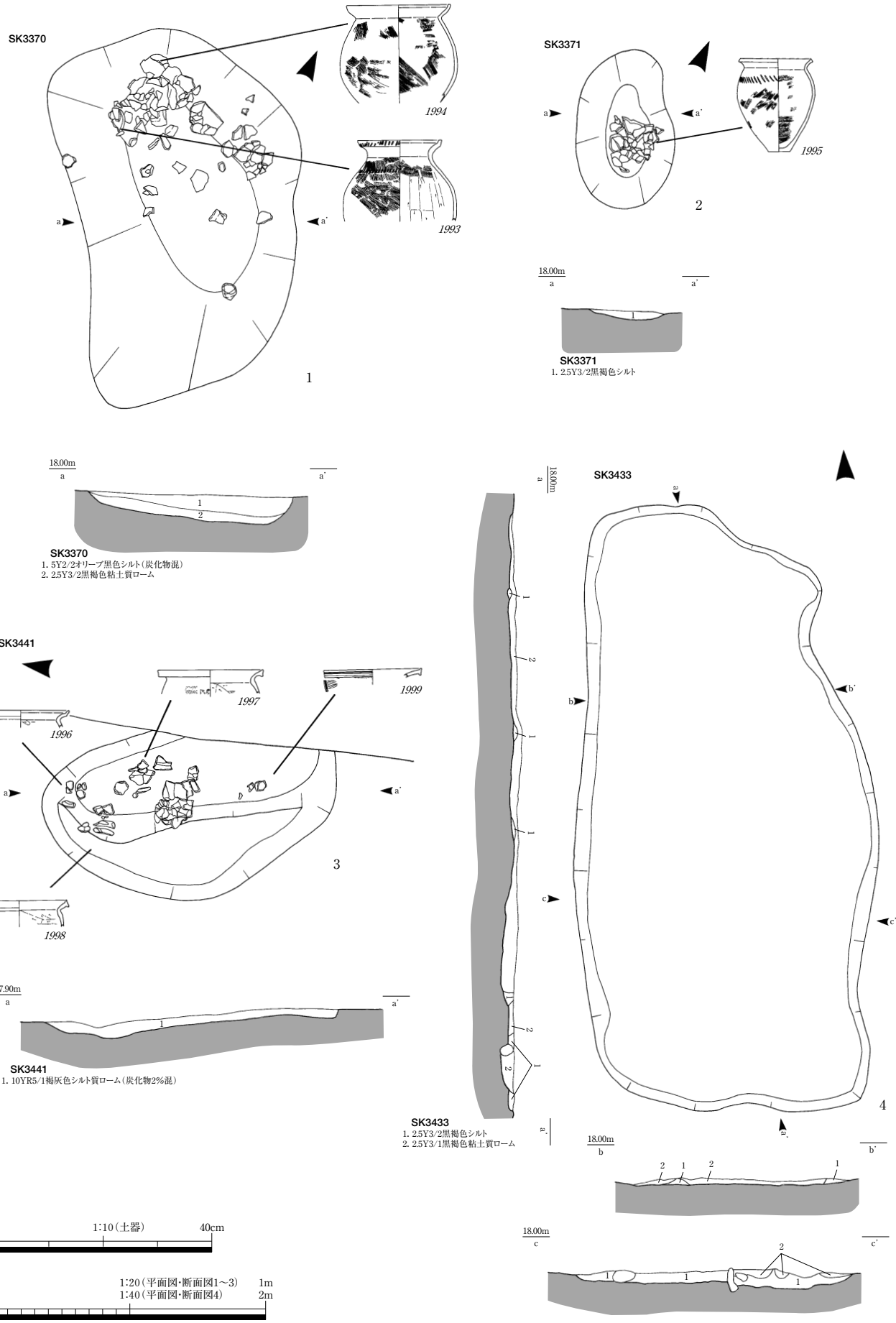
第234図　遺構実測図　(1/40)

Ｂ１地区　1.ＳＫ2276・ＳＤ2275　2.ＳＫ2330　3.ＳＫ2331

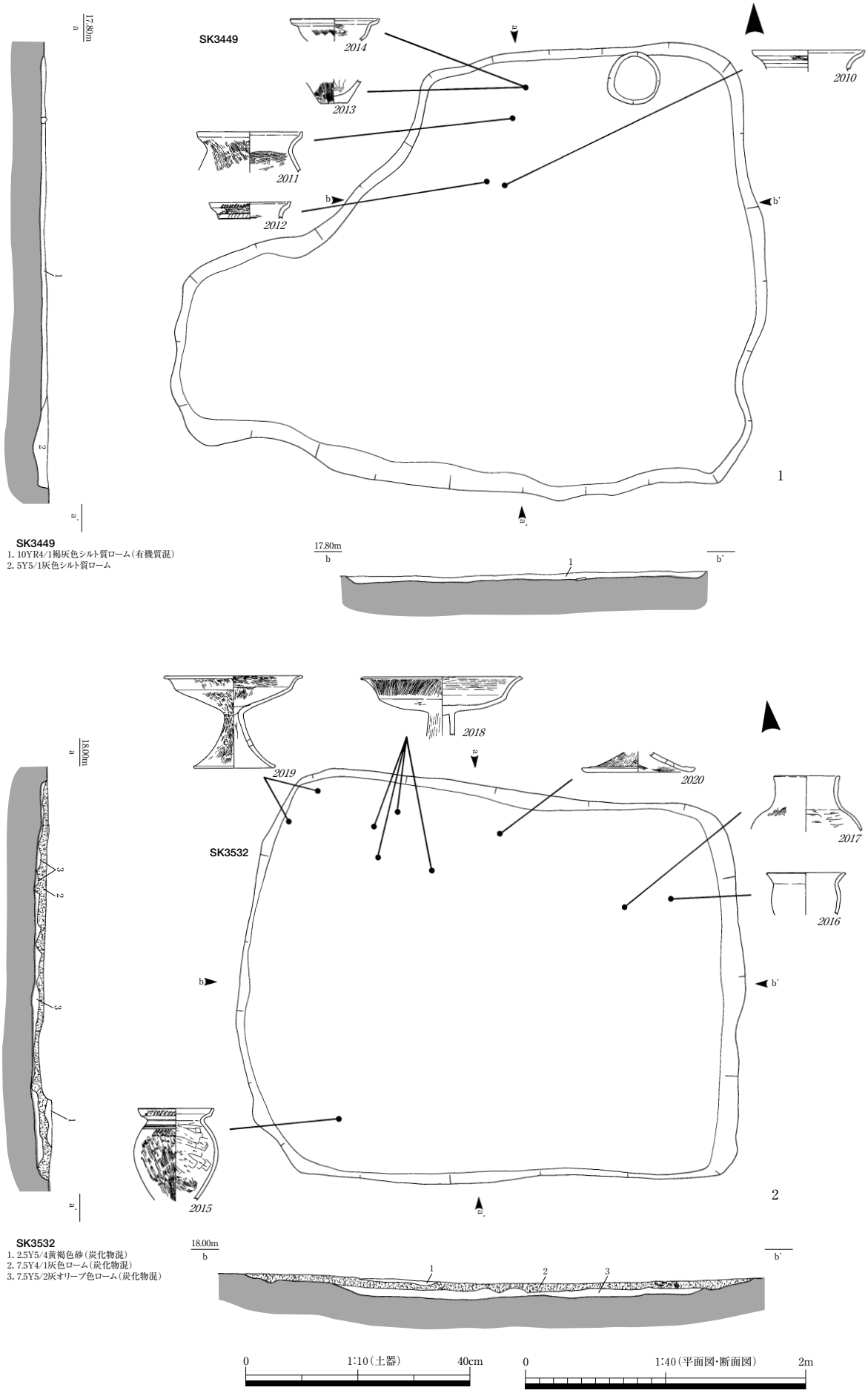
Ｂ３地区　4.ＳＫ2983



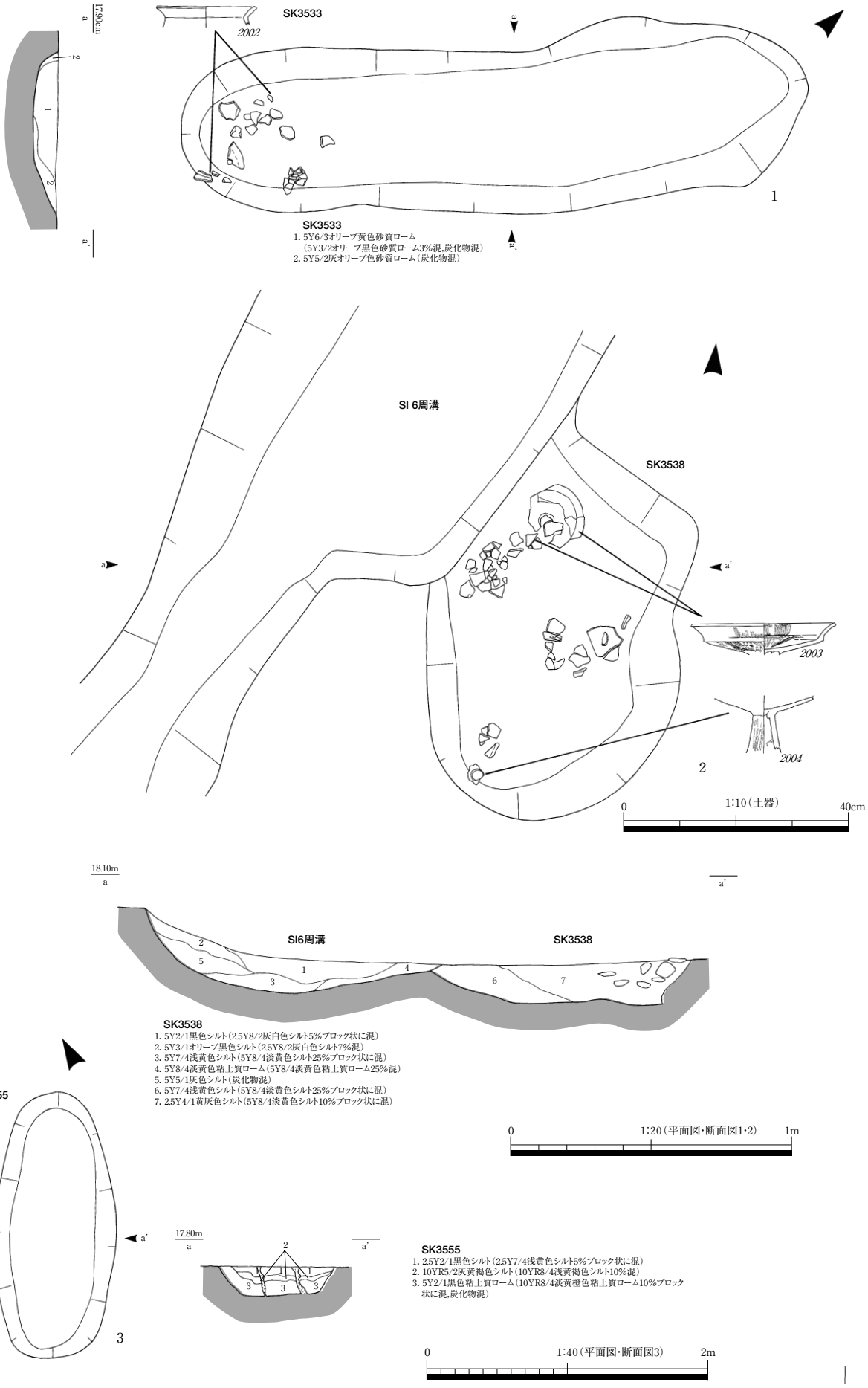
第235図　遺構実測図　（1/20，1/10）
B３地区　1. ＳＫ2847　2. ＳＫ2858



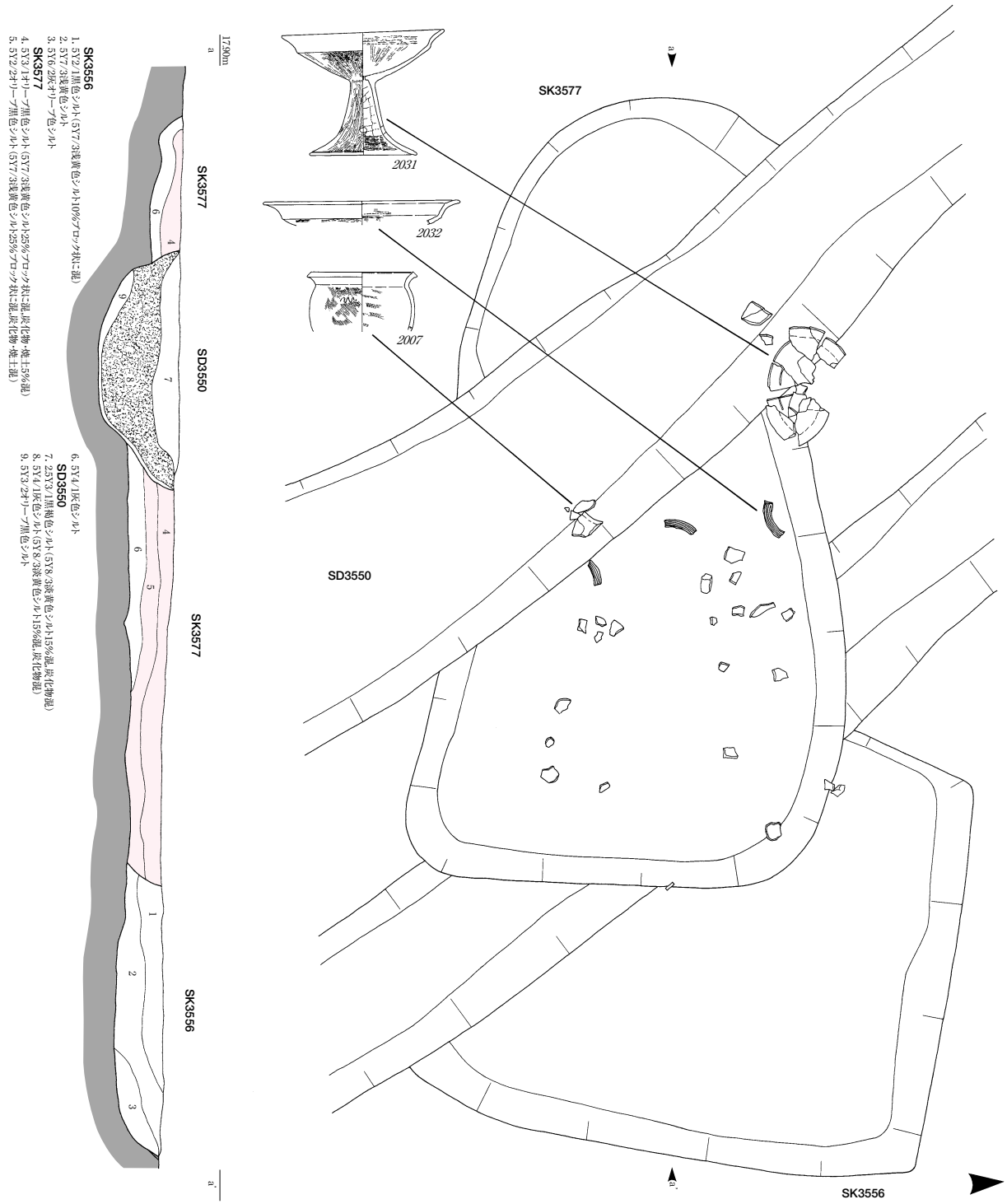
第236図　遺構実測図　（1/20・1/40，1/10）
B４地区　1. ＳＫ3370　2. ＳＫ3371　3. ＳＫ3441　4. ＳＫ3433



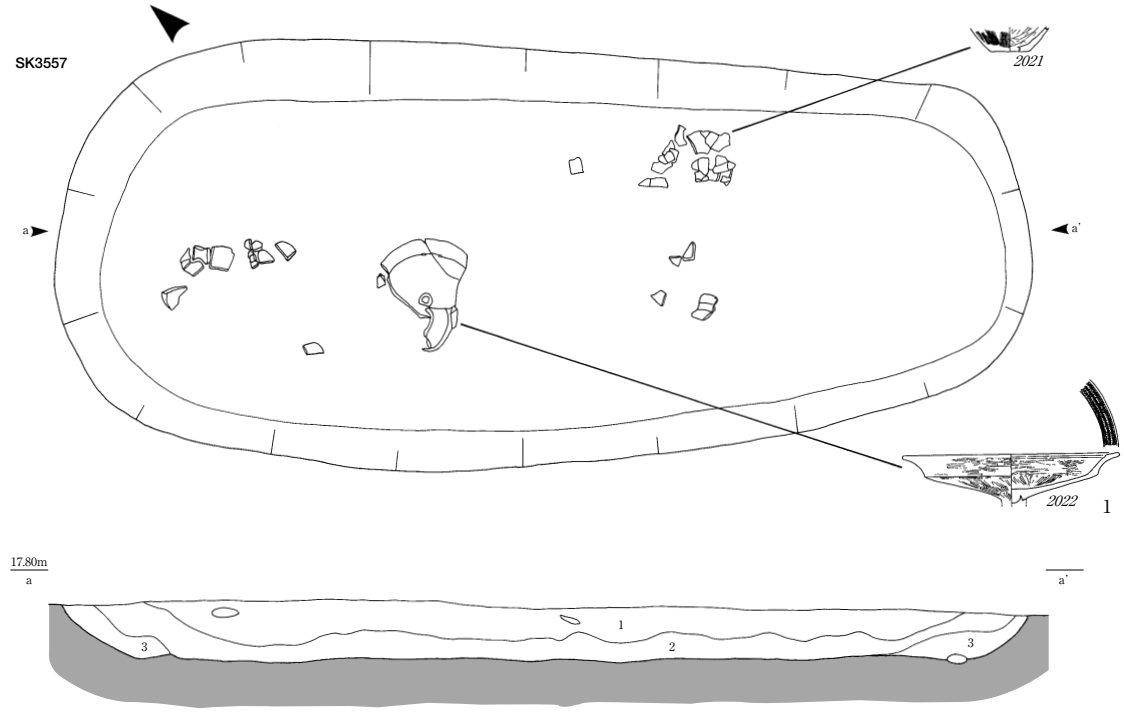
第237図　遺構実測図　（1/40，1/10）
B 4 地区　1. S K3449
B 5 地区　2. S K3532



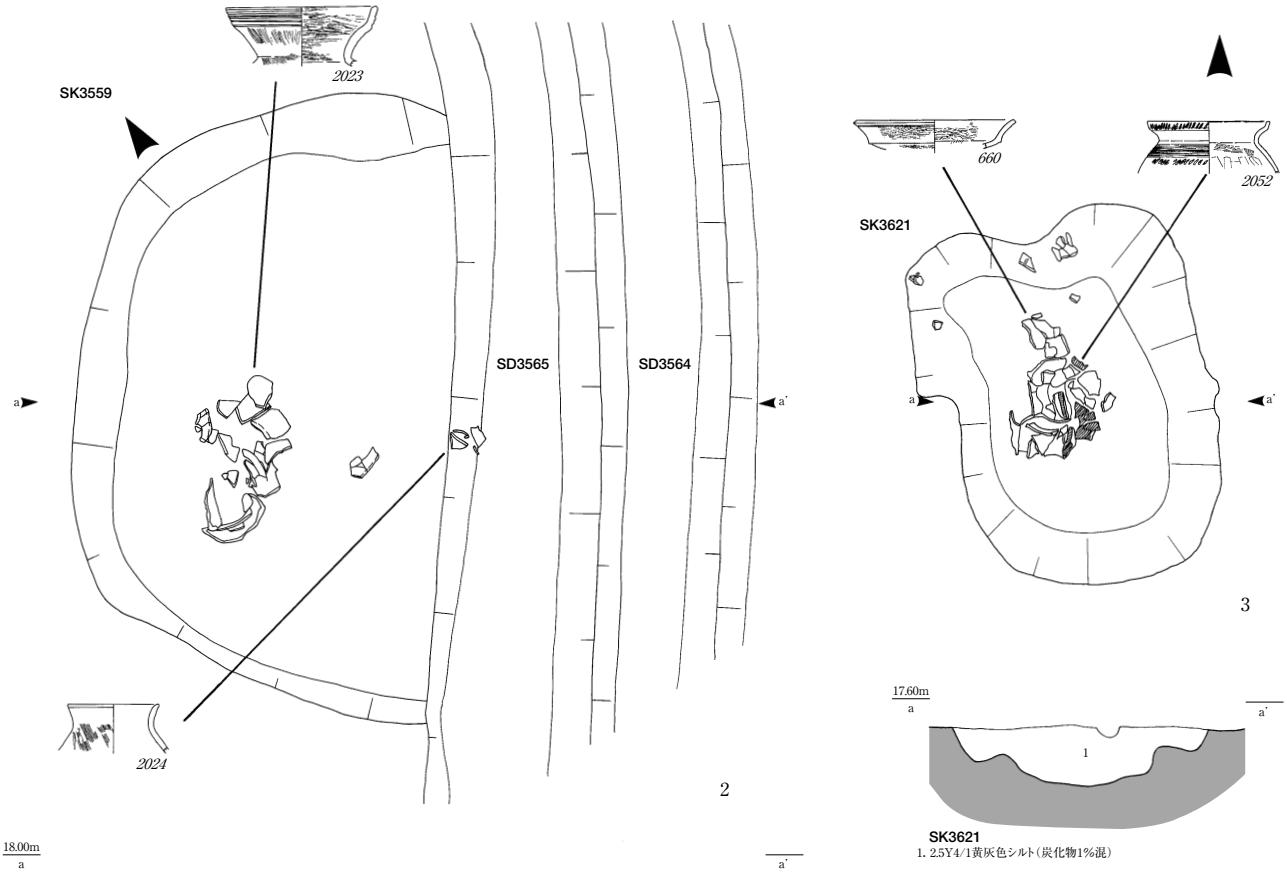
第238図　遺構実測図　(1/20・1/40，1/10)
Ｂ５地区　1.ＳＫ3533　2.ＳＩ６・ＳＫ3538　3.ＳＫ3555



第239図　遺構実測図　(1/20, 1/10)
B５地区　ＳＫ3556・ＳＫ3577・ＳＤ3550

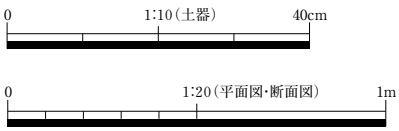


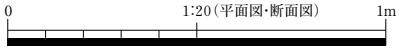
SK3557
1. 10YR5/1褐灰色シルト(2.5Y8/3淡黄色シルト25%ブロック状に混,炭化物混)
2. 2.5Y7/3浅黄色砂質ローム(2.5Y8/3浅黄色砂質ローム10%混,炭化物混)
3. 2.5Y6/4にぶい黄色シルト



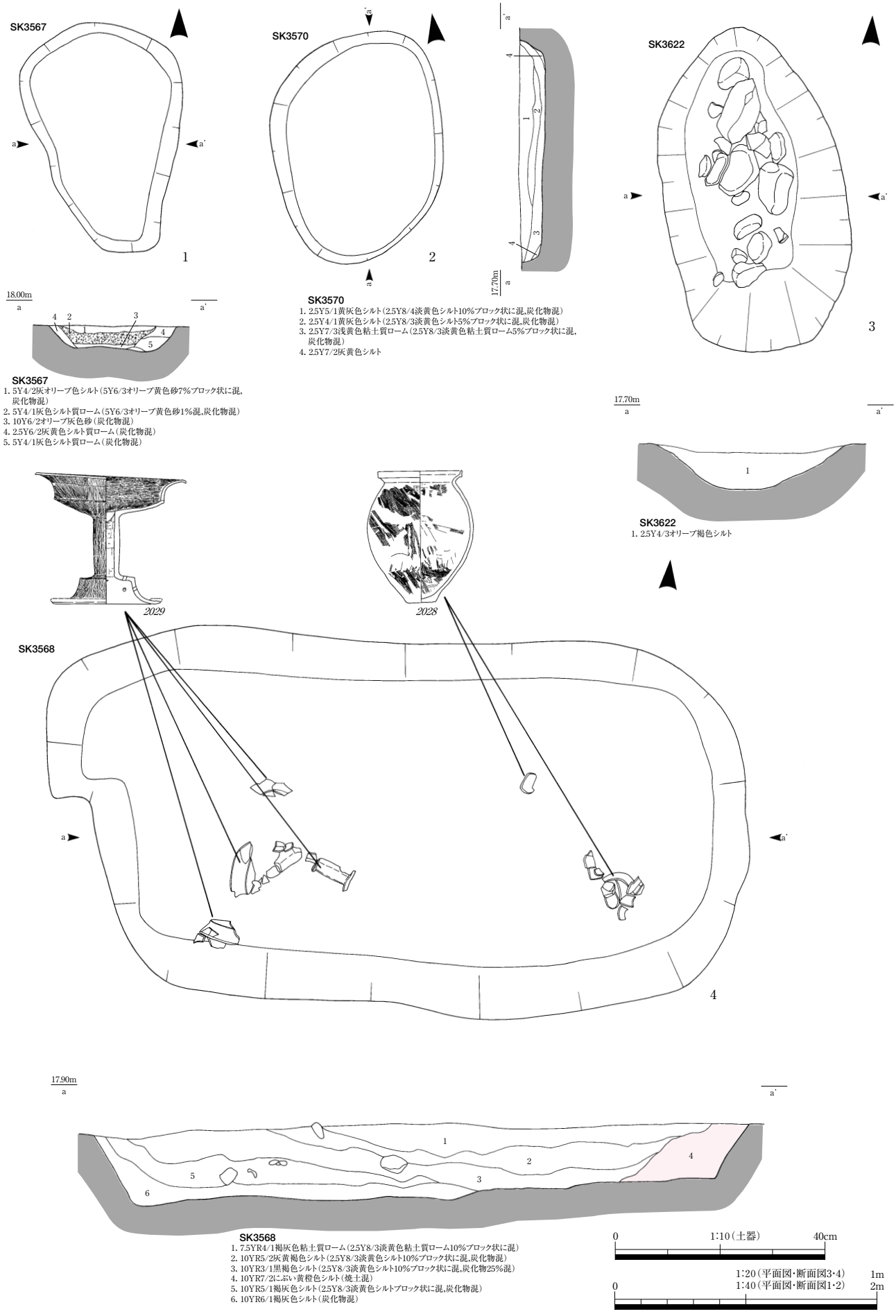
SK3621
1. 2.5Y4/1黄灰色シルト(炭化物1%混)

SD3565
1. 5Y4/1灰色シルト(5Y6/2灰オリーブ色シルト質ローム3%ブロック状に混,炭化物多量混)
SD3564
2. 5Y4/1灰色シルト(5Y6/2灰オリーブ色シルト質ローム3%ブロック状に混,炭化物少量混)
SK3559
3. 5Y5/2灰オリーブ色シルト(5Y6/2灰オリーブ色シルト質ローム2%混,炭化物混)
4. 5Y6/2灰オリーブ色シルト(炭化物混)

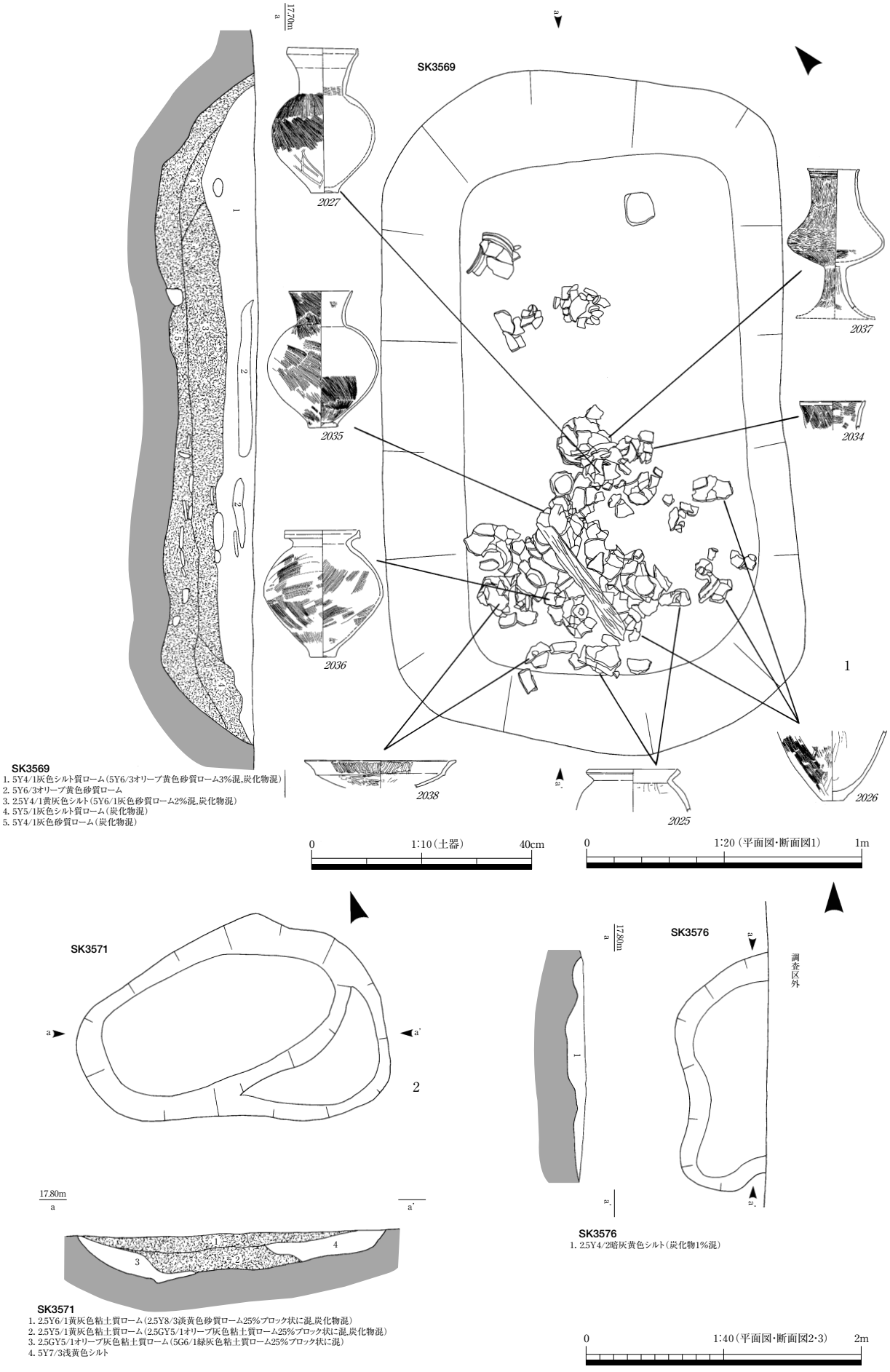




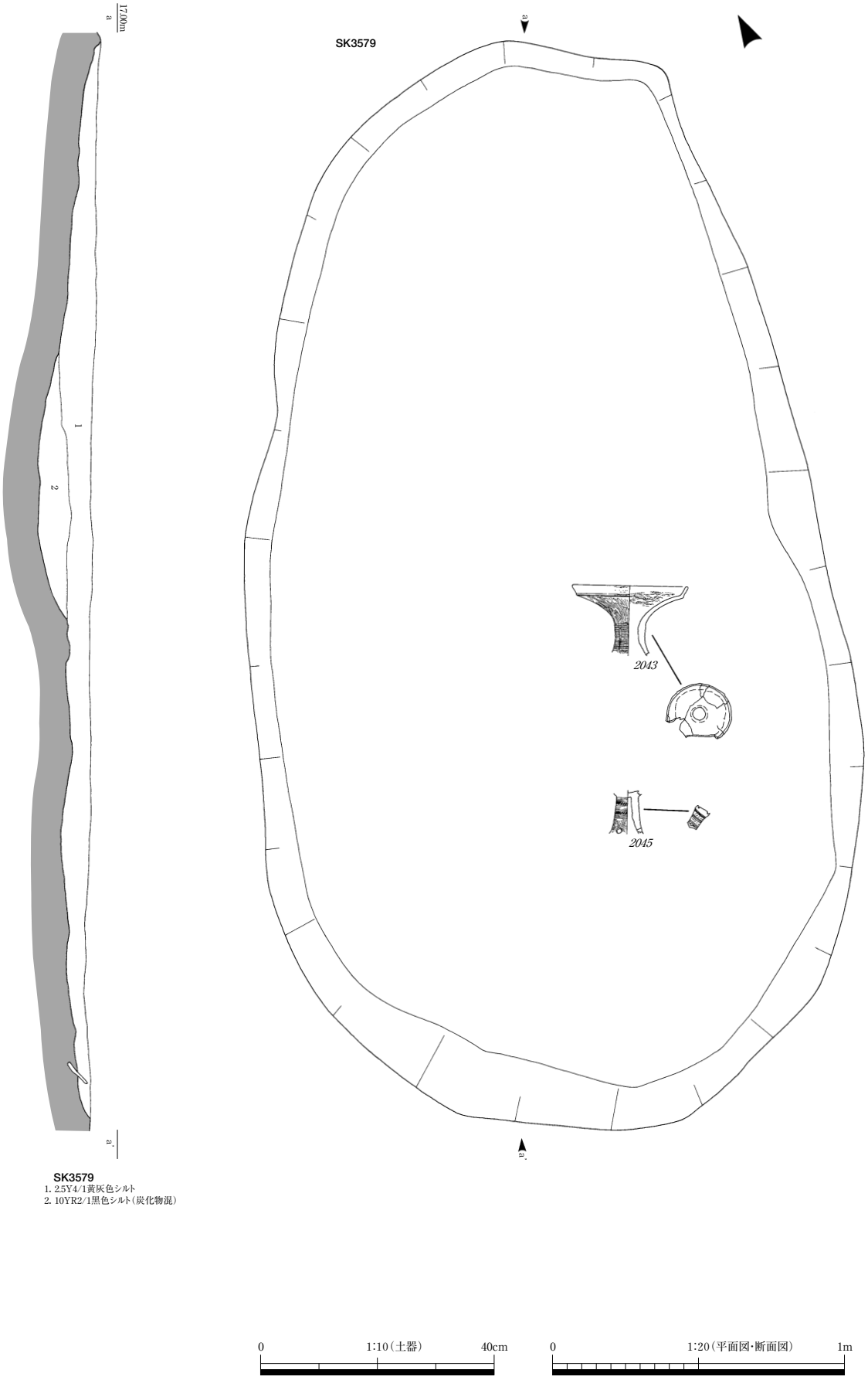
第240図　遺構実測図　(1/20，1/10)
B５地区　1.ＳＫ3557　2.ＳＦ3526・ＳＤ3564　ＳＦ3526・ＳＤ3565　ＳＫ3559　3.ＳＫ3621



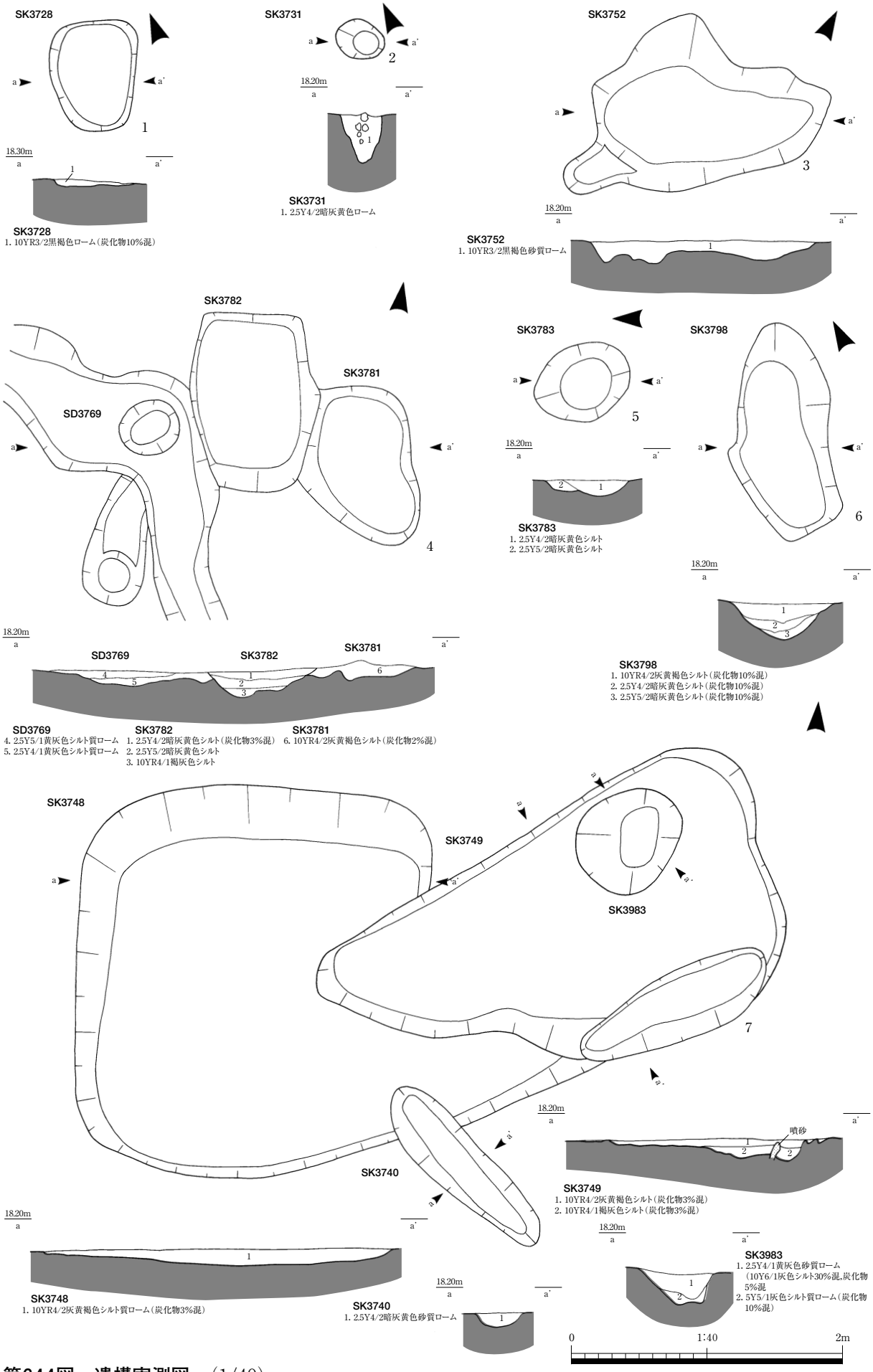
第241図　遺構実測図　(1/20・1/40, 1/10)
B５地区　1. ＳＫ3567　2. ＳＫ3570　3. ＳＫ3622　4. ＳＫ3568



第242図　遺構実測図　（1/20・1/40，1/10）
B５地区　1.ＳＫ3569　2.ＳＫ3571　3.ＳＫ3576

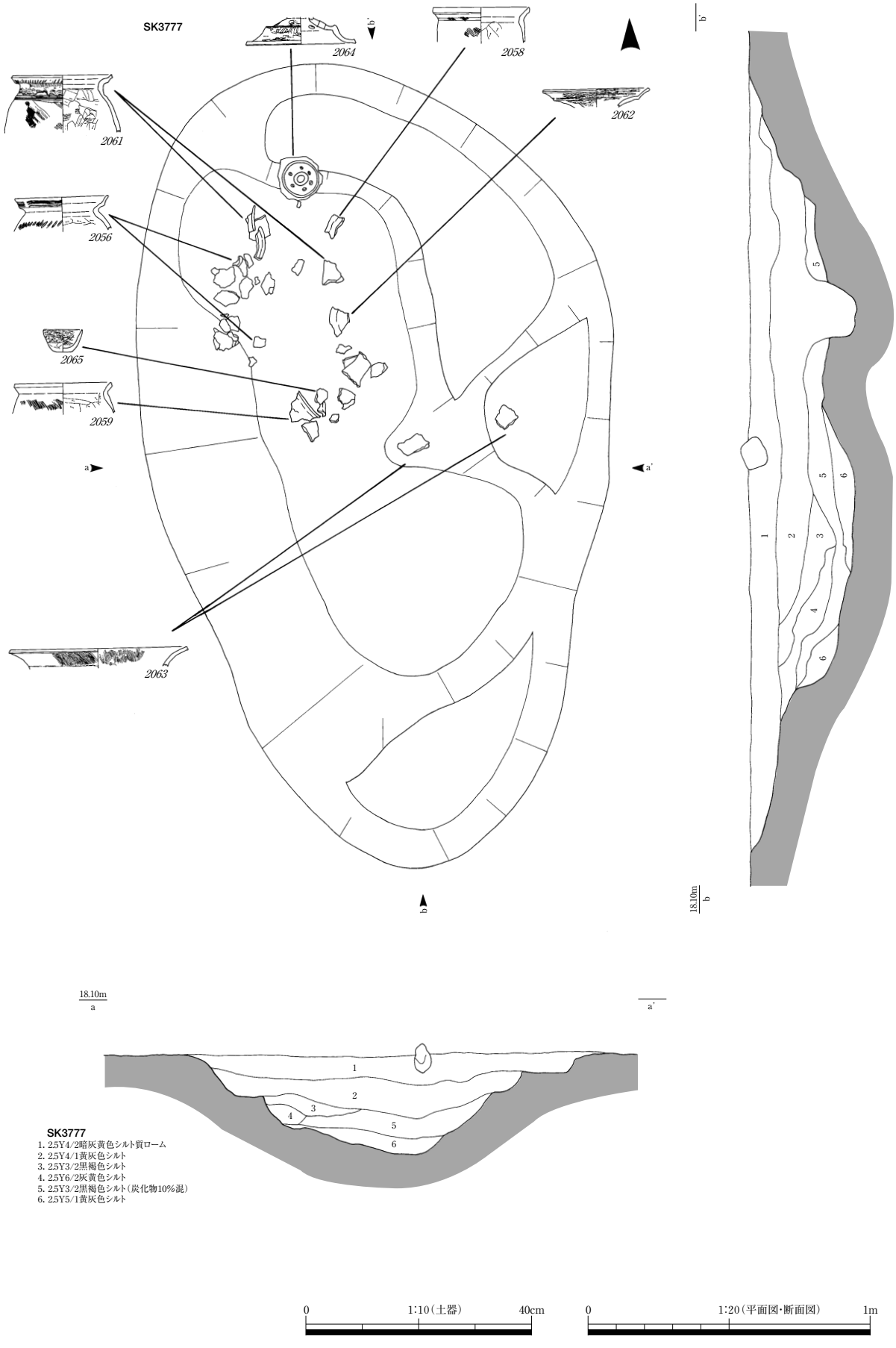


第243図　遺構実測図　(1/20，1/10)
B５地区　ＳＫ3579

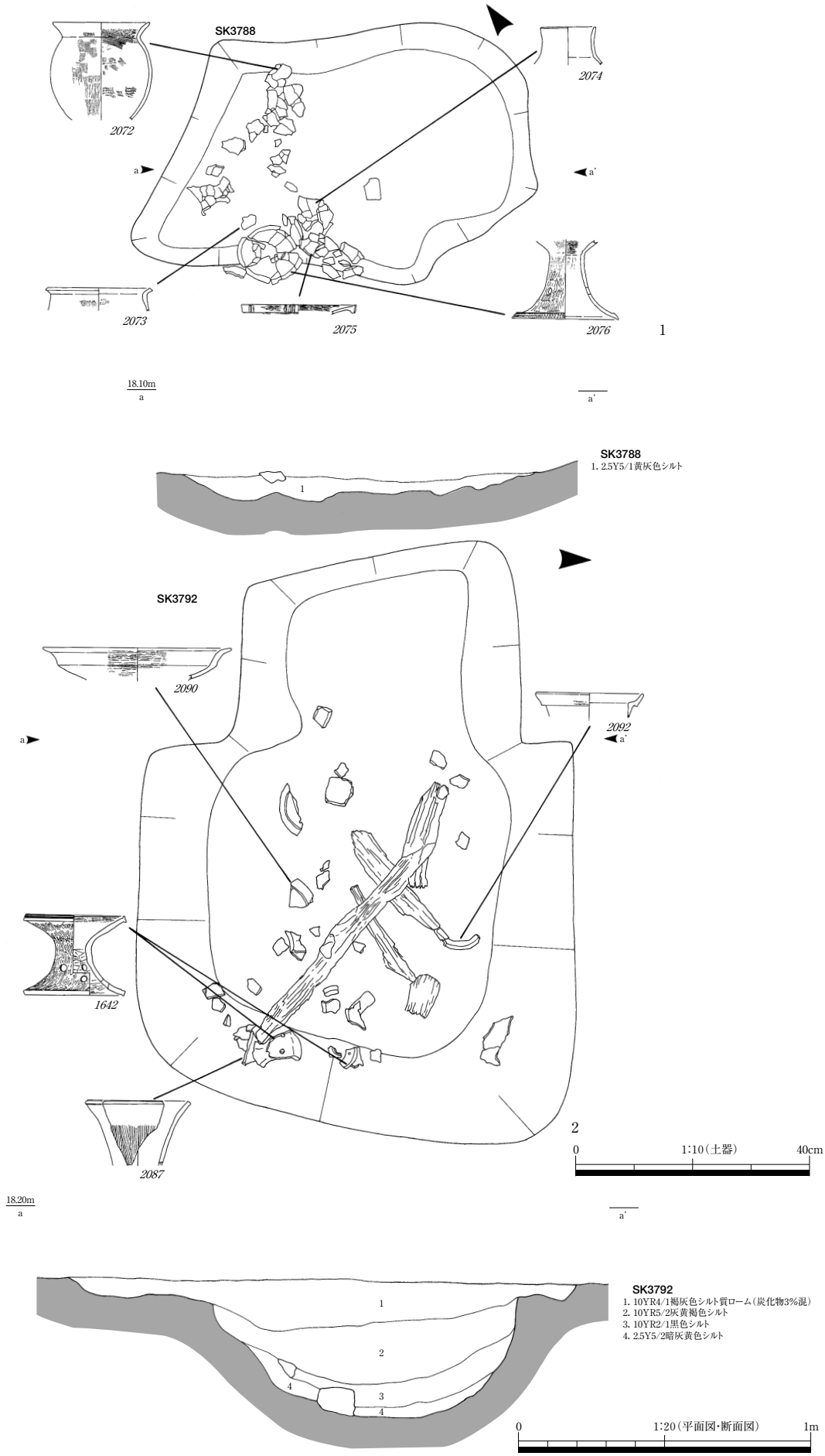


第244図　遺構実測図　(1/40)

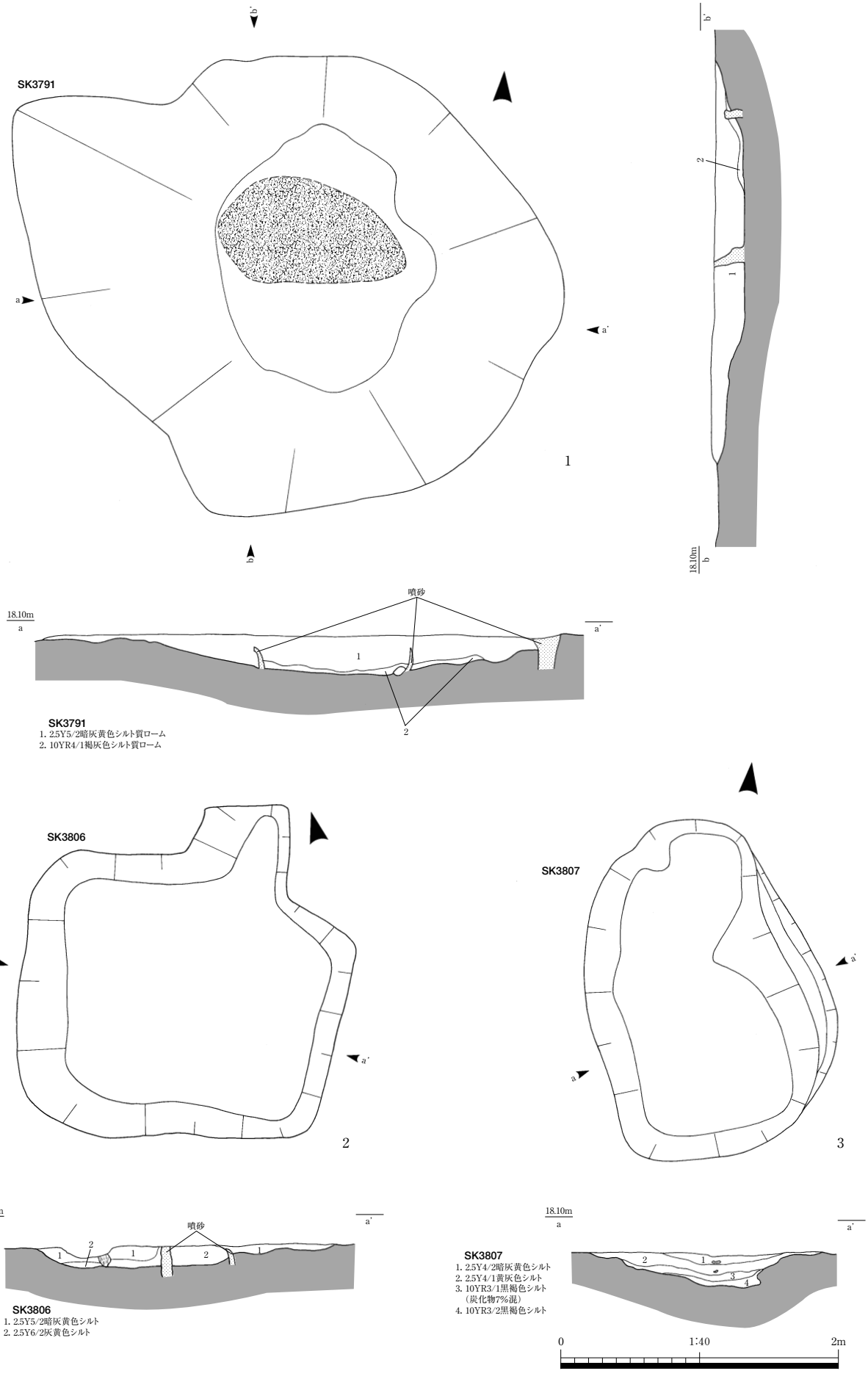
B 6 地区　1. S K3728　2. S K3731　3. S K3752　4. S K3781・S K3782・S D3769
5. S K3783　6. S K3798　7. S K3740・S K3748・S K3749・S K3983



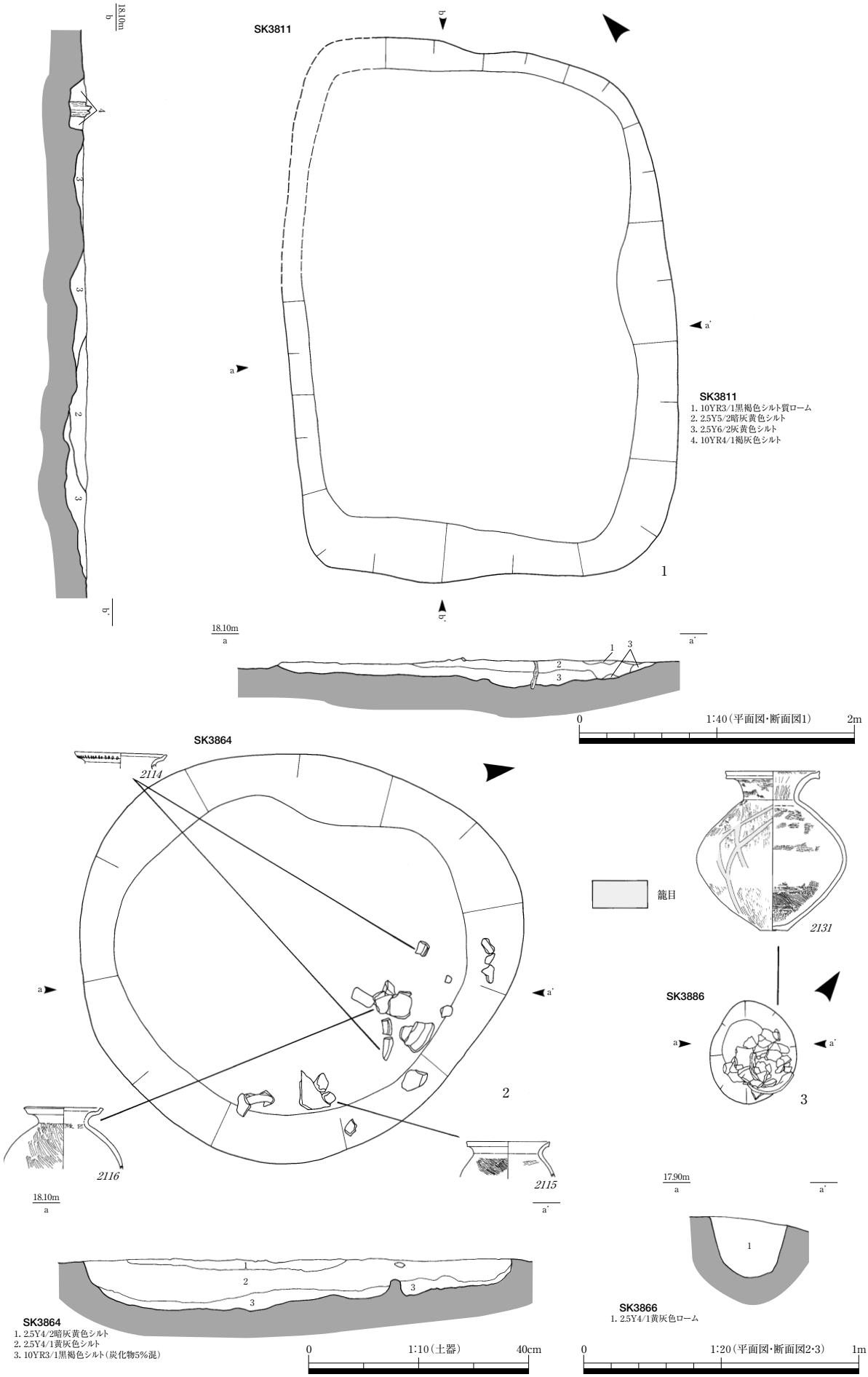
第245図　遺構実測図　(1/20，1/10)
B 6 地区　S K3777



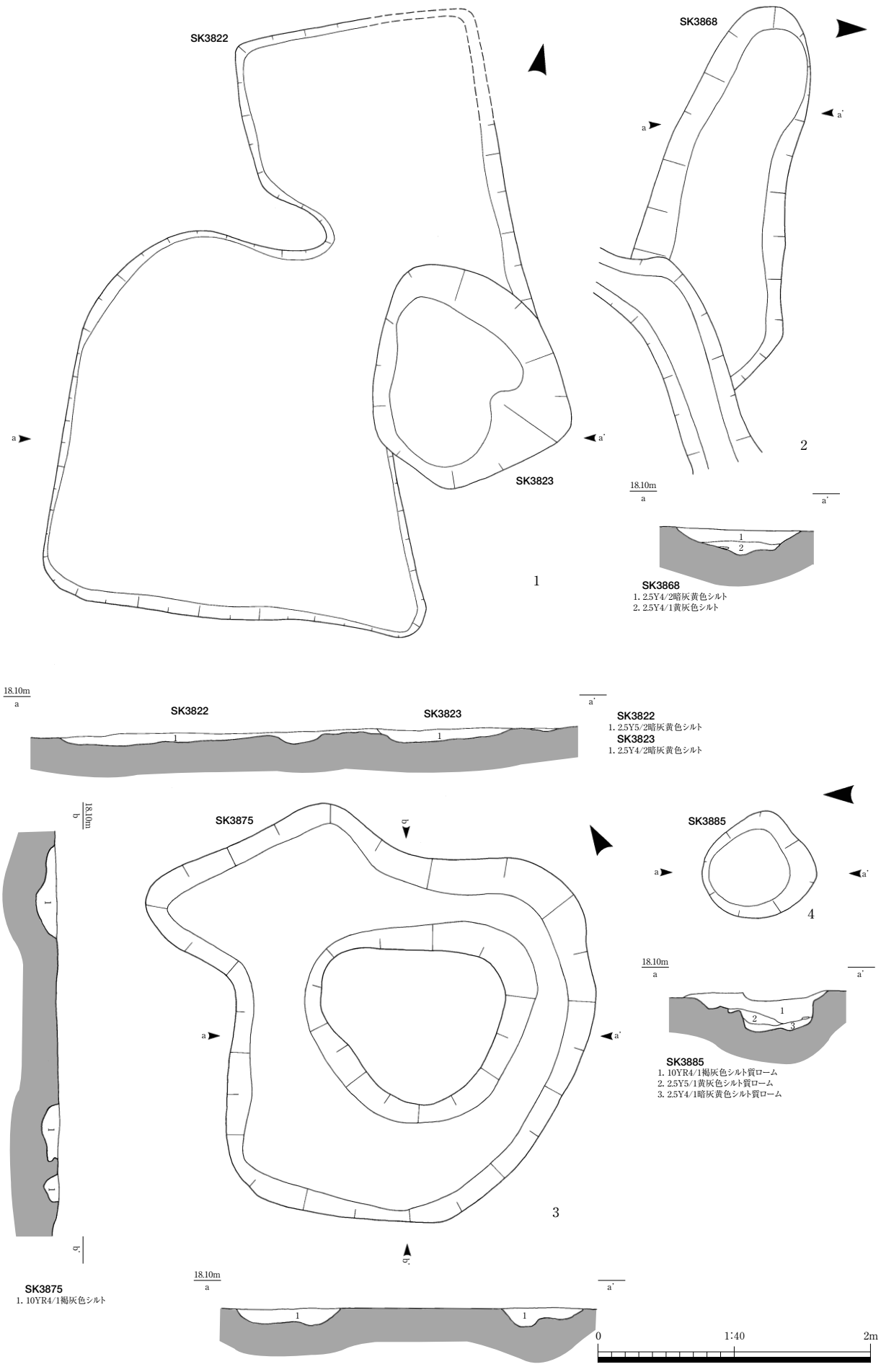
第246図　遺構実測図　(1/20，1/10)
Ｂ６地区　1.ＳＫ3788　2.ＳＫ3792



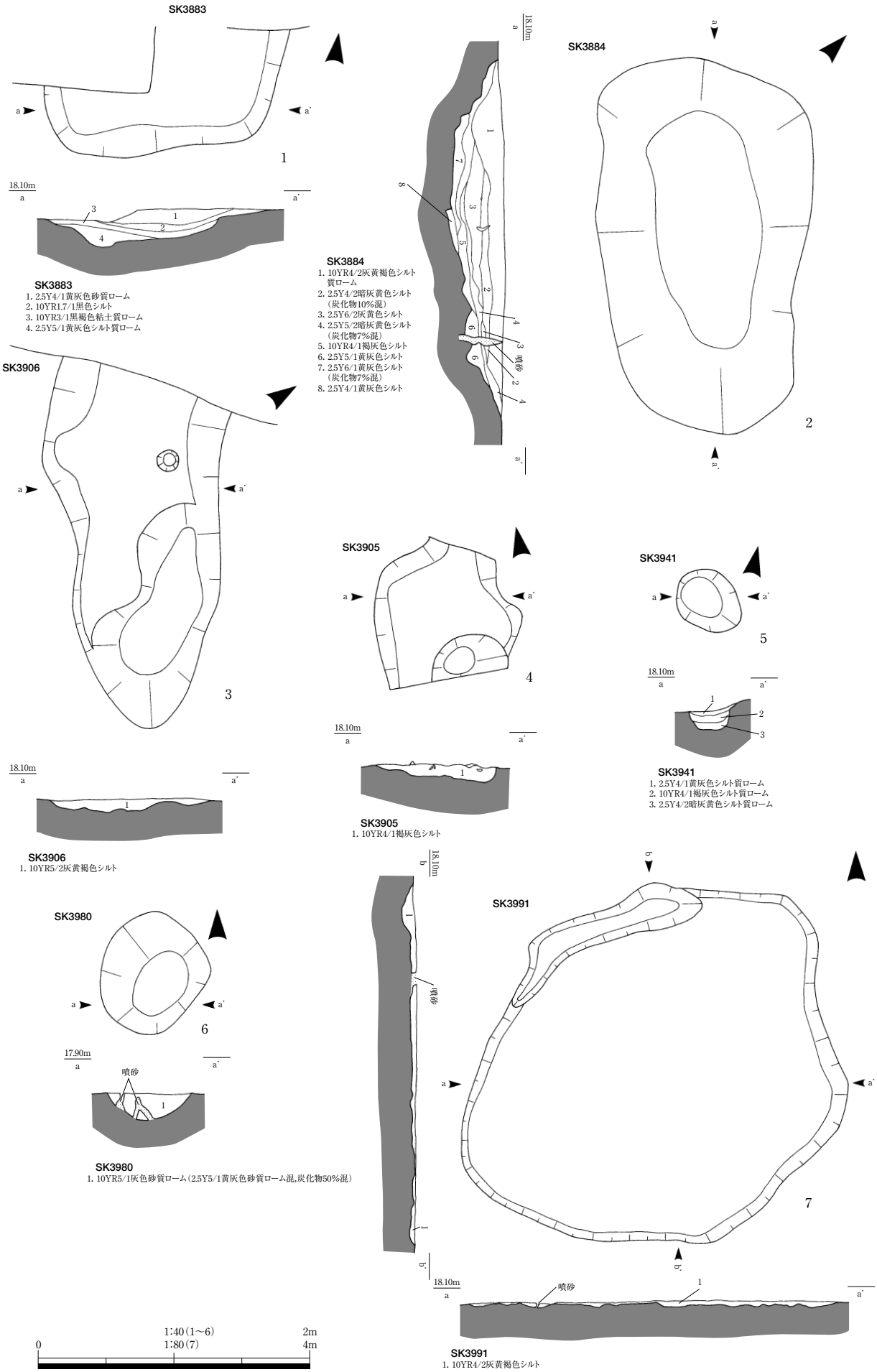
第247図　遺構実測図　(1/40)
B 6 地区　1. S K3791　2. S K3806　3. S K3807



第248図　遺構実測図　(1/20・1/40，1/10)
Ｂ６地区　1.ＳＫ3811　2.ＳＫ3864　3.ＳＫ3886

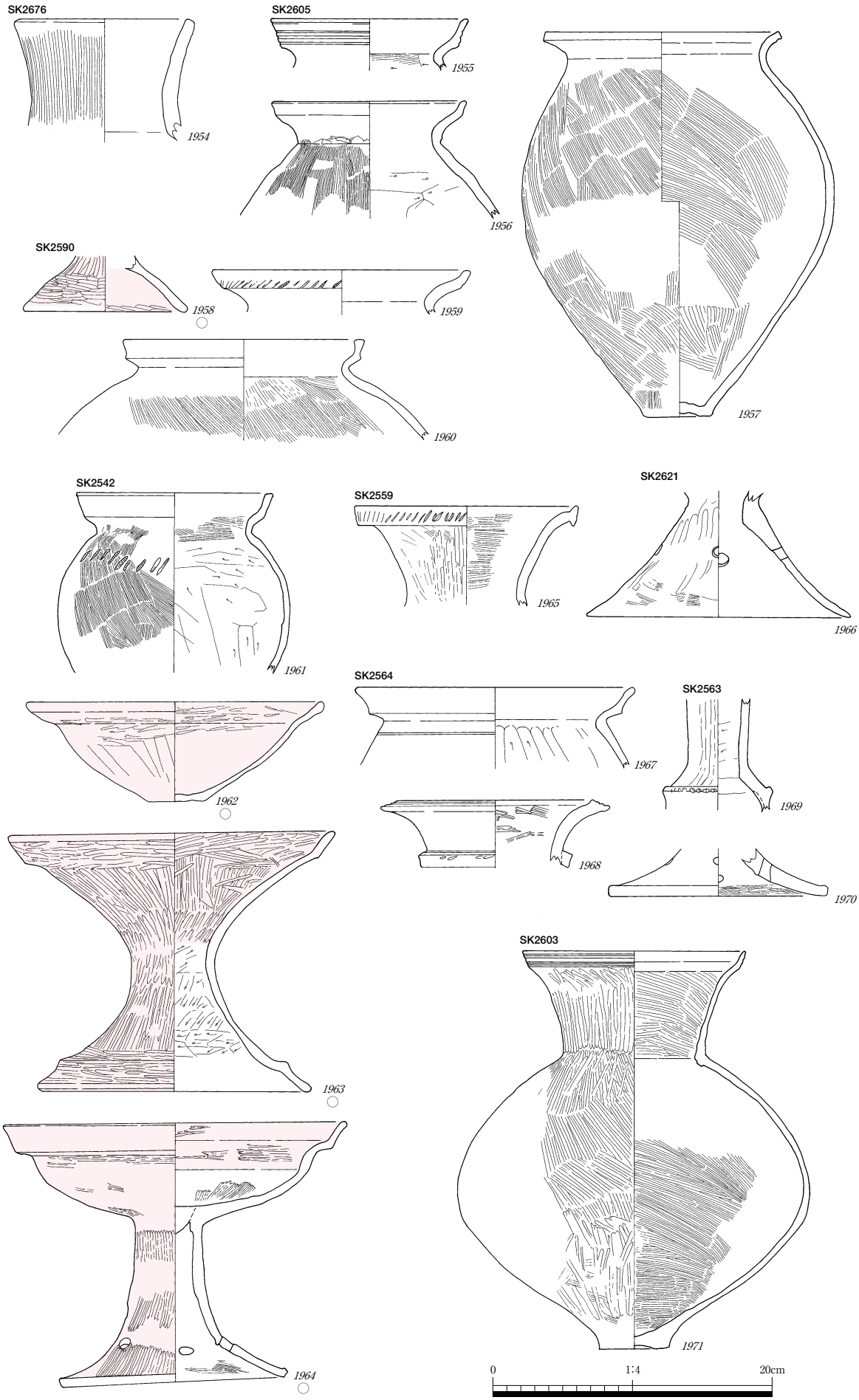


第249図　遺構実測図　(1/40)
B 6 地区　1. S K3822・S K3823　2. S K3868　3. S K3875　4. S K3885



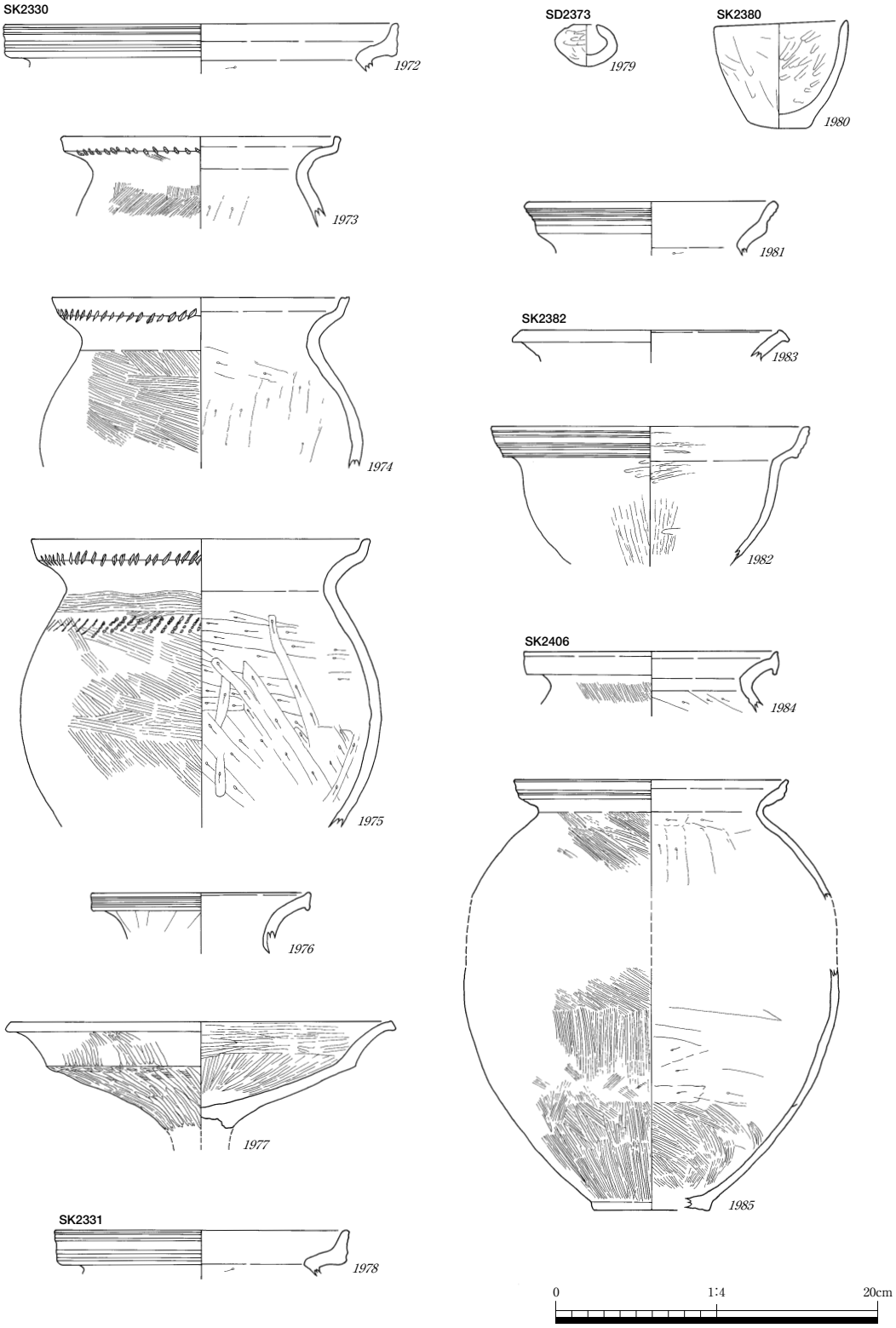
第250図　遺構実測図　(1/40・1/80)

B 6 地区　1. S K3883　2. S K3884　3. S K3906　4. S K3905　5. S K3941
6. S K3980　7. S K3991



第251図　遺物実測図　(1/4)

B２地区　ＳＫ2542(*1961～1964*)　ＳＫ2559(*1965*)　ＳＫ2563(*1969・1970*)
ＳＫ2564(*1967・1968*)　ＳＫ2590(*1958～1960*)　ＳＫ2603(*1971*)
ＳＫ2605(*1955～1957*)　ＳＫ2621(*1966*)　ＳＫ2676(*1954*)



第252図　遺物実測図　(1/4)

Ｂ１地区　ＳＫ2330(*1972～1977*)　ＳＫ2331(*1978*)　ＳＫ2380(*1980・1981*)
ＳＫ2382(*1982・1983*)　ＳＫ2406(*1984・1985*)
ＳＤ2373(*1979*)